

Enterprise PL/I for z/OS
PL/I for AIX
Rational Developer for System z PL/I for
Windows



言語解説書

Enterprise PL/I for z/OS
PL/I for AIX
Rational Developer for System z PL/I for
Windows



言語解説書

— お願い —

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、797 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、Enterprise PL/I for z/OS バージョン 4 リリース 1 (5655-W67)、IBM PL/I for AIX V2.0.0.0、および Rational Developer for System z PL/I for Windows バージョン 8.0、ならびに新しい版または TNL で明記されていない限り、以降のすべてのリリースに適用されます。製品のレベルに合った正しい版をご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC14-7285-00
Enterprise PL/I for z/OS
PL/I for AIX
Rational Developer for System z PL/I for Windows
Language Reference

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1版第1刷 2010.9

© Copyright IBM Corporation 1999, 2010.

目次

表	ix
---	----

図	xi
---	----

第 1 章 本書について 1

本書で用いられる表記規則	1
セマンティクス	4
工業規格	4
本リリースにおける機能強化	5
V3R9 からの機能拡張	5
V3R8 からの機能拡張	6
V3R7 からの機能拡張	6
V3R6 からの機能強化	7
V3R5 からの機能拡張	8
V3R4 からの機能拡張	8
V3R3 からの機能拡張	8
V3R2 からの機能拡張	8
V3R1 からの機能拡張	9

第 2 章 プログラムの要素 13

1 バイト文字セット	13
SBCS ステートメント・要素	17
ステートメント	20
グループ	23
2 バイト文字セット	24

第 3 章 データ・要素 27

データ項目	27
データ・タイプとその属性	28
計算データ・タイプとその属性	33

第 4 章 式および参照 61

計算の順序	64
ターゲット	64
演算式	65
配列式	81
構造式	82
制限付き式	83

第 5 章 データ変換 85

計算データ変換の組み込み関数	87
ストリングの長さの変換	87
算術値の精度の変換	88
モードの変換	88
その他のデータ属性の変換	88
ソースからターゲットへの変換規則	90
例	99

第 6 章 プログラムの編成 101

プログラム	101
ブロック	103

パッケージ	104
プロシージャ	108
サブルーチン	121
組み込みサブルーチン	123
関数	123
プロシージャへの引数の引き渡し	125
開始ブロック	129
入り口データ	130
入り口呼び出しまたは入り口値	144
CALL ステートメント	144
RETURN ステートメント	145
OPTIONS オプションとその属性	146
RETURNS オプションとその属性	156

第 7 章 タイプ定義 157

ユーザー定義のタイプ (別名)	157
序数の定義	158
タイプ付き構造体と共用体の定義	160
タイプ変数の宣言	162
タイプ付き構造体修飾	163
序数の使用	165
タイプ付き関数	168

第 8 章 データ宣言 169

明示宣言	169
暗黙宣言	172
宣言の有効範囲	173
RESERVED 属性	181
SUPPRESS 属性	182
データの位置合わせ	182
属性のデフォルト	187
配列	192
構造体	197
共用体	198
構造体/共用体の修飾	199
LIKE 属性	201
例	202
NOINIT 属性	203
集合体の組み合わせおよびマッピング	203

第 9 章 ステートメントとディレクティブ 215

ALLOCATE ステートメント	215
代入ステートメントと複代入ステートメント	216
ATTACH ステートメント	221
BEGIN ステートメント	221
CALL ステートメント	222
CLOSE ステートメント	222
DECLARE ステートメント	222
DEFINE ALIAS ステートメント	222
DEFINE ORDINAL ステートメント	222

DEFINE STRUCTURE ステートメント	222
DEFAULT ステートメント	222
DELAY ステートメント	222
DELETE ステートメント	223
DETACH ステートメント	223
DISPLAY ステートメント	223
DO ステートメント	224
END ステートメント	236
ENTRY ステートメント	237
EXIT ステートメント	237
FETCH ステートメント	237
FLUSH ステートメント	237
FORMAT ステートメント	237
FREE ステートメント	237
GET ステートメント	238
GO TO ステートメント	238
IF ステートメント	239
%INCLUDE ディレクティブ	242
ITERATE ステートメント	242
LEAVE ステートメント	242
%LINE ディレクティブ	243
LOCATE ステートメント	244
%NOPRINT ディレクティブ	244
%NOTE ディレクティブ	244
ヌル・ステートメント	245
ON ステートメント	245
OPEN ステートメント	245
OTHERWISE ステートメント	245
PACKAGE ステートメント	246
%PAGE ディレクティブ	246
%POP ディレクティブ	246
%PRINT ディレクティブ	246
PROCEDURE ステートメント	246
%PROCESS ディレクティブ	247
*PROCESS ディレクティブ	247
%PUSH ディレクティブ	247
PUT ステートメント	248
READ ステートメント	248
RELEASE ステートメント	248
RESIGNAL ステートメント	248
RETURN ステートメント	248
REVERT ステートメント	249
REWRITE ステートメント	249
SELECT ステートメント	249
SIGNAL ステートメント	251
%SKIP ディレクティブ	251
STOP ステートメント	251
WAIT ステートメント	252
WHEN ステートメント	252
WRITE ステートメント	252
%XINCLUDE ステートメント	252

第 10 章 ストレージ制御 253

ストレージのクラス、割り振り、および割り振り解除	253
静的ストレージとその属性	255

自動ストレージとその属性	255
被制御ストレージとその属性	257
基底付きストレージとその属性	261
区域データとその属性	271
リスト処理	275
ASSIGNABLE 属性と NONASSIGNABLE 属性	277
NORMAL 属性と ABNORMAL 属性	278
BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性	278
HEXADEC 属性と IEEE 属性	279
CONNECTED 属性と NONCONNECTED 属性	280
DEFINED 属性と POSITION 属性	281
INITIAL 属性	287

第 11 章 入出力 295

データ・セット	296
ファイル	297
ファイルのオープンとクローズ	303
SYSPRINT および SYSIN	309

第 12 章 レコード単位データ伝送 . . . 311

データ伝送	311
データ伝送ステートメント	312
データ伝送ステートメントのオプション	315
処理モード	319

第 13 章 ストリーム指向データ伝送 321

データ伝送ステートメント	322
データ伝送ステートメントのオプション	324
データ・リスト項目の伝送	330
データ・ディレクティブのデータ指定	331
データ・ディレクティブ・データの制限	331
編集ディレクティブのデータ指定	335
リスト・ディレクティブ・データ指定	340
PRINT 属性	343
ストリーム入出力での DBCS データ	345

第 14 章 編集ディレクティブのフォーマット項目 347

A フォーマット項目	347
B フォーマット項目	348
C フォーマット項目	349
COLUMN フォーマット項目	349
E フォーマット項目	350
F フォーマット項目	353
G フォーマット項目	354
L フォーマット項目	355
LINE フォーマット項目	355
P フォーマット項目	356
PAGE フォーマット項目	356
R フォーマット項目	357
SKIP フォーマット項目	358
V フォーマット項目	358
X フォーマット項目	359

第 15 章 ピクチャー指定文字 361

ピクチャー反復因数	361
---------------------	-----

文字データ用のピクチャー文字	362
数字データ用のピクチャー文字	363

第 16 章 条件処理 377

条件接頭語	377
ON ユニット	380
REVERT ステートメント	384
SIGNAL ステートメント	384
RESIGNAL ステートメント	385
複数条件	385
CONDITION 属性	385

第 17 章 条件 387

ANYCONDITION 条件	387
AREA 条件	389
ATTENTION 条件	389
CONDITION 条件	390
CONVERSION 条件	391
ENDFILE 条件	393
ENDPAGE 条件	394
ERROR 条件	395
FINISH 条件	396
FIXEDOVERFLOW 条件	396
INVALIDOP 条件	397
KEY 条件	398
NAME 条件	399
OVERFLOW 条件	400
RECORD 条件	400
SIZE 条件	401
STORAGE 条件	402
STRINGRANGE 条件	403
STRINGSIZE 条件	404
SUBSCRIPTRANGE 条件	405
TRANSMIT 条件	405
UNDEFINEDFILE 条件	406
UNDERFLOW 条件	407
ZERODIVIDE 条件	408

第 18 章 マルチスレッド化機能 411

スレッドの作成	412
ATTACH ステートメント	412
スレッドの終了	413
スレッドの完了の待機	414
スレッドの切り離し	414
条件処理	415
タスク・データとタスク属性	415
スレッド間のデータの共用	416
スレッド間のファイルの共用	416

第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン 417

組み込み関数、疑似変数、および組み込みサブルーチンの宣言および呼び出し	421
組み込み関数、疑似変数、および組み込みサブルーチンの引数の指定	422
数学関数の精度	423

組み込み関数のカテゴリー	423
ABS	439
ACOS	440
ADD	441
ADDR	442
ADDRDATA	443
ALL	444
ALLOCATE	445
ALLOCATION	446
ALLOCsize	447
ANY	448
ASIN	449
ATAN	450
ATAND	451
ATANH	452
AUTOMATIC	453
AVAILABLEAREA	454
BINARY	455
BINARYVALUE	456
BIT	457
BITLOCATION	458
BOOL	459
BYTE	460
CDS	461
CEIL	462
CENTERLEFT	463
CENTRELEFT	464
CENTERRIGHT	465
CENTRERIGHT	466
CHARACTER	467
CHARGRAPHIC	468
CHARVAL	469
CHECKSTG	470
COLLATE	471
COMPARE	472
COMPLEX	473
CONJG	474
COPY	475
COS	476
COSD	477
COSH	478
COUNT	479
CS	480
CURRENTSIZE	482
CURRENTSTORAGE	484
DATAFIELD	485
DATE	486
DATETIME	487
DAYS	488
DAYSTODATE	490
DAYSTOSECS	491
DECIMAL	492
DIMENSION	493
DIVIDE	494
EDIT	495
EMPTY	496

ENDFILE	497	LOGGAMMA	555
ENTRYADDR	498	LOG2	556
ENTRYADDR 疑似変数	499	LOG10.	557
EPSILON	500	LOW	558
ERF	501	LOWERCASE	559
ERFC	502	LOWER2	560
EXP	503	MAX	561
EXPONENT	504	MAXEXP	562
FILEDDINT	505	MAXLENGTH	563
FILEDDTEST	506	MEMCONVERT	564
FILEDDWORD	507	MEMCU12	565
FILEID	508	MEMCU14	566
FILEOPEN	509	MEMCU21	567
FILEREAD	510	MEMCU24	568
FILESEEK	511	MEMCU41	569
FILETELL	512	MEMCU42	570
FILEWRITE	513	MEMINDEX	571
FIXED	514	MEMSEARCH	572
FIXEDBIN	515	MEMSEARCHR	573
FIXEDDEC	516	MEMVERIFY	574
FLOAT	517	MEMVERIFYR	575
FLOATBIN	518	MIN	576
FLOATDEC	519	MINEXP	577
FLOOR	520	MOD	578
GAMMA	521	MPSTR	580
GETENV	522	MULTIPLY	581
GRAPHIC.	523	NULL	582
HANDLE	525	OFFSET	583
HBOUND.	526	OFFSETADD	584
HEX	527	OFFSETDIFF	585
HEXIMAGE	529	OFFSETSUBTRACT	586
HIGH	530	OFFSETVALUE.	587
HUGE	531	OMITTED	588
IAND	532	ONAREA	589
IEOR	533	ONCHAR	590
IMAG	534	ONCHAR 疑似変数	591
IMAG 疑似変数	535	ONCODE	592
INDEX	536	ONCONDCOND	593
INOT	537	ONCONDID	594
IOR.	538	ONCOUNT	595
ISFINITE	539	ONFILE	596
ISIGNED	540	ONGSOURCE	597
ISINF	541	ONGSOURCE 疑似変数	598
ISLL	542	ONKEY	599
ISMAIN	543	ONLINE	600
ISNAN.	544	ONLOC	601
ISNORMAL	545	ONOFFSET	602
ISRL	546	ONSOURCE	603
ISZERO	547	ONSOURCE 疑似変数	604
IUNSIGNED	548	ONSUBCODE	605
LBOUND	549	ONWCHAR	606
LEFT	550	ONWCHAR 疑似変数.	607
LENGTH	551	ONWSOURCE	608
LINENO	552	ONWSOURCE 疑似変数	609
LOCATION	553	ORDINALNAME	610
LOG	554	ORDINALPRED.	611

ORDINALSUCC	612	ROUNDDEC	670
PACKAGENAME	613	SAMEKEY	671
PAGENO	614	SCALE	672
PICSPEC	615	SEARCH	673
PLACES	616	SEARCHR	675
PLIASCII	617	SECS	676
PLICANC	618	SECSTODATE	677
PLICKPT	619	SECSTODAYS	678
PLIDELETE	620	SIGN	679
PLIDUMP	621	SIGNED	680
PLIEBCDIC	622	SIN	681
PLIFILL	623	SIND	682
PLIFREE	624	SINH	683
PLIMOVE	625	SIZE	684
PLIOVER	626	SOURCEFILE	686
PLIREST	627	SOURCELINE	687
PLIRETC	628	SQRT	688
PLIRETV	629	SQRTF	689
PLISAXA	630	STACKADDR	690
PLISAXB	631	STORAGE	691
PLISAXC	632	STRING	692
PLISAXD	633	STRING 疑似变数	694
PLISRTA	634	SUBSTR	695
PLISRTB	635	SUBSTR 疑似变数	696
PLISRTC	636	SUBTRACT	697
PLISRTD	637	SUCC	698
PLITRAN11	638	SUM	699
PLITRAN12	639	SYSNULL	700
PLITRAN21	640	SYSTEM	701
PLITRAN22	641	TALLY	702
POINTER	642	TAN	703
POINTERADD	643	TAND	704
POINTERDIFF	644	TANH	705
POINTERSUBTRACT	645	THREADID	706
POINTERVALUE	646	TIME	707
POLY	647	TINY	708
PRECISION	648	TRANSLATE	709
PRED	649	TRIM	710
PRESENT	650	TRUNC	711
PROCEDURENAME	651	TYPE	712
PROD	652	TYPE 疑似变数	713
PUTENV	653	ULENGTH	714
RADIX	654	ULENGTH8	715
RAISE2	655	ULENGTH16	716
RANDOM	656	UNALLOCATED	717
RANK	657	UNSIGNED	718
REAL	658	UNSPEC	719
REAL 疑似变数	659	UNSPEC 疑似变数	721
REG12	660	UPOS	722
REM	661	UPPERCASE	723
REPATTERN	662	USUBSTR	724
REPEAT	664	USURROGATE	725
REPLACEBY2	665	UVALID	726
REVERSE	666	UWIDTH	728
RIGHT	667	VALID	729
ROUND	668	VALIDDATE	730

VARGLIST	731
VARGSIZE	732
VERIFY	733
VERIFYR	734
WCHARVAL	735
WEEKDAY	736
WHIGH	737
WIDECHAR	738
WLOW	739
XMLCHAR	740
Y4DATE	742
Y4JULIAN	743
Y4YEAR	744

第 20 章 タイプ付き関数. 745

タイプ付き関数の呼び出し	745
タイプ付き関数の引数の指定	745
タイプ付き関数の要旨	746
BIND	746
CAST	746
FIRST	747
LAST	747
NEW	748
RESPEC	748
SIZE	748
VALUE	749

第 21 章 プリプロセッサの機能. 751

プリプロセッサ・オプション	752
プリプロセッサ走査	753

プリプロセッサ変数とデータ・エレメント	756
プリプロセッサ参照とプリプロセッサ式	757
プリプロセッサ名の有効範囲	757
プリプロセッサ・プロシージャ	758
プリプロセッサ組み込み関数	764
プリプロセッサ・ステートメント	775
プリプロセッサの例	787

付録. 制限値. 793

特記事項. 797

商標	798
--------------	-----

参考文献. 799

Enterprise PL/I 資料	799
PL/I for MVS & VM	799
z/OS 言語環境プログラム	799
CICS Transaction Server	799
DB2 UDB for z/OS	799
DFSORT	800
IMS/ESA	800
z/OS MVS	800
z/OS UNIX システム・サービス	800
z/OS TSO/E	800
z/Architecture.	800
Unicode および文字表現	801

用語集 803

索引 819

表

1. 英字と同等の値	14	32. 暗黙オープンによって暗黙に定義される属性	306
2. 10 進数と同等の値	15	33. 組み合わせ後の属性と暗黙に定義される属性	307
3. 特殊文字と同等の値	15	34. PRINT ファイルのオプションとフォーマット	
4. 複合記号の説明	16	項目	344
5. 区切り文字	18	35. 文字ピクチャー指定の例	363
6. 演算子	19	36. 数字と小数点文字の例	365
7. 定数タイプによる属性の分類	32	37. ゼロ抑制文字の例	366
8. 変数タイプによる属性の分類	33	38. 挿入文字の例	368
9. コード化算術データ属性の省略形	35	39. 符号と通貨記号の例	372
10. FIXED BINARY SIGNED データ・ストレージ		40. T、I、および R ピクチャー文字の解釈	373
所要量	37	41. 貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およ	
11. FIXED BINARY UNSIGNED データ・ストレージ		びゼロ置き換え文字の例	374
所要量	37	42. 指数文字の例	375
12. スtring・データ属性の省略形	42	43. 位取り係数文字の例	375
13. 1 つまたは複数の FLOAT オペランドの算術演		44. 条件のクラスと状況	378
算の結果	70	45. 算術組み込み関数	423
14. RULES(ANS) における、2 つのスケールのない		46. 配列処理組み込み関数	424
FIXED オペランド間の算術演算の結果	70	47. バッファ管理組み込み関数	424
15. RULES(ANS) における、2 つのスケールされた		48. 条件処理組み込み関数	426
FIXED オペランド間の算術演算の結果	71	49. 日付/時刻組み込み関数	427
16. RULES(IBM) における、2 つの FIXED オペラ		50. 日付/時刻のパターン	428
ンド間の算術演算の結果	72	51. 浮動小数点の照会組み込み関数	429
17. 固定小数点除算と定数式の比較	73	52. 浮動小数点演算組み込み関数	429
18. 累乗演算の特殊事例	74	53. 入出力組み込み関数	430
19. ビット演算子	75	54. 整数演算組み込み関数	430
20. ビット演算の例	75	55. 数学組み込み関数	431
21. 演算の優先順位と変換の手引き	80	56. その他の組み込み関数	431
22. CEIL (n*3.32) の値と CEIL (n/3.32) の値の表	89	57. 序数処理組み込み関数	432
23. 序数処理組み込み関数	166	58. 精度処理組み込み関数	432
24. タイプ付き関数	168	59. 組み込み疑似変数	433
25. ハーフワード、ワード、およびダブルワード		60. ストレージ制御組み込み関数	434
の規定境界の位置合わせ	183	61. スtring処理組み込み関数	435
26. 位置合わせ要件	184	62. 組み込みサブルーチン	437
27. デフォルトの算術精度	188	63. UNSPEC によって戻されるビット・String	
28. 複合代入演算子	217	の長さ	719
29. 代替ファイル属性	298	64. タイプ付き関数	746
30. データ伝送のタイプによる属性	298	65. 言語エレメントの制限	793
31. PL/I ファイルを宣言するときの属性	299	66. マクロ機能の制限	795



1. 名前付き定数	56	11. 小構造体 G のマッピング	210
2. PL/I アプリケーション構造	102	12. 小構造体 E のマッピング	210
3. PACKAGE ステートメント	107	13. 小構造体 N のマッピング	211
4. パラメーターの付いた配列引数	113	14. 小構造体 S のマッピング	211
5. 有効な呼び出しステートメントおよび無効な 呼び出しステートメント	136	15. 小構造体 C のマッピング	212
6. LIST 属性を説明するサンプル・プログラム	138	16. 小構造体 M のマッピング	212
7. データ宣言の有効範囲	175	17. 大構造体 A のマッピング	213
8. 入り口およびラベル宣言の有効範囲	176	18. 構造 A の最終的なマッピングにおけるオフセ ット	214
9. 各種宣言の有効範囲の例	179	19. 一方向のチェーンの例	276
10. 構造体のマッピング例	209		

第 1 章 本書について

本書で用いられる表記規則	1	V3R6 からの機能強化	7
セマンティクス	4	V3R5 からの機能拡張	8
工業規格	4	V3R4 からの機能拡張	8
本リリースにおける機能強化	5	V3R3 からの機能拡張	8
V3R9 からの機能拡張	5	V3R2 からの機能拡張	8
V3R8 からの機能拡張	6	V3R1 からの機能拡張	9
V3R7 からの機能拡張	6		

本書は、以下の IBM 製品で IBM PL/I コンパイラを使用するプログラマーを対象とした解説書です。

- Enterprise PL/I for z/OS V4R1
- PL/I for AIX V2.0.0.0
- Rational Developer for System z PL/I for Windows バージョン 8.0

本書は初歩的な手引書ではなく、すでに PL/I 言語に関する知識を持ち、IBM PL/I コンパイラ用のプログラムの作成に参照情報を必要とする読者を対象としています。本書には、ガイダンス情報や汎用プログラミング・インターフェースも含まれています。

本書は解説書であり、最初から順に読まれることを意図していません。したがって、事前に定義されていない用語が使用されている場合があります。用語は定義される箇所で強調表示され、その定義は用語集に記載されています。

WRKSTN➡

このワークステーション開始アイコンとワークステーション終了アイコンで区切られたテキストは、PL/I ワークステーション製品 (AIX および Windows) でのみサポートされる機能を指定しています。

◀B

本書で用いられる表記規則

本書での表記法を、以下に説明します。例およびユーザーが提供する情報は、大文字と小文字の両方を使用して示されています。本書で使用されている構文図には、以下の規則が適用されます。

矢印記号

構文図は、左から右、上から下へと線をたどって読んでください。

- ▶—— ステートメントはここから始まります。
- > ステートメントの構文は次の行へ続きます。
- ▶—— ステートメントは前の行から続いています。
- ▶ ステートメントはここで終わります。

完結したステートメント以外の構文単位の図は、▶ 記号で始まり、▶ 記号で終わります。

規則

- キーワード、許容される同義語、および予約パラメーターは、MVS プラットフォームでは大文字で示され、UNIX® プラットフォームでは小文字で示されます。これらの項目は示されたとおりに入力する必要があります。
- 変数は、小文字のイタリック体で示します (例えば、*column-name*)。これらはユーザー定義のパラメーターまたはサブオプションを表します。
- コマンドの入力において、パラメーターおよびキーワードを区切る句読記号がない場合は、少なくとも 1 つのブランクで区切る必要があります。
- 句読記号 (スラッシュ、コンマ、ピリオド、括弧、引用符、等号) と数字は、示されたとおりに入力する必要があります。
- 脚注は、(1) のように番号を括弧に入れて示します。
- b 記号は、1 つのブランク位置を示します。

必須項目

必須項目は横線 (メインパス) に示します。

▶▶—REQUIRED_ITEM————▶▶

オプション項目

オプション項目は、メインパスの下に示します。

▶▶—REQUIRED_ITEM—optional_item————▶▶

メインパスより上にオプション項目を示すこともあります。これは読みやすくするためで、ステートメントの実行には影響を及ぼしません。

▶▶—REQUIRED_ITEM—optional_item————▶▶

複数の必須項目またはオプション項目

複数の項目から選択する場合には、それらの項目が縦に重なって、スタックを形成しています。複数の項目からいずれか 1 つを選択しなければならない場合は、スタック上の項目のうち、1 つがメインパス上に置かれます。

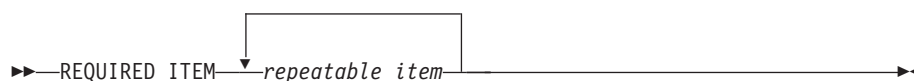
▶▶—REQUIRED_ITEM—required_choice1
—required_choice2————▶▶

項目がオプションである場合、メインパスの下にある支線上に縦に並んだ項目として示されます。

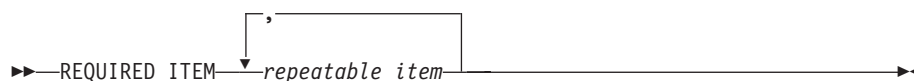
▶▶—REQUIRED_ITEM—optional_choice1
—optional_choice2————▶▶

反復可能項目

メインパスの上方を通して左側へ戻る矢印は、項目が反復可能であることを示します。



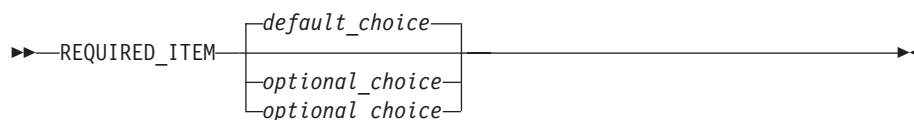
反復矢印の途中にコンマがある場合は、反復される項目をコンマで区切らなければなりません。



スタックの上の繰り返しを示す矢印は、スタックから複数の選択項目を指定できることを示しています。

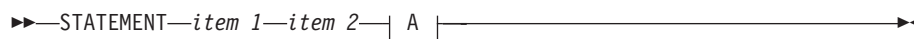
デフォルトのキーワード

IBM 提供のデフォルト・キーワードはメインパスより上に示され、それ以外の選択項目はメインパスより下に示されます。構文図の下にあるパラメーター・リストでは、デフォルト選択項目に下線を付けてあります。

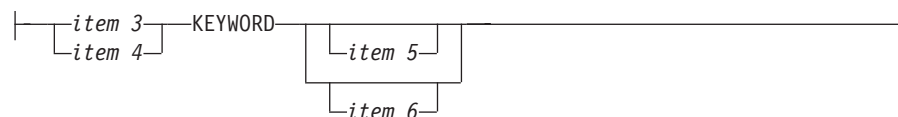


フラグメント

構文図は、フラグメント (部分) に分割する必要がある場合があります。フラグメントは文字またはフラグメント名を用いて | A | のように表します。フラグメントは主図のあとに置かれます。次の例は、フラグメントの使い方を示したものです。



A:

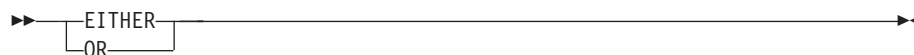


置換ブロック

いくつかのパラメーターの集合を <A> のような置換ブロックで表すことができます。例えば、/VERB という仮のコマンドで、/VERB LINE 1、/VERB EITHER LINE 1、または /VERB OR LINE 1 と入力することができます。



ここで、<A> は次のようになります。



パラメーターの終わり

数値を持つパラメーターは記号 '#' で終わり、名前であるパラメーターは 'name' で終わり、汎用とすることができるパラメーターは '*' で終わります。



この例の MSNAME キーワードは名前の値をサポートし、SYSID キーワードは数値をサポートします。

セマンティクス

PL/I 言語の説明には、以下の規則が使用されます。

- 説明文は簡略化しています。例えば、正確な意味は「x は変数の名前でなければなりません」であっても、「x は変数でなければなりません」と記されています。同様に、「x の値が伝送されます」の代わりに「x が伝送されます」と記されている場合もあります。構文の説明に「参照」と書かれている場合、あとで「参照された変数」の代わりに「その変数」という表現を使用することがあります。
- 異なる 2 つのソース構成が同等であるというときは、同じ結果をもたらすことを意味しますが、必ずしもその仕組みが同じであるとは限りません。
- 構文の仕様のあとにテキスト内で特に明記していない限り、修飾されていない term 『expression』 (式) または 『reference』 (参照) はスカラー式を指しています。スカラー式以外の式の場合には、その式のタイプを明記してあります。例えば、「配列式」と記されている場合は、スカラー式でも構造式でもありません。
- 「～は未定義です」と記されている場合は、その動作を行っては「ならない」ことを意味します。未定義機能を使用すると、異なる PL/I プロダクトのインプリメンテーションまたはリリースで異なる結果を生成することになります。そのアプリケーション・プログラムはエラーであると見なされます。
- デフォルト という用語は、ユーザーが明示的に選択しなかったときにシステムで想定される代替値、属性、またはオプションを説明する場合に使われています。
- 暗黙 という用語は、明示的な指定のないときにプログラムによってとられるアクションを説明する場合に使用されます。
- (単語内以外で使用される) 小文字の b は、ブランク文字を示しています。

工業規格

PL/I コンパイラーは、下記の工業規格 (1987 年 12 月の時点での IBM の解釈にもとづきます) の仕様に従って設計されています。

- 情報交換用米国標準コード (ASCII)、X3.4 - 1977

- 情報交換用ポケット選択文字米国標準規格、レベル 1、X3.77 - 1980 (1979 年 3 月 1 日 ISO への提案事項)
- 情報交換用縦方向キャリッジ位置指定文字米国標準規格、レベル 1 の草案。
dpANS X3.78 (1979 年 3 月 1 日 ISO への提案事項)
- 米国標準規格 PL/I 汎用サブセットの選択機能 (ANSI X3.74-1987)

本リリースにおける機能強化

本リリースは、本書および他の IBM PL/I ブックに記載されている次の機能強化を提供します。

- 新しい PLISAXD 組み込みサブルーチンは、スキーマに対する妥当性検査により、XML 文書の解析機能を提供します。
- 新規 ONAREA 組み込み関数を使用すると、以前は実行時エラー・メッセージまたはメモリー・ダンプでのみ参照可能であった情報の別の部分、つまり AREA 条件が発生した AREA 参照の名前に簡単にアクセスすることができます。
- 新しい VALUE 型付き関数は、対応する構造体型を持つ変数の初期化または代入をサポートします。
- INITIAL 属性を DEFINE STRUCTURE ステートメントの基本名で使用できます。

V3R9 からの機能拡張

本リリースは、本書および他の IBM PL/I ブックに記載されている次の機能強化を提供します。

- 新規の MEMCU12、MEMCU21、MEMCU14、MEMCU24、MEMCU41、および MEMCU42 組み込み関数は、UTF-8、UTF-16、および UTF-32 間の変換機能を提供します。z/OS では、対応するハードウェア命令を利用したインライン・コードでこの変換を行います。
- 新規の PLITRAN11、PLITRAN12、PLITRAN21、および PLITRAN22 組み込み関数は、1 バイトおよび 2 バイト・バッファの変換機能を提供します。z/OS では、対応するハードウェア命令を利用したインライン・コードでこの変換を行います。
- 新規の USURROGATE 組み込み関数は、CHAR または WCHAR スtringに UTF サロゲート・ペアが含まれているかどうかをテストする機能を提供します。
- 新規の ROUNDDEC 組み込み関数は、DFP 数を小数第 n 位で丸める (ROUND 組み込み関数の場合は、n 桁目での丸め) かどうかを指定する機能を提供します。
- 新規の INONLY、INOUT、および OUTONLY 属性を使用すれば、コードをより自己記述的にし、コンパイラで、より正確な診断を生成する (例えば、仮引数が INONLY と宣言されていれば仮引数にフラグを設定できなくなり、未初期化引数が OUTONLY と宣言されていれば未初期化引数にフラグを設定できなくなりました) ことが簡単にできます。
- 新規の %DO SKIP; ステートメントを利用すれば、簡単にコード・ブロックをコンパイルから除外し、コメントを「コメント化」できます。

- 6 つの追加日付/時刻パターンが、入出力に対してゼロ消去をサポートするようになりました。

V3R8 からの機能拡張

本リリースは、本書および他の IBM PL/I ブックに記載されている次の機能強化を提供します。

- 新しい PLISAXC 組み込み関数によって、ユーザーは、z/OS XML System Services パーサーを、SAX パーサーのように活用できます。このパーサーの基礎サポートのおかげで、PLISAXC で、名前空間および 2G を超える文書がサポートされます。
- 新しい ULENGTH、ULENGTH8、ULENGTH16、UPOS、USUBSTR、UVALID、および UWIDTH 組み込み関数によって、ユーザーは、UTF-8 および UTF-16 データが入ったストリングの照会および処理を行えます。
- 新しい FIXEDBIN、FIXEDDEC、FLOATBIN、および FLOATDEC 組み込み関数によって、ユーザーは、数値変換で (モード以外の) すべての結果属性を指定できるため、より分かりやすいだけでなく、パフォーマンスも向上したコードを記述できます (特に一部の DFP 変換において)。
- 新規 ONLINE 組み込み関数を使用すると、以前は実行時のエラー・メッセージまたはダンプでしか使用できなかった情報のもう一方の部分、つまり、条件が発生したユーザー・コードの行番号に簡単にアクセスすることができます。
- 新規 REG12 組み込み関数によって、CAA のアドレスが返され、ユーザーは、一部の Language Environment サービスを使用したコードを記述しやすくなります。
- REPATTERN 組み込み関数がさらに 3 つの DB2 日時フォーマットをサポートします。
- 新規 DIMACROSS 属性によって、DB2 複数行フェッチの活用が容易になります。
- 新規 SUPPRESS 属性によって、未初期化および未参照の変数に対するコンパイラ警告メッセージを選択的に抑止するのが容易になります。
- 末尾の OPTIONAL 引数が内部プロシーチャーの呼び出しでも省略可能になりました。
- USAGE コンパイラ・オプションの新規 HEX サブオプションによって、ユーザーは HEX 組み込み関数を VARYING および VARYINGZ ストリングに適用する際のデータの表示量を指定できます。

V3R7 からの機能拡張

本リリースは、本書および他の IBM PL/I ブックに記載されている次の機能強化を提供します。

- IEEE 浮動小数点 (DFP) がサポートされます。

これには、次の新しい組み込み関数のサポートが含まれています。

- ISFINITE
- ISINF
- ISNAN

- ISNORMAL
- ISZERO

また、DFP サポートの一環として、次の古い組み込み関数が更新されました。

- EPSILON
- EXPONENT
- HUGE
- MAXEXP
- MINEXP
- PLACES
- PRED
- RADIX
- ROUND
- SCALE
- SUCC
- TINY

- 新規 MEMCONVERT 組み込み関数を使用すると、任意のコード・ページ間でデータの任意の長さを変換できます。
- 新規 ONOFFSET 組み込み関数を使用すると、以前は実行時のエラー・メッセージまたはダンプでしか使用できなかった情報のもう一方の部分、つまり、条件が発生したユーザー・プロシージャのオフセットに簡単にアクセスすることができます。
- 新規 STACKADDR 組み込み関数は、現在の動的保存域 (z/OS 上のレジスター 13) のアドレスを戻し、ユーザーが独自の診断コードを作成するのを容易にします。
- 引用符 (") 記号はコード・ページによって変わるため、新規 QUOTE オプションを使用して、この代替コード・ポイントを指定できます。
- 新規 XML コンパイラー・オプションを使用すると、XMLCHAR 組み込み関数の出力にあるタグを、すべて大文字にするか、宣言されたとおりの大/小文字にするかを指定できます。

V3R6 からの機能強化

このリリースでは、以下の新しい言語機能を提供しています (その他のプラットフォーム固有の機能強化については、該当の「プログラミング・ガイド」に説明があります)。

- PICSPEC 組み込み関数がサポートされるようになりました。そのため、CHARACTER データをすぐに PICTURE にキャストできます。
- THREADID 組み込み関数が z/OS で使用できるようになりました。変更も加えられており、スレッド ID にポインターを戻すようになりました。また、すべての場合にパラメーターが必須となっています。

V3R5 からの機能拡張

このリリースでは、以下の新しい言語機能を提供しています (その他のプラットフォーム固有の機能強化については、該当の「プログラミング・ガイド」に説明があります)。

- LOCATION 組み込み関数は、構造体が割り振られていなくても、REFER を使用して構造体の中の最初のエレメントを指定できるようになりました。
- DB2 の日付パターンである「YYYY-MM-DD」、「MM/DD/YYYY」および「DD.MM.YYYY」を日時処理の組み込み関数で 사용할 ことができるようになりました。

V3R4 からの機能拡張

このリリースでは、以下の新しい言語機能を提供しています (その他のプラットフォーム固有の機能強化については、該当の「プログラミング・ガイド」に説明があります)。

- DEFAULT ステートメントの意味が、ホスト・コンパイラーでの意味と一致するようになりました。
- ENTRY ステートメントが含まれている PROCEDURES 内の BEGIN ブロックの内部での RETURN ステートメントのサポート。
- REPLACEBY2 組み込み関数
- NOINIT 属性
- MACRO プリプロセッサの中の以下の組み込み関数
 - LOWERCASE
 - MACNAME
 - TRIM
 - UPPERCASE

V3R3 からの機能拡張

このリリースでは、以下の言語機能を含む、Enterprise PL/I V3R3 で提供されたすべての機能拡張も提供しています。

- 以下の組み込み関数
 - MEMINDEX
 - MEMSEARCH
 - MEMSEARCHR
 - MEMVERIFY
 - MEMVERIFYR
 - XMLCHAR
- GET EDIT の中の V フォーマット項目。

V3R2 からの機能拡張

このリリースでは、以下の言語機能を含む、Enterprise PL/I V3R2 で提供されたすべての機能拡張も提供しています。

- OPTIONS(COBOL) を指定した PROC および ENTRY に対する NOMAP、NOMAPIN、および NOMAP 属性のサポート。
- 異なる RETURNS 属性を持つ ENTRY ステートメントを指定した PROC に対する、旧ホスト・コンパイラーで提供していたのと同じ方法でのサポート。
- OPTIONS(RETCODE) は、OPTIONS(COBOL) を指定した PROC および ENTRY を想定します。
- 未処理の場合、SIZE 条件は ERROR にプロモートされません。
- 新規の USAGE コンパイラー・オプションを使用すると、RULES(IBMANS) オプションの他の影響を受けずに、ROUND および UNSPEC 組み込み関数の IBM または ANS 動作を完全に制御できます。
- PUT LIST と PUT EDIT ステートメントで POINTER が使用できるようになりました。8 バイトの 16 進値が出力されます。
- ABNORMAL 属性を STATIC 変数で指定すると、STATIC 変数を使用されていなくてもこの変数は保存されます。

V3R1 からの機能拡張

本リリースでは、次を含む Enterprise PL/I V3R1 での機能強化もすべて提供されます。

- z/OS でのマルチスレッド化のサポート
- z/OS での IEEE 浮動小数点のサポート
- マクロ・プリプロセッサでの ANSWER ステートメントのサポート
- PLISAXA および PLISAXB 組み込みサブルーチンを介した SAX 形式 XML 構文解析
- 追加の組み込み関数
 - CS
 - CDS
 - ISMAIN
 - LOWERCASE
 - UPPERCASE

本リリースでは、次を含む VisualAge PL/I V2R2 での機能強化もすべて提供します。

- WIDECHAR 属性を介した初期 UTF-16 サポート

以下については、まだサポートされていません。

- ソース・ファイル内の WIDECHAR 文字
- W スtring定数
- ストリーム入出力内の WIDECHAR 式の使用
- レコード入出力での WIDECHAR からの暗黙の型変換または WIDECHAR への暗黙の型変換
- レコード入出力での暗黙の endianness フラグ

WIDECHAR ファイルを作成する場合は、ファイルの最初の 2 バイトとして endianness フラグ (fe_ffwx) を書き込んでください。

- DEFAULT ステートメントでサポートされる DESCRIPTORS オプションと VALUE オプション
- PUT DATA 機能強化
 - POINTER、OFFSET およびサポートされているその他の非計算変数
 - タイプ 3 DO 仕様が使用可能
 - 添え字が使用可能
- DEFINE ステートメントの機能強化
 - 指定されていない構造体の定義
 - CAST および RESPEC タイプ付き関数
- 追加の組み込み関数
 - CHARVAL
 - ISIGNED
 - IUNSIGNED
 - ONWCHAR
 - ONWSOURCE
 - WCHAR
 - WCHARVAL
 - WHIGH
 - WIDECHAR
 - WLOW
- プリプロセッサ機能強化
 - プリプロセッサ・プロシージャータでの配列のサポート
 - %DO ステートメントでの WHILE、UNTIL および LOOP キーワードのサポート
 - %ITERATE ステートメントのサポート
 - %LEAVE ステートメントのサポート
 - %REPLACE ステートメントのサポート
 - %SELECT ステートメントのサポート
 - 追加の組み込み関数
 - COLLATE
 - COMMENT
 - COMPILEDATE
 - COMPILETIME
 - COPY
 - COUNTER
 - DIMENSION
 - HBOUND
 - INDEX
 - LBOUND
 - LENGTH
 - MACCOL
 - MACLMAR
 - MACRMAR
 - MAX
 - MIN
 - PARMSET

- QUOTE
- REPEAT
- SUBSTR
- SYSPARM
- SYSTEM
- SYSVERSION
- TRANSLATE
- VERIFY

第 2 章 プログラムの要素

1 バイト文字セット	13	区切り文字と演算子	18
英字および特別言語文字	13	ステートメント	20
10 進数	15	単純ステートメント	22
2 進数	15	複合ステートメント	23
16 進数	15	グループ	23
特殊文字	15	2 バイト文字セット	24
複合記号	16	DBCS ID	24
大文字小文字の区別	17	DBCS ステートメント・エレメント	25
SBCS ステートメント・エレメント	17	DBCS 継続規則	26
ID	17		

この章では、PL/I プログラムを作成するときに使用する基本要素について説明します。要素には、文字セット、プログラマー定義の ID、キーワード、区切り文字、およびステートメントが含まれます。

PL/I は、1 バイト文字セット (SBCS) および 2 バイト文字セット (DBCS) をサポートしています。

PL/I の言語要素に関するインプリメンテーションの制限は、793 ページの『制限値』にリストされています。

1 バイト文字セット

文字セット とは、文字 と呼ばれる固有表示の順序付けられたセットを指します。例えば、モース符号の記号セットやキリル・アルファベットの文字は文字セットです。PL/I は、すべての PC 文字セットをサポートします。文字セット 0640 に属する文字はすべての PC コード・ページと同じコード・ポイントを持っているため、不変 文字セットとも呼ばれます。コード・ポイント とは 256 個の可能文字のうちのいずれかを表す 1 バイト・コードを指し、コード・ページ とはすべてのコード・ポイントに対するグラフィック文字と制御機能の意味の割り当てを指します。

PL/I は文字セット 0640 に適合するすべての PC コード・ページをサポートします。ただし、PL/I は、プログラマーが CURRENCY、NAMES、OR、または NOT といったコンパイラ・オプションを使用して指定する文字を除いたすべてのコード・ポイントについても PC コード・ページ 0850 を仮定しています。これらのオプションの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

コード・ページ 0850 には、英字、10 進数字、特殊文字、およびその他の各国語や制御文字が入っています。定数およびコメントでは、SBCS 文字のすべての値を使用することができます。PL/I エレメント (例えば、ステートメント、キーワード、および区切り文字など) は、以下の節で説明されている文字に限定されます。

英字および特別言語文字

PL/I のデフォルトの英字は、英字に特別言語文字が加わります。

英字

英語アルファベットを含む 26 の基本英字があります。それぞれの英字とそれに対応する ASCII および EBCDIC 値 (16 進表記) を表 1 に示します。

表 1. 英字と同等の値

文字	EBCDIC 16 進値 (大文字)	EBCDIC 16 進値 (小文字)	ASCII 16 進値 (大文字)	ASCII 16 進値 (小文字)
A	C1	81	41	61
B	C2	82	42	62
C	C3	83	43	63
D	C4	84	44	64
E	C5	85	45	65
F	C6	86	46	66
G	C7	87	47	67
H	C8	88	48	68
I	C9	89	49	69
J	D1	91	4A	6A
K	D2	92	4B	6B
L	D3	93	4C	6C
M	D4	94	4D	6D
N	D5	95	4E	6E
O	D6	96	4F	6F
P	D7	97	50	70
Q	D8	98	51	71
R	D9	99	52	72
S	E2	A2	53	73
T	E3	A3	54	74
U	E4	A4	55	75
V	E5	A5	56	76
W	E6	A6	57	77
X	E7	A7	58	78
Y	E8	A8	59	79
Z	E9	A9	5A	7A

特別言語文字

デフォルトの特別言語文字は、番号 記号 (#)、単価 記号 (@)、および通貨 記号 (\$) です。これらの文字の 16 進値は、コード・ページに応じて変化します。NAMES コンパイラー・オプションを使用すると、独自の特別言語文字を定義することができます。特別言語文字を定義する方法の詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

英数字

英数字 は、英字または特別言語文字、あるいは数字のいずれかになります。

10 進数

PL/I は、0 から 9 までの 10 の 10 進数を認識します。10 進数は単に「数字」と呼ばれることもあり、10 進定数およびその他の表示や値を表記する場合に使用されます。以下の表では、数字とその 16 進値を表しています。

表 2. 10 進数と同等の値

文字	EBCDIC 16 進値	ASCII 16 進値
0	F0	30
1	F1	31
2	F2	32
3	F3	33
4	F4	34
5	F5	35
6	F6	36
7	F7	37
8	F8	38
9	F9	39

2 進数

PL/I は 0 と 1 の 2 個の 2 進数を認識します。2 進数は「ビット」と呼ばれることもあり、2 進数およびビット定数を表記する場合に使用されます。

16 進数

PL/I は、0 から 9 および A から F までの 16 の 16 進数を認識します。A から F までは、それぞれ 10 進数値の 10 から 15 までを表します。16 進数は、16 進数字、または単に 16 進と呼ばれることもあり、定数を 16 進表記で表す場合に使用されます。

特殊文字

表 3 では、特殊文字、それらの PL/I での意味、ならびに ASCII と EBCDIC 値 (16 進表記) を示します。

表 3. 特殊文字と同等の値

文字	意味	デフォルトの EBCDIC 16 進値	デフォルトの ASCII 16 進値
b	ブランク	40	20
=	等号記号または代入記号	7E	3D
+	正符号	4E	2B
-	負符号	60	2D
*	アスタリスクまたは乗算記号	5C	2A
/	スラッシュまたは除算記号	61	2F
(左括弧	4D	28
)	右括弧	5D	29
,	コンマ	6B	2C
.	小数点またはピリオド	4B	2E
'	単一引用符	7D	27

表 3. 特殊文字と同等の値 (続き)

文字	意味	デフォルトの EBCDIC 16 進値	デフォルトの ASCII 16 進値
"	二重引用符 注 1	7F	22
%	パーセント	6C	25
;	セミコロン	5E	3B
:	コロン	7A	3A
¬	NOT 記号、排他的 OR 記号 注 1	5F	5E
&	AND 記号	50	26
	OR 記号 注 1	4F	7C
>	より大記号	6E	3E
<	より小記号	4C	3C
_	区切り文字 (下線)	6D	5F

注 1:

OR (|)、NOT (¬)、および引用符 (") 記号には、可変コード・ポイントがあります。コンパイラー・オプションの OR、NOT、および QUOTE を使用して、これらの演算子を表す代替記号を定義することができます。これらのオプションの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

複合記号

特殊文字を組み合わせて、複合記号を作成することができます。下の表では、これらの記号とその意味を示しています。複合記号には、ブランクを入れることはできません。

表 4. 複合記号の説明

複合記号	意味
	連結
**	累乗演算
¬<	より小でない
¬>	より大でない
¬=	等しくない; 評価、排他 OR および代入
<=	より小さいか等しい
>=	より大きい等しい
/*	コメントの始まり
*/	コメントの終わり
->	ロケーター (ポインターとオフセット)
=>	ロケーター (ハンドル)
+=	式の計算、加算および代入
-=	式の計算、減算および代入
*=	式の計算、乗算および代入
/=	式の計算、除算および代入
=	式の計算、OR および代入
&=	式の計算、AND および代入
=	式の計算、連結と代入
**=	式の計算、指数化および代入
(:	タイプ付き関数仮パラメーター・リストの始まり
:)	タイプ付き関数仮パラメーター・リストの終わり

大文字小文字の区別

PL/I プログラム内では、大文字と小文字を組み合わせて使用することができます。

キーワードまたは ID の使用では、小文字はそれに対応する大文字と見なされます。DBCS 文字として小文字を入力した場合でも、大文字に変換されます。

コメントまたは文字、混合または漢字ストリング定数内で大文字と小文字を組み合わせて使用する場合には、小文字は小文字のままです。

SBCS ステートメント・エレメント

このセクションでは、SBCS を使用する場合に PL/I プログラムを構成するエレメントを説明します。

PL/I ステートメントは、ID、区切り文字、演算子、および定数で構成されます。定数は、27 ページの『第 3 章 データ・エレメント』で説明します。

ID

ID は、コメントや定数の中には含まれない文字の集まりです。P、PIC、および PICTURE 以外は、ID が先になり、区切り文字がそのあとに続かなければなりません。(P、PIC、および PICTURE の各 ID のあとは、文字ストリングが続きます。) ID の最初の文字は、英字、特別言語文字のいずれかにならなければなりません。ID 名が INTERNAL シンボルである場合、区切り () 文字を最初の文字にすることもできます。残りの文字としては、英字、特別言語文字、数字、または下線 (_) 文字が可能です。外部ユーザー名は、IBM、PLI、CEE、_IBM、_PLI、および _CEE 以外の文字で始まる名前ではいけません。

ID は、PL/I キーワードまたはプログラマーが定義する名前となります。ID がキーワードである場合には、PL/I は構文から判別することができるので、プログラマーが定義した名前として任意の ID を使用することができます。PL/I では予約されている語はありません。

PL/I キーワード

キーワード は、PL/I 内で特定の意味を持つ ID です。取られる処置またはデータの属性などを、キーワードで指定することができます。例えば、READ、DECIMAL、および ENDFILE などはキーワードです。キーワードによっては省略形を使うことができます。キーワードとその省略形は、大文字で示されます。

プログラマー定義の名前

PL/I プログラムでは、変数やプログラム制御データに名前 を付けます。そのほかに、組み込み名、条件名、および総称名があります。任意の ID を名前として使用することができます。名前はプログラム・ブロック内でそれぞれ固有でなければなりません。同一ブロック内のファイルと浮動小数点変数の両方に同じ名前を付けることはできません。

読みやすくするために、Gross_Pay のように中間に区切り文字 (_) を入れることができます。

名前の例:

プログラマー定義の名前

A	Rate_of_pay
Record	Loop_3

プログラマー定義の外部名に関するその他の要件については、177 ページの『INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性』で説明します。

名前が必要であるにもかかわらず名前を使用しない場合は、アスタリスク (*) を ID として使用することができます。この例については、134 ページを参照してください。

区切り文字と演算子

区切り文字 と演算子 は、ID と定数を分離するのに使われます。表 5 は区切り文字、19 ページの表 6 は演算子を示します。

表 5. 区切り文字

名前	区切り文字	用途
コンマ	,	リスト内の各エレメントを区切ります。BY NAME オプションの前でも使います。
ピリオド	.	修飾名の各エレメントを接続します。10 進数または 2 進数の小数点としても使います。
セミコロン	;	ステートメントの終わりを表します。
等号	=	代入を表すほか、条件式では「等しい」ことを表します。
コロンの	:	ステートメントに接頭語をつなぐときに使います。次元属性で、下限と上限を連結するときや、DEFAULT ステートメントの RANGE 指定内でも使います。
ブランク	b	エレメントを区切ります。
括弧	()	リスト、式、反復因数 (iteration factor)、および反復因数 (repetition factor) を囲みます。各種のキーワードに関連する情報を囲むときも使います。
ロケーター	->	ロケーター修飾 (ポインターとオフセット) を表します。
	=>	ロケーター修飾 (ハンドル) も表します。
パーセント	%	% ステートメントと % ディレクティブを表します。

注: 必要な記号を忘れると、トレース困難なエラーが起こることがあります。よくあるエラーとしては、引用符が対になっていない、小括弧が対になっていない、コメント区切り文字が対になっていない、ならびにセミコロンが欠落しているなどがあります。

表 6. 演算子

演算子の タイプ	文字	意味
算術	+	加算または前置加算
	-	減算または前置減算
	*	乗算
	/	除算
	**	累乗演算
比較	=	等しい
	≠	等しくない
	<	より小
	≠<	より小でない
	>	より大
	≠>	より大でない
	<=	より小さいか等しい
	>=	より大きい等しい
論理演算子	¬	NOT、排他的 OR
	&	AND
		または
ストリング 演算子		連結

区切り文字として使う文字をほかのコンテキストで使うことができます。例えば、名前を修飾するときに使うピリオドは区切り文字 (例えば、`Weather.Temperature`) ですが、算術定数内で使用する場合は 10 進小数点です (例えば、`3.14`)。

ブランク

各演算子または区切り文字の前後をブランク (b) で囲むことができます。

ブランク以外の区切り文字で区切られていない ID や定数は、1 つ以上のブランクで区切る必要があります。ただし、この規則の唯一の例外として、ID `P`、`PIC`、および `PICTURE` の後にはブランクなしで文字ストリングを続けることができます。ブランクは、入れることが可能なところであれば、いくつでも入れることができます。

ID、複合記号、または定数 (文字定数、混合定数、ワイド文字、および漢字ストリング定数は除く) の中にブランクがあってはなりません。

以下に例を示します。

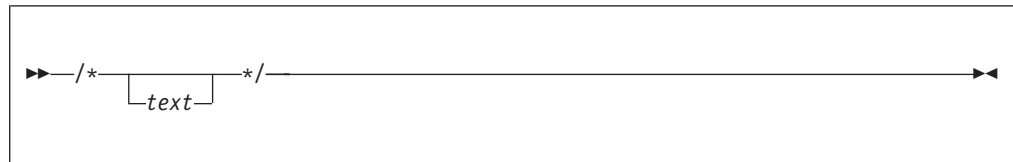
<code>ab+bc</code>	この宣言は、次の宣言と同 等です。	<code>Ab + Bc</code>
<code>Table(10)</code>	この宣言は、次の宣言と同 等です。	<code>TABLEb(b10bbb)</code>
<code>First,Second</code>	この宣言は、次の宣言と同 等です。	<code>first,bsecond</code>
<code>AtoB</code>	と	<code>AbtobB</code> は同等ではない

ブランク

以上のほかに、ブランクを必要または許可する場合については、それぞれの言語特性を説明する際に言及します。

コメント

ブランクを区切り文字として使用できるところでは、コメントを使用することができます。コメントは、ブランクと見なされ、区切り文字として使用されます。コメントはプログラム内のロジックでは無視され、影響を及ぼしません。コメントの構文は、以下のとおりです。



`/*` コメントの始まりを示します。

`text`

コメントの終わりを示す複合記号 `*/` 以外の文字は、任意の順序で指定することができます。

`*/` コメントの終わりを示します。

コメントは、1 行、または複数行にまたがって入れることができます。例えば、次のようになります。

```
A = /* This comment is on one line */ 21;  
  
    /* This comment spans  
       two lines          */
```

以下の例では、コメントとして表示されるものは、(引用符で囲まれているので) 実際には文字ストリング定数です。

```
A = '/* This is a constant, not a comment */' ;
```

コメントはネストできません。しかし、コメントを含むコードをコメント化する方法として、`%DO SKIP:` ステートメントを使用することができます。

ステートメント

ID、区切り文字、演算子、および定数を使用して、`PL/I` ステートメントを作ることができます。

ソース・プログラムは一連のレコードまたは行から構成されますが、`PL/I` は、プログラムを連続した文字のストリームと見なします。`PL/I` ステートメントのフォーマットにはほとんど制約がないので、プログラムを作成する際に特別なコーディング規則に注意する必要はなく、各ステートメントを特定の桁位置から始める必要もありません。ステートメントは、前のステートメントのすぐあとの位置から開始できます。また、ブランク (いくつでもよい) で区切ることができます。

ステートメントの中には、`%` 記号で始まるものもあります。これらのステートメントは、プリプロセッサおよびコンパイラの演算 (ライブラリーからのプログラム・ソース・テキストをはじめとするリストの制御など) を指示する `%` ディレクテ

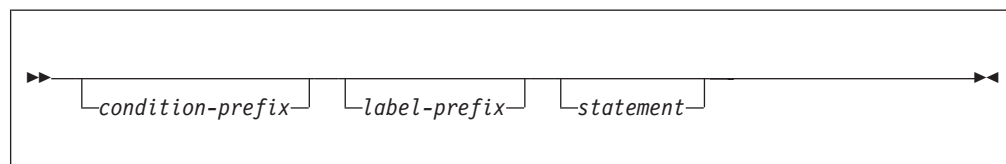
イブであるか、または PL/I マクロ機能の % ステートメントであるかのいずれかです。 % ディレクティブは単独で 1 行を占めなければなりません。

プログラムを読みやすく保守しやすくするため、およびソース行の後続ブランクの欠落によって予測できない結果が生じるのを防ぐため、以下のことを実行してください。

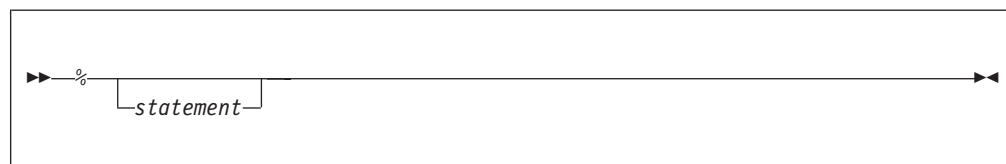
- 言語エレメントを分割して複数行に置くようなことがないようにします。ストリング定数を複数行に書かなければならない場合には、連結記号 (||) を使用してください。
- 1 行に複数のステートメントを記述することはできません。
- % ディレクティブを複数行に分割することはできません。

PL/I ステートメント、マクロ機能 % ステートメント、および % ディレクティブは、215 ページの『第 9 章 ステートメントとディレクティブ』にアルファベット順にリストされています。

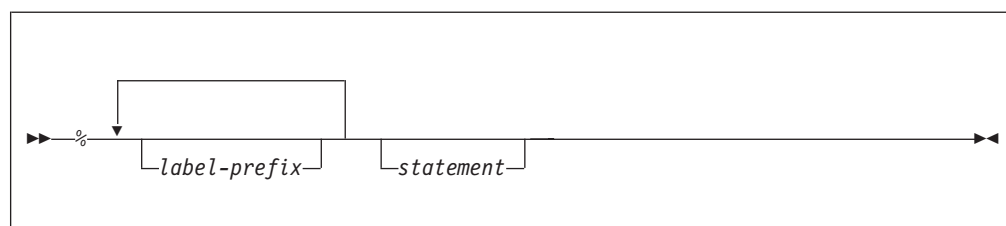
PL/I ステートメントの構文は、以下のとおりです。



% ディレクティブの構文は、以下のとおりです。

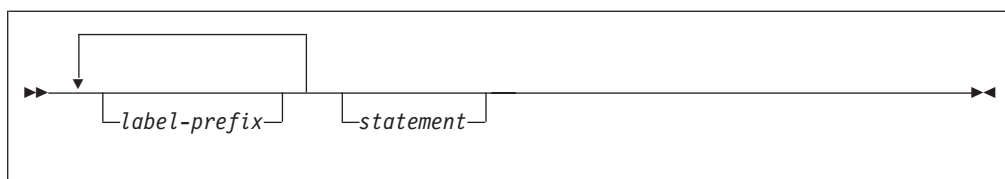


% ステートメントの構文は、以下のとおりです。



マクロ・ステートメントの構文は、以下のとおりです。

ステートメント



各ステートメントは、いずれかのグループまたはブロックに含まれていなければなりません。マクロ・ステートメントは、なんらかのマクロ・グループまたはプロシージャの中に囲まれていなければなりません。

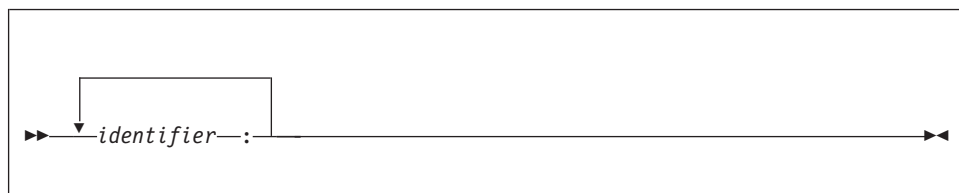
condition-prefix

condition-prefix は、PL/I 条件の可能または禁止を指定します (377 ページの『第 16 章 条件処理』を参照)。

label-prefix

label-prefix は、1 つまたは複数のステートメント・ラベルです。ステートメント・ラベルとは、プログラム内のどこか別の場所からそのステートメントを参照できるように、ステートメントを識別する名前です。ステートメント・ラベルは、ラベル定数 (56 ページの『ラベル・データと LABEL 属性』で取り上げられています)、入出力定数 (130 ページの『入出力データ』で取り上げられています)、またはフォーマット定数 (58 ページの『フォーマット・データと FORMAT 属性』で取り上げられています) のいずれかになります。

DECLARE、DEFAULT、WHEN、OTHERWISE および ON ステートメント以外の任意のステートメントは、ラベル接頭部を持つことができます。ラベル接頭部の構文は以下のとおりです。



一般的にこの資料全体の独立ステートメントの構文は、条件接頭語またはラベル接頭部を示しません。

statement

単純または複合ステートメントがあります。

単純ステートメント

単純ステートメントのタイプは、キーワード、代入、およびヌルです。

キーワード・ステートメント は、キーワードで始まるステートメントです。このキーワードは、ステートメントの機能を示します。以下の例では、READ および DECLARE はキーワードです。

```
read file(In) into(Input);      /* keyword statement */
%declare Text char;             /* keyword %statement */
```

代入ステートメント には、代入記号 (=) の左側にある 1 つまたは複数の ID、および右側の式が含まれます。このステートメントはキーワードで始まりません。

```

A = B + C;          /* assignment statement */
%Size = 15;         /* % assignment statement */

```

ヌル・ステートメント は、1 つのセミコロンだけで構成され、演算できないステートメントです。

```

;                  /* null statement */
Label::;          /* labeled null statement */
%;               /* % null statement */

```

複合ステートメント

複合ステートメントはすべてキーワード・ステートメントです。複合ステートメントは、そのステートメントの目的を示すキーワードで始まります。複合ステートメントには、1 つまたは複数の単純ステートメントまたは複合ステートメントが含まれます。4 つの複合ステートメント、IF、ON、WHEN、および OTHERWISE があります。複合ステートメントは、セミコロンで終了します。このセミコロンは、複合ステートメントの最後のステートメントの終わりも示します。

以下に複合ステートメントの例を示します。

```

on conversion
  onchar() = '0';

if Text = 'stmt' then
  do;
    select(Type);
    when('if') call If_stmt;
    when('do') call Do_stmt;
    when('') /* do nothing */ ;
    otherwise
      call Other_stmt;
    end;
    call Print;
  end;
end;

%if Type = 'AREA' %then
  %Size = Size + 16;
%else;

```

グループ

ステートメントは、グループと呼ばれるさらに大きなプログラム単位内に入れることもできます。グループ は、DO グループまたは SELECT グループのいずれかです。DO グループとは、DO ステートメントとそれに対応する END ステートメントで区切られた一連のステートメントです。SELECT グループは、SELECT ステートメントとそれに対応する END ステートメントで区切られた、一連の WHEN ステートメントとオプションの OTHERWISE ステートメントです。区切りステートメントは、グループの一部です。

複合ステートメント内にグループがある場合、グループを単独ステートメントであるかのように処理して、そのグループに制御が渡されるか、あるいはそのグループが迂回されることもあります。

グループ内での制御の流れについては、DO グループの場合は 224 ページの『DO ステートメント』の項で説明し、SELECT グループの場合は 249 ページの『SELECT ステートメント』の項で説明します。

各グループは、いずれかのグループまたはブロック内に入れられなければなりません。グループには、任意の数（ゼロを含む）のステートメント、グループ、またはグループが入ることができます。

2 バイト文字セット

2 バイト文字セット (DBCS) の各文字は、2 バイトで保存されます。GRAPHIC コンパイラー・オプションが有効な場合は、DBCS 文字や SBCS 文字を使用していくつかのソース言語エレメントを書くことができます。特に、ソース・プログラム内の次の場所で DBCS 文字を使用できます。

- コメントの内部
- ステートメント・ラベルまたは ID の一部として
- G または M リテラル内

ただし、INCLUDE ファイル名と FETCH ステートメントの TITLE オプションは、SBCS でなければなりません。

z/OS プラットフォームでは、DBCS 文字の各ストリングをシフト・コードで直接囲む必要がありますが、コンパイラーでサポートされる他のプラットフォームでは、シフト・コードは不要であり、受け入れられません。以降の例ではこれらのシフト・コードが含まれていますが、z/OS 以外のすべてのプラットフォームの場合にはそれらを省略する必要があります。

DBCS ID

DBCS ID は、DBCS フォーマットの 1 バイト文字、2 バイト文字、またはその両方を組み合わせたものでもかまいません。

DBCS フォーマットの 1 バイト ID

1 バイト文字だけを含む DBCS ID は、先頭文字規則も含めて通常の PL/I 命名規則に従っていなければなりません。DBCS と同等のものとして表された 1 バイト文字を含む DBCS ID は、SBCS での同じ ID の同義語です。

注:

1. 本書では記号「.」を使用します。(太字ピリオド) を使用して SBCS としても表すことのできる、2 バイト文字セットの最初のバイトを表します。
2. 本書では、「kk」を使用して、2 バイト文字を表します。
3. 本書では、「<」を使用してシフトアウト文字 ('0E'X) を表します。
4. 本書では、「>」を使用してシフトイン文字 ('0F'X) を表します。

例

```
<.I.B.M> = 3; /* is the same as IBM=3; */
```

2 バイト文字を含む DBCS ID

DBCS 名に使用されるバイト数は、コンパイラーの LIMITS オプションで名前の最大長として指定された値を超えてはなりません。

DBCS ID 内部の DBCS フォーマットで表された SBCS 文字は、SBCS と見なされます。例えば、次のようになります。

```

A<kk>B
A<kk.B>
<.Akk>B          /* are all A<kk>B (SBCS-DBCS-SBCS) */

```

2 バイト文字 ID の用途

DBCS ID は、SBCS ID が許される個所ならどこでも、使用することができます。DBCS ID が EXTERNAL 名および %INCLUDE ファイル名として使用される場合には、その ID をオペレーティング・システムが受け入れるか、または以下のいずれかによって受け入れ可能になるかどうかを確かめなければなりません。

- EXTERNAL 属性と環境名を一緒に使用することによって
- OPEN ステートメントの TITLE オプションを使用することによって

DBCS ステートメント・エレメント

この節では、DBCS を使用しての PL/I 言語エレメントの作成方法に関する補足情報を提供します。この節における言語エレメントの定義および一般的な使用規則は、17 ページの『SBCS ステートメント・エレメント』の対応する節に記載されています。

DBCS を使用してコード化できる言語エレメント、規則の説明、および使用法の例を以下にリストします。

ID SBCS、DBCS またはその両方を使用します。

```

dcl Eof          /* in SBCS, is the same as */
dcl <.E.o.f>      /* this in DBCS. */

dcl <kkkk>X       /* these are all the same, where */
dcl <kkkk.X>      /* kk is a valid */
dcl <kkkk>x       /* DBCS character */
dcl <kkkk.x>      /*

```

コメント

SBCS、DBCS またはその両方を使用します。

```

/* comment */          /* all SBCS */
/* <.T.y.p.ekk> */      /* DBCS text */

```

コメント区切り文字を SBCS で指定しておく必要があります。

混合文字ストリング定数

SBCS、DBCS またはその両方を使用し、SBCS または DBCS 引用符で囲みます。

ストリングが SBCS 引用符で囲まれている場合は、M 接尾部のあるストリングで終了する必要はありません。

引用符に囲まれた DBCS データは SBCS に変換されません。そのデータおよびシフト・コードは、ストリングの内部表記にそのまま保管されます。

```

'<.a.b.c>'M
'<.I.B.M.'.S>'M
'<.I.B.M>' '<.S>'M
'IBM<kk>'M

```

グラフィック定数

DBCS のみを使用し、SBCS または DBCS 引用符で囲みます。

```

'<.a.b.c>'G          /* 6 byte graphic constant */
'<.I.B.M.'.S>'G      /* 10 byte graphic constant .I.B.M.'.S */

```

DBCS ステートメント・エレメント

G リテラルは、前後を DBCS 引用符で囲んで指定でき、またその場合は G 自体を DBCS で指定することもできます。そのため、以下はすべて同等です。

```
'<.a.b.c>'G  
<.'.a.b.c.'>G  
<.'.a.b.c.'G>
```

DBCS 継続規則

ストリング・リテラルまたは ID に、単一の SBCS ブランクで右マージンと区切られた DBCS 文字がある場合には、そのブランクは無視され、ステートメントのエレメントは次のレコードの左マージンに続きます。

第 3 章 データ・エレメント

データ項目	27	データ属性	29
変数	27	非データ属性	30
定数	28	計算データ・タイプとその属性	33
引用符の使用	28	コード化算術データとその属性	34
句読点のついた定数	28	ストリング・データとその属性	42
データ・タイプとその属性	28		

この章では、PL/I プログラムで利用できるデータの種類と、それらを説明するために使用する属性を説明します。以下の説明について取り上げています。

データ項目の検討

変数および定数の検討

使用可能なデータ・タイプおよびそれらを定義する属性

データを宣言する方法については、169 ページの『第 8 章 データ宣言』を参照してください。

データ項目

データ項目 は、変数または定数のいずれかの値になります。（これらの用語は、一般の数学的な使用法と必ずしも同じではありません。用語については、次の節で述べています。）データ項目は、スカラー と呼ばれる単一の項目です。あるいはデータ集合体 と呼ばれる項目の集まりであることもあります。

データ集合は、総体的にまたは個別に参照できるデータ項目の集まりです。データ集合の種類は、配列、構造体、および共用体 です。任意のタイプの計算データまたはプログラム制御データを使用して、データ集合を作成することができます。

配列は 192 ページの『配列』で、構造体は 197 ページの『構造体』で、共用体は 198 ページの『共用体』で、また共用体と構造体の配列は 203 ページの『配列、構造体、および共用体の組み合わせ』で取り上げています。

変数

変数 は、プログラムの実行中に変化し得る 1 つまたは複数の値を持ちます。変数は宣言で使用され、そこで変数の名前および特定の属性を宣言します。ただし、NONASSIGNABLE 属性の変数は、プログラムの実行中に変化しません。（詳細については、277 ページの『ASSIGNABLE 属性と NONASSIGNABLE 属性』を参照してください）。変数参照 は、次のいずれかになります。

- 宣言されている変数名
- 以下の 1 つまたは複数から宣言された名前から派生した参照
 - ポインター修飾
 - 構造体修飾
 - 添え字付け

（61 ページの『第 4 章 式および参照』を参照してください。）

定数

定数は、変化しない値を持ちます。計算データの定数は、DECLARE ステートメントで定数の値を宣言するか、または定数に名前を付けることによって参照されます。名前のついた定数の宣言に関する詳細については、54 ページの『名前付き定数』を参照してください。

プログラム制御データの定数は、名前によって参照されます。

引用符の使用

文字列定数、16 進定数、およびピクチャー指定は、単一引用符または二重引用符のいずれかで囲まれます。

文字列内の引用符には、以下の規則が適用されます。

- 組み込まれる引用符が、文字列を囲むために使用されたものと同じタイプである場合には、組み込まれる 1 つの引用符ごとに 2 つの引用符を入力しなければなりません (つまり、" または "'')。
- 組み込まれる引用符が、文字列を囲むのに使用されたものと異なるタイプである場合は、組み込まれる各インスタンスごとに 1 つの引用符だけを入力します。単一引用符は、データとして処理されます。

例:

```
'Shakespeare''s "Hamlet"' is identical to
"Shakespeare's ""Hamlet"""
```

```
PICTURE "99V9" is identical to
PICTURE '99V9'
```

注: 本書の構文図では、単一引用符を示しています。二重引用符は、特に明記されていないければ、置き換えることができます。

句読点のついた定数

読みやすくするために、算術、ビット、および 16 進数の定数には、区切り文字 () を使用できます。

'1100_1010'B	は	'11001010'B と同等
1100_1010B	は	11001010B と同等
'C_A'B4	は	'ca'b4 と同等
'C_A'XN	は	'ca'XN と同等
16_777_216	は	16777216 と同等

データ・タイプとその属性

PL/I プログラムで使用されるデータは、計算データまたはプログラム制御データに分類されます。

計算データ

求める結果を得るための計算に使用する値を表します。計算データは算術データと文字列・データから構成されます。

算術データは、コード化算術データまたは数値ピクチャー・データのいずれかです。

コード化算術データ項目は、有理数です。算術データ項目の属性は、**基数** (BINARY または DECIMAL)、**スケール** (FLOAT または FIXED)、**精度** (有効数字と小数点の配置)、および**モード** (REAL または COMPLEX) です。

数値ピクチャー・データは、文字フォーマットを持っている数字データであり、50 ページの『数字データ』で説明されています。

ストリング は、単一データ項目と見なされる一連の隣接する文字、ビット、ワイド文字、またはグラフィックのことです。

プログラム制御データ

プログラムの実行を制御するために使用される値を表示します。プログラム制御データは、以下のデータ・タイプ区域、入力、ラベル、ファイル、フォーマット、ポインター、およびオフセットで構成されます。

以下に例を示します。

```
Area = (Radius**2) * 3.1416;
```

Area と Radius は、計算データのコード化算術変数です。2 および 3.1416 は、計算データのコード化算術定数です。

3.1416 という数字がプログラム中の複数の場所で使用される場合、あるいは特定のデータや精度属性が必要な場合は、この数字を名前付き定数として宣言しておくほうがいいでしょう。したがって、上記のステートメントは以下のようにコーディングすることができます。

```
dc1 Pi FIXED DECIMAL (5,4) VALUE(3.1416);
area = (radius**2) * Pi;
```

プログラム制御データの定数は、コンパイラによって判別される値を持ちます。下記の例では、loop という名前はプログラム制御データのラベル定数を表しています。loop という値は、A=2*B; ステートメントのアドレスです。

```
loop: A=2*B;
      C=B+6;
```

データ項目を使用して作業するためには、PL/I にデータ・タイプとその処理方法を知らせる必要があります。属性 がこの情報を提供します。属性の種類は、データ属性と非データ属性です。

データ属性

計算データ、プログラム制御データ、およびプログラム特性を示します。

AREA	FILE	OFFSET	STRUCTURE
BINARY	FIXED	ORDINAL	TASK
BIT	FLOAT	PICTURE	TYPE
CHARACTER	FORMAT	POINTER	UNSIGNED
COMPLEX	GRAPHIC	PRECISION	UNION
DECIMAL	HANDLE	REAL	VARYING
DIMENSION	LABEL	RETURNS	VARYINGZ
ENTRY	NONVARYING	SIGNED	WIDECHAR

非データ属性

非データ・エレメント（例えば、組み込み関数）を示すか、またはほかのデータ属性を持つエレメントに説明を追加します。

ABNORMAL	DEFINED	INTERNAL	PARAMETER
ALIGNED	DIRECT	KEYED	POSITION
ASSIGNABLE	ENVIRONMENT	LIKE	PRINT
AUTOMATIC	EXCLUSIVE	LIST	RECORD
BASED	EXTERNAL	LITTLEENDIAN	SEQUENTIAL
BIGENDIAN	GENERIC	NONASSIGNABLE	STATIC
BUFFERED	HEXADEC	NONCONNECTED	STREAM
BUILTIN	IEEE	NORMAL	UNALIGNED
BYADDR	INITIAL	OPTIONAL	UNBUFFERED
BYVALUE	INONLY	OPTIONS	UPDATE
CONDITION	INOUT	OUTONLY	VALUE
CONNECTED	INPUT	OUTPUT	VARIABLE
CONTROLLED			

例えば、CHARACTER というキーワードは、計算データのストリング・タイプのデータ属性です。FILE というキーワードは、プログラム制御データのファイル・タイプのデータ属性です。INTERNAL という有効範囲属性は、データ項目が宣言されるブロック内でのみ、そのデータ項目が認識されることを指定します。

キーワードと式を使用して属性を指定する方法の詳細については、169 ページの『第 8 章 データ宣言』を参照してください。属性を指定する方法の概略は次のとおりです。

- ・明示的に DECLARE ステートメントを使用する方法
- ・コンテキストから PL/I が属性を判別する方法
- ・プログラマーが定義したデフォルトまたは言語によって定められたデフォルトを使用する方法

32 ページの表 7 と 33 ページの表 8 は、PL/I の各種の属性と、計算データおよびプログラム制御データの各タイプとの関連を示しています。これらの表では、定数と名前のついた定数を表しており、示されたデータ属性と有効範囲属性（32 ページの表 7）だけを持つことができます。変数を使用して付加属性を指定することができます（33 ページの表 8）。

以下に例を示します。

```
Area = (Radius**2)*3.1416;
```

定数 3.1416 には、次の属性が与えられます。

- ・DECIMAL。これは、定数が明示的に 2 進定数ではないために与えられます。
- ・FIXED。これは、定数が固定小数点数であるために与えられます。
- ・PRECISION(5,4)（5 桁の有効数字で、そのうちの 4 桁は小数点の右側にあること）
- ・REAL。これは、定数が虚数部を持たないために与えられます。
- ・INTERNAL および ALIGNED

（32 ページの表 7 の「コード化算術式」の行、および「データ属性」と「有効範囲属性」の列を参照してください。）

定数 1.0 (10 進固定小数点定数) は、定数 1 (もう 1 つの 10 進固定小数点定数)、'1'B (ビット定数)、'1' (文字定数)、 1B (2 進固定小数点定数) または 1E0 (10 進浮動小数点定数) とは異なります。

以下の例では、変数 Pi は 5 桁の 10 進数で、そのうちの 4 桁は小数点の右側にあるという PRECISION のついた、FIXED および DECIMAL というプログラマー定義のデータ属性があります。

```
declare Pi fixed decimal(5,4) initial(3.1416);
```

この DECLARE ステートメントには、Pi についてのほかの属性を持たないので PL/I は、残りの属性のデフォルトを適用します。

- データ属性列からの REAL
- 位置合わせ属性列からの ALIGNED
- 有効範囲属性列からの INTERNAL
- ストレージ属性列からの AUTOMATIC
- データ属性列からの SIGNED

(33 ページの表 8 のコード化算術式の行を参照してください。)

非データ属性

表 7. 定数タイプによる属性の分類

定数タイプ	データ属性 注 1 および 2	有効範囲属性 注 1 および 2
コード化 算術	REAL 虚数 FLOAT FIXED BINARY DECIMAL PRECISION SIGNED	内部
名前付きのコード化 算術	REAL COMPLEX FLOAT FIXED BINARY <u>DECIMAL</u> PRECISION VALUE <u>SIGNED</u> UNSIGNED	内部
ストリング演算子	BIT CHARACTER GRAPHIC WIDECHAR (長さ)	内部
名前の付いたストリング	BIT CHARACTER GRAPHIC WIDECHAR [(長さ)] <u>NONVARYING</u> VALUE	内部
名前の付いたロケーター	POINTER OFFSET HANDLE VALUE	内部
名前の付いたピクチャー	PICTURE <u>REAL</u> COMPLEX VALUE	内部
ファイル 注 3	FILE ENVIRONMENT <u>STREAM</u> RECORD <u>INPUT</u> OUTPUT UPDATE <u>SEQUENTIAL</u> DIRECT BUFFERED UNBUFFERED 注 4 KEYED PRINT	INTERNAL <u>EXTERNAL</u>
入り口 注 5	ENTRY [RETURNS]	INTERNAL <u>EXTERNAL</u>
フォーマット 注 5	FORMAT	内部
ラベル 注 5	LABEL	内部

注:

1. この表の中で大文字で表されている属性は、明示的に宣言されます。小文字の属性は、暗黙的にデータ・タイプに指定されます。
2. データ属性のデフォルトには下線が引かれています。リテラル定数のデータ属性はコンテキストに応じて異なるので、デフォルトは適用されません。名前のついた定数およびファイル定数には選択可能な属性があるので、デフォルトが示されます。
3. ファイル属性は、295 ページの『第 11 章 入出力』に記載されています。
4. BUFFERED は、SEQUENTIAL ファイルのデフォルトです。UNBUFFERED は、DIRECT ファイルのデフォルトです。
5. フォーマット定数およびラベル定数、ならびに INTERNAL 項目定数は、DECLARE ステートメントでは宣言されません。

表 8. 変数タイプによる属性の分類

変数タイプ	データ属性	位置合わせ属性	有効範囲属性	ストレージ属性
区域	AREA(size)	<u>ALIGNED</u>	<u>INTERNAL</u> <u>EXTERNAL</u>	<u>AUTOMATIC</u> <u>STATIC</u> <u>BASED</u> <u>CONTROLLED</u>
コード化 算術 注 1	<u>REAL</u> <u>COMPLEX</u> <u>FLOAT</u> <u>FIXED</u> <u>BINARY</u> <u>DECIMAL</u> <u>PRECISION</u> [<u>SIGNED</u> <u>UNSIGNED</u>]	<u>ALIGNED</u> <u>UNALIGNED</u>	(INTERNAL は AUTOMATIC BASED DEFINED PARAMETER に必須)	(AUTOMATIC は INTERNAL についてデフォルト。 STATIC は EXTERNAL について デフォルト。)
入り口	ENTRY [RETURNS] [LIMITED]			
ファイル	FILE			
フォーマット	FORMAT			定義された 変数: DEFINED [POSITION]
ラベル	LABEL			
ロケーター	POINTER HANDLE {OFFSET [(区域変数)]}			パラメーター: PARAMETER [CONNECTED NONCONNECTED] [CONTROLLED]
序数	ORDINAL			
ピクチャー	PICTURE <u>REAL</u> <u>COMPLEX</u>	<u>ALIGNED</u> <u>UNALIGNED</u>		[INITIAL [CALL]] [VARIABLE] [<u>NORMAL</u> ABNORMAL]
ストリング演算子	BIT CHARACTER GRAPHIC WIDECHAR [(長さ)] [VARYING VARYINGZ NONVARYING]			
タスク	TASK	<u>ALIGNED</u> <u>UNALIGNED</u>		<u>ASSIGNABLE</u> NONASSIGNABLE

配列: DIMENSION は任意の変数の宣言に追加できます。詳細については、192 ページの『配列』を参照してください。

構造体および共用体

- 主要な構造体および共同体の場合: 有効範囲、ストレージ (INITIAL 以外)、位置合わせ、STRUCTURE または UNION、および LIKE 属性を指定することができます。
- 構造体あるいは共同体であるメンバーの場合: 位置合わせ、STRUCTURE または UNION、および LIKE 属性を指定することができます。
- メンバーは、常に INTERNAL 有効範囲属性を持ちます。

詳細については、197 ページの『構造体』 および 198 ページの『共用体』を参照してください。

注:

1. 宣言しなかった名前や、データ・タイプを指定せずに宣言した名前は、コード化算術変数と見なされます。デフォルト属性は、187 ページの『属性のデフォルト』に記載されています。示されるデフォルトは、IBM デフォルトです。ANS デフォルトは、FLOAT と DECIMAL ではなく FIXED と BINARY です。
2. POSITION は、ストリング・オーバーレイ定義を使用した場合だけ使用することができます。

計算データ・タイプとその属性

この節では、計算データとして分類されるデータ・タイプ、およびそれに関連づけられる属性を説明します。

コード化算術データとその属性

コード化算術データの一般情報については、28 ページの『データ・タイプとその属性』を参照してください。

コード化算術データの構文を次の図に示します。

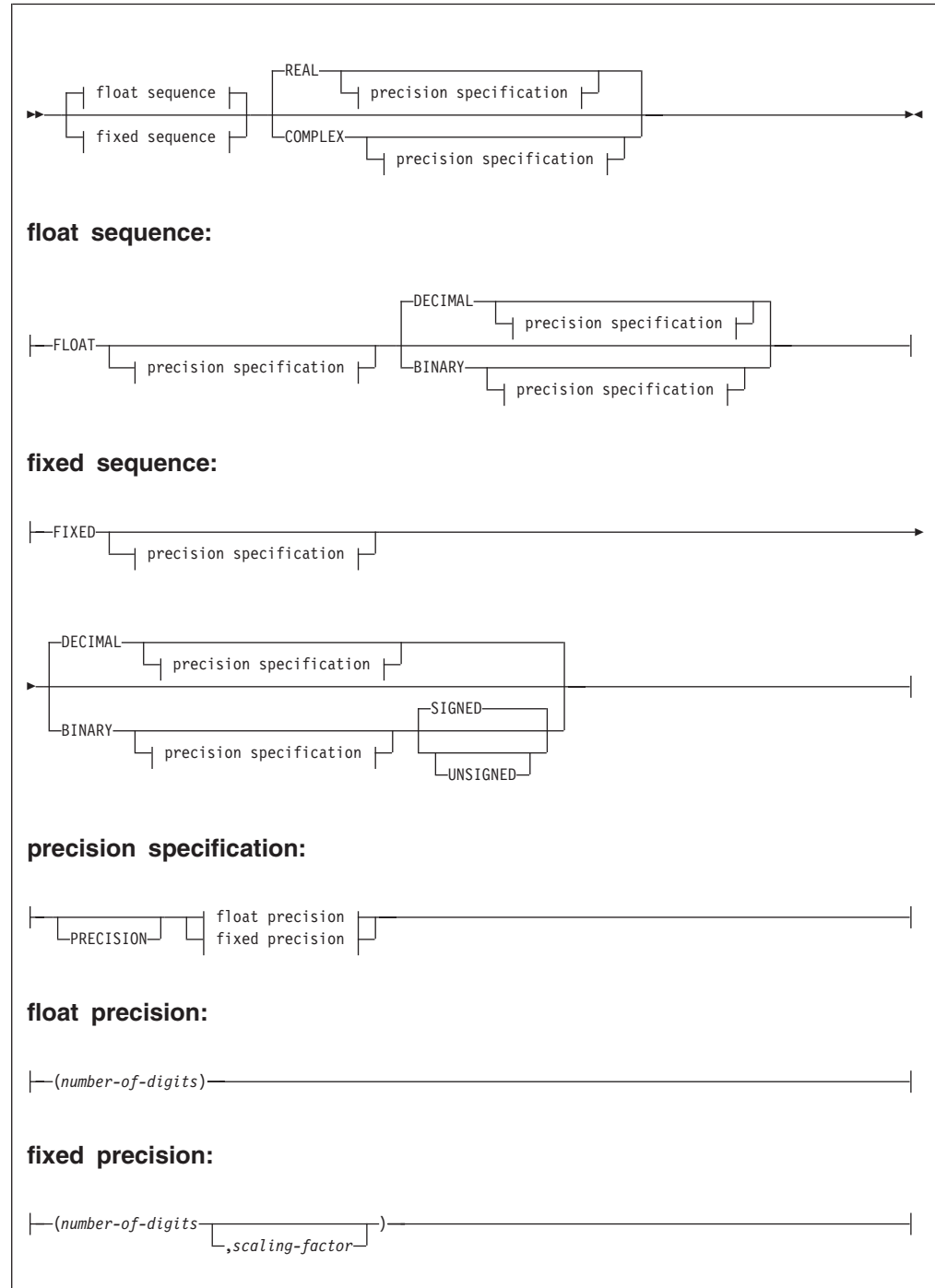


表 9. コード化算術データ属性の省略形

属性	省略形
BINARY	BIN
COMPLEX	CPLX
DECIMAL	DEC
PRECISION	PREC

BINARY 属性と DECIMAL 属性

コード化算術データ項目の基数 は、10 進数または 2 進数のいずれかです。DECIMAL はデフォルトです。

FIXED 属性と FLOAT 属性

コード化算術データ項目のスケール は、固定小数点または浮動小数点のいずれかです。

固定小数点データ項目は有理数であり、その 10 進小数点または 2 進小数点の位置は、定数のときは小数点として示され、変数のときは宣言済みの位取り係数で指定されます。

浮動小数点データ項目は、小数部分と指数部分のフォーマットの有理数です。

PRECISION 属性

コード化算術データ項目の精度 には、桁数と位取り係数が含まれます。(位取り係数は、固定小数点項目にのみ使用されます。)

桁数

何桁まで値を持つことができるかを指定する整数です。固定小数点項目の場合、整数は有効数字の数になります。浮動小数点の場合、整数は小数点を排除して保持される有効数字の数になります (小数点の位置によって異なる)。

位取り係数

数値の最右端の桁に関して、10 進または 2 進小数点の想定する位置を指定する整数です。符号は付けても付けなくてもかまいません。位取り係数を指定しない場合、デフォルトは 0 になります。

精度属性の指定を表すとき、通常は (p,q) と書かれています。ただし、 p は桁数を表し、 q は位取り係数を表します。

負の位取り係数 (-q) を指定すると、実際の最右端の桁から右方向へ q 桁ずれた位置に小数点がある整数を表します。桁数よりも大きい正の位取り係数 (q) を指定すると、実際の最右端の桁から左方向に q 桁ずれた位置に小数点がある小数を表します。いずれの場合も、間にゼロがあると想定されますが、それらは保管されません。実際に保管されるのは、指定された桁数だけです。

PRECISION を省略する場合は、精度属性を同じ属性分配レベルのスケール (FIXED または FLOAT)、基数 (DECIMAL または BINARY)、またはモード (REAL または COMPLEX) の属性のすぐあとに書き、その間にほかの属性を指定してはなりません。

省略しない場合には、PRECISION は、宣言内の任意の場所に置くことができます。

整数値 は、位取り係数がゼロの固定小数点値を意味します。

REAL 属性と COMPLEX 属性

算術データ項目 (コード化算術データ項目または数字データ項目) のモード が実数か複素数のいずれかです。

実数データ項目は、実数の値を表す数です。

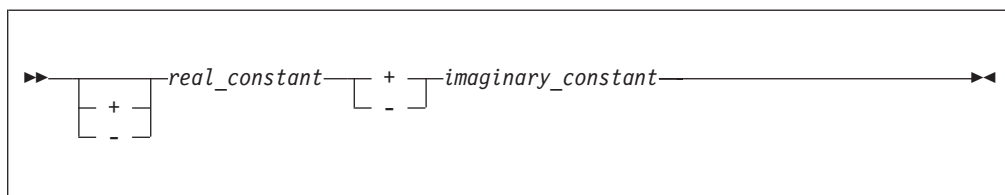
複素数データ項目は、2 つの部分 (実数部分と虚数部分) から構成されます。複素数データ項目を表す変数の場合、実数部分と虚数部分の基数、スケール、および精度は同じです。

算術変数は REAL にデフォルト設定されます。

虚数の定数は、任意のタイプの実定数のすぐ後に文字 I を付けて書きます。以下に例を示します。

```
27I
3.968E10I
11011.01BI
```

これらは、いずれも実数部分がゼロであると見なされます。実数部分がゼロ以外の複合値は、次の構文を使った式で表します。



例えば、38+27I

下記の y および z という 2 つの複素数が与えられたとき、

```
y = complex(A,B);
z = complex(C,D);
```

$x=y/z$ は、次のように計算されます。

```
real(x) = (A*C + B*D)/(C**2 + D**2);
imag(x) = (B*C - A*D)/(C**2 + D**2);
```

$x=y*z$ は次のように計算されます。

```
real(x) = A*C - B*D;
imag(x) = B*C + A*D;
```

これらの計算の途中で計算条件が起こることもあります。

SIGNED 属性と UNSIGNED 属性

SIGNED 属性と UNSIGNED 属性は、FIXED BINARY 変数と ORDINAL 変数にのみ使用できます。SIGNED は、変数が負の値と想定できることを示します。

UNSIGNED は、変数が負の値と想定できることを示します。

UNSIGNED は、固定小数点演算のセマンティクスに次のような影響を与えます。

- IAND、IEOR、INOT および IOR のすべてのオペランドが UNSIGNED だと、その結果は UNSIGNED です。
- ISLL と ISRL の第 1 オペランドが UNSIGNED だと、その結果は UNSIGNED です。
- REAL または IMAG のオペランドが UNSIGNED だと、その結果は UNSIGNED です。

RULES(ANS) コンパイラー・オプションを使用している場合、UNSIGNED は、固定小数点演算のセマンティクスに次のような影響を与えます。

- 加算、乗算または除算の両方のオペランドが UNSIGNED だと、その結果は UNSIGNED です。
- MAX または MIN のすべてのオペランドが UNSIGNED だと、その結果は UNSIGNED です。
- REM または MOD のすべてのオペランドが UNSIGNED だと、その結果は UNSIGNED です。

表 10 および表 11 に示されているように、SIGNED 属性と UNSIGNED 属性はストレージ所要量に影響を及ぼします。

表 10. FIXED BINARY SIGNED データ・ストレージ所要量

精度	ストレージ占有量 (バイト)
精度 ≤ 7	1
$7 < \text{精度} \leq 15$	2
$15 < \text{精度} \leq 31$	4
$31 < \text{精度} \leq 63$	8

表 11. FIXED BINARY UNSIGNED データ・ストレージ所要量

精度	ストレージ占有量 (バイト)
精度 ≤ 8	1
$8 < \text{精度} \leq 16$	2
$16 < \text{精度} \leq 32$	4
$32 < \text{精度} \leq 64$	8

2 進固定小数点データ

2 進固定小数点変数を宣言するデータ属性は、BINARY および FIXED です。以下に例を示します。

```
declare Factor binary fixed (20,2);
```

上記の Factor は、20 個のデータ・ビットの 2 進固定小数点データを表す変数として宣言され、20 桁のうち 2 桁は 2 進小数点の右側のビット数です。

符号付きおよび符号なしの固定 2 進データが占めるストレージについては、36 ページの『SIGNED 属性と UNSIGNED 属性』を参照してください。

宣言した数のデータ・ビットは、低位桁に入りますが、高位桁の余分な桁位置も、そのデータ項目を使って行われるすべての演算の対象となります。算術オーバーフローがこの余分な高位の桁位置に及んだかどうかを検出されるのは、SIZE 条件が割り込み可能になっている場合だけです。

2 進固定小数点定数

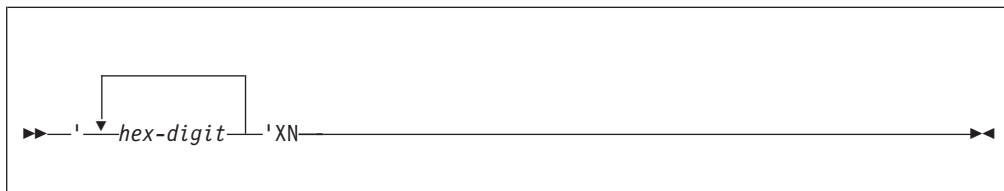
2 進固定小数点定数

2 進固定小数点定数は、オプションの 2 進小数点を持つ 1 つ以上のビット、直後に文字 B によって構成されます。2 進固定小数点定数の精度は (p,q) です。ここで p は定数内のデータ・ビットの合計数で、q は 2 進小数点の右のビット数です。以下に例を示します。

定数	精度
1011_0B	(5,0)
1111_1B	(5,0)
101B	(3,0)
1011.111B	(7,3)

XN (16 進) 2 進固定小数点定数

XN 定数は、16 進表記の SIGNED REAL FIXED BINARY 定数を表します。定数が 8 桁以下の場合、その精度は 31 です。9 桁以上の場合には精度は 63 です。



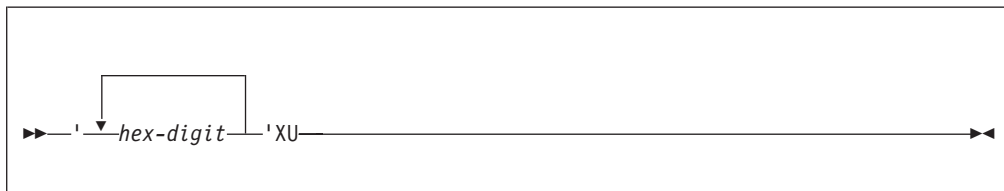
次の例について考えてみます。

```
'100'XN          /* same as '00000100'XN with value 256    */
'8000'XN          /* same as '00008000'XN with value 32,768  */
'FFFF'XN          /* same as '0000FFFF'XN with value 65,535  */
"ffff_ffff"XN    /* is the value -1                                */
```

必要に応じて、XN 定数の 16 進数値は、指定された値の左側に 16 進のゼロが埋め込まれます。

XU (16 進) 2 進固定小数点定数

XU 定数は、16 進表記の UNSIGNED REAL FIXED BINARY 定数を表します。定数が 8 桁以下の場合、その精度は 32 です。9 桁以上の場合には精度は 64 です。



次の例について考えてみます。

```
'100'XU          /* same as '00000100'XU with value 256    */
'8000'XU          /* same as '00008000'XU with value 32,768  */
'FFFF'XU          /* same as '0000FFFF'XU with value 65,535  */
"ffff_ffff"XU    /* is the value 2**32-1                    */
```

必要に応じて、XU 定数の 16 進数値は、指定された値の左側に 16 進のゼロが埋め込まれます。

10 進固定小数点データ

10 進固定小数点変数を宣言する場合のデータ属性は、DECIMAL および FIXED です。以下に例を示します。

```
declare A fixed decimal (5,4);
```

この宣言は、A が 5 桁の 10 進固定小数点データを表すように指定しています。5 桁のうちの 4 桁は小数点の右側にきます。

次に 2 つの例をあげます。

```
declare B fixed (7,0) decimal;
declare B fixed decimal(7);
```

両方とも、B は 7 桁の整数を示します。

さらに、

```
declare C fixed (7,-2) decimal;
```

これは、C が位取り係数の -2 を示します。つまり、C は少なくとも 7 桁を保持し、 -9999999×100 から 9999999×100 まで (増分は 100) の範囲を意味します。

さらに、

```
declare D decimal fixed real(3,2);
```

この場合は、D が少なくとも 3 桁 (そのうちの 2 桁が小数部分) の固定小数点項目を表すことを指定しています。

10 進固定小数点データは、1 バイトに 2 桁ずつ保管され、最右端バイトの右 4 ビットに符号が保管されます。したがって、10 進固定小数点データ項目は、変数の宣言で桁数 p を偶数として指定しても、必ず奇数として保管されます。

偶数の桁数を宣言すると、最高位の桁数に余分な 1 桁分が生じます。この桁位置は、そのデータ項目を使って行われるすべての演算 (例えば、比較演算) の対象となります。余分な最高位の桁位置がゼロ以外の場合は、算術演算または割り当てでデータを使用すると、例外が発生することがあります。算術オーバーフローまたは割り当てが、この余分な最高位の桁位置にまで及んだかどうかを検出されるのは、SIZE 条件が使用可能になっている場合だけです。

10 進固定小数点定数

10 進固定小数点定数は、1 桁以上の 10 進数で構成されます。小数点はあってもなくても構いません。10 進固定小数点定数の精度は (p,q) であり、 p はその定数の全桁数で、 q は、小数点の右側に指定された桁数です。以下に例を示します。

定数	精度
3.1416	(5,4)
455.3	(4,1)
732	(3,0)
1_200_300	(7,0)
003	(3,0)
5280	(4,0)
.0012	(4,4)

2 進浮動小数点データ

2 進浮動小数点データ

2 進浮動小数点の変数を宣言するデータ属性は、BINARY および FLOAT です。以下に例を示します。

```
declare S binary float (16);
```

S は、2 進数が 16 桁の精度を持つ 2 進浮動小数点データを表します。

指数は 5 桁の 10 進数を超えることはできません。宣言した精度が (21) 以下であれば、短精度の浮動小数点フォーマットで保管されます。宣言した精度が (21) より大きく、(53) 以下であれば、長精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。宣言した精度が (53) より大きい場合には、拡張精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。

2 進浮動小数点定数

2 進浮動小数点定数は、仮数、指数、文字 B の順序で表記します。仮数は、2 進固定小数点定数です。指数は、英字の E、S、D、または Q のあとに 10 進整数 (符号はあってもなくてもよい) を書き、これで 2 の累乗を表します。E を使用する定数は、精度 (p) があります。p は小数部の 2 進数の数字です。S、D および Q を使用する定数には、必ず最大単精度、最大倍精度、および最大拡張精度があります。以下に例を示します。

定数	精度
101101E5B	(6)
101.101E2B	(6)
11101E-28B	(5)
11.01E+42B	(4)
1S0b	(21)
1D0b	(53)
1Q0b	(64)(Windows)
1Q0b	(106)(AIX)
1Q0b	(109)(z/OS)

10 進浮動小数点データ

10 進浮動小数点の変数を宣言するデータ属性は、DECIMAL および FLOAT です。以下に例を示します。

```
declare Light_years decimal float(5);
```

Light_years の値は、5 桁の 10 進数を持つ浮動小数点データを表しています。

IEEE 10 進浮動小数点データの場合、

- 宣言した精度が 7 以下であれば、短精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。
- 宣言した精度が 7 より大きく、16 以下であれば、長精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。
- 宣言した精度が 16 より大きい場合には、拡張精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。

その他すべての 10 進浮動小数点データの場合、

- 宣言した精度が 6 以下であれば、短精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。
- 宣言した精度が 6 より大きく、16 以下であれば、長精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。
- 宣言した精度が 16 より大きい場合には、拡張精度の浮動小数点フォーマットが使用されます。

10 進浮動小数点定数

10 進浮動小数点定数は、小数部のあとに指数が続きます。小数部は、10 進固定小数点定数になります。指数は、E、S、D、または Q のあとに、4 桁以下の 10 進整数 (符号はあってもなくてもよい) を書き、これで 10 の累乗を表します。E を使用する定数には、精度 (p) があり、この p は、小数部の桁数になります。S、D および Q を使用する定数は、常に単精度、倍精度、および拡張精度を表します。以下に例を示します。

定数	精度
15E-23	(2)
15E23	(2)
4E-3	(1)
1.96E+07	(3)
438E0	(3)
3_141_593E-6	(7)
.003_141_593E3	(9)
1s0	(6)
1d0	(16)
1q0	(18)(Windows)
1q0	(32)(AIX)
1q0	(33)(z/OS)

最後の 5 つの例は、(異なる精度を持っていますが) 同じ値を示しています。

IEEE 10 進浮動小数点 (DFP) の場合、10 進浮動小数点リテラルが、必要に応じてゼロ以外の数字が小数点の後に続かないように右側ユニット表示に変換された場合、つまり、指数が調整された場合に (例えば、3.1415E0 を 31415E-4 として表示する場合に行われるように)、リテラルによって与えられる精度の正常数の範囲にある指数を持っている必要があります。これらの境界は、MINEXP-1 および MAXEXP-PLACES の値によって与えられます。特に、次が保持される必要があります。

- 短精度の浮動小数点の場合、 $-95 \leq \text{指数} \leq 90$
- 長精度の浮動小数点の場合、 $-383 \leq \text{指数} \leq 369$
- 拡張精度の浮動小数点の場合、 $-6143 \leq \text{指数} \leq 6111$

したがって、IEEE 10 進浮動小数点 (DFP) の場合、最も大きい正の短精度の浮動小数点リテラルは 9999999E90 (または .9999999E97) で、最も小さい正のゼロでない短精度の 10 進浮動小数点は 1E-95 になります。

最も大きい正の浮動小数点値をリテラルとして指定したい場合は、代わりに HUGE 組み込み関数を使用するようにしてください。同様に最も小さい非ゼロの正の値を指定する場合は、TINY 組み込み関数を使用するようにしてください。

ストリング・データとその属性

ストリングに関する一般情報については、28 ページの『データ・タイプとその属性』を参照してください。

BIT 属性、CHARACTER 属性、GRAPHIC 属性、および WIDECHAR 属性

BIT 属性は、ビットの変数を指定します。

CHARACTER 属性は、文字変数を指定します。ストリングは、PICTURE 属性を使用して宣言することができます。

WIDECHAR 属性は、UTF-16 データを保持するワイド文字変数を指定します。

GRAPHIC 属性は、グラフィック変数を指定します。

BIT 属性、CHARACTER 属性、GRAPHIC 属性、および WIDECHAR の構文は、次のとおりです。

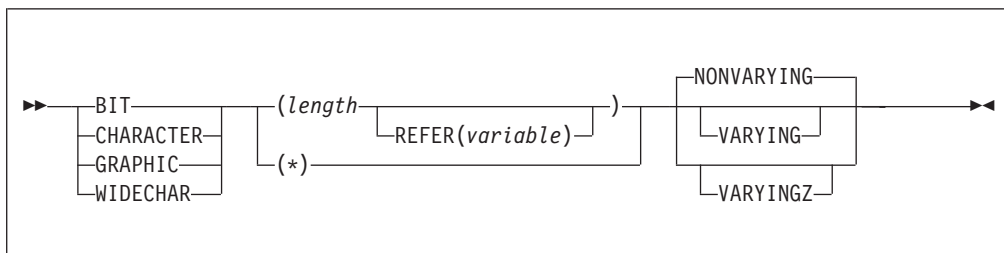


表 12. ストリング・データ属性の省略形

属性	省略形
CHARACTER	CHAR
GRAPHIC	G
WIDECHAR	WCHAR
NONVARYING	NONVAR
VARYING	VAR
VARYINGZ	VARZ

長さ

NONVARYING ストリングの長さ、あるいは VARYING ストリングまたは VARYINGZ ストリングの最大長を指定します。長さは、場合に応じて、ビット、文字、ワイド文字、またはグラフィック (DBCS 文字) 単位になります。

長さは式またはアスタリスクとして指定できます。長さが指定されていない場合には、デフォルトは 1 となります。名前のついた定数の場合には、長さは式の値の長さで判別します。

パラメーターの場合は、パラメーターが CONTROLLED であるときだけ式は有効です。パラメーターにアスタリスクで指定すると、渡される引数から長さが取られます。

長さを式で指定すると、変数にストレージが割り振られるときにその式が計算され、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。変換後の値は正でなければなりません。

STATIC データの場合には、式は、制限付きの式でなければなりません。

BASED データの場合には、ストリングが構造体または共用体のメンバーであり、かつ REFER オプションが使用されていない限り、長さは制限付き式でなければなりません。

REFER

REFER オプションに関しては、269 ページの『REFER オプション (自己定義データ)』を参照してください。

User を長さ 15 の文字データを表すことができる変数として宣言するステートメントを以下に示します。

```
declare User character (15);
```

以下の例は、ビット変数の宣言を示します。

```
declare Symptoms bit (64);
```

VARYING 属性、VARYINGZ 属性、NONVARYING 属性

VARYING 属性と VARYINGZ 属性は、変数の長さが 0 から宣言済み最大長までの範囲の可変長であることを指定します。NONVARYING は、宣言した長さと同じ長さを常に持つ変数を指定します。

VARYING ストリングに割り振られるストレージは、宣言した長さよりも 2 バイト長くなります。最左端の 2 バイトには、ストリングの現在長が入ります。

VARYINGZ 文字ストリングに割り振られたストレージは、宣言した長さよりも 1 バイト長くなります。ストリングの現在長は、それに割り振られたストレージの最初の '00'x の前にあるバイト数に等しくなります。

VARYINGZ GRAPHIC ストリングに割り振られるストレージは、宣言した長さよりも 2 バイト長くなります。ストリングの現在長は、それに割り振られたストレージの最初の '0000'gx の前にあるバイト数に等しくなります。

VARYINGZ WIDECHAR ストリングに割り振られるストレージは、宣言した長さよりも 2 バイト長くなります。ストリングの現在長は、それに割り振られたストレージの最初の '0000'wx の前にあるバイト数に等しくなります。

VARYINGZ 属性は BIT ストリングには使用できません。

下記の DECLARE ステートメントで、User と Zuser は、最大長が 15 の可変長文字データを表しています。ただし、User とは異なり、Zuser は NULL 終止です。割り振られたストレージは、User の場合は 17 バイトであり、Zuser の場合は 16 バイトです。

```
declare User character (15) varying;  
declare Zuser character (15) varyingz;
```

User と Zuser の長さは、それぞれの時点でそれぞれに割り当てられるデータ項目の長さとなります。MAXLENGTH 組み込み関数および LENGTH 組み込み関数を使用すると、それぞれ宣言した長さと現在長を判別することができます。

VARYING 属性、VARYINGZ 属性、NONVARYING 属性

VARYINGZ ストリング中の NULL 終止符は、ストリングの長さを判別する場合を除いては、比較または割り当てには使用されません。したがって、下記の宣言によるストリングの内部 16 進表示は同じですが、比較すれば等しくはなりません。

```
declare A char(4) nonvarying init( ('abc' || '00'x) );
declare B char(3) varyingz   init( 'abc' );
```

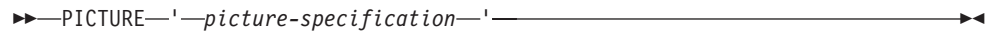
それとは反対に、次の例では、Z と C は等しいものとして比較されます。

```
decl Z char(3) nonvarying init('abc');
decl C char(3) varyingz   init('abc');
```

VARYING と VARYINGZ ストリングは、アスタリスクの長さを持つパラメーターとして受け渡しできます。それらが NONASSIGNABLE 属性を持っている場合、記述子なしで渡すことができます。

PICTURE 属性

PICTURE 属性は、ピクチャー文字とデータ項目内の各文字位置に関連付けることにより、文字データ項目の特性を指定します。ピクチャー文字は、その位置を占有できる文字のカテゴリーを指定します。



►►—PICTURE—'—*picture-specification*—'—►►

省略形 PIC

picture-specification

文字データ項目または数字データ項目のいずれかを記述します。有効な文字については、362 ページの『文字データ用のピクチャー文字』または 363 ページの『数字データ用のピクチャー文字』を参照してください。

数字ピクチャー指定は、定数の表示によって指定する場合と同じように、数字データの算術属性を指定します。

数字データは、算術値を持ちますが、文字フォーマットで保管されます。数字データは、算術演算が行われる前にコード化算術データに変換されます。

数字データ項目の基数は、10 進数です。そのスケールは、固定小数点または浮動小数点のいずれかです (K または E というピクチャー文字は浮動小数点スケールを表します)。数字データ項目の精度は、有効数字の桁数です (浮動小数点については指数を除きます)。有効数字は、桁位置および条件式のピクチャー文字で指定されます。数字データ項目の位取り係数は、V または F のピクチャー文字、もしくは V と F の組み合わせに基づいて決められます。

10 進データだけは、ピクチャー文字で表示することができます。複素数データを宣言するには、固定小数点または浮動小数点データ項目を記述する 1 つのピクチャー指定と共に COMPLEX 属性を指定します。

数字データの詳細については、50 ページの『数字データ』を参照してください。

文字データ

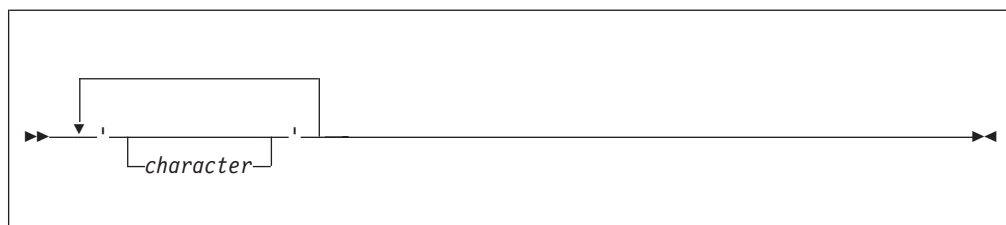
CHARACTER 属性のついたデータには、文字セットによってサポートされる 256 個のどの文字も入れることができます。 PICTURE 属性のついたデータは、ピクチャー指定文字と一致する文字を持たなければなりません。それぞれの文字は 1 バイトのストレージを占有します。

文字定数

文字定数は、連続した一連の文字を単一引用符または二重引用符で囲んだものです。

定数内に含まれる引用符は、28 ページの『引用符の使用』でリストされる規則に従います。文字定数の長さは、開始引用符と閉じ引用符の間にある文字の個数です。ただし、2 つの引用符は、1 文字として数えられます。

ヌル文字定数とは、間にブランクを入れずに引用符を 2 つ書いたものです。文字定数の構文は、以下のとおりです。



文字定数の例は以下のとおりです。

定数	長さ
'Shakespeare' 's "Hamlet"'	22
"Shakespeare's " "Hamlet" ""	22
"Page 5"	6
'/* This is a comment */'	27
''	0
(2)'Walla '	12

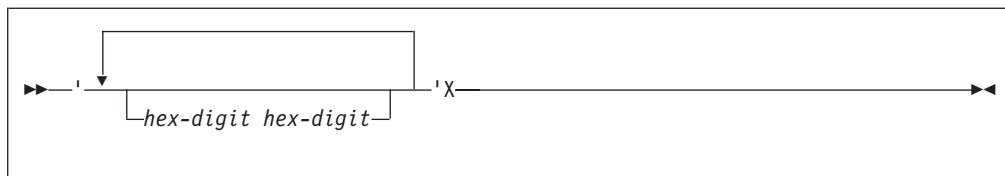
最後の例の、括弧内の数はストリング反復因数であり、そのあとにある一連の文字を指定回数だけ反復することを表します。この例は、定数 "Walla Walla " と同等です。ストリング反復因数は、定数であり、括弧で囲まれなければなりません。

X (16 進数) 文字定数

X という文字定数は、単一または二重引用符で囲まれている 16 進数が偶数個連続した列のことです。そのすぐ後ろに X という英字が続きます。各組みの 16 進数は、1 つの文字を表します。

X 定数の長さは、指定された 16 進数の数の半分になります。

ヌルの X 定数は 2 つの引用符として書かれ、そのあとに接尾部 X が続きます。



X 定数の例は以下のとおりです。

定数	長さ
"0d0A"x	2
'X	0

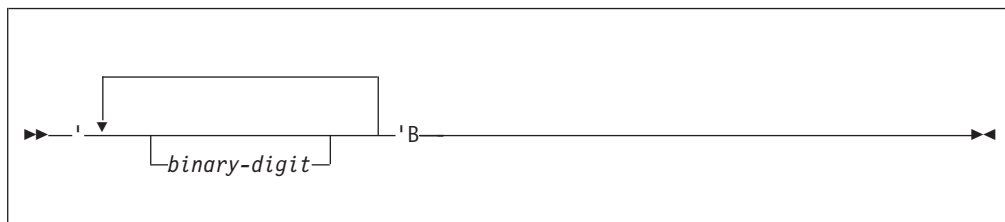
注: X 定数を使用すると、プログラムの移植性が制限されることがあります。

ビット・データ

BIT 属性を持つデータでは、ビット単位でストレージの操作を行うことができます。ストレージの 1 バイトは 8 ビットで構成されます。

ビット定数

ビット定数は、単一または二重引用符で囲まれた一連の 2 進数の列であり、そのすぐ後ろに B が続きます。



ヌルのビット定数は、2 つの引用符で書かれ、そのあとに B が続きます。

ビット定数の例を示します。

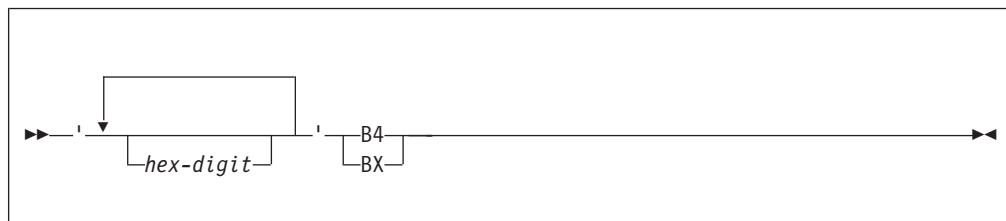
定数	長さ
'1'B	1
"1100_1010_11"B	10
(64)'0'B	64
' 'B	0
'0'B	1

3 番目の例の括弧内の数字はストリング反復因数であり、指定した回数だけ後続のビットを反復することを示します。上記の例では、64 個のゼロのビットからなるストリングになります。

(ビット・データから文字データへの変換、および文字データからビット・データへの変換に関する説明については、90 ページの『ソースからターゲットへの変換規則』を参照してください。)

B4 (16 進) ビット定数

B4 ビット定数は、単一引用符または二重引用符で囲まれた一連の 16 進数の列であり、そのすぐあとに B4 が続きます。各 16 進数は、4 つのビットを表します。BX は、B4 の同義語です。



B4 定数の例をいくつか示します。

'CA'B4	は	"1100_1010"B と同等
'80'B4	は	'1000_0000'B と同等
'1'B4	は	'0001'B と同等
(2)'F'B4	は	'1111_1111'B と同等
(2)'F'B4	は	'FF'BX と同等
'B4	は	"B と同等

B3 (8 進) ビット定数

B3 ビット定数は、単一引用符または二重引用符で囲まれた一連の 8 進数の列であり、そのすぐ後に B3 が続きます。各 8 進数は、3 つのビットを表します。

B3 定数の例をいくつか示します。

'22'B3	は	"010_010"B と同等
'40'B3	は	'100_000'B と同等
'1'B3	は	'001'B と同等
(2)'7'B3	は	'111_111'B と同等
'B3	は	"B と同等

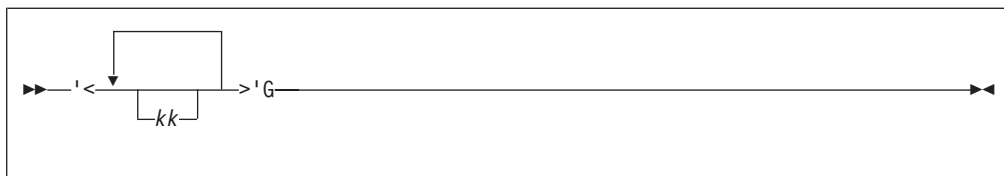
グラフィック・データ

GRAPHIC データには、すべての DBCS 文字を入れることができます。各 DBCS 文字は、2 バイトのストレージを占有します。

グラフィック定数

グラフィック定数は、単一引用符または二重引用符で囲まれた一連の DBCS 文字の列です。グラフィック定数は、定数内の各 DBCS 文字ごとに最大 2 バイトのストレージを使用します。

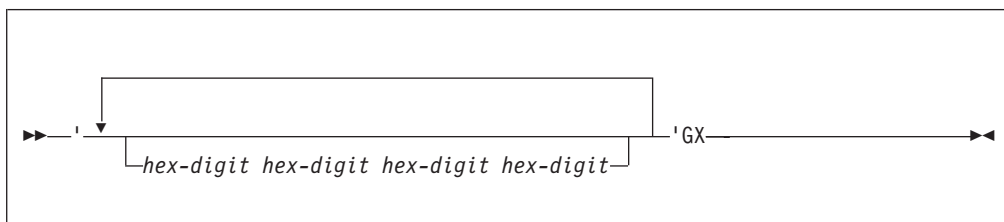
G リテラルは、前後を DBCS 引用符で囲んで指定でき、またその場合は G 全体を DBCS で指定することもできます。



GRAPHIC コンパイラー・オプションは、受け入れられるグラフィック定数に対して有効でなければなりません。GRAPHIC ENVIRONMENT オプションがグラフィック定数を含む STREAM 入出力ファイルに指定されていない場合には、CONVERSION 条件が生じます。

GX (16 進) グラフィック定数

GX グラフィック定数は、単一引用符または二重引用符で囲まれた一連の 16 進数の列 (4 の倍数) であり、そのすぐあとに GX が続きます。4 桁の 16 進の各グループは、1 つの DBCS 文字を表します。



例:

'81a1'gx 1 個の DBCS 文字を表します。

""gx ''g と同じです。

注: GX を使用すると、プログラムの移植性が制限されることがあります。

混合文字データ

混合文字データには、SBCS および DBCS 文字を入れることができます。混合データは、CHARACTER データ・タイプによって表され、CHARACTER データの処理規則にしたがいます。

OPTIONS 属性の CHARGRAPHIC オプション、および MPSTR 組み込み関数は、混合データ処理を援助するために使用することができます。CHARGRAPHIC についての詳細は、146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。MPSTR については、580 ページの『MPSTR』を参照してください。

M (混合) 文字定数

M 定数は、引用符 (単一または二重) で囲まれた DBCS または SBCS 文字 (あるいはその両方) の連続したシーケンスであり、そのすぐ後に M という英字が続きます。定数に含まれる引用符は、28 ページの『引用符の使用』にリストされている規則に従います。定数 M の長さは、引用符の間にある SBCS 文字の数です。ただし、2 つの単一引用符は 1 文字として計算され、ストリング内の DBCS 文字の数を 2 倍にして計算します。

ヌルの M 定数は、2 つの引用符で書かれ、そのあとに M が書かれます。



混合文字定数の例は、以下のとおりです。

定数	長さ
'IBM<kk>'M	z/OS では 7 バイト、その他のプラットフォームでは 5 バイト
'<.I.B.M>'M	z/OS では 8 バイト、その他のプラットフォームでは 6 バイト
"M	0

GRAPHIC コンパイラー・オプションは、受け入れられる混合定数に有効でなければなりません。GRAPHIC ENVIRONMENT オプションは、混合定数を持つ STREAM 入出力ファイルに指定されていない場合は、CONVERSION 条件が生じます。

z/OS では、以下の追加の規則が混合定数に適用されます。

- シフトアウト/シフトインのペアは合致しなければなりません。ペアをネストすることはできません。
- DBCS 部分には、どちらのバイトにも '0E'x または '0F'x が含まれていてはなりません。
- 文字部分には、シフト・コードとして特に意図されていない限り、値 '0E'x または '0F'x が含まれていてはなりません。

注: シフト・コードは z/OS でのみ使用されるため、混合データや M 定数を使用するとプログラムの移植性が制限されることもあります。

ワイド文字データ

WIDECHAR データには、すべての UTF-16 文字を入れることができます。各ワイド文字は、2 バイトのストレージを占有します。

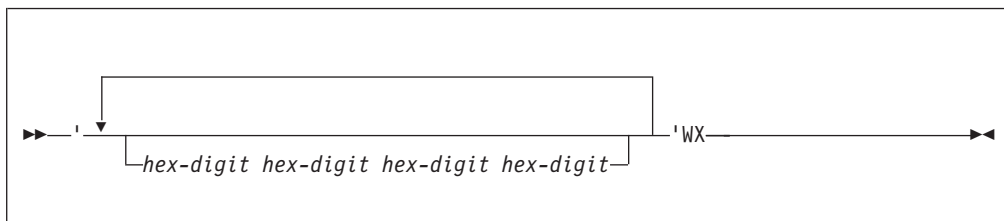
以下については、まだサポートされていません。

- ソース・ファイル内の WIDECHAR 文字
- W スtring定数
- ストリーム入出力内の WIDECHAR 式の使用
- レコード入出力での WIDECHAR からの暗黙の型変換または WIDECHAR への暗黙の型変換
- レコード入出力での暗黙の endianness フラグ

WIDECHAR ファイルを作成する場合は、ファイルの最初の 2 バイトとして endianness フラグ ('fe_ffwx) を書き込んでください。

WX (16 進) ワイド文字定数

WX ワイド文字定数は、単一引用符または二重引用符で囲まれた一連の 16 進数の列 (4 の倍数) であり、そのすぐあとに WX が続きます。4 桁の 16 進の各グループは、1 つの UTF-16 文字を表します。



例:

'0031'wx 1 個の UTF-16 文字を表します。

'''wX ''w と同じです。

注: WX 定数は、ビッグ・エンディアン・フォーマットで指定する必要があります (プログラムをリトル・エンディアンフォーマットで実行する場合でも同様です)。このため、例えば文字 'I' のワイド文字値は、常に '0031'wx ('3100'wx でなく) として指定する必要があります。

注: WX を使用すると、プログラムの移植性が制限されることがあります。

数字データ

数字データ項目は、数字ピクチャー指定と PICTURE 属性を使用して宣言された変数の値です。このデータ項目は、10 進固定小数点の値または 10 進浮動小数点の値を文字で表記したものです。

数字ピクチャー指定は、算術値に変換できるデータだけに割り当てられる文字ストリングを表します。

以下に例を示します。

```
declare Price picture '999V99':
```

Price に割り当てられる値は、5 桁の 10 進数からなる文字ストリングで、仮想小数点は右端から 2 桁目の前であることを指定します。Price に割り当てられるデータは、この仮想小数点を基準にして、10 進固定小数点データの場合の小数点位置合わせと同じ方法で位置合わせされます。

数字データは算術属性を持ちますが、コード化算術フォーマットでは保管されません。文字ストリングとして保管されます。したがって、このデータは、10 進固定小数点フォーマットまたは 10 進浮動小数点フォーマットに変換されない限り、算術演算に使用できません。このような変換は自動的に行われますが、余分な処理時間が必要になります。

数字データはstringのように文字フォーマットで表され、コード化算術データのように小数点位置合わせが行われますが、その処理方法は、コード化算術項目またはstringのいずれとも異なります。編集文字を数字データ項目内に挿入するように指定することができ、実際にデータ項目内に保存することができます。した

がって、その項目を文字ストリングとして印刷または処理する場合には、代入演算に編集文字も含まれることになります。ただし、数字データ項目を別の数字または算術変数に割り当てる場合は、編集文字は代入演算には含まれません。割り当てられるのは、実際の数字、符号、および想定小数点の位置だけです。以下に例を示します。

```
declare Price picture '$99V.99',
        Cost character (6),
        Amount fixed decimal (6,2);
Price = 12.28;
Cost = '$12.28';
```

PRICE のピクチャー指定では、通貨記号 (\$) と小数点 (.) が編集文字です。これらの文字は、データ項目内の文字として保管されます。これは、算術値の一部ではありません。両方の代入ステートメントが実行されると、Price と Cost の実際の内部文字表記は同じであると見なされることがあります。印刷される場合は、全く同じに印刷されます。ただし、常に同じ方法で機能するわけではありません。以下に例を示します。

```
Amount = Price;
Cost = Price;
Amount = Cost;
Price = Cost;
```

最初の 2 つの代入ステートメントが実行されると、Amount の値は 0012.28 となり、Cost の値は '\$12.28' となります。Amount への Price の割り当てにおいて、通貨記号と小数点は編集文字であり、割り当ての一部ではありません。Price の数値は、内部コード化算術フォーマットに変換されます。ただし、Price を Cost に割り当てるときは、文字ストリングへの割り当てなので、数字ピクチャー指定の編集文字も常に割り当ての対象になります。Price は文字フォーマットで保管されているので、変換は必要ありません。

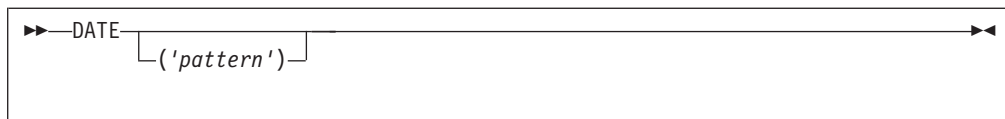
3 番目と 4 番目の代入ステートメントを実行しようとする、CONVERSION 条件が起こります。ストリング内に通貨記号があれば算術定数としては有効でなくなるため、Cost の値を Amount に割り当てることはできません。これと同じ理由で、Cost の値を Price に割り当てることもできません。数字ピクチャー指定付きで宣言した変数に割り当てることができるのは、算術タイプの値か、算術タイプに変換できる値だけです。

小数点は編集文字でもあり、文字ストリング内の実際の文字にもなりますが、算術フォーマットへの変換で CONVERSION 条件を引き起こしません。なぜなら、算術定数内に小数点があってもよいからです。正符号 (+) と負符号 (-) についても同様で、算術フォーマットに変換すると算術定数の先頭に符号が付くからです。

数字ピクチャー指定では、その他の編集文字 (ゼロ抑制文字、浮動文字、挿入文字など) を使用することができます。ピクチャー文字の詳細については、361 ページの『第 15 章 ピクチャー指定文字』を参照してください。

日付属性

2 つのオペランドが DATE 属性を持っている場合、コンパイラーは、暗黙の日付比較と変換を行います。DATE 属性は、変数 (または引数または戻り値) が日付を指定したパターンで保持することを指定します。



パターン

サポートされている日付のパターンの 1 つです。パターンを指定しない場合、デフォルトの値 `YYMMDD` になります。

DATE 属性は、以下の属性の集合の 1 つを持つ変数がある場合のみ有効です。

- CHAR(n) NONVARYING
- PIC'(n)9' REAL
- FIXED DEC(n,0) REAL

n の長さまたは精度は、 `pattern` の長さと一致しなければなりません。

RESPECT コンパイル時オプションを指定すると (詳細は「プログラミング・ガイド」を参照)、次の事柄が起こります。

- DATE 属性を重視することをコンパイラーは認識する。
- DATE 組み込み関数は、属性 DATE('YYMMDD') を持つ値を戻す。

これで、エラー・メッセージが生成されなくても、属性 `DATE('YYMMDD')` を持つ変数に `DATE()` を割り当てることができます。 `DATE()` が `DATE` 属性を持たない変数に割り当てられる場合には、必ずエラー・メッセージが生成されます。

暗黙の DATE 比較: DATE 属性を指定して宣言された 2 つの変数を比較する場合、DATE 属性は暗黙の共通化を引き起こします。1 つの変数のみが DATE 属性を持っている場合の比較には、フラグが付けられ、もう一方の被比較数は、通常同じ DATE 属性を持っている場合と同様に処理されます (適用されるいくつかの例外については、後述します)。

暗黙の共通化とは、共通の比較可能な表現に日付を変換するためにコンパイラーがコードを生成することを意味します。このプロセスでは、`WINDOW` コンパイル時オプションで指定する *window* (限定時間帯) を使用して、2 桁の年を変換します。

次のコード・フラグメントでは、`DATE` 属性を有効と見なした場合、2 番目の `DISPLAY` ステートメントにある比較は時間帯が限定されます。これは、`window` を 1900 で開始した場合、この比較が偽を戻すということです。しかし、`window` を 1950 で開始する場合、この比較は真を戻します。

```
dcl a pic'(6)9' date;  
dcl b pic'(6)9' def(a);  
dcl c pic'(6)9' date;  
dcl d pic'(6)9' def(c);  
  
b = '670101';  
d = '010101';  
  
display( b || ' < ' || d || ' ? ' );  
display( a < c );
```

日付比較は、以下の位置で発生することがあります。

- IF ステートメントと SELECT ステートメント
- WHILE 文節または UNTIL 文節
- TO 文節が原因で起こる暗黙の比較

同様のパターンを持つ日付の比較: 以下の条件化では、コンパイラーは同一のパターンを持つ日付を比較する特別なコードを何も生成しません。

- 比較演算子 `=` または `<=>` が使われている。
- パターンが、YYYY、YYYYMM、YYYYDDD、または YYYYMMDD と等価である。

異なるパターンを持つ日付の比較: 異なるパターンの日付を含む比較の場合、共通の比較可能な表現に日付を変換するために、コンパイラーはコードを生成します。変換が行われてから、コンパイラーは 2 つの値を比較します。

DATE 属性とリテラルを含む比較: 1 つの被比較数が DATE 属性を持っており、他方の被比較数がリテラルの場合に比較を行うと、コンパイラーは W レベルのメッセージを発行します。次のコンパイラーの動作は、以下に示すようにリテラルの値によって異なります。

- リテラルが有効な日付で表される場合、DATE 属性を持つ被比較数と同じ日付パターンと window を持っている場合と同様に処理されます。
- リテラルが有効な日付で表されない場合、他方の被比較数の DATE 属性は無視されます。

```

dcl start_date char(6) date;
if start_date >= '' then /* no windowing */
...
if start_date >= '851003' then /* windowed */
...

```

DATE 属性と非リテラルを含む比較: 1 つの被比較数が DATE 属性を持っており、他方の被比較数が日付でもリテラルでもない場合の比較では、コンパイラーは E レベルのメッセージを発行します。非日付値は、他方の被比較数と同じ日付パターンと window を持っている場合と同様に処理されます。

```

dcl start_date char(6) date;
dcl non_date char (6);

if start_date >= non_date then /* windowed */
...

```

暗黙の DATE 指定: 日付パターンを指定して宣言された 2 つの変数を割り当てる際に、DATE 属性は暗黙の変換の原因になることもあります。

- ソースとターゲットが、同じ DATE 属性とデータ属性を持っている場合、どちらも DATE 属性を持っていない場合と同様に、割り当てが進行します。
- ソースとターゲットが異なる DATE 属性を持っている場合、コンパイラーはソースの日付を変換するためにコードを生成してから、割り当てを行います。
- ソースは DATE 属性を持っており、ターゲットが DATE 属性を持っていない場合の割り当てでは、コンパイラーは E レベルのメッセージを発行し、DATE 属性を無視します。
- ターゲットは DATE 属性を持っており、ソースが DATE 属性を持っていない (かつ、ソースがリテラルではない) 場合の割り当てでは、コンパイラーは E レベルのメッセージを発行し、DATE 属性を無視します。
- ターゲットは DATE 属性を持っており、ソースが DATE 属性を持っていない (かつ、ソースがリテラルである) 場合の割り当てでは、コンパイラーは W レベルのメッセージを発行し、DATE 属性を無視します。

```

dcl start_date char(6) date;
start_date = '';
...

```

- ソースでは 4 桁の年を保持していて、ターゲットでは 2 桁の年を保持している場合、ソースはターゲットの window には存在しない年を保持することがあります。この場合、ERROR 条件が発生します。

```

dcl x char(6) date;
dcl y char(8) date('YYYYMMDD');

y = '20600101';

x = y; /* raises error if window is <= 1960 */

```

- DATE 属性は以下の中では、無視されます。
 - デバッガー
 - レコード入出力ステートメント中で実行される割り当て
 - ストリーム入出力ステートメント (GET DATA など) 中で実行される割り当てと変換

ウィンドウ操作ソリューションを選択しなくても、2 桁または 4 桁の年の両方を操作しなければならないコードがいくつかあることがあります。次の状況では、複数の日付パターンを使用できます。

```

dcl old_date char(6) date('YYMMDD');
dcl new_date char(8) date('YYYYMMDD');

new_date = old_date;

```

日付の診断: PL/I では、以下の場合に有効な 割り当てが起こります。

- 式が、引数として、その引数を記述したエンタリー・ポイントに渡される。
- 式が RETURN ステートメント内で使用される。

日付変数を以下のように使用すると、フラグが付けられます。

- 次のどちらかを含む (明示的または有効な) 割り当て
 - 日付から非日付
 - 非日付から日付
- 日付に適用される何らかの算術演算
- BY 文節中の日付の使用 (これは算術演算を暗黙指定する)
- 何らかの算術組み込み関数中での日付の使用
- BINARY、DECIMAL、FIXED、FLOAT、または PRECISION を除く、任意の算術組み込み関数中での日付の使用
- 組み込み関数 SUM、PROD、または POLY 中での日付の使用

上記のすべての場合にコードが生成されますが、ウィンドウ操作は起こりません。結果では、DATE 属性は無視されます。

名前付き定数

名前付き定数は、スカラーまたは構造体用に宣言できます。

スカラー ID として、名前付き定数は、他のデータ属性と共に VALUE 属性を使用して宣言されます。名前に対するすべての参照は、該当する定数への参照として論理的に処理されますが、属性の完全セットは明示的に宣言されるか、デフォルトが使用されるかのいずれかです。

VALUE 属性がリーフ要素で指定され、すべての構造体要素のメンバーに対する参照があいまいでない場合、構造体では名前付き定数の名前空間を定義できます。VALUE 属性を持つ構造体が以下の条件をすべて満たしていれば、その構造体の要素を指定できます。

- 構造体のすべてのリーフ要素に VALUE 属性がある。
- 構造体に配列または共用体が含まれていない。
- 構造体に AUTOMATIC などのストレージ属性がない。

注: 名前付き定数を使用すると、名前が付いていない場合とは影響が異なってくることがあります。名前付き定数についての属性は、明示およびデフォルト属性を含む宣言から採用されます。名前の付いていない定数についての属性は、定数の形、書式、およびサイズから推論されます。ストリング・データについては、長さが指定されない場合、またはアスタリスクを使用して指定されている場合、その長さは制限付き式の長さから判別します。

名前付き定数は、アプリケーション・プログラム内で使用するためにより正確でなければなりません。また、それによって、より予測しやすい結果が生じることになります。例えば、名前が付いた定数 Unit を FIXED BINARY VALUE(1) として定義すると、FIXED BINARY(15) VALUE(1) という属性を持ちます。単に数字の 1 を使用すると、その属性は FIXED DECIMAL(1,0) になります。起こりうるその他の違いについては、56 ページの図 1 を参照してください。

また、名前付き定数により、アプリケーションのパラメーターを設定することができます。この結果、デバッグと保守が容易になります。

名前付き定数は、算術データ、ストリング・データとして、およびポインターやオフセットとして宣言することができます。算術データとストリング・データ、ならびにそれらの属性については、それぞれ 42 ページの『ストリング・データとその属性』と 34 ページの『コード化算術データとその属性』を参照してください。名前付き定数は、使用する前に宣言しなければなりません。

VALUE 属性:

▶▶—VALUE(*restricted-expression*)——▶▶

restricted expression

式は、計算結果がスカラー値にならなければなりません。制限付きの式に関する詳細については、83 ページの『制限付き式』を参照してください。

名前付き定数の例: 56 ページの図 1 では、名前付き定数、ならびに名前付き定数と名前の付いていない定数の間に生じる属性や精度の差を示しています。

名前付き定数は、定数が必要なときはいつでも使用することができます。名前付き定数を、プログラムのあとのほうに出てくる制限付き式の中で使用して、独立定数の計算を行うこともできます。

```

Dc1 A4 value(148) fixed bin,
    C4 value(261) fixed bin,
    Whole value(800) fixed bin;
Dc1 Notes (4) static,
    init(a4, (Whole/4), /* 148, 200 */
        c4, (Whole*2)); /* 261, 1600 */

/* note that "Head" gets length equal to length of VALUE */

Dc1 Head char VALUE('Feel the Power of PL/I'); /* char(22) */
Dc1 Headsize fixed bin value(length(Head)); /* 22 */
Dc1 1 Head1 static,
    2 * char(Headsize) initial(Head), /* char(22) */
    2 * char(20) init(''),
    2 * char(5) init('Page '),
    2 Page_number pic 'zz9',
    2 * char(0);
Dc1 TwoHeads char(2*Headsize); /* char(44) */
Dc1 Page0 picture 'zz9' value(0);
Dc1 MyNullPtr ptr value(ptrvalue('ffff_ffff'xn));

/* Differences in attributes/results of
   named and unnamed constants */

Dc1 Pi float bin value (3.1416); /* is FLOAT BINARY(21) but ... */
3.1416 /* is FIXED DECIMAL(5,4) */

Dc1 Unit fixed bin value(1); /* is FIXED BINARY(15) but ... */
1 /* is FIXED DECIMAL(1,0) */
1.0 /* is FIXED DECIMAL(2,1) */
1B /* is FIXED BINARY(1) */
0000_0000_0000_001B /* is FIXED BINARY(15) */

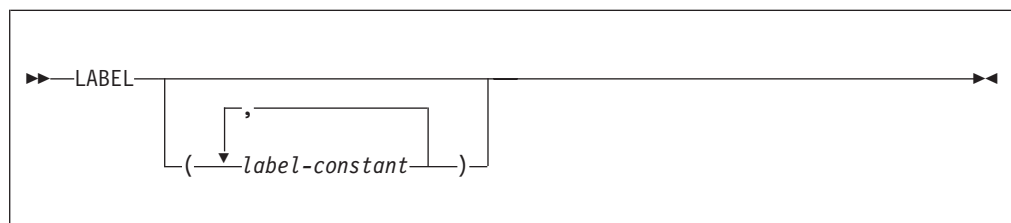
Dc1 Title char(20) value('SCIDS'); /* is CHAR(20) but ... */
Dc1 Title2 char value('SCIDS'); /* is CHAR(5) */
'SCIDS' /* is CHAR(5) */

```

図 1. 名前付き定数

プログラム制御のデータ・タイプとその属性: この節では、プログラム制御データとそれに関連する属性を説明しています。プログラム制御データは、プログラムの実行を制御する値を指定するのに使います。

ラベル・データと LABEL 属性: ラベル とは、ラベル定数またはラベル変数の値です。



ラベル定数のリストが与えられる場合、変数はリストに含まれる定数を常にその値として持つ必要があります。そして、そのリスト内のラベル定数は、ラベル宣言を含むブロック内で既知である必要があります。括弧で囲まれたラベル定数のリストは、ラベル配列に関する LABEL 属性仕様で使用できます。

ラベル定数は、ステートメント (PROCEDURE、ENTRY、PACKAGE、または FORMAT を除く) のラベル接頭部として書かれる名前です。プログラム実行中に、この名前を参照して、プログラム制御をそのステートメントに移すことができます。(20 ページの『ステートメント』でラベル接頭部の構文を説明しています。) 例えば、以下のコード行では、Abcde がラベル定数です。

```
Abcde: Miles = Speed*Hours;
```

ラベルのついたステートメントは、通常の命令順序に従ってこのステートメントを実行させることもできますし、プログラム内の別の場所から GO TO ステートメントによってこのステートメントに制御権を移動して実行させることもできます。

ラベル変数には、別のラベル変数の値またはラベル定数を割り当てることができます。そのような割り当てが行われると、ソース・ラベルの環境がターゲット・ラベル変数に割り当てられます。ラベルの静的配列が初期値を持つことを宣言した場合、その配列は割り当て不可と見なされます。

GO TO ステートメントで使用するラベル変数は、その GO TO ステートメントの実行時にアクティブであるブロック内で使われているラベル定数でなければなりません。次の例を考えてみてください。

```
declare Lbl_x label;
Lbl_a:  statement;

:
Lbl_b:  statement;

:
Lbl_x = Lbl_a;

:
go to Lbl_x;
```

Lbl_a と Lbl_b はラベル定数であり、Lbl_x はラベル変数です。Lbl_a を Lbl_x に割り当てることにより、GO TO Lbl_x ステートメントは制御を Lbl_a ステートメントに移します。それ以外の場合には、Lbl_b を Lbl_x に割り当てるステートメントをプログラムに入れることができます。この割り当てにより、Lbl_x への参照は、Lbl_b への参照と同じになります。この Lbl_x の値は、別の値が割り当てられるまで保持されます。

ラベル変数に無効な値が割り当てられても、エラーが検出されるとは限りません。以下の例では、値 I が基数となっている配列 Z の特定エレメントに伝送が行われます。

```
go to Z(I);

:
Z(1):  if X = Y then return;

:
Z(2):  A = A + B + C * D;
```

```
⋮
Z(3): A = A + 10;
```

Z(2) が省略されると、I=2 の場合には GO TO Z(I) で ERROR 条件が生じます。I < LBOUND(Z) または I > HBOUND(Z) のときに GO TO Z(I) を実行した場合、SUBSCRIPTRANGE 条件が使用不能になっていると、予測できない結果が生じます。

フォーマット・データと FORMAT 属性: フォーマット・データ項目とは、フォーマット定数またはフォーマット変数のことです。フォーマット定数は、FORMAT ステートメントのラベル接頭部として書かれる名前です。

FORMAT 属性は、宣言される名前がフォーマット変数であることを指定します。

▶▶—FORMAT—◀◀

FORMAT 属性で宣言された名前は、別のフォーマット変数を持つか、またはそれに割り当てられるフォーマット定数を持ちます。そのような割り当てが行われると、ソース・ラベルの環境がターゲット・ラベル変数に割り当てられます。

他の PL/I コンパイラとの互換性を維持するために、フォーマット変数をラベル変数として宣言することもできます。

次の例を考えてみてください。

```
Prntexe: format
      ( column(20),A(15), column(40),A(15), column(60),A(15) );
Prntstf: format
      ( column(20),A(10), column(35),A(10), column(50),A(10) );
```

Prntexe と Prntstf はフォーマット定数です。

次の例では、**4** と **5** は **2** と同じ結果になり、**6** と **7** は **3** と同じ結果になります。

```
1  dcl Print format;
2  put edit (X,Y,Z) (R(Prntexe) );
3  put edit (X,Y,Z) (R(Prntstf) );
4  Print = Prntexe;
5  put edit (X,Y,Z) (R(Print) );
6  Print = Prntstf;
7  put edit (X,Y,Z) (R(Print) );
```

VARIABLE 属性: VARIABLE 属性は、名前を変数として設定します。また、この属性は、属性 ENTRY、FILE、または LABEL のいずれかを指定した場合にのみ指定できます。他のすべての宣言では無視されます。

▶▶—VARIABLE—◀◀

名前が構造体または共用体のメンバーである場合、または以下のいずれかの属性が指定されている場合、 **VARIABLE** 属性は暗黙に指定されています。

ストレージ・クラス属性

DIMENSION

PARAMETER

位置合わせ属性

INITIAL

以下の例では、Account1 と Account2 は、ファイル変数であり、File1 と File2 はファイル定数です。

```
declare Account1 file variable,  
        Account2 file automatic,  
        File1 file,  
        File2 file;
```

File1 と File2 は、Account1 または Account2 に順番に割り振られます。

第 4 章 式および参照

計算の順序	64	比較演算	75
ターゲット	64	連結演算	77
変数	64	各種演算の組み合わせ	78
疑似変数	64	配列式	81
中間結果	65	接頭演算子と配列	81
演算式	65	挿入演算子と配列	81
ポインター演算	66	構造式	82
算術演算	66	制限付き式	83
ビット演算子	74	例	83

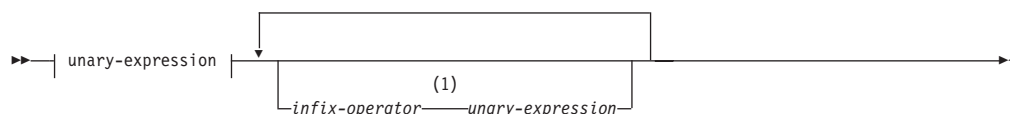
この章では、式および参照のさまざまなタイプを説明しています。

式 は、値を表すものです。式は以下のいずれかになります。

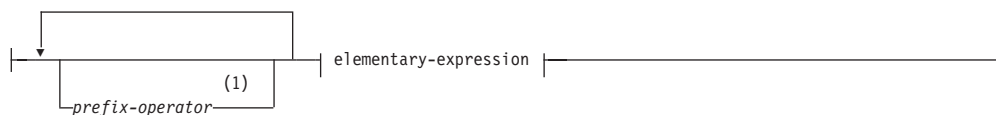
- 単一定数、変数、または関数参照
- 定数、変数、または関数参照を組み合わせたもの。その組み合わせで使用する演算子と括弧を含む。

演算子が含まれている式を演算式 といいます。演算式の定数および変数は、オペランド と呼ばれます。詳しくは、65 ページの『演算式』を参照してください。

以下の図は、式および参照の構文を示しています。



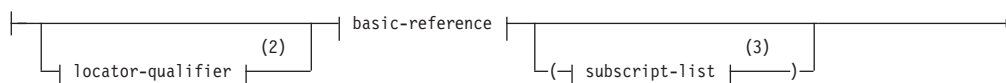
unary-expression:



elementary-expression:

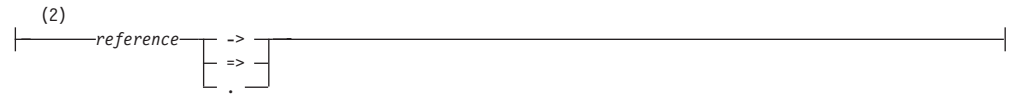


reference:

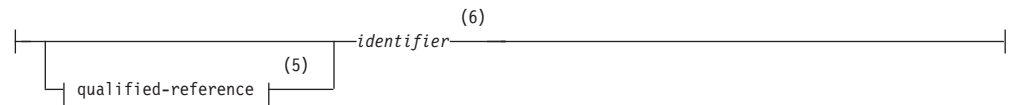




locator-qualifier:



basic-reference:



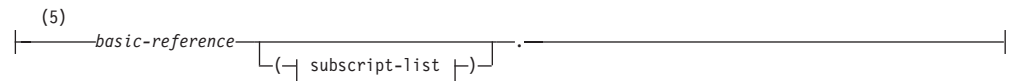
subscript-list:



argument-list:



qualified-reference:



注:

- 1 演算子は、19 ページの表 6 に示されています。
- 2 ロケータ修飾子は、264 ページの『ロケータ修飾』と 163 ページの『タイプ付き構造体修飾』で説明されています。
- 3 添え字は、192 ページの『配列』で説明されています。
- 4 引数は、125 ページの『プロシージャへの引数の引き渡し』で説明されています。
- 5 修飾される参照は、199 ページの『構造体/共用体の修飾』で説明されています。
- 6 ID は、17 ページの『ID』で説明されています。

式は要素式 (スカラー式ともいう)、配列式、または構造式 のいずれかに分類されます。 要素変数および配列変数は、同じ式内に書くことができます。

要素式 単一の値を表します。この定義には、構造体や共用体内の基本名や、配列の単一エレメントを指定する添え字付きの名前も含まれます。

配列式 値の配列を表します。この定義には、次元属性を持つ構造体や共用体のメンバーが含まれます。

構造式 構造化された値のセットを表します。

以下に例を示します。

```

dcl A(10,10) bin fixed(31),
    B(10,10) bin fixed(31),
    1 Rate,
      2 Primary dec fixed(4,2),
      2 Secondary dec fixed(4,2),
    1 Cost(2),
      2 Primary dec fixed(4,2),
      2 Secondary dec fixed(4,2),
    C bin fixed(15),
    D bin fixed(15);
dcl Pi bin float value(3.1416);

```

以下は要素式です。

```

Pi
27
C
C * D
A(3,2) + B(4,8)
Rate.Primary - Cost.Primary(1)
A(4,4) * C
Rate.Secondary / 4
A(4,6) * Cost.Secondary(2)
sum(A)
addr(Rate)

```

以下は配列式です。

```

A
A + B
A * C - D
B / 10B

```

大半の PL/I ステートメントの構文では、式の計算結果がステートメントの構文規則に合ってさえいれば、式を使うことができます。構文の仕様のあとにテキスト内で特に明記していない限り、修飾されていない *term expression* (式) または *reference* (参照) はスカラー式を指しています。スカラー式以外の式については、式のタイプが明記してあります。例えば、*array expression* (配列式) という用語は、スカラー式が無効であることを示します。

構造式の例は次のとおりです。

```
Rate = Rate*2
```

計算の順序

PL/I ステートメントには、複数の式または参照が含まれていることがしばしばあります。特定インスタンス (例えば、代入ステートメントなど) についての説明があるときを除いて、計算の順序は任意であり、(概念的には) 同時に計算することも可能です。

以下に例を示します。

```
dc1 (X,Y,Z) entry returns(float), (F,G,H) float;  
F = X( Y(G,H), Z(G,H) );
```

関数 Y と Z は、それらに渡された引数の値を変更することがあります。したがって、X が返す値は、どちらの関数が最初に呼び出されるかに応じて異なります。最初のパラメーターが最初に計算されると推定すべきではありません。最後のパラメーターを最初に計算するほうが望ましい場合もあります。

INC 機能がそれに渡された引数の値を増やし、更新された値を戻すと仮定すると、以下の例では、B(1,2) または B(2,1) は、どちらの添え字が最初に計算されるかによって、結果が決まります。どちらの添え字が最初に計算されるかを推定すべきではありません。

```
dc1 B(2,2);  
I = 0;  
put list ( B( INC(I), INC(I) ) );
```

ターゲット

式または変換の計算結果は、ターゲット に割り当てられます。ターゲットは、変数、疑似変数、または中間結果フィールドのいずれかです。

変数

次のようなステートメントで割り当てを行うとします。

```
A = B;
```

代入記号の左側にある変数 (この例では A) がターゲットです。変数に対する割り当ては、ストリーム入出力、DO、DISPLAY、およびレコード入出力ステートメント内でも行うことができます。

疑似変数

疑似変数はターゲット・フィールドを表します。例えば、以下のようになります。

```
declare A character(10),  
        B character(30);  
substr(A,6,5) = substr(B,20,5);
```

この代入ステートメントでは、SUBSTR 組み込み関数は、ストリング B の 20 番目の文字から始まる長さ 5 のサブストリングを取り出します。SUBSTR 疑似変数は、ストリング A の中の場所を表しますが、この場所がターゲットです。したがって、A の最後の 5 文字は、B の 20 番目から 24 番目の文字で置き換えられます。A の最初の 5 文字は、変更されず、もとのままです。

疑似変数については、417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』で説明します。

中間結果

式が計算される時、通常のターゲット属性は、ソース、実行される演算、および第 2 オペランドの属性から部分的に取り出されます。デフォルトが使用されたり、インプリメンテーション制限事項および規則（例えば、最大の精度など）が存在していることもあります。これ以降に演算が行われると、中間の結果が変換される場合があります。式の値が計算されたあと、変数または疑似変数に割り当てのために、その結果さらに変換されることもあります。これらの変換は、プログラマー定義のデータが変換される場合と同じ規則に従って行われます。例えば、以下のようになります。

```
declare A character(8),
        B fixed decimal(3,2),
        C fixed binary(10);
A = B + C;
```

式 $B + C$ の計算時およびその結果の割り当て時に、4 つの異なる結果が生じます。

1. 中間結果。B が 2 進数に変換されて、ここに割り当てられます。
2. 中間結果。2 進数の加算結果がここに割り当てられます。
3. 中間結果。2 進数の結果が 10 進固定小数点フォーマットに変換されて、ここに割り当てられます。
4. A。最終的に結果を入れるためのフィールド。10 進固定小数点の値が文字フォーマットに変換されて、ここに割り当てられます。

最初の結果の属性は、ソース B の属性、演算子、および一方のオペランドの属性によって決まります。算術挿入演算子の一方のオペランドが 2 進数であれば、もう一方のオペランドは、演算の前に 2 進数に変換されます。

2 番目の結果の属性は、ソース (C と変換された表示の B) の属性から判別します。

3 番目の結果の属性は、ソース (2 番目の結果) と最終ターゲット A の属性とのかねあいによって決まります。最終ターゲットによって決められる属性は、DECIMAL だけです。これは、2 進算術データを文字値に変換するには事前 10 進フォーマットに変換しておかなければならないためです。

A の属性は、DECLARE ステートメントによって決まります。

演算式

演算式は、1 つまたは複数の単一演算で形成されます。単一演算とは、接頭演算子演算 (単一オペランドの前に演算子がある) または挿入演算子演算 (2 つのオペランドの間に演算子がある) のどちらかです。挿入演算子演算の 2 つのオペランドは、通常は、演算実行時にはデータ・タイプが同じでなければなりません。

PL/I では、式に含まれている演算のオペランドは、演算が行われる前に、必要に応じて同じデータ・タイプに変換されます。変換の詳細な規則については、85 ページの『第 5 章 データ変換』で説明します。

1 つの式で異なるデータ・タイプを使用することに関しては、ほとんど制約はありません。ただし、各種のデータ・タイプが混在しているときは変換が行われます。実行時に変換が行われると、プログラムの実行時間が長くなります。さらに、変換によって精度が失われることもあります。データ・タイプが混在している式を使うときは、関係のある変換規則を理解しておいてください。

演算には、ポインター演算、算術演算、ビット演算、比較演算、および連結演算という 5 つのクラスがあります。

ポインター演算

以下のポインター演算を利用できます。

- ポインター式に式を追加したり、またはそこから式を引いたりします。式のタイプは、計算式でなければなりません。必要に応じて、非ポインター・オペランドが FIXED BINARY(31,0) に変換されます。例えば、以下のようになります。

```
Ptr1 = Ptr1 - 16;  
Ptr2 = Ptr1 + (I*J);
```

これらの演算を行うために、POINTERADD 組み込み関数を使用することもできます。結果をロケータ参照として使用する場合には、POINTERADD を使用しなければなりません。例えば、以下のようになります。

```
(Ptr1 + 16) -> Based_ptr      is invalid  
  
pointeradd(Ptr1,16) -> Based_ptr  is valid
```

- ポインターからポインターを引き、ポインター間でその論理的な差を計算します。結果は、FIXED BINARY(31,0) 値になります。

```
Bin31 = Ptr2 - Ptr1;
```

- 挿入演算子を使用して、ポインター式を比較します。

```
if Ptr2 > Ptr1 then  
    Bin31 = Ptr2 - Ptr1;
```

- BINARYVALUE 組み込み関数を使用して、算術コンテキストにおいてポインター式を使用します。

```
Bin31 = Bin31 + binaryvalue(Ptr1);
```

- 組み込み関数の POINTVALUE を使用して、ポインター・コンテキストで計算による式を使用します。

```
dcl 1 Cvtprt pointer based(pointvalue(16));  
dcl 1 Cvt based(Cvtprt),  
    2 Cvt ...;
```

必要であれば、式は FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

PL/I ブロックでは、ポインター算術を使用して、構造体または配列変数内の任意の要素にアクセスすることができます。ただし、ブロックは、構造体あるいは配列変数の入っているものに渡さなければならず、その名前の有効範囲内に参照できる集合を持っていないければなりません。

算術演算

算術演算を指定するには、下記のいずれかの演算子でオペランド同士を結び付けます。

+ - * / **

正符号 (+) と負符号 (-) は、接頭演算子として使うことも、挿入演算子として使うこともできます。これ以外のすべての算術演算子は、挿入演算子としてのみ使用することができます (ADD、SUBTRACT、DIVIDE、および MULTIPLY 組み込み関数を使用して、算術演算を使用することもできます)。

接頭演算子は、挿入演算子の任意のオペランドの前に付けることができ、そのオペランドと関連があります。例えば、A*-B という式の場合、負符号 (-) は A の値を B の値の -1 倍で乗じることを示しています。

1 つの変数に複数の接頭演算子を付けることができます。正の接頭演算子を複数付けても、累積的な効果はありませんが、負の演算子を 2 つ続けると、正の接頭演算子を 1 つ使用するのと同じ結果になります。

算術演算におけるデータ変換

算術演算の 2 つのオペランドは、タイプ、基数、モード、精度、およびスケールの点で異なっても構いません。異なっているときは、以下で説明するように変換が行われます。(コード化算術オペランドの場合は、69 ページの表 13 を使用して変換方法を判別することができます。各オペランドは、計算結果のタイプ、基数、およびモードに変換されます。計算結果の精度とスケールに変換する必要はありません。)

注: スケールされる FIXED BINARY オペランドは、スケールされる FIXED DECIMAL に変換されてから、それについての演算が行われます。

タイプ: 文字オペランドは、FIXED DECIMAL(N,0) に変換されます。ビット・オペランドは、FIXED BINARY(M,0) に変換されます。(最大制限については、793 ページの『制限値』を参照してください。)数字の文字オペランドは、ピクチャー指定によって決まるスケールと精度を持つ DECIMAL に変換されます。

グラフィックとワイド文字の変数とストリングは、すべての計算コンテキストで使用することができます。変換する必要があるときは、従うべき規則は、文字に対しても同様になります。

算術演算の結果は、常に、コード化算術フォーマットになります。算術挿入演算子演算で行われる可能性のある変換は、タイプ変換だけです。

基数: 2 つのオペランドの基数が異なっている場合は、10 進数オペランドが 2 進数に変換されます。

モード: 2 つのオペランドのモードが異なっている場合は、実数オペランドが複素数モードに変換されます。これは、実数部分と同じ基数、スケール、および精度を与えて、虚数部分ゼロを設けるという方法で行われます。ただし、累乗演算で第 2 オペランド (演算における指数) が位取り係数ゼロの固定小数点実数である場合は例外であり、このときは変換は不要です。

精度: 精度や位取り係数だけ (または両方) が異なっている場合は、タイプ変換は不要です。

スケール: 2 つのオペランドのスケールが異なっている場合は、固定小数点オペランドが浮動小数点のスケールに変換されます。ただし、累乗演算で第 1 オペランド

が浮動小数点のスケールになっており、第 2 オペランド (演算における指数) が位取り係数ゼロの固定小数点数、つまりは整数または精度 (p,0) として宣言された変数である場合は、例外です。この場合は、変換は必要ではありませんが、結果は浮動小数点数になります。

累乗演算の両オペランドが固定小数点数である場合は、次の変換方法のうちの 1 つが行われます。

- 指数の精度が (p,0) 以外であれば、両オペランドが浮動小数点数に変換されます。
- 指数が符号なし整数でない場合、第 1 オペランドが浮動小数点数に変換されます。
- 固定小数点累乗演算を行うと、使用可能な最大桁数を超えることが両オペランドの精度から明らかになる場合は、第 1 オペランドが浮動小数点数に変換されます。

算術演算の結果

式の中のオペランドが必要に応じて変換されたあと、算術演算が行われ、結果が出されます。この結果は、式の値であることも、さらに後続の演算の対象となる中間結果であることもあります。あるいは、なんらかの条件が起こることもあります。

69 ページの表 13 と 70 ページの表 14 は、各種の算術演算から帰結する属性と精度を示しています。

74 ページの表 18 は、69 ページの表 13 と 70 ページの表 14 の右端の欄に注記している累乗演算の特殊事例における結果の属性を示しています。

z/OS プラットフォームで浮動小数点の計算にどのセットの命令を使用するかは、次の 2 つのコンパイラ・オプションによって決まります。

- FLOAT(DFP) を指定した場合
 - 結果が FLOAT DEC となる計算はすべて、IEEE 10 進浮動小数点命令を使用して行われます。
 - 結果が FLOAT BIN となる計算はすべて、DEFAULT コンパイラ・オプションの HEXADEC および IEEE サブオプションで指定されたフォーマット用の浮動小数点命令を使用して行われます。
- FLOAT(NODFP) を指定した場合
 - 結果が FLOAT となる計算はすべて、DEFAULT コンパイラ・オプションの HEXADEC および IEEE サブオプションで指定されたフォーマット用の浮動小数点命令を使用して行われます。

したがって、FLOAT(NODFP) および DEFAULT(HEXADEC) オプションのもとでは、すべての計算は 16 進浮動小数点命令を使用して行われ、IEEE で宣言された変数は HEXADEC に変換されます。一方、FLOAT(NODFP) および DEFAULT(IEEE) オプションのもとでは、すべての計算は、IEEE 2 進浮動小数点命令を使用して行われ、HEXADEC で宣言された変数は必要に応じて IEEE に変換されます。

その他すべてのプラットフォームでは、浮動小数点の計算は、そのプラットフォームに固有の IEEE 2 進浮動小数点命令を使用して行われます。

コンパイラー・オプション RULES(ANS)のもとでは、一方のオペランドが FIXED DECIMAL にスケールされており、他方のオペランドが FIXED BINARY にスケールされていると、FIXED BINARY 値は FIXED DECIMAL に変換されます。71 ページの表 15 は、コンパイラー・オプション RULES(ANS)のもとでのこの場合の結果の属性および精度を示しています。RULES コンパイラー・オプションの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

表 13. 1 つまたは複数の FLOAT オペランドの算術演算の結果

第 1 オペランド (p1,q1)	第 2 オペランド (p2,q2)	加算、減算、 乗算または 除算の結果 の属性	加算 または 減算 精度	乗算 精度	除算 精度	指数の 結果の 属性
FLOAT DECIMAL (p1)	FLOAT DECIMAL (p2)	FLOAT DECIMAL (p)	p = MAX(p1,p2)			FLOAT DECIMAL (p) (特殊な場合以外は、 C が適用される) p = MAX(p1,p2)
FLOAT DECIMAL (p1)	FLOAT DECIMAL (p2,q2)					
FIXED DECIMAL (p1,q1)	FLOAT DECIMAL (p2)					
FLOAT BINARY (p1)	FLOAT BINARY (p2)	FLOAT BINARY (p)				FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外 は、 C が適用される) p = MAX(p1,p2)
FLOAT BINARY (p1)	FIXED BINARY (p2,q2)					
FIXED BINARY (p1,q1)	FLOAT BINARY (p2,q2)					
FIXED DECIMAL (p1,q1)	FLOAT BINARY (p2)	FLOAT BINARY (p)	p = MAX(CEIL(p1*3.32),p2)			FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外 は、 A または C が 適用される) p = MAX(CEIL(p1*3.32),p2)
FLOAT DECIMAL (p1)	FLOAT BINARY (p1,q2)					
FLOAT DECIMAL (p1)	FLOAT BINARY (p2)					
FIXED BINARY (p1,q1)	FLOAT DECIMAL (p2)	FLOAT BINARY (p)	p = MAX(p1,CEIL(p2*3.32))			FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外 は、 B または C が 適用される) p = MAX(p1,CEIL(p2*3.32))
FLOAT BINARY (p1)	FIXED DECIMAL (p2,q2)					
FLOAT BINARY (p1)	FLOAT DECIMAL (p2)					

算術演算の結果

注:

1. 累乗演算の特殊事例は、74 ページの表 18 で説明しています。
2. CEIL($N*3.32$) 値の表については、89 ページの表 22 を参照してください。

表 14. RULES(ANS) における、2 つのスケールのない FIXED オペランド間の算術演算の結果

第 1 オペランド (p1,q1)	第 2 オペランド (p2,q2)	加算、減算、 乗算または 除算の結果 の属性	加算 または 減算 精度	乗算 精度	除算 精度	指数の 結果の 属性
FIXED DECIMAL (p1,0)	FIXED DECIMAL (p2,0)	FIXED DECIMAL (p,q)	$p = 1$ $+MAX(p1,p2)$ $q = 0$	$p = 1$ $+p1+p2$ $q = 0$	$p = N$ $q = N-p1$	FLOAT DECIMAL (p) (特殊な場合以外は、 A が適用される) $p = MAX(p1,p2)$
FIXED BINARY (p1,0)	FIXED BINARY (p2,0)	FIXED BINARY (p,0)	$p = 1$ $+MAX(p1-q1,$ $p2-q2) +q$ $q = 0$	$p = 1+p1$ $+p2$ $q = 0$	$p = M$ $q = 0$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 B が適用される) $p = MAX(p1,p2)$
FIXED DECIMAL (p1,0)	FIXED BINARY (p2,0)	FIXED BINARY (p,0)	$p = 1$ $+MAX(r,p2)$ $q = 0$	$p = 1$ $+r+p2$ $q = 0$	$p = M$ $q = 0$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 A が適用される) $p = MAX(CEIL$ $(p1*3.32),p2)$
FIXED BINARY (p1,0)	FIXED DECIMAL (p2,0)	FIXED BINARY (p,0)	$p = 1$ $+MAX(p1,t)$ $q = 0$	$p = 1$ $+p1+t$ $q = 0$	$p = M$ $q = 0$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 B が適用される) $p = MAX(CEIL$ $(p1*3.32),p2)$
M は FIXED BINARY の最大精度です。 N は FIXED DECIMAL の最大精度です。 $r = 1 + CEIL(p1*3.32)$ $s = CEIL(ABS(q1*3.32)) * SIGN(q1)$				$t = 1 + CEIL(p2*3.32)$ $u = CEIL(ABS(q2*3.32)) * SIGN(q2)$ $v = CEIL(p2/3.32)$ $w = CEIL(p1/3.32)$		

注:

位取り係数は、-128 から +127 の範囲内になければなりません。

1. 累乗演算の特殊事例は、74 ページの表 18 で説明しています。
2. CEIL($N*3.32$) 値の表については、89 ページの表 22 を参照してください。
3. RULES(ANS) においては、スケールのない FIXED オペランドを持つ除算は、両方のオペランドが FIXED DECIMAL の場合にのみスケールのある結果を生じます。

表 15. RULES(ANS) における、2 つのスケールされた FIXED オペランド間の算術演算の結果

第 1 オペランド (p1,q1)	第 2 オペランド (p2,q2)	加算、減算、 乗算または 除算の結果 の属性	加算 または 減算 精度	乗算 精度	除算 精度	指数の 結果の 属性
FIXED DECIMAL (p1,q1)	FIXED DECIMAL (p2,q2)	FIXED DECIMAL (p,q)	$p = 1 + \text{MAX}(p1-q1, p2-q2) + q$ $q = \text{MAX}(q1,q2)$	$p = 1 + p1+p2$ $q = q1+q2$	$p = N$ $q = N-p1+q1-q2$	FLOAT DECIMAL (p) (特殊な場合以外は、 A が適用される) $p = \text{MAX}(p1,p2)$
FIXED DECIMAL (p1,q1)	FIXED BINARY (p2,0)	FIXED DECIMAL (p,q)	$p = 1 + \text{MAX}(p1-q1, v) + q$ $q = q1$	$p = 1 + p2+v$ $q = q1$	$p = N$ $q = N-q1$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 A が適用される) $p = \text{MAX}(\text{CEIL}(p1*3.32), p2)$
FIXED BINARY (p1,0)	FIXED DECIMAL (p2,q2)	FIXED DECIMAL (p,q)	$p = 1 + \text{MAX}(p2-q2, w) + q$ $q = q2$	$p = 1 + p2+w$ $q = q1$	$p = N$ $q = N-q2$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 B が適用される) $p = \text{MAX}(\text{CEIL}(p1*3.32), p2)$
M は FIXED BINARY の最大精度です。 N は FIXED DECIMAL の最大精度です。 $r = 1 + \text{CEIL}(p1*3.32)$ $s = \text{CEIL}(\text{ABS}(q1*3.32)) * \text{SIGN}(q1)$				$t = 1 + \text{CEIL}(p2*3.32)$ $u = \text{CEIL}(\text{ABS}(q2*3.32)) * \text{SIGN}(q2)$ $v = \text{CEIL}(p2/3.32)$ $w = \text{CEIL}(p1/3.32)$		

注:

位取り係数は、-128 から +127 の範囲内になければなりません。

1. 累乗演算の特殊事例は、74 ページの表 18 で説明しています。
2. $\text{CEIL}(N*3.32)$ 値の表については、89 ページの表 22 を参照してください。
3. RULES(ANS) のもとでは、スケールされた FIXED BINARY は使用できません。

表 16. RULES(IBM) における、2 つの FIXED オペランド間の算術演算の結果

第 1 オペランド (p1,q1)	第 2 オペランド (p2,q2)	加算、減算、 乗算または 除算の結果 の属性	加算 または 減算 精度	乗算 精度	除算 精度	指数の 結果の 属性
FIXED DECIMAL (p1,q1)	FIXED DECIMAL (p2,q2)	FIXED DECIMAL (p,q)	$p = 1 + \text{MAX}(p1-q1, p2-q2) + q$ $q = \text{MAX}(q1,q2)$	$p = 1 + p1+p2$ $q = q1+q2$	$p = N$ $q = N-p1+q1-q2$	FLOAT DECIMAL (p) (特殊な場合以外は、 A が適用される) $p = \text{MAX}(p1,p2)$
FIXED BINARY (p1,q1)	FIXED BINARY (p2,q2)	FIXED BINARY (p,q)	$p = 1 + \text{MAX}(p1-q1, p2-q2) + q$ $q = \text{MAX}(q1,q2)$	$p = 1 + p1+p2$ $q = q1+q2$	$p = M$ $q = M-p1 + q1-q2$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 B が適用される) $p = \text{MAX}(p1,p2)$

算術演算の結果

表 16. RULES(IBM) における、2 つの FIXED オペランド間の算術演算の結果 (続き)

第 1 オペランド (p1,q1)	第 2 オペランド (p2,q2)	加算、減算、 乗算または 除算の結果 の属性	加算 または 減算 精度	乗算 精度	除算 精度	指数の 結果の 属性
FIXED DECIMAL (p1,q1)	FIXED BINARY (p2,q2)	FIXED BINARY (p,q)	$p = 1$ $+ \text{MAX}(r-s,$ $p2-q2)+q$ $q =$ $\text{MAX}(s,q2)$	$p = 1+r$ $+p2$ $q = s+q2$	$p = M$ $q = M-r$ $+s-q2$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 A が適用される) $p = \text{MAX}(\text{CEIL}((p1*3.32), p2))$
FIXED BINARY (p1,q1)	FIXED DECIMAL (p2,q2)	FIXED BINARY (p,q)	$p = 1$ $+ \text{MAX}(p1-$ $q1,t-u) +q$ $q =$ $\text{MAX}(s,q1,u)$	$p = 1$ $+p1+t$ $q = q1+u$	$p = M$ $q = M-p1$ $+q1-u$	FLOAT BINARY (p) (特殊な場合以外は、 B が適用される) $p = \text{MAX}(p1,$ $\text{CEIL}(p2*3.32))$
M は FIXED BINARY の最大精度です。 N は FIXED DECIMAL の最大精度です。 $r = 1 + \text{CEIL}(p1*3.32)$ $s = \text{CEIL}(\text{ABS}(q1*3.32)) * \text{SIGN}(q1)$				$t = 1 + \text{CEIL}(p2*3.32)$ $u = \text{CEIL}(\text{ABS}(q2*3.32)) * \text{SIGN}(q2)$ $v = \text{CEIL}(p2/3.32)$ $w = \text{CEIL}(p1/3.32)$		

注:

位取り係数は、-128 から +127 の範囲内になければなりません。

1. 累乗演算の特殊事例は、74 ページの表 18 で説明しています。
2. $\text{CEIL}(N*3.32)$ 値の表については、89 ページの表 22 を参照してください。
3. FIXED BINARY の精度 p の境界は LIMITS コンパイラー・オプションの FIXEDBIN サブオプションによって決まり、FIXED DECIMAL の境界は FIXEDDEC サブオプションによって決まります。LIMITS オプションは、位取り係数 q の境界では効力を持ちません。

次の式を例に、考えてみましょう。

$$A * B + C$$

まず、演算 $A * B$ が行われ、中間結果が生じます。次に、(中間結果) + C という演算が行われて、式の値が求められます。

PL/I は、属性を別の変数に指定するのと同じ方法で中間結果属性を指定します。結果の属性は、2 つのオペランドの属性 (または接頭部演算の場合には単一オペランド)、および関係する演算子から派生します。結果の属性を求める方法については、64 ページの『ターゲット』に説明されています。

組み込み関数 ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE を使用すると、加算、減算、乗算、および除算演算に関してインプリメンテーションで定められている精度の規則を無効にすることができます。

FIXED 除算: 固定小数点除算を行うと、オーバーフローや切り捨てが起こることがあります。例えば次の場合、

$$25+1/3$$

固定小数点除算の結果が、インプリメンテーションで定義されている最大精度の値になるため、式の計算結果は未定義となり、FIXEDOVERFLOW 条件が起こります。

ただし次の場合、

$25+01/3$

定数には作成される精度があるので、式は 25.3333333333333 (最大精度は 15) という結果になります。2 つの計算の結果は、表 17 に示されている結果になります。

表 17. 固定小数点除算と定数式の比較

項目	精度	結果
1	(1,0)	1
3	(1,0)	3
1/3	(15,14)	0.33333333333333
25	(2,0)	25
25+1/3	(15,14)	未定義 (左方で切り捨て。 最大精度が 15 の場合は、 FIXEDOVERFLOW が生じる)
01	(2,0)	01
3	(1,0)	3
01/3	(15,13)	00.3333333333333
25	(2,0)	25
25+01/3	(15,13)	25.3333333333333

PRECISION 組み込み関数を使用することもできます。以下に例を示します。

$25+\text{prec}(1/3,15,13)$

注: 正確な精度が必要な状況では、名前のついた定数をお勧めします。

累乗演算の使用

以下の表は、PL/I で累乗演算が扱われる方法を説明しています。

表 18. 累乗演算の特殊事例

事例	第 1 オペランド	第 2 オペランド	結果の属性
A	FIXED DECIMAL (p1,q1)	値が n の整数	FIXED DECIMAL (p,q) (p <= N) ただし、p = (p1 + 1)*n-1 かつ q = q1*n
B	FIXED BINARY (p1,q1)	値が n の整数	FIXED BINARY (p,q) (p <= M) ただし、p = (p1 + 1)*n-1 かつ q = q1*n
C	FLOAT (p1)	FIXED (p2,0)	FLOAT (p1) 基数は第 1 オペランドの基数と 同じ

実モードまたは複素数モードでの $x**y$ の特殊事例:

実モード:

複素数モード:

$x=0$ かつ $y>0$

結果は 0。 $x=0$ 、かつ y の実数部分 >0 かつ y の虚数部分 $=0$ ならば、結果は 0。

$x=0$ かつ $y\leq 0$

ERROR 条件が起こる。 $x=0$ かつ y の実数部分 ≤ 0 または y の虚数部分 $\neq 0$ ならば、**ERROR** 条件が起こる。

$x<0$ かつ y が **FIXED** (p,0) でないとき

ERROR 条件が起こる。 $x\neq 0$ かつ y の実数部分および虚数部分 $=0$ ならば、結果は 1。

ビット演算子

ビット演算を指定するには、下記のいずれかの論理演算子でオペランドを結び付けます。

\neg & |

NOT/排他的 **OR** 記号 (\neg) は、接頭部または挿入演算子として使用することができます。 **AND** (&) 記号および **OR** (|) 記号は、挿入演算子としてのみ使用することができます (これらの演算子は、ブール代数の場合と同じです)。

ビット演算のオペランドは、演算の実行前に、必要に応じてビット・ストリングに変換されます。挿入演算子の演算の両オペランドの長さが異なっている場合は、短い方のストリングの右側に '0'B が埋め込まれます。

ビット演算の演算結果は、両オペランドと同じ長さのビット・ストリングです。

ビット演算は、1 ビットずつ行われます。 75 ページの表 19 は、各演算子のビット位置の結果を説明しています。 75 ページの表 20 は、ビット演算子の例を示しています。

表 19. ビット演算子

A	B	$\neg A$	$\neg B$	$A \& B$	$A B$	$A \neg B$
1	1	0	0	1	1	0
1	0	0	1	0	1	1
0	1	1	0	0	1	1
0	0	1	1	0	0	0

表 20. ビット演算の例

オペランドと値	演算	結果
A = '010111'B B = '111111'B C = '110'B D = 5	$\neg A$	'101000'B
	$\neg C$	'001'B
	$C \& B$	'110000'B
	$A B$	'111111'B
	$A \neg B$	"101000"B
	$A \neg C$	'100111'B
	$C B$	'111111'B
	$A (\neg C)$	'011111'B
	$\neg((\neg C) (\neg B))$	'110111'B
	$\text{SUBSTR}(A, 1, 1) (D=5)$	'1'B

BOOL 組み込み関数

演算子 \neg 、 $\&$ 、および $|$ を使用する *NOT*、排他 *OR*、*AND*、および *OR* 演算に加えて、459 ページの『BOOL』で説明している BOOL 組み込み関数を使用してブール演算を行うことができます。

比較演算

比較演算を指定するには、下記のいずれか 1 つの挿入演算子でオペランドを結び付けます。

< $\neg <$ <= = $\neg =$ >= > $\neg >$

比較演算の結果は、常に長さ 1 のビット・ストリングです。オペランドの関係が真であれば、値は '1'B になり、偽であれば '0'B になります。

比較は以下のように定義されます。

代数 コード化算術フォーマットの符号付き算術値を比較します。2 つのオペランドが基数、スケール、精度、またはモードで異なっている場合は、算術演算変換に似た方法で変換されます。数字データは、比較される前にコード化算術フォーマットに変換されます。演算子 = と $\neg =$ だけが、複素数のオペランドを比較する場合に有効です。

文字 左から右へ文字単位で文字 (バイト単位で 2 進数値) を比較します。

ビット 左から右へ 1 ビットずつ、2 進数を比較します。

グラフィック 左から右へ DBCS 文字を 1 文字 (2 バイト) ずつ比較します。比較は、DBCS 文字の 2 進数値に基づいて行われます。

ワイド文字 左から右へ、2 バイトの対の 2 進数値に基づいてワイド文字を 1 文字ずつ比較します。

序数データ 関係演算子を使用して、同じタイプの序数を比較します。

ポインターおよびオフセット・データ

関連する任意の演算子が入っているポインター値とオフセット値を比較します。ただし、変換を行うことができるのは、オフセットからポインターへの場合です。

プログラム制御データ

内部コード化フォーマットオペランドのオペランドを比較します。比較演算子の `=` と `~=` のみを使用できます。区域変数は比較できません。タイプ変換は起こりません。プログラム制御データの比較では、オペランド間のタイプの相違はすべてエラーになります。

以下のオペランドについては、比較は等しいという結果になります。

入り口 比較演算では、非アクティブ・ブロックのエントリ・ポイント値を値として持つ入り口変数を指定しても、エラーにはなりません。同じ `PROCEDURE` または `ENTRY` ステートメントの入り口名は、等しいものを比較することはできません。

フォーマット 同じ `FORMAT` ステートメントに関するフォーマット・ラベルの比較が等しい場合。

ファイル 2 つのオペランドがファイル値を表しており、ファイル値の各部分ごとに等しい場合。

ラベル 同じステートメントに付いている 2 つのラベルを比較すると、等しいという結果になります。比較演算では、これ以上活動しないブロック内のラベル定数を値として持つラベル変数を指定しても、エラーにはなりません。

複合ステートメントのラベルを、その複合ステートメントの本体に含まれているラベルと比較した場合、等しいという結果にはなりません。

計算データの比較で両オペランドのデータ・タイプが別々の比較タイプである場合には、比較タイプに関して優先度の低い方のオペランドが、もう一方のオペランドの比較タイプに合うように変換されます。比較タイプの優先順位は、(1) 代数比較 (最も高い)、(2) ワイド文字比較、(3) グラフィック比較、(4) 文字比較、(5) ビット比較の順です。例えば、ビット・ストリングと固定小数点値を比較する場合には、10 進数値との代数比較のためにビット・ストリングが 2 進固定小数点フォーマットに変換されます。さらに、10 進数値も 2 進固定小数点フォーマットに変換されます。

長さの異なる 2 つのストリングの比較では、短い方のストリングの右側に埋め込まれます。この埋め込みは、以下のものから構成されます。

- 文字比較のときのブランク
- ビット比較のときの '0'B
- グラフィック比較のときのグラフィック (DBCS) ブランク
- ワイド文字比較のときのワイド文字ブランク ('0020'wx)

以下に、IF ステートメントでの比較演算の例を示します。

```
if A = B
  then action-if-true;
  else action-if-false;
```

A = B の式の演算結果は、これが真であれば '1'B となり、偽であれば '0'B となります。

以下の代入ステートメントでは、

```
X = A <= B;
```

A が B より小さければ、'1'B という値が X に割り当てられます。それ以外の場合は、'0'B という値が割り当てられます。

以下の代入ステートメントでは、

```
X = A = B;
```

最初の等号は代入記号です。2 番目の等号は比較演算子です。A が B と等しければ、'1'B という値が X に割り当てられます。等しくない場合は、'0'B という値が割り当てられます。

算術式での比較演算の例を示します。

```
(X<0)*A + (0<=X & X<=100)*B + (100<X)*C
```

この式の値は X の値に従って、A、B、または C のいずれかになります。

連結演算

連結演算を指定するには、連結挿入文字でオペランド同士を結び付けます。

```
||
```

この連結記号は、左側のオペランドの最後の文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字のすぐあとに (間に何もはさまずに)、右側のオペランドの最初の文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字が続く形で、2 つのオペランドを結合することを表します。

連結演算はストリング (文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字) にしか行えないので、連結演算子を使用すると、ストリング・タイプへの変換が行われることがあります。結果は、RULES コンパイラー・オプションの設定値に応じて異なります。

RULES(IBM) のもとでの結果

RULES(IBM) を指定する場合、連結演算子は以下のように振る舞います。

- いずれかのオペランドがワイド文字である場合は、結果はワイド文字になります。

連結演算

- そうでなく、いずれかのオペランドがグラフィックである場合は、結果はグラフィックになります。
- そうでなく、いずれかのオペランドがビットまたは 2 進数の場合は、結果はビットになります。
- それ以外の場合は、文字になります。

以下に例を示します。

```
decl B bin(4)  initial(4),
      C bit(1)  initial('1'b);
put skip list (B || C);

/* Produces '01001' not 'bbb41' */
```

RULES(ANS) のもとでの結果: RULES(ANS) を指定する場合、連結演算子は以下のように振る舞います。

- いずれかのオペランドがワイド文字である場合は、結果はワイド文字になります。
- そうでなく、いずれかのオペランドがグラフィックである場合は、結果はグラフィックになります。
- そうでなく、両方のオペランドがビットである場合には、結果はビットになります。
- それ以外の場合は、文字になります。

以下に例を示します。

```
decl B bin(4)  initial(4),
      C bit(1)  initial('1'b);
put skip list (B || C);

/* Produces 'bbb41', not '01001' */
```

連結演算の結果は、2 つのオペランドの長さの合計に等しい長さを持つストリングであり、そのタイプ (文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字) は、2 つのオペランドのタイプと同じです。

連結のためにオペランドの変換が必要であった場合は、オペランド変換後のストリングの長さによって結果の長さが決まります。

オペランドと値	演算	結果
A = '010111'B B = '101'B C = 'xy,Z' D = 'aa/BB'	A B	'010111_101'B
	A A B	'010111_010111_101'B
	C D	'xy,Zaa/BB'
	D C	'aa/BBxy,Z'
	B D	'101aa/BB'

上記の最後の例では、ビット・ストリング '101'B が文字ストリング '101' に変換されてから、連結が行われます。結果は、文字ストリングになります。

各種演算の組み合わせ

1 つの演算式の中で、各種演算を組み合わせることができます。どのような組み合わせでもかまいません。

以下に例を示します。

```
declare Result bit(3),
      A fixed decimal(1),
      B fixed binary (3),
      C character(2), D bit(4);
Result = A + B < C & D;
```

この式の中の計算は、それぞれの計算の規則に従って実行されますが、その前に、下記のように必要とするデータ変換が行われます。

- A の 10 進数値が 2 進数値に変換されます。
- A と B を加算する 2 進数加算が行われます。
- この 2 進数の結果が、C の変換された 2 進数値と比較されます。
- ビット・ストリングで表された比較結果が、ビット変数 D の長さまで広げられてから、& 演算が行われます。
- & 演算の結果 (長さ 4 のビット・ストリング) は、変換されずに、右側で切り捨てられて、Result に割り当てられます。

この例の式は、左から右へ順に計算を行うように記述されています。ただし、計算の順序は、式の中に書かれている演算子の優先順位によって決まります。

演算子の優先順位

式を計算するときの演算子の優先順位は、表 21 に示すとおりです。

表 21. 演算の優先順位と変換の手引き

優先度	演算子	演算のタイプ	注釈
1	**	算術	結果はコード化算術フォーマットです。
	接頭演算子 +、-	算術	オペランドがコード化算術フォーマットであれば、変換は不要です。
			オペランドが CHARACTER ストリングまたは数字 (PICTURE) 表記の固定小数点 10 進数であれば、FIXED DECIMAL に変換されます。
			オペランドが数字 (PICTURE) 表記の 10 進浮動小数点数であれば、FLOAT DECIMAL に変換されます。
	接頭演算子 ~	ビット・ストリング	オペランドが BIT ストリングであれば、FIXED BINARY に変換されます。
			BIT 以外のデータはすべて BIT に変換されます。
2	*, /	算術	結果はコード化算術フォーマットです。
3	挿入演算子 +、-	算術	結果はコード化算術フォーマットです。
4		連結	78 ページの『RULES(ANS) のもとでの結果』および 77 ページの『RULES(IBM) のもとでの結果』を参照してください。
5	<, <=, >, >=, >, >	比較	結果は常に '1'B または '0'B です。
6	&	ビット・ストリング	BIT 以外のデータはすべて BIT に変換されます。
7		ビット・ストリング	BIT 以外のデータはすべて BIT に変換されます。
	挿入演算子 ~	ビット・ストリング	BIT 以外のデータはすべて BIT に変換されます。

注:

1. 優先順位が高いものから順に演算子を並べてあります。グループ 1 の優先順位が一番高く、グループ 7 が一番低くなっています。同じ優先順位グループに属する演算子の優先順位はすべて同じです。例えば、累乗演算子 `**` の優先順位は、接頭演算子 `+` と `-`、および `NOT` 演算子 `~` と同じです。
2. 優先順位グループ 1 内の演算子が式の中で複数使われているときは、その式の中での優先順位は右から左への順になります。すなわち最右端の指数または接頭演算子が最高の優先順位を持ち、その隣が次の優先順位を持ち、というようになります。その他の優先順位グループの場合は、同じ優先順位グループ内の演算子が式の中で複数使われているときは、その式の中での計算順序つまり優先順位は、左から右への順になります。

次の式の計算順序は、

$$A + B < C \& D$$

下記のように式に各エレメントを括弧で囲んだ場合と同じです。

$$((A + B) < C) \& D$$

式の計算順序 (したがって、その結果も) は、括弧を使用して変えることができます。括弧で囲まれている式が最初に計算されて 1 つの値が求められ、次にその前後にある演算子に関係づけられています。

例えば、上記の式を次のように変えることができます。

$$(A + B) < (C \& D)$$

A の値が固定小数点 2 進数に変換されてから、加算が行われ、固定小数点 2 進数の結果 (`result_1`) が生成されます。C の値がビット・ストリングに変換され、(このように変換できる場合) `AND` 演算が行われます。この時点で、上の式は次のよう縮小されます。

$$\text{Result_1} < \text{Result_2}$$

`result_2` が 2 進数に変換されてから、代数比較が行われ、式全体の演算結果として長さ 1 のビット・ストリングが生成されます。

演算子の優先順位は、オペランド間 (またはサブオペランド間) の関係で決められます。次の例を考えてみてください。

$$A + (B < C) \& (D \parallel E ** F)$$

この場合、PL/I では、累乗演算を連結より先に実行するということだけが定められています。(D||E ** F) の計算と他方のオペランド (A + (B < C)) の計算との順序関係は定められていません。

どのような演算式 (接頭演算子の式を除く) も、最終的には、単一の挿入演算子演算に変形されるものでなければなりません。その最終的な演算のオペランドと演算子によって、式全体の計算結果の属性が決まります。次の例では、`&` 演算子は、最終段階の挿入演算子演算の演算子です。

$$A + B < C \& D$$

計算結果は長さ 4 のビット・ストリングになります。

次の例では、括弧で囲まれているため、最終段階の挿入演算子演算の演算子が比較演算子になります。

$$(A + B) < (C \& D)$$

計算結果は長さ 1 のビット・ストリングになります。

配列式

配列式には、次のような利用方法があります。

- 割り当てまたは複数の割り当てにおけるソース
- ALL、ANY、POLY、PROD または SUM といった組み込み関数への引数
- (関連パラメーターが、長さが不明なストリングでない場合は) ユーザー・プロシージャおよびユーザー関数への引数
- PUT LIST ステートメントおよび PUT EDIT ステートメントのデータ・リストの項目

配列式を計算すると、結果は配列になります。配列を対象とする演算はすべて、行を主体としてエレメントごとに行われます。したがって、1 つの配列式で参照するすべての配列は、次元の数が同じでなければならず、しかも各次元ごとに境界が同じでなければなりません。

配列式では、演算子 (接頭演算子と挿入演算子の両方とも)、要素変数、および定数も使うことができます。演算の組み合わせの規則やオペランドのデータ変換に関する規則は、エレメント演算の場合と同じです。

接頭演算子と配列

配列に接頭演算子演算を行うと、同じ境界を持つ配列になります。この配列の各エレメントは、もとの配列の各エレメントに行われた演算の結果です。以下に例を示します。

```
If A is the array      5   3  -9
                      1   2   7
                      6   3  -4

then -A is the array  -5  -3   9
                    -1  -2  -7
                    -6  -3   4
```

挿入演算子と配列

挿入演算子演算の一方のオペランドが配列変数のときは、他方のオペランドはエレメント、別の配列でもかまいません。

配列とエレメントの演算

エレメントと配列が挿入演算子で結ばれている式の結果は、もとの配列と同じ境界を持つ配列になります。この配列の各エレメントは、元の配列内の対応するエレメントと単一エレメントとの間で行われた演算の結果になります。以下に例を示します。

```
If A is the array      5  10   8
                      12 11   3

then A*3 is the array  15 30  24
```


36 33 9

and 9 > A is the array of 1 0 1
bit strings of length 1 0 0 1

配列とエレメントの間で演算を行う場合、そのエレメントは、その配列内のエレメントであってもかまいません。次の代入ステートメントを考えてください。

A = A * A(1,2);

再度 A に上記の値を使えば、新しく A に割り当てられる値は次のようになります。

50 100 800
1200 1100 300

つまり、A(1,2) の値が再び取り出されます。

配列同士の演算

挿入演算子演算の 2 つのオペランドが共に配列である場合は、この 2 つの配列の次元の数は同じでなければならず、しかも対応する次元ごとに下限と上限が同じでなければなりません。演算結果は、元の 2 つの配列と同じ限界を持つ配列になります。演算は、元の 2 つの配列の対応するエレメント間で行われます。以下に例を示します。

If A is the array 2 4 3
6 1 7
4 8 2
and if B is the array 1 5 7
8 3 4
6 3 1
then A+B is the array 3 9 10
14 4 11
10 11 3
and A*B is the array 2 20 21
48 3 28
24 24 2
and A>B is the array of 1 0 0
bit strings of length 1 0 0 1
0 1 1

構造式

構造式は、構造体参照とは異なり、関連するパラメーターに定数範囲がある限りは、割り当てを行うときと、プロシーチャーまたは関数への引数としてのみ使用できます。

構造式の中で使われる構造変数はすべて同じように構造化されていなければなりません。すなわち、以下の条件が満たされていなければなりません。

- 構造体は、小構造化がすべて同じで、中に含まれるエレメントと配列の数が同じでなければなりません。
- 構造体内 (および小構造化があれば、その内部で) のエレメントや配列の位置指定は、同じでなければなりません。
- 対応する位置にある配列は、同じ境界を持たなければなりません。

制限付き式

PL/I に (おそらく、符号付きの) 定数が必要なときには、*制限付き式* を使用することができます。制限付き式の値はコンパイル時に計算され、定数として使用されます。例えば、式を使用して、以下に必要な定数を定義することができます。

- 静的、パラメーターおよび基本宣言のエクステンツ
- 入り口記述のエクステンツ
- 静的初期設定で使用される値および反復因数

制限付き式は、通常の式と同等ですが、各オペランドが以下のものでなければなりません。

- 定数または名前のついた定数。名前付き定数は、使用する前に宣言しなければなりません。
- 組み込み関数は、制限付きの式 (単数または複数) に適用されます。この組み込み関数は、次のカテゴリーから用いられます。
 - ストリング処理
 - 算術 (RANDOM を除く)
 - 数学
 - 浮動小数点照会
 - 浮動小数点操作
 - 整数操作
 - 精度処理
 - 配列処理機能の DIMENSION、LBOUND、および HBOUND
 - ストレージ制御関数 BINARYVALUE、LENGTH、NULL、OFFSETVALUE、POINTERVALUE、SIZE、STORAGE、および SYSNULL
- タイプ付き関数 BIND、CAST、FIRST、LAST、RESPEC、SIZE、および VALUE

例

```

dcl Max_names fixed bin value (1000),
    Name_size fixed bin value (30),
    Addr_size fixed bin value (20),
    Addr_lines fixed bin value (4);
dcl 1 Name_addr(Max_names),
    2 Name char(Name_size),
    2 * union,
    3 Address char(Addr_lines*Addr_size), /* address */
    3 addr(Addr_lines) char(Addr_size),
    2 * char(0);
dcl One_Name_addr char(size(Name_addr(1))); /* 1 name/addr*/
dcl Two_Name_addr char(length(One_Name_addr)
                        *2); /* 2 name/addrs */
dcl Name_or_addr char(max(Name_size,Addr_size)) based;

dcl Ar(10) pointer;
dcl Ex entry( dim(lbound(Ar):hbound(Ar)) pointer);
dcl Identical_to_Ar( lbound(Ar):hbound(Ar) ) pointer;

```

この例で、名前付き定数のいずれかの値を変更すると、従属宣言はすべて自動的に再計算されます。

第 5 章 データ変換

計算データ変換の組み込み関数	87	例	99
ストリングの長さの変換	87	小数部分がある DECIMAL FIXED から小数部分	
算術値の精度の変換	88	がある BINARY FIXED への変換	99
モードの変換	88	算術データからビット・ストリングへの変換	99
その他のデータ属性の変換	88	算術データから文字への変換	99
ソースからターゲットへの変換規則	90	変換エラー	100

この章では、計算データのデータ変換について説明します。PL/I は、特定の属性セットを持つデータ項目が、別の属性セットを持つデータ項目に割り当てられると、データ変換を行います。この章では、ソース は、変換されるデータ項目を意味し、ターゲット は、ソースを変換した属性を意味します。この章では、データの変換について以下の事項を説明します。

- 組み込み関数
- ストリングの長さ
- 算術値の精度
- モード
- ソースからターゲットへの変換規則

章の最後にデータの変換の例が記載されています。

ロケーター・データのデータ変換は、263 ページの『ロケーターの変換』で説明されています。

計算データ項目の値が変換されると、その内部表記、精度 (算術値の場合)、モード (算術値の場合)、または長さ (ストリング値の場合) が変わることがあります。下の表は、どのような場合にほかの属性に変換が行われるかをまとめたものです。

事例	ターゲットの属性
割り当て	代入記号の左側にある変数の属性
式のオペランド	式を計算するときの規則によって決まる
ストリームの入力 (GET ステートメント)	受け入れフィールドの属性
ストリームの出力 (PUT ステートメント)	ストリームが編集ディレクティブであれば、フォーマット・リストによって決まり、それ以外の場合は文字ストリング
PROCEDURE または ENTRY への引数	対応するパラメーターの属性
組み込み関数または疑似変数への引数	関数または疑似変数によって決まる
INITIAL 属性	初期設定される変数のほかの属性
RETURN ステートメントの式	PROCEDURE ステートメントで指定されている属性
DO ステートメントのオプション BY、TO、または REPEAT	制御変数の属性

次の場合は、文字値に変換されることがあります。

ステートメント	オプション
DISPLAY	
レコード入出力	KEYFROMKEY

ステートメント	オプション
OPEN	TITLE

次の場合は、BINARY 値に変換されることがあります。

ステートメント	オプション/属性/参照
DECLARE、ALLOCATE、DEFAULT	長さ、サイズ、次元、境界、反復因数
DELAY	ミリ秒
FORMAT (および GET や PUT 内のフォーマット項目)	反復因数、d、s、p
OPEN	LINESIZE、PAGESIZE
I/O	SKIP、LINE、IGNORE
ほとんどのステートメント	添え字

ソース・データ項目とターゲット・データ項目のすべての属性 (ストリングの長さは除く) が、コンパイル時に指定されていなければなりません。変換は以下の条件の 1 つを起こすことがあります。 CONVERSION、OVERFLOW、SIZE、または STRINGSIZE。 (387 ページの『第 17 章 条件』を参照してください。)

定数は実行時だけでなくコンパイル時に変換されることもあります。どの場合も、行われる変換はここで述べられているとおりです。

次に示す変換の説明において、

- M は FIXED BINARY の最大精度です。これは、コンパイラー・オプション LIMITS(FIXEDBIN($M1$, $M2$)) からの値 $M2$ です。
- N は FIXED DECIMAL の最大精度です。これは、コンパイラー・オプション LIMITS(FIXEDDEC($N1$, $N2$)) からの値 $N2$ です。

1 つの演算で変換が複数回必要になることがあります。ただし、必ずしも複数回行われるとは限りません。変換規則を理解するには、これらの演算を別々に考えることをお勧めします。例えば、次のようになります。

```

dcl A fixed dec(3,2) init(1.23);
dcl B fixed bin(15,5);
B = A;
```

この例では、1.23 という 10 進数表記は、まず BINARY (11,7) に変換されて 1.0011101B となります。次に、精度の変換が行われて、BINARY(15,5) の 1.00111B という値になります。

その他の変換例は、この章の終わりに示してあります。

計算データ変換の組み込み関数

式の計算の途中、入出力 GET や PUT 演算、代入演算、および引数とパラメータ間で変換を行うことができます。さらに、以下の組み込み関数を使用すれば、変換を開始させることもできます。

BINARY	FIXED	REAL
BIT	FLOAT	SIGNED
CHAR	GRAPHIC	UNSIGNED
COMPLEX	IMAG	WIDECHAR
DECIMAL	PRECISION	

個々の関数については、417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』で説明します。

それぞれの関数は、必要な変換を行って、その関数名で指定される属性を持つ値を戻します。

組み込み関数 COMPLEX、GRAPHIC、および IMAG によって行われる変換は例外ですが、必要な属性を持つ PL/I 変数に割り当てを行っても、上記の組み込み関数で行われる変換と同じ結果を得ることができます。しかし、組み込み関数を使用するほうが、変換を実行するために変数を作成するよりも容易であることは明らかです。

stringの長さの変換

ソース・stringは、ターゲット・stringの左から右へ割り当てられます。ソース・stringがターゲット・stringよりも長いときは、右側の入りきらなかった文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字は無視され、STRINGSIZE 条件が起こります。ターゲット・stringが固定長で、ソース・stringよりも長いときは、ターゲット・stringの右側が埋め込まれます。STRINGSIZE が割り込み禁止になっており、ソース・stringやターゲット・string (またはこれらの両方) の長さが実行時に判別され、しかもターゲット・stringが短すぎてソース・stringが入りきらない場合には、予測できない結果が発生することがあります。

注: SUBSTR をパラメーターとして変数と一緒に使用し、その変数がターゲットに入っていないstringを指定すると、STRINGRANGE 条件が使用可能になっていない場合、予測できない結果になることがあります。

stringにはblankが埋め込まれ、ビット・stringには '0'B、漢字stringには DBCS blank、ワイド文字stringにはワイド文字blankがそれぞれ埋め込まれます。

```
declare Subject char(10);
Subject = 'Transformations';
```

'Transformations' は、15 文字です。したがって、PL/I がそのstringを Subject に割り当てると、stringの右端から 5 文字を切り捨てます。これは次の割り当てを実行するのと同様です。

```
Subject = 'Transforma';
```

ストリングの長さの変換

下に示す最初の 2 つのステートメントは、同じ値を `Subject` に割り当てます。また、最後の 2 つのステートメントは、同じ値を `Code` に割り当てます。

```
Subject = 'Physics';
Subject = 'Physics  ';
declare Code bit(10);
Code = '110011'B;
Code = '1100110000'B;
```

次の 2 つのステートメントは、`Subject` に同等の値を割り当てません。

```
Subject = '110011'B;
Subject = '1100110000'B;
```

最初のステートメントが実行されると、右側のビット定数がまず文字ストリングに変換されてから、ビットのゼロではなくブランク文字が右側に埋め込まれます。このステートメントは次のステートメントと同等です。

```
Subject = '110011bbbb';
```

この 2 つのステートメントの 2 番目のステートメントでは、ビットから文字タイプへの変換が必要です。これは次のステートメントと同等です。

```
Subject = '1100110000';
```

ストリング値が、**VARYING** 属性を持つストリング変数に割り当てられるときは、ブランク文字またはゼロのビットによる埋め込みは行われません。代わりに、ターゲット・ストリング変数の長さが、割り当てられたストリングの長さにセットされます。ただし、割り当てられたストリングが、可変長ストリング変数で宣言されている最大の長さより長いときは、切り捨てが行われます。

算術値の精度の変換

算術値のデータ属性がターゲットのデータ属性（精度は除く）と同じであれば、精度の変換が必要になります。

固定小数点データ項目の場合は、10 進数も 2 進数も小数点で位置合わせされて精度が変換されます。したがって、左側または右側で埋め込みや切り捨てが行われることがあります。左側（最高位桁）でゼロ以外の 2 進数または 10 進数が失われると、**SIZE** 条件が起こります。

浮動小数点データ項目の場合は、右側（最低位桁）で、切り捨てまたはゼロによる埋め込みが行われることがあります。

モードの変換

複合値が実数値に変換される場合は、虚数部分が無視されます。実数値が複合値に変換される場合は、虚数部分がゼロになります。

その他のデータ属性の変換

下記のデータ属性を持つデータ項目をソースからターゲットへ変換する場合の規則について、以下に説明します。

- コード化算術フォーマット
FIXED BINARY

FIXED DECIMAL
 FLOAT BINARY
 FLOAT DECIMAL

- 算術文字 PICTURE
- CHARACTER
- BIT
- GRAPHIC
- WIDECHAR

10 進数表記と 2 進数表記の間で変換が行われると、値が変わることがあります。

2 進数と 10 進数の間の変換では、係数 3.32 が次のように使用されます。

- n 桁の 10 進数は、 $\text{CEIL}(n \times 3.32)$ 桁の 2 進数に変換されます。
- n 桁の 2 進数は、 $\text{CEIL}(n / 3.32)$ 桁の 10 進数に変換されます。

変換の計算には、表 22 にある CEIL 値の表を参照してください。

表 22. $\text{CEIL}(n \times 3.32)$ の値と $\text{CEIL}(n / 3.32)$ の値の表

n	$\text{CEIL}(n \times 3.32)$	n	$\text{CEIL}(n / 3.32)$
1	4	1-3	1
2	7	4-6	2
3	10	7-9	3
4	14	10-13	4
5	17	14-16	5
6	20	17-19	6
7	24	20-23	7
8	27	24-26	8
9	30	27-29	9
10	34	30-33	10
11	37	34-36	11
12	40	37-39	12
13	44	40-43	13
14	47	44-46	14
15	50	47-49	15
16	53 ¹	50-53	16
17	57	54-56	17
18	60	57-59	18
19	64	60-63	19
20	67	64-66	20
21	70	67-69	21
22	74	70-73	22
23	77	74-76	23
24	80	77-79	24
25	83	80-83	25
26	87	84-86	26
27	90	87-89	27
28	93	90-92	28
29	97	93-96	29
30	100	97-99	30
31	103	100-102	31
32	107	103-106	32
33	110	107-109	33
		110-112	34

表 22. CEIL (n*3.32) の値と CEIL (n/3.32) の値の表 (続き)

n	CEIL (n*3.32)	n	CEIL (n/3.32)
		113-116	35
<p>注 1: ceil(16*3.32) = 54 のときは、53 という値が使用されます。そうでない場合には、浮動小数点 10 進数 (16) が 2 進数に変換され、(浮動小数点 2 進数 (54) が拡張浮動小数点として表示されるので) 長精度の浮動小数点から拡張精度の浮動小数点に変換されることになります。</p>			

固定小数点整数値の場合は、変換しても値は変わりません。小数部分を持つ固定小数点の値の場合は、因数 3.32 によって必要なだけの桁数またはビット数が用意され、変換後の値ともとの値の違いは最低位の 1 桁 (1 ビット) 未満に抑えられます。

例えば、属性が FIXED DECIMAL (1,1) である 10 進定数 .1 は、.0001B という 2 進数値に変換され、したがって 1/10 は 1/16 に変換されます。属性が FIXED DECIMAL (2,2) である 10 進定数 .10 は、.0001100B という 2 進数値に変換され、したがって 10/100 は 12/128 に変換されます。

ソースからターゲットへの変換規則

ターゲット: コード化算術フォーマット

ソース:

**FIXED BINARY、FIXED DECIMAL、
FLOAT BINARY、および FLOAT DECIMAL**

これらはすべてコード化算術データです。コード化算術データ間での変換の規則については、ターゲットがこれらの各データ・タイプである場合に、その説明箇所で述べています。

算術文字 PICTURE

データは、まず 10 進数に変換されます。そのスケールと精度は、対応する PICTURE 指定によって決まります。次に、この 10 進値がターゲットの基数、スケール、モード、および精度に変換されます。FIXED DECIMAL または FLOAT DECIMAL をソースとして使用しているコード化算術データの特定のターゲット・タイプの説明を参照してください。

CHARACTER

ソース・ストリングは有効な算術定数または複素数式でなければなりません。それ以外の場合は、CONVERSION 条件が生じます。定数の頭に符号が付いていてもよく、定数の前後にブランクがあってもかまいません。符号と定数の間には、ブランクがあってはなりません。また、複素数式では、実数部分の終わりと虚数部分の先頭の符号との間にブランクがあってはなりません。

定数は、基数、スケール、モード、および精度の属性を持ちます。割り当ての場合のように、ターゲットの属性がソースの属性と無関係であるときは、定数はタ

ターゲットの属性に変換されます。ソースとして定数の属性を使用しているコード化算術データの特定のターゲット・タイプの説明を参照してください。

演算式の計算の場合のように中間結果が必要なときは、中間結果の属性は、もとのストリングの代わりに精度 (N,0) の 10 進固定小数点値が使われている場合の中間結果の属性と同じです。(このため、コンパイラーは、定数の属性には関係なく、あらゆる場合に対処できるコードを生成することができます。) この結果、定数の小数部分が失われることがあります。ソースとして **FIXED DECIMAL** を使用しているコード化算術データの特定のターゲット・タイプの説明を参照してください。

文字データ項目から中間の 10 進固定小数点への最初の変換では、値が中間結果のデフォルト・サイズを超える可能性があります。超える場合、使用可能になっていれば、**SIZE** 条件が起こります。

複素数を表す文字ストリングが実数のターゲットに割り当てられる場合、ストリングの実数部分だけがターゲットに割り当てられるので、そのストリングの虚数部分が正しい算術文字であるかどうかの検査は行われず、**CONVERSION** 条件も起こりません。

ソースがヌル・ストリングまたは 1 つ以上のブランクから成るストリングである場合、ターゲットにはゼロの値が割り当てられます。 **CONVERSION** 条件は起こりません。

BIT

演算式の計算時に変換が起こる場合は、ソースのビット・ストリングは **FIXED BINARY(M,0)** の符号なし値に変換されます。 **FIXED BINARY** をソースとして使用しているコード化算術データの特定のターゲット・タイプの説明を参照してください。

ソース・ストリングが、使用可能な精度よりも長いときは、左側のビットが無視されます。ゼロ以外のビットが失われると、**SIZE** 条件が起こります。

ヌル・ストリングはゼロの値になります。

GRAPHIC

グラフィック変数とストリングが **CHARACTER** に変換されたあとは 90 ページで説明されている文字ソースの規則に従ってください。

WIDECHAR

ワイド文字変数とストリングが **CHARACTER** に変換された後は、90 ページで説明されている文字ソースの規則に従ってください。

ターゲット: **FIXED BINARY (p2,q2)**

ソース:

FIXED DECIMAL (p1,q1)

結果の精度は、 $p2 = \min(M, 1 + \text{CEIL}(p1 * 3.32))$ で、 $q2 = \text{CEIL}(\text{ABS}(q1 * 3.32)) * \text{SIGN}(q1)$ です。

FLOAT BINARY (p1)

88 ページの『算術値の精度の変換』で示したように、精度が変換されます。 p1 は宣言または指定されている値で、q1 は、2 進小数点の位置で決められ、指数の値で変更されます。

FLOAT DECIMAL (p1)

FIXED DECIMAL から FIXED BINARY への変換の場合と同じように精度が変換されます。p1 は宣言または指定されている値で、q1 は 10 進小数点の位置で決められ、指数の値で変更されます。

算術文字 PICTURE

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

CHARACTER

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

BIT

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

GRAPHIC

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

WIDECHAR

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

ターゲット: **FIXED DECIMAL (p2,q2)**

--

ソース:

FIXED BINARY (p1,q1)

結果の精度は、 $p2=1+\text{CEIL}(p1/3.32)$ で、 $q2=\text{CEIL}(\text{ABS}(q1/3.32))*\text{SIGN}(q1)$ です。

FLOAT BINARY (p1)

FIXED BINARY から FIXED DECIMAL への変換の場合と同じように精度が変換されます。p1 は宣言または指定されている値で、q1 は 2 進小数点の位置で決められ、指数の値で変更されます。

FLOAT DECIMAL (p1)

88 ページの『算術値の精度の変換』で説明したように、精度が変換されます。p1 は宣言または指定されている値で、q1 は 10 進小数点の位置で決められ、指数の値で変更されます。

算術文字 PICTURE

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

CHARACTER

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

BIT

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

GRAPHIC

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

WIDECHAR

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

ターゲット: **FLOAT BINARY (p2)**

ソース:

FIXED BINARY (p1,q1)

結果の精度は、 $p2=p1$ です。指数は、値の小数部分を表します。

FIXED DECIMAL (p1,q1)

結果の精度は、 $p2=CEIL(p1*3.32)$ です。指数は、値の小数部分を表します。

FLOAT DECIMAL (p1)

結果の精度は、 $p2=CEIL(p1*3.32)$ です。

算術文字 PICTURE

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

CHARACTER

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

BIT

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

GRAPHIC

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

WIDECHAR

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

ターゲット: **FLOAT DECIMAL (p2)**

ソース:

FIXED BINARY (p1,q1)

結果の精度は、 $p2=CEIL(p1/3.32)$ です。指数は、値の小数部分を表します。

FIXED DECIMAL (p1,q1)

結果の精度は、 $p2=p1$ です。指数は、値の小数部分を表します。

FLOAT BINARY (p1)

結果の精度は、 $p2=CEIL(p1/3.32)$ です。

算術文字 PICTURE

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

CHARACTER

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

BIT

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

GRAPHIC

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

WIDECHAR

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

ターゲット: 算術文字 PICTURE

算術文字 PICTURE データ項目は、10 進固定小数点または 10 進浮動小数点の値を文字表記で表したものです。ソースから算術文字 PICTURE への変換に関する以下の説明では、左端または右端の桁を失わずに割り当てを行うのに必要なターゲットの属性を示してあります。

ソース:

FIXED BINARY (p1,q1)

ターゲットが次の条件を満たしている必要があります。

fixed decimal (1+x+q-y,q) or
float decimal (x)

ただし、 $x \geq \text{CEIL}(p1/3.32)$ 、 $y = \text{CEIL}(q1/3.32)$ 、かつ $q \geq y$ であること。

FIXED DECIMAL (p1,q1)

ターゲットが次の条件を満たしている必要があります。

fixed decimal (x+q-q1,q) or
float decimal (x)

ただし、 $x \geq p1$ かつ $q \geq q1$ であること。

FLOAT BINARY (p1)

ターゲットが次の条件を満たしている必要があります。

fixed decimal (p,q) or
float decimal (p)

ただし、 $p \geq \text{CEIL}(p1/3.32)$ 、かつ p と q の値はソースの指数で表しうる値の範囲を考慮していること。

FLOAT DECIMAL (p1)

ターゲットが次の条件を満たしている必要があります。

fixed decimal (p,q) or
float decimal (p)

ただし、 $p \geq p1$ 、かつ p と q の値はソースの指数で表しうる値の範囲を考慮していること。

算術文字 PICTURE

ソースの暗黙定義される属性は、FIXED DECIMAL または FLOAT DECIMAL です。該当ターゲットに関する項目を参照してください。

CHARACTER

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

BIT(n)

ターゲットが次の条件を満たしている必要があります。

fixed decimal (1+x+q,q) or
float decimal (x)

ただし、 $x \geq \text{ceil}(n/3.32)$ かつ $q \geq 0$ であること。

GRAPHIC

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

WIDECHAR

90 ページのターゲット: コード化算術を参照してください。

ターゲット: CHARACTER**ソース:****FIXED BINARY、FIXED DECIMAL、
FLOAT BINARY、および FLOAT DECIMAL**

以下に説明するように、コード化算術値は 10 進定数 (負数の場合は頭に負符号 (-) が付けられる) に変換されます。その定数は、ソースの属性から長さが導出される中間の文字ストリングに入れられます。次に、この中間のストリングが、ストリングの割り当ての規則に従ってターゲットに割り当てられます。

コード化算術値から文字ストリングへの変換の規則は、リスト・ディレクティブ出力、データ・ディレクティブ出力、およびキーの評価 (REGIONAL ファイルの場合も) でも使用されます。

FIXED BINARY (p1,q1)

まず、2 進数の精度 (p1,q1) が、同等の 10 進数の精度 (p,q) に変換されます。ただし、 $p=1+\text{CEIL}(p1/3.32)$ および $q=\text{CEIL}(\text{ABS}(q1/3.32))*\text{SIGN}(q1)$ です。そのあとの規則は、FIXED DECIMAL から CHARACTER への変換の規則と同じです。

FIXED DECIMAL (p1,q1)

$p1 \geq q1 \geq 0$ の場合

- 定数は、幅 $p1+3$ のフィールドで右寄せされます。(負符号 (-)、10 進または 2 進小数点、および小数点の値の先行ゼロを入れる場合に備えて、3 桁を用意しておく必要があります。)
- 小数部分の小数点のすぐ前にあるゼロ 1 つを除いて、先行ゼロがブランクで置き換えられます。ソースの値がゼロのときも、ゼロ 1 つが残されます。
- 負数であれば、最初の桁の前に負符号 (-) が付けられます。正の値には符号は付けられません。
- $q1=0$ のときは、小数点は入りません。 $q1>0$ のときは、小数点が入られ、定数の小数部分は q 桁です。

$p1 < q1$ または $q1 < 0$ の場合は、定数の右方に位取り係数が付加されます。定数は任意指定の符号付き整数です。項目の値がゼロであっても、位取り係数が付けられ、下記の構文になります。

F{+|-}nn

ソースからターゲットへの変換規則

ただし、 $\{+|- \}nn$ の値は $-q1$ です。

中間結果のストリングの長さは $p1+k+3$ です。ただし、 k は、 $q1$ の値が入りきるのに必要な桁数です (符号と英字 F は桁数に数えられません)。

算術値が複素数の場合、中間結果のストリングは、虚数部分が実数部分に連結した形になります。左側の実数部分はソースの実数部分として生成され、右側の虚数部分は、符号と英字 I が必ず付加されます。このようにして生成されたストリングは、2 つのエレメントの間に空白をはさんでいない複素数式となります。この中間結果のストリングの長さは次のとおりです。

```
2*p1+7      for p1>=q1>=0
2*(p1+k)+7   for p1<q1 or q1<0
```

下の例は、実数および複素数の固定小数点 10 進数値から生成される、中間結果のストリングを示します。

Precision	Value	String
(5,0)	2947	'bbbb2947'
(4,1)	-121.7	'b-121.7'
(4,-3)	-3279000	'-3279F+3'
(2,1)	1.2+0.3I	'bbb1.2+0.3I'

FLOAT BINARY (p1)

まず、浮動小数点 2 進数の精度 ($p1$) が同等の浮動小数点 10 進数の精度 (p) に変換されます。ただし、 $p=\text{CEIL}(p1/3.32)$ です。そのあとの規則は、FLOAT DECIMAL から CHARACTER への変換の規則と同じです。

FLOAT DECIMAL (p1)

ソースが 10 進浮動小数点数のときは、 $E(w,d,s)$ という形の E フォーマット項目で伝送される場合と同様に変換されます。ただし、以下のような条件です。

- w、中間ストリングの長さは $p1+8$ です。
- d、小数桁の数は $p1-1$ です。
- s、有効数字の数は $p1$ です。

算術値が複素数の場合、中間結果のストリングは、虚数部分が実数部分に連結した形になります。左側の実数部分はソースの実数部分として生成され、右側の虚数部分は、符号と英字 I が必ず付加されます。このようにして生成されたストリングは、2 つのエレメントの間に空白をはさんでいない複素数式となります。中間結果のストリングの長さは $2*p1+17$ です。

下の例は、実数および複素数の浮動小数点 10 進数値から生成される、中間結果のストリングを示します。

Precision	Value	String
(5)	1735*10**5	'b1.7350E+0008'
(5)	-.001663	'-1.6630E-0003'
(3)	1	'b1.00E+0000'
(5)	17.3+1.5I	'b1.7300E+0001+1.5000E+0000I'

算術文字 PICTURE

実数の算術文字フィールドは、文字ストリングと解釈され、文字ストリングの長さを変換する際の規則に従ってターゲット・ストリングに割り当てられます。複素数の算術文字フィールドの場合は、実数部分と虚数部分が連結されてから、ターゲット・ストリングに割り当てられます。そのターゲット・ストリングには挿入文字が含まれます。

BIT

ビットの 0 は文字の 0 になり、ビットの 1 は文字の 1 になります。ヌル・ビット・ストリングは、ヌル文字ストリングになります。生成された文字ストリングは、ストリングの長さを変換する際の規則に従ってターゲット・ストリングに割り当てられます。

GRAPHIC

DBCS が SBCS に変換されるのは、対応する SBCS 文字がある場合のみです。そうでない場合には、CONVERSION 条件が起こります。

WIDECHAR

ワイド文字から文字への変換は、すべてのワイド文字の値が '0080'wx より小さい場合にだけ実行されます。そうでない場合には、CONVERSION 条件が起こります。

ターゲット: BIT

ソース:**FIXED BINARY, FIXED DECIMAL, FLOAT BINARY, および FLOAT DECIMAL**

必要に応じて、算術値は 2 進数に変換され、符号や小数部分は無視されます。(複素数の算術値の場合は、虚数部分も無視されます。) このようにして生成された 2 進値は、ビット・ストリングと見なされ、ストリングを割り当てる際の規則に従ってターゲット・ストリングに割り当てられます。

FIXED BINARY (p1,q1)

中間結果のビット・ストリングの長さは、次の式で求められます。

$$\min(M, (p1-q1))$$

(p1-q1) が負数またはゼロのときは、ヌル・ビット・ストリングが生成されます。

下の例は、固定小数点 2 進数値から生成される、中間結果のストリングを示します。

Precision	Value	String
(1)	1	'1'B
(3)	-3	'011'B
(4,2)	1.25	'01'B

FIXED DECIMAL (p1,q1)

中間結果のビット・ストリングの長さは、次の式で求められます。

$$\min(M, \text{CEIL}((p1-q1)*3.32))$$

(p1-q1) が負数またはゼロのときは、ヌル・ビット・ストリングが生成されます。

下の例は、固定小数点 10 進数値から生成される、中間結果のストリングを示します。

ソースからターゲットへの変換規則

Precision	Value	String
(1)	1	'0001'B
(2,1)	1.1	'0001'B

FLOAT BINARY (p1)

中間結果のビット・ストリングの長さは、次の式で求められます。

$$\min(M, p1)$$

FLOAT DECIMAL (p1)

中間結果のビット・ストリングの長さは、次の式で求められます。

$$\min(M, \text{ceil}(p1 * 3.32))$$

算術文字 PICTURE

まず、データは、算術 PICTURE 指定で決められたスケールと精度を持つ 10 進数として解釈されます。次に、その項目は、FIXED DECIMAL または FLOAT DECIMAL から BIT への変換規則に従って変換されます。

CHARACTER

文字の 0 はビットの 0 になり、文字の 1 はビットの 1 になります。0 または 1 以外の文字があると、CONVERSION 条件が起こります。ヌル・ストリングは、ヌル・ビット・ストリングになります。生成されたビット・ストリング (その長さはソースの文字ストリングの長さと同じ) は、ストリングを割り当てる際の規則に従ってターゲットに割り当てられます。

GRAPHIC

グラフィックの 0 はビットの 0 になり、グラフィックの 1 はビットの 1 になります。0 または 1 以外のグラフィックがあると、CONVERSION 条件が起こります。ヌル・ストリングは、ヌル・ビット・ストリングになります。生成されたビット・ストリング (その長さはソースの漢字ストリングの長さと同じ) は、ストリングを割り当てる際の規則に従ってターゲットに割り当てられます。

WIDECHAR

ワイド文字の 0 ('0030'wx) はビットの 0 になり、ワイド文字の 1 ('0031'wx) はビットの 1 になります。0 または 1 以外のワイド文字があると、CONVERSION 条件が起こります。ヌル・ストリングは、ヌル・ビット・ストリングになります。生成されたビット・ストリング (その長さはソースのワイド文字ストリングの長さと同じ) は、ストリングを割り当てる際の規則に従ってターゲットに割り当てられます。

ターゲット: GRAPHIC

--

最初に、非グラフィック・ソースは、95 ページの『ターゲット: Character』で説明した規則に従って文字に変換されます。そのあとで、その結果の文字ストリングが DBCS ストリングに変換されます。

ターゲット: WIDECHAR

--

最初に、ワイド文字以外のソースは、95 ページの『ターゲット: Character』で説明した規則に従って文字に変換されます。そのあとで、その結果の文字ストリングがワイド文字ストリングに変換されます。

例

小数部分がある DECIMAL FIXED から小数部分がある BINARY FIXED への変換

```
dcl I fixed bin(31,5) init(1);
I = I+.1;
```

この結果、I の値は 1.0625 になります。これは、.1 が FIXED BINARY (5,4) に変換され、2 進数の近似値が 0.0001B (端数は丸められません) となるためです。この数の 10 進表記は .0625 となります。.1 の代わりに .1000 を指定した場合の結果は、これと異なります。

算術データからビット・ストリングへの変換

```
dcl A bit(1),
D bit(5);
A=1; /* A has value '0'B */
D=1; /* D has value '00010'B */
D='1'B; /* D has value '10000'B */
if A=1 then go to Y;
else go to X;
```

これは X への分岐になります。なぜなら、下記の一連の処置が取られ、A への割り当てが行われるからです。

1. 10 進定数の 1 の属性は FIXED DECIMAL(1,0) です。この定数は、属性が FIXED BINARY(4,0) である一時記憶域に割り当てられ、0001B という値を取ります。
2. 次に、この値が長さ (4) のビット・ストリングに変換されて、'0001'B になります。
3. ビット・ストリングは A に割り当てられています。A は長さ 1 に宣言されており、割り当てられる値は長さ 4 を獲得するので、右方で切り捨てが発生し、最終的には A は '0'B の値を持ちます。

IF ステートメント内の比較演算では、'0'B と 1 が FIXED BINARY に変換され、算術値として比較されます。両者は等しくないので、A=1 の関係は偽の結果になります。

D への最初の割り当てでは、A への割り当て時と同じような一連の処置が行われます。ただし、割り当てられる値の右側にゼロが埋め込まれる点が異なります。これは、D の長さが、割り当てられる値の長さより 1 だけ大きい長さとして宣言されているからです。

算術データから文字への変換

次に示す例では、負符号 (-)、10 進または 2 進小数点、および小数点の前の先行ゼロを入れる場合に備えて、3 桁のブランクを用意しておく必要があります。

```
decl A char(4),  
      B char(7);  
A='0'; /*A has value '0bbb'*/  
A=0;   /*A has value 'bbb0'*/  
B=1234567; /*B has value 'bbb1234'*/
```

変換エラー

```
decl Ctlno char(8) init('0');  
do I=1 to 100;  
  Ctlno=Ctlno+1;  
  :  
end;
```

この例では、システムで許可される FIXED DECIMAL の精度の最大値に 15 が使用されました。この例では、下記の一連の処理が行われるので、CONVERSION 条件が起こります。

1. CTLNO の初期値、すなわち '0bbbbbbb' は FIXED DECIMAL(15,0) に変換されます。
2. 属性 FIXED DECIMAL(1,0) を持つ 10 進定数 1 が追加されます。追加の規則に従って、結果の精度は (16,0) です。
3. 次に、この値を再び CTLNO に割り当てるために、この値の長さ 18 の文字ストリングに変換されます。
4. CTLNO の長さは 8 なので、割り当てによって右側が切り捨てられ、CTLNO の最終的な値はブランクだけになります。2 回目のループでは、この値を算術タイプに正しく変換できません。

第 6 章 プログラムの編成

プログラム	101	BYVALUE および BYADDR の使用	125
プログラム構造	101	INONLY、INOUT、および OUTONLY の使用	126
プログラムの活動化	102	仮引数	127
プログラムの終了	103	MAIN プロシージャへの引数の引き渡し	128
ブロック	103	開始ブロック	129
ブロックの活動化	103	BEGIN ステートメント	129
ブロックの終了	104	開始ブロックの活動化	129
パッケージ	104	開始ブロックの終了	129
プロシージャ	108	入り口データ	130
PROCEDURE ステートメントおよび ENTRY ステートメント	108	入り口定数	131
ENTRY ステートメント	110	入り口変数	131
パラメーター属性	111	ENTRY 属性	132
プロシージャの活動化	114	OPTIONAL 属性	135
プロシージャの終了	115	LIST 属性	136
再帰的プロシージャ	116	LIMITED 属性	140
外部プロシージャの動的ロード	118	総称入り口	141
サブルーチン	121	GENERIC 属性	141
例 1	121	入り口呼び出しまたは入り口値	144
例 2	122	CALL ステートメント	144
組み込みサブルーチン	123	RETURN ステートメント	145
関数	123	サブルーチンからの戻り	145
例	123	関数からの戻り	145
組み込み関数	125	OPTIONS オプションとその属性	146
プロシージャへの引数の引き渡し	125	RETURNS オプションとその属性	156

この章では、いくつかのステートメントを各種のブロックにまとめて、PL/I プログラムを編成する方法、ブロック間で制御が移される方法、および異なるブロックで同一データを使用する方法を説明します。

多数のプログラマーが手分けして 1 つのプログラムを作成する場合は特に、プログラムを複数のブロックに適切に分割して作業を進めると、プログラムのコーディングもテストも簡単になります。プログラムを適切に分割すれば、ストレージの有効利用にもつながります。なぜなら、自動ストレージは、ストレージを宣言しているブロックに制御権が移動した時点で割り振られ、ブロックが終了するときに解放されるからです。

プログラム

プログラム構造

PL/I はブロックで編成される言語であり、パッケージ、プロシージャ、開始ブロック、ステートメント、式、および組み込み関数から構成されます。

PL/I アプリケーション は、ロード・モジュール と呼ばれる、1 つまたは複数の個別にロード可能なエンティティから構成されます。ロード・モジュールは、1 つまたは複数の独立したコンパイル・エンティティ (コンパイル単位 (CU) と呼ば

れます) から構成されます。特に明記されていない限り、プログラム とは、 PL/I アプリケーションまたはコンパイル単位のことを意味します。

コンパイル単位は、PL/I PACKAGE または外部 PROCEDURE です。各パッケージには、0 個かそれ以上のプロシージャが含まれます。プロシージャのいくつかは搬出可能です。PL/I 外部プロシージャまたは内部プロシージャには、0 個かそれ以上のブロックが入ります。PL/I ブロックは、PROCEDURE または BEGIN ブロックのいずれかであり、それぞれのブロックに、ステートメントまたはブロック (あるいはその両方) が含まれます。(設定されない場合もあります)

PL/I ブロックで、高位モジュール・アプリケーションを処理することができます。なぜなら、ブロックには、変数名やストレージ・クラスを定義する宣言を入れることができるからです。そのため、単一ブロックまたはブロック・グループに対して変数の有効範囲を制限することができます。あるいは、コンパイル単位またはロード・モジュール全体を通してそれを指定することができます。

ブロックをそれ自体に入れる程度を自由に決めることができるので、PL/I は、コードを再使用できるよう、多数のコンパイル単位やアプリケーションが共用できるブロックを処理することができます。

図2 で、アプリケーション構造を説明しています。

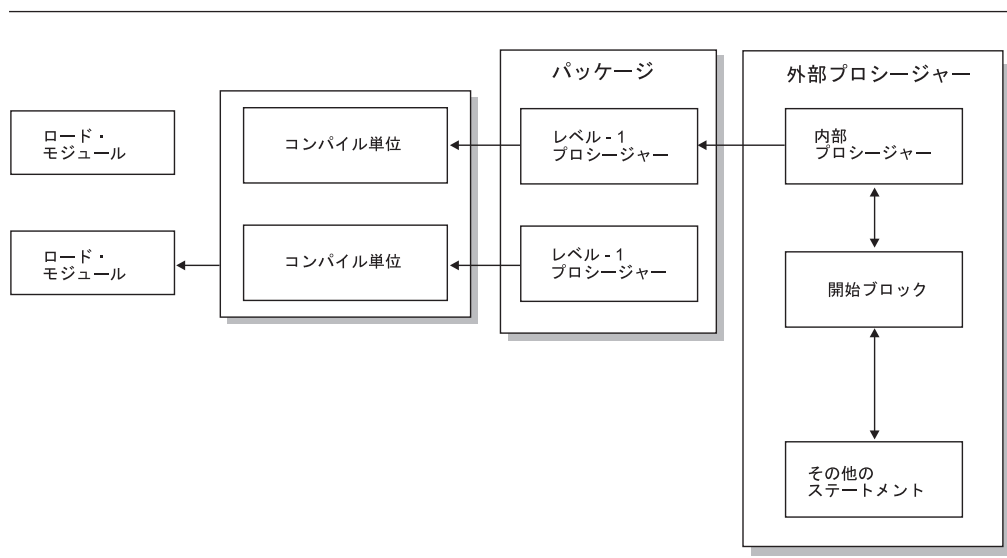


図2. PL/I アプリケーション構造

パッケージについては、104 ページの『パッケージ』で記載しています。

プロシージャについては、108 ページの『プロシージャ』で記載しています。

開始ブロックについては、129 ページの『開始ブロック』で記載しています。

プログラムの活動化

PL/I プログラムがアクティブになるのは、呼び出し側プログラムが主プロシージャ を呼び出したときです。この呼び出し側プログラムは、通常はオペレーティング・システムですが、別のプログラムでもかまいません。主プロシージャは、外

部プロシージャであり、ステートメントに `OPTIONS(MAIN)` の指定があります。以下の例では、`Contr1` が主プロシージャであり、プログラム内のほかの外部プロシージャを呼び出します。主プロシージャは、プログラムが実行されている間ずっとアクティブになっています。

```
Contr1: procedure options(main);
  call A;
  call B;
  call C;
end Contr1;
```

プログラムの終了

主プロシージャが終了すると、プログラムは終了します。プログラムが正常に終了したか異常終了したかに関係なく、終了すると、呼び出し側プログラムに制御が戻されます。前の例では、制御は `C` プロシージャから移されて、`Contr1` プロシージャに戻り、`Contr1` プロシージャで終了します。詳細については、115 ページの『プロシージャの終了』を参照してください。

ブロック

ブロックとは、以下のことを行う、区切られた一連のステートメントのことです。

- ブロック内に宣言されている名前の有効範囲を設定します。
- 自動変数の割り振りを制限します。
- `DEFAULT` ステートメントの有効範囲を判別します (187 ページの『属性のデフォルト』に記載されています)。

ブロックには、以下のような種類があります。

- パッケージ
- プロシージャ
- 開始

これらのブロックには、名前のローカル定義と見なされる宣言を入れることができます。これは、名前の有効範囲を設定するため、および自動変数の割り振りを制限するために行われます。これらの宣言は、それ自身のブロックの外では知られることがなく、また、そのブロックを含んでいるブロック内でその名前を参照することはできません。詳細については、173 ページの『宣言の有効範囲』を参照してください。

ストレージは、ストレージが宣言されるブロックの入り口で自動変数に割り振られ、ブロックから出るときに解放されます。詳細については、173 ページの『宣言の有効範囲』を参照してください。

ブロックの活動化

割り振り内、ストレージの解放、名前の有効範囲の削除では、各ブロックは同じ役割を果たします。どのようにして活動化されるかということについては、108 ページの『プロシージャ』 および 129 ページの『開始ブロック』に記載されています。パッケージは、活動化されず、終了もしません。

ブロックが活動化されているときには、以下のことが行われます。

ブロックの活動化

- 宣言ステートメントに書かれている式は、エクステントおよび初期値（反復回数も含めて）で計算されます。
- 自動変数用にストレージが割り振られ、指定されていれば初期設定値がセットされます。
- ストレージは仮引数用に割り振られ、このブロックで作成される可能性があるコンパイラ作成の一時域用にも割り振られます。

自動変数の初期値およびエクステントは、同じブロック内で宣言されたほかの自動変数の値やエクステントによって変化してはなりません。例えば、以下の初期設定を行うと、J と K についての無効な結果を生成する場合があります。

```
dc1 I init(10),J init(K),K init(I);
```

同様に、以下のコードでは、この構造体の初期化後に b には未定義の値（値 10 でない可能性が最も高い）が入ります。

```
dc1
  1 a,
    2 b fixed bin init(c),
    2 c fixed bin init(10);
```

データ項目の宣言は、相互に依存し合うものであってはなりません。例えば、次のような宣言は正しくありません。

```
dc1 A(B(1)), B(A(1));
```

```
dc1 D(E(1)), E(F(1)), F(D(1));
```

ブロックが活動化される途中でエラーが発生し、**ERROR** 条件（またはその他の条件）が起こることがあります。そのような場合は、そのブロックの環境が不完全であることがあります。特に、一部の自動変数が割り振られていないことがあります。 **ERROR** 条件の発生後に自動変数を参照するステートメントが実行されると、割り振られていないストレージを参照する可能性があります。割り振られていないストレージの参照の結果は未定義です。

ブロックの終了

ブロックを終了する方法はいく通りもあります。どのようにして終了されるかということについては、108 ページの『プロシージャー』 および 129 ページの『開始ブロック』 に記載されています。パッケージは、活動化されず、終了もしません。

ブロック終了時には、次のことが行われます。

- **ON** ユニット環境が、ブロックの活動化以前の状態に再設定されます。
- そのブロック内のすべての自動変数に割り振られたストレージが解放されます。

パッケージ

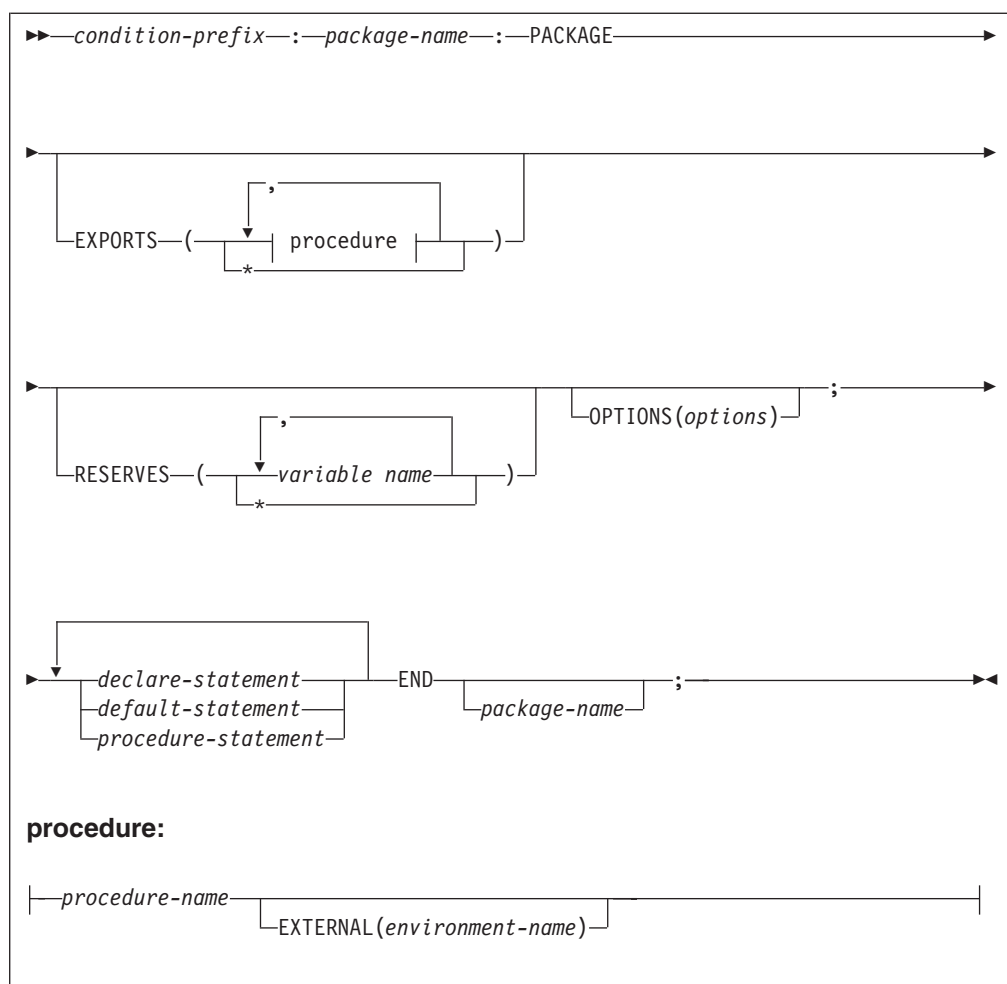
パッケージとは、宣言、デフォルト・ステートメント、およびプロシージャー・ブロックだけ入れることができるブロックのことです。名前が再び宣言されない限りは、パッケージは、パッケージ内に含まれるすべての宣言およびプロシージャーによって共用される名前の有効範囲を構成します。レベル 1 のプロシージャーの一部またはすべてが搬出され、外部プロシージャーとしてパッケージの外で認識できる

ようになります。パッケージは、複数のエントリー・ポイント・アプリケーションを実施する際に使用することができます。

MAIN プロシージャを含んだパッケージは、FETCHABLE プロシージャも含めてはいけません。MAIN プロシージャを含んだパッケージは、DLL にリンクすることもできません。このパッケージは、必要に応じて DLL のルーチンを呼び出すことができる基本実行可能モジュールの一部を形成する必要があります。もちろん、このようなパッケージでは、静的にリンクされた他のルーチンから呼び出すことができる外部ルーチンも定義できます。また、このパッケージでは、静的にリンクされた他のルーチンから参照可能な EXTERNAL STATIC データも定義できます。

(MAIN ルーチンを含んでいない) パッケージは、DLL にリンクされ、DLL のそのパッケージからエクスポートされる唯一の EXTERNAL STATIC 変数は、RESERVED 属性を持つ変数になります。

ソースに PACKAGE ステートメントが含まれる場合、最大でも 1 セットだけの *PROCESS ステートメントがなければならず、それはソースの最初のステートメントでなければなりません。ソースに PACKAGE ステートメントが含まれない場合は、コンパイラーによって、最初の *PROCESS ステートメントのセットの後に有効にこのステートメントが挿入され、ソースには *PROCESS ステートメントのグループによって分離される複数の外部プロシージャが含まれる場合があります。

**condition-prefix**

PACKAGE ステートメントで指定される条件接頭語は、PROCEDURE ステートメントで指定変更されない限り、パッケージ内に含まれているすべてのプロシージャに適用されます。条件接頭語に関する詳細については、377 ページの『条件接頭語』を参照してください。

package-name

パッケージの名前です。

EXPORTS

すべての (EXPORTS(*)) または名前のついたプロシーチャーは、搬出され、パッケージ外で外部的に認識されることを指定します。EXPORTS オプションを指定しないと、EXPORTS(*) が想定されます。

procedure name

パッケージ内のレベル 1 のプロシーチャーの名前です。

EXTERNAL (environment name)

173 ページの『宣言の有効範囲』に記載されている有効範囲属性です。

RESERVES

このパッケージがすべて (RESERVES(*)) に対してストレージを予約している

か、あるいは RESERVED 属性を持つ名前付きの変数に対してだけストレージを予約しているかを指定します。 181 ページの『RESERVED 属性』を参照してください。

variable name

レベル 1 の外部静的変数の名前です。

OPTIONS オプション

PACKAGE ステートメントに適用する OPTIONS オプションについては、 146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。

declare statement

パッケージ内で宣言される変数は、その宣言がレベル 1 のプロシーチャーの外部で行われる場合には、静的、基底付き、被制御のストレージ・クラスを持たなければなりません。自動変数を使用することはできません。デフォルトのストレージ・クラスは、STATIC です。 169 ページの『第 8 章 データ宣言』を参照してください。

default statement

187 ページの『属性のデフォルト』を参照してください。

procedure statement

108 ページの『PROCEDURE ステートメントおよび ENTRY ステートメント』を参照してください。

PACKAGE ステートメントの例は、図 3 に示されています。

```
*Process S A(F) LIMITS(EXTNAME(31)) NUMBER;
Package_Demo: Package exports (Factorial);

/*****
/*          Common Data          */
*****/

dcl N fixed bin(15);
dcl Message char(*) value('The factorial of ');

/*****
/*          Main Program          */
*****/

Factorial: proc options (main);
  dcl Result fixed bin(31);
  put skip list('Please enter a number whose factorial ' ||
    'must be computed ');
  get list(N);
  Result = Compute_factorial(n);
  put list(Message || trim(N) || ' is ' || trim(Result));
end Factorial;

/*****
/*          Subroutine          */
*****/

Compute_factorial: proc (Input) recursive returns (fixed bin(31));
  dcl Input fixed bin(15);
  if Input <= 1 then
    return(1);
  else
    return( Input*Compute_factorial(Input-1) );
  end Compute_factorial;

end Package_Demo;
```

図 3. PACKAGE ステートメント

プロシージャー

プロシージャーとは、PROCEDURE ステートメントとそれに対応する END ステートメントとで区切られている一連のステートメントです。プロシージャーは、主プロシージャー、サブルーチン、または関数などです。アプリケーションは、OPTIONS(MAIN) を持つ 1 つの外部プロシージャーを持たなければなりません。以下の例では、プロシージャーの名前は Name であり、プロシージャーのエントリー・ポイント を表しています。

```
Name:
  procedure;
end Name;
```

ENTRY ステートメントは、プロシージャーへの 2 次エントリー・ポイントを定義することができます。以下に例を示します。

```
Name: procedure;
B: entry;
end Name;
```

B は、Name プロシージャーへの 2 次エントリー・ポイントを定義します。ENTRY ステートメントについては、132 ページの『ENTRY 属性』を参照してください。

プロシージャーは、1 つの名前を持たなければなりません。別のプロシージャーまたは開始ブロック内にネストされたプロシージャー・ブロックは、内部プロシージャーと呼ばれます。別のプロシージャーまたは開始ブロック内にネストされていないプロシージャー・ブロックは、外部プロシージャーと呼ばれます。パッケージから搬出されたレベル 1 のプロシージャーも、外部プロシージャーになります。外部プロシージャーは、ほかのコンパイル単位のほかのプロシージャーで呼び出すことができます。プロシージャーは、ほかのプロシージャーを呼び出すことができます。

プロシージャーを再帰的にすることができます。つまり、その中から再活動化したり、すでに活動している別の活動プロシージャー内から再活動化したりすることができます。プロシージャーを呼び出すときに引数を渡すことができます。

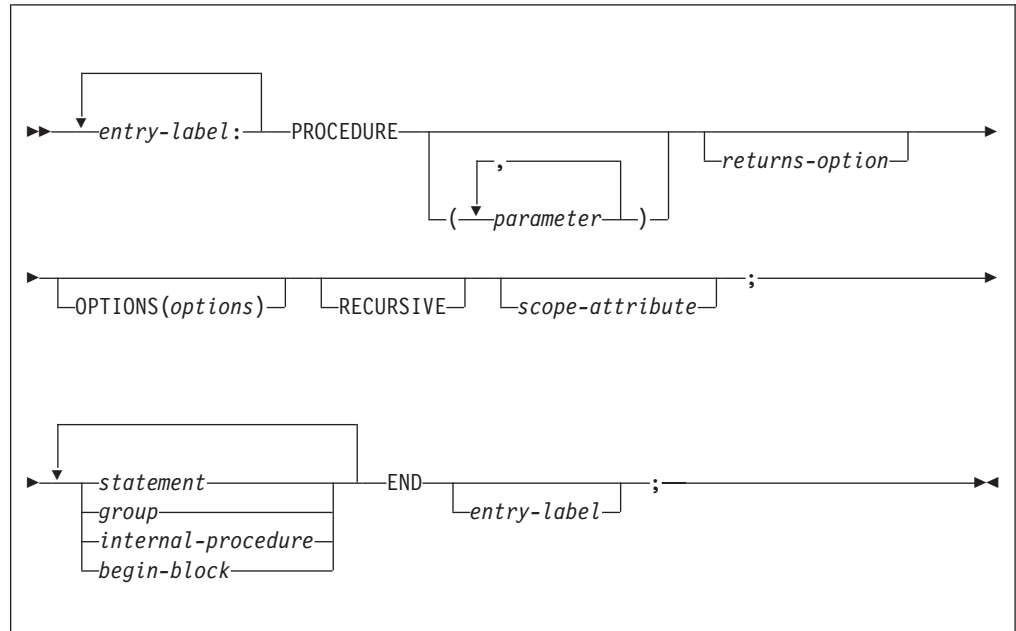
これらのサブジェクトに関する詳細については、以下の節を参照してください。

- 173 ページの『宣言の有効範囲』
- 121 ページの『サブルーチン』
- 123 ページの『関数』
- 125 ページの『プロシージャーへの引数の引き渡し』

PROCEDURE ステートメントおよび ENTRY ステートメント

プロシージャー (サブルーチンまたは関数) は、1 つまたは複数のエントリー・ポイントを持つことができます。プロシージャーへの 1 次エントリー・ポイントは、プロシージャー・ステートメントの左端のラベルによって確立されます。プロシージャーへの 2 次エントリー・ポイントは、PROCEDURE ステートメントの追加のラベルおよび ENTRY ステートメントによって確立されます。各エントリー・ポイントには 1 つの入り口名があります。外部名の作成規則についての説明は、177 ページの『INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性』を参照してください。

PROCEDURE ステートメントは、プロシージャーを主プロシージャー、サブルーチン、または関数として識別します。プロシージャーおよびその他の特性によって予期されるパラメーターも、プロシージャー・ステートメント上で指定することができます。



省略形: PROCEDURE の場合は PROC

entry-label

プロシージャーへのエントリー・ポイントです。外部入り口は、呼び出されるプロシージャー内で明示的に宣言されます。複数の入り口ラベルを指定すると、左端の名前が 1 次エントリー・ポイントとなり、それは PROCNAME と ONLOC 組み込み関数が戻す名前です。入り口データの詳細については、130 ページの『入り口データ』を参照してください。

parameter

111 ページの『パラメーター属性』および 125 ページの『プロシージャーへの引数の引き渡し』を参照してください。

returns-option

関数プロシージャーについてのみ適用します。123 ページの『関数』および 156 ページの『RETURNS オプションとその属性』を参照してください。

OPTIONS オプション

146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。

RECURSIVE

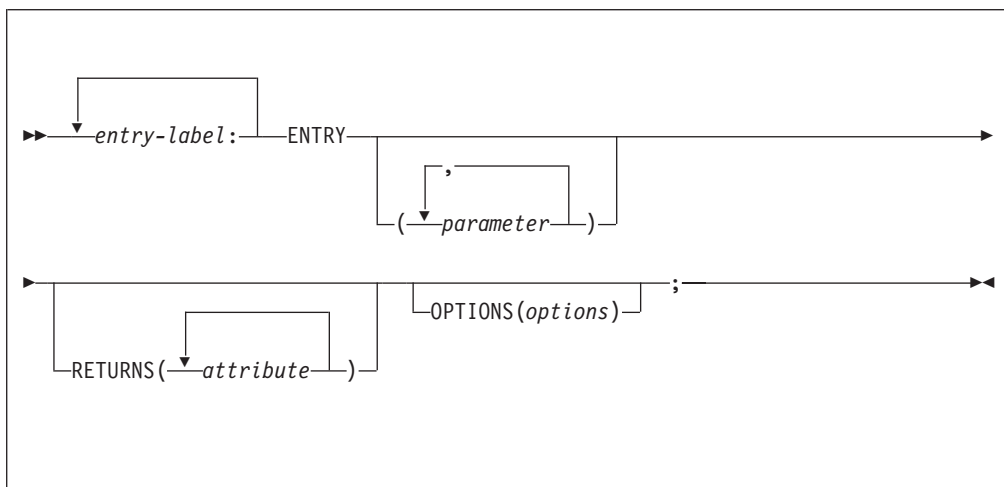
116 ページの『再帰的プロシージャー』を参照してください。

scope-attribute

173 ページの『宣言の有効範囲』を参照してください。

ENTRY ステートメント

ENTRY ステートメントは、プロシージャーの 2 次エントリー・ポイントを指定します。ENTRY ステートメントは、2 次エントリー・ポイントを定義するプロシージャーの内部になければなりません。反復実行を指定する DO グループ内に置くこと、または ON ユニットの内部であることはできません。



entry-label

プロシージャーへの 2 次エントリー・ポイントです。

parameter

111 ページの『パラメーター属性』および 125 ページの『プロシージャーへの引数の引き渡し』を参照してください。

RETURNS オプション

156 ページの『RETURNS オプションとその属性』を参照してください。

OPTIONS オプション

146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。

ENTRY ステートメントのパラメーターはすべて BYADDR でなければならず、またプロシージャーが ENTRY ステートメントを含んでいる場合は、そのプロシージャーに対する非ポインター・パラメーターはすべて BYADDR でなければなりません。

ENTRY ステートメントを含むプロシージャーに RETURNS オプションが指定されている場合 (または、プロシージャーに含まれる ENTRY ステートメントに RETURNS オプションが指定されている場合) は、次のことが必須です。

- そのプロシージャーと ENTRY ステートメントの RETURNS オプションすべてに、BYADDR 属性が指定 (または、コンパイル時オプション DEFAULT(RETURNS(BYADDR)) によって暗黙指定) されている。
- さらに、これらのエントリー・ポイントのいずれかを呼び出すルーチンすべてが、RETURNS(BYADDR) を指定して入り口を宣言しているか、DEFAULT(RETURNS(BYADDR)) コンパイラー・オプションを指定してコンパイルされている。

プロシージャに ENTRY ステートメントがあり、あるエントリー・ポイントには RETURNS 属性が指定されているが、全エントリー・ポイントでは指定されていないときは、次の状況で ERROR 条件が検出されます。

- プロシージャが RETURNS 属性がないエントリー・ポイントに入力されたときに、コードが式を使用して RETURN ステートメントを実行する場合。
- プロシージャが、RETURNS 属性を持つエントリー・ポイントに入力されたときに、コードが式を使わずに RETURN ステートメントを実行する場合。

パラメーター属性

パラメーターは、PROCEDURE または ENTRY ステートメント内に指定したパラメーター属性でコンテキストにもとづいて宣言されます。パラメーターは、適切な属性を使用して明示的に宣言されなければなりません。パラメーター属性は宣言内に指定することもできます。属性が DECLARE ステートメント内に指定されていない場合には、デフォルトの属性が適用されます。パラメーター名は、添え字を付けたり、修飾することはできません。

▶▶—PARAMETER—▶▶

33 ページの表 8 と以下では、パラメーターに対して宣言できる属性を説明します。

パラメーターには、常に INTERNAL 属性があります。

パラメーターが構造体または共用体である場合には、レベル 1 の名前が指定されなければなりません。

パラメーターは、CONTROLLED ストレージ・クラス属性しか持つことができません。被制御パラメーターは、被制御引数を持つ必要があり、INITIAL 属性も持つことができます。

レコード単位の入出力で使用するパラメーターまたは DEFINED 項目の基本変数としてのパラメーターは、連結ストレージ内になければなりません。CONNECTED 属性は、プロシージャ内の宣言、およびプロシージャ入り口宣言の記述子リスト内の両方で指定されなければなりません。

単純パラメーターの境界、長さ、およびサイズ

単純パラメーターの境界、長さ、およびサイズは、アスタリスクまたは制限付き式のいずれかによって指定されなければなりません。実際の長さ、境界、またはサイズが起動のたびに異なるときには、それぞれをアスタリスクで DECLARE ステートメントに指定できます。アスタリスクが使用されている場合は、関連した引数の現行世代から長さ、境界、またはサイズが取得されます。

関連した引数が仮引数である場合、集合体のエレメントであるストリングの長さ指定としてアスタリスクを使用することはできません。ストリングの長さは整数として指定する必要があります。

被制御パラメーターの境界、長さ、およびサイズ

被制御パラメーターの境界、長さ、またはサイズは、アスタリスクや要素式を使用して DECLARE ステートメントに指定することができます。

アスタリスクの表記法: アスタリスクを使用するとき、被制御パラメーターの長さ、境界、またはサイズは、関連した引数の現行世代から取得されます。異なる長さ、境界、またはサイズを ALLOCATE ステートメントに指定しないかぎり、以後の被制御パラメーターの割り振りは、同じ境界、長さ、またはサイズを使用して行われます。引数の現行世代が存在しない場合、アスタリスクはパラメーターの次元数だけを決定します。そのパラメーターに対してその他の参照を行うには、呼び込まれたプロシーチャーの ALLOCATE ステートメントによって、事前に被制御パラメーターの境界、長さ、またはサイズが指定されている必要があります。

式の表記法: パラメーターが割り振られるたびに、式が計算されて、新しい割り振りの現行境界、長さ、またはサイズを指定します。ただし、その DECLARE ステートメントの式は、ALLOCATE ステートメント自体の境界、長さ、またはサイズの指定によって指定変更されます。

パラメーターの付いた配列引数の例: 113 ページの図 4 では、Sub1 が呼び出されると、割り振られる A および B が渡されます。

```

%process or('|') num margins(1,72);
Package:package exports(*);

Main: procedure options(main);
declare (A(NA), B(NB), C(NC), D(ND) ) controlled;
declare (NA init(20), NB init(30), NC init(100),
ND init(100) ) fixed bin(31);
declare Sub1 entry((*) controlled, (*) controlled);
declare Sub2 entry ((*) ctl, (*) ctl, fixed bin);

allocate A,B; /* A(20), B(30) */
display ('Gen1: DIM(A)=' || dim(A) || ', ' || "DIM(B)=" || dim(B));
call Sub1(A,B);

display ('Gen2: Allocn(A)=' || allocn(a) || ', ' ||
'Allocn(B)=' || allocn(B) );
display ('Gen2: DIM(A)=' || dim(A) || ', ' || "DIM(B)=" || dim(B));
free A,B;
display ('Gen1: Allocn(A)=' || allocn(A) || ', ' ||
'Allocn(B)=' || allocn(B) );
display ('Gen1: DIM(A)=' || dim(A) || ', ' || "DIM(B)=" || dim(B));
free A,B;
display ('Gen0: Allocn(A)=' || allocn(A) || ', ' ||
'Allocn(B)=' || allocn(B) );
call Sub2 (C,D,10);

display ('Gen1: Allocn(C)=' || allocn(C) || ', ' ||
'Allocn(D)=' || allocn(D) );
display ('Gen1: DIM(C)=' || dim(C) || ', ' || "DIM(D)=" || dim(D));
free C,D;
display ('Gen0: Allocn(C)=' || allocn(c) || ', ' ||
'Allocn(D)=' || allocn(D) );
end Main;

Sub1: procedure (U,V);
dcl (U(UB), V(*)) controlled,
UB fixed bin(31);
display ('Gen1: Allocn(U)=' || allocn(U) || ', ' ||
'Allocn(V)=' || allocn(V) );
display ('Gen1: DIM(U)=' || dim(U) || ', ' || "DIM(V)=" || dim(V));
UB=200;
allocate U,V; /* U(200), V(30) */
display ('Gen2: Allocn(U)=' || allocn(U) || ', ' ||
'Allocn(V)=' || allocn(V) );
display ('Gen2: DIM(U)=' || dim(U) || ', ' || "DIM(V)=" || dim(V));
end Sub1;

Sub2: procedure (X,Y,N);
dcl (X(N),Y(N)) controlled,
N fixed bin;
display ('Gen0: Allocn(X)=' || allocn(X) || ', ' ||
'Allocn(Y)=' || allocn(Y) );
allocate X,Y; /* X(10), Y(10) */
display ('Gen1: Allocn(X)=' || allocn(X) || ', ' ||
'Allocn(Y)=' || allocn(Y) );
display ('Gen1: DIM(X)=' || dim(X) || ', ' || "DIM(Y)=" || dim(Y));
end Sub2;

end Package;

```

図 4. パラメーターの付いた配列引数

Sub1 内の ALLOCATE ステートメントは、A と B の 2 番目の世代を割り振ります。B は両方の世代に同じ境界を持ち、A は 2 番目の世代には異なる境界を持ちます。

Main へ戻る際、最初の FREE ステートメントは (Sub1 で割り振られている) A と B の 2 番目の世代を解放します。2 番目の FREE ステートメントは、(Main で割り振られている) A と B の最初の世代を解放します。

Sub2 では、X と Y は、N の値によって異なる境界を使用して宣言されています。X と Y が割り振られたら、それらの値を使用して、割り振られた配列の境界を判別します。

Sub2 から Main へ戻る際、FREE ステートメントは、(Sub2 で割り振られている) C と D の世代のみを解放します。

プロシージャーの活動化

プログラムの流れではプロシージャーは迂回され、PROCEDURE ステートメントの前にあるステートメントが実行されたあと、そのプロシージャーの END ステートメントのあとにあるステートメントが実行されます。プロシージャーは、プロシージャー参照によってしか活動化されません。(102 ページの『プログラムの活動化』では、主プロシージャーを活動化する方法が説明されています。) 呼び出しプロシージャーの実行は、呼び出されたプロシージャーが呼び出すプロシージャーに制御を戻すまで遅らされます。

下記のいずれかのコンテキストの中に入り口式が書かれていることを、プロシージャー参照といいます。

- 144 ページの『CALL ステートメント』で説明されているように、CALL ステートメントを使用してサブルーチンを呼び出すコンテキスト
- 123 ページの『関数』で説明されているように、関数を呼び出すコンテキスト

この節の情報は、これらのコンテキストと関係があります。ただしこの章の例では、CALL ステートメントを使用しています。

プロシージャー参照が実行されると、指定されたエントリー・ポイントを含むプロシージャーは呼び出される ことになります。プロシージャー参照が書かれている場所を呼び出し点 といい、参照が行われるブロックを呼び込み側ブロック といいます。呼び出し側ブロックは、呼び出されたプロシージャーに制御が移されても、アクティブのままです。

1 次エントリー・ポイントからプロシージャーが呼び出されると、引数およびパラメーターは関連付けられ、呼び出されたプロシージャーの最初のステートメントから実行が始まります。プロシージャーが ENTRY ステートメントで 2 次エントリー・ポイントから呼び出されると、ENTRY ステートメントに続く最初のステートメントから、実行が始まります。1 次エントリー・ポイントで、あるブロックの入り口について確立された環境は、同じブロックが 2 次エントリー・ポイントで呼び出される時に確立される環境と同じです。

2 つのプロシージャー間の通信は、呼び出しプロシージャーから渡される引数、呼び込まれたプロシージャーから戻される値、および双方のプロシージャーにおいて既知の名前のいずれかによって行われます。したがって、同じプロシージャーでも、呼び出し点が異なれば異なるデータを処理することができます。以下に例を示します。

```
Readin: procedure;  
statement-1  
statement-2  
Errt: entry;  
statement-3  
statement-4  
end Readin;
```


以下の入りの参照で活動化されます。

```
call Readin;
call Errt;
```

call Readin ステートメントは、その 1 次エントリー・ポイントで Readin を呼び出し、statement-1 で実行が開始されます。call Errt ステートメントは 2 次エントリー・ポイント Errt で、Readin プロシーチャーを呼び出し、実行は statement-3 で開始されます。入りの定数 (Readin) を、プロシーチャー参照で使用する入りの変数に割り当てることができます。以下に例を示します。

```
declare Readin entry,
    Ent1 entry variable;
Ent1 = Readin;
call Ent1;
call Readin;
```

2 つの CALL ステートメントは、同じ効果があります。

プロシーチャーの終了

プロシーチャーが終了するのは、プロシーチャー参照以外の方法で、呼び出し側プログラム、呼び出し側ブロックに制御を戻したとき、または別のアクティブ・ブロックに制御を渡したときです。

次の場合は、プロシーチャーは正常に 終了します。

- プロシーチャー内の RETURN ステートメントに制御が達したとき。RETURN ステートメントが実行されると、呼び出し側プロシーチャー内の呼び出し点に制御が戻されます。呼び出し点が CALL ステートメントであれば、CALL の次のステートメントで、呼び出し側プロシーチャー内の実行が再開します。呼び出し点に関数参照であれば、その参照を含んでいるステートメントの実行が再開します。
- プロシーチャー内の END ステートメントに制御が達したとき。この場合、RETURN ステートメントが実行されたときと同じ結果になります。

次の場合は、プロシーチャーは異常 終了します。

- プロシーチャーの外へ制御権を移動する GO TO ステートメントに制御が達したとき。GO TO ステートメントを含んでいるブロック内のラベルか、またはプロシーチャーに渡されたラベル引数に関連付けられているパラメーターを指定することができます。単一スレッド・プログラムの現行スレッド内、またはマルチスレッド・プログラムの任意のスレッド内で、STOP ステートメントが実行されたとき。
- EXIT ステートメントが実行されたとき。
- ERROR 条件が起こり、ERROR または FINISH の ON ユニットが確立されていないとき。さらに、一方または両方の条件の ON ユニットが確立されているが、ON ユニットから出る方法が GO TO ステートメントではなく正常な戻りによって出るようになっているとき。
- プロシーチャーが、異常終了する別のプロシーチャーを呼び出したとき。

GO TO ステートメントを使用してプロシーチャーの外へ制御権を移動すると、場合によっては、いくつかのプロシーチャーや開始ブロックが終了することがあります。具体的に言えば、GO TO ステートメントで指定した移動先の場所が、終了しよ

プロシーチャーの終了

うとしているブロックを直接活動化したのではないブロックに含まれている場合には、活動化の順序においてその 2 つのブロックの間にあるすべてのブロックが終了します。次に例を示します。

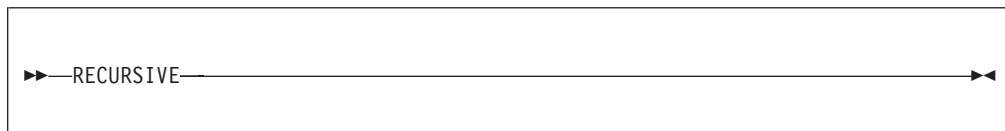
```
A: procedure options(main);
  statement-1
  statement-2
  B: begin;
    statement-b1
    statement-b2
    call C;
    statement-b3
  end B;
  statement-3
  statement-4
  C: procedure;
    statement-c1
    statement-c2
    statement-c3
    D: begin;
      statement-d1
      statement-d2
      go to Lab;
      statement-d3
    end D;
    statement-c4
  end C;
  statement-5
  Lab: statement-6
  statement-7
end A;
```

A は B を、B は C を、C は D を、それぞれ活動化します。D 中の go to Lab ステートメントは、A 中の statement-6 に制御を移します。このステートメントは、D、C、または B には含まれていないので、この 3 つのブロックがすべて終了します。A は活動化されたままです。したがって、D の外へ制御権を移動することによって、ブロック D が終了するだけでなく、介在している B と C も終了します。

再帰的プロシーチャー

それ自体から呼び出される、または別のアクティブのプロシーチャーから呼び出されるアクティブのプロシーチャーは、**再帰的** プロシーチャーです。そのような呼び出しは、**再帰**と呼ばれます。

再帰的に呼び出されたプロシーチャーは、**PROCEDURE** ステートメントで指定された **RECURSIVE** 属性を持たなければなりません。



再帰プロシーチャーの呼び出しごとの環境（自動変数の値など）は、被制御変数の割り振りのスタッキングと類似した方法で保存されます（257 ページの『被制御ストレージとその属性』を参照）。環境は、再帰的呼び出し時に、最後に記憶された環境

がスタックに入れられ、その呼び出しの終了時にスタックから除去される と考えてください。現行ブロック内のラベル定数は、常に、そのラベルが入っているブロックの現行呼び出しへの参照になります。

ラベル定数が特定呼び出しのラベル変数に割り当てられ、ラベル変数が再帰的プロシージャ内部で宣言されていない場合には、別の呼び出しでその変数を指定する GO TO ステートメントが、現行および介在するプロシージャや開始ブロックを終了し、割り当てが行われたときの環境を復元します。

再帰的プロシージャ内から入り口変数を通して呼び出された別のプロシージャの環境は、その入り口定数がその変数に割り当てられたときに存在していた環境です。次の例を考えてみてください。

```

I=1;
call A;                                /* First invocation of A    */

A: proc recursive;
  declare Ev entry variable static;
  if I=1 then
    do;
      I=2;
      Ev=B;
      call A;                          /* 2nd invocation of A      */
    end;
  else call Ev;                        /* Invokes B with environment */
                                      /* of first invocation of A   */
B: proc;
  go to Out;
end B;
Out: end A;

```

プロシージャ B 中の GO TO ステートメントは、1 回目に呼び出された A 内の END A ステートメントに制御を移し、B を終了させるほかに、2 つの A を終了させます。

再帰が自動変数に及ぼす影響

再帰的プロシージャの 1 回の活動化時に割り振られた変数の値は、次にそのプロシージャが活動化されたときに変更されないようにしなければなりません。これは、変数のスタッキングによって解決されます。スタッキングは後入れ先出し法で処理されるため、自動変数の最も新しい世代だけを参照することができます。静的変数は、再帰の影響を受けないので、再帰的に呼び出されたプロシージャ相互間の連絡に使用できます。これは、再帰的プロシージャを含んでいるプロシージャ内で宣言された自動変数にも、被制御変数と基底付き変数にも適用されます。次に例を示します。

```

A: proc;
  dcl X;
  :
  :
B: proc recursive;
  dcl Z,Y static;
  call B;
  :
  :
end B;
end A;

```

変数 X の世代は 1 つであり、プロシージャ B の呼び出しのつど代わることはありません。変数 Z の世代は、プロシージャ B の呼び出しのつど代わります。変

数 Y は、プロシージャ B の中でだけ参照することができ、呼び出しのつど再割り振りされることはありません (変数のスタッキングという概念は、257 ページの『被制御ストレージとその属性』の被制御変数の説明でも重要です)。

外部プロシージャの動的ロード

モジュールは、FETCH および RELEASE ステートメントを使用して PL/I プログラムによって動的に取り出されたり、(ロードされたり)、解放されたり (削除されたり) します。

プロシージャ参照によって呼び出されたプロシージャは、通常、プログラムの実行中ずっと主記憶域に常駐します。ただし、必要とされるときにのみ、プロシージャを主記憶域にロードしておくこともできます。つまり、呼び出しプロシージャの実行中に、呼び出されたプロシージャを主記憶域に動的にロードし、あとで主記憶域から動的に削除します。

プロシージャの動的ロードと動的削除が特に効果的なのは、呼び出しプロシージャが実行されるつど、呼び出されたプロシージャが必ず呼び出されるとは限らないときや、実行時間の短縮よりも主記憶域の節減のほうが重要であるときです。

FETCH ステートメントで入り口定数を指定すると、その入り口定数を含んでいるプロシージャのコピーがすでに主記憶域に存在しているのでない限り、そのプロシージャをまず主記憶域にロードしなければ実行できないことを表します。FETCH ステートメントで名前が参照されれば、以下によってディスクからプロシージャをロードすることも可能です。

- CALL ステートメントまたは INITIAL 属性の CALL オプションの実行
- 関数参照の実行

CALL または関数参照の実行前にも実行後にも、FETCH ステートメントまたは RELEASE ステートメントに制御を渡す必要はありません。

どちらのステートメントがプロシージャをロードした場合も、CALL ステートメント、CALL オプション、または関数参照が実行されると、普通の方法でプロシージャが呼び出されます。

プロシージャがすでに主記憶域にロードされていても、エラーにはなりません。取り出されたプロシージャは、プログラム全体の実行が完了するまで主記憶域に残しておくことができます。RELEASE ステートメントを使用すれば、そのプロシージャが占有していたストレージをいつでも解放することができ、別の目的で使用するすることができます。

規則と機能

FETCH と RELEASE は以下の規則と機能を備えています。

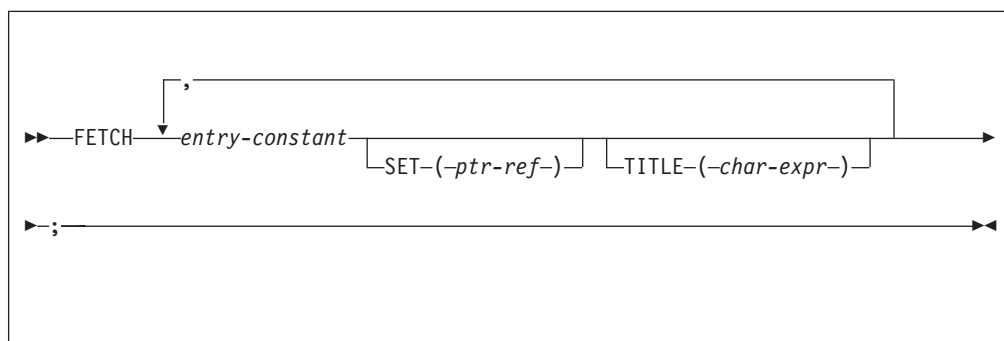
- 外部プロシージャだけを取り出すことができます。
- EXTERNAL ファイルと CONDITION 条件は、アプリケーション全体 (主モジュールおよび取り出されたモジュール) で共有されます。それ以外の外部変数は、単一モジュール内でのみ共用されます。
- 取り出されたプロシージャ中の STATIC 変数のストレージは、そのプロシージャが入っているロード・モジュールがメモリーにロードされるときに割り振ら

れます。ロード・モジュールがメモリーにロードされるたびに、STATIC 変数には、それらの宣言が示す初期値が指定されます。

- **FETCH** ステートメントおよび **RELEASE** ステートメントは、入口号定数を指定しなければなりません。取り出されるプロシーチャーの入口号定数は、プロシーチャーが取り出されている限り、入口号変数に割り当てることができます。

FETCH ステートメント

FETCH ステートメントは、指定されたプロシーチャーが主記憶域に存在しているかを調べます。主記憶域内に存在していないプロシーチャーは、ディスクからロードされます。



entry-constant

取り出されるプロシーチャーの名前で、オペレーティング・システムに知られているものを指定します。取り出し可能なプロシーチャーに関連する考慮事項の詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

entry-constant (入口号定数) は、対応する **CALL** ステートメント、**CALL** オプション、または関数参照内で使用する入口号定数と同じでなければなりません。

SET

ロードしたモジュールのエントリー・ポイントのアドレスにセットされるポインター参照 (*ptr-ref*) を指定します。このオプションは、テーブル (実行できないロード・モジュール) をロードするために使用することができます。また、非 PL/I プロシーチャーへ渡さなければならないアドレスを持つ、取り出された項目に対しても使用することができます。

ロード・モジュールを後に **RELEASE** ステートメントによって解放して、さらにそのロード・モジュールに (ポインターを使用して) アクセスすると、予期しない結果が生じます。

TITLE

TITLE の場合、*char-expr* は任意の文字式、または文字式に変換可能な任意の式です。**TITLE** が指定されると、指定されたロード・モジュール名が探索され、ロードされます。指定されていない場合には、使用されるロード・モジュール名は、(表示されていれば) 変数の **EXTERNAL** 属性で指定された環境名、または入口号定数名自体になります。

以下に例を示します。

```

dcl A entry;
dcl B entry ext('C');
dcl T char(20) varying;
T = 'Y';

```

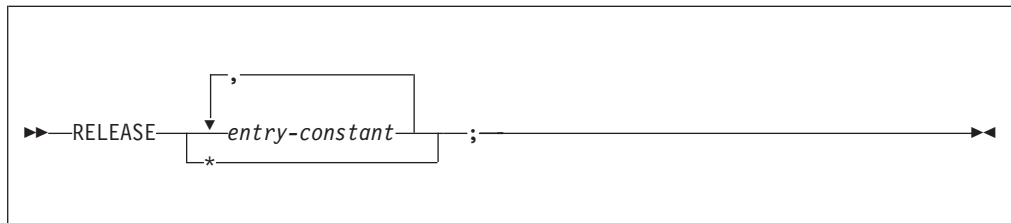
FETCH

```
fetch A title('X');          /* X is loaded */
fetch A;                     /* A is loaded */
fetch B title('Y');          /* Y is loaded */
fetch B;                     /* C is loaded */
fetch B title(T);            /* Y is loaded */
```

タイトル・ストリングの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

RELEASE ステートメント

RELEASE ステートメントは、指定した *entry constant* (入り口定数) が識別するプロシージャによって占められた主記憶域を解放します。



入り口定数 (*entry constant*)

対応する CALL ステートメント、CALL オプション、関数参照、および FETCH ステートメントに使用する入り口定数と同じでなければなりません。RELEASE * は、それ以前にフェッチされたすべての PL/I モジュールを解放します。RELEASE ステートメントは、フェッチされたモジュール内部から実行してはなりません。

モジュールが同じ外部プロシージャ内で以前にフェッチされなかった場合、または既に解放されている場合、入り口定数は NULL ポインターになります。解放が実行されない場合、メッセージは出されず、RELEASE ステートメントに続くステートメントの実行が続行されます。

以下の例を考えてください。ProgA と ProgB は、ディスクに常駐しているプロシージャの入り口名です。

```
Prog: procedure;
```

```
1      fetch ProgA;
2      call ProgA;
3      release ProgA;
```

```
4      call ProgB;
      go to Fin;
```

```
      fetch ProgB;
Fin:   end Prog;
```

1 ProgA は、最初の FETCH ステートメントによって主記憶域にロードされます。

2 ProgA は、最初の CALL ステートメントに達したときに実行されます。

3 ProgA のストレージは、RELEASE ステートメントが実行されると解放されます。

- 4** ProgB は、このプロシーチャーを参照する FETCH ステートメントが実行されなくても、2 番目の CALL ステートメントに達すると、ロードされ、実行されます。

FETCH ProgA ステートメントが省略された場合でも同じ結果になります。RELEASE ステートメント内に ProgA を指定すると、それを呼び出したときと同様に、CALL ProgA ステートメントがプロシーチャーをロードします。

取り出されたプロシーチャーは、呼び出しプロシーチャーとは別々にコンパイルされ、リンクされます。FETCH ステートメント、RELEASE ステートメント、CALL ステートメント、CALL オプション、および関数参照で指定される入り口定数は、ディスク上で認識される名前でなければなりません。これは「プログラミング・ガイド」に説明があります。

注: モジュールが解放される前に、モジュールは獲得したシステム・リソースをすべて解放する必要があります。これには以下のアクションが含まれます (これらに限られません)。

- フェッチしたモジュールをすべて解放する。
- 開いたファイルをすべて閉じる。
- 割り振った制御ストレージをすべて解放する。

サブルーチン

サブルーチンは、CALL ステートメントで呼び出される内部または外部プロシーチャーです。サブルーチンの構文については、108 ページの『プロシーチャー』を参照してください。

CALL ステートメントの引数は、呼び出されたプロシーチャーのパラメーターと関連付けられます。サブルーチンは活動化されると、実行が開始します。引数 (ゼロまたはそれ以上) は、入力専用、出力専用、またはその両方が可能です。

サブルーチンは、RETURN ステートメントまたは END ステートメントで正常に終了します。それから、制御が呼び込み側ブロックに戻ります。サブルーチンは、115 ページの『プロシーチャーの終了』で説明しているように、異常終了することもあります。

サブルーチン・プロシーチャーは、以下のものでなければなりません。

- プロシーチャー・ステートメントに RETURNS オプションを持っていないもの。
- 外部プロシーチャーである場合には、RETURNS 属性の付いた入り口として宣言されないもの。
- 関数参照ではなく、CALL ステートメントを使用して呼び出されるもの。
- RETURN ステートメントを使用して結果の値を戻さないもの。

以下の例では、呼び込み側ブロックにとって外部および内部になるサブルーチンの呼び出しを示しています。

例 1

```
Prmain: procedure;
        declare Name character (20),
        Item bit(5),
```

```

4      Outsub entry;
1      call Outsub (Name, Item);
      end Prmain;

```

```

2      Outsub: procedure (A,B);
          declare A character (20),
          B bit(5);
3          put list (A,B);
      end Outsub;

```

1 Prmain の CALL ステートメントは、Name と Item という引数で **2** の Outsub プロシーチャーを呼び出します。

2 Outsub は、Prmain から渡される Name と Item にそのパラメーターの A と B を関連付けます。Outsub が実行されると、A に対する各参照は、Name に対する参照と見なされ、B に対する各参照は、Item に対する参照と見なされます。

3 put list (A,B) ステートメントは、デフォルトの出力ファイル SYSPRINT へ Name と Item の値を送ります。

4 入り口定数として Outsub の宣言では、引数およびパラメーターの属性が突き合わせられるので、パラメーター記述子は ENTRY 属性で指定する必要はありません。132 ページの『ENTRY 属性』も参照してください。

例 2

```

      A: procedure;
          declare Rate float (10),
          Time float(5),
          Distance float(15),
          Master file;
1      call Readcm (Rate, Time, Distance, Master);
3      Readcm:
2      procedure (W,X,Y,Z);
          declare W float (10),
          X float(5),
          Y float(15), Z file;
          get File (Z) list (W,X,Y);
          Y = W * X;
          if Y > 0 then
              return;
          else
              put list('ERROR READCM');
          end Readcm;

      end A;

```

1 引数 Rate、Time、Distance、および Master は、**3** の Readcm プロシーチャーに渡され、パラメーター W、X、Y、および Z と関連付けられます。

2 W に対する参照は Rate に対する参照と同じであり、X に対する参照は Time、Y に対する参照は Distance、Z に対する参照は Master とそれぞれ同じになります。

3 Readcm は A で明示的に宣言されていないことに注意してください。PROCEDURE ステートメントの指定に ENTRY 属性が暗黙に宣言されています。

組み込みサブルーチン

作成済みのプログラミング・タスクを備えた、組み込みサブルーチンを使用することができます。それらの組み込み名は、BUILTIN 属性で明示的に宣言することができます。(BUILTIN 属性の情報または組み込み関数の説明について詳しくは、417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』を参照してください。)

関数

関数とは、ゼロまたはそれ以上の引数を持つプロシージャーであり、式で関数参照を使用して呼び出されます。関数参照は制御を関数プロシージャーに移します。関数プロシージャーは制御と値を戻します。この値が式の計算で関数参照に置き換わることになります。集合を戻すことはできません。また、ENTRY 変数も、LIMITED 属性を持っていない限り戻すことはできません。式の計算は引き続き行われます。

関数プロシージャーは以下のものでなければなりません。

- プロシージャー・ステートメントに RETURNS オプションがあるもの。
- 外部プロシージャーである場合には、RETURNS 属性の付いた入り口として宣言されるもの。
- 関数参照を使用して呼び出されるもの。CALL ステートメントは、戻り値に OPTIONAL 属性がある場合だけ、それを呼び出すために使用することができます。この場合には、戻り値は、戻りによって破棄されます。RETURN の代わりに END を使用すると、予測しない結果になることがあります。
- RETURNS オプション内の属性と RETURNS 属性が合致するもの。
- RETURN ステートメントを使用して、制御と結果の値を戻すもの。

関数が呼び出されるときはいつでも、呼び出された式の引数はエントリー・ポイントのパラメーターと関連付けられます。それから、制御はエントリー・ポイントに戻されます。関数が活動化され、実行が開始します。

RETURN ステートメントは、関数を終了して、その式に指定された値を呼び出し式に戻します。詳細については、145 ページの『RETURN ステートメント』を参照してください。

115 ページの『プロシージャーの終了』で説明されているように、関数は異常終了することもあります。異常終了した場合は、その関数を呼び出した式の計算は完了されずに、指定のステートメントに制御が移ります。

関数が定義されるので、引数リストを必要としない場合もあります。そのような場合、式の中に書かれている外部関数名が関数参照として認識されるのは、その関数名が入り口名であると明示的に宣言されている場合だけです。詳細については、144 ページの『入り口呼び出しまたは入り口値』を参照してください。

例

以下の例は、呼び込み側ブロックの内部および外部にある関数の呼び出しを示しています。

例 1

以下の例では、代入ステートメントに Sprod 関数への参照が含まれています。

- ```

Mainp: procedure;
 get list (A, B, C, Y);
 X = Y**3+Sprod(A,B,C);
1
2
Sprod: procedure (U,V,W)
 returns (bin float(21));
 dcl (U,V,W) bin float(53);
 if U > V + W then
3
 return (0);
 else
3
 return (U*V*W);
 end Sprod;

```
- 1** Sprod が呼び出されると、引数 A、B、および C はそれぞれ、**2** のパラメーター U、V、および W と関連付けられます。
- 2** RETURNS がプロシージャ・ステートメントに指定されているので、Sprod は関数です。これは、内部関数であるため、明示的な入り口宣言は必要ありません。Sprod が外部関数であれば、Mainp は RETURNS を指定した入り口宣言を含みます。
- 3** Sprod は、ゼロを戻すか、または  $U*V*W$  が表す値を戻します。制御は Mainp 内の式に戻されます。戻り値は、関数参照の値として用いられ、式の計算は続きます。

## 例 2

- ```

Mainp: procedure;
  dcl Tprod entry (bin float(53),
                  bin float(53),
                  bin float(53),
                  label) external
  returns (bin float(21));
  get list (A,B,C,Y);
  X = Y**3+Tprod(A,B,C,Lab1);
1
Lab1: call Errt;
end Mainp;

```
- ```

1
Tprod: procedure (U,V,W,Z)
 returns (bin float(21));
 dcl (U,V,W) bin float(53);
 declare Z label;
2
 if U > V + W then
 go to Z;
3
 else
 return (U*V*W);
 end Tprod;

```
- 1** Tprod が呼び出されると、Lab1 はパラメーター Z と関連付けられます。
- 2** U が  $V + W$  よりも大きい場合には、Lab1 というラベルの付いたステートメントで Mainp に制御を戻します。**1** の割り当て式の計算は、継続されません。
- 3** U が  $V + W$  より大きくない場合には、 $U*V*W$  は計算されて、通常の方法で Mainp に戻されます。**1** での割り当て式の計算は、引き続き行われます。

Tprod は外部プロシージャであることに注意してください。 RETURNS が含まれている Mainp には明示的な入り口宣言があります。

## 組み込み関数

プログラマーが作成した関数プロシージャを使用できるようにするため、 PL/I では、組み込み関数のセットを提供しています。組み込み関数には、共通して使用される算術関数のほかに、ストレージなどを使用してストリングおよび配列を処理するための関数があります。組み込み関数の呼び出し方法は、プログラマー定義の関数の呼び出しと同じです。しかし、プログラマー定義の関数は 1 つの要素値しか返せませんが、多くの組み込み関数は値の配列を返すことができます。組み込み関数の組み込み名は、BUILTIN 属性で明示的に宣言することができます。(BUILTIN 属性の情報または組み込み関数の説明について詳しくは、417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』を参照してください。)

---

## プロシージャへの引数の引き渡し

関数またはサブルーチンが呼び出されると、パラメーターは、左から右の順に、渡される引数と関連付けられます。

概要は次のとおりです。

- 計算データの引数を、計算データ・タイプのパラメーターに渡すことができます。
- プログラム制御データの引数は、同じタイプのパラメーターに渡さなければなりません。ただし、次の場合はこの例外となります。
  - ポインターとオフセットは、相互に渡されます。
  - LIMITED ENTRY は ENTRY に渡されますが、ENTRY は LIMITED ENTRY に渡されません。
  - ラベル定数の配列は、引数として使用することはできません。

構造体引数が定数エクステンションとともに宣言されていないかぎり、構造体から派生する一時的な集合体を必要とする引数は、使用できません。

引数リストの式は、サブルーチンまたは関数が呼び出される前に呼び込み側ブロックで計算されます。パラメーターには、それと関連付けられるストレージはありません。パラメーターは、呼び出されたプロシージャが、呼び出し側のプロシージャに割り振られているストレージにアクセスできるようにするための手段を提供するためだけのものです。

## BYVALUE および BYADDR の使用

引数に BYVALUE が渡されない限り、引数の値は別として、引数への参照は、一般的にサブルーチンか関数に渡されます。これは、参照または BYADDR によって引数を渡すことによって認識されます。プロシージャ内のパラメーターへの参照は、対応する引数への参照になります。パラメーターの値への変更は、実際には、対応する引数の値への変更になります。ただし、これは常に可能ではなく、好ましいものではありません。例えば、定数は呼び出されたプロシージャによって変更

## BYVALUE および BYADDR

されるべきではありません。変更すべきではない引数には、元の引数の値を含む仮引数 が渡されます。パラメーターへの参照は、仮引数への参照であり、元の引数に対するものではありません。

BYADDR を指定すると、コンパイラーによって、パラメーター・リストに対応する引数のアドレスが書き込まれます。BYVALUE を指定すると、パラメーター・リストに引数の値が書き込まれます。

BYVALUE を指定すると、仮引数は作成されませんが、呼び出されたルーチンで対応するパラメーターに行われたすべての変更は、呼び出しルーチンでは不可視になります。これは、仮引数の場合も同様です。

BYVALUE は、コンパイル時に既知の長さを持つスカラー引数およびスカラー・パラメーターに対してのみ指定できます。

BYVALUE 引数は、レジスターで正当に渡されるものである必要があります。したがって、そのタイプは次のいずれかでなければなりません。

- REAL FIXED BIN
- REAL FLOAT
- POINTER
- OFFSET
- HANDLE
- LIMITED ENTRY
- FILE
- ORDINAL
- CHAR(1)
- WCHAR(1)
- ALIGNED BIT(*n*) (*n* は 8 以下)

## INONLY、INOUT、および OUTONLY の使用

引数が、属性 INONLY または OUTONLY で宣言されていない限り、引数は INOUT となり、その引数は、渡される前に値を持ち、呼び出されたコードによって (おそらく) 変更されるものと想定されます。

引数を INONLY として宣言した場合、引数が渡される前に引数は値を持ち、呼び出されたコードによっては変更されないものと想定されます。したがって、仮引数をそのような引数に対して作成する必要はありません。

引数を OUTONLY として宣言した場合、引数が渡される前に値を持たないが、呼び出されたコードによって設定されるものと想定されます。

属性 OUTONLY と BYVALUE は競合するため、同じ引数に両方を指定することはできません。

属性 INONLY と OPTIONAL も競合するため、同じ引数に両方を指定することはできません。

これらの属性を明示的に使用すると、コードがより自己記述的になります。さらに、そうすることによって、コンパイラーがより良いコードを生成でき、未初期化のおそれのある変数のレポートでより正確になるようにすることができます。

## 仮引数

仮引数は、引数が以下のいずれかの場合に作成されます。

- 定数 (パラメーターが INONLY 属性を持つ場合を除く)
- 演算子、括弧、または関数参照を使用する式
- データ属性、位置合わせ属性、または接続属性がパラメーターに宣言された属性と異なる変数。

境界、長さ、またはサイズだけが異なり、しかもこれらがアスタリスクを使用して宣言されている場合、および定数以外の式を使用して被制御パラメーターのエクステントを定義している場合には、上記は制御されていないパラメーターには適用されません。定数以外の式を使用して被制御パラメーターのエクステントを定義している場合、引数とパラメーターのエクステントは一致すると見なされます。

PICTURE 属性を持つ引数とパラメーターの場合、反復因数が適用されたあと、ピクチャー指定が正確に一致しない限り、仮引数が作成されます。唯一の例外は、位取り係数に正符号が付いている引数またはパラメーターは、正符号の付いていないパラメーターまたは引数と一致することです。

- 調整可能な長さやサイズを持つストリングまたは区域 (長さやサイズが一定の制御されないパラメーターに関連付けられるもの) なお、RULES(LAXCTL) コンパイラー・オプションの場合は、CONTROLLED ストリングまたは AREA のエクステントは常に変更可能です。一方、RULES(NOLAXCTL) コンパイラー・オプションの場合は、定数として宣言されていない限り、CONTROLLED ストリングまたは AREA のエクステントは変更可能です。

## 仮引数属性の派生

PL/I では、以下のものから仮引数の属性を派生します。

- 内部プロシーチャーの関連パラメーターに宣言された属性。
- 外部入り口宣言の関連パラメーターのパラメーター記述子に指定された属性。このパラメーターの記述子がなかった場合には、定数または式の属性が使用されます。
- 配列境界の引数、ストリングの長さ、または区域のサイズのエクステント (宣言にアスタリスクが付けられている場合)。

## 仮引数の規則

以下の規則が、仮引数に適用されます。

- パラメーターがエレメント (つまり、構造体または配列のいずれでもない変数) である場合には、引数は要素式でなければなりません。
- VARYING または VARYINGZ ストリング・エレメントを、長さが未定義である (つまり長さがアスタリスクで指定されている) NONVARYING パラメーターに渡した場合、元の引数の長さを持つ仮引数が作成されます。



- 引数として渡される入り口変数は位置合わせされたものと見なされるため、引数とパラメーターの位置合わせだけが異なる場合は、仮引数は作成されません。入り口パラメーターの総称名引数の説明については、141 ページの『総称入り口』を参照してください。
- パラメーターがプログラム制御タイプ（ロケーターを除く）である場合、引数は同じデータ・タイプの参照でなければなりません。
- パラメーターがロケーター（ポインターまたはオフセット）である場合には、引数はロケーターでなければなりません。タイプが異なる場合には、仮引数が作成されます。オフセット・パラメーターのパラメーター記述子で、関連区域を指定してはなりません。
- 制御されていないパラメーターを、任意のストレージ・クラスの引数と関連付けることができます。ただし、複数の引数の世代が存在するときは、パラメーターは呼び出し時に存在する世代とだけ関連付けられます。
- パラメーターが被制御状態のときは、このことを ENTRY 宣言のパラメーター記述子に明示的に指定しなければなりません。さらに、被制御パラメーターは、以下の条件を満たす対応する被制御引数を常に持っていなければなりません。
  - 添え字が付いていない。
  - 構造体のエレメントではない。
  - 仮引数を作成しない。

複数の引数の世代が呼び出し時に存在している場合には、存在している世代のすべてのスタックにパラメーターは対応します。その結果として呼び出し時に、被制御パラメーターは、対応する引数の現行世代を表します。関連する引数の割り振りスタックの操作を行うために、被制御パラメーターは割り振られ、呼び出されたプロシージャー内で解放されます。

被制御パラメーターのエクステンントがアスタリスクまたは制限なしの式として指定されている場合には、もとの宣言は、制限なしの式として宣言されたエクステンントを持たなければなりません。

## MAIN プロシージャーへの引数の引き渡し

主プロシージャーの PROCEDURE ステートメントは、パラメーター・リストを持つことができます。PL/I では、そのようなパラメーターに特定考慮事項は必要ありません。ただし、呼び出し側プログラムの引数の要件（例えば、割り当てのターゲットとしてパラメーターを使用してはならないなど）に注意する必要があります。

呼び出し側プログラムがオペレーティング・システムであり、SYSTEM(MVS) コンパイラー・オプションとともにコンパイルされている場合:

- 単一引数がメイン・プロシージャーに渡され、そのパラメーターは CHARACTER VARYING と宣言される必要があります。
- このパラメーターの現行長は、実行時の引数の長さと等しくセットされます。そのため、以下の例では:

```
Tom: proc (Param) options (main);
 dcl Param char(100) varying;
```

ストレージは、引数の現行長にだけ割り振られます。

- このパラメーターの内容は、OPTIONS(MAIN) とともに指定した 2 番目のオプションによって異なります。

- OPTIONS(MAIN NOEXECOPS) を指定する場合、オペレーティング・システムによって PL/I に渡されるストリングは、そのままプログラムに渡されます。NOEXECOPS を指定することをお勧めします。
- OPTIONS(MAIN) のみを指定すると、オペレーティング・システムによって PL/I に渡されるストリングは、最初に ' ' を含むストリングまで、すべての文字を削除したものになります。つまり、ストリングに ' ' が含まれていない場合、プログラムはヌル・ストリングを受け取ることになります。

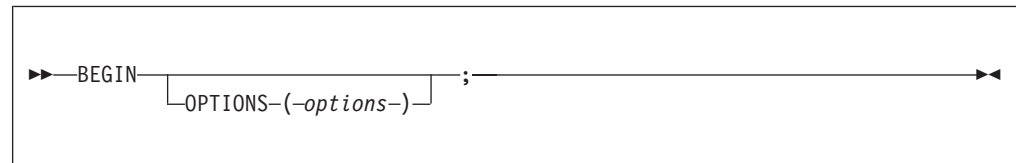
## 開始ブロック

開始ブロックは、BEGIN ステートメントとそれに対応する END ステートメントによって区切られている一連のステートメントです。以下に例を示します。

```
B: begin;
statement-1
statement-2
:
statement-n
end B;
```

## BEGIN ステートメント

BEGIN ステートメントとそれに対応する END ステートメントは、開始ブロックを区切ります。



### OPTIONS オプション

開始ブロック・オプションについては、146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。

## 開始ブロックの活動化

開始ブロックは、通常の流れによって、あるいはステートメント IF、ON、WHEN、または OTHERWISE のユニットとして活動化されます。

GO TO ステートメントを使用して、ラベルのついた BEGIN ステートメントに制御権を移動することができます。

## 開始ブロックの終了

開始ブロックは、プロシージャー参照以外のなんらかの方法で、制御が別のアクティブのブロックに渡されたときに終了します。その方法は以下のとおりです。

- 開始ブロックの END ステートメントを実行すること。ブロックが ON ユニットであるとき以外は、物理的に END のあとのステートメントで制御は継続します。

## 開始ブロックの終了

- ・ 開始ブロック内 (あるいは開始ブロックにとって内部である任意のブロック内) で GO TO ステートメントを実行すること。これにより、制御権はブロックの外部に移動します。
- ・ STOP または EXIT ステートメントを実行すること。
- ・ 制御権が RETURN ステートメントに到達すること。これにより、制御権は開始ブロックの外部および開始ブロックを含むプロシーチャーの外部に移動します。

GO TO ステートメントで指定した移動先の場所が、終了しようとしているブロックを直接に活動化したのではないブロックに含まれている場合には、GO TO ステートメントが実行されると他のブロックも終了します。つまり、活動化の順序においてその 2 つのブロックの間にあるすべてのブロックが終了します。この例については、115 ページの『プロシーチャーの終了』を参照してください。

---

## 入ロデータ

入ロデータは、入ロ定数または入ロ変数の値です。

入ロ定数は、PROCEDURE または ENTRY ステートメントに接頭部として付けられた名前、または VARIABLE 属性ではなく ENTRY 属性で宣言された名前です。これは、入ロ変数に割り当てられます。以下の例では、P、E1、および E2 が入ロ定数です。Ev は入ロ変数です。

```
P: procedure;
 declare Ev entry variable,
 (E1,E2) entry;
```

```
Ev = E1;
call Ev;
Ev = E2;
call Ev;
```

最初の CALL ステートメントは、エントリー・ポイント E1 を呼び出します。2 番目の CALL はエントリー・ポイント E2 を呼び出します。

以下の例では、添え字のついた入ロ変数の F(5) を宣言しています。

A、B、C、D、および E という 5 つの入ロは X、Y、および Z というパラメーターを使用してそれぞれ呼び出されます。

```
declare (A,B,C,D,E) entry,
declare F(5) entry variable initial (A,B,C,D,E);
do I = 1 to 5;
 call F(I) (X,Y,Z);
end;
```

内部プロシーチャーのエントリー・ポイントである入ロ定数が入ロ変数に割り当てられるときに、入ロ定数が内部にあったブロックがアクティブのままである間は、割り当てられた値は有効なままです (再帰的プロシーチャーの場合は、現行のままです)。

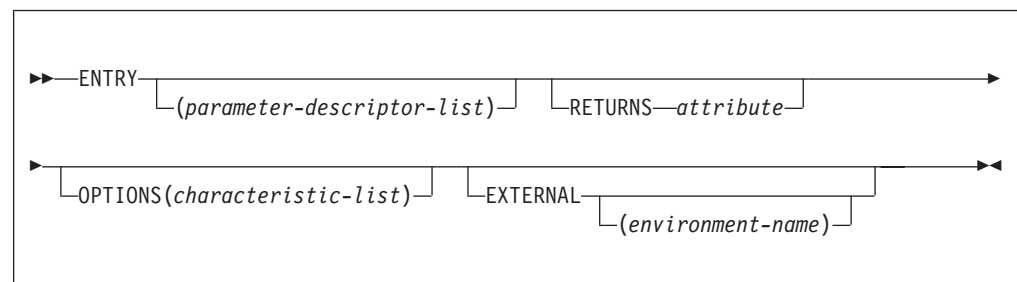


## 入出力定数

PROCEDURE または ENTRY ステートメントにラベル接頭部を指定すると、入出力定数を明示的に宣言することになります。パラメーター記述子リストは、パラメーター宣言、および (ある場合) デフォルトから得られます。

外部入出力定数は、明示的に宣言されなければなりません。この宣言は、以下のとおりです。

- 外部プロシージャにエン트리・ポイントを定義します。
- オプションで、(ある場合) エントリー・ポイントのパラメーター記述子リスト (パラメーターの数とその属性) を指定します。
- 入出力が関数の場合にプロシージャによって戻される値の属性を指定します。



属性は、任意の順序で示すことができます。

### ENTRY 属性

ENTRY 属性の完全な構文については、132 ページの『ENTRY 属性』を参照してください。

### OPTIONS 属性

OPTIONS 属性の完全な構文については、146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。

### RETURNS 属性

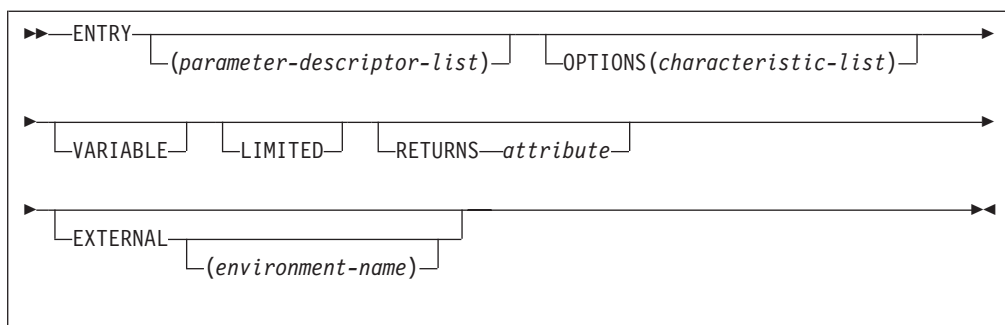
RETURNS 属性の完全な構文については、156 ページの『RETURNS オプションとその属性』を参照してください。

### EXTERNAL 属性

*environment-name* (環境名) を指定しないと、その名前は宣言と同じものになります。EXTERNAL 属性の詳細については、177 ページの『INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性』を参照してください。

## 入出力変数

入出力変数には、内部および外部入出力値の両方が含まれます。入出力変数は、集合の一部になることができます。構造化および配列の次元属性については、192 ページの『配列』および 197 ページの『構造体』を参照してください。



オプションは、任意の順序で示すことができます。

### ENTRY 属性

『ENTRY 属性』を参照してください。

### OPTIONS 属性

146 ページの『OPTIONS オプションとその属性』を参照してください。

### VARIABLE 属性

VARIABLE 属性は、入り口変数として名前を設定します。この変数には、入り口定数および変数が含まれます。構文情報については、58 ページの『VARIABLE 属性』を参照してください。

### LIMITED 属性

140 ページの『LIMITED 属性』を参照してください。

### RETURNS 属性

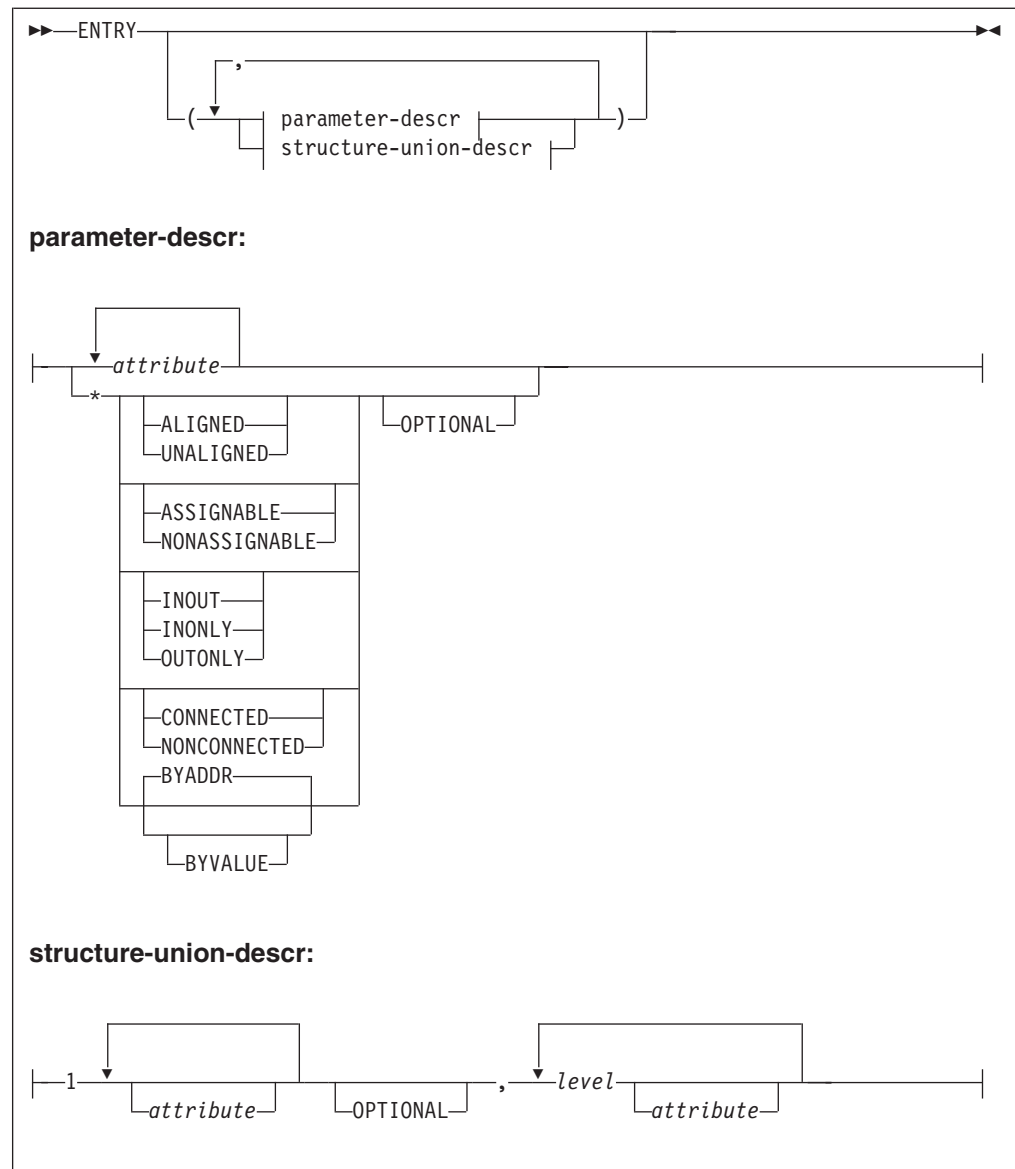
156 ページの『RETURNS オプションとその属性』を参照してください。

### EXTERNAL 属性

173 ページの『宣言の有効範囲』を参照してください。

## ENTRY 属性

ENTRY 属性は、宣言される名前が、外部入り口定数または入り口変数のいずれかであることを指定します。さらに、エントリー・ポイントのパラメーター属性も記述します。

**ENTRY**

パラメーター記述子リストを使用しない ENTRY 属性は、 RETURNS 属性によって暗黙指定されます。

**parameter-descr (parameter-descriptor)**

パラメーター記述子リストは、関連する外部入力口定数または入力口変数のパラメーターの属性を説明するために指定することができます。引数とパラメーター属性の突き合わせ、および仮引数の作成用に使われます。

パラメーター記述子リストが指定されない場合には、引数属性のデフォルトとパラメーター属性を突き合わせなければなりません。そのため、引数属性とパラメーター属性を突き合わせない場合には、パラメーター記述子リストを指定しなければなりません。

それぞれのパラメーター記述子は、呼び出されたエンタリー・ポイントの 1 つのパラメーターと対応し、(もし指定されていれば) そのパラメーターの属性が指定されます。

パラメーター記述子は、説明されているパラメーターと同じ順序で示さなければなりません。記述子がなければ、引数のデフォルトとパラメーターが突き合わされます。

パラメーターの記述子が不要な場合には、記述子がないということをアスタリスクで示さなければなりません。以下に例を示します。

|                                                 |                                  |
|-------------------------------------------------|----------------------------------|
| <code>entry(character(10),*,*,fixed dec)</code> | 4 つの引数を示します。                     |
| <code>entry(*)</code>                           | 1 つの引数を示します。                     |
| <code>entry( )</code>                           | 入り口名は引数を持つてはならないということ<br>を指定します。 |
| <code>entry</code>                              | 任意の数の引数を持つことができるということ<br>を指定します。 |
| <code>entry(float binary,*)</code>              | 2 つの引数を示します。                     |

### attribute

使用可能な属性は、29 ページの『データ属性』にリストされた任意のデータ属性です。属性は、パラメーター記述子内に任意の順に表示することができます。配列パラメーター記述子の場合、次元属性が最初に指定されなければなりません。

- \* アスタリスクは、そのパラメーターにどのデータ・タイプでも使用できることを指定します。アスタリスク以降の有効な属性は、以下のとおりです。
  - ALIGNED または UNALIGNED
  - ASSIGNABLE または NONASSIGNABLE
  - BYADDR または BYVALUE
  - CONNECTED または NONCONNECTED
  - INONLY、INOUT、または OUTONLY
  - OPTIONAL

変換は行われません。

### OPTIONAL

この属性については、135 ページの『OPTIONAL 属性』で説明します。

### structure-union-descr (structure-union-descriptor)

構造体共用体記述子の場合、記述子レベル番号がパラメーターのものと同等である必要はありませんが、構造化は同じでなければなりません。特定レベルの属性は、任意の順序で示すことができます。

アスタリスクが指定されている場合には、デフォルトは適用されません。例えば、以下の宣言のデフォルトは、2 番目のパラメーターにだけしか適用されません。

```
dcl X entry(* optional, aligned); /* defaults applied for 2nd parm */
```

パラメーター記述子のエクステンツ (長さ、サイズ、および境界) は、定数またはアスタリスクとして指定されなければなりません。被制御パラメーターは、アスタリスクを持たなければなりません。

RETURNS 属性は、ENTRY 属性を暗黙指定します。以下に例を示します。

パラメーター記述子の例

記述子の宣言の例

## パラメーター記述子の例

```
Test: procedure (A,B,C,D,E,F);

declare A fixed decimal (5),
 B float binary (21),
 C pointer,
 1 D,
 2 P,
 2 Q,
 3 R fixed decimal,
 1 E,
 2 X,
 2 Y,
 3 Z,
 F(4) character (10);
end Test;
```

## 記述子の宣言の例

```
declare Test entry
 (decimal fixed (5),
 binary float (21),
 *,
 1,
 2,
 2,
 3 decimal fixed,
 *,
 (4) char(10));
```

前の例では、C パラメーターおよび E 構造体パラメーターは記述子を持ちません。

## OPTIONAL 属性

OPTIONAL は、パラメーター記述子リストの一部として、またはパラメーター宣言の属性として指定することができます。

▶▶—OPTIONAL—▶▶

引数にアスタリスクを指定することによって、OPTIONAL 引数を呼び出しおよび関数参照で省略することができます。引数リストのどの位置にある項目でも (最後の項目でも構わない) 省くことができます。ただし、省略される項目は引数として数えられます。入り口にその項目が含まれていても、引数の数は入り口で許可されている最大数を超えてはなりません。

項目が LIMITED ENTRY ではない限りは、同じ項目に OPTIONAL と BYVALUE は使用できません。

受け取りプロシージャーは、OMITTED または PRESENT 組み込み関数を使用して、OPTIONAL パラメーター/引数が入り口の呼び出しで省略されたかどうかを判別することができます。(OMITTED 組み込み関数についての詳細は、588 ページの『OMITTED』を参照してください。)

ENTRY 宣言の最終パラメーターが OPTIONAL として宣言された場合、その ENTRY はそれらのパラメーターを完全に省略して呼び出すことができます。該当する数のアスタリスクを指定することも不要です。そのため、例えば、ある ENTRY が 5 つのパラメーターを持っていて、そのうち最後の 2 つは OPTIONAL 属性を持っていると宣言された場合、3 つ、4 つ、または 5 つの引数を指定して呼び出すことができます。

呼び出された ENTRY が明示的に宣言されている場合、および呼び出された ENTRY がネストされたサブプロシージャーである場合には、そのような末尾の OPTIONAL パラメーターを省略できます。なお、ENTRY に OPTIONS

(ASSEMBLER) 属性が指定されていない限り、生成されたコードでは、省略したパラメーターに NULL ポインターが入ります。

図 5 では、プロシージャ Vrtn に対して有効な CALL ステートメントと無効な CALL ステートメントの両方を示します。

```

Caller: proc;
 dcl Vrtn entry (
 fixed bin,
 ptr optional,
 float,
 * optional);

/* The following calls are valid: */

 call Vrtn(10, *, 15.5, 'abcd');
 call Vrtn(10, *, 15.5, *);
 call Vrtn(10, addr(x), 15.5, *);
 call Vrtn(10, *, 15.5);
 call Vrtn(10, addr(x), 15.5);

/* The following calls are invalid: */

 call Vrtn(*, addr(x));
 call Vrtn(10,addr(x));
 call Vrtn(10);
 call Vrtn;
end Caller;

Vrtn: proc (Fb, P, Fl, C1);
 dcl Fb fixed bin,
 P ptr optional,
 Fl float,
 C1 char(8) optional;

 if ~omitted(C1) then display (C1);
 if ~omitted(P) then P=P+10;
end;

```

図 5. 有効な呼び出しステートメントおよび無効な呼び出しステートメント

Vrtn は、OPTIONAL パラメーターが省略されたかどうかを判別して、適切な処置をとります。

## LIST 属性

LIST は、パラメーター記述子リストの最後のパラメーターで指定できます。または、プロシージャへの最後のパラメーターの属性として指定できます。

▶▶—LIST—▶▶

LIST 属性が入り口宣言で指定された場合、それは、ゼロまたはさらに追加の引数がそのエントリー・ポイントに渡される可能性があることを示します。例えば、次の

宣言では、`vararg` が 1 文字の `varyingz` パラメーターを指定して呼び出されなければならないこと、および任意の数のほかのパラメーターを指定して呼び出されなければならないことを指定します。

```
dcl vararg external
 entry(list byaddr char(*) varz nonasgn)
 options(nodestructor byvalue);
```

LIST 属性がプロシージャーの最後のパラメーターの宣言中で指定される場合、それは、ゼロまたはさらに追加の引数があるそのプロシージャーに渡された可能性があることを示します。

LIST 属性が指定された場合、記述子は許可されず、`OPTIONS(NODESCRIPTOR)` をその `PROCEDURE` ステートメントおよびその対応する `ENTRY` 宣言に対して指定する必要があります。

それらの追加パラメーターの中の最初のパラメーターのアドレスは、`VARGLIST` 組み込み関数を介して取得できます。以下のように、このアドレスは、追加パラメーターのアドレスを取得するのに使用されることがあります。

- このプロシージャーへの追加パラメーターが `BYVALUE` で渡された場合、この初期アドレスを `VARGSIZE` 組み込み関数が戻した値で連続的に増やして、追加パラメーターのアドレスを戻します。
- このプロシージャーへの追加パラメーターが `byaddr` で渡された場合、この初期アドレスをポインターのサイズで連続的に増やして、追加パラメーターのアドレスを戻します。

以下の (`printf` の簡単なバージョンを実現する) サンプル・プログラムは、LIST 属性の使用法を示します。ルーチン `varg1` は、`BYVALUE` パラメーターを持つ変数の引数リストを処理する方法を示します。ルーチン `varg2` は、`byaddr` パラメーターを持つ変数の引数リストを処理する方法を示します。

```

*process rules(ans) dft(ans) gn;

vararg: proc options(main);

 dcl i1 fixed bin(31) init(1729);
 dcl i2 fixed bin(31) init(6);
 dcl d1 float bin(53) init(17.29);

 dcl varg1 ext entry(char(*) varz byaddr list)
 options(byvalue nodescriptor);
 dcl varg2 ext entry(char(*) varz byaddr list)
 options(byaddr nodescriptor);

 call varg1('test byvalue');
 call varg1('test1 parm1=%i', i1);
 call varg1('test2 parm1=%i parm2=%i', i1, i2);
 call varg1('test3 parm1=%d', d1);

 call varg2('test byaddr');
 call varg2('test1 parm1=%i', i1);
 call varg2('test2 parm1=%i parm2=%i', i1, i2);
 call varg2('test3 parm1=%d', d1);
end;

*process ;
varg1:
 proc(text)
 options(nodescriptor byvalue);

 dcl text list byaddr nonasgn varz char(*) ;

 dcl jx fixed bin;
 dcl iz fixed bin;
 dcl ltext fixed bin;
 dcl ptext pointer;
 dcl p pointer;
 dcl i fixed bin(31) based;
 dcl d float bin(53) based;
 dcl q float bin(64) based;
 dcl chars char(32767) based;
 dcl ch char(1) based;

```

図6. LIST 属性を説明するサンプル・プログラム (1/3)



```

ptext = addr(text);
ltext = length(text);
iz = index(substr(ptext->chars,1,ltext), '%');
p = varglist();
do while(iz > 0);
 if iz = 1 then;
 else
 put edit(substr(ptext->chars,1,iz-1))(a);
 ptext += iz;
 ltext -= iz;
 select(ptext->ch);
 when('i')
 do;
 put edit(trim(p->i))(a);
 p += vargsize(p->i);
 end;
 when('d')
 do;
 put edit(trim(p->d))(a);
 p += vargsize(p->d);
 end;
 end;
 ptext += 1;
 ltext -= 1;
 if ltext <= 0 then leave;
 iz = index(substr(ptext->chars,1,ltext), '%');
 end;
 if ltext = 0 then;
 else
 put edit(substr(ptext->chars,1,ltext))(a);
 put skip;
end;

```

図 6. LIST 属性を説明するサンプル・プログラム (2/3)

```

*process ;
 varg2:
 proc(text)
 options(nodedescriptor byaddr);

 dcl text list byaddr nonasgn varz char(*);

 dcl jx fixed bin;
 dcl iz fixed bin;
 dcl ltext fixed bin;
 dcl ptext pointer;
 dcl p pointer;
 dcl p2 pointer based;
 dcl i fixed bin(31) based;
 dcl d float bin(53) based;
 dcl q float bin(64) based;
 dcl chars char(32767) based;
 dcl ch char(1) based;

 ptext = addr(text);
 ltext = length(text);
 iz = index(substr(ptext->chars,1,ltext), '%');
 p = varglist();
 do while(iz > 0);
 if iz = 1 then;
 else
 put edit(substr(ptext->chars,1,iz-1))(a);
 ptext += iz;
 ltext -= iz;
 select(ptext->ch);
 when('i')
 do;
 put edit(trim(p->p2->i))(a);
 p += size(p);
 end;
 when('d')
 do;
 put edit(trim(p->p2->d))(a);
 p += size(p);
 end;
 end;
 ptext += 1;
 ltext -= 1;
 if ltext <= 0 then leave;
 iz = index(substr(ptext->chars,1,ltext), '%');
 end;
 if ltext = 0 then;
 else
 put edit(substr(ptext->chars,1,ltext))(a);
 put skip;
 end;

```

図6. LIST 属性を説明するサンプル・プログラム (3/3)

## LIMITED 属性

LIMITED 属性は、入引変数がネストされていない入引定数だけを値として持つことを表します。LIMITED ではない入引変数は、入引定数を値として持つことができます。



## 例

```
Example: proc options(reorder reentrant);
dc1 (Read, Write) entry;
dc1 FuncRtn(2) entry limited
static init (Read, Write);
```

```
dc1 (Prt1) entry;
dc1 PrtRtn(2) entry variable limited
static init (Prt1, /* legal */
 Prt2); /* illegal */
Prt2: proc;
:
end Prt2;
end Example;
```

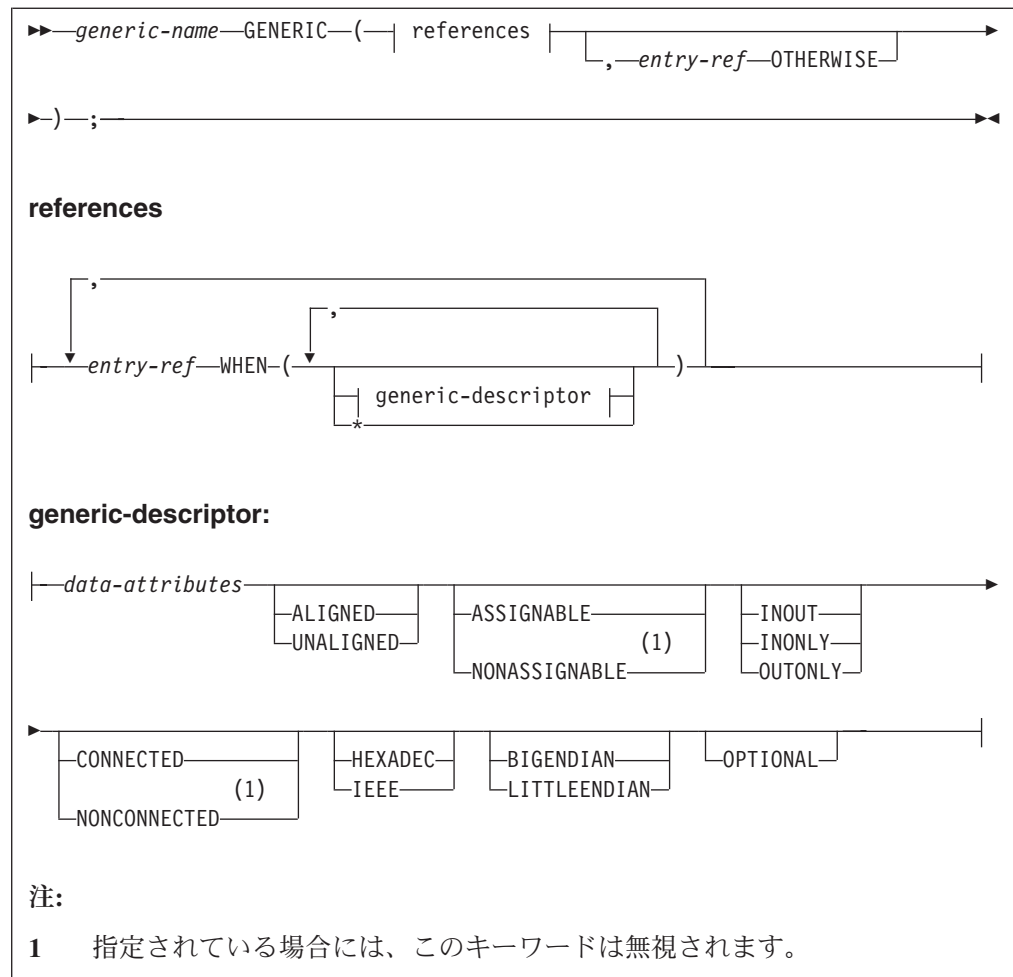
LIMITED 静的入り口変数は、ネストされていない入り口定数の値を使用して初期設定できます。こうすれば、より効率的なコードを生成できます。また、LIMITED 静的入り口変数は、LIMITED ではない入り口変数よりも小さいストレージを使用します。

## 総称入り口

総称入り口宣言で、入り口参照とそれらの記述子のセットに対して総称名を指定します。コンパイル時に、総称名の呼び出しがセット内の 1 つの入り口に置き換えられます。

## GENERIC 属性

総称名は、GENERIC 属性を使用して明示的に宣言されなければなりません。



省略形: OTHERWISE の場合には OTHER

総称宣言の構文については、171 ページの『DECLARE ステートメント』を参照してください。

### entry-ref

添え字を付けたリ、定義したりする必要はありません。別の記述子のリストを利用して、同じ入り口参照を単一の GENERIC 宣言内で複数回使用することができます。

### generic-descriptor

単一引数と対応します。対応する引数を持たなければならないので、関連する入り口参照を置換用を選択できる属性を指定します。

構造体または共用体を指定することはできません。

記述子が不要な場所では、不在の場所をアスタリスクで示さなければなりません。

呼び出されるステートメント内のすべての引数が不在であることを表す記述子は、入りの WHEN 文節内で総称記述子を省略することによって表されます。フォーマットは次のとおりです。

```
generic (... entry1 when() ...)
```

#### data-attributes

28 ページの『データ・タイプとその属性』にリストされています。

#### ALIGNED および UNALIGNED

183 ページの『ALIGNED 属性と UNALIGNED 属性』に説明されています。

#### ASSIGNABLE および NONASSIGNABLE

277 ページの『ASSIGNABLE 属性と NONASSIGNABLE 属性』に説明されています。

#### CONNECTED および NONCONNECTED

280 ページの『CONNECTED 属性と NONCONNECTED 属性』に説明されています。

#### HEXADEC および IEEE

279 ページの『HEXADEC 属性と IEEE 属性』に説明されています。

#### BIGENDIAN および LITTLEENDIAN

278 ページの『BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性』に説明されています。

#### OPTIONAL

135 ページの『OPTIONAL 属性』に説明されています。

総称名の呼び出しに達すると、呼び出しに指定されている引数の数およびその属性は、セット内の各入りの記述子リストと比較されます。数および属性の両方で引数と記述子リストが一致する最初の入りの参照が、総称名と置き換わります。

以下の例では、DECIMAL または FLOAT、および BINARY または FIXED という属性の付いた記述子をちょうど 2 つだけ持つ入りの参照が、探索されます。

```
declare Calc generic (
 Fxdcal when (fixed,fixed),
 Flocal when (float,float),
 Mixed when (float,fixed),
 Error otherwise);
Dcl X decimal float (6),
 Y binary fixed (15,0);
```

```
Z = X+Calc(X,Y);
```

正確な属性のついた記述子の正確な数のついた入りの参照が検出されない場合には、(ある場合) OTHERWISE 文節のついた入りの参照が選択されます。前の例では、Mixed が選択されて置き換えられています。

同じような方法で、引数の次元数に基づいて、入りの参照を選択することができます。

```
dcl D generic (D1 when ((*)),
 D2 when ((*,*))),
 A(2),
 B(3,5);
call D(A); /* D1 selected because A has one dimension */
call D(B); /* D2 selected because B has two dimensions */
```

すべての記述子が省略されるか、またはアスタリスクで構成される場合には、正しい数の記述子を持つ最初の入りの参照が選択されます。

総称値への参照で引数として使う入り口式は、ENTRY タイプの記述子とだけ一致します。そのような記述子がないときには、プログラムはエラー状態になります。

## 入り口呼び出しまたは入り口値

入り口値自体が使用されるか、または入り口呼び出しによって戻される値が使用されるか判然としない場合があります。以下の表および例を使用すると、以下の場合にどちらが起こったかを理解する際に役立ちます。

| 入り口参照が以下の場合 . . .              | 次のようになります . . . |
|--------------------------------|-----------------|
| 組み込み関数の場合                      | 呼び出されます         |
| ヌルであっても、引数リストを持っている場合          | 呼び出されます         |
| CALL ステートメントで参照される場合           | 呼び出されます         |
| 引数リストがなく、CALL ステートメントで参照されない場合 | 呼び出されません        |

以下の例では、A が呼び出され、B(C) は入り口値として C を渡し、D( C() ) は C を呼び出します。

```

dcl (A, B, C returns (fixed bin), D) entry;

call A; /* A is invoked */
call B(C); /* C is passed as an entry value */
call D(C()); /* C is invoked */
```

以下の例では、最初の割り当ては、整数への入り口定数を割り当てようとしたことを示しているために、無効になります。2 番目の割り当ては有効です。

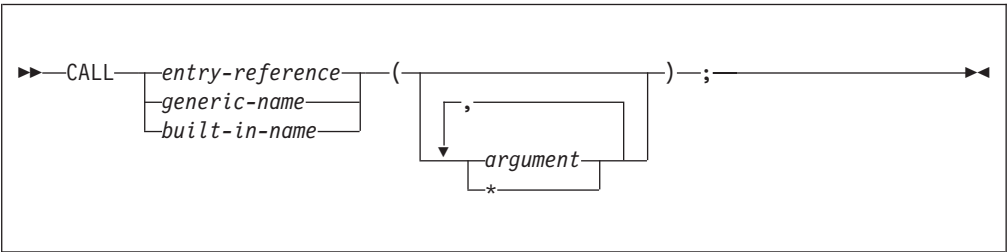
```

dcl A fixed bin,
 B entry returns (fixed bin);

A = B;
A = B();
```

## CALL ステートメント

CALL ステートメントはサブルーチンを呼び出します。



### entry-reference

呼び出されるサブルーチンの名前が ENTRY 属性で宣言されることを指定します (130 ページの『入り口データ』で説明されています)。

### generic-name

呼び出されるサブルーチンの名前が GENERIC 属性で宣言されることを指定します (141 ページの『総称入り口』で説明されています)。

**built-in name**

呼び出されるサブルーチンの名前が **BUILTIN** 属性で宣言されることを指定します (421 ページの『**BUILTIN** 属性』を参照)。

**argument**

呼び出されたサブルーチンに渡されるエレメント、要素式、または集合です。  
125 ページの『プロシージャーへの引数の引き渡し』を参照してください。

**CALL** ステートメントの参照または式は、呼び出しが実行されるブロック内で計算されます。この中には、計算結果として入力される **ON** ユニットの実行も含まれます。

---

## RETURN ステートメント

**RETURN** ステートメントは、**RETURN** ステートメントが入っているサブルーチンまたは関数プロシージャーの実行を終了し、呼び出しプロシージャーに制御を戻します。制御は、呼び出し参照の直後の場所に戻されます。

式を伴う **RETURN** ステートメントを **OPTIONS(MAIN)** によるプロシージャー内で使用することはできません。

式を伴わない **RETURN** ステートメントは、**RETURNS** オプションを指定したプロシージャー内では無効です。反対に、式を伴う **RETURN** ステートメントは、**RETURNS** オプションを指定していないプロシージャー内では無効です。

**RETURNS** オプションを指定したプロシージャーでは、少なくとも 1 つの **RETURN** ステートメント (もちろん式を伴うもの) が含まれていなければなりません。

## サブルーチンからの戻り

サブルーチンから戻るための、**RETURN** ステートメント構文は以下のとおりです。

```
▶▶—RETURN—;—▶▶
```

**RETURN** ステートメントが主プロシージャーを終了すると、プログラムが終了する前に、**FINISH** 条件が起こります。

## 関数からの戻り

関数から戻るための **RETURN** ステートメント構文は以下のとおりです。

```
▶▶—RETURN—(expression)—;—▶▶
```

## 関数からの戻り

関数参照に戻される値は、指定された式の値であり、関数が入力された ENTRY ステートメントまたは PROCEDURE ステートメントの RETURNS オプションで指定されている属性と一致させるために変換されます。以下に例を示します。

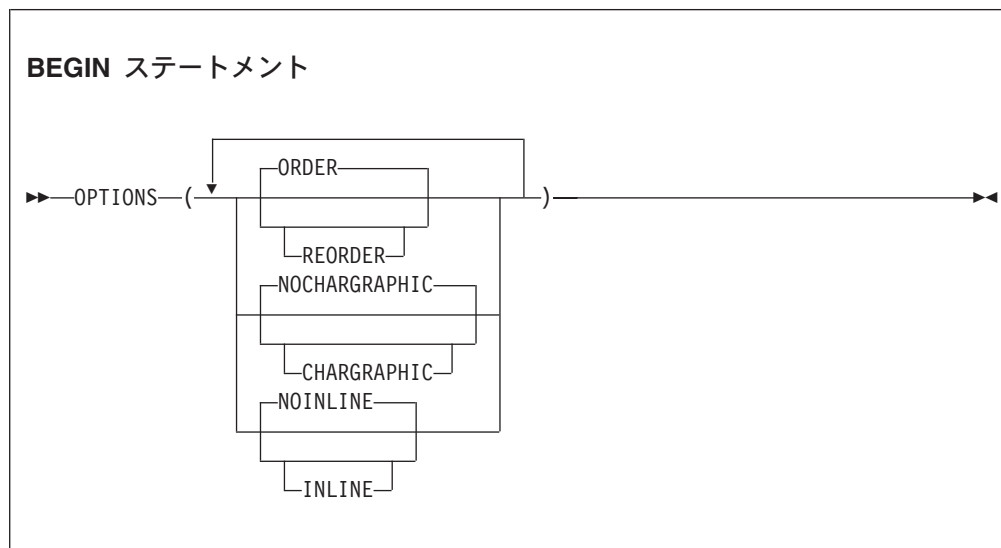
```
F: procedure returns(fixed bin(15));
:
:
G: entry returns(fixed dec(7,2));
:
:
dcl D fixed bin(31);
:
:
return (D);
```

この関数が F で入力されると、D は、プロシージャ F (FIXED BIN(15)) の RETURNS オプションで指定された属性に変換されます。しかし、この関数が G で入力されると、D は、エントリー G(FIXED DEC(7,2)) の RETURNS オプションで指定された属性に変換されます。

開始ブロック内の RETURN ステートメントに式を指定することはできません。

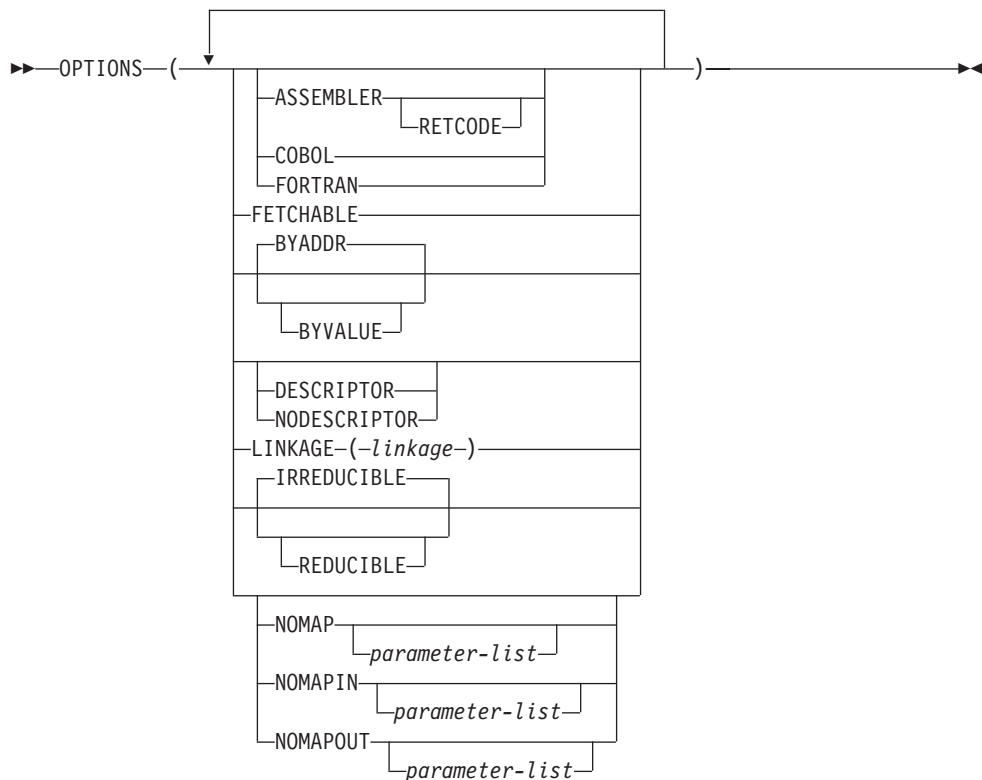
## OPTIONS オプションとその属性

OPTIONS オプションは、ステートメント PACKAGE、PROCEDURE、ENTRY および BEGIN に指定することができます。OPTIONS 属性は、ENTRY 宣言で指定することができます。これは、ブロックやプロシージャの呼び出しに適用する処理の特性を指定するために使用されます。以下の構文図に示されているオプションは、英字順にリストされており、149 ページから説明されています。

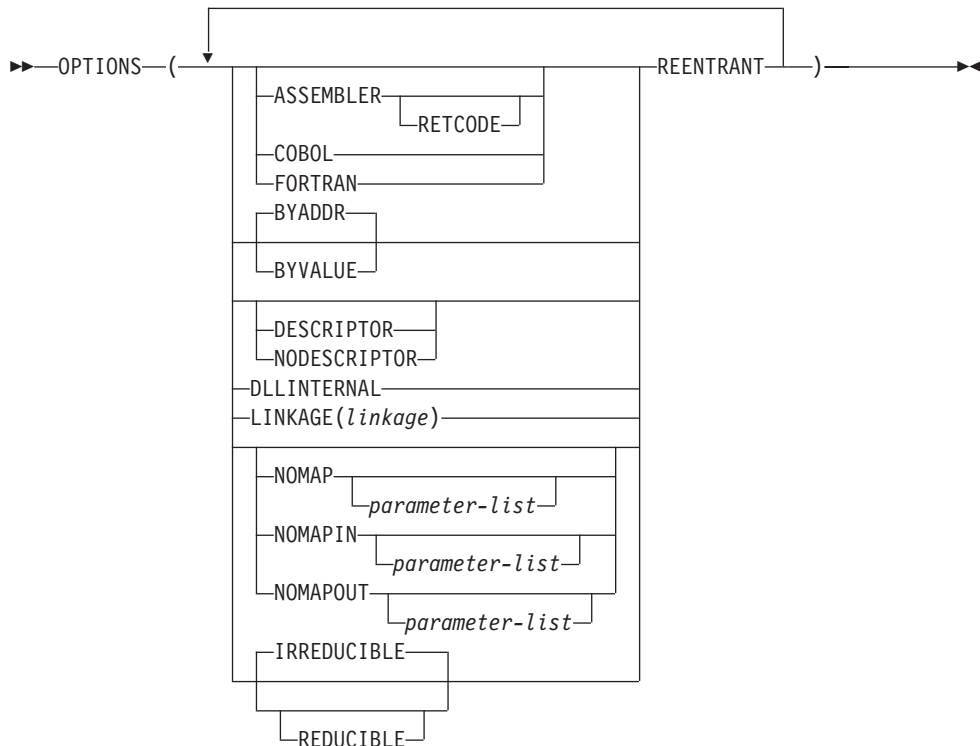




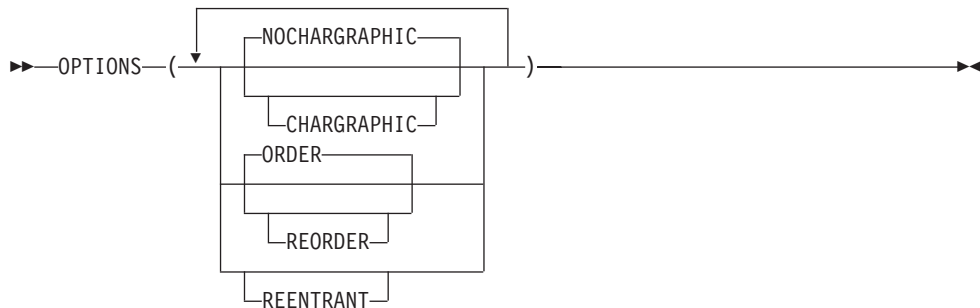
# ENTRY 宣言



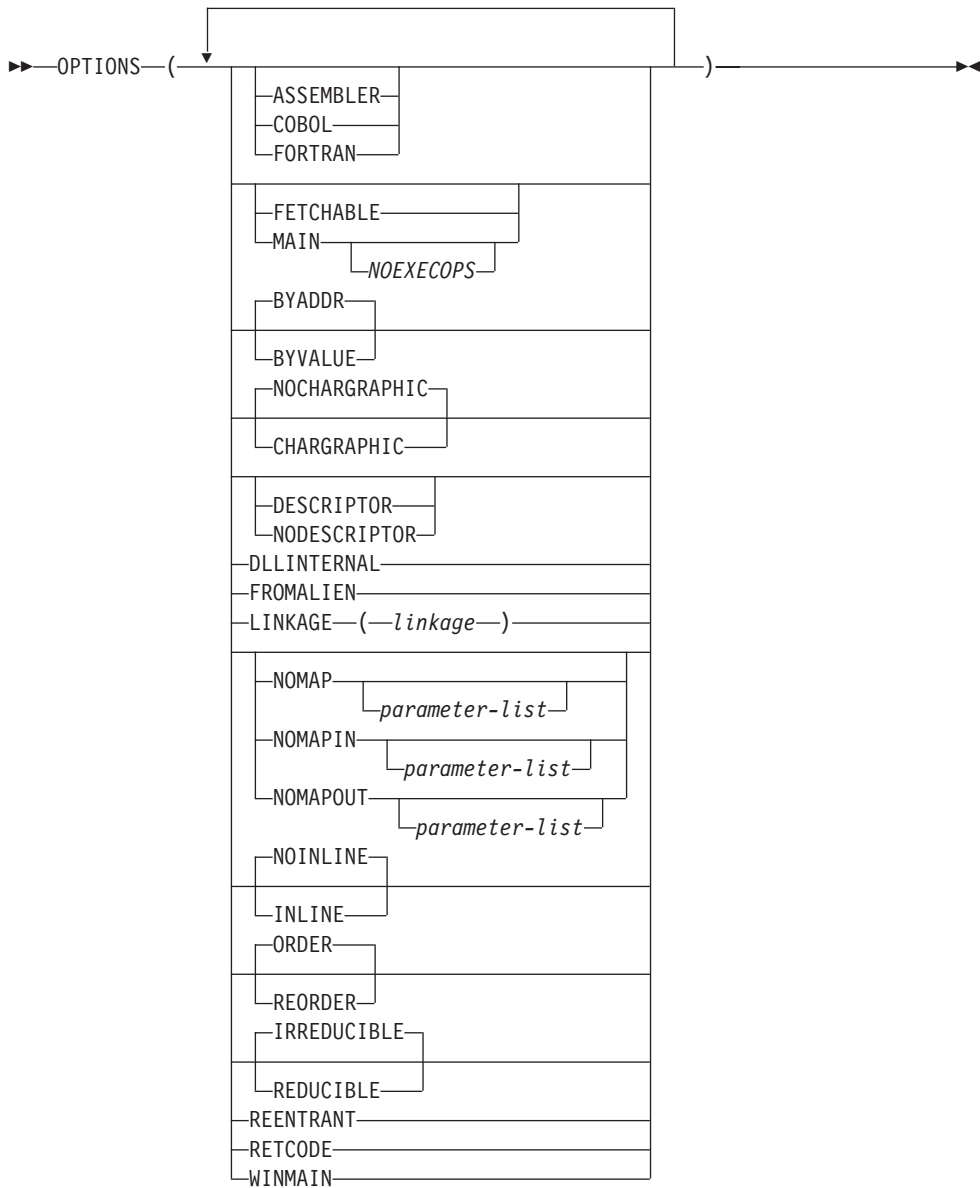
## ENTRY ステートメント



## PACKAGE ステートメント



# PROCEDURE ステートメント



オプションは、ブランクまたはコンマで区切られます。これらは、任意の順番に示すことができます。

## ASSEMBLER

省略形: ASM

このオプションは NODESCRIPTOR と同じ効果があります。

プロシージャに ASSEMBLER オプションがある場合、そのプロシージャの終了によって、PLIRETV() 値が、そのプロシージャの戻り値として使用されます。

## OPTIONS オプションとその属性

OPTIONS(ASSEMBLER) を指定する PROCEDURE または ENTRY ステートメントは、別のリンケージが明示的に指定されない限り、LINKAGE(SYSTEM) を持ちます。

詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

### BYADDR または BYVALUE

引数とパラメーターがどのように受け渡しされるのかを指定します。BYADDR はデフォルトです。

BYVALUE は、既知の長さとサイズを持つスカラー引数およびスカラー・パラメーターに対してのみ指定できます。

BYVALUE および BYADDR 属性は、入り口宣言の記述子リスト、およびパラメーター宣言の属性リスト内にも指定することができます。入り口またはパラメーター宣言に BYVALUE または BYADDR を指定すると、OPTIONS ステートメントに指定されたオプションが無効になります。

以下の例では、入り口宣言と OPTIONS オプションの両方に BYVALUE および BYADDR を表しています。例では、コンパイラー・オプション DEFAULT (BYADDR) が有効であると想定しています。

#### 例 1

```
MAINPR: proc options(main);

 dc1 D entry (fixed bin byaddr,
 ptr,
 char(4) byvalue) /* byvalue not needed */
 options(byvalue);
 dc1 E2 entry; /* default(byaddr) in effect */
 dc1 Length fixed bin,
 P pointer,
 Name char(4);

 call D(Length, P, Name); /* Length is passed byaddr */
 /* P is passed by value */
 /* Name is passed by value */

 call E2(P); /* P is passed by address */

D: proc(I, Q, C)
 options(byvalue);
 dc1 I fixed bin byaddr,
 Q ptr,
 C char(4) byvalue;

E2: proc(Q);
 dc1 Q ptr;
```

#### 例 2

```
dc1 F entry (fixed bin byaddr, /* byaddr not needed */
 ptr,
 char(4) byvalue)
 options(byaddr);
dc1 E3 entry;
dc1 E4 entry (fixed bin byvalue);
```

```
call F(Length, P, Name); /* Length is passed byaddr */
 /* P is passed byaddr */
 /* Name is passed by value */
```

```
call E3(Name); /* Name is passed byaddr */
call E4(Length); /* Length is passed by value */
```

```
F: proc(I,P,C) options(byaddr);
 dcl I fixed bin byaddr; /* byaddr not needed */
 dcl P ptr byaddr; /* byaddr not needed */
 dcl C char(4) byvalue; /* byvalue needed */
```

```
E3: proc(L);
 dcl L char(4);
```

```
E4: proc(N);
 dcl N fixed bin byvalue;
```

## CHARGGRAPHIC または NOCHARGGRAPHIC

省略形: CHARG、NOCHARG

外部プロシーチャーの省略形は、NOCHARG です。内部プロシーチャーと開始ブロックは、それらが含まれているプロシーチャーからデフォルトを継承します。

CHARG が有効な場合には、以下のようなセマンティックの変更が起こります。

- すべての文字ストリング割り当てでは、文字の割り当てを混合すると考えられます。
- STRINGSIZE 条件によって、MPSTR 組み込み関数が使用されます。STRINGSIZE は、切り捨てを起こすことができ、かつインテリジェントな DBCS の切り捨てが必要とされる文字の割り当てが生じた場合に使用可能にならなければなりません。(MPSTR BUILTIN については、580 ページの『MPSTR』を参照してください。) 以下に例を示します。

```
Name: procedure options(chargraphic);
 dcl A char(5);
 dcl B char(8);

 /* the following statement... */

 (stringize): A=B;

 /*...is logically transformed into... */

 A=mpstr(B,'vs',length(A));
```

NOCHARG が有効な場合は、セマンティックの変更は起こりません。

## COBOL

このオプションは NODESCRIPTOR (下記を参照) と同じ効果を持ち、さらに OPTION(COBOL) の効果を加えたものです。

- 入力宣言またはプロシーチャー・ステートメントで他のリンケージが指定されていない限り、LINKAGE(SYSTEM) を暗黙指定します。
- NOMAP、NOMAPIN、または NOMAPOUT オプションの使用を許可します。

## OPTIONS オプションとその属性

- プロシージャ・ステートメントで指定されている場合、そのプロシージャの終了によって、PLIRETV() 値が、そのプロシージャの戻り値として使用されることを暗黙指定します。

COBOL および MAIN を一緒に指定してはなりません。

### DESCRIPTOR または NODESCRIPTOR

入り口宣言またはプロシージャ・ステートメントで指定したプロシージャが呼び出されたときに、記述子リストを渡すかどうかを示します。

DESCRIPTOR が示される場合、必要に応じてコンパイラーは記述子を渡します。

NODESCRIPTOR が示される場合には、コンパイラーは記述子を渡しません。

上記のどちらも表示されない場合には、呼び出されたプロシージャのいずれかのパラメーターがストリング、配列、区域、構造体、または共用体であるときだけ、DESCRIPTOR が想定されます。

いずれかのパラメーターまたはエレメントが、以下の条件に当てはまっている場合、プロシージャ・ステートメントまたは入り口宣言に NODESCRIPTOR があると、エラーになります。

- 範囲、長さまたはサイズを表すのにアスタリスク ( \* ) を使用している場合。
- いずれかのパラメーターが NONCONNECTED の場合。

ただし、範囲が指定されていないパラメーターが INONLY VARYING または VARYINGZ ストリングの場合は、NODESCRIPTOR を利用できます。

### DLLINTERNAL

このオプションは、プロシージャまたは項目が DLL の内部にあることが意図されており、結果として、その名前はコンパイラーによって生成された定義サイド・ファイルに含まれるべきでないことを示します。

DLLINTERNAL 属性は、EXTERNAL プロシージャまたは ENTRY でのみ有効です。

### FETCHABLE

このオプションは、必要に応じて、プロシージャを呼び出す前に動的に取り出すかどうかを示します。

FETCHABLE 属性は、INTERNAL プロシージャでは無効です。

FETCHABLE プロシージャは、MAIN プロシージャが含まれるロード・モジュールにはリンクしないでください。

### FORTRAN

このオプションを使用すると、文字変数以外の記述子は渡されなくなります。

FORTRAN および MAIN を一緒に指定してはなりません。

### FROMALIEN

このオプションは、プロシージャを非 PL/I ルーチンから呼び出すことができるかどうかを示します。FROMALIEN は任意のプロシージャで指定できます。ただし、その場合は不必要なオーバーヘッドが生じることになります。

## INLINE または NOINLINE

INLINE と NOINLINE のオプションは最適化オプションであり、パッケージ内の開始ブロックおよびネストされないレベル 1 のプロシージャー用に指定できます。

INLINE は、開始ブロックまたはプロシージャーがパッケージ内で呼び出されたとき、その開始ブロックまたはプロシージャーのコードが呼び出し点でインラインで実行されることを示します。INLINE が指定されていても、コンパイラーは、開始ブロックまたはプロシージャーをインラインとしないように選択することができます。

NOINLINE は、開始ブロックまたはプロシージャーがいかなる場合にもインラインで実行されないように指示します。

OPTIONS(INLINE) を使用すれば、適切に構造化された読みやすいコードを書くのが容易になります。例えば、プログラムをプロシージャーのセットへの一連の呼び出しとして作成した場合、OPTIONS(INLINE) を使えば、これらのプロシージャーを 1 つ 1 つ呼び出す必要がなくなり、オーバーヘッドが少なくなります。

プロシージャーまたは開始ブロックをインラインで実行すると、ONLOC などの組み込み関数によって戻される値は、その関数がインライン化されているプロシージャーの名前を戻します。同様に、トレースバックされた情報には、呼び出されたプロシージャーは含まれません。

インライン化できないプロシージャーと開始ブロックがあります。以下のものを含めますが、これらに限定することはありません。

- 条件の割り込み可能化が可変であるパッケージ内のプロシージャーと開始ブロック
- ON ステートメントまたは REVERT ステートメントを含むプロシージャーと開始ブロック
- データ・ディレクティブの入出力ステートメントを含むプロシージャーと開始ブロック
- ENTRY、FORMAT、または LABEL 定数の割り当てまたは比較を含むプロシージャーと開始ブロック

INLINE オプションを指定したネストされないプロシージャーが外部ではなく参照もされない場合、このプロシージャーのためのコードは作成されません。

INLINE も NOINLINE も指定されていないプロシージャーについては、DEFAULT コンパイラー・オプションがオプションをセットします。

INLINE と NOINLINE の詳しい使用方法については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## LINKAGE

このオプションは、使用する呼び出し規約を指定し、PROCEDURE ステートメントおよび ENTRY 宣言で指定されます。

### CDECL (INTEL のみ)

このオプションは、32 ビット C コンパイラーが使用する CDECL リンケージ規約を指定します。

### OPTLINK

このオプションは最高速リンケージ規約であり、デフォルト設定されています。これは、ほとんどのコンパイラーの場合は標準のリンケージではありません。

### STDCALL (Windows のみ)

このオプションは、STDCALL (すべての Windows API が使用する標準のリンケージ規約) を指定します。

### SYSTEM

このオプションは、オペレーティング・システムを呼び出すときに使用する呼び出し規則を指定します。このオプションは OPTLINK よりも低速ですが、すべての MVS および AIX アプリケーションの標準オプションです。

呼び出し規則の詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

### MAIN

このオプションは、この外部プロシージャが PL/I プログラムの初期プロシージャであることを示します。1 プログラムにつき 1 つの外部プロシージャにだけ、MAIN が有効であり、必要とされます。オペレーティング・システムの制御プログラムは、そのプログラムの実行の最初のステップとしてこのプロシージャを呼び出します。

OPTIONS(MAIN) を指定した、複数のプロシージャを含んでいる PL/I プログラムは、予測できない結果を生じることがあります。

MAIN が指定された場合、COBOL および FORTRAN は無効です。

### NOEXECOPS

NOEXECOPS オプションは、MAIN オプションを使用する場合だけ有効です。このオプションは、ランタイム・オプションが、プログラムを呼び出すコマンドやステートメントでは指定できないこと指定します。主プロシージャのパラメーターだけが指定されます。

### NOMAP, NOMAPIN, NOMAPOUT

これらのオプションは、COBOL または FORTRAN と PL/I とのインターフェースでデータ集合体の自動操作を防ぎます。

各オプション引数リストは、適用するオプションのパラメーターを指定します。パラメーターは、どのような順番でも表示でき、コンマまたはブランクによって分離することができます。オプション用の引数リストがない場合、項目名のすべてのパラメーターはデフォルト・リストになります。

NOMAP、NOMAPIN、または NOMAPOUT は、同一の OPTION 指定にすべて表示することができます。この指定は、複数の指定またはデフォルト引数リストの同一パラメーターに含まれてはなりません。

これらのオプションは受け入れられますが、COBOL オプションが適用されない限りは無視されます。

### ORDER または REORDER

ORDER と REORDER は、プロシージャまたは開始ブロックに指定される最適化オプションです。



ORDER は、ブロック内で修正された変数の最も新しく割り当てられた値だけが入力される ON ユニットで利用できることを示します。これは、ステートメントの実行時およびブロック内の式で計算条件が生じたためです。

REORDER オプションを指定すると、コンパイラーが最適化コードを生成し、エラー・フリーの実行があった場合に、ソース・プログラムに指定された結果を生成することができます。

ORDER と REORDER オプションの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

上記のオプションが両方とも外部プロシージャに指定されない場合には、デフォルトとして DEFAULT コンパイラー・オプションがセットされます。内部ブロックは、含まれているブロックから ORDER または REORDER を継承します。

## REDUCIBLE または IRREDUCIBLE

省略形: RED、IRRED

REDUCIBLE は、引数 (1 つまたは複数) が変更されない限り、プロシージャまたは入りを複数回呼び出す必要がないこと、およびプロシージャの呼び出しに副次作用がないことを示します。

例えば、変更されないデータに基づいて結果を計算するユーザー作成の関数には、REDUCIBLE が宣言されなければなりません。乱数や時刻などの、変更されるデータに基づいて結果を計算する関数は、IRREDUCIBLE として宣言する必要があります。

## REENTRANT

このオプションは無視されます。Intel および AIX プラットフォームではすべての PL/I プログラムが再入可能です。z/OS プラットフォームでは、RENT コンパイラー・オプションによって、コンパイルされたすべてのプログラムが再入可能であり、静的変数 (NOWRITABLE コンパイラー・オプションの利用が必要になる場合もあります。) を変更しないものであれば、その他のプログラムも再入可能です。

## RETCODE

このオプションを指定すると、ENTRY 点に ASM または COBOL オプションも指定されている場合、ENTRY は呼び出された後、PL/I 戻りコードとして保管される値を戻します。基本的に、このような ENTRY が呼び出された場合、その戻り値は PLIRETC サブルーチンに渡されます。

## WINMAIN (Windows のみ)

 WIN

このオプションは、自動的に LINKAGE(STDSCALL) および EXT('WinMain') を暗黙指定します。関連ルーチンには、以下の 4 つのパラメーターを含める必要があります。

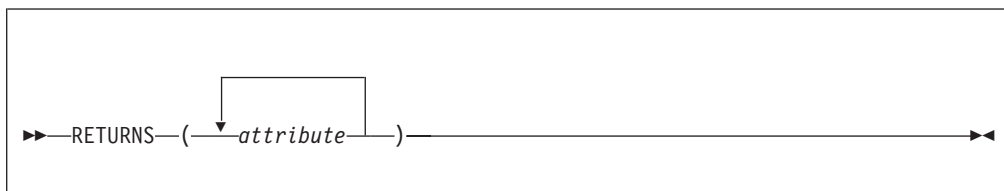
1. インスタンス操作点
2. 直前の操作点
3. コマンド行へのポインター
4. ShowWindow に渡される整数

これらは、C WinMain が予期する 4 つのパラメーターと同じであり、このルーチンからの呼び出しは、C ルーチンが予期するものと同じです。

## RETURNS オプションとその属性

プロシージャが関数プロシージャである場合には、プロシージャ・ステートメントに RETURNS オプションを指定しなければなりません。さらに、呼び出しプロシージャまたはパッケージで、RETURNS 属性のついた入り口としてプロシージャを宣言しなければなりません。RETURNS オプションおよび RETURNS 属性は、戻される値の属性を指定するために使用されます。RETURNS オプションの属性は、RETURNS 属性の属性と一致しなければなりません。

サブルーチンである (そのため、CALL ステートメントを使用して呼び出された) プロシージャは、プロシージャ・ステートメントに RETURNS オプションを持つてはならず、その入り口宣言は RETURNS 属性を持つてはなりません。



複数の属性を指定する場合は、属性をブランクで区切る必要があります (括弧で囲まれる精度などの属性以外の場合)。

属性は、それが宣言ステートメント内にあるのと同じ方法で指定されます。デフォルトは通常の方法で適用されます。

指定される属性は、(33 ページの表 8 に示されている) スカラー変数のデータ属性や位置合わせ属性になります。ENTRY 変数は、LIMITED 属性を持たなければなりません。また、TYPE 属性を指定して、ユーザー定義タイプ、序数、およびタイプ付き構造体および共用体を指定することができます。

文字列の長さおよび区域サイズは、定数で指定されなければなりません。戻り値は、指定される長さまたはサイズを持ちます。

また、BYADDR と BYVALUE も RETURNS の属性のリストに指定することができます。プロシージャにいずれかの ENTRY ステートメントが含まれており、なおかつ、そのプロシージャまたは 2 次エントリー・ポイントのどれかが、次のいずれかの値を戻す場合、BYADDR 属性が有効でなくてはなりません。

- 値なし、または
- 集合値

z/OS では、BYADDR が RETURNS のデフォルトです。C 関数を呼び出す場合、RETURNS の属性リスト内に BYVALUE が指定されていなければなりません。これらの属性については、125 ページの『BYVALUE および BYADDR の使用』を参照してください。

## 第 7 章 タイプ定義

|                                  |     |                        |     |
|----------------------------------|-----|------------------------|-----|
| ユーザー定義のタイプ (別名) . . . . .        | 157 | タイプ付き構造体修飾 . . . . .   | 163 |
| DEFINE ALIAS ステートメント . . . . .   | 157 | !! 演算子の使用 . . . . .    | 164 |
| 序数の定義 . . . . .                  | 158 | 配列およびタイプ付き構造体または共用体の組み |     |
| DEFINE ORDINAL ステートメント . . . . . | 158 | 合わせ . . . . .          | 164 |
| タイプ付き構造体と共用体の定義 . . . . .        | 160 | ハンドルの使用 . . . . .      | 165 |
| HANDLE 属性 . . . . .              | 161 | 序数の使用 . . . . .        | 165 |
| タイプ変数の宣言 . . . . .               | 162 | 例 . . . . .            | 166 |
| TYPE 属性 . . . . .                | 162 | タイプ付き関数 . . . . .      | 168 |
| ORDINAL 属性 . . . . .             | 163 |                        |     |

プログラミング言語では、タイプ は値のセットの記述とこれらの値に対して実行できる操作のセットです。PL/I には多くの組み込みデータ・タイプがあります。それぞれのタイプは、多くのエレメントの属性を指定できます。27 ページの『第 3 章 データ・エレメント』に、これらの組み込みデータ・タイプが説明されています。

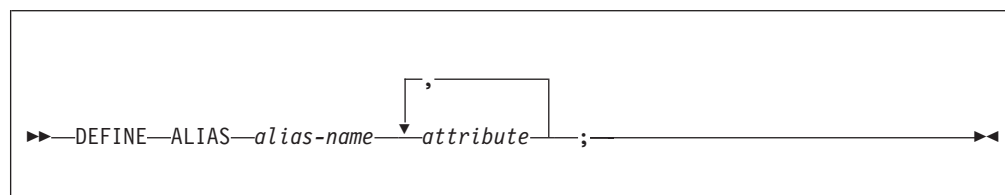
PL/I では、組み込みデータ・タイプを使用して、ユーザー独自のタイプを定義することができます。この章では、ユーザー定義のタイプ (別名、序数、構造体、および共用体)、これらのタイプ、ハンドル、およびタイプ付き関数をとる変数の宣言について説明します。

### ユーザー定義のタイプ (別名)

別名 は、明示のデータ・タイプが使用できる所では必ず使用することができるタイプ名です。DEFINE ALIAS ステートメントを使用して、データ属性の収集について別名を定義することができます。この方法で、データ・タイプに意味のある名前を割り当てて、プログラムの理解度を高めることができます。別名を定義することによって、データ属性のセットについての短い注記を提供し、タイプミスを減らすこともできます。

### DEFINE ALIAS ステートメント

DEFINE ALIAS ステートメントは、ユーザーが別名に割り当てたデータ・タイプ属性のセットのために、同義語として使用することができる名前を指定します。



#### alias-name

指定された属性によって定義された明示のデータ・タイプが許可される場合はいつでも使用することができる名前を指定します。

#### attributes

指定できる属性は、関数が戻すことのできる変数についてのすべての属性 (例えば、RETURNS オプションと属性に有効なそれらの属性) です。これらの有効

## DEFINE ALIAS

な属性は、33 ページの表 8 にリストされています。したがって、ユーザーは配列または構造体をとる属性リストについて別名を指定することはできません。ただし、DEFINE ORDINAL ステートメント、または DEFINE STRUCTURE ステートメント (『DEFINE ORDINAL ステートメント』および 160 ページの『タイプ付き構造体と共用体の定義』を参照)、または他の DEFINE ALIAS ステートメントに定義されたタイプについては、別名を定義することができます。また、RETURNS オプションと属性内の場合と同様に、任意のストリングの長さと領域のサイズは制限付き式でなければなりません。

欠落しているデータ属性は PL/I デフォルトを使用して提供されます。

### 例

```
define alias Name char(31) varying;
define alias Salary fixed dec(7); /* real by default */
define alias Zip char(5) /* nonvarying by default */
```

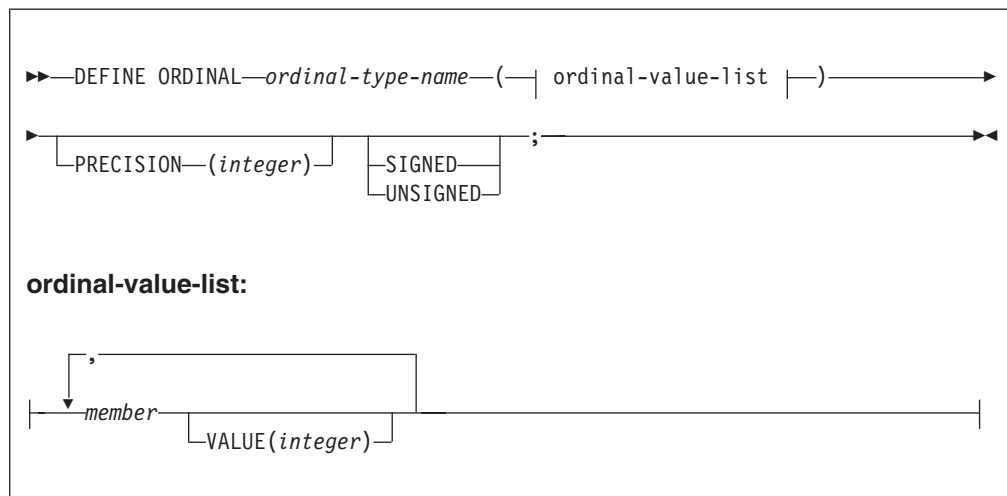
DECLARE ステートメントで Name が使用される場合は常に、char(31) varying という属性をとります。

## 序数の定義

序数は順序付けられた値の (名前付き) セットです。DEFINE ORDINAL ステートメントを使用すれば、序数を定義して、そのセットを参照するための有意義な名前を割り当てることができます。例えば、「カラー」と呼ばれる序数を定義することができます。序数「カラー」は、「赤」、「黄色」、「青」などのメンバーを持ちます。その後「カラー」セットのメンバーは、関連した固定 2 進値の代わりに、コードをより自己記述しているそれらの名前で参照することができます。また、序数タイプとして宣言された変数は、同じ序数タイプ (またはそのタイプのメンバー) に対してのみ割り当てたり比較することができます。この自動チェック機能により、プログラムの信頼性が向上します。

## DEFINE ORDINAL ステートメント

DEFINE ORDINAL ステートメントは、順序付けられた (名前付きの) 値のセットを表すタイプを指定します。



### ordinal-type-name

Ordinal-type-name は、序数値のセット名を指定します。この名前は、ORDINAL 属性を持つ DECLARE ステートメントにおいてのみ使用できます。この名前を別の場所で使用すると、ほかの任意の非序数名として処理されます。

### member

セット内のメンバーの名前を指定します。

### VALUE

VALUE 属性は、セット内の特定のメンバーの値を指定します。最初のメンバーの場合、VALUE 属性を省略すると、ゼロの値が使用されます。ほかのメンバーの場合、VALUE 属性を省略すると、次に大きい整数値が使用されます。

VALUE 属性の値は整数でなければなりません。この整数値は正負の符号を持つことができますが、確実に増加していかなければなりません。指定された（または想定された）VALUE 属性の値を、XN 定数として指定することもできます。

### PRECISION

省略形: PREC

PRECISION 属性は、特定の序数値の精度を指定します。この属性を省略すると、序数値の範囲が精度を決定することになります。

最大精度は、FIXED BINARY として宣言されたデータ項目の精度と同じです。

### SIGNED または UNSIGNED

これらの属性は、序数値が負の値を取ることができることを示しています。これらを指定しないと、負の値を取るかどうかは序数値の範囲によって決定されることになります。例えば、負の値が存在している場合は、SIGNED 属性が適用されます。

SIGNED と UNSIGNED の詳細については、36 ページの『SIGNED 属性と UNSIGNED 属性』を参照してください。

下記の例では、Red の値は 0、Orange の値は 1 であり、以下同様に続きます。しかし、Low の値は 2 であり、Medium の値は 3 です。

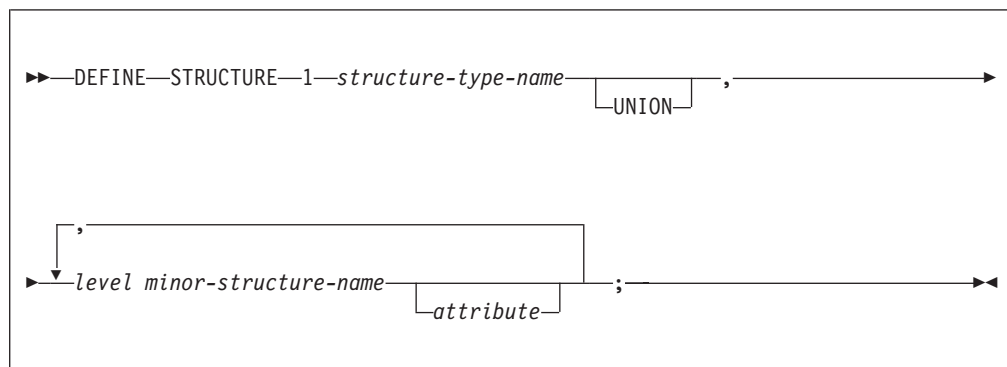
### 例

```
define ordinal Color (Red, /* is 0, since VALUE is omitted */
 Orange,
 Yellow,
 Green,
 Blue,
 Indigo,
 Violet);

define ordinal Intensity (Low value(2),
 Medium,
 High value(5));
```

## タイプ付き構造体と共用体の定義

DEFINE STRUCTURE ステートメントは名前付き構造体または共用体タイプを指定します。



### structure-type-name

この構造体タイプに与えられた名前を指定します (大構造体についての詳細な情報は、197 ページの『構造体』を参照してください)。この名前は次元を持つことはできませんが、副構造体を持つことはできます。

### UNION

199 ページの『UNION 属性』で説明されています。

### minor-structure-name

下のレベルに与えられた名前を指定します。(小構造体についての詳細な情報は 197 ページの『構造体』を参照してください。)

### attributes

小構造体名についての属性を指定します。以下の属性のみが許可されています。

- データ属性
- INITIAL 非データ属性。 INITIAL 属性について詳しくは、287 ページの『INITIAL 属性』を参照してください。
- VALUE 非データ属性。 VALUE 属性について詳しくは、54 ページの『名前付き定数』を参照してください。

DEFINE STRUCTURE ステートメントに指定された任意のストリングの長さ、領域サイズ、または配列次元が制限された式でなければなりません。

欠落しているデータ属性は PL/I デフォルトを使用して提供されます。

以下の制約事項に留意してください。

- 定義済み構造体は、その構造体の位置合わせの倍数となるバイト数でなければなりません。
- 定義済み構造体では、最も厳しい位置合わせを持つエレメントの前にあるバイト数が、そのエレメントの位置合わせの倍数でなければなりません。

例えば、構造体に、最も厳しく位置合わせされた項目である、位置合わせされた fixed bin(31) フィールドが含まれている場合、その制約事項は以下のようになります。



- 構造体は、4 バイトの倍数でなければならない
- 最初の位置合わせされた `fixed bin(31)` フィールドの前には、4 バイトの倍数のバイト数がなければならない

**DEFINE STRUCTURE** ステートメントは「強い」タイプを定義します。言いかえると、そのタイプで宣言された変数は同じタイプを持つ変数（またはパラメーター）にのみ割り当てることができます。タイプ付き構造体をデータ・ディレクティブ入出力ステートメントに使用することはできません。

定義する構造体名だけを指定し、メンバーを指定しない `DEFINE STRUCTURE` ステートメントは、「指定されていない構造体」を定義します。

- 指定されていない構造体は参照解除できませんが、HANDLE を宣言するために使用できます (HANDLE はどちらにしても参照解除できません)。
- 指定されていない構造体は、メンバーを指定する後続の DEFINE STRUCTURE ステートメントの対象にすることもできます。

指定されていない構造体の定義は、構造体の定義に 2 つ目の構造体へのハンドルがあって、2 つ目の構造体にも 1 つ目の構造体へのハンドルがある場合に役立ちます。例えば次の例では、親構造体に子構造体へのハンドルがあり、一方で子構造体にも親構造体へのハンドルがあります。

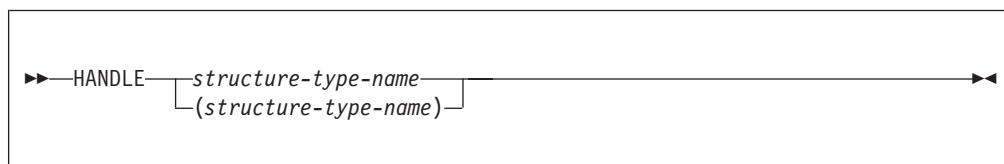
```
define structure 1 child;

define structure
1 parent,
 2 first_child handle child,
 2 parent_data fixed bin(31);

define structure
1 child,
 2 parent handle parent,
 2 next_child handle child,
 2 child_data fixed bin(31);
```

## HANDLE 属性

HANDLE 属性を使用して、変数を構造体タイプへのポインターとして宣言することができます。そのような変数はハンドル と呼ばれます。

**structure-type-name**

このハンドルがポイントするタイプ付き構造体を指定します。

定義された構造体と同様に、ハンドルはタイプが強く付きます。ハンドルは同じ構造体タイプのハンドルについてのみ、割り当てられ、比較することができます。ハンドルについての算術演算はできません。

ADDR 組み込み関数を使用して、タイプ付き構造体のアドレスをハンドルに割り当てることはできません。 ADDR 組み込み関数はポインターを戻し、そのポインタ

## HANDLE 属性

一をハンドルに割り当てることができないからです。ただし、HANDLE 組み込み関数は、その引数としてタイプ付き構造体を取り、そのタイプにハンドルを戻します。以下の例では、163 ページで定義された `tm` 構造体タイプを使用しており、`tm` タイプを見付けるハンドルが宣言され、`Daterec` のアドレスがそのハンドルに割り当てられます。

```
dc1 P_Daterec handle tm;
dc1 Daterec type tm;

P_Daterec = handle(Daterec);
```

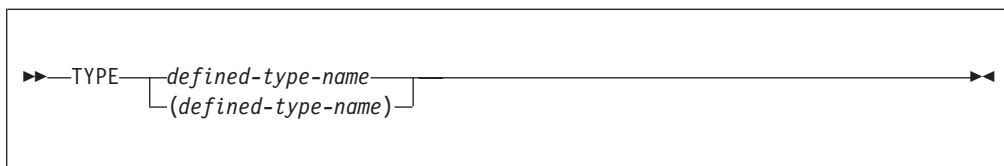
ハンドルは `POINTVALUE` 組み込み関数を使用して、ポインターに変換することができます。

---

## タイプ変数の宣言

変数は、`TYPE` 属性を使用して、`DEFINE ALIAS`、`DEFINE STRUCTURE`、または `DEFINE ORDINAL` ステートメントに指定されたタイプで宣言することができます。

## TYPE 属性



### defined-type-name

直前の定義済み別名、定義済み構造体、または序数タイプの名前を指定します。

### 例

```
define alias Name char(31) varying;
/* Name has attributes char(31) varying */
dc1 Employee_Name type Name;
/* Employee_Name type char(31) varying */
define alias Rate fixed dec(3,2);
/* Rate has attributes fixed dec real */

define structure
1 Payroll,
2 Name,
3 Last type Name,
3 First type Name,
2 Hours,
3 Regular fixed dec(5,2),
3 Overtime fixed dec(5,2),
2 Rate,
3 Regular type Rate,
3 Overtime type Rate;

dc1 Non_Exempt type Payroll; /* Has Payroll structure type */
dc1 Exempt type Payroll; /* Has Payroll structure type */
```

`TYPE` 属性を `DEFINE ALIAS` ステートメントで指定して、直前の `DEFINE ALIAS` ステートメントで定義されたタイプのための別名を指定することができます。以下に例を示します。



```
define alias Word fixed bin(31);
define alias Short type word;
```

以下の例は、いくつかの名前付きタイプ、構造体タイプ (tm) を定義し、このタイプ付き構造体へのハンドルを取得する C 関数を宣言しています。

```
define alias int fixed bin(31);
define alias time_t fixed bin(31);
define structure
1 tm
 ,2 tm_sec type int /* seconds after the minute (0-61) */
 ,2 tm_min type int /* minutes after the hour (0-59) */
 ,2 tm_hour type int /* hours since midnight (0-23) */
 ,2 tm_mday type int /* day of the month (1-31) */
 ,2 tm_mon type int /* months since January (0-11) */
 ,2 tm_year type int /* years since 1900 */
 ,2 tm_wday type int /* days since Sunday (0-6) */
 ,2 tm_yday type int /* days since January 1 (0-365) */
 ,2 tm_isdst type int /* Daylight Saving Time flag */
;

dcl localtime ext('localtime')
 entry(nonasgn byaddr type time_t)
 returns(byvalue handle tm);

dcl time ext('time')
 entry(byvalue pointer)
 returns(byvalue type time_t);
```

## ORDINAL 属性

TYPE 属性または ORDINAL 属性を使用して、変数を序数タイプで宣言することができます。TYPE 属性の構文については、162 ページの『TYPE 属性』を参照してください。

►►—ORDINAL—*ordinal-type-name*—◄◄

### ordinal-type-name

定義済みの序数タイプ値のセット名を指定します。

以下に例を示します。

```
dcl Wall_color ordinal Color;
```

ORDINAL 属性は FIXED や SIGNED などのほかの属性とは対立しますが、BASED や DIMENSION などとは併用できます。

## タイプ付き構造体修飾

、演算子または => 演算子を持つハンドルを使用して、タイプ付き構造体のメンバーを参照できます。典型的な非タイプ付き構造体内の名前の場合とは異なり、タイプ付き構造体内の名前は独自の「ネーム・スペース」を形成し、それら自体から参照することはできません。例えば、以下の宣言と定義を指定すると、

```
dcl 1 A,
2 B fixed bin,
2 C fixed bin;
```

```
define structure
1 X,
2 Y fixed bin,
2 Z fixed bin;
dcl S type X;
```

B は有効な参照ですが、Y は無効です。

タイプ名も宣言された名前からは、別のネーム・スペース内にあります。そのため、タイプの名前を変数名としても使用することができます。

```
define alias Hps pointer;
declare Hps type Hps;
```

## !! 演算子の使用

"." 演算子を使用してタイプ付き構造体メンバーを参照する構文は、次のとおりです。

►► *typed-structure-name* . *typed-structure-member* ◀◀

### typed-structure-reference

宣言されたタイプ付き構造体の名前です。

### typed-structure-member

構造体タイプの、参照された大構造体メンバーまたは小構造体メンバーの名前です。

例えば、163 ページの例の中で定義された構造体タイプ `tm` と関数 `localtime` を指定して、以下のコードはシステム日付を入手し、時刻を表示します。

```
dcl Daterec type tm;

dcl ltime type time_t;
dcl ptime handle tm;

ltime = time(null());
ptime = localtime(ltime);

Daterec = ptime => tm;

display (edit(Daterec.Hours,'99') || ':' ||
edit(Daterec.Minutes,'99') || ':' ||
edit(Daterec.Seconds,'99'));
```

## 配列およびタイプ付き構造体または共用体の組み合わせ

203 ページの『配列、構造体、および共用体の組み合わせ』に説明されているように、この非タイプ付き構造体を指定すると、

```
dcl 1 a(3),
 2 b(4) fixed bin,
 2 c(5) fixed bin;
```

`a(1).b(2)`、`a.b(1,2)`、および `a(1,2).b` は同じ意味になります。

ただし、以下のタイプ付き構造体を指定すると、

```
define structure
 1 t,
 2 b(4) fixed bin,
 2 c(5) fixed bin;
```

```
dcl x(3) type t;
```

`x(1).b(2)` だけが有効です。さらに、代入ステートメント `x.b = 0` は無効ですが、`x (1) .b = 0;` は有効です。

直前に定義された構造体タイプ `t` と以下の関数 `f` を指定すると、

```
dcl f entry returns(type t);
```

`display( f().b(2) )` は有効です。

## ハンドルの使用

ハンドルは `=>` 演算子を持つタイプ付き構造体のメンバーにアクセスします。以下の例では、163 ページで定義された `tm` タイプを指定すると、そのタイプのハンドルを使用して時間が表示されます。

```
dcl P_Daterec handle tm;
P_Daterec = handle(Daterec);

display (edit(P_Daterec=>tm_hours,'99') || ':' ||
edit(P_Daterec=>tm_min,'99') || ':' ||
edit(P_Daterec=>tm_sec,'99'));
```

ハンドルは、レベル 1 名 (タイプ名自体) を含むタイプ付き構造体内のすべてのメンバーを見付けることができます。そのタイプ名についての、ハンドルによる参照は、そのハンドルによってポイントされた構造体への参照を構成することかできます。これで、そのハンドルによってこの集合データについての参照ができるようになります。例えば、`H1` と `H2` が 2 つの割り振り済み構造体をポイントしている場合、次のようにして 2 つの構造体を交換できます。

```
define structure 1 T, 2 U, 2 V, 2 W;
dcl (H1, H2) handle T;
dcl Temp type T;

Temp = H1=>T;
H1=>T = H2=>T;
H2=>T = Temp;
```

---

## 序数の使用

序数を使用する場合は、以下の点に留意してください。

- 序数は強いタイプ です。つまり、序数は同じタイプの別の序数に対してのみ割り当てたり比較することができます。序数は `DECLARE` ステートメントで宣言されていなければなりません。
- `DEFINE ORDINAL` ステートメント内の `ordinal-type-name` は、比較や割り当てには使用できません。
- 序数はほかのデータ・タイプと同様に引数/パラメーターとして受け渡しできます。

- 計算タイプの引数を必要とする組み込み関数では、序数を引数として使用することはできません。ただし、序数をサポートするための組み込み関数が定義されており、**BINARYVALUE** が拡張されています。表 23 は、これらの組み込み関数をリストしています。詳細については、417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』を参照してください。これらの組み込み関数は 1 つの引数だけを取ります。この引数は **ORDINAL** タイプの参照でなければなりません。

表 23. 序数処理組み込み関数

| 関数                 | 説明                      |
|--------------------|-------------------------|
| <b>BINARYVALUE</b> | 序数を 2 進値に変換します。         |
| <b>ORDINALPRED</b> | 序数が次に低い値を戻します。          |
| <b>ORDINALSUCC</b> | 次に高い序数値を戻します。           |
| <b>ORDINALNAME</b> | 序数の名前を指定する文字ストリングを戻します。 |

例えば、下記のサンプル・コードでは、最初の DO ループが *Color* セットのメンバーを昇順にリストし、2 番目の DO ループが同じセットのメンバーを降順にリストします。この例では、159 ページの『例』に示した序数定義が使用されています。

### 例

```
dcl Next_color ordinal Color;

do Next_color = first (:Color:)
 repeat ordinalsucc(Next_color)
 until (Next_color = last (:Color:));

 display(ordinalname(Next_color));
end;

do Next_color = last (:Color:)
 repeat ordinalpred(Next_color)
 until (Next_color = first(:Color:));

 display(ordinalname(Next_color));
end;
```

最初のループのサンプル出力は次のようになります。

```
RED
ORANGE
YELLOW
GREEN
BLUE
INDIGO
VIOLET
```

序数は、配列の下位境界または上位境界を含めて、配列への索引としては使用できず、変数のエクステントとして定義することもできません。ただし、**BINARYVALUE** 組み込み関数を使用して、序数を 2 進値に変換することは可能です。この関数が返す値を使用して、配列の索引を作成したり、エクステントを定義することができます。

例えば、下記のパッケージでは、配列 *usage\_count* の定義によって各カラーが使用される回数が保持され、プロシージャ *Record\_usage* によってこの配列が更新され、さらにプロシージャ *Show\_usage* によってこの配列内の値が表示されます。

## 例

```
Usage: package exports(*);

define ordinal Color (Red,
 Orange,
 Yellow,
 Green,
 Blue,
 Indigo,
 Violet);

dcl Usage_count(binvalue(first(:Color:))
 : binvalue(last(:Color:)))
static fixed bin(31) init((*) 0);
/* first(:Color:) = Red */
/* last(:Color:) = Violet */

Record_usage: proc (Wall_color);
dcl Wall_color type Color parm byvalue;

Usage_count(binvalue(Wall_color))
= 1 + Usage_count(binvalue(Wall_color));
end Record_usage;

Show_usage: proc;
dcl Next_color type Color;

do Next_color = Red upthru Violet;
put skip list(ordinalname(Next_color));
put list(Usage_count(binvalue(Next_color)));
end;
end Show_usage;

end Usage;
```

序数を使用すれば、保守と拡張が容易で、しかも表索引と同じくらい効率的な関数を作成することができます。

下記の例では、関数 *Is\_mellow* により、カラーが「柔らかい」かどうかを示すビットが返されます。もっと多くのカラーが定義される場合は、**SELECT** グループに「柔らかい」カラーを追加できます。テーブルを作成した場合は異なり、**SELECT** グループでは、カラーの順序は **DEFINE** ステートメントでの順序と同じでなくてもかまいません。あるいは、カラーを特定の順序に並べる必要はありません。

**SELECT** グループ内部のステートメントはすべて定数値を返す **RETURN** ステートメントですから、コンパイラーが **SELECT** グループ全体をテーブル参照に変換します。

## 例

```
Is_mellow: proc(Test_color) returns(bit(1) aligned);

dcl Test_color type Color parm byvalue;

select (Test_color);
when(Yellow, Indigo)
return('1'b);
```

```

 otherwise
 return('0'b);
 end;

end;

```

この機能を使用して、ユーザー独自の ORDINALNAME 組み込み関数を作成することも可能です。この独自の関数は、各序数値について、ユーザーが表示させたい名前を返すことができます。例えば、下記の関数 Color\_name は、最初の文字を大文字とする名前に関連付けられたカラー名を返します。

```

Color_name: proc(Test_color) returns(char(8) varying);

 decl Test_color type Color parm byvalue;

 select (Test_color);
 when (Blue) return('Blue');
 when (Green) return('Green');
 when (Orange) return('Orange');
 when (Red) return('Red');
 when (Yellow) return('Yellow');
 otherwise return (");
 end;

end;

```

## タイプ付き関数

タイプ名は宣言名とは別のネーム・スペースにあるので、それらを変数参照が必要な所で使用することはできません。特に組み込み関数の引数として使用することはできません。ただし、タイプ名はタイプ付き関数 への引数として使用することができます。(ANSI 用語では、これらのタイプ付き関数は照会関数 として知られています。) これらのタイプ付き関数は、表 24 にまとめられています。

表 24. タイプ付き関数

| 関数     | 説明                                        |
|--------|-------------------------------------------|
| BIND   | ポインターをタイプのハンドルに変換します。                     |
| CAST   | C の変換規則を使用して、式を指定のタイプに変換します。              |
| FIRST  | 最初の値を序数セットに戻します。                          |
| LAST   | 最後の値を序数セットに戻します。                          |
| NEW    | 構造体タイプのためにストレージを獲得し、獲得されたストレージにハンドルを戻します。 |
| RESPEC | 式のビット・パターンを変更せずに、式の属性を指定のタイプに変更します。       |
| SIZE   | タイプを表すために必要なストレージの量を戻します。                 |
| VALUE  | 対応する構造体型を持つ変数の初期化または代入を行います。              |

これらのタイプ付き関数についての説明は、745 ページの『第 20 章 タイプ付き関数』に記載されています。

## 第 8 章 データ宣言

|                                    |     |                                 |     |
|------------------------------------|-----|---------------------------------|-----|
| 明示宣言 . . . . .                     | 169 | DIMACROSS 属性 . . . . .          | 194 |
| DECLARE ステートメント . . . . .          | 171 | 配列の例 . . . . .                  | 195 |
| 属性分配 . . . . .                     | 172 | 添え字 . . . . .                   | 195 |
| 暗黙宣言 . . . . .                     | 172 | 配列のクロスセクション . . . . .           | 197 |
| 宣言の有効範囲 . . . . .                  | 173 | 構造体 . . . . .                   | 197 |
| INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性 . . . . . | 177 | 共用体 . . . . .                   | 198 |
| RESERVED 属性 . . . . .              | 181 | UNION 属性 . . . . .              | 199 |
| SUPPRESS 属性 . . . . .              | 182 | 構造体/共用体の修飾 . . . . .            | 199 |
| データの位置合わせ . . . . .                | 182 | LIKE 属性 . . . . .               | 201 |
| ALIGNED 属性と UNALIGNED 属性 . . . . . | 183 | 例 . . . . .                     | 202 |
| 属性のデフォルト . . . . .                 | 187 | NOINIT 属性 . . . . .             | 203 |
| 言語に固有のデフォルト . . . . .              | 187 | 集合体の組み合わせおよびマッピング . . . . .     | 203 |
| DEFAULT ステートメント . . . . .          | 188 | 配列、構造体、および共用体の組み合わせ . . . . .   | 203 |
| 言語に固有のデフォルトの復元 . . . . .           | 192 | 構造体または共用体の配列のクロスセクション . . . . . | 204 |
| 配列 . . . . .                       | 192 | 構造体および共用体の操作 . . . . .          | 204 |
| 次元属性 . . . . .                     | 193 | 構造体および共用体のマッピング . . . . .       | 204 |

PL/I プログラムを実行すれば、特定のデータ・タイプのさまざまなデータ項目が処理されます。名前が付いていない算術定数やストリング定数を除き、プログラム内ではデータ項目はすべて名前によって参照されます。各データ名には、(明示的または暗黙的な) 宣言によって、属性と意味が与えられます。

データ項目のほとんどの属性は、プログラムがコンパイルされるときに判別されます。非静的項目の場合は、属性の値 (配列の次元の境界、ストリングの長さ、区域のサイズ、初期値) と一部のファイル属性は、プログラムの実行時に判定されます。詳細については、103 ページの『ブロックの活動化』を参照してください。

データ項目、タイプ、および属性については、27 ページの『第 3 章 データ・エレメント』で紹介しています。

この章では、明示宣言および暗黙宣言、スカラー、配列、構造体、および共用体の宣言、名前の有効範囲、データの位置合わせ、デフォルトの属性を説明します。

### 明示宣言

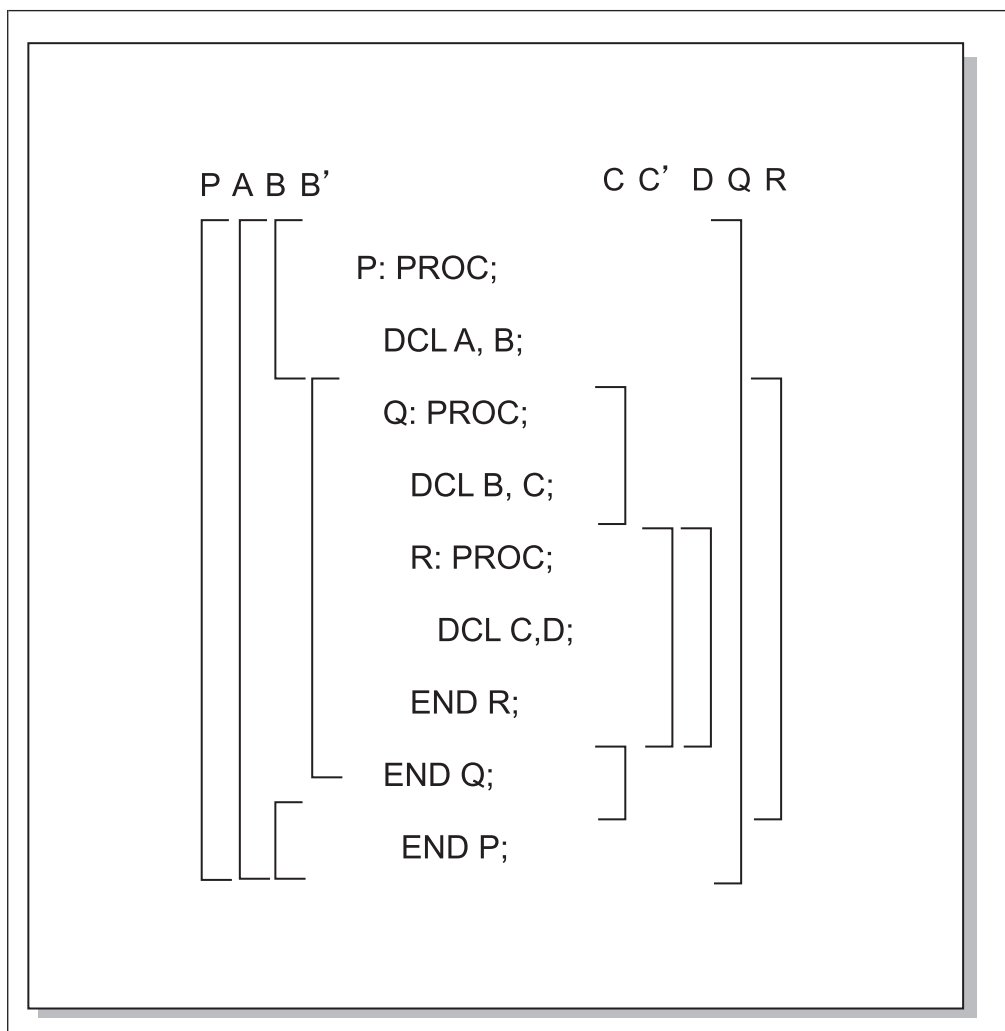
以下のように名前が示されている場合には、明示的に宣言されます。

- DECLARE ステートメントに示されている場合。DECLARE ステートメントが明示的に名前の属性を宣言します。
- 入り口定数として示されている場合。PROCEDURE ステートメントおよび ENTRY ステートメントのラベルは、含まれるプロシーチャー内の入り口定数の宣言を制定します。
- ラベル定数として示されている場合。ラベル定数は、明示的にラベルを宣言します。
- フォーマット定数として示されている場合。FORMAT ステートメントのラベルは、ラベルの明示宣言を制定します。

注:

1. DECLARE ステートメントでの内部項目定数、ラベル定数、またはフォーマット定数の命名は無効です。
2. ラベル定数またはフォーマット定数に境界がある場合、その境界は、ソース・コードでラベルとして使用する際に指定された最小値および最大値によって判別されます。

名前の明示宣言の有効範囲は、宣言を含むブロックです。つまり、同じ名前のもう 1 つの明示宣言が内部にあるブロック（および、それらに含まれるブロック）を除いた、名前が含まれるすべてのブロックです。次の図では、ラインで名前の宣言の有効範囲を示します。



B と B' は、名前 B の 2 つの別個の使用法について示しています。C と C' は、名前 C の 2 つの使用法について示しています。

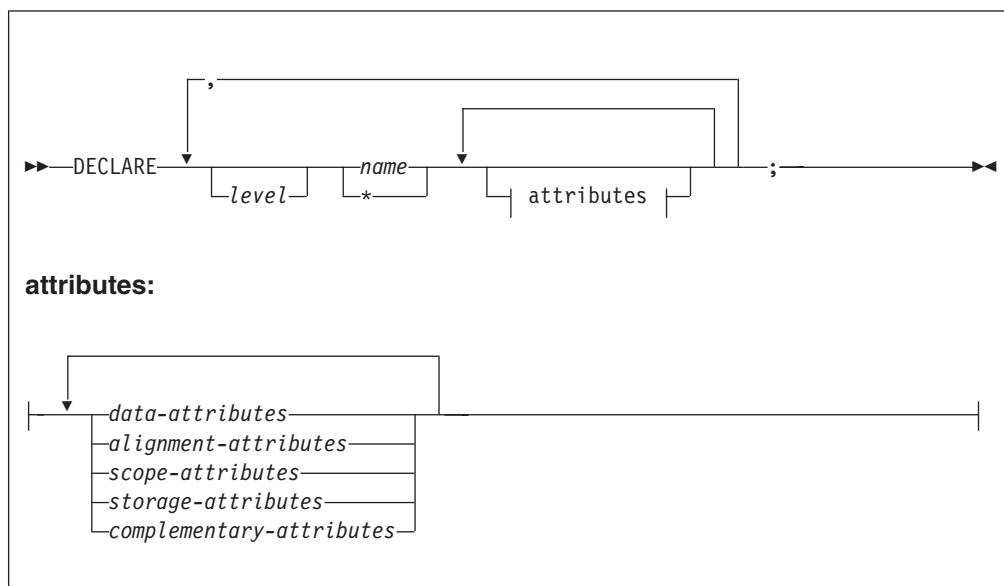
有効範囲に関する詳細は、173 ページの『宣言の有効範囲』を参照してください。



## DECLARE ステートメント

DECLARE ステートメントは、名前の一部の属性またはすべての属性を指定します。属性が明示的に宣言されず、コンテキストによって判別できない場合は、デフォルト属性が適用されます。

DECLARE ステートメントは、プログラムの文書の重要な部分になることがあります。同様に、デフォルト属性で十分なとき、または暗黙宣言が可能なきときであっても、多数の宣言を使用することができます。DECLARE ステートメントの数に関しては制限がないので、さまざまな名前のグループに異なる DECLARE ステートメントを使用することができます。どんなに多くの名前でも、1 つの DECLARE ステートメント内で宣言することができます。



### 省略形: DCL

配列、構造体、および共用体の詳細については、192 ページの『配列』、197 ページの『構造体』、または 198 ページの『共用体』を参照してください。

- \* EXTERNAL 属性に環境名を指定しない限り、INTERNAL または EXTERNAL スカラーの *name* として、あるいはレベル 1 の EXTERNAL 構造体または共用体として使用することはできません (177 ページの『INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性』を参照)。

### attributes

属性は、任意の順序で示すことができます。

名前に明示的に与える属性はすべて、DECLARE ステートメント内に一緒に宣言されていなければなりません。ただし、以下はこの例外となります。

FILE 属性を持つ名前には、OPEN ステートメントで属性を与える (あるいは暗黙のオープンによって属性を暗黙に与える) こともできます。OPEN ステートメントの詳細については、304 ページの『OPEN ステートメント』を参照してください。

## DECLARE

パラメーター・リスト内の名前には、パラメーター属性がコンテキストによって与えられます。そのブロックの内部にある DECLARE ステートメントで、その他の属性を指定することができます。

それぞれ別個のブロックとコンパイルの外部名の属性は整合性を必要とします。

グループの属性とメンバーについては、28 ページの『データ・タイプとその属性』を参照してください。

### level

ゼロ以外の整数値です。レベル番号を指定しないと、レベル 1 が要素変数と配列変数のためのデフォルトとなります。レベル 1 は、大構造体と共用体の名前について指定しなければなりません。

### name

レベル 1 のそれぞれの名前は、ブロック内で固有でなければなりません。レベル 1 の名前の詳細については、197 ページの『構造体』を参照してください。

条件接頭語とラベルは、DECLARE ステートメント上には指定できません。

## 属性分配

いくつかの名前に共通する属性を分配して、同じ属性を繰り返し指定する手間を省くことができます。属性分配は、いくつかの名前を括弧で囲み、そのあとに、それらすべての名前に適用される属性のセットを置くことによって実現します。属性分配はネストできます。また、次元属性を分配することができます。属性分配は、構造体および共用体の基本名でも使用することができます。分配されるレベル番号は、括弧で囲まれたリストの前に付けます。

括弧で囲まれたリスト内の名前は、コンマで区切られます。分配される属性によって名前を指定変更することはできませんが、リスト内の任意の名前には、分配される属性と対立しない限り、他の属性を指定することができます。

下記の例は属性分配を示しています。この例の最後の宣言は、ネストされる属性分配を示します。

```
declare (A,B,C,D) binary fixed (31);

declare (E decimal(6,5), F character(10)) static;

declare 1 A, 2(B,C,D) (3,2) binary fixed (15);

declare ((A,B) fixed(10),C float(5)) external;
```

---

## 暗黙宣言

プログラム内で使用する名前を明示的に宣言しなかった場合、その名前は暗黙のうちに宣言されます。暗黙宣言の有効範囲は、その名前が使われている外部プロシージャの PROCEDURE ステートメントのすぐあとで DECLARE ステートメントによってその名前を宣言した場合と同様にして決まります。

ファイル、入り口、組み込み関数を除き、暗黙宣言は、名前が最外部のプロシージャで宣言された場合と同様の効果を持ちます。ファイルと組み込み関数については、暗黙宣言は、名前が任意のプロシージャの外側の論理パッケージに宣言された場合と同様の効果を持ちます。

注: 組み込み関数およびファイル `SYSIN` と `SYSPRINT` 以外のものに暗黙宣言を使用するのは、1987 ANSI 規格に対する違反であり、避けなければなりません。

暗黙のうちに宣言された名前の属性の中には、その名前が使われているコンテキスト上から判定することができます。これはコンテキスト宣言と呼ばれ、次のような場合です。

- 組み込み関数の名前。
- `CALL` ステートメント、または `INITIAL` の `CALL` オプション内に示される名前、あるいは引数リストの前にくる名前には、`ENTRY` 属性と `EXTERNAL` 属性が与えられます。
- `PROCEDURE` ステートメントまたは `ENTRY` ステートメントのパラメーター・リストに示される名前には、パラメーター属性が与えられます。
- `FILE` または `COPY` オプションにおいて示される名前、もしくはファイル名が必要な条件に対するステートメント `ON`、`SIGNAL` または `REVERT` に示される名前には、`FILE` 属性が与えられます。
- ステートメント `ON CONDITION`、`SIGNAL CONDITION`、または `REVERT CONDITION` に示される名前には、`CONDITION` 属性が与えられます。
- `BASED` 属性、`SET` オプションに示される名前、またはロケーター修飾記号の左側に現れる名前には、`POINTER` 属性が与えられます。
- `IN` オプションまたは `OFFSET` 属性に示される名前には、`AREA` 属性が与えられます。

コンテキスト宣言の例は、以下のとおりです。

```
read file (PREQ) into (Q);

allocate X in (S);
```

これらのステートメントでは、`PREQ` に `FILE` 属性、`S` に `AREA` 属性が与えられます。

コンテキスト宣言ではない暗黙宣言は、187 ページの『属性のデフォルト』に示すように、すべてデフォルトによって属性を取得します。コンテキスト宣言は明示宣言の有効範囲内には存在することができないため、明示宣言内の名前について確立された属性に、名前のコンテキストが別の属性を追加することはできません。

---

## 宣言の有効範囲

名前の適用対象となるプログラム部分は、その名前についての宣言の有効範囲と呼ばれます。ほとんどの場合、名前の宣言の有効範囲は、プログラム内で名前が宣言される位置によって完全に決定されます。暗黙宣言は、名前が外部プロシーチャーの `PROCEDURE` ステートメントの直後にある `DECLARE` ステートメントで宣言されたものと見なされます。

名前がプログラム全体に対して同じ意味を持つ必要はありません。ブロック内で明示的に宣言された名前は、そのブロック内だけで意味を持ちます。そのブロックの外部では、同じ名前がそこでも宣言されていない限りその名前は認識されません。名前を宣言するたびに、その有効範囲が確立されます。この場合、その外側ブロック内の名前は、別のデータ項目を参照することになります。このため、ローカル定

## 宣言の有効範囲

義を指定することにより、プログラムのほかの部分で使用されているすべての名前を知らなくても、プロシージャまたは開始ブロックを作成することが可能になります。

下記の例で、A の実際の出力は C.A、つまり 2 です。B の出力は、プロシージャ X で宣言されたとおり 1 です。

```
X: proc options(main);
 dcl (A,B) char(1) init('1');
 call Y;
 return;

Y: proc;
 dcl 1 C,
 3 A char(1) init('2');
 put data(A,B);
 return;
end Y;
end X;
```

したがって、ネストされたプロシージャでは、PL/I は現行ブロック内に宣言された変数を使用してから、包含ブロックで宣言された変数を使用することになります。

名前の宣言の有効範囲を理解するためには、包含された および内部にある という 2 つの用語を理解しなければなりません。

PACKAGE、PROCEDURE、または BEGIN ステートメントから、それに対応する END ステートメント (BEGIN、PACKAGE、および PROCEDURE ステートメントの条件接頭語も含む) までの間にあるブロックの全テキストは、そのブロックに包含されると見なされます。ただし、ブロックに適用する任意の ENTRY ステートメントのラベルと同様に、ブロックの先頭にある BEGIN または PROCEDURE ステートメントのラベルは、そのブロックに含まれません。ネストされたブロックは、それらを包むブロックに包含されます。

ブロックに包含されるテキストのうち、そのブロック内のネストされているほかのブロックに包含されていないものは、そのブロックの内部にあると見なされます。プロシージャの入り口名 (および BEGIN ステートメントのラベル) は、そのブロックに含まれません。したがって、プロシージャの入り口名は、包含ブロックの内部にあることになります。外部プロシージャの入り口名は、その外部プロシージャの外部にあると見なされます。

図 7 は、データ宣言の有効範囲を示しています。

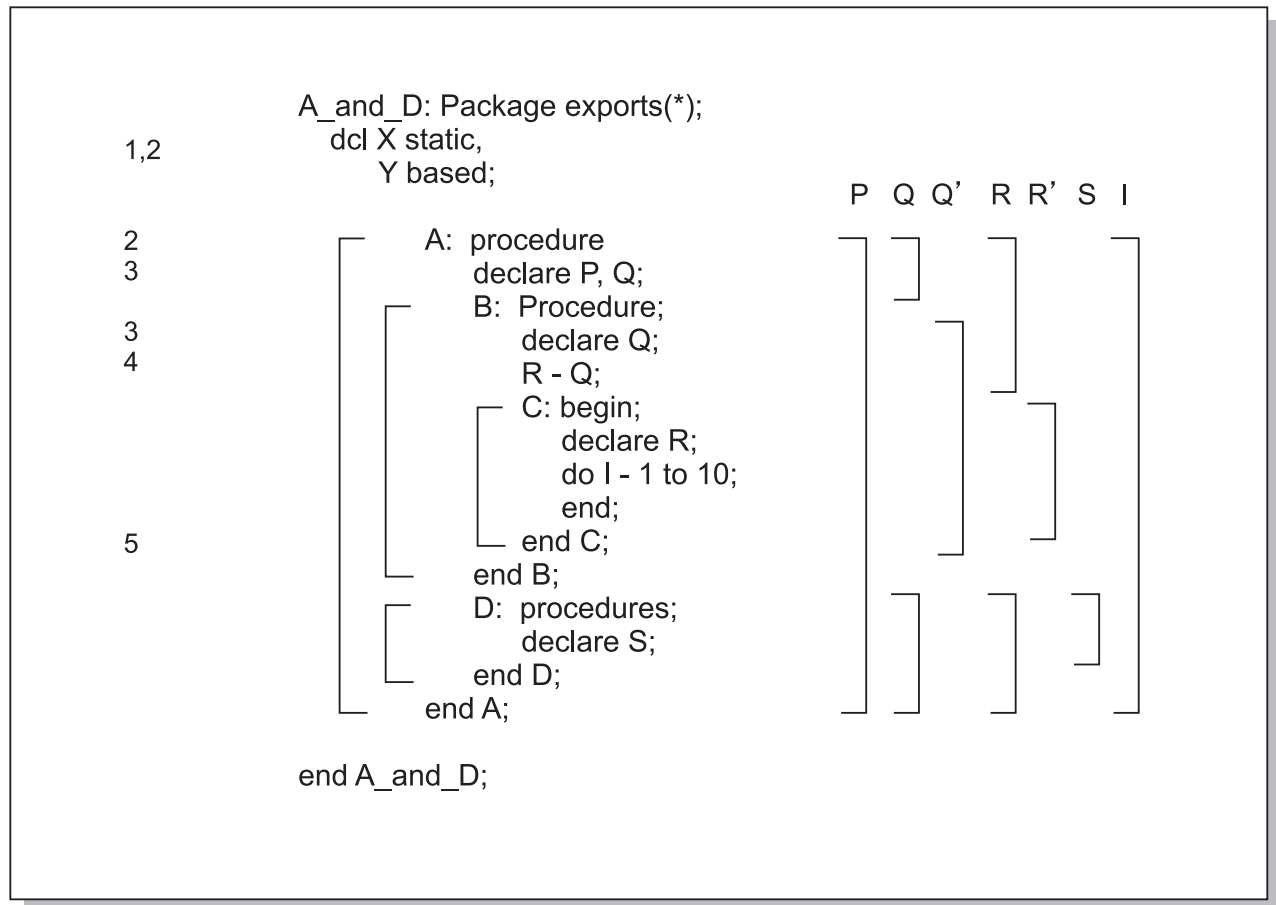


図 7. データ宣言の有効範囲

左方の大括弧はブロック構造体を示しています。右方の大括弧は名前の各宣言の有効範囲を示しています。Q と R の 2 つの宣言の有効範囲は、Q と Q'、および R と R' となっています。

X と Y は、パッケージに含まれるすべてのプロシージャにとって可視となっています。

- 1** P はブロック A で宣言され、再宣言されていないため、A 全体で認識されます。
- 2** Q はブロック A で宣言され、さらにブロック B で再宣言されています。Q の最初の宣言の有効範囲は、B を除く A のすべてです。Q の 2 番目の宣言の有効範囲は、ブロック B のみです。
- 3** R はブロック C で宣言されていますが、R への参照がブロック B で行われています。ブロック B での R への参照により、外部プロシージャの A で R の暗黙宣言が行われます。したがって、異なる有効範囲を持つ 2 つの別個の名称 (図 7 の R と R') が存在することになります。明示的に宣言された R の有効範囲は、ブロック C です。ブロック B 内の暗黙的に宣言された R の有効範囲は、ブロック C を除く A のすべてです。
- 4** I はブロック C で参照されています。このため、外部プロシージャ A で暗黙宣言されていることになります。この結果、包含されたプロシージャ B、C、および D を含むすべての A に宣言が適用されます。

- 5** S はプロシージャ D で明示的に宣言され、D の内部でのみ認識されます。

図 8 は、入り口定数とステートメント・ラベルの宣言の有効範囲を示しています。

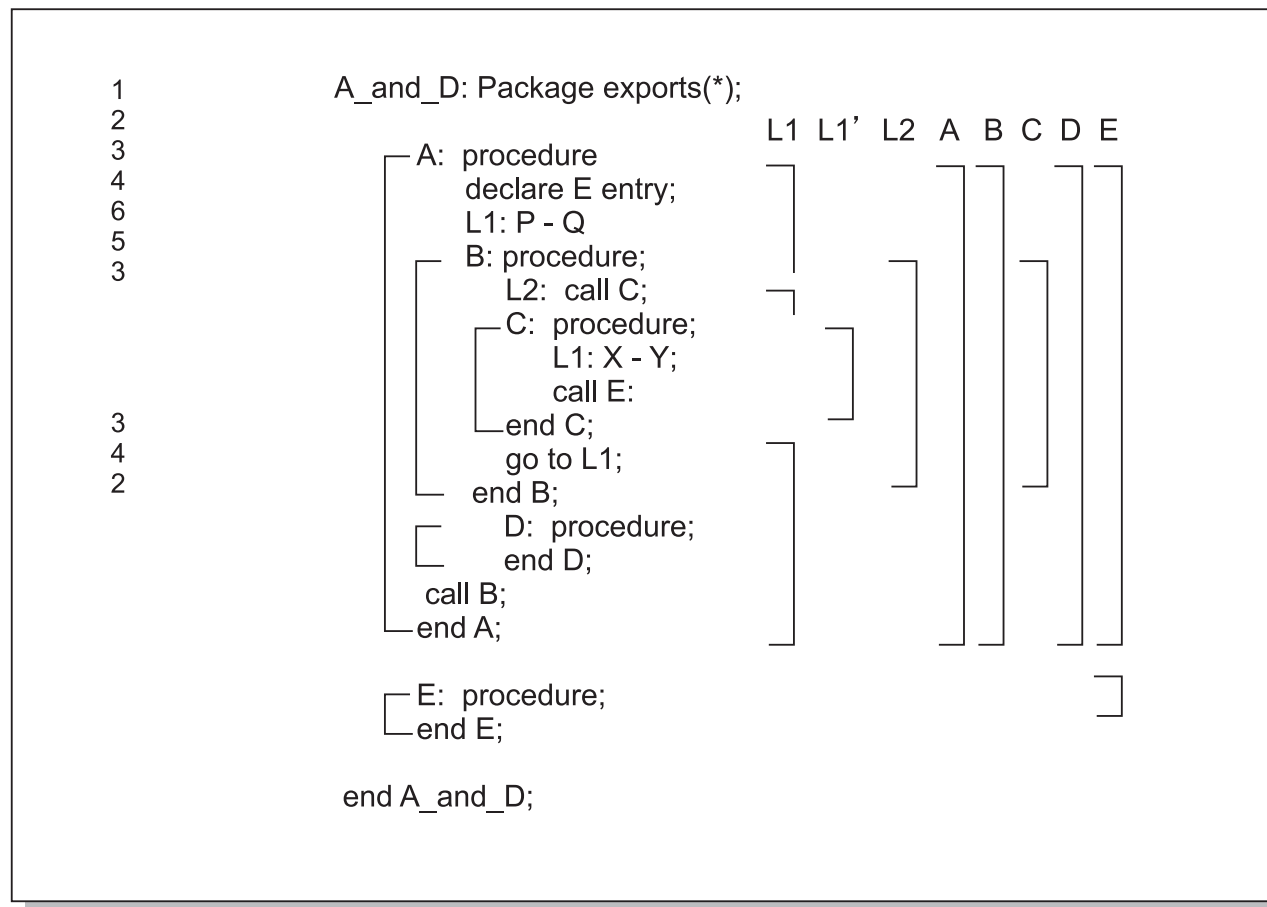


図 8. 入り口およびラベル宣言の有効範囲

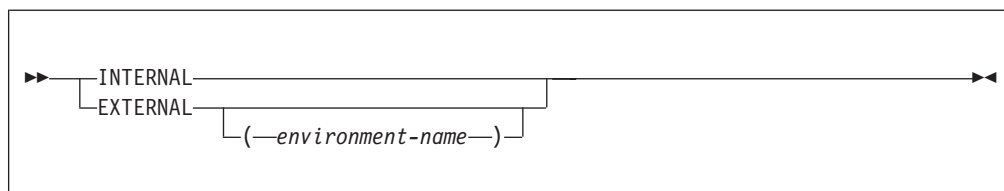
図 8 は、外部プロシージャの A と E を示しています。

- 1** 名前 A の宣言の有効範囲は、ブロック A のすべてに限られており、E は有効範囲ではありません。
- 2** E は A で外部入り口定数として明示的に宣言されています。E の明示宣言は、ブロック A の全体に適用されます。ブロック E 全体に適用される E の明示宣言にはリンクしていません。名前 E の宣言の有効範囲は、ブロック A の全体とブロック E の全体です。
- 3** ラベル L1 は、A と C の内部のステートメントに示されています。その結果、2 つの別々の宣言が確立されます。最初のものは、ブロック C を除くブロック A のすべてに適用され、2 番目のものはブロック C にのみ適用されます。したがって、ブロック B の GO TO ステートメントが実行されると、制御はブロック A の L1 に移され、ブロック B は終了します。
- 4** D と B は、明示的にブロック A 内で宣言され、A 内の任意の場所で参照することができます。ただし、それらは INTERNAL であり、ブロック E 内で参照することはできません。

- 5** C は B で明示的に宣言され、B の内部から参照できますが、B の外側からは参照できません。
- 6** L2 は B で宣言され、ブロック B、および B に包含される C で参照できますが、B の外側からは参照できません。

## INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性

INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性は、名前の有効範囲を指定します。



省略形: INTERNAL は INT、EXTERNAL は EXT

### environment-name

コンパイル単位の外側で認識されるプロシージャー名または変数名を指定します。

この指定により、宣言中の名前は実質的に内部となり、コンパイル単位の外側では認識されなくなります。宣言中の名前の代わりに環境名が知られるようになります。

環境名は文字ストリング定数でなければならず、大文字への変換なしにそのまま使用されます。

以下に例を示します。

```
dc1 X entry external ('koala');
```

環境名を区切り文字 ( ) で開始することは避けてください。下線文字で開始される名前は、ライブラリー用として予約されています。

リンカーが環境名を修飾するプラットフォームでは、外部属性を持つ環境名を指定しても、その名前が変数名と大文字/小文字の違いしかない場合は、その環境名は修飾されます。次の宣言では、

```
dc1 abc ext('kLm'), xyz ext('xYz');
```

xyz の名前が修飾されます。環境名の装飾について詳しくは、PL/I for Windows の「プログラミング・ガイド」の「呼び出し規則」という章の「リンケージに関する考慮事項」を参照してください。

INTERNAL は、内部プロシージャーの入り口名および他のすべての変数 (入り口定数、ファイル定数、およびプログラマー定義の条件を除く) のデフォルトです。INTERNAL は、その名前が、それを宣言しているブロック内でだけ認識されることを指定します。別の場所で同じ名前を明示的に宣言すると、別の有効範囲を持つ新しいオブジェクトを参照することになります。これらの 2 つの有効範囲は相互に重なることはありません。



## INTERNAL と EXTERNAL

注: INTERNAL は、パッケージ内のレベル 1 プロシージャ上で指定することができます。パッケージが EXPORTS(\*) を指定して宣言してある場合、INTERNAL プロシージャはパッケージの外部から不可視になります。

EXTERNAL は、ファイル定数、(内部プロシージャ以外の) 入り口定数、およびプログラマー定義の条件のデフォルトです。EXTERNAL 属性を持つ名前は、別々の外部プロシージャ内で、または外部プロシージャに含まれているブロック内で複数回宣言することができます。EXTERNAL 属性を持つ同じ名前を 2 回以上宣言した場合、それらの宣言はすべて同じデータを参照します。EXTERNAL 属性を持つ名前の各宣言の有効範囲は、そのアプリケーション内でのその名前 (EXTERNAL 属性を持つもの) のすべての宣言の有効範囲を包含します。

大構造体または共用体の名前を複数のブロックで EXTERNAL として宣言する場合、対応するメンバー名は異なってもかまいませんが、メンバーの属性は同じでなければなりません。

次に例を示します。

```
ProcA: procedure;
declare 1 A external,
2 B,
2 C;
:
```

```
end ProcA;
```

```
%process;
ProcB: procedure;
declare 1 A external,
2 B,
2 D;
:
end ProcB;
```

A.B が ProcA 内で変換されると、それは ProcB についても変換され、逆の場合も同様です。A.C が ProcA 内で変換されると、A.D は ProcB について変換され、逆の場合も同様です。

構造体と共用体のメンバーは、常に INTERNAL 属性を持ちます。

同じ名前の外部宣言はすべて同じデータを共用するため、それらの宣言の結果はすべて同じセットの属性にならなければなりません。EXTERNAL の名前が別の外部プロシージャで宣言されるときは、ユーザーは属性が確実に一致するようにしなければなりません。179 ページの図 9 は、さまざまな宣言とその有効範囲を説明しています。



```

Scope_Example: package exports(*);
1 A: procedure;
2 declare S character (20);
7 dcl Set entry(fixed decimal(1)),
7 Out entry(label);
 call Set (3);
9 E: get list (S,M,N);
8 B: begin;
4,5 declare X(M,N), Y(M);
 get list (X,Y);
 call C(X,Y);

9,5 C: procedure (P,Q);
 declare
 P(*,*),
 Q(*),
12,2 S binary fixed external;
 S = 0;
6 do I = 1 to M;
8 if sum (P(I,*)) = Q(I) then
 go to B;
 S = S+1;
 if S = 3 then
9 call Out (E);
8 Call D(I);
 B: end;
 end C;

9 D: procedure (N);
 put list ('Error in row ',
2,3 N, 'Table Name ', S);
 end D;
 end B;
 go to E;
 end A;

9 Out: procedure (R);
 Declare
 R Label,
11 (K static internal,
11,7 L static external) init (0),
12 S binary fixed external,
 Z fixed decimal(1);
 K = K+1; S=0;
 if K<L then
10 stop;
 else go to R;

 end;
Set: procedure (Z);
7 declare Z fixed dec(1);
 L=Z;
 declare L external init(0);
 return;
 end;
 end Scope_Example;

```

図 9. 各種宣言の有効範囲の例

- 1 A は外部プロシージャー名です。この有効範囲は、ブロック A の全体と、A が外部として宣言されているほかの任意のブロックです。
- 2 S は、ブロック A とブロック C で明示的に宣言されています。文字変数の宣言は、ブロック C を除くブロック A 全体に適用されます。固定 2 進値宣言は、ブロック C の内部でのみ適用されます。D はブロック C から呼

び出されますが、D 内の PUT ステートメントでの S への参照は文字変数 S への参照であり、ブロック C 内で宣言されている S への参照ではありません。

- 3 N はブロック D 内のパラメーターとして書かれていますが、このブロックの外でも使用されます。パラメーターとして書かれているため、D 内で N の明示宣言が確立されます。D の外部での参照により、ブロック A 内での N の暗黙宣言が行われています。名前 N の 2 つの宣言は、別々のオブジェクトを参照します。ただし、この場合、これらのオブジェクトは同じデータ属性を持ちます。データ属性は、デフォルトにより、FIXED BINARY(15,0) と INTERNAL です。DEFAULT(ANS) の場合の精度は (31,0) です。
- 4 X と Y は B 全体で認識され、B 内部のブロック C または D から参照できます。ただし、B の外側の A 部分からは参照できません。
- 5 P と Q はパラメーターです。したがって、ブロック内でこれらの名前の宣言がほかになければ、パラメーター・リストに指定されているだけでコンテキスト宣言がされていることになります。しかし、P と Q が配列であることを指定するには、別個の明示宣言が必要です。引数 X と Y は配列として宣言されており、ブロック C 内で認識されていますが、P と Q も配列であることを指定するには、DECLARE ステートメントでそれらを宣言しなければなりません。(アスタリスク表記は、パラメーターの境界が引数の境界と同じであることを示します。)
- 6 I と M は、外部プロシージャ A では明示的に宣言されていません。したがって、これらは暗黙に宣言され、A 全体で認識されます。ただし、I はブロック C の中でしか使われません。
- 7 例の中の外部プロシージャ Out と Set には、これら両方に共通の L という外部宣言があります。これらは、プロシージャ A で ENTRY 属性を付けて明示的に宣言しなければなりません。ENTRY は EXTERNAL を暗黙指定するため、2 つの入り口定数 Set と Out は、2 つの外部プロシージャ全体で認識されます。
- 8 ラベル B はこのプログラムに 2 回現れます。最初は A 内で開始ブロックのラベルとしてであり、明示宣言となります。次にブロック C 内のラベルとして宣言され、END ステートメントの接頭部として使用されます。したがって、C 内の go to B ステートメントは、C 内の END ステートメントのラベルを参照することになります。ブロック C の外側では、B への参照は開始ブロックのラベルへの参照となります。
- 9 ブロック C と D は、B 内部のどこからでも呼び出せますが、B の外の A 部分や別の外部プロシージャからは呼び出せません。同様に、ラベル E は外部プロシージャ A 全体で認識されているため、E への制御の伝送は A 内部のどこからでも行うことができます。ただし、ブロック C 内のラベル B は、C の中からのみ参照できます。GO TO ステートメントによってブロックの外への伝送ができます。しかし、ネストされたブロックへのそのような伝送は、一般的に行えません。この例外となるケースは外部プロシージャ Out に示されています。ここでは、ラベル E がブロック C から引数としてラベル・パラメーター R に渡されています。

GET ステートメントと PUT ステートメントにはファイルが指定されていないため、SYSIN と SYSPRINT は暗黙宣言されていることに注意してください。

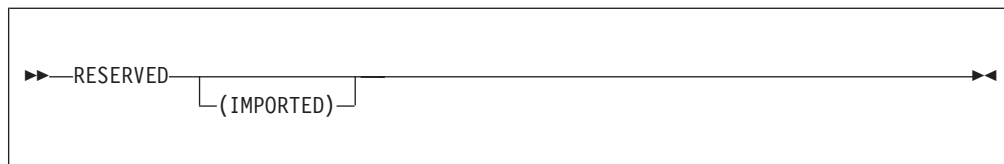
- 10** ステートメント `else go to R;` は、制御をラベル E に伝送します。E が A 内で宣言されており、Out 内では知られていない場合でも同様です。
- 11** 変数 K (INTERNAL) と L (EXTERNAL) は、Out プロシージャー・ブロック内で `STATIC` として宣言されています。それらの値は Out への呼び出しの間で保護されています。
- 12** プロシージャー Out 中の S をプロシージャー C 中の S と同じものとして識別するために、どちらも属性 `EXTERNAL` を付けて宣言されています。

## RESERVED 属性

RESERVED 属性は、`STATIC EXTERNAL` を暗黙指定します。さらに、変数が RESERVED 属性を持つ場合、アプリケーションは以下の条件に従います。

- 変数のすべての宣言は、RESERVED を指定しなければなりません。
- 変数名は、必ず 1 つのパッケージの RESERVES オプション中に現れなければなりません。

変数が RESERVED 属性を持つ場合、その変数がパッケージ内に保存されていない限り、INITIAL 値は無視されます。



コンパイル単位に RESERVED 属性の変数があり、それがその変数用の保存パッケージではない場合、そのコンパイル単位は、保存パッケージを含むロード・モジュールの一部分であるか、または保存パッケージを含む別のロード・モジュールから変数をインポートしなければなりません。後者の場合、

- 変数の宣言は、`RESERVED(IMPORTED)` 属性を指定しなければなりません。
- 変数は、DLL からエクスポートされなければなりません。
- インポートするモジュールにリンクする場合、DLL に関連付けられたサイド・ファイルが組み込まれていなければなりません。

```
owns_x:
 package
 exports(*)
 reserves(x);

 dcl x char(256) reserved init(...);
 dcl y char(256) reserved init(...);
 dcl z char(256) reserved(imported) init(...);

end;

owns_y:
```

## RESERVED

```
package
exports(*)
reserves(y);

dcl x char(256) reserved init(...);
dcl y char(256) reserved init(...);
dcl z char(256) reserved(imported) init(...);

end;

owns_z:
package
exports(*)
reserves(z);

dcl z char(256) reserved(imported) init(...);

end;
```

上記の例では、パッケージ *owns\_x* が変数 *x* のストレージを保存し初期設定します。このパッケージは、パッケージ *owns\_y* と同じロード・モジュールに連絡されていなければなりません。また、このロード・モジュールは、パッケージ *owns\_z* が連絡されたロード・モジュールから変数 *z* をインポートしなければなりません。

---

## SUPPRESS 属性

**SUPPRESS** 属性は、変数が未初期化または未参照、またはその両方であるというメッセージをコンパイラーが出さないことを指定します。



### UNINIT

コンパイラーは、この変数が未初期化である可能性があるというメッセージをすべて抑止します。

### UNREF

コンパイラーは、この変数が未参照であるというメッセージをすべて抑止します。

構造体または共用体で **SUPPRESS** 属性が指定されている場合、その構造体 (または共用体) のすべてのエレメントにも適用されます。

---

## データの位置合わせ

コンピュータは情報を 8 ビットの倍数で保持します。この 8 ビットの情報単位を **バイト** といいます。

コンピュータによるアクセスは、1 バイト、ハーフワード、ワード、またはダブルワードを単位として行われます。ハーフワード は連続している 2 バイト、フルワード は連続している 4 バイト、ダブルワード は連続している 8 バイトをそれぞれ指します。ストレージのバイト位置は 0 から開始される連続した番号が付け

られます。各番号は対応するバイトのアドレスです。ハーフワード、ワード、およびダブルワードは、それぞれの一番左のアドレスでアドレス指定されます。

ハーフワード、ワード、およびダブルワードが、主記憶域でそれぞれの情報単位の規定境界に置かれていると、プログラムの実行が高速になります。つまり、表 25 に示すように、情報単位のアドレスがその情報のバイト数の倍数となる場合、プログラムの実行が高速になります。

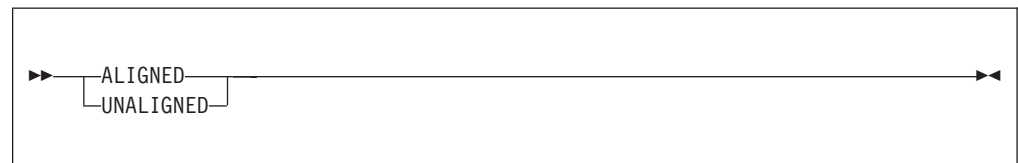
表 25. ハーフワード、ワード、およびダブルワードの規定境界の位置合わせ

| ストレージ・セクションのアドレス |      |        |      |        |      |        |      |
|------------------|------|--------|------|--------|------|--------|------|
| 5000             | 5001 | 5002   | 5003 | 5004   | 5005 | 5006   | 5007 |
| バイト              | バイト  | バイト    | バイト  | バイト    | バイト  | バイト    | バイト  |
| ハーフワード           |      | ハーフワード |      | ハーフワード |      | ハーフワード |      |
| フルワード            |      |        |      | フルワード  |      |        |      |
| ダブルワード           |      |        |      |        |      |        |      |

PL/I は規定境界でのデータ位置合わせが可能です。ただし、連続するデータ・エレメント間の未使用バイトがあると、ストレージの使用が増加します。例えば、データ項目がデータ・セットを作成するために使用される集合のメンバーである場合、未使用バイトによって補助記憶域の必要量が増えることになります。 **ALIGNED** 属性と **UNALIGNED** 属性を使用すれば、適切な規定境界にデータを位置合わせするかどうかを選択できます。

## ALIGNED 属性と UNALIGNED 属性

**ALIGNED** を指定すると、データ・エレメントがそのデータ・タイプ要件に合うストレージ境界で位置合わせされます。 **UNALIGNED** は、各データ・エレメントが次のバイト境界でマップされることを指定します。ただし、固定長のビット・ストリングは例外であり、次のビットでマップされます。



デフォルトはエレメント・レベルで適用されます。 **UNALIGNED** はビット・データ、文字データ、グラフィック・データ、ワイド文字データ、および数字データのデフォルトです。 **ALIGNED** は、その他のすべてのデータ・タイプのデフォルトです。

**ALIGNED** 属性の要件は、184 ページの表 26 に記載されています。

## ALIGNED 属性と UNALIGNED 属性

表 26. 位置合わせ要件

| 変数タイプ | 内部での格納 | ストレージ所要量<br>(バイト) | 位置合わせ要件     |               |
|-------|--------|-------------------|-------------|---------------|
|       |        |                   | ALIGNED データ | UNALIGNEDData |

注:

プログラム制御データの位置合わせおよびストレージ所要量で、サポートされるシステムを通して変更することができます。

複素数データは実数データの 2 倍のストレージを必要としますが、位置合わせ要件は同じです。

|                                                  |                                                                                  |                                            |                                    |                                          |
|--------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------------|
| BIT(n)                                           | ALIGNED: 8 ビットのグループ (またはその一部) ごとに 1 バイト<br><br>UNALIGNED: バイト境界とは無関係に、必要なだけのビット数 | ALIGNED: CEIL(n/8)<br><br>UNALIGNED: n ビット | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) | ビット (データは、バイト内の 0 から 7 までの任意のビットで開始できます) |
| CHARACTER(n)                                     | 1 文字につき 1 バイト                                                                    | n                                          | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます)       |
| CHARACTER (n)VARYINGZ                            | 1 文字につき 1 バイト、および、ヌル終了文字の 1 バイト                                                  | n+1                                        |                                    |                                          |
| GRAPHIC(n)                                       | 1 グラフィックにつき 2 バイト                                                                | 2n                                         |                                    |                                          |
| GRAPHIC (n)VARYINGZ                              | 1 図形文字につき 2 バイト、およびヌル終了文字の 2 バイト                                                 | 2n+2                                       |                                    |                                          |
| WIDECHAR (n)                                     | 1 ワイド文字につき 2 バイト                                                                 | 2n                                         |                                    |                                          |
| WIDECHAR (n)VARYINGZ                             | 1 ワイド文字につき 2 バイト、およびヌル終了文字の 2 バイト                                                | 2n+2                                       |                                    |                                          |
| PICTURE                                          | PICTURE 文字 (V、K、および F 位取り係数を除く) につき 1 バイト                                        | V、K、および F 指定以外の PICTURE 文字の数               |                                    |                                          |
| DECIMAL FIXED (p,q)                              | パック 10 進フォーマット (1 桁につき 1/2 バイト、および、符号の 1/2 バイト)                                  | CEIL((p+1)/2)                              | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます)       |
| BINARY FIXED(p,q)                                | 1 バイト                                                                            | 1                                          |                                    |                                          |
| SIGNED<br>1 <= p <= 7<br>UNSIGNED<br>1 <= p <= 8 |                                                                                  |                                            |                                    |                                          |
| ORDINAL                                          |                                                                                  |                                            |                                    |                                          |
| SIGNED<br>1 <= p <= 7<br>UNSIGNED<br>1 <= p <= 8 |                                                                                  |                                            |                                    |                                          |

表 26. 位置合わせ要件 (続き)

| 変数タイプ                                                                                                   | 内部での格納                                                   | ストレージ所要量<br>(バイト)                              | 位置合わせ要件                               |                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------|---------------------------------------|------------------------------------|
|                                                                                                         |                                                          |                                                | ALIGNED データ                           | UNALIGNED Data                     |
| BIT(n) VARYING                                                                                          | 2 バイトの接頭部、および、宣言される最大長の各 8 ビット・グループ (またはその一部) のための 1 バイト | ALIGNED: 2+CEIL(n/8)<br>UNALIGNED: 2 バイト+n ビット | ハーフワード (データは 0、2、4、または 6 バイトから開始できます) | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) |
| CHARACTER(n)VARYING                                                                                     | 2 バイトの接頭部、および、宣言される最大長の各文字につき 1 バイト                      | n+2                                            |                                       |                                    |
| GRAPHIC(n)VARYING                                                                                       | 2 バイトの接頭部、および、宣言される最大長の各グラフィックにつき 2 バイト                  | 2n+2                                           |                                       |                                    |
| WIDECHAR(n)VARYING                                                                                      | 2 バイトの接頭部、および、宣言される最大長の各ワイド文字につき 2 バイト                   | 2n+2                                           |                                       |                                    |
| BINARY FIXED(p,q)<br><br>SIGNED<br>8 <= p <= 15<br>UNSIGNED<br>9 <= p <= 16<br><br>ORDINAL              | ハーフワード                                                   | 2                                              |                                       |                                    |
| SIGNED<br>8 <= p <= 15<br>UNSIGNED<br>9 <= p <= 16                                                      |                                                          |                                                |                                       |                                    |
| BINARY FIXED(p,q)<br><br>SIGNED<br>16 <= p <= 31<br>UNSIGNED<br>17 <= p <= 32<br><br>ORDINAL            | フルワード                                                    | 4                                              | フルワード (データは 0 または 4 バイトから開始できます)      | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) |
| SIGNED<br>16 <= p <= 31<br>UNSIGNED<br>17 <= p <= 32                                                    |                                                          |                                                |                                       |                                    |
| BINARY FLOAT(p)1<=p<=21<br>DECIMAL FLOAT(p)<br>1<=p<=6 if not DFP<br>DECIMAL FLOAT(p)<br>1<=p<=7 if DFP | 短浮動小数点                                                   |                                                |                                       |                                    |
|                                                                                                         |                                                          |                                                |                                       |                                    |
|                                                                                                         |                                                          |                                                |                                       |                                    |

## ALIGNED 属性と UNALIGNED 属性

表 26. 位置合わせ要件 (続き)

| 変数タイプ                                   | 内部での格納     | ストレージ所要量<br>(バイト) | 位置合わせ要件                          |                                    |
|-----------------------------------------|------------|-------------------|----------------------------------|------------------------------------|
|                                         |            |                   | ALIGNED データ                      | UNALIGNED Data                     |
| POINTER                                 | -          | 4                 | フルワード (データは 0 または 4 バイトから開始できます) | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) |
| HANDLE                                  | -          |                   |                                  |                                    |
| OFFSET                                  | -          |                   |                                  |                                    |
| FILE                                    | -          |                   |                                  |                                    |
| ENTRY LIMITED                           | -          |                   |                                  |                                    |
| ENTRY                                   | -          | 8                 |                                  |                                    |
| LABEL または FORMAT                        | -          |                   |                                  |                                    |
| TASK                                    | -          | 16                |                                  |                                    |
| AREA                                    | -          | 16+size           |                                  | AREA データは、位置合わせなしにすることはできません。      |
| BINARY FIXED(p,q)                       | -          | 8                 | ダブルワード (データは 0 バイトから開始できます)      | バイト (データは、0 から 7 までの任意のバイトで開始できます) |
| SIGNED<br>32 <= p <= 63                 |            |                   |                                  |                                    |
| UNSIGNED<br>33 <= p <= 64               |            |                   |                                  |                                    |
| BINARY FLOAT(p)<br>22 <= p <= 53        |            |                   |                                  |                                    |
| DECIMAL FLOAT(p)<br>7<=p<=16 if not DFP | 長浮動小数点     | 8                 |                                  |                                    |
| DECIMAL FLOAT(p)<br>8<=p<=16 if DFP     |            |                   |                                  |                                    |
| BINARY FLOAT(p)<br>54 <= p              |            |                   |                                  |                                    |
| DECIMAL FLOAT(p) 17<=p                  | 拡張精度の浮動小数点 | 16                |                                  |                                    |

ALIGNED または UNALIGNED は、エレメント、配列、構造体、または共用体変数について指定できます。構造体または共用体にいずれかの属性を適用すれば、明示的には ALIGNED と UNALIGNED とともに宣言されていないすべての被包含エレメントに対してその属性を適用することになります。

以下に、構造体とそのエレメントについての、ALIGNED と UNALIGNED 宣言の効果を図示した例を示します。

```

declare 1 S,
 2 X bit(2), /* unaligned by default */
 2 A aligned, /* aligned explicitly */
 3 B, /* aligned from A */
 3 C unaligned, /* unaligned explicitly */
 4 D, /* unaligned from C */
 4 E aligned, /* aligned explicitly */
 4 F, /* unaligned from C */
 3 G, /* aligned from A */
 2 H; /* aligned by default */

```

構造体と共用体の詳細については、197 ページの『構造体』および 198 ページの『共用体』を参照してください。



## 属性のデフォルト

PL/I プログラムで使用する名前には、それぞれ完全な属性のセットが必須になります。プロシージャに渡された引数は、プロシージャのパラメーターと一致する属性を持っていないければなりません。関数が返す値は、予測されるとおりの属性を持っていないければなりません。ただし、ユーザーが属性の完全なセットを指定するのはまれです。

特に、

- 明示的に宣言された名前
- 暗黙に宣言された (コンテキストによる宣言を含む) 名前
- パラメーター記述子の中に含まれる属性
- 関数プロシージャから返される値

上記の属性セットは、言語に固有のデフォルトを使用することにより、または言語に固有のデフォルトの変更もしくはまったく新しいデフォルト・セットの作成を通じてユーザーが (DEFAULT ステートメントを使用し) 定義するデフォルトを使用することにより完成することができます。

デフォルトによって適用される属性が、明示宣言またはコンテキスト宣言によって名前に適用された属性に優先することはありません。

## 言語に固有のデフォルト

データ属性を指定しないで宣言された変数には、デフォルトにより算術属性が与えられます。モード、スケール、基数が DECLARE ステートメントまたは DEFAULT ステートメントによって指定されていない場合は、DEFAULT コンパイラー・オプションがこれらの属性を次のように決定します。

- DEFAULT(IBM) が有効な場合は、文字 I から N で開始される名前を持つ変数は属性 REAL FIXED BINARY(15,0) が与えられます。ほかのすべての変数は属性 REAL FLOAT DECIMAL(6) が与えられます。
- DEFAULT(ANS) が有効な場合、どの変数にも属性 REAL FIXED BINARY(31,0) が与えられます。

位取り係数が精度属性に指定されていない場合、ほかのすべての属性に先行して、FIXED 属性が適用されます。したがって、BINARY (p,q) 属性を指定した宣言は、常に FIXED BINARY (p,q) 属性を指定した宣言と同じになります。

算術宣言で精度が指定されていない場合、DEFAULT コンパイラー・オプションにより、188 ページの表 27 に従って精度が決定されます。有効範囲、ストレージ、および位置合わせ属性に関する言語に固有のデフォルトは、33 ページの表 8 と 32 ページの表 7 に示されています。

ENTRY 宣言で記述リストが指定されていない場合、引数の属性は、呼び出されたプロシージャ内のパラメーターの属性と一致しなければなりません。例えば、下記の宣言の場合、

```
dc1 X entry;
call X(1);
```

引数は属性 REAL FIXED DECIMAL(1,0) を持っています。次の例に示すように、プロシージャ x がそのパラメーターを別の属性で宣言した場合には、エラーが発生します。

```
x: proc(Y);
 dcl Y fixed bin(15);
```

入り口宣言によってすべてのパラメーターの属性を指定すれば、こうしたエラーの可能性を回避することができます。

表 27. デフォルトの算術精度

| 属性            | DEFAULT(IBM) | DEFAULT(ANS) |
|---------------|--------------|--------------|
| DECIMAL FIXED | (5,0)        | (10,0)       |
| BINARY FIXED  | (15,0)       | (31,0)       |
| DECIMAL FLOAT | (6)          | (6)          |
| BINARY FLOAT  | (21)         | (21)         |

## DEFAULT ステートメント

DEFAULT ステートメントは、(属性セットが完全ではない場合は) データ属性のデフォルトを指定します。部分的に完成された明示宣言やコンテキスト宣言、あるいは暗黙宣言の場合、 DEFAULT ステートメントが適用されない属性については、言語に固有のデフォルトが適用されます。

DEFAULT ステートメントはほかのすべての属性指定を無効にします。ただし、ENTRY 属性または FILE 属性を付けて、かつ VARIABLE 属性を暗黙指定する属性は付けずに宣言された名前については、 DEFAULT ステートメントの適用に先立ち、PL/I が暗黙の CONSTANT 属性を指定します。したがって、下記の例の場合は、PL/I によって Xtrn に CONSTANT 属性が指定され、STATIC 属性は指定されません。

```
Sample: proc;

 default range(*) static;
 dcl Xtrn entry;

end;
```

構造体および共用体のエレメントには、修飾されたエレメント名ではなく、エレメントの名前に応じてデフォルト属性が指定されます。 DEFAULT ステートメントは、構造体や共用体を作成するためには使用できません。

**RANGE( identifier )**

RANGE (ABC)

上記の場合、下記の名前には適用されます。

ABC  
ABCD  
ABCDE

ただし、下記の名前には適用されません。

ABD  
ACB  
AB  
A

したがって、範囲指定に 1 文字の ID を指定した場合は、その文字で始まるすべての名前に ID が適用されます。RANGE の ID は DBCS で指定できます。

名前の最初の文字が指定した 2 つの ID と一致するか、またはアルファベット順で 2 つの ID の中間にある名前に、デフォルトが適用されるように指定します。文字は DBCS で指定できますが、RANGE の指定が名前に適用されるかどうか判断するための比較基準はすべて、関係のある文字の 16 進値だけです。指定に使用する文字は、昇順のアルファベット順に並べる必要があります。以下に例を示します。

RANGE(A:G,I:M,T:Z)

DEFAULT ステートメントの有効範囲内のすべての名前を指定します。 以下に例を示します。

DFT RANGE (\*) PIC '99999';

このステートメントは、すべての名前について、デフォルト属性 `REAL PICTURE '99999'` を指定します。

範囲オプションを使用した分配指定 の例を次に示します。

```
DEFAULT (RANGE(A)FIXED, RANGE(B)
 FLOAT)BINARY;
```

このステートメントは、最初の文字が A である名前にデフォルト属性 FIXED BINARY を指定し、最初の文字が B である名前に FLOAT BINARY を指定します。

### DESCRIPTORS

明示的なエン트리宣言のパラメーター記述子リストにある、任意のパラメーター記述子に属性を組み込むように指定します。

- 同じクラスの代替属性が存在していても、この属性の組み込みは禁止されません。
- 少なくとも 1 つの属性がすでに存在している必要があります (DESCRIPTORS のデフォルト属性は、ヌル記述子には適用されません)。

以下に例を示します。

```
DEFAULT DESCRIPTORS BINARY;
DCL X ENTRY (FIXED, FLOAT);
```

リスト内のそれぞれのパラメーター記述子に属性 BINARY が追加され、次のように同等なリストが作成されます。

```
(FIXED BINARY, FLOAT BINARY)
```

### attribute-list

特定の範囲内の名前に適用する属性を選択する際に使う、属性リストを指定します。リスト内の属性はどの順序で指定してもかまいませんが、相互にブランクで区切るようにしてください。

この属性リストからは、データ項目の宣言を完結させるために必要な属性だけが取り出されます。

FILE を使用した場合は、属性 VARIABLE と INTERNAL が暗黙指定されます。

次元属性は指定可能ですが、属性指定の最初の項目としてだけ指定できます。境界は算術定数または式として指定でき、REFER オプションを組み込むことができます。 以下に例を示します。

```
DFT RANGE(J) (5);
DFT RANGE(J) (5,5) FIXED;
```

DEFAULT ステートメントは、明示的に宣言されていない名前の次元属性を指定できますが、属性 BUILTIN を指定すると、添え字付きの名前がコンテキスト的に宣言されます。したがって、デフォルトでは次元属性は明示的に宣言された名前にだけ適用できます。

INITIAL 属性を指定できます。

データ項目に適用すると相互に対立する属性でも、属性指定では対立するとは限りません。 以下に例を示します。

```
DEFAULT RANGE(S) BINARY VARYING;
```

この場合、文字 S で始まり、BIT、CHARACTER、または GRAPHIC 属性を指定して明示的に宣言された名前には VARYING 属性が指定され、その他のすべ

ての名前 (算術データ以外のものとして明示的にまたはコンテキストで宣言されていない) には **BINARY** 属性が指定されます。

## VALUE

次元属性の前を除いて、`attribute-specification` の中のどこに書いてもかまいません。

**VALUE** は、区域のサイズ、ストリングの長さ、および数値精度に関するデフォルトの規則を確立します。

**DEFAULT** ステートメントで、**VALUE** オプションは、区域のサイズ、ストリングの長さ、または数値精度を指定できる場所にのみ置きます。

**VALUE** 文節の中のこれらのサイズ、長さ、および精度の指定は、システム・デフォルト属性の後で、サイズ、長さ、および精度に関するシステム・デフォルトより前に適用されます。したがって、例えば **DCL I**; および **DEFAULT RANGE(\*) VALUE( FIXED BIN(31) );** があるとした場合、変数 **I** はシステム・デフォルト属性である **FIXED BIN** を受け取りますが、精度 **31** は (システム・デフォルトである **15** ではなく) **VALUE** オプションから受け取ります。

**AREA** データのサイズや、**BIT**、**CHARACTER**、または **GRAPHIC** データの長さは、式または整数で表すことができ、**REFER** オプションを使用することもできます。また、アスタリスクとして指定することもできます。

以下に例を示します。

```
DEFAULT RANGE(A:C)
 VALUE (FIXED DEC(10),
 FLOAT DEC(14),
 AREA(2000));
DECLARE B FIXED DECIMAL,
 C FLOAT DECIMAL,
 A AREA;
```

これらのステートメントは、下記のステートメントと同等です。

```
DECLARE B FIXED DECIMAL(10),
 C FLOAT DECIMAL(14),
 A AREA(2000);
```

`value-specification` では、特定の属性における精度指定であることがわかるように、基数属性とスケール属性を記入する必要があります。基数属性とスケール属性は属性配分することができます (172 ページの『属性分配』を参照のこと)。

**VALUE** オプションの影響を受ける属性は、区域のサイズ、ストリングの長さ、および精度だけです。上記の例での **CHARACTER** や **FIXED BINARY** など、オプションのその他の属性は、単に値に関連付ける属性を示すに過ぎません。次の例を考えてみてください。

```
DEFAULT RANGE(I) VALUE(FIXED DECIMAL(8,3));
I = 1;
```

**I** が明示的に宣言されていない場合、**I** には、言語で定められているデフォルトの属性 **FIXED BINARY (15,0)** が与えられます。**I** は **DEFAULT** ステートメントの影響を受けません。なぜなら、このステートメントは、**FIXED DECIMAL** である名前のデフォルトの精度が **(8,3)** であることだけを指定しているからです。

以下に例を示します。

```
DFT RANGE(*) VALUE(FIXED BINARY(31));
```

一方、次の例は、デフォルトの属性として FIXED BINARY を指定し、同時に精度を指定しています。

```
DFT RANGE(*) FIXED BINARY VALUE(FIXED BINARY(31));
```

1 つのブロック内に複数の DEFAULT ステートメントを指定することができます。DEFAULT ステートメントの有効範囲は、そのステートメントが指定されているブロック、および、そのブロック内で、同じ範囲の別の DEFAULT ステートメントを含まず、なおかつ同じ範囲の DEFAULT ステートメントを持つブロックに包含されていないすべてのブロックです。

内部ブロックの DEFAULT ステートメントは、明示的に宣言された名前に対してのみ効果があります。これは、暗黙宣言の場合、その名前が使われている外部プロシージャの PROCEDURE ステートメントのすぐ後にある DECLARE ステートメントでその名前が宣言されているかのように、宣言の有効範囲が決められるからです。

あるブロック内の DEFAULT ステートメントで指定した範囲が、そのブロックに含まれているブロック内の DEFAULT ステートメントで指定した範囲と部分的に重なり合ってもかまいません。このような場合、包含ブロック内の DEFAULT ステートメントの範囲は、被包含ブロック内の DEFAULT ステートメントの範囲分だけ減少することになります。以下に例を示します。

```
P: PROCEDURE;
L1: DEFAULT RANGE (XY) FIXED;
Q: BEGIN;
L2: DEFAULT RANGE (XYZ) FLOAT;
END P;
```

DEFAULT ステートメント L1 の有効範囲は、プロシージャ P および包含ブロック Q です。DEFAULT ステートメント L1 の範囲は、文字 XY で始まるプロシージャ P 内のすべての名前、および文字 XY で始まる開始ブロック Q 内のすべての名前です。ただし、文字 XYZ で始まる名前は除きます。

DEFAULT ステートメントの接頭部としてラベルを指定できます。このようなラベルへの分岐は、ヌル・ステートメントへの分岐として扱われます。条件接頭語は、DEFAULT ステートメントに付加できません。

## 言語に固有のデフォルトの復元

次のステートメントを例に考えてみましょう。

```
dft range(*) system;
```

上記の場合、すべての名前について、包含ブロック内で確立されたプログラマー定義のデフォルト規則より優先されます。これを使用すれば、被包含ブロックのために言語固有のデフォルトを復元することができます。

---

## 配列

配列は同一の属性を持つエレメントからなる n 次元の集合です。配列そのものだけに名前を付けます。配列の個々の項目を参照するときは、配列内でのその項目の位置を使用します。次元属性を提供することによって、名前が配列変数であることを指定できます。

REFER を使用して指定しない限り、すべての配列のすべての次元に、少なくとも 1 つのエレメントが必要です。REFER を使用して配列の境界を指定する場合、以下の条件を満たす限り、配列のエレメント数をゼロに定義することができます。

- 配列はアクセスされたり、割り当てられたりすることがない
- 配列に 1 つの次元しかない (継承した次元を除く)

そのため、例えば以下のコードでは、ab3、abc1、および abc2 がアクセスされたり割り当てられたりしない限り、n1 がゼロであるときに配列 a を割り振るのは有効です。

```

dcl n1 fixed bin(31);
dcl p pointer;
dcl
1 a based(p),
 2 ab1 fixed bin(31),
 2 ab2 fixed bin(31),
 2 ab3(n1 refer(ab2)),
 3 abc1 char(40) var,
 3 abc2 char(40) var,
 2 ab4 char(40) var;

```

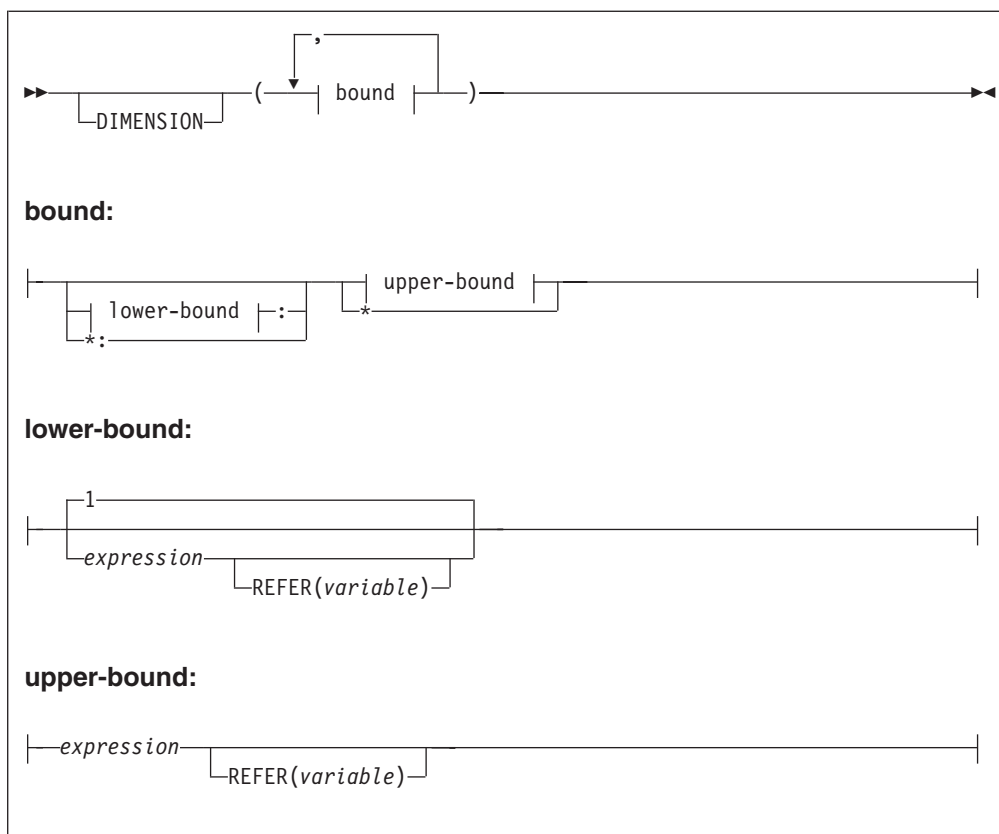
## 次元属性

次元属性 には、配列の次元の数、各次元の上限と下限を指定します。

制限なしの式で表される境界 は、配列にストレージが割り振られるときに評価され、(CMPAT コンパイラー・オプションに対応した精度で) FIXED BINARY に変換されます。

エクステンツ とは、上限値と下限値を含め、それらの値の間にある整数の個数です。





#### 省略形: DIM

DIMENSION キーワードが省略される場合には、次元は宣言内の名前（もしくは括弧で囲まれた名前のリスト）のすぐあとになければなりません。

境界 (bound) 指定の数が、その配列の次元の数を表します。ただし、宣言される変数が構造体または共用体の配列に含まれている場合は例外で、そのときはその変数を含んでいる構造体または共用体から次元の数を継承します。

境界の指定は、境界を次のようにして示します。

- 上限だけを指定すると、下限にはデフォルトの 1 が設定されます。
- 下限は上限以下でなければなりません。
- アスタリスク (\*) は、上限または下限（またはその両方）がそのパラメーターに関連する引数によって決定されることを表します。

## DIMACROSS 属性

DIMACROSS 属性は、構造体に DIMENSION 属性を指定しますが、それは構造体からは除去されてそのメンバーに伝搬します。

DIMACROSS 属性は、DIMENSION 属性と同じ構文です。ただし、当然のことながら DIMACROSS キーワードはオプションではありません。

DIMACROSS 属性は構造体にのみ有効であり、直接の子のいずれかに次元属性が既に存在する場合には無効です。



例として、次の宣言を考えます。

```
Dcl
 1 a(10) dimacross,
 2 b,
 2 c,
 3 d,
 3 e;
```

この宣言は、次の宣言と同等です。

```
Dcl
 1 a,
 2 b(10),
 2 c(10),
 3 d,
 3 e;
```

## 配列の例

次の宣言について考えてみましょう。

```
declare List fixed decimal(3) dimension(8);
```

List は、8 つのエレメントからなる 1 次元の配列であり、それぞれ 3 桁の 10 進固定小数点エレメントであると宣言されています。List の 1 つの次元は、境界値として 1 と 8 を持ち、エクステントは 8 です。

以下に例を示します。

```
declare Table (4,2) fixed dec (3);
```

Table は、8 つの 10 進固定小数点エレメントからなる 2 次元の配列であると宣言されています。Table の 2 つの次元は、1 と 4 および 1 と 2 の境界値を持ち、エクステントは 4 と 2 です。

その他の例を示します。

```
declare List_A dimension(4:11);
declare List_B (-4:3);
```

最初の例では、境界は 4 と 11 で、2 番目の例では -4 と 3 です。どちらの場合も下限から上限までに整数が 8 つあるので、両者のエクステントは同じです。

複数の配列を使って配列データを処理する場合は (81 ページの『配列式』を参照)、単にエクステントだけでなく、両者の境界が同じでなければなりません。前述の List、List\_A、List\_B は、すべてエクステントは同じですが、境界が異なります。

## 添え字

配列エレメントの参照方法は、配列の上限と下限によって決まります。例えば、次のようなデータ項目があるとします。

```
20 5 10 30 630 150 310 70
```

上記データ項目を、前述で宣言した List という配列に割り当てたとします。さまざまなエレメントが、次のように参照されます。

| 参照       | エレメント |
|----------|-------|
| LIST (1) | 20    |

|          |     |
|----------|-----|
| LIST (2) | 5   |
| LIST (3) | 10  |
| LIST (4) | 30  |
| LIST (5) | 630 |
| LIST (6) | 150 |
| LIST (7) | 310 |
| LIST (8) | 70  |

LIST のあとに書かれている括弧内の数字を添え字 といいます。 添え字を括弧で囲んで配列名のあとに書くと、その配列内の特定のデータ項目を指すことになります。 LIST(4) のように、添え字付きの名前を参照すると、1 つのエレメントを参照することになります。これは要素変数です。添え字が付いていない配列名 (例えば、LIST) を書けば、配列全体を参照することができます。

前述で宣言した List\_A と List\_B に同じデータを割り当てることができます。この場合は、次のように参照します。

| 参照          | エレメント | 参照          |
|-------------|-------|-------------|
| LIST_A (4)  | 20    | LIST_B (-4) |
| LIST_A (5)  | 5     | LIST_B (-3) |
| LIST_A (6)  | 10    | LIST_B (-2) |
| LIST_A (7)  | 30    | LIST_B (-1) |
| LIST_A (8)  | 630   | LIST_B (0)  |
| LIST_A (9)  | 150   | LIST_B (1)  |
| LIST_A (10) | 310   | LIST_B (2)  |
| LIST_A (11) | 70    | LIST_B (3)  |

同じデータを TABLE (2 次元の配列として宣言されている) に割り当てたとします。 TABLE は、次のように 4 行 2 列の行列として表せます。

| TABLE(m,n) | (m,1) | (m,2) |
|------------|-------|-------|
| (1,n)      | 20    | 5     |
| (2,n)      | 10    | 30    |
| (3,n)      | 630   | 150   |
| (4,n)      | 310   | 70    |

TABLE のエレメントを参照するときは、コンマで区切った 2 つの添え字を括弧で囲んで、配列名のあとに書きます。例えば、TABLE(2,1) は、2 行目の最初の項目 (この例では 10 というデータ項目) を指します。

TABLE を図示するのに行列を使用したのは、概念的にその方がわかりやすいためで、実際にはデータ項目はストレージでそのように編成されているわけではありません。データ項目は、行を主体とした順序で割り当てられます。つまり列を表す添え字がまず変化するということを意味します。例えば、TABLE への割り当て順序は、TABLE(1,1)、TABLE(1,2)、TABLE(2,1)、TABLE(2,2) というようになります。

添え字を使用して配列を参照するときは、添え字の数は配列の次元の数と同じでなければなりません。

有効な算術値が得られる式であれば、添え字として使うことができます。必要に応じて、値は (CMPAT コンパイラ・オプションに対応した精度で) FIXED

BINARY に変換されます。例えば、TABLE(I,J\*K) を使用し、I、J、K の値を変えていけば、TABLE の個々のエレメントを参照できます。

## 配列のクロスセクション

添え字の代わりにアスタリスクを使えば、配列のクロスセクションを参照できます。アスタリスクは、そのエクステント全体を使用することを意味します。例えば、TABLE(\*,1) は TABLE の第 1 列のすべてのエレメントを指します。つまり、TABLE(1,1)、TABLE(2,1)、TABLE(3,1)、および TABLE(4,1) からなるクロスセクションを表します。添え字付きの名前 TABLE(2,\*) は TABLE の第 2 行のすべてのデータ項目を指します。TABLE(\*,\*) は、TABLE と同様に、配列全体を指します。

添え字としてアスタリスクが付いている名前は、1 つのデータ・エレメントを表すのではなく、アスタリスクと同数の次元を持つ配列を表します。したがって、そのような名前は要素式ではなく配列式です。

配列のクロスセクションを参照すると、ストレージで隣接していない複数のエレメントを参照することがあります。そのようなクロスセクションによって表されるストレージを、非連結 ストレージといいます (280 ページの『CONNECTED 属性と NONCONNECTED 属性』を参照)。次のような規則があります。左端の境界をアスタリスクにし、その右側の境界をアスタリスク以外のものにすると、配列のクロスセクションは非連結ストレージになります。例えば、A(4,\*,\*) は連結ストレージになりますが、A(\*,2,\*) はなりません。

---

## 構造体

構造体 とは、構造体、共用体、要素変数、および配列であるメンバー・エレメントの集合です。

構造変数 は、データの集合全体を参照するときに使用される名前です。ただし配列とは異なり、構造体内の各メンバーにも名前を付けられます。また、各メンバーの属性を別々にすることもできます。参照されることがなければ、構造体やメンバーの名前としてアスタリスクを使用できます。例えば、予約項目や埋め込み文字項目を、アスタリスクで指定することができます。

構造体は、いくつかのレベル を持ちます。レベル 1 の名前は、大構造体 と呼ばれます。それより下のレベルの名前は、小構造体または共用体 になります。最下位のレベルの名前は、基本 名と呼ばれ、要素変数または配列変数を表すことができます。共用体の説明については、198 ページの『共用体』の項を参照してください。

構造体は、DECLARE ステートメントで、それぞれの名前の前にレベル番号を付けるという方法によって指定します。レベル番号は、整数でなければなりません。

大構造体名は、レベル番号 1 を付けて宣言します。小構造体名、共用体、および基本名は、2 以上のレベル番号を付けて宣言します。区切り文字によって、レベル番号と関連する名前を区切らなければなりません。例えば、給与計算レコードの項目を次のように宣言することができます。

```
declare 1 Payroll, /* major structure name */
 2 Name, /* minor structure name */
 3 Last char(20), /* elementary name */
```

## 構造体

```
3 First char(15),
2 Hours,
3 Regular fixed dec(5,2),
3 Overtime fixed dec(5,2),
2 Rate,
3 Regular fixed dec(3,2),
3 Overtime fixed dec(3,2);
```

上の例では、Payroll は大構造体で、それ以外の名前はこの構造体のメンバーとなります。Name、Hours、および Rate は小構造体で、それ以外のすべてのメンバーは、要素変数となります。構造体全体は、名前 Payroll を使用すれば参照することができ、構造体内の特定の部分は、その小構造体名を使用すれば参照できます。メンバーは、メンバー名の参照によって参照することができます。

上の例では、読みやすくするために字下げをしています。このステートメントを、次のストリングのように続けて書くこともできます。

```
Declare 1 Payroll, 2 Name, 3 Last char(20), . . .
```

後続の下位レベルに付けるレベル番号は、連続している必要はありません。レベル *n* の小構造体には、その小構造体名と *n* 以下のレベル番号を持つ次の名前との間にある、*n* より大きいレベル番号を持つすべての名前が含まれます。

例えば、次の宣言では、先の例の宣言とまったく同じ構造体になります。

```
Declare 1 Payroll,
4 Name,
5 Last char(20),
5 First char(15),
3 Hours,
6 Regular fixed dec(5,2),
5 Overtime fixed dec(5,2),
2 Rate,
9 Regular fixed dec(3,2),
9 Overtime fixed dec(3,2);
```

大構造体の記述は、通常、DECLARE ステートメントの終わりのセミコロンで終了します。また、コンマで終了する場合もあり、この場合はあとに別の項目の宣言が続きます。

---

## 共用体

共用体 とは、相互にオーバーレイし合い、同じストレージを有するメンバー・エレメントの集合です。メンバーは、構造体、共用体、要素変数、および配列であることができます。それらは同じ属性を持つ必要はありません。

共用体全体には、データの集合全体で参照できる名前が付けられます。構造体と同様、共用体の各エレメントもそれぞれ名前が付けられます。アスタリスクは、共用体の名前、または共用体が参照されない場合はメンバーの名前として使用できます。例えば、予約項目や充てん文字項目をアスタリスクで指定することができます。

構造体と同様、共用体はどのようなレベル（レベル 1 を含む）にもなります。次に低いレベルの共用体のすべてのエレメントは、共用体のメンバーであり、同じストレージを有します。共用体によって占められるストレージは、最大メンバーに必要な

なストレージと等しくなります。通常、どのような場合でも使用されるメンバーは 1 つだけで、プログラマーが使用されるメンバーを決定します。

共用体は、構造体と同様、それぞれの名前の前にレベル番号を付けるという方法によって指定します。

共用体は、一般的に共通部、選択部、および可変部からなる可変レコードの宣言に使用されます。例えば、クライアント・ファイルのレコードは、次のように宣言されます。

```
Declare 1 Client,
 2 Number pic '999999',
 2 Type bit(1),
 2 * bit(7),
 2 Name union,
 3 Individual,
 5 Last_Name char(20),
 5 First_Name union,
 7 First char(15),
 7 Initial char(1),
 3 Company char(35),
 2 * char(0);
```

この例では、Client が大構造体です。構造体 Individual とエレメント Company は、共用体 Name のメンバーです。これらメンバーのうちの 1 つが、Type に応じてアクティブになります。構造体 Individual には、共用体 First\_name とエレメント Last\_name が含まれています。共用体 First\_name は、First と Initial をメンバーとして持ち、両方ともアクティブです。またこの例では、アスタリスクを名前として使用しています。共用体の記述は、DECLARE ステートメントを終了するセミコロンまでで終了するか、コンマによって終了します (コンマの場合、別の項目の宣言があとに続きます)。

## UNION 属性

UNION 属性を使用すると、ある変数が共用体であり、そのメンバーが変数のあとに続き、論理的に次に高位のレベルであることを指定することができます。CELL は、UNION の同義語として受け入れられます。

▶▶—UNION—◀◀

## 構造体/共用体の修飾

構造体のメンバーまたは共用体のメンバーは、その名前が固有であれば、名前だけで参照できます。別のメンバーが同じ名前を持つ場合には、そのレベルが同じか、異なるのか、またはあいまいになります。あいまいになる場合、正しいメンバーを固有に識別するには修飾された参照を行わなければなりません。

修飾された参照 とは、ピリオドによって接続された親メンバーにあたる 1 つ以上の名前で修飾されているメンバー名のことです。(修飾された参照の構文については、61 ページの『第 4 章 式および参照』を参照)。ピリオドの前後には、ブランクがあってもかまいません。

修飾は、レベルの順番に従わなければなりません。つまり、最高位レベルの名前は最初に、最低位レベルの名前は最後になければなりません。

レベル 1 の構造体名または共用体名は、ブロックの有効範囲内で固有でなければなりません。メンバー名は、直接の親のもとで同じ論理レベルに現れない限り、固有である必要はありません。修飾名は、それが現れるブロック内で、同じ構造体で固有に参照される必要がある場合にしか使用することができません。次の例では、`x.y (19)` の値は表示されますが、値 `(17)` は表示されません。

```
dc1 Y fixed init(17);
```

```
begin;
dc1
1 X,
2 Y fixed init(19);
display(Y);
end;
```

参照の実行は、通常、参照を含む一番内側にあるブロック内で宣言された名前に適用されます。

以下の例では、あいまいな参照とあいまいでない参照の両方を説明しています。以下の例では、`A.C` は内側のブロックの `C` を参照しています。`D.E` は外側のブロックの `E` を参照しています。

```
declare 1 A, 2 C, 2 D, 3 E;
begin;
declare 1 A, 2 B, 3 C, 3 E;
A.C = D.E;
```

次の例では、`D` は 2 回宣言されています。`A.D` の参照を行うと 2 番目の `D` が参照されます。これは、`A.D` が、2 番目の `D` のみの完全修飾だからです。最初の `D` は、`A.C.D` として参照されます。

```
declare 1 A,
2 B,
2 C,
3 D,
2 D;
```

次の例では、`A.C` の参照はあいまいです。これは、`C` がこの参照によって完全に修飾されないためです。

```
declare 1 A,
2 B,
3 C,
2 D,
3 C;
```

次の例では、`A` の参照を行うと最初の `A` が参照され、`A.A` の参照を行うと 2 番目の `A` が参照され、`A.A.A` の参照を行うと 3 番目の `A` が参照されます。

```
declare 1 A,
2 A,
3 A;
```

次の例では、`X` の参照を行うと最初の `DECLARE` ステートメントが参照されます。`Y.Z` の参照はあいまいなものとなります。`Y.Y.Z` は 2 番目の `Z` を参照し、`Y.X.Z` は最初の `Z` を参照します。

```

declare X;
declare 1 Y,
 2 X,
 3 Z,
 3 A,
 2 Y,
 3 Z,
 3 A;

```

名前の修飾については、173 ページの『宣言の有効範囲』を参照してください。

## LIKE 属性

LIKE 属性は、宣言される名前が、参照される構造体または共用体 (LIKE 属性のオブジェクト) と論理的に同じ編成であることを示します。オブジェクト変数のメンバー名およびその属性 (次元属性を含む) は、有効にコピーされ、宣言される名前のメンバーになります。必要であれば、コピーされたメンバーのレベル番号は自動的に調整されます。オブジェクト変数名およびその属性 (次元属性を含む) は無視されます。

▶▶—LIKE—*object-variable*—▶▶

### object-variable

大構造体、小構造体、または共用体のいずれでもかまいません。LIKE 属性の指定を含むブロック内になければなりません。修飾をすることはできません、添え字を付けることはできません。オブジェクトまたはそのすべてのメンバーは、LIKE 属性もしくは REFER オプションを持つことはできません。

すべての LIKE 属性のオブジェクトは、その LIKE 属性が拡張される前に宣言された名前に対応しています。

新しいメンバーを、作成された構造または共用体に追加することはできません。LIKE 属性のオブジェクト変数のすぐあとのレベル番号は、LIKE 属性を持つ名前のレベル番号以下でなければなりません。

次の宣言では、X に対し同じ構造体が生成されます。

```

dc1
 1 A(10) aligned static,
 2 B bit(4),
 2 C bit(4),
 1 X like A;

```

```

dc1
 1 X,
 2 B bit(4),
 2 C bit(4);

```

次元 (DIM(10))、ALIGNED、および STATIC 属性は、LIKE 拡張の一部としてコピーされないことに注意してください。



LIKE 属性は、デフォルトが適用される前、もしくは ALIGNED 属性および UNALIGNED 属性が LIKE オブジェクト変数に含まれるエレメントに適用される前に拡張されます。

### 例

```
declare 1 A,
 2 C,
 3 E(3) union,
 5 E1,
 5 E2,
 3 F;
declare 1 B(10) union,
 2 C, 3 G, 3 H,
 2 D;
begin;
declare 1 C like B;
declare 1 D(2),
 5 BB like A.C;
end;
```

宣言 C および D の結果を、次の例に示します。

```
dcl
 1 C, /* DIM and UNION not copied. */
 2 C, 3 G, 3 H,
 2 D;

dcl 1 D(2),
 5 BB,
 6 E(3) union, /* DIM(3) and UNION copied. */
 7 E1, /* Note adjusted level-numbers. */
 7 E2,
 6 F;
```

次の例は、C.E が LIKE 属性を持つため無効です。

```
declare 1 A like C,
 1 B,
 2 C,
 3 D,
 3 E like X,
 2 F,
 1 X,
 2 Y,
 2 Z;
```

次の例は、A の LIKE 属性が、LIKE 属性によって宣言された構造体 G の副構造体 G.C を指定するため無効です。

```
declare 1 A like G.C,
 1 B,
 2 C,
 3 D,
 3 E,
 2 F,
 1 G like B;
```

次の例は、A の LIKE 属性が、LIKE 属性を持つ副構造体 F を含む構造体 B 内の構造体 C を指定するため無効です。



```

declare 1 A like C,
 1 B,
 2 C,
 3 D,
 3 E,
 2 F like X,
 1 X,
 2 Y,
 2 Z;

```

## NOINIT 属性

NOINIT 属性は、どの INITIAL 属性も無視されることを指定します。

NOINIT 属性は、レベル 1 の構造体で最も有用になると思われますが、どのような副構造でも指定できます。

NOINIT 属性は特に LIKE 属性に便利です。これは、新しい変数が古い変数の LIKE (類似) として宣言されたが NOINIT 属性も持つ場合、新しい変数は、古い変数からすべてのサブ構造を継承しますが、その INITIAL 値は継承しないからです。

## 集合体の組み合わせおよびマッピング

### 配列、構造体、および共用体の組み合わせ

構造体または共用体に次元属性を指定すると、それぞれ構造体の配列、または共用体の配列 になります。このような配列のエレメントは、同一の名前、レベル、およびメンバーを持つ構造体または共用体です。例えば、ある構造体が 20 世紀から 21 世紀までの毎月の気象データを保管するために使用されている場合、これは次のように宣言されます。

```

Declare 1 Year(1901:2100),
 3 Month(12),
 5 Temperature,
 7 High decimal fixed(4,1),
 7 Low decimal fixed(4,1),
 5 Wind_velocity,
 7 High decimal fixed(3),
 7 Low decimal fixed(3),
 5 Precipitation,
 7 Total decimal fixed(3,1),
 7 Average decimal fixed(3,1),
 3 * char(0);

```

1991 年 7 月の気象データは、Year(1991,7) と指定すれば参照することができます。7 月の気象データの各部分は、Temperature(1991,7) や Wind\_Velocity(1991,7) を指定すれば参照することができます。

Precipitation.Total(1991,7) または Total(1991,7) のいずれを指定しても、1991 年 7 月の総雨量を参照することができます。

Temperature.High(1991,3) は 1991 年 3 月の最高気温を参照します。これは添え字付きの修飾された参照です。

構造体または共用体の配列の中に、配列であるメンバーが含まれていると、添え字付きの修飾された参照の必要性が明確になります。次の例では、A および B は共に構造体です。

## 配列、構造体、および共用体の組み合わせ

```
declare 1 A (2,2),
 (2 B (2),
 3 C,
 3 D,
 2 E) fixed bin;
```

データ項目を参照するために、3 つの名前と 3 つの添え字が必要になることがあります。以下に例を示します。

A(1,1).B           は構造体の配列 B を参照します。  
A(1,1)            は構造体を参照します。  
A(1,1).B(1)       は構造体を参照します。  
A(1,1).B(2).C     はエレメントを参照します。

このような参照における添え字は、添え字の順序さえ変えなければ、高位レベルの名前に付けても低位レベルの名前に付けてもかまいません。例えば、上に示した構造体の配列の場合、A.B.C(1,1,2) と A(1,1,2).B.C は、A(1,1).B(2).C と同じ意味になります。すべての添え字を最下位レベルに移したのでなければ、その参照には介在添え字 があるといえます。そこで、例えば A.B(1,1,2).C には介在添え字 があります。

構造体または共用体の配列の中で宣言されている項目は、親のもとで宣言されている次元を継承します。例えば、上に示した構造体の配列 A では、配列 B は、A で宣言されている 2 つの次元を継承するので、3 次元の構造体になります。B が固有の名前で、修飾を付ける必要がない場合、特定の B を参照するには 3 つの添え字が必要です。このうちの 2 つは特定の A を識別し、残りの 1 つはその A の中の特定の B を識別するためのものです。

## 構造体または共用体の配列のクロスセクション

構造体または共用体の配列のクロスセクションを参照することはできません。つまり、すべての添え字がアスタリスクでない限り、参照するときにアスタリスク表記を使用することはできません。

## 構造体および共用体の操作

構造体は、要素変数を参照することができるほとんどのコンテキストで参照することができます。例えば、割り当て、入出力ステートメント、その他で構造体参照を行うことができます。ただし、共用体への参照、または共用体を含む構造体への参照は、次のものに制限されます。

- パラメーターおよび引数
- 組み込み関数とサブルーチンのうちストレージ制御や構造体を使用することができるもの

## 構造体および共用体のマッピング

共用体の各メンバーは、構造体のメンバーと同じ方法でマップされます。つまり、それぞれのメンバー（共用体でない場合）は、構造体のメンバーの場合と同様にマップされます。これによって、共用体の各メンバーの最初の記憶場所は、各メンバーがそれぞれ異なる位置合わせを必要とし、さらに（それによって）メンバーの開始位置より前にそれぞれ異なる埋め込みを必要とする場合は、互いにオーバーレイすることはありません。

次の共用体について考えてみましょう。

```
dc1
1 A union,
2 B,
3 C char(1),
3 D fixed bin(31),
2 E,
3 F char(2),
3 G fixed bin(31);
```

3 バイトの埋め込みが、A および B の間に追加されます。A と E の間には 2 バイト追加されます。

共用体の各メンバーの先頭の記憶位置を同じにするには、各先頭メンバーがそれぞれ同じ位置合わせ要件を持ち、さらにメンバー（またはそのメンバーのメンバー）内での最高位の位置合わせと同じになるようにしてください。

以降の説明は、小構造体または要素変数のいずれかである構造体または共用体のメンバーに適用されます。

どの構造（大構造体または小構造体）でも、その長さ、位置合わせの要件、および 8 バイト境界からの相対的な位置は、構造体のメンバーの長さ、位置合わせの要件、および相対位置によって決まります。各レベルおよび構造体全体でこれらの要件を決定するプロセスを、構造体のマッピングといいます。

レコード単位の入出力を使用するとき、ある構造体にどのくらいの長さのレコードが必要であるかを判別します。また、位置指定モードの入出力では、構造体の位置合わせを正しく行うために必要な埋め込みまたは再配置の量を判別します。このような場合、構造体のマッピングを通して判別することができます。

構造体のマッピングのプロセスは、構造体のメンバー相互間に生じる使用されないストレージ（埋め込み）の量を最小にします。これは、以下に説明する規則に（事実上）従ってこの処理全体を完了させてから、構造体にストレージを割り振ります。

構造体のマッピングは、物理的な処理ではありません。「シフトする」や「相対位置変更する」などの用語は、単に説明の便宜で使用するもので、実際にストレージ内で移動が行われるわけではありません。構造体にストレージが割り振られるとき、マッピング処理の結果として相対位置がすでに知られています。

構造体全体のマッピングでは、項目（エレメントまたはすでに個々のマッピングが判別されている小構造体）が順に対として組み合わせられていきます。1 つの対が作られると、それは 1 つの単位となり、別の単位と組み合わせられます。構造体全体のマッピングが終わるまで、この操作が続けられます。したがって、このプロセスの規則は、次の 2 種類に分類されます。

- 対を作る順序を決めるための規則
- 1 つの対のマッピングを行うための規則

以下にこれらの規則を説明し、これらの規則の適用例を示して詳しく説明します。構造体エレメントの論理レベルとレベル番号の違いを理解する必要があります。構造体の宣言が一定のレベル番号で行われたり適切な字下げをして行われていれば（規則の説明のあとに詳しい例示があります）、論理レベルについてはすぐに明らかに

なります。いずれにしても、構造体宣言の始まりから順番に各項目に下記の規則を適用していけば、その構造体の各項目の論理レベルを判別することができます。

注: ある項目の論理レベルは、その項目を直接に含んでいる構造体の論理レベルよりも、常に 1 単位だけ低くなるという規則です。

次の例では、下の行の数字は、宣言内の各項目の論理レベルを示しています。

```
dc1 1 A, 4 B, 5 C, 5 D, 3 E, 8 F, 7 G;
 1 2 3 3 2 3 3
```

### 対を作る順序の規則

対を作る順序を決める際の手順は、次のとおりです。

1. 最も低い論理レベル (論理レベル  $n$  と呼ぶことにする) にある小構造体を見つけます。
2. 論理レベル  $n$  の小構造体が複数あるときは、宣言内で最初に書いたものを選びます。
3. この小構造体内の最初の 2 つのエレメントを対にして、1 つの単位を形成します。このとき、1 つの対をマッピングするための規則を使用します (『1 つの対のマッピングを行うための規則』を参照)。
4. この単位と、この小構造体で宣言されている次のエレメント (ある場合) とを対にして、より大きい単位を形成します。
5. この小構造体の全エレメントが 1 つの単位に組み合わされるまで、ステップ 4 を繰り返します。これで、この小構造体のマッピングは完了です。あらゆる埋め込みを含め、その位置合わせの要求と長さが決定され、構造体宣言を変更しなければ変更されません。ダブルワード境界からのオフセットも、ここで決められます。このオフセットは、含まれている構造体をマッピングするときに有効です。また、このようなマッピングの結果として変わることがあります。
6. 宣言内の論理レベル  $n$  にある次の小構造体 (ある場合) について、ステップ 3 からステップ 5 を繰り返します。
7. 論理レベル  $n$  のすべての小構造体のマッピングが終わるまで、ステップ 6 を繰り返します。これらの小構造体のおのおのは、構造体のマッピングを行う上で 1 つのエレメントと考えることができます。
8. 次の高い論理レベルで小構造体のためにペア化処理を繰り返します。すなわち  $n$  を  $(n-1)$  に等しくし、ステップ 2 から 7 まで繰り返します。
9.  $n = 1$  までステップ 8 を繰り返します。その後ステップ 3 から 5 を大構造体について繰り返します。

### 1 つの対のマッピングを行うための規則

ここでは説明の便宜上、ストレージをいくつかの連続したダブルワードと考えます。各ダブルワードは 8 バイトで、0 から 7 までの番号が付いているものとし、この番号でダブルワード境界からのオフセットを表します。さらに、構造体の始まりからの長さやオフセットを算出できるように、各バイトには、任意のバイトから始めて 0 から順に連続した番号が付いているものとします。

1. ダブルワード境界の対の最初のエレメントを開始するか、またはエレメントがすでにマップされている小構造体の場合は、示された量によってダブルワード境界からその分を相対位置変更します。

2. この 1 対の 2 番目のエレメントを、最初のエレメントの終わりの後に続く最初の有効な位置から始まるように合わせます。この位置は、2 番目のエレメントの位置合わせ要件に左右されます。(2 番目のエレメントが小構造体である場合、その位置合わせ要件はすでに決定されています。)
3. 最初のエレメントの位置合わせ要件が満たされる限り、最初のエレメントを 2 番目のエレメントの方向にシフトします。どれだけシフトしたかによって、この 1 対がダブルワード境界からどれだけ離れているか (オフセット) が決まります。

この作業が完了すると、この 2 つのエレメントの間の埋め込みは最少量になっており、後続の作業中に変わることはありません。対は固定長の単位および位置合わせ要件となります。その長さは 2 つの長さの合計と埋め込みであり、その位置合わせ要件は 2 つの位置合わせ要件の高い方 (それらが異なる場合) です。

## UNALIGNED 属性による影響

以下に示す構造体のマッピングの例は、ALIGNED と宣言されている構造体に適用される規則を示したものです。ALIGNED と宣言された構造体のマッピングは、多くの位置合わせ要件があるため、より複雑です。UNALIGNED 属性を指定すると、ハーフワード、フルワード、およびダブルワードの位置合わせ要件が 1 バイトに引き下げられ、ビット・ストリングの位置合わせ要件が 1 ビットに引き下げられます。構造体のマッピングについては同じ規則が適用されますが、引き下げられた位置合わせ要件が使われます。使われないストレージが生じるのは、構造体にビット・ストリングが含まれていて、バイト内でビットの埋め込みが行われたときだけです。

AREA データは、位置合わせなしにすることはできません。

構造体に UNALIGNED 属性があり、位置合わせできないエレメントがある場合は、UNALIGNED はそのエレメントについては無視されます。エレメントが位置合わせされ、エラー・メッセージが出されます。例えば、プログラムで次のように宣言した場合、C には ALIGNED 属性が与えられます (継承される属性 UNALIGNED は AREA と矛盾するからです)。

```
declare 1 A unaligned,
 2 B,
 2 C area(100);
```

## 構造体のマッピング例

次の例では、例のように宣言された構造体に、構造体のマッピングの規則がどのように適用されるかを示します。

```
declare 1 A aligned,
 2 B fixed bin(31),
 2 C,
 3 D float decimal(14),
 3 E,
 4 F entry,
 4 G,
 5 H character(2),
 5 I float decimal(13),
 4 J fixed binary(31,0),
 3 K character(2),
 3 L fixed binary(20,0),
 2 M,
 3 N,
```

## 構造体のマッピング例

```
4 P fixed binary(15),
4 Q character(5),
4 R float decimal(2),
3 S,
4 T float decimal(15),
4 U bit(3),
4 V char(1),
3 W fixed bin(31),
2 X picture '$9V99';
```

最も低い論理レベルにある小構造体は G です。したがって、G が最初にマッピングされます。次に、E がマッピングされ、N、S、C、M がこの順序でマッピングされます。

それぞれの小構造体ごとに、プロセスのステップを表 209 ページの図 10 に示し、そのプロセスを視覚的に捕えた図を 210 ページの図 11 に示します。最後に、213 ページの図 17 に示すように、大構造体 A がマッピングされます。

この例の終わりには、各メンバーが A の始まりからどのくらい離れているか (オフセット) を示す表の形で、A の構造体マップを示します (214 ページの図 18)。



|        | エレメント<br>の名前 | 位置合わせ<br>要件 | 長さ | ダブルワードから<br>のオフセット |    | 埋め込み<br>の長さ | 小構造体<br>からの<br>オフセット |
|--------|--------------|-------------|----|--------------------|----|-------------|----------------------|
|        |              |             |    | 開始                 | 終了 |             |                      |
| ステップ 1 | H            | バイト         | 2  | 0                  | 1  |             |                      |
| ステップ 2 | I            | ダブルワード      | 8  | 0                  | 7  |             |                      |
|        | *H           | バイト         | 2  | 6                  | 7  |             | 0                    |
|        | I            | ダブルワード      | 8  | 0                  | 7  | 0           | 2                    |
| 小構造体   | G            | ダブルワード      | 10 | 6                  | 7  |             |                      |
| ステップ 1 | F            | フルワード       | 8  | 0                  | 7  |             |                      |
| ステップ 2 | G            | ダブルワード      | 10 | 6                  | 7  |             |                      |
|        | *F           | フルワード       | 8  | 4                  | 3  | 2           | 0                    |
|        | G            | ダブルワード      | 10 | 6                  | 7  | 0           | 10                   |
| ステップ 3 | F & C        | ダブルワード      | 20 | 4                  | 7  |             |                      |
|        | J            | フルワード       | 4  | 0                  | 3  |             | 20                   |
| 小構造体   | E            | ダブルワード      | 24 | 4                  | 3  |             |                      |
| ステップ 1 | P            | ハーフワード      | 2  | 0                  | 1  |             | 0                    |
| ステップ 2 | Q            | バイト         | 5  | 2                  | 6  |             | 2                    |
|        | P & Q        | ハーフワード      | 7  | 0                  | 6  |             |                      |
|        | R            | ハーフワード      | 4  | 0                  | 3  | 1           | 8                    |
| 小構造体   | N            | フルワード       | 12 | 0                  | 3  |             |                      |
| ステップ 1 | T            | ダブルワード      | 8  | 0                  | 7  | 0           | 0                    |
| ステップ 2 | U            | バイト         | 1  | 0                  | 0  | 0           | 8                    |
|        | T & U        | ダブルワード      | 9  | 0                  | 0  |             |                      |
|        | V            | バイト         | 1  | 1                  | 1  |             | 9                    |
| 小構造体   | S            | ダブルワード      | 10 | 0                  | 1  |             |                      |
| ステップ 1 | D            | ダブルワード      | 8  | 0                  | 7  |             | 0                    |
| ステップ 2 | E            | ダブルワード      | 24 | 4                  | 3  | 4           | 12                   |
|        | D, E         | ダブルワード      | 36 | 0                  | 3  | 0           |                      |
|        | K            | バイト         | 2  | 4                  | 5  | 2           | 36                   |
| ステップ 3 | D, E, & K    | ダブルワード      | 38 | 0                  | 5  |             | 40                   |
|        | L            | フルワード       | 4  | 0                  | 3  |             |                      |
| 小構造体   | C            | ダブルワード      | 44 | 0                  | 3  |             |                      |
| ステップ 1 | N            | フルワード       | 12 | 0                  | 3  |             |                      |
| ステップ 2 | S            | ダブルワード      | 10 | 0                  | 1  |             |                      |
|        | *N           | フルワード       | 12 | 4                  | 7  |             | 0                    |
|        | S            | ダブルワード      | 10 | 0                  | 1  | 0           | 12                   |
| ステップ 3 | N & S        | ダブルワード      | 22 | 4                  | 1  | 2           |                      |
|        | W            | フルワード       | 4  | 4                  | 7  |             | 24                   |
| 小構造体   | M            | ダブルワード      | 28 | 4                  | 7  |             |                      |

\* 右方にシフトされた最初の項目

図 10. 構造体のマッピング例

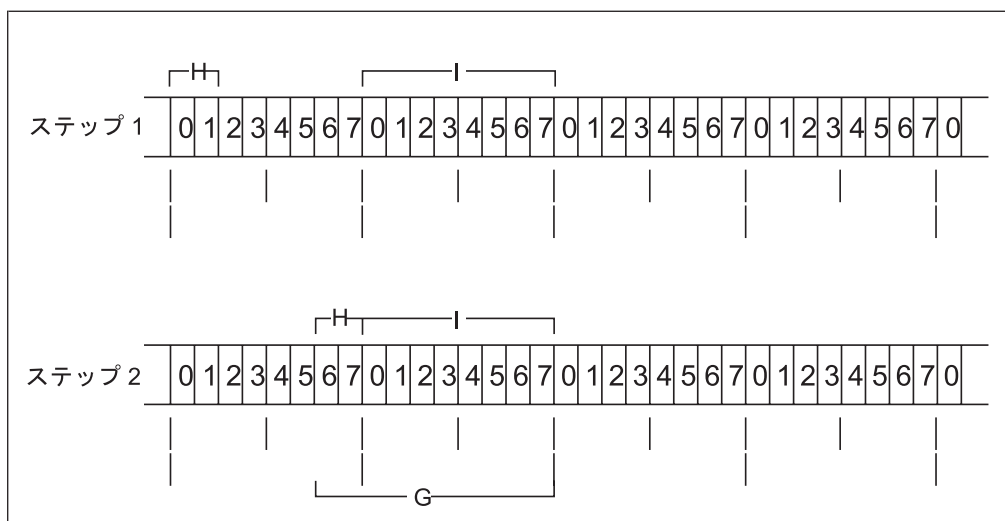


図 11. 小構造体 G のマッピング

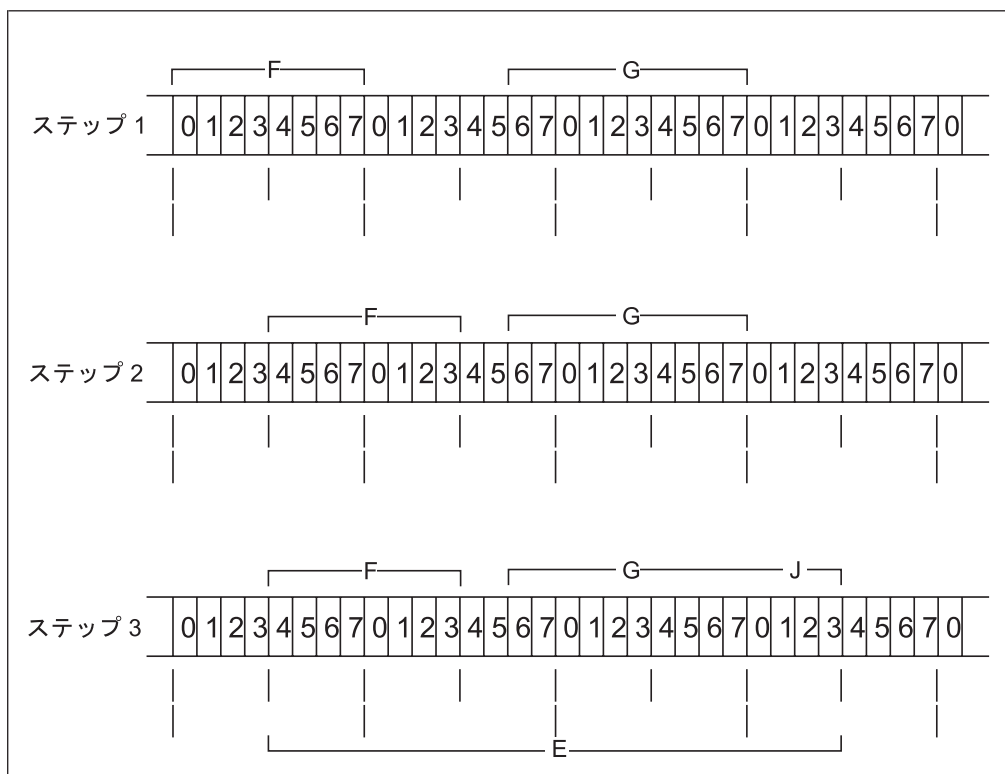


図 12. 小構造体 E のマッピング



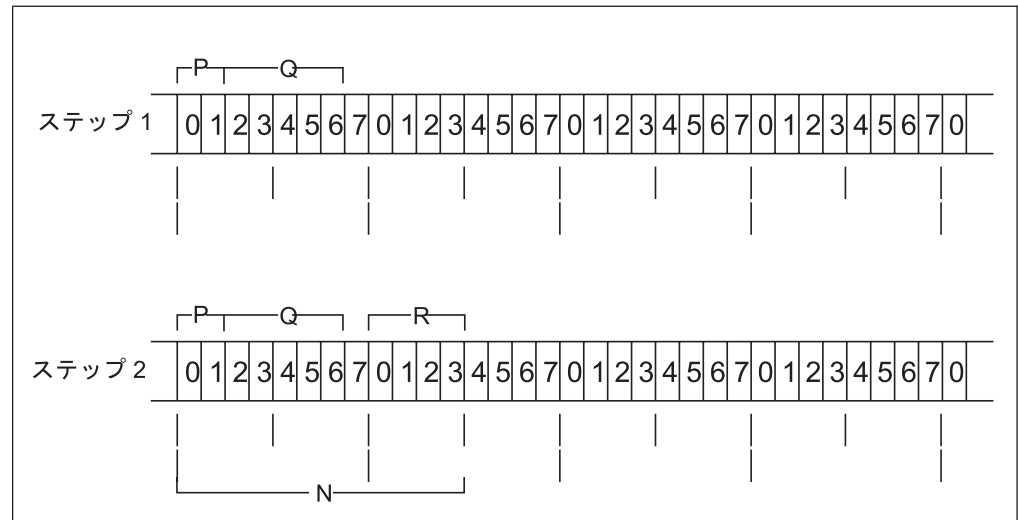


図 13. 小構造体  $N$  のマッピング

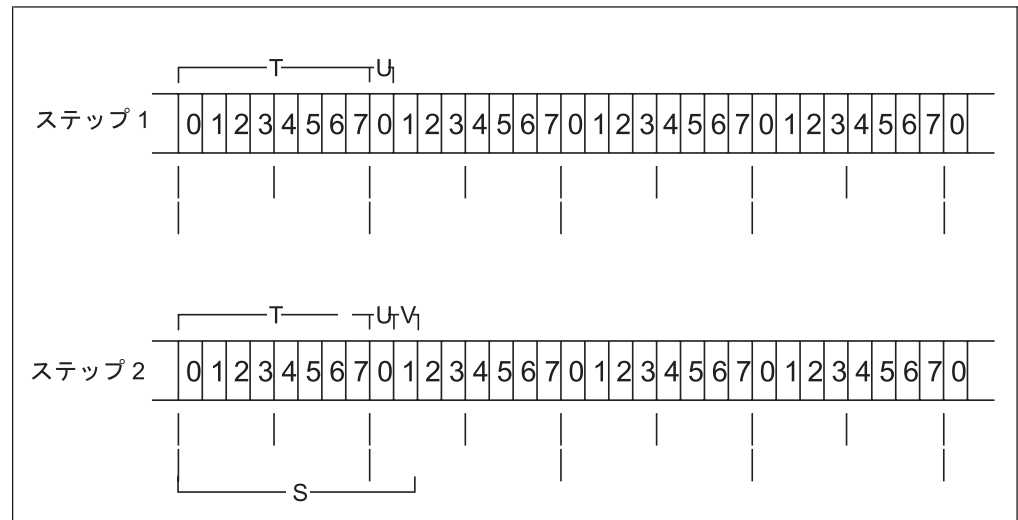


図 14. 小構造体  $S$  のマッピング

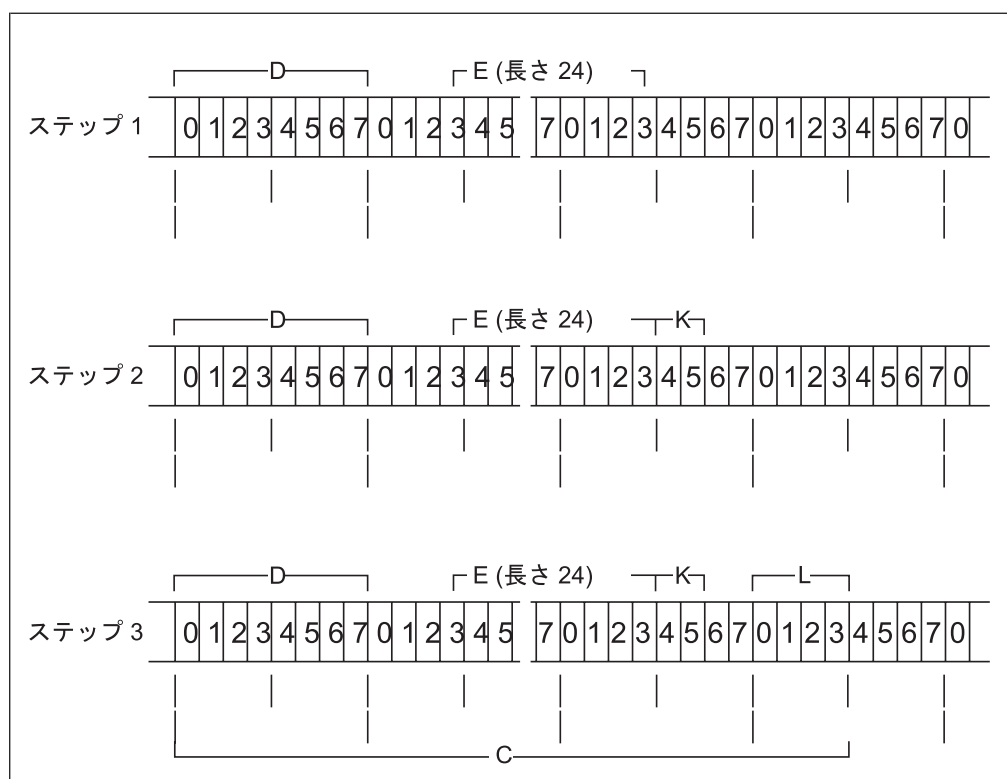


図 15. 小構造体 C のマッピング

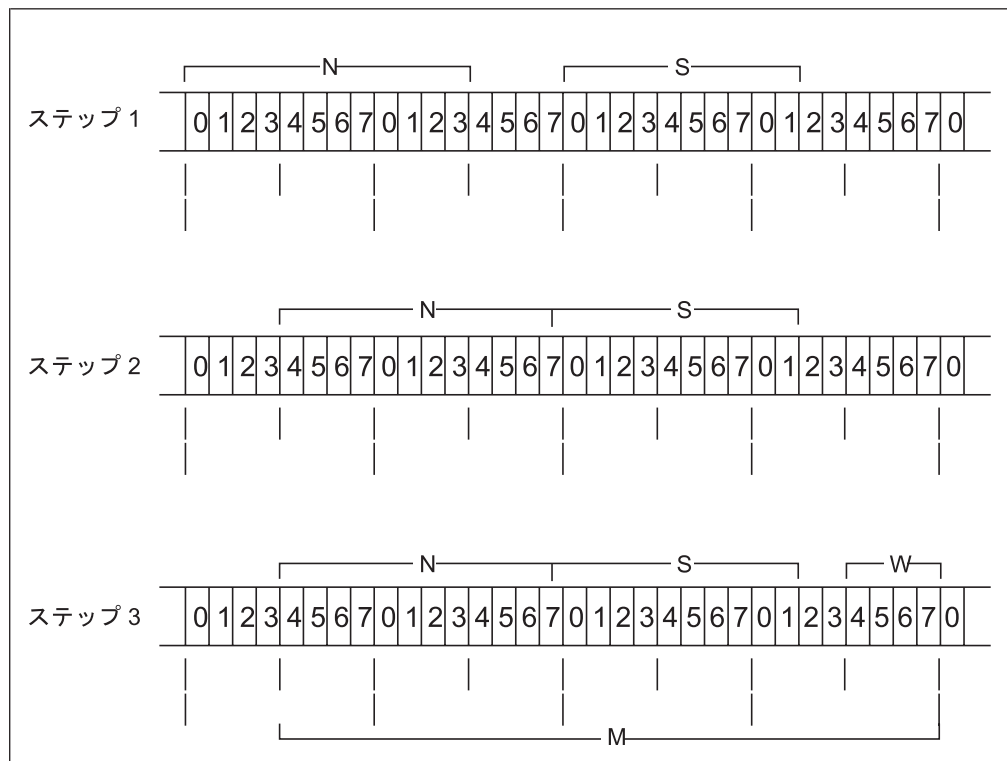


図 16. 小構造体 M のマッピング

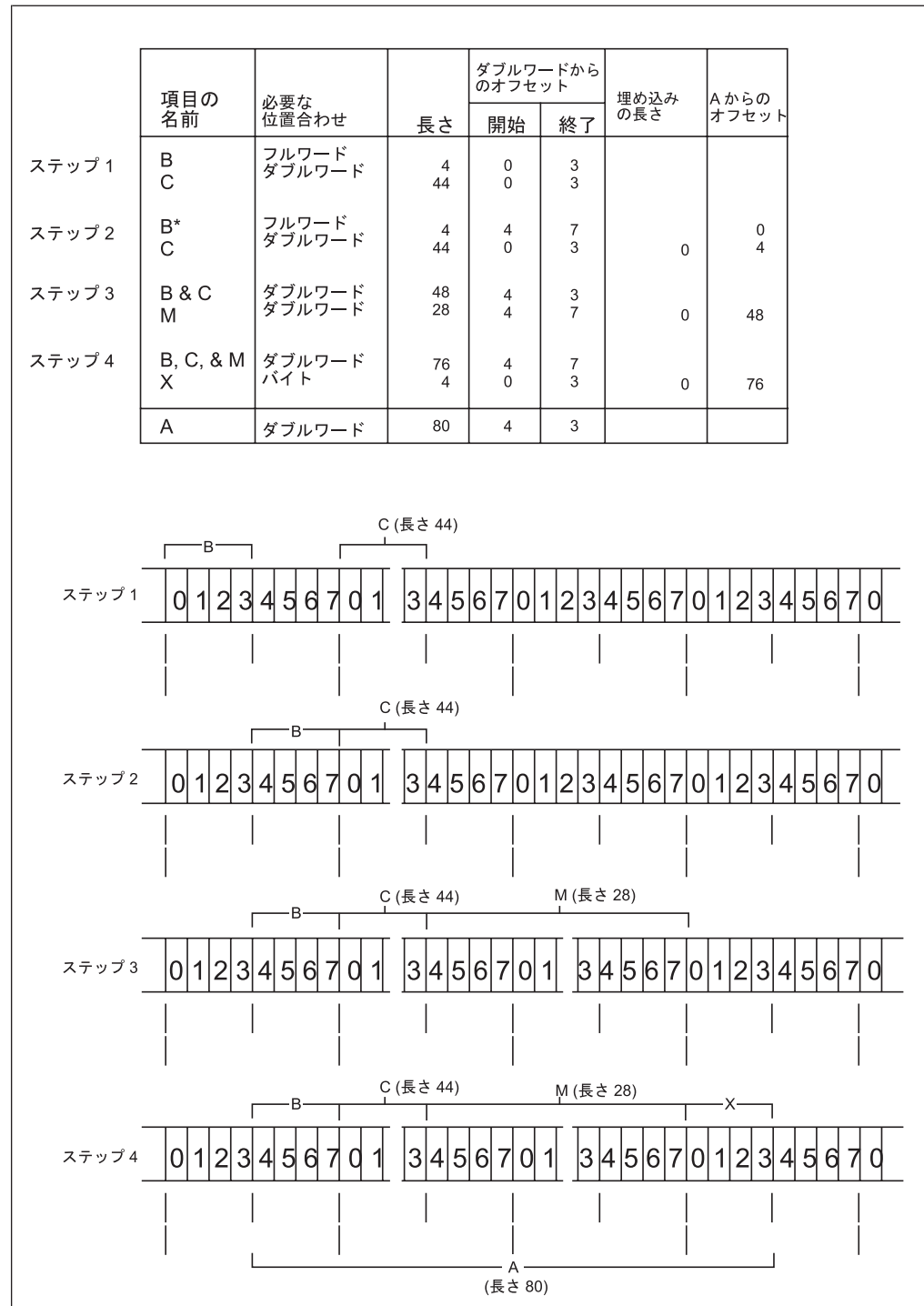


図 17. 大構造体 A のマッピング

|          |      |      |      |      |
|----------|------|------|------|------|
| A        |      |      |      | A から |
| B        |      |      |      | 0    |
| C        |      |      | C から | 4    |
| D        |      |      | 0    | 4    |
| 埋め込み (4) |      |      | 8    | 12   |
| E        |      | E から | 12   | 16   |
| F        |      | 0    | 12   | 16   |
| 埋め込み (2) |      | 8    | 20   | 24   |
| G        | G から | 10   | 22   | 26   |
| H        | 0    | 10   | 22   | 26   |
| I        | 2    | 12   | 24   | 28   |
| J        |      | 20   | 32   | 36   |
| K        |      |      | 36   | 40   |
| 埋め込み (2) |      |      | 38   | 42   |
| L        |      |      | 40   | 44   |
| M        |      |      | M から | 48   |
| N        |      | N から | 0    | 48   |
| P        |      | 0    | 0    | 48   |
| Q        |      | 2    | 2    | 50   |
| 埋め込み (1) |      | 7    | 7    | 55   |
| R        |      | 8    | 8    | 56   |
| S        |      | S から | 12   | 60   |
| T        |      | 0    | 12   | 60   |
| U        |      | 8    | 20   | 68   |
| V        |      | 9    | 21   | 69   |
| 埋め込み (2) |      |      | 22   | 70   |
| W        |      |      | 24   | 72   |
| X        |      |      |      | 76   |

図 18. 構造 A の最終的なマッピングにおけるオフセット

---

## 第 9 章 ステートメントとディレクティブ

|                                           |     |                             |     |
|-------------------------------------------|-----|-----------------------------|-----|
| ALLOCATE ステートメント . . . . .                | 215 | GO TO ステートメント . . . . .     | 238 |
| 代入ステートメントと複代入ステートメント . . . . .            | 216 | IF ステートメント . . . . .        | 239 |
| 代入ステートメント . . . . .                       | 216 | 例 . . . . .                 | 240 |
| 複代入ステートメント . . . . .                      | 216 | 短絡計算 . . . . .              | 240 |
| ターゲット変数 . . . . .                         | 218 | %INCLUDE ディレクティブ . . . . .  | 242 |
| 割り当ての実行方法 . . . . .                       | 218 | ITERATE ステートメント . . . . .   | 242 |
| 複数割り当て . . . . .                          | 220 | LEAVE ステートメント . . . . .     | 242 |
| 内部データ移動の例 . . . . .                       | 221 | 例 . . . . .                 | 243 |
| 式の値の割り当て例 . . . . .                       | 221 | %LINE ディレクティブ . . . . .     | 243 |
| BY NAME を使用した構造体の割り当て例 . . . . .          | 221 | LOCATE ステートメント . . . . .    | 244 |
| ATTACH ステートメント . . . . .                  | 221 | %NOPRINT ディレクティブ . . . . .  | 244 |
| BEGIN ステートメント . . . . .                   | 221 | %NOTE ディレクティブ . . . . .     | 244 |
| CALL ステートメント . . . . .                    | 222 | ヌル・ステートメント . . . . .        | 245 |
| CLOSE ステートメント . . . . .                   | 222 | ON ステートメント . . . . .        | 245 |
| DECLARE ステートメント . . . . .                 | 222 | OPEN ステートメント . . . . .      | 245 |
| DEFINE ALIAS ステートメント . . . . .            | 222 | OTHERWISE ステートメント . . . . . | 245 |
| DEFINE ORDINAL ステートメント . . . . .          | 222 | PACKAGE ステートメント . . . . .   | 246 |
| DEFINE STRUCTURE ステートメント . . . . .        | 222 | %PAGE ディレクティブ . . . . .     | 246 |
| DEFAULT ステートメント . . . . .                 | 222 | %POP ディレクティブ . . . . .      | 246 |
| DELAY ステートメント . . . . .                   | 222 | %PRINT ディレクティブ . . . . .    | 246 |
| DELETE ステートメント . . . . .                  | 223 | PROCEDURE ステートメント . . . . . | 246 |
| DETACH ステートメント . . . . .                  | 223 | %PROCESS ディレクティブ . . . . .  | 247 |
| DISPLAY ステートメント . . . . .                 | 223 | *PROCESS ディレクティブ . . . . .  | 247 |
| DO ステートメント . . . . .                      | 224 | %PUSH ディレクティブ . . . . .     | 247 |
| タイプ 1 . . . . .                           | 224 | PUT ステートメント . . . . .       | 248 |
| タイプ 2 およびタイプ 3 . . . . .                  | 224 | READ ステートメント . . . . .      | 248 |
| タイプ 4 . . . . .                           | 232 | RELEASE ステートメント . . . . .   | 248 |
| 基本的な繰り返しの例 . . . . .                      | 232 | RESIGNAL ステートメント . . . . .  | 248 |
| WHILE, UNTIL を指定した DO ステートメントの例 . . . . . | 233 | RETURN ステートメント . . . . .    | 248 |
| UPTHRU と DOWNTHRU を指定した DO の例 . . . . .   | 234 | REVERT ステートメント . . . . .    | 249 |
| REPEAT の例 . . . . .                       | 235 | REWRITE ステートメント . . . . .   | 249 |
| END ステートメント . . . . .                     | 236 | SELECT ステートメント . . . . .    | 249 |
| ENTRY ステートメント . . . . .                   | 237 | 例 . . . . .                 | 250 |
| EXIT ステートメント . . . . .                    | 237 | SIGNAL ステートメント . . . . .    | 251 |
| FETCH ステートメント . . . . .                   | 237 | %SKIP ディレクティブ . . . . .     | 251 |
| FLUSH ステートメント . . . . .                   | 237 | STOP ステートメント . . . . .      | 251 |
| FORMAT ステートメント . . . . .                  | 237 | WAIT ステートメント . . . . .      | 252 |
| FREE ステートメント . . . . .                    | 237 | WHEN ステートメント . . . . .      | 252 |
| GET ステートメント . . . . .                     | 238 | WRITE ステートメント . . . . .     | 252 |
|                                           |     | %XINCLUDE ステートメント . . . . . | 252 |

この章には、すべての PL/I ステートメントと % ディレクティブがリストされています。 % ステートメントとマクロ・ステートメントについては、751 ページの『第 21 章 プリプロセッサの機能』の章に説明されています。

---

### ALLOCATE ステートメント

ALLOCATE ステートメントについては、253 ページの『第 10 章 ストレージ制御』を参照してください。

## 代入ステートメントと複合代入ステートメント

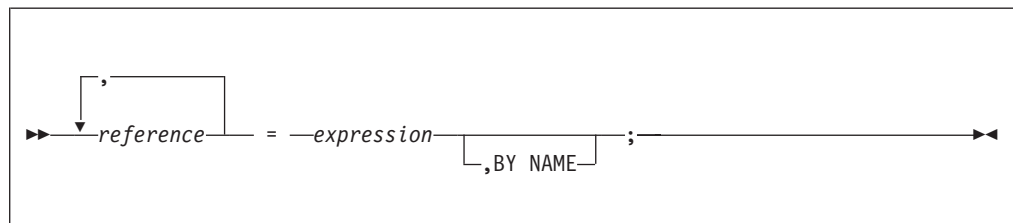
代入ステートメントは、式を計算し、その値を 1 つまたは複数のターゲット変数に割り当てます。

データを内部で移動させたり、計算を指定したりするときにこれらのステートメントを使用します。(データを内部で移動させるときは、**STRING** オプションが指定された **GET** または **PUT** ステートメントを使用することもできます。さらに、**PUT** ステートメントでは実行する必要のある計算を指定することもできます。『第 13 章 ストリーム指向データ伝送』を参照してください。)

ターゲット変数または疑似変数の属性は、ソース (変数、定数、または式の計算結果) の属性と異なっている可能性があるので、代入ステートメントで変換が必要になる場合があります (『第 5 章 データ変換』を参照)。

### 代入ステートメント

代入ステートメントには、以下の構文を使用します。



#### reference

割り当てを指定するターゲットを指定します。

#### expression

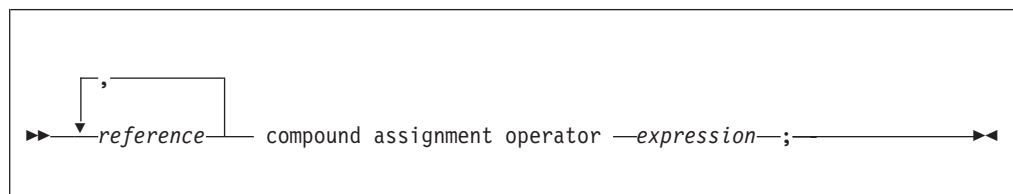
計算され、変換される可能性がある式を指定します。

#### BY NAME

構造体割り当ての場合は、**BY NAME** オプションが、219 ページで概説されているステップに従う割り当てを指定します。

### 複合代入ステートメント

複合代入ステートメントには、以下の構文を使用します。



#### reference

割り当てを指定するターゲットを指定します。

**compound assignment operator**

割り当てが行われる前に、参照および計算された式に適用する演算子を指定します。表 28 に、複合割り当てで使用する複合代入演算子をリストしています。

**expression**

計算され、変換される可能性がある式を指定します。

区域の割り当てについては、271 ページの『区域データとその属性』の項で説明しています。

表 28. 複合代入演算子

| 複合代入演算子             | 意味               |
|---------------------|------------------|
| <code>+=</code>     | 式の計算、加算および代入     |
| <code>-=</code>     | 式の計算、減算および代入     |
| <code>*=</code>     | 式の計算、乗算および代入     |
| <code>/=</code>     | 式の計算、除算および代入     |
| <code> =</code>     | 式の計算、OR および代入    |
| <code>&amp;=</code> | 式の計算、AND および代入   |
| <code>  =</code>    | 式の計算、連結と代入       |
| <code>**=</code>    | 式の計算、指数化および代入    |
| <code>⊃=</code>     | 式の計算、排他 OR および代入 |

最初に演算子がターゲットおよびソースに適用され、次にその結果がターゲットに割り当てられます。

以下に例を示します。

|                       |        |                          |
|-----------------------|--------|--------------------------|
| <code>X += 1</code>   | は次と等しい | <code>X = X+(1)</code>   |
| <code>X *= Y+Z</code> | は次と等しい | <code>X = X*(Y+Z)</code> |

ただし、

|                       |          |                        |
|-----------------------|----------|------------------------|
| <code>X *= Y+Z</code> | は次と等しくない | <code>X = X*Y+Z</code> |
|-----------------------|----------|------------------------|

複合割り当てでは、ターゲット変数に指定された任意の添え字またはロケータ式が、一度だけ計算されます。

`f` が関数であり、`X` が配列の場合は、

|                          |          |                                |
|--------------------------|----------|--------------------------------|
| <code>X(f()) += 1</code> | は次と等しくない | <code>X(f()) = X(f())+1</code> |
|--------------------------|----------|--------------------------------|

関数 `f` は一度だけ呼び出されます。

以降では、次のトピックについて説明しています。

- ターゲット変数の要件
- エレメント割り当ておよび集合割り当ての実行方法
- `BY NAME` 割り当ての実行方法

- 複数割り当ての実行方法

割り当ての例は、221 ページの『内部データ移動の例』から記載されています。

## ターゲット変数

ターゲット変数にすることができるのは、要素変数、配列変数、または構造体変数、あるいは疑似変数です。

### 配列ターゲット

配列割り当てでは、各ターゲット変数は、スカラーまたは構造体の配列でなければなりません。ソースは、そのターゲットと同じ次元数であり、またすべての次元についても同じ境界を持つ、スカラーまたは式でなければなりません。

### 共用体のターゲット

共用体の割り当てはできません。

### 構造体ターゲット

BY NAME を使用する構造体割り当てでは、各ターゲット変数は構造体である必要があります。右辺は、構造体参照でなければなりません。

BY NAME を使用しない構造体割り当てでは、各ターゲット変数は構造体である必要があります。右辺は、次に示すようにターゲットの構造体と同じ構造体を持ったスカラー式または構造式でなければなりません。

- 構造体は、小構造化がすべて同じで、中に含まれるエレメントと配列の数が同じでなければなりません。
- 構造体内 (および小構造化があれば、その内部で) のエレメントや配列の位置指定は、同じでなければなりません。
- 対応する位置にある配列は、同じ境界を持たなければなりません。

BY NAME を使用しない構造体割り当てでは、ターゲット構造体に非計算データが含まれている場合でも、ヌル・ビット・ストリング ( "b" ) をソースにすることができます。この場合、割り当ては次のことを仮定して実行されます。

1. ターゲットはすべて '00'x で埋められている
2. 数値ターゲット・フィールドはすべて 0 に設定されている
3. 非可変文字、ワイド文字、およびグラフィックのフィールドは、すべてブランクで埋められている

## 割り当ての実行方法

### エレメントの割り当て

エレメントの割り当ては、次のように行われます。

1. 最初に評価されるのは、ターゲット変数の添え字、POSITION 属性式、およびローケータ修飾、ならびに SUBSTR 疑似変数参照の 2 番目と 3 番目の引数です。
2. 次に右辺の式が評価されます。



3. それぞれのターゲット変数ごとに (左から右の順で)、式の値がデータ変換規則に従ってターゲット変数の特性に変換されます。そのあと、変換後の値がターゲット変数に割り当てられます。

## 集合の割り当て

集合の割り当て (配列割り当ておよび構造体割り当て) は、次のように一連のエレメントの割り当てに展開されます。

1. 元のステートメントのラベル接頭部が、生成された別のステートメントの先頭にあるヌル・ステートメントに付けられます。
2. 配列割り当てや構造体割り当てでは、複数あるときは、繰り返し行われます。
3. 先行の配列割り当てまたは構造体割り当てによって、なんらかの代入ステートメントが生成されることがあります。集合割り当てにおける最初のターゲット変数を、マスター変数といいます (これは疑似変数の最初の引数であることもあります)。マスター変数が配列の場合は、配列式が実行されます。それ以外の場合は、構造式が実行されます。
4. 集合割り当てが所定の 1 組の条件を満たしているときは、集合割り当ては、一連のエレメント割り当てに展開されずに、全体として行われます。1 組の条件とは、配列が介在配列でないか、または複数の構造体が隣接しており、しかも同一フォーマットになっているかということです。

配列割り当てでは、すべての配列オペランドの次元数および境界が同じでなければなりません。配列の割り当ては、次のようにループに展開されます。

```
do J1 = lbound(Master-variable,1) to
 hbound(Master-variable,1);
do J2 = lbound(Master-variable,2) to
 hbound(Master-variable,2);
:
do Jn = lbound(Master-variable,N) to
 hbound(Master-variable,N);

generated assignment statement

end;
```

この展開において、 $n$  は、この割り当てに関与するマスター変数の次元数です。生成された代入ステートメントでは、すべての配列オペランドに、ダミー変数  $j_1$  から  $j_n$  を使用して (左から右へ) 完全に添え字が付けられます。添え字を付けずに配列オペランドを書いた場合、その配列オペランドは、 $j_1$  から  $j_n$  の添え字だけを持つことになります。クロスセクション表記を使用する場合、アスタリスクは、 $j_1$  から  $j_n$  で置き換えられます。元の代入ステートメントにこの条件接頭語が付いている場合は、生成された代入ステートメントにこの条件接頭語が付けられます。

生成された代入ステートメントが構造体の割り当てであれば、そのステートメントは次のように展開されます。

### BY NAME オプションの指定がない構造体割り当ての場合、

- どのオペランドも、配列であってはなりませんが、配列を含む構造体にはすることはできます。
- 構造体に直接含まれる項目数は、すべての構造体オペランドについて同数  $k$  でなければなりません。

## 集合の割り当て

- 代入ステートメントは、生成された  $k$  個の代入ステートメントで置き換えられます。
  - $i$  番目の生成された代入ステートメントが、それぞれの構造体オペランドを  $i$  番目に含まれる項目で置き換えることによって、もとの代入ステートメントから派生します。そのように生成された代入ステートメントは、さらに展開を要求することができます。
  - 元のステートメントの条件接頭語が、生成されたすべての代入ステートメントに付けられます。

**BY NAME オプションの指定がある構造体割り当ての場合**、構造体の割り当ては下記のステップに従って展開されます。これらのステップでは、さらに配列の割り当てや構造体の割り当てを生成することができます。どのオペランドも配列であってはなりません。

1. マスター変数に直接含まれている最初の項目が検討の対象になります。
2. それぞれの構造体オペランドとターゲット変数に同じ名前の項目が直接含まれている場合は、以下に述べるようにして代入ステートメントが生成されます。
  - a. それぞれの構造体オペランドとターゲット変数を、それぞれに直接含まれている同名の項目で置き換えるという方法で、代入ステートメントが派生します。いずれかの構造体に同名の項目が含まれていない場合は、ステートメントは生成されません。
  - b. 生成された代入ステートメントが構造体の割り当てまたは構造体の配列の割り当てである場合は、BY NAME が付けられます。
  - c. 元の代入ステートメントの条件接頭語が、生成されたすべての代入ステートメントに付けられます。
  - d. ターゲット構造体には、共用体は含まれません。
3. マスター変数に直接含まれている各項目ごとに、ステップ 2 が繰り返されます。マスター変数に含まれている項目の順に、代入ステートメントが生成されます。

## 複数割り当て

割り当ては、1 つの代入ステートメントで複数の変数に対して行うことができます。例えば、次のようになります。

```
A,X = B + C;
```

$B + C$  の値が  $A$  と  $X$  の両方に割り当てられます。普通は、このステートメントは、下記のステートメントが実行された場合と同じ結果になります。

```
Temporary = B + C;
A = Temporary;
X = Temporary;
```

代入ステートメント内のソースは、スカラーまたはスカラー配列でなくてはなりません。さらに、ソースが配列の場合は、すべてのターゲットも配列でなくてはなりません。ソースが定数である場合、各ターゲットに対して左から右に割り当てられます。ソースが定数ではない場合、一時変数に割り当てられ、このあと各ターゲットに対して左から右に割り当てられます。

ターゲットは、単一の割り当てで可能な参照であればどの参照でもかまいません。

BY NAME は、複数の割り当てでは使用できません。

非推奨ですが、複数の代入で、複合代入演算子を使用できます。ただし、結果は必ずしも単純に期待されるものにならないことがあります。例えば、以下のステートメントは一般的に同じ結果を生成しません。

```
C, C += C;
C, C = C + C;
```

## 内部データ移動の例

次の例の代入ステートメントを使用すれば、内部データを移動することができます。割り当ての記号の右側にある式の値は、左側の変数に割り当てられます。

```
NTOT=TOT;
```

## 式の値の割り当て例

次の例には、値が代入記号の左側にある変数に割り当てられる式が含まれます。

```
Av=(Av*Num+Tav*Tnum)/(Num+Tnum);
```

## BY NAME を使用した構造体の割り当て例

次の例は、BY NAME オプションを使用した構造体割り当てを示します。

|           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| declare   | declare   | declare   |
| 1 One,    | 1 Two,    | 1 Three,  |
| 2 Part1,  | 2 Part1,  | 2 Part1,  |
| 3 Red,    | 3 Blue,   | 3 Red,    |
| 3 Orange, | 3 Green,  | 3 Blue,   |
| 2 Part2,  | 3 Red,    | 3 Brown,  |
| 3 Yellow, | 2 Part2,  | 2 Part2,  |
| 3 Blue,   | 3 Brown,  | 3 Yellow, |
| 3 Green;  | 3 Yellow; | 3 Green;  |

- 1** One = Two, by name;
- 2** One.Part1 = Three.Part1, by name;

- 1** 最初の代入ステートメントは、次のステートメントと同じです。

```
One.Part1.Red = Two.Part1.Red;
One.Part2.Yellow = Two.Part2.Yellow;
```

- 2** 2 番目の代入ステートメントは、次のステートメントと同じです。

```
One.Part1.Red = Three.Part1.Red;
```

---

## ATTACH ステートメント

ATTACH ステートメントについては、411 ページの『第 18 章 マルチスレッド化機能』を参照してください。

---

## BEGIN ステートメント

BEGIN ステートメントについては、101 ページの『第 6 章 プログラムの編成』を参照してください。

## CALL ステートメント

CALL ステートメントについては、144 ページの『CALL ステートメント』を参照してください。

---

## CLOSE ステートメント

CLOSE ステートメントについては、295 ページの『第 11 章 入出力』を参照してください。

---

## DECLARE ステートメント

DECLARE ステートメントについては、171 ページの『DECLARE ステートメント』を参照してください。

---

## DEFINE ALIAS ステートメント

DEFINE ALIAS ステートメントについては、157 ページの『第 7 章 タイプ定義』を参照してください。

---

## DEFINE ORDINAL ステートメント

DEFINE ORDINAL ステートメントについては、157 ページの『第 7 章 タイプ定義』を参照してください。

---

## DEFINE STRUCTURE ステートメント

DEFINE STRUCTURE ステートメントについては、157 ページの『第 7 章 タイプ定義』を参照してください。

---

## DEFAULT ステートメント

DEFAULT ステートメントについては、188 ページの『DEFAULT ステートメント』を参照してください。

---

## DELAY ステートメント

DELAY ステートメントは、指定された時間の間、アプリケーション・プログラム内の次のステートメントの実行を一時中断させます。

►►—DELAY—(*expression*)—;—◄◄

### **expression**

式を指定します。この式は、計算されて FIXED BINARY(31,0) に変換されます。指定されたミリ秒の間、実行が一時中断します。

最大待機時間は、23 時間 59 分です。

以下に例を示します。

- `delay (20);` 実行を 20 ミリ秒間中断します。
- `delay (10**3);` 実行を 1 秒間中断します。
- `delay (10*10**3);` 実行を 10 秒間中断します。

プログラムが CICS 下で実行されている場合、DELAY ステートメントは EXEC CICS DELAY コマンドを使用して実装されます。EXEC CICS DELAY コマンドの時間間隔は現在、少なくとも 1 秒あります。PL/I DELAY ステートメントで指定されたミリ秒数は、値が 1 秒未満の場合 (1 に設定されます) を除き、最も近い秒に切り捨てられます。

以下に例を示します。

- `delay(30);` CICS 下で 1 秒間実行を中断します。
- `delay(2100);` CICS 下で 2 秒間実行を中断します。

---

## DELETE ステートメント

DELETE ステートメントについては、311 ページの『第 12 章 レコード単位データ伝送』を参照してください。

---

## DETACH ステートメント

DETACH ステートメントについては、411 ページの『第 18 章 マルチスレッド化機能』を参照してください。

---

## DISPLAY ステートメント

DISPLAY ステートメントは、ユーザーの表示画面にメッセージを表示し、任意指定により、そのメッセージに対する応答を入力するようユーザーに要求することもできます。

```

▶▶—DISPLAY—(expression)—┐
 └─REPLY—(char-ref)—┘;————▶▶

```

### expression

必要に応じて、文字ストリングに変換されます。この文字ストリングが表示されます。このストリングに混合文字データが含まれていてもかまいません。式が GRAPHIC 属性を持つ場合、この式は変換されません。

### REPLY (char-ref)

ユーザーが入力した応答を受け取る文字参照を指定します。応答には、CHARACTER、GRAPHIC、または混合データのいずれを含んでもかまいません。

REPLY オプションは、ユーザーが応答を入力するまでプログラムの実行を一時中断させることになります。

## DISPLAY

REPLY で GRAPHIC データが入力された場合、そのデータは、混合データを含む文字データとして受け取られます。このような文字データは、GRAPHIC BUILTIN を使用すれば GRAPHIC データに変換することができます。

例

```
display ('Communication link established.');
```

このステートメントは、次のメッセージを表示します。

```
Communication link established.
```

---

## DO ステートメント

DO ステートメントとそれに対応する END ステートメントは、DO グループと呼ばれるステートメント・グループを形成します。

注: 条件接頭語は、DO ステートメントでは使用することはできません。

### タイプ 1

タイプ 1 の DO グループは、グループ内のステートメントが実行されることを示します。グループ内のステートメントを反復して実行することはできません。

タイプ 1

▶▶ DO ; ◀◀

**expn**

*expression n* の省略形です。

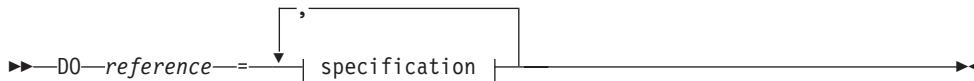
### タイプ 2 およびタイプ 3

タイプ 2 および 3 では、DO グループ内でステートメントを反復して実行することができます。

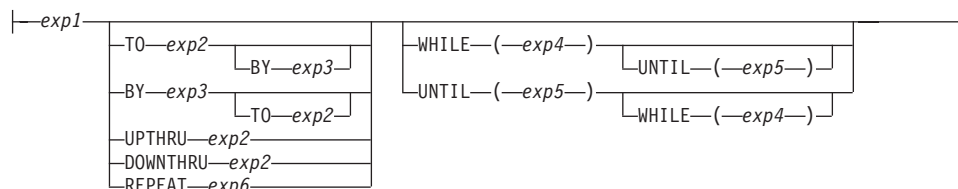
タイプ 2

▶▶ DO WHILE (—exp4—) UNTIL (—exp5—) ; ◀◀  
UNTIL (—exp5—) WHILE (—exp4—)

## タイプ 3



## 仕様:



## expn

*expression n* の省略形です。

## WHILE (exp4)

DO グループの実行を反復すると、反復前に *exp4* が計算され、必要に応じてビット・ストリングに変換されます。結果のビット・ストリングのいずれかのビットが 1 であれば、その DO グループが実行されます。すべてのビットが 0 であるか、ストリングがヌルであれば、タイプ 2 の DO グループの実行が終了し、タイプ 3 の場合はこの WHILE オプションを含む指定に対応する実行だけが終了し、次の指定がある場合には、それが開始されます。

## UNTIL (exp5)

DO グループの実行を反復すると、反復後に *exp5* が計算され、必要に応じてビット・ストリングに変換されます。結果のビット・ストリングのすべてのビットが 0 であるか、ストリングがヌルであれば、その DO グループの次の繰り返しが実行されます。いずれかのビットが 1 であれば、タイプ 2 の場合は DO グループの実行が終了し、タイプ 3 の場合はこの UNTIL オプションを含む指定に対応する実行だけが終了し、次の指定がある場合には、それが開始されます。

## reference

参照として使用できる疑似変数は、SUBSTR、REAL、IMAG および UNSPEC のみです。どのデータ・タイプでもかまいません。

参照の世代 *g* は、DO グループの始まりで、初期値を表す式 (*exp1*) が計算される直前に、1 回だけ確立されます。その DO グループ内で参照の世代が *h* に変更されても、DO グループの実行は、世代 *g* から派生した参照を使用して続行します。ただし、DO グループ内でその参照が参照されると、世代 *h* が参照されます。DO グループ内で世代 *g* を解放しようとする、エラーになります。

最後の繰り返しの完了後に参照を参照した場合、その参照の値は指定でセットした境界の範囲外の値になっています。次の条件がアプリケーションに設定された境界に適合する場合は、前述の内容が真になります。

- BY 値が正数で、参照の値が、指定でセットした境界の TO 値よりも大きい。



- BY 値が負数で、参照の値が、指定でセットした境界の TO 値よりも小さい。

参照がプログラム制御データ変数であり、ロケータでなければ、BY オプションと TO オプションは、指定では使用できません。

参照がプログラム制御変数であり、ロケータまたは序数でなければ、UPTHRU オプションと DOWNTHRU オプションは、指定では使用できません。

#### exp1

参照の初期値を指定します。

TO、BY、および REPEAT の指定が省略された場合には、DO グループは 1 回だけ実行され、参照は値として exp1 を持ちます。WHILE(exp4) を指定した場合は、exp4 が真でなければ 1 回も実行されません。

#### TO exp2

exp2 は、その指定に制御権が移動したときに計算され、保管されます。この保管された値は、参照の終了値を示します。DO グループの始めにテストされた参照の値が範囲内になれば、ただちに、指定に関して DO グループ内のステートメントの実行が終了します。その後、次の指定があれば、その実行が開始されます。

TO exp2 の指定が省略され、BY exp3 が指定されていると、WHILE オプションまたは UNTIL オプションによって実行が終了するまで、あるいはほかのステートメントが DO グループの外へ制御権を移動するまで、実行が繰り返されます。

#### BY exp3

exp3 は、その指定に制御権が移動したときに計算され、保管されます。この保管された値は、DO グループの実行が反復されるたびに参照に加算される増分を示しています。

BY exp3 の指定が省略され、TO exp2 が指定されていると、exp3 はデフォルトの 1 になります。

BY 0 を指定すると、WHILE または UNTIL オプションによって実行が停止される場合と DO グループの外へ制御が移される場合とを除いて、DO グループの実行は無限に繰り返されます。

#### UPTHRU exp2

exp2 は、その指定に制御権が移動したときに計算され、保管されます。この保管された値は、参照の終了値を示します。DO グループの終わりでテストされた参照の値が所定の範囲内になれば、ただちに、その指定に関して DO グループ内のステートメントの実行が終了します。その後、次の指定があれば、その実行が開始されます。

UPTHRU が指定されていると、ループ内のステートメントが実行されたあと、想定し得る次の値で更新される前に、参照は exp2 と比較されます。ループは、少なくとも一度実行されます。

UPTHRU は、主に序数の処理にループが使用されているときに使用されますが、参照が算術変数やロケータ制御変数である場合に、その参照でも使用されます。参照が序数を示さない場合には、DO グループの実行が行われるたびに参照に加えられる増分は、+1 と見なされます。



**DOWNTHRU exp2**

exp2 は、その指定に制御権が移動したときに計算され、保管されます。この保管された値は、参照の終了値を示します。DO グループの終わりでテストされた参照の値が所定の範囲内になれば、ただちに、その指定に関して DO グループ内のステートメントの実行が終了します。その後、次の指定があれば、その実行が開始されます。

DOWNTHRU が指定されていると、ループ内のステートメントが実行されたあと、参照が想定し得る次の値で更新される前に、参照は exp2 と比較されます。ループは、少なくとも一度実行されます。

DOWNTHRU は、主に序数の処理にループが使用されているときに使用されますが、参照が算術変数やロケータ制御変数である場合に、その参照でも使用されます。参照が序数を示さない場合には、DO グループの実行が行われるたびに参照に加えられる増分は、-1 と見なされます。

**REPEAT exp6**

DO グループの実行が反復されるたびに、exp6 が計算され、参照に割り当てられます。WHILE または UNTIL オプションによって実行が停止されるまで、あるいはほかのステートメントが DO グループの外へ制御権を移動するまで、実行が繰り返されます。

タイプ 3 の DO グループでは、exp1、exp2、および exp3 が計算される順序に依存してはいけません。したがって、これらの式によって、他の式で使用される値を設定する関数で呼び出さないようにするのが適切と言えます。

DO グループの外から DO グループの中へ制御権を移動することができるのは、その DO グループがタイプ 1 の DO ステートメントで区切られている場合だけです。したがって、タイプ 2 とタイプ 3 の DO グループには、ENTRY ステートメントを含むことはできません。DO グループ内から呼び出したプロシージャーマたは ON ユニットから、その DO グループへ制御を戻すことはできます。

以降の節では、タイプ 2 およびタイプ 3 の DO グループの使用について説明します。DO グループの例は、232 ページの『基本的な繰り返しの例』ページから記載されています。

**タイプ 2 WHILE と UNTIL の使用方法**

タイプ 2 の DO の指定で、WHILE オプションと UNTIL オプションの両方を使用すると、その DO ステートメントによって、次に示すように実行が反復されます。

```

Label: do while (Exp4)
until (Exp5)
statement-1
:
statement-n
end;
Next: statement /* Statement following the do-group */

```

上記のものは、次のように展開されたものと同等です。

```

Label: if (Exp4) then;
else
go to Next;
statement-1
:
statement-n

```

```

Label2: if (Exp5) then;
else
go to Label;
Next: statement /* Statement following the do-group */

```

WHILE オプションが省略されると、ラベル Label の IF ステートメントは、ヌル・ステートメントで置き換えられます。WHILE オプションが省略されると、ステートメント 1 からステートメント n までは少なくとも一度は実行されます。

UNTIL オプションを省略したときは、展開フォーマット内のラベル Label2 の IF ステートメントが GO TO Label ステートメントで置き換えられます。

### タイプ 3 を 1 つの指定で使用する場合

1 つの指定で DO グループを実行した場合の結果を、以下に要約して示します。

1. 参照を指定し、BY、TO、UPTHRU、または DOWNTHRU のいずれかのオプションも指定した場合は、exp1 の参照への割り当てに先立って、exp1、exp2、および exp3 が計算されます。次に、初期値が参照に割り当てられます。例えば、次のようになります。

```
do Reference = Exp1 to Exp2 by Exp3;
```

疑似変数ではない変数の場合、前述の例の DO グループ定義によって取られる処置は、下記の展開と同等です。

```

E1=Exp1;
E2=Exp2;
E3=Exp3;
V=E1;

```

変数 V は、参照と同じ属性を持つ、コンパイラ生成の基底付き変数です。E1、E2、および E3 はコンパイラ生成の変数です。

2. TO オプションがあると、制御変数の値が、前に計算された TO オプション内の式 E2 と比較されます。
3. WHILE オプションを指定した場合は、WHILE オプション内の式が計算されます。その結果が、偽 であれば、DO グループから制御が離れます。
4. DO グループ内のステートメントが実行されます。
5. UNTIL オプションを指定した場合は、UNTIL オプション内の式が計算されます。その結果が、真 であれば、DO グループから制御が離れます。
6. UPTHRU オプションが指定されていると、制御変数の値が、前に計算された UPTHRU オプション内の式と比較されます。
7. DOWNTHRU オプションが指定されていると、制御変数の値が、前に計算された DOWNTHRU オプション内の式と比較されます。
8. 参照がある場合は、以下のようになります。
  - a. TO オプションまたは BY オプションが指定されていると、前に計算された exp3 (E3) が参照に加算されます。
  - b. REPEAT オプションが指定されていると、exp6 が計算されて、参照に割り当てられます。
  - c. TO、BY、REPEAT のどのオプションも指定していないときは、DO グループから制御が離れます。

- d. UPTHRU オプションが指定されており、参照が序数を表していれば、現行値の後続値が参照に割り当てられます。参照が序数を表していないと、1 が参照に加算されます。
  - e. DOWNTHRU オプションが指定され、参照が序数を表していれば、現行値の先行値が参照に割り当てられます。参照が序数を表していなければ、そこから 1 が減算されます。
  - f. TO、BY、UPTHRU、DOWNTHRU、および REPEAT のオプションのうち何も指定されていないければ、DO グループから制御が離れます。
9. 2 (228 ページ) へ進みます。

### タイプ 3 を 2 つまたはそれ以上の指定で使用する場合

DO ステートメント内に複数の指定がある場合、2 番目の指定も最初の指定とあらゆる点で同じように展開されます。ただし、DO グループ内のステートメントがプログラム内で実際に重複することはありません。後続の指定が実行されるのは、先行の指定が終了したあとです。

最後の指定の実行が終了すると、制御はその DO グループのあとのステートメントに移ります。

### タイプ 3 を TO、BY、REPEAT を指定して使用する場合

TO オプションや BY オプションを使用すれば、参照を一定の増分 (正または負) で変化させることができます。一方、TO オプションや BY オプションの代わりに REPEAT オプションを使用すれば、制御変数を非線形に変化させることができます。REPEAT オプションは、算術タイプ以外の制御変数 (ポインターなど) にも使用することができます。

タイプ 3 の DO 指定で TO オプションと BY オプションの両方を使用すると、その DO グループの処置は次のように定義されます。

```

Label: do Variable=
Exp1
to Exp2
by Exp3
while (Exp4)
until(Exp5);
statement-1
:
statement-m
Label1: end;
Next: statement

```

前述の DO グループの定義によって取られる処置は、次のように展開されたものとまったく同等です。この展開において、V はコンパイラ生成変数で、Variable と同じ属性を持ちます。また、E1、E2、および E3 も、コンパイラ生成変数です。

```

Label: E1=Exp1;
E2=Exp2;
E3=Exp3;
V=E1;
Label2: if (E3>=0)&(V>E2)|(E3<0)&(V<E2) then
go to Next;
if (Exp4) then;
else
go to Next;
statement-1

```

```

:
statement-m
 Label1: if (Exp5) then
go to Next;
 Label3: V=V+E3;
go to Label2;
 Next: statement

```

この指定で REPEAT オプションを使用したときは、DO グループの処置は次のように定義されます。

```

 Label: do Variable=
Exp1
repeat Exp6
while (Exp4)
until(Exp5);
statement-1
:
statement-m
 Label1: end;
 Next: statement

```

前述の DO グループの定義によって取られる処置は、次のように展開されたものとまったく同等です。

```

 Label: E1=Exp1;
V=E1;
 Label2: ;
if (Exp4) then;
else
 go to Next;
statement-1
:
statement-m
 Label1: if (Exp5) then
 go to Next;
 Label3: V=Exp6;
 go to Label2;
 Next: statement

```

例に示した展開では、さらに次のような規則があります。

1. 前述の展開は、1 つの指定の結果だけを示しています。DO ステートメント内に複数の指定がある場合は、展開フォーマット内のラベル NEXT が付いているステートメントが、次の指定の最初のステートメントになります。2 番目の展開も、最初の展開とあらゆる点で同じように展開されます。しかし、プログラムでは、statement-1 から m は実際には重複しません。
2. WHILE 文節を省略したときは、それぞれの展開フォーマット内の statement-1 のすぐ前にある IF ステートメントも省略されます。
3. UNTIL 文節を省略したときは、それぞれの展開フォーマット内の statement-m のすぐあとにある IF ステートメントも省略されます。

### タイプ 3 を UPTHRU を指定して使用する場合

タイプ 3 の DO 指定に UPTHRU オプションが含まれる場合、DO グループの処置は、次のようにして定義されます。

```

 Label: do Variable = Exp1 upthru Exp2 while (Exp4) until (Exp5);
statement1
:
:
statementn
 Label1: end;
Next: statement

```

上述の DO グループの処置は、次のように展開されたものと同等です。この展開において、 $V$  はコンパイラ生成変数で、 $Variable$  と同じ属性を持ちます。また、 $E1$  と  $E2$  も、コンパイラ生成変数です。

```

 Label: E1 = Exp1;
E2 = Exp2;
V = E1;
 Label2: if (Exp4) then;
else
go to next;
statement1
:
:
statementn

```

```

 Label1: if (Exp5) then
go to Next;
if $V \geq E2$ then
go to Next;
 $V = V + 1$;
go to Label2;
Next: statement

```

参照が序数を表していれば、ステートメント  $V = V + 1$  は、 $V = \text{ordinalsucc}(V)$  で置き換えられます。

### タイプ 3 を DOWNTHRU を指定して使用する場合

タイプ 3 の DO 指定に DOWNTHRU オプションが含まれる場合、DO グループの処置は、次のようにして定義されます。

```

 Label: do Variable = Exp1 downthru Exp2 while (Exp4) until (Exp5);
statement1
:
:
statementn
 Label1: end;
Next: statement

```

上述の DO グループの処置は、次のように展開されたものと同等です。この展開において、 $V$  はコンパイラ生成変数で、 $Variable$  と同じ属性を持ちます。また、 $E1$  と  $E2$  も、コンパイラ生成変数です。

```

 Label: E1 = Exp1;
E2 = Exp2;
V = E1;
 Label2: if (Exp4) then;
else
go to Next;
statement1
:
:
statementn

```

```

 Label1: if (Exp5) then
go to Next;
if $V \leq E2$ then

```

```

go to Next;
V = V - 1;
go to Label2;
 Next: statement

```

参照が序数を表していれば、ステートメント `V = V - 1` は、`V = ordinalpred(V)` で置き換えられます。

## タイプ 4

### LOOP

無限の繰り返しを指定します。FOREVER は、LOOP の同義語です。

以下に例を示します。

```

dcl Payroll file;
dcl 1 Payrec,
 2 Type char,
 2 Subtype char,
 2 * char(100);

Readfile:
do loop;

 read file(Payroll) into(Payrec);

 If Payrec.type = 'E'
 then leave; /* like goto After_ReadFile */

 If Payrec.type = '1' then
 do;
 /* process first part of record */

 If Payrec.subtype = 'S'
 then iterate Readfile; /* like goto End_ReadFile */

 /* process remainder of record */
 end;

 End_ReadFile:
 end;
After_ReadFile;;

```

このループから出るには、LEAVE または GO TO を使用するか、もしくはプロシージャーまたはプログラムを終了するしかありません。

## 基本的な繰り返しの例

次の例では、DO グループは 10 回実行され、参照 I は 1 から 10 までの範囲を値にとります。

```

do I = 1 to 10;
:
end;

```

DO および END ステートメントを使用すると、次のように書く場合と同等の結果になります。

```

I = 1;
A: if I > 10 then go to B;
:
 I = I + 1;
 go to A;
B: next statement

```

以下の DO ステートメントは DO グループを、3 回実行します。Name に 'Tom'、'Dick'、および 'Harry' をそれぞれ割り当てる度に 1 回です。

```
do Name = 'Tom', 'Dick', 'Harry';
```

以下のステートメントは、DO グループを 13 回実行することを指定します。I の値を 1 から 10 に等しくして 10 回、また I の値を 13 から 15 に等しくして 3 回です。

```
do I = 1 to 10, 13 to 15;
```

### 参照を添え字として使用した反復

DO ステートメントの参照は、DO グループ内のステートメントで添え字として使用することができます。そのため、各実行では、表または配列の連続するエレメントを処理します。

次の例では、A の最初の 10 個のエレメントは、順次 1 から 10 にセットされます。

```
do I = 1 to 10;
 A(I) = I;
end;
```

### TO および BY を使用した反復

次の例では、DO グループを 5 回実行することを指定しています。I の値は、2、4、6、8、10 となります。

```
do I = 2 to 10 by 2;
```

参照の値を減らしていく場合は、BY オプションを使用しなければなりません。例えば、次の例は、I が 10、8、6、4、2、0、-2 の値で実行されます。

```
do I = 10 to -2 by -2;
```

次の例では、I が 1、3、5 値で DO グループが実行されます。

```
 I=2;
 do I=1 to I+3 by I;
 :
 :
end;
```

前述の例は、次のように書く場合と同等の結果になります。

```
 do I=1 to 5 by 2;
 :
 :
end;
```

## WHILE、UNTIL を指定した DO ステートメントの例

WHILE オプションや UNTIL オプションを使用すると、指定の条件に従って、DO グループを連続的に実行することができます。例えば、次のようになります。

```
 do while (A=B);
 :
 :
end;
```

これは、次のように書く場合と同等です。

```

 S: if A=B then;
else goto R;
 ⋮
 goto S;
 R: next statement

```

さらに、

```

 do until (A=B);
 ⋮
 end;

```

これは、次のように書く場合と同等です。

```

 S:
 ⋮
 if (A=B) then goto R;
 goto S;
 R: next statement

```

ほかのオプションが付いていない限り、DO UNTIL ステートメントで始まる DO グループは最低 1 回は実行されますが、DO WHILE ステートメントで始まる DO グループは 1 回も実行されないことがあります。つまり、ステートメントの DO WHILE (A=B) と DO UNTIL (A $\neq$ B) は、同じではないということです。

次の例では、DO ステートメントに最初に制御が到達したときに A $\neq$ B であれば、DO グループは 1 回も実行されません。

```
do while(A=B) until(X=10);
```

ただし、A=B であれば、DO グループは実行されます。DO グループの実行後、X=10 であれば、それ以上実行されません。X=10 でない場合は、A がまだ B に等しい限り、さらに実行されます。

次の例では、DO グループは最低 1 回は実行され、そのとき I は 1 です。

```
do I=1 to 10 until(Y=1);
```

DO グループの実行後、Y=1 であれば、それ以上実行されません。Y=1 でない場合は、デフォルトの増分値 (BY 1) が I に加算され、I の新しい値が 10 と比較されます。I が 10 より大きいときは、それ以上実行されませんが、そうでないときは、新たに実行されます。

次のステートメントは、C(I) がゼロより小さければ DO グループを 10 回実行し、次に A が B に等しい場合にのみ、もう 1 回実行することを指定しています。

```
do I = 1 to 10 while (C(I)<0),
 11 while (A = B);
```

## UPTHRU と DOWNTHRU を指定した DO の例

次の例では DO グループを 5 回実行すると、ループの終わりに達して i の値が 5 になります。

```

 do i = 1 upthru 5;
 ⋮
 end;

```



UPTHRU オプションを使用すると、参照は、更新前に終了値と比較されます。これは、終了値以降に何も値がない場合に非常に役立ちます。例えば、FIXEDOVERFLOW 条件は、次に示すようなループでは発生しません。

```
do i = 2147483641 upthru 2147483647;
:
end;
```

同様に、次のループは、符号なしの値をゼロまで減分していく際に生じる可能性がある問題を予防します。

```
dcl U unsigned fixed bin;
do U = 17 downthru 0;
:
end;
```

UPTHRU と DOWNTHRU は、序数とともに使用すると特に有効です。次の例を考えてみてください。

```
define ordinal Color (Red value (1),
Orange,
Yellow,
Green,
Blue,
Indigo,
Violet);
dcl C ordinal Color;

do C = Red upthru Violet;
:
end;

do C = Violet downthru Red;
:
end;
```

最初のループでは、*c* は、red から violet まで昇順で連続する各色を想定しています。2 番目のループでは、*c* は、violet から red まで降順で連続する各色を想定しています。

## REPEAT の例

次の例では、DO グループは I は 1、2、4、8、16 などの値で実行されます。

```
do I = 1 repeat 2*I;
:
end;
```

前述の例は、次のように書く場合と同等の結果になります。

```
I=1;
A:
:
I=2*I;
goto A;
```

次の例では、DO グループの最初の実行は I=1 で行われます。

```
do I=1 repeat 2*I until(I=256);
```

この実行のあと、およびそれ以後 DO グループが実行されるたびに、UNTIL 式がテストされます。I=256 であれば、それ以上実行されません。I=256 でない場合は、REPEAT 式が計算されて I に割り当てられ、新たに実行されます。

次の例では、チェーニングしたリストで特定の項目を探索するために使用される DO ステートメントを示します。

```
do P=Phead repeat P -> Fwd
 while(P~=null())
 until(P->Id=Id_to_be_found);
end;
```

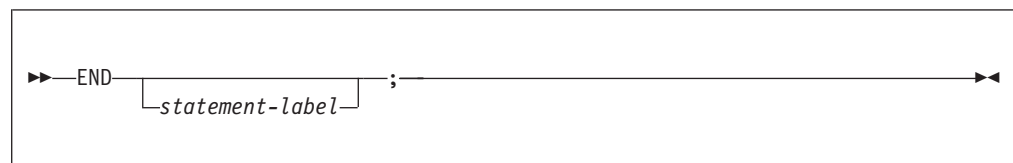
DO グループの最初の実行で、値 Phead が P に割り当てられます。それ以降 DO グループが実行されるたびに、その実行前に値 P -> Fwd が P に割り当てられます。DO グループの最初の実行前および後続のそれぞれの実行前に、P の値がテストされ、その値が NULL であれば、それ以上実行されません。

以下のステートメントは、DO グループを 9 回実行することを指定します。I の値を 1 から 9 に等しくして 9 回です。その後、引き続き I の値を 10、20、40、などに等しくします。10000 より大きい I の値で DO グループが実行されたあと、実行の繰り返しが終わります。

```
do I = 1 to 9, 10 repeat 2*I
 until (I>10000);
:
end;
```

## END ステートメント

END ステートメントは、1 つまたは複数のブロックやグループを終了させます。それぞれのブロックごと、またはグループごとに、END ステートメントがなければなりません。



### statement-label

添え字を付けることはできません。END のあとにステートメント・ラベル (statement-label) を指定すると、そのステートメント・ラベルを持ち、DO、SELECT、PACKAGE、BEGIN、または PROCEDURE ステートメントで始まっていて、まだ閉じられていないグループまたはブロックのうち、その END ステートメントより前で、最も近くにあるものを閉じます。DO、SELECT、PACKAGE、BEGIN、または PROCEDURE ステートメントを持つすべてのブロックには、対応する END ステートメントがなければなりません。

END のあとにステートメント・ラベルがない場合は、その END ステートメントより前で、最も近くにある DO、SELECT、PACKAGE、BEGIN、または PROCEDURE ステートメントで始まっているグループまたはブロックのうち、対応する END ステートメントがほかにないものが閉じられます。

ブロックの END ステートメントに制御が到達すると、そのブロックの実行は終了します。ただし、各ブロックには END ステートメントがなければなりません、ブロックの実行を終了させる方法はほかにもあります。(詳細については、108 ページの『プロシージャー』 および 129 ページの『開始ブロック』を参照してください。)

プロシージャーの END ステートメントに制御が到達したときは、その END ステートメントは RETURN ステートメントと見なされます。

主プロシージャーの END ステートメントに制御が到達したときは、プログラムが正常終了します。

---

## ENTRY ステートメント

ENTRY ステートメントについては、132 ページの『ENTRY 属性』を参照してください。

---

## EXIT ステートメント

EXIT ステートメントは、現行のスレッドを停止します。



```
▶▶EXIT;◀◀
```

---

## FETCH ステートメント

FETCH ステートメントについては、119 ページの『FETCH ステートメント』を参照してください。

---

## FLUSH ステートメント

FLUSH ステートメントについては、295 ページの『第 11 章 入出力』を参照してください。

---

## FORMAT ステートメント

FORMAT ステートメントについては、321 ページの『第 13 章 ストリーム指向データ伝送』を参照してください。

---

## FREE ステートメント

FREE ステートメントについては、253 ページの『第 10 章 ストレージ制御』を参照してください。

## GET ステートメント

GET ステートメントについては、321 ページの『第 13 章 ストリーム指向データ伝送』を参照してください。

## GO TO ステートメント

GO TO ステートメントは、指定されたラベル参照によって識別されるステートメントに制御を移します。GO TO ステートメントは無条件分岐です。

```
▶▶ GO TO label ; ◀◀
```

省略形: GOTO

### label

ラベル定数、ラベル変数、またはラベル値を返す関数参照を指定します。ラベル変数の場合、GO TO ステートメントの実行のたびに異なる値になっていることがあるので、常に同じステートメントに制御が移されるとは限りません。

GO TO ステートメントによって、あるブロック内からそのブロックに含まれていない場所に制御が移されると、そのブロックは終了します。制御の移動先が、終了するブロックを直接に活動化したのではないブロック内にあると、活動化に際して介在したすべてのブロックも終了します（115 ページの『プロシーチャーの終了』を参照してください）。

GO TO ステートメントが、複数回活動化を行うブロックに含まれるラベル定数を指定する場合には、その GO TO ステートメントの実行時に活動中のものに制御が移されます（116 ページの『再帰的プロシーチャー』を参照してください）。

GO TO ステートメントを使用しても、次に示すものへ制御権を移動することはできません。

- 非アクティブ・ブロックへ。このようなエラーが検出されるという保証はありません。
- DO グループの外から、タイプ 2 またはタイプ 3 の DO グループ内のステートメントへ。ただし、DO グループ内から呼び出されたプロシーチャーまたは ON ユニットを GO TO で終了させる場合は別です。
- FORMAT ステートメントへ。

GO TO の行先をラベル変数で指定し、ラベル定数をそのラベル変数に割り当てれば、スイッチとして使用することができます。また、そのラベル変数に添え字を付けておけば、添え字を変化させることによってスイッチを制御することができます。ラベル変数または関数参照を使用すれば、きわめて複雑なスイッチ機能を実行することができます。ただし、普通は、制御ステートメントは単純である方が効率はよくなります。あるブロックから別のブロックへの GOTO 操作によって、ターゲット・ブロックでの多くの最適化が妨げられます。ただし、ターゲット・ラベルがそのブロック内の最後のステートメントである場合は例外です。



```

:
else
:

```

上記の例は、次の例と同等ですが、より巧みにコード化されています。

```

select(A);
when (B)
:
when (C)
:
:
end;

```

## 例

次の例では、比較の結果が真 (A が B に等しい) であれば、D の値が C に割り当てられ、ELSE ユニットは実行されません。

```

if A = B then
 C = D;
else
 C = E;

```

比較の結果が偽 (A が B に等しくない) であれば、THEN ユニットは実行されず、E の値が C に割り当てられます。

THEN ユニットと ELSE ユニットのどちらにでも、制御権を移動する (条件付きで、または無条件で) ステートメントを書くことができます。THEN ユニットが GO TO ステートメントで終わる場合には、ELSE ユニットを指定する必要はありません。例えば、次のようになります。

```

if all(Array1 = Array2) then
 go to LABEL_1;
next-statement

```

この式が真であれば、THEN ユニットの GO TO ステートメントによって、LABEL\_1 に制御が移されます。この式が偽であれば、THEN ユニットは実行されず、次のステートメントに制御が移されます。

## 短絡計算

次の場合に、IF 式のテストは短絡化されることがあります。

- IF 式が 2 つの式の論理和で構成されており、最初の式が「真」の場合、2 番目の式は計算されず、コードは THEN 節を実行します。
- 同様に、IF 式が 2 つの式の論理積で構成されており、最初の式が「偽」の場合、2 番目の式は計算されず、コードは ELSE 節を実行します。

ただし、コードが短絡化されるのは、以下に示す一部の式においてのみです。

- 比較式
- BIT(1) リテラル
- NONVARYING BIT(1) 変数
- NONVARYING BIT(1) を返す ENTRY 参照
- 3 つの引数を持ち、最後の引数が 1 と等しい REAL FIXED リテラルである、SUBSTR 組み込み関数参照

- 2 つの配列に適用される比較演算子か、単に NONVARYING BIT(1) の配列である変数のいずれかの引数を持つ、ALL または ANY 組み込み関数参照
- その他、次の組み込み関数のいずれか
  - Checkstg
  - Endfile
  - Fileopen
  - Isfinite
  - Isinf
  - Ismain
  - Isnan
  - Isnormal
  - Iszero
  - Omitted
  - Present
  - Unallocated
  - Valid
  - Validdatetime

必然的に、上記および NOT 接頭演算子および AND または OR の 2 項演算子で構成される式 (再帰的な可能性のある) も短絡化されます。

したがって、例えば、次の宣言の場合、

```

dcl A bit(1);
dcl B bit(1);
dcl C bit(2);
dcl D bit(2);
dcl P pointer;
dcl BX based fixed bin(31);

```

次の IF 文がすべて短絡化されます。

```

if A | B then
if P = sysnull() | P->BX = 0 then
if C = 'b' & D = 'b' then
if A | (substr(C,1,1) & substr(D,2,1)) then

```

しかし、次の IF 文は短絡化されません。

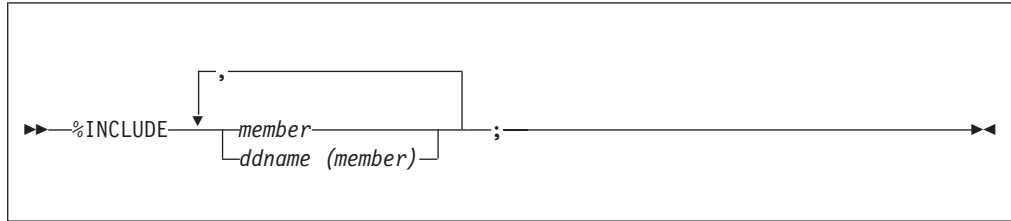
```

if C | D then
if C & D then

```

### %INCLUDE ディレクティブ

%INCLUDE ディレクティブは、外部のテキストをソース・プログラムに合体するために使用します。



組み込みメンバーには、絶対ファイル名を指定してもかまいません。絶対ファイル名を単一引用符または二重引用符で囲みます。例えば、次は有効です。

#### INTEL

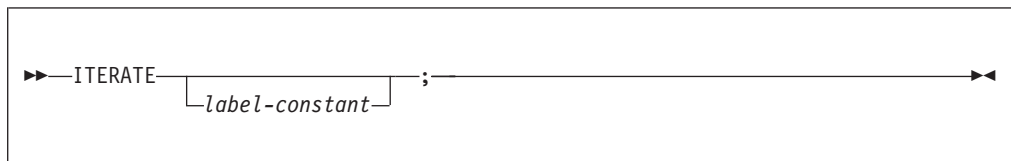
```
%include "%ibmpli%include%sqlcodes.inc"
```

#### AIX および z/OS UNIX

```
%include "/ibmpli/include/sqlcodes.inc"
```

### ITERATE ステートメント

ITERATE ステートメントは、それに含まれる反復 DO グループを区切る END ステートメントに制御を移します。現在行われている反復は完了され、次の反復が(必要であれば) 開始されます。 ITERATE ステートメントは、反復 DO グループが非反復 DO グループを含んでいる場合には、その非反復 DO グループ内で指定することができます。



#### label-constant

このステートメントを含んでいる DO グループのラベルでなければなりません。省略した場合、ITERATE ステートメントを含む最新の反復 DO グループの END ステートメントに制御が移ります。

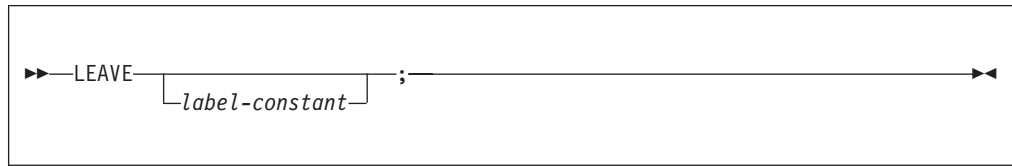
例については、232 ページの『タイプ 4』を参照してください

### LEAVE ステートメント

単純な DO グループに含まれているか、または単純な DO グループを指定してある場合に、 LEAVE ステートメントは、そのグループから制御を離します。反復 DO グループに含まれているか、またはそのようなグループを指定してある場合には、 LEAVE ステートメントは、現在の繰り返しも含め、そのグループのすべての繰り返しを終了します。制御の流れは、DO グループが END ステートメントに達



して終了した場合に通常移動するはずの位置に移動します。この位置は、DO グループの END ステートメントに続く次のステートメントである必要はありません (『例』を参照してください)。



#### label-constant

このステートメントを含んでいる DO グループのラベルでなければなりません。ここで指定するラベルを持つ DO グループが終了します。 *label-constant* が省略されると、LEAVE ステートメントを含むグループが終了する DO グループです。

LEAVE ステートメントおよび参照される (または暗黙に指定される) DO ステートメントが、別々のブロックにあってはなりません。

次の例の詳細については、232 ページの『タイプ 4』の項を参照してください。

## 例

次の例では、ステートメント `leave A;` は、C に制御を移します。

```
If Time_to_process_X then

 A: do I = lbound(X,1) to hbound(X,1);
 do J = lbound(X,2) to hbound(X,2);
 If X(I,J)=0 then
 leave A; /* control goes to C, not B */
 else
 do;
 :
 end;
 end;
 end;
 end;

 Else

 B: do;
 :
 end;

 C: statement after group A;
```

## %LINE ディレクティブ

%LINE ディレクティブは、メッセージおよびデバッグ用に生成される情報の中で、その次の行を指定の行とファイルから取得した場合と同様に処理するように指定します。

## %LINE

```
▶▶—%LINE—(—line-number—,—file-specification—)—;————▶▶
```

ディレクティブが認識されるためには、文字 '%LINE' が入力行の列 1 から 5 までにある必要があります (また逆に、これらの 5 文字で始まる行はすべて %LINE ディレクティブとして扱われます)。line-number は 7 桁以下の整数値であることが必要で、file-specification は引用符で囲んではなりません。セミコロンの後に指定された文字はすべて無視されます。

%LINE ディレクティブは、LINEDIR コンパイラー・オプションが有効でない限り無効です。

---

## LOCATE ステートメント

LOCATE ステートメントについては、311 ページの『第 12 章 レコード単位データ伝送』を参照してください。

---

## %NOPRINT ディレクティブ

%NOPRINT ディレクティブは、%PRINT ディレクティブに制御権が移動するか、または以前の %PRINT ディレクティブを保管している %POP ディレクティブに制御権が移動するまで、ソース・リストの印刷を中断します。

```
▶▶—%NOPRINT—;————▶▶
```

%NOPRINT ディレクティブの例については、247 ページの『%PUSH ディレクティブ』を参照してください。

---

## %NOTE ディレクティブ

%NOTE ディレクティブは、指定のテキストおよび重大度の診断メッセージを生成します。

```
▶▶—%NOTE—(—message—
└,code┐)—;————▶▶
```

### message

診断メッセージを必要とする値を持つ文字式。

### code

メッセージの重大度を表す値が入っている固定式。重大度は次のとおりです。

| コード | 重大度 |
|-----|-----|
| 0   | I   |
| 4   | W   |
| 8   | E   |
| 12  | S   |
| 16  | U   |

code を省略すると、0 と見なされます。

code が上のリストに示した値以外の値を持つ場合、診断メッセージが作成されます。この場合、その結果として起こるシステムの処置は未定義です。

生成されたメッセージは、ほかのメッセージとともにファイルにされます。特定のメッセージを続いて印刷するかどうかは、その重大度レベルとコンパイラ FLAG オプション (「プログラミング・ガイド」に説明されている) の設定に依存します。

重大度 U のメッセージが生成されると、プリプロセスとコンパイル処理が直ちに終了します。重大度 S、E、または W のメッセージが生成されたときにコンパイル処理が終了するかどうかは、コンパイラ・オプションの設定値によってそれぞれ異なります。

---

## ヌル・ステートメント

ヌル・ステートメントは、何も行わず、ステートメントの実行順序を変更することもしません。ヌル・ステートメントは、THEN 文節および ELSE 文節ならびに WHEN ステートメントおよび OTHERWISE ステートメントのヌル処置を示すために、しばしば使用されます。

```
» ; ————— «
```

---

## ON ステートメント

ON ステートメントについては、377 ページの『第 16 章 条件処理』を参照してください。

---

## OPEN ステートメント

OPEN ステートメントについては、295 ページの『第 11 章 入出力』を参照してください。

---

## OTHERWISE ステートメント

OTHERWISE ステートメントについては、249 ページの『SELECT ステートメント』を参照してください。

---

## PACKAGE ステートメント

PACKAGE ステートメントについては、101 ページの『第 6 章 プログラムの編成』を参照してください。

---

## %PAGE ディレクティブ

%PAGE ディレクティブを使用すれば、コンパイラーのソース・リストを新しいページから開始できます。

```
▶▶—%PAGE—;—————▶◀
```

---

## %POP ディレクティブ

%POP ディレクティブを使用して、前回の %PUSH ディレクティブで保存された %PRINT および %NOPRINT ディレクティブの状況を復元することができます。

%PUSH ディレクティブと %POP ディレクティブの最も一般的な用途は、インクルード・ファイルやマクロにあります。

```
▶▶—%POP—;—————▶◀
```

例については、247 ページの『%PUSH ディレクティブ』を参照してください

---

## %PRINT ディレクティブ

%PRINT ディレクティブは、ソース・リストの印刷を再開させます。

```
▶▶—%PRINT—;—————▶◀
```

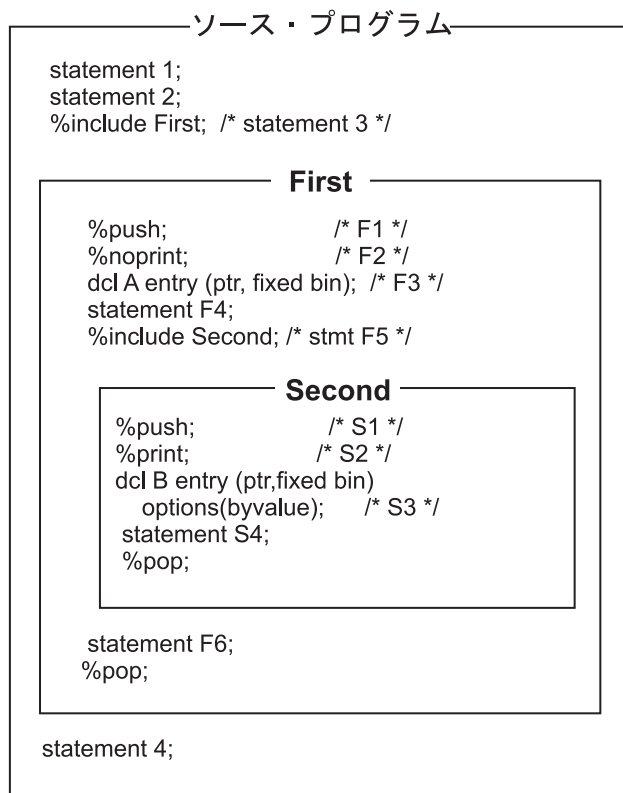
関係のあるコンパイラー・オプションが指定されていれば、%PRINT が有効になります。 %PRINT ディレクティブの例については、247 ページの『%PUSH ディレクティブ』を参照してください。

---

## PROCEDURE ステートメント

PROCEDURE ステートメントについては、101 ページの『第 6 章 プログラムの編成』を参照してください。





Second 内の %POP ディレクティブの次に元の設定値が復元されます。

---

## PUT ステートメント

PUT ステートメントについては、321 ページの『第 13 章 ストリーム指向データ伝送』を参照してください。

---

## READ ステートメント

READ ステートメントについては、311 ページの『第 12 章 レコード単位データ伝送』を参照してください。

---

## RELEASE ステートメント

RELEASE ステートメントについては、119 ページの『FETCH ステートメント』を参照してください。

---

## RESIGNAL ステートメント

RESIGNAL ステートメントについては、377 ページの『第 16 章 条件処理』を参照してください。

---

## RETURN ステートメント

RETURN ステートメントについては、145 ページの『RETURN ステートメント』を参照してください。

## REVERT ステートメント

REVERT ステートメントについては、377 ページの『第 16 章 条件処理』を参照してください。

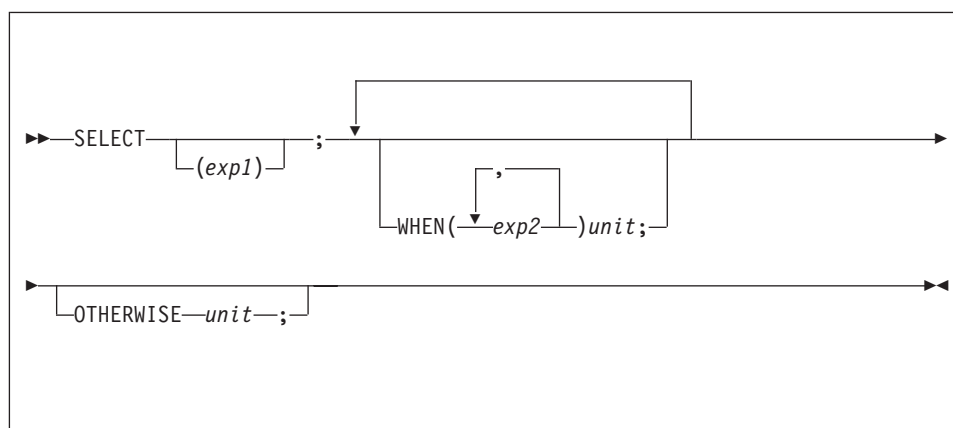
## REWRITE ステートメント

REWRITE ステートメントについては、311 ページの『第 12 章 レコード単位データ伝送』を参照してください。

## SELECT ステートメント

SELECT グループを使用すれば、複数経路の条件付き分岐を行うことができます。SELECT グループは、SELECT ステートメント、オプションの WHEN ステートメント (1 つまたは複数)、オプションの OTHERWISE ステートメント、および END ステートメントで構成されます。

注: 条件接頭語は、OTHERWISE ステートメントでは使用することはできません。



省略形: OTHERWISE の場合は OTHER

### SELECT (exp1)

SELECT ステートメントとこれに対応した END ステートメントが、SELECT グループと集合的に呼ばれるステートメントのグループを区切ります。SELECT ステートメント内の式が計算され、その値が保管されます。

### WHEN (exp2, exp2, ...) unit

1 つまたは複数の式を指定します。これらの式は計算されて、SELECT ステートメントにより保管された値と比較されます。

保管されたものと同じ値を持つ式が見付かると、その時点で、WHEN ステートメント内の式の計算は終了し、その WHEN ステートメントのユニットが実行されます。保管されたものと同じ値を持つ式が見付からなかった場合は、OTHERWISE ステートメントのユニットが実行されます。

WHEN ステートメントにラベルを付けることはできません。

## SELECT

### OTHERWISE unit

先行の WHEN ステートメントのすべてのテストが失敗した場合に実行されるユニットを指定します。

OTHERWISE ステートメントを省略した場合、SELECT グループが実行された結果としてどのユニットも選択されなかったときは、ERROR 条件が起こります。

OTHERWISE ステートメントにラベルまたは条件接頭語を付けてはなりません。

### unit

各ユニットは、有効な単一ステートメント、グループ、または開始ブロックのいずれかです。DECLARE、DEFAULT、END、ENTRY FORMAT、PROCEDURE、および %statement ステートメントは無効です。それぞれのユニットには、制御の移動を指定するステートメント (例えば、GO TO) が含まれていてもかまいません。そのようなステートメントを指定すれば、SELECT ステートメントの正規の順序を指定変更することができます。

*exp1* を省略した場合、それぞれの *exp2* が計算され、必要に応じてビット・ストリングに変換されます。そのストリングのいずれかのビットが '1'B であれば、その WHEN ステートメントのユニットが実行されます。すべてのビットが 0 であるか、そのストリングがヌルであれば、OTHERWISE ステートメントのユニットが実行されます。

WHEN または OTHERWISE ステートメントのユニットが実行されたあとは、そのユニット内で制御の通常の流れが変更されたのでない限り、SELECT グループの次のステートメントに制御が渡されます。

*exp1* を指定した場合は、それぞれの *exp2* は、次の比較式がスカラー・ビット値を持たねばなりません。

$$(\text{exp1}) = (\text{exp2})$$

*exp1* と *exp2* は、両方ともスカラー式でなければなりません。したがって、配列、構造体、および和集合が *exp1* か *exp2* のいずれかで使用される可能性があります。計算後の式はスカラー値でなければなりません。

## 例

次の例で、E、E1 などは式を表します。SELECT ステートメントに制御が到達すると、式 E が計算され、その値が保管されます。次に、WHEN ステートメント内のそれぞれの式が順に (書かれている順に) 計算され、その値が E の値と比較されます。

E の値と等しい値が見付かると、対応する THEN ステートメントの後に指定されている処置が行われます。先の WHEN ステートメント式は計算されません。

WHEN ステートメントのどの式も、SELECT ステートメントの式と等しくない場合は、OTHERWISE ステートメントの後に指定されている処置が実行されます。



```

select (E);
 when (E1,E2,E3) action-1;
 when (E4,E5) action-2;
 otherwise action-n;
end;
N1: next statement;

```

*exp1* を省略した場合の例を以下に示します。

```

select;
 when (A>B) call Bigger;
 when (A=B) call Same;
 otherwise call Smaller;
end;

```

SELECT グループ内に WHEN ステートメントが 1 つもない場合は、OTHERWISE ステートメント内の処置が無条件に実行されます。OTHERWISE ステートメントを省略した場合に、SELECT グループが実行され、WHEN ステートメントのどのユニットも選択されなかったときは、ERROR 条件が起こります。

---

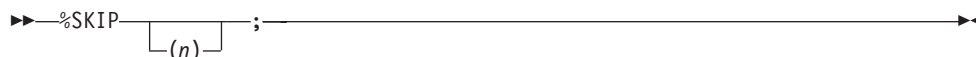
## SIGNAL ステートメント

SIGNAL ステートメントについては、377 ページの『第 16 章 条件処理』を参照してください。

---

## %SKIP ディレクティブ

%SKIP ディレクティブは、コンパイラーのソース・リストで指定の行数をブランクのままにします。



```

▶▶ %SKIP (n) ;

```

- n** スキップしたい行数を指定します。1 から 999 までの範囲内の整数でなければなりません。*n* が省略されると、デフォルトは 1 になります。*n* がそのページに残っている行数よりも大きい場合、%SKIP ディレクティブの代わりに、同じ結果になる %PAGE ディレクティブが実行されます。

---

## STOP ステートメント

STOP ステートメントは、現在のアプリケーションを停止します。



```

▶▶ STOP ;

```

---

## WAIT ステートメント

WAIT ステートメントについては、411 ページの『第 18 章 マルチスレッド化機能』を参照してください。

---

## WHEN ステートメント

WHEN ステートメントについては、249 ページの『SELECT ステートメント』を参照してください。

---

## WRITE ステートメント

WRITE ステートメントについては、311 ページの『第 12 章 レコード単位データ伝送』を参照してください。

---

## %XINCLUDE ステートメント

%XINCLUDE ディレクティブは、外部のテキストを、(以前に組み込まれていなければ) ソース・プログラムに組み入れるために使用します。

```
►► — %XINCLUDE — [member
 ddname (member)] ; — ◄◄
```

---

## 第 10 章 ストレージ制御

|                             |     |                                 |     |
|-----------------------------|-----|---------------------------------|-----|
| ストレージのクラス、割り振り、および割り振り解除    | 253 | 区域変数のための組み込み関数                  | 274 |
| 静的ストレージとその属性                | 255 | 区域の割り当て                         | 274 |
| 自動ストレージとその属性                | 255 | 区域の入出力                          | 275 |
| 被制御ストレージとその属性               | 257 | リスト処理                           | 275 |
| 被制御変数のための ALLOCATE ステートメント  | 258 | ASSIGNABLE 属性と NONASSIGNABLE 属性 | 277 |
| 被制御変数のための FREE ステートメント      | 260 | NORMAL 属性と ABNORMAL 属性          | 278 |
| 被制御変数の複数世代                  | 260 | BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性   | 278 |
| アスタリスクの表記法                  | 260 | HEXADEC 属性と IEEE 属性             | 279 |
| 調節可能エクステンツ                  | 261 | CONNECTED 属性と NONCONNECTED 属性   | 280 |
| 被制御変数のための組み込み関数             | 261 | DEFINED 属性と POSITION 属性         | 281 |
| 基底付きストレージとその属性              | 261 | 非連結ストレージ                        | 283 |
| ロケータ・データ                    | 263 | 単純定義                            | 284 |
| POINTER 変数とその属性             | 266 | iSUB 定義                         | 285 |
| 基底付き変数のための組み込み関数            | 266 | ストリング・オーバーレイ定義                  | 286 |
| 基底付き変数のための ALLOCATE ステートメント | 267 | POSITION 属性                     | 286 |
| 基底付き変数のための FREE ステートメント     | 268 | INITIAL 属性                      | 287 |
| REFER オプション (自己定義データ)       | 269 | 配列変数の初期設定                       | 291 |
| 区域データとその属性                  | 271 | 共用体の初期設定                        | 292 |
| オフセット・データとその属性              | 273 | 静的変数の初期設定                       | 292 |
|                             |     | 自動変数の初期設定                       | 293 |
|                             |     | 基底付き変数と被制御変数の初期設定               | 293 |
|                             |     | 例                               | 293 |

変数は、すべてストレージを必要とします。変数に指定する属性は、必要なストレージの大きさ、およびそのストレージをどのように解釈するかを表します。次の例では、X への参照は、すなわち、固定小数点 2 進数として解釈される値を含むストレージの一部への参照です。

```
dcl X fixed binary(31,0) automatic;
```

X が自動であるため、このストレージはその宣言ブロックが活動化されたときに割り振られ、割り振られたストレージは、ブロックが非活動化されるまで有効です。

---

### ストレージのクラス、割り振り、および割り振り解除

ストレージの割り振りとは、変数で表されるデータ項目を内部で記録しておくために、ストレージの 1 つの区域をその変数に関連付ける作業のことです。ある変数にストレージが関連付けられると、その変数は割り振られた ことになります。

変数の割り振りは、静的に (プログラムの実行前に) 行われることもあれば、動的に (プログラムの実行中に) 行われることもあります。静的に割り振られた変数は、アプリケーション・プログラムの実行中ずっと割り振られたままになっています。動的に割り振られた変数は、その変数を含んでいるブロックが終了するとき、またはアプリケーションから明示的に要求されたときに、占有していたストレージを解放します。

変数に割り当てられたストレージ・クラスによって、その変数に適用されるストレージの制御の程度、およびその変数が持つストレージの割り振り方法やその解放方法は異なります。4 つのストレージ・クラスがあります。自動、静的、被制御、お

## ストレージのクラス、割り振り、および割り振り解除

よび基底付きです。ストレージ・クラスは、明示的に、または暗黙に、もしくはコンテキスト宣言でその対応する属性を使用することによって割り当てることができます。

- **AUTOMATIC** を指定すると、そのストレージ宣言を持つブロックに入るたびに、ストレージが割り振られます。そのブロックから出る時点で、割り振られていたストレージが解放されます。ブロックが、再帰的に呼び出されるプロシージャの場合は、直前に割り振られたストレージは、このプロシージャの入り口でスタックに入れます (プッシュダウン)。ストレージの最新の割り振りは、各世代が終了した時に、再帰プロシージャ内でスタックから除去されます (ポップアップ)。(スタック処理の際のプッシュダウンとポップアップについては、116 ページの『再帰的プロシージャ』を参照してください。)
- **STATIC** を指定すると、プログラムがロードされるときに、ストレージが割り当てられます。プログラムの実行が完了するまで、そのストレージは解放されません。取り出されたプロシージャの場合は、そのプロシージャが解放されるまで、そのストレージは解放されません。
- **CONTROLLED** を指定すると、**ALLOCATE** ステートメントおよび **FREE** ステートメントを使用してストレージの割り当ておよび解放を制御できます。同一プログラムで同一の被制御変数を複数回割り振り、しかもその間に解放処理をしない場合は、その変数のその間の複数世代がスタックされます。最新の世代を解放することによってのみ、初期の世代にアクセスすることができます。
- **BASED** は、**CONTROLLED** と同じように、ユーザーがストレージの割り振りと解放を制御することを指定します。**CONTROLLED** と異なるのは、複数回割り振った場合に、割り振られたストレージはスタックされるのではなく、どれも常に使用可能である点です。それぞれの割り振りは、ポインター変数の値で識別することができます。また基底付き変数ストレージの区域と関連づけたり、オフセット変数の値によって識別することができるという点でも異なります。

区域外にある基底付き変数は、**ALLOCATE** 組み込み関数を使用すれば割り振りが、また **PLIFREE** 組み込みサブルーチンを使用すれば解放が可能です。基底付き変数は、**AUTOMATIC** 組み込み関数を使用しても割り振ることができます。この組み込み関数を使用して割り振った変数は、その変数の割り振られているブロックが終了すると、自動的に解放されます。

要素変数、配列変数、大構造変数、および共用体変数の場合は、ストレージ・クラス属性を明示的に宣言することができます。配列変数、大構造変数、および共用体変数に対して宣言されたストレージ・クラスは、その配列、大構造体、または共用体のすべてのエレメントに適用されます。

ストレージ・クラス属性は、次のものについては指定することができません。

- **CONDITION** 条件
- 定義済みデータ項目
- 入り口定数
- ファイル定数
- フォーマット定数
- **DEFINE** ステートメント内に定義された ID
- ラベル定数
- 構造体または共用体のメンバー
- 名前付き定数

変数へのストレージの割り振りは、PL/I によって管理されます。ユーザーは、ストレージのどこに割り振りを行うかを指定することはできません。ただし、変数が既存の AREA に割り振られるように指定することはできます。詳細については、271 ページの『区域データとその属性』を参照してください。

## 静的ストレージとその属性

STATIC 属性を持つと宣言された変数は、プログラムの実行の前に割り振られます。それらは、プログラムが終了するまで割り振られたままになっています。静的変数の割り振りについての制御は、実行中のプログラムには与えられません。

▶▶—STATIC—◀◀

STATIC は外部変数のデフォルトですが、内部変数が STATIC であってもかまいません。またこれは、パッケージ内で宣言された変数のデフォルトでもあり、いずれのプロシージャの範囲内でもありません。静的変数を参照できるかどうかについては、有効範囲に関する通常の規則に従います。次の例では、変数 X は、プログラムの実行中は継続して割り振られていますが、プロシージャー B の中、または B に含まれているブロックの中だけで参照することができます。変数 Y は STATIC 属性を獲得し、またプログラムが実行している間割り振られています。

```
Package: Package exports (*);
 decl Y char(10);

 A: proc options(main);
 B: proc;
 declare X static internal;
 end B;
 end A;

 C: proc;
 Y = 'hello';
 end C;

end Package;
```

INITIAL 属性を使用して静的変数を初期設定する場合、初期値は制限付き式でなければなりません。またエクステンションも、制限付き式として指定されなければなりません。

## 自動ストレージとその属性

自動変数は、それが宣言されているブロックに制御が移されたときに割り振られます。自動変数の割り振りは、プログラムの実行中に何回も行うことができます。ユーザーは、プログラムのブロック構造体をどのように設計するかによって、自動変数の割り振りを制御することができます。

▶▶—AUTOMATIC—◀◀

省略形: AUTO

AUTOMATIC はデフォルトです。自動変数は常に内部変数です。

以下の例では、プロシージャ B が呼び出されるたびに、変数 X と Y はストレージを割り振られます。B が終了するとストレージが解放され、X および Y に入っていた値は失われます。

```
A: proc;
 .
 .
 call B;
B: proc;
 declare X,Y auto;
 .
 .
end B;
 .
 .
call B;
```

解放されたストレージは、別の変数への割り振りのために使用可能になります。このように、ブロック（プロシージャ・ブロックまたは開始ブロック）がアクティブである間は、そのブロック内で AUTOMATIC と宣言されたすべての変数にストレージが割り振られています。ブロックが非アクティブであれば、そのブロック内の自動変数にストレージは割り振られていません。再帰的に呼び出されるか、または複数のプログラムによって呼び出されるプロシージャを除いて、個々の自動変数の割り振りは 1 つだけ存在することができます。

自動変数のエクステンントは、式で指定することができます。したがって、必要なときに、特定量のストレージを割り振ることができます。次の例では、文字ストリング STR の長さは、プロシージャ B が呼び出されたときに存在していた変数 N の値によって定義された長さになります。

```
A: proc;
 declare N fixed bin;
 .
 .
B: proc;
 declare STR char(N);
```

DECLARE ステートメントが同じブロック内にある場合、PL/I は変数 N を制限付き式または初期設定済みの静的変数のいずれかに初期設定しておかなければなりません。次の例では、割り振られた長さは Str1 に対して正しく割り振られますが、Str2 には正しくありません。PL/I では、このタイプの宣言の依存性は解決できません。

```
dcl N fixed bin (15) init(10),
M fixed bin (15) init(N),
Str1 char(N),
Str2 char(M);
```

## 被制御ストレージとその属性

CONTROLLED として宣言された変数は、ALLOCATE ステートメントで指定されたときにだけ割り振られます。被制御変数は、その変数を指定している FREE ステートメントに制御権が到達するか、またはプログラムが終了するまで、割り振られたままになっています。

被制御変数は、プログラムのブロック構造体から、部分的に独立しています (ただし、完全に無関係というわけではありません)。被制御変数の有効範囲は、INTERNAL または EXTERNAL のいずれでもかまいません。INTERNAL と宣言されている場合の有効範囲は、その変数を宣言しているブロックと、そのブロックに含まれているブロックです。まだ割り振られていない被制御変数を参照すると、エラーになります。

CONTROLLED として宣言されていない変数は、CONTROLLED として変数を宣言しているプロシージャに渡すことはできません。しかし、CONTROLLED として宣言されている変数を、CONTROLLED として変数を宣言していないプロシージャに渡すことはできます。



省略形: CTL

以下の例では、変数 X はプロシージャ B 内と、プロシージャ A の CALL ステートメントの実行に続く部分内で有効に参照することができます。

```
A: proc;
 dcl X controlled;
 call B;
 ⋮
B: proc;
 allocate X;
 ⋮
end B;
end A;
```

一般に、被制御変数が有用なのは、調整可能なエクステントを持つ大きなデータ集合がプログラムに必要なときです。次の例のステートメントは、入力データに応じて必要なだけのストレージを割り振り、不要になったときにそのストレージを解放します。

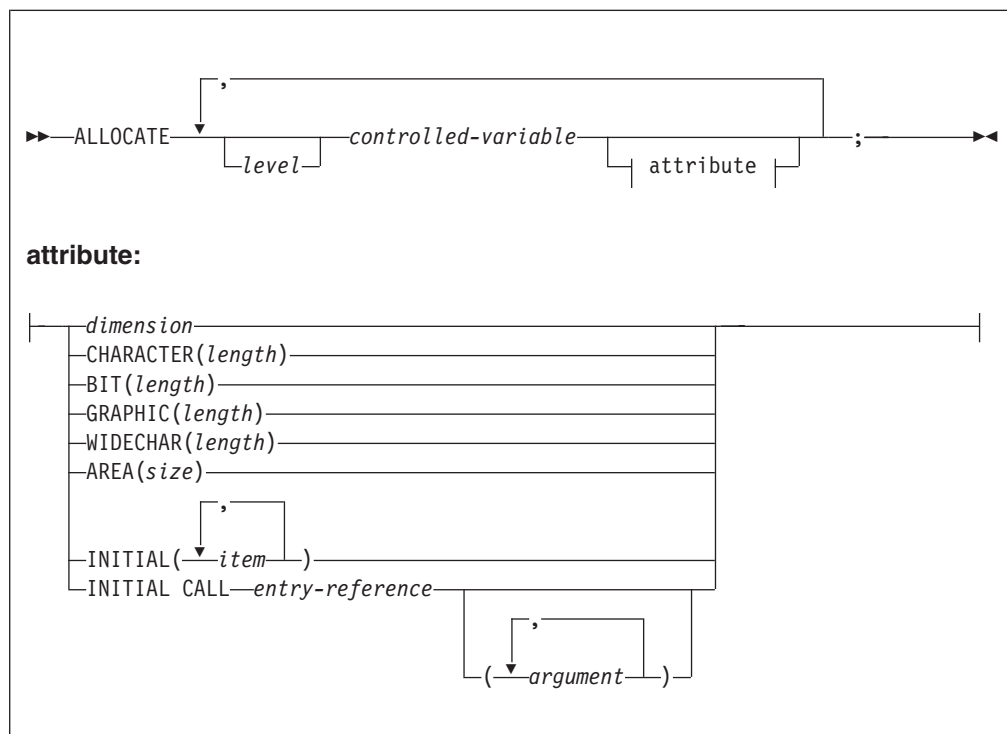
```
 dcl A(M,N) ctl;
 get list(M,N);
 allocate A;
 get list(A);
 ⋮
 free A;
```

この方法を採用すると、ブロックを活動化したり終了したりする必要がないので、開始ブロックを設ける方法よりも効率がよくなります。



## 被制御変数のための **ALLOCATE** ステートメント

**ALLOCATE** ステートメントは、プロシージャー・ブロックの境界とは関係なく、被制御変数にストレージを割り振ります。同時に、被制御パラメーターも割り振ることができます。制御されている配列の境界、制御ストリングの長さ、制御域のサイズは、その初期値と同様に **ALLOCATE** ステートメントで指定することができます。



省略形: **ALLOC**

### **level**

レベル番号を示します。レベル番号を指定しない場合、指定される被制御変数はレベル 1 変数でなければなりません。

### **controlled-variable**

被制御変数または制御された小構造体のエレメントを指定します。大構造体以外の構造体エレメントは、エレメントを含む大構造体全体の相対構造化が、その構造のための **DECLARE** ステートメント内にあるかのように示される場合にのみ示すことができます。この場合は、次元属性は、その次元属性で宣言されているすべての名前に指定されていなければなりません。

被制御変数と基底付き変数の両方を、同一の **ALLOCATE** ステートメントで割り振ることができます。基底付き変数の構文については、267 ページの『基底付き変数のための **ALLOCATE** ステートメント』を参照してください。

配列の境界、ストリングの長さ、および区域のサイズ (エクステント) は、**ALLOCATE** ステートメントの実行時に計算されます。

- **ALLOCATE** ステートメントまたは **DECLARE** または **DEFAULT** ステートメントは、変数について、すべての必要な次元、サイズ、または長さ属性 (エクステ



ント)を指定しなければなりません。DECLARE ステートメントから取られた式の計算は、ALLOCATE ステートメントの実行時に割り込み可能になっている条件を使用して、割り振り時に行われます。ただし、式の中の名前は、その DECLARE または DEFAULT ステートメントを有効範囲の中に持つ変数を参照しています。

- 1 つの ALLOCATE ステートメントに、境界値、長さ、またはサイズを明示的に指定すると、その変数について DECLARE ステートメントで指定した値を指定変更します。
- 1 つの ALLOCATE ステートメントに、境界値、長さ、またはサイズをアスタリスクを指定して指定すると、そのエクステントは現行世代から取得されます。変数の世代が存在しない場合は、エクステントは未定義となり、プログラムはエラーになります。
- ALLOCATE または DECLARE ステートメントのいずれかで、割り振ろうとしている変数の参照を含む式を使って、境界値、長さ、またはサイズを指定している場合は、変数の最新の世代の値を使用して式が計算されます。以下に例を示します。

```
declare X(N) fixed bin ctl;
N = 20;
allocate X;
allocate X(X(1));
```

X の最初の割り振りでは、DECLARE ステートメントと N = 20; で、上限が指定されます。2 番目の割り振りでは、X の最初の世代の最初のエレメントの値によって、上限が指定されます。

次元属性は、宣言したものと同じ次元数を指定しなければなりません。次元属性は他の任意の属性とともに指定することができ、指定する属性の最初のものでなければなりません。以下に例を示します。

```
declare X(M) char(N) controlled;
M = 20;
N = 5;
allocate X(25) char(6);
```

BIT、CHARACTER、GRAPHIC、WIDECHAR、および AREA 属性は、同じ属性を持つ変数についてのみ、それぞれ指定することができます。

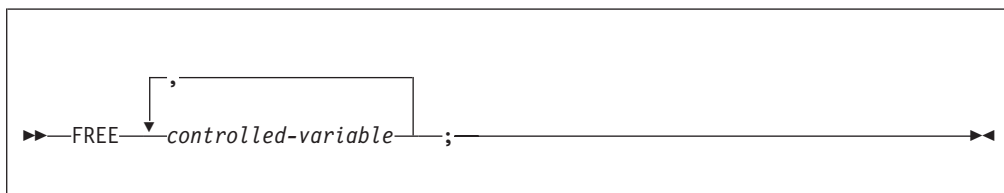
変数が DECLARE または ALLOCATE ステートメントのいずれかに INITIAL 属性を持つ場合は、初期値は割り振り時に変数に割り当てられます。INITIAL 属性の式または CALL オプションは、ALLOCATE ステートメントで使用可能な条件を使用して、割り振り時に計算されます。ただし、名前は宣言の環境で解釈されます。INITIAL 属性が DECLARE と ALLOCATE ステートメントの両方に指定される場合は、ALLOCATE ステートメントの INITIAL 属性が使用されます。初期設定時に、割り振られる変数が参照されている場合、その変数の新しい世代を参照することになります。初期設定の詳細については、287 ページの『INITIAL 属性』を参照してください。

ALLOCATE ステートメントの実行時に行われる計算 (例えば、INITIAL 属性内の式の計算) は、相互に依存し合ってはなりません。

被制御変数のためのストレージが使用可能ではない場合、STORAGE 条件が発生します。

## 被制御変数のための FREE ステートメント

FREE ステートメントは、被制御変数に割り振られているストレージを解放します。解放されたストレージは、別の割り振りに使用できます。このとき、1 つ前に割り振られた被制御変数が使用可能になり、このあとでその変数を参照すると、その割り振りを参照することになります。



### controlled-variable

レベル 1 の添え字なし変数です。

基底付き変数と被制御変数の両方を、同一の FREE ステートメントで解放することができます。基底付き変数の構文については、268 ページの『基底付き変数のための FREE ステートメント』を参照してください。

### 暗黙の開放

被制御変数は、必ずしも FREE ステートメントで明示的に解放する必要はありません。しかし、被制御変数を (FREE ステートメントで) 明示的に解放することをお勧めします。

被制御ストレージはすべて、プログラムの終了時に解放されます。

## 被制御変数の複数世代

ストレージがすでに割り振られている (まだ解放されていない) 変数を指定する ALLOCATE ステートメントが実行されると、その変数のストレージはスタックに入れられ (プッシュダウン) ます。つまり、ストレージがスタックされます。スタッキングが行われると、その変数の新しい世代データが作られます。この新しい世代が現行世代となり、現行世代が解放されない限り、前の世代を直接にアクセスすることはできません。FREE ステートメントによって、または変数にストレージを割り振ったプログラムが終了したために、その変数のストレージが解放されると、1 つ前のストレージがスタックから除去 (ポップアップ) されます。つまり、スタックから取り除かれます。

## アスタリスクの表記法

ALLOCATE ステートメントでは、次元、長さ、またはサイズがアスタリスクで示されたときは、1 つ前の世代から継承されます。配列の場合、アスタリスクは、配列の 1 つではなくすべての次元に使用しなければなりません。以下に例を示します。

```
decl X(M,N) char(A) c1;
 M=10;
 N=20;
 A=5;
```

```
allocate X;
allocate X(10,10);
allocate X(*,*);
```

X の最初の世代は (10,20) の境界を持ちます。2 番目と 3 番目の世代は (10,10) の境界を持ちます。X の各世代の要素は、すべて長さ 5 の文字ストリングです。

DECLARE ステートメントでもアスタリスク表記を使用することができますが、その場合は、異なる意味を持ちます。以下に例を示します。

```
dcl Y char(*) ctl,
N fixed bin;

N=20;
allocate Y char(N);
allocate Y;
```

文字ストリング Y の長さが ALLOCATE ステートメントで指定されていない場合は、直前の世代からそれを取ります。その場合は、Y には指定された長さが与えられます。そのため、ユーザーはストリングの長さの指定を、ストレージの実際の割り振りまで延期することができます。

## 調節可能エクステンツ

被制御スカラー、配列、および構造体や共用体のメンバーは、調整可能な配列エクステンツ、ストリング長、および区域サイズを持つことができます。例えば、次の例において、構造体が割り振られると、A.B のエクステンツは 1 から 10 になり、A.C は最大の長さが 5 の VARYING 文字ストリングになります。

```
dcl 1 A ctl,
2 B(N:M),
2 C char(*) varying;
N = -10;
M = 10;
alloc 1 A,
2 B(1:10),
2 C char(5);
free A;
```

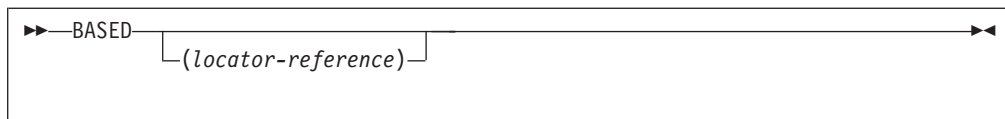
## 被制御変数のための組み込み関数

ALLOCATION 組み込み関数を使用すれば、特定の被制御変数に割り振られた世代の数を判別することができます。変数が割り振られていない場合は、ゼロの値が戻されます。

---

## 基底付きストレージとその属性

基底付き変数の宣言は世代 (すなわち必要なストレージの量とその属性) の宣言です。(基底付き変数は、主記憶域での世代の位置を示しません。) 世代の位置は、ロケータ変数で示します。割り振られていない基底付き変数の値を参照すると、エラーになります。



### locator-reference

データの位置を指定します。

基底付き変数を参照するとき、データ属性と位置合わせ属性についてはその基底付き変数の属性が使用されますが、データの位置は、その変数を修飾しているロケータ変数が示します。

基底付き変数に EXTERNAL 属性を付けることはできませんが、基底付き変数のロケータ参照には、基底付きストレージ・クラスを含む任意のストレージ・クラスを付けることができます。

REFER オプションを使用すれば、調整可能な区域サイズ、配列の境界、およびストリングの長さの指定を持つ基底付き構造体もしくは共用体を宣言することができます。269 ページの『REFER オプション (自己定義データ)』を参照してください。基底付きの VARYING ストリングや VARYINGZ ストリングの最大長は、それらのストリングがオーバーレイするストリングの最大長に等しくなければなりません。以下に例を示します。

```
declare A char(50) varying based(Q),
 B char(50) varying;
Q=addr(B);
```

基底付き VARYING ストリングは、VARYING ストリング上にのみオーバーレイすることができ、基底付き VARYINGZ ストリングは、VARYINGZ ストリング上にのみオーバーレイすることができます。

基底付き変数用のストレージは、ALLOCATE ステートメント、ALLOCATE 組み込み関数、AUTOMATIC 組み込み関数、または LOCATE ステートメントを使用して割り振ることができます。基底付き変数は、(SET オプションを指定した) READ ステートメント、FETCH ステートメント、または ADDR 組み込み関数を使用することによって、既存のデータをアクセスするときにも使用できます。

基底付き AREA 変数は、ALLOCATE ステートメントを使用して割り振ることができます。PL/I は割り振りを行うときに自動的に区域を EMPTY に初期設定します。ただし、ALLOCATE または AUTOMATIC 組み込み関数を使用して区域変数にストレージを獲得すると、ストレージを獲得したあとでその変数に EMPTY を割り当てる必要があります。

割り振られた世代の位置はロケータ変数で示されるので、適切なロケータ値を使用すれば、プログラム内の任意の場所で基底付き変数のどの世代でも参照することができます。次の例では、参照が明示的に修飾されているときを除いて、X を参照するときにはロケータ変数 P によって X の記憶場所が示されることを宣言しています。

```
dc1 X fixed bin based(P);
```

このようにしてロケータ参照に関連付けても、その関連付けは永続的なものではありません。このロケータ参照を使用して別の基底付き変数の位置を示すことも

できますし、別のロケータ参照を使用して変数 X の別の世代を示すこともできます。ロケータ参照を指定せずに基底付き変数を宣言した場合は、その基底付き変数を参照するときには必ず、ロケータを使って明示的に修飾する必要があります。

次の例では、配列 A と配列 C は同じストレージを指します。エレメント B とエレメント C(2,1) も同じストレージを指します。

```
dc1 A(3,2) character(5) based(P),
 B char(5) based(Q),
 C(3,2) character(5);
P = addr(C);
Q = addr(A(2,1));
```

**注:** 基底付き変数をこの方法でオーバーレイするときは、新しいストレージは割り振られません。基底付き変数は、オーバーレイされる変数 (この例では C(3,2)) と同じストレージを使用します。

DEFINED 属性および UNION 属性のいずれを使用しても変数をストレージにオーバーレイすることができますが、DEFINED および UNION によるオーバーレイは永続的なものとなります。ロケータ参照によって基底付き変数をオーバーレイしたときは、ロケータ変数に新しい値を割り当てれば、プログラムの実行中いつでも、その結びつきを変更できます。

DEFINED 属性および UNION 属性の詳細については、281 ページの『DEFINED 属性と POSITION 属性』および 198 ページの『共用体』を参照してください。

基底付き変数に INITIAL 属性を指定してもかまいません。初期値が割り当てられるのは、ALLOCATE または LOCATE ステートメントによって基底付き変数が明示的に割り振られたときだけです。

## ロケータ・データ

ロケータ・データには 2 つのタイプ、ポインターとオフセットがあります。

ポインター変数 の値は、ストレージの位置のアドレスです。いくつかの異なる記憶場所でストレージを割り振られた変数を参照するときは、この値を使って参照を修飾することができます。

オフセット変数 の値は、区域変数内の位置を指定し、その区域がストレージの別の場所に割り当てられている場合には引き続き有効です。

ロケータ値は、ロケータ変数にだけ割り当てることができます。オフセット値がオフセット変数に割り当てられるときは、OFFSET 属性で指定された区域変数は無視されます。

### ロケータの変換

ロケータ・データをほかのデータ・タイプに変換することはできません。ただし、次の場合は変換することができます。

- BINARYVALUE、POINTVALUE、および OFFSETVALUE 組み込み関数を使用して、REAL FIXED BINARY (p,0) との間で行われる変換。



- **POINTER** および **OFFSET** 組み込み関数を明示的または暗黙的に使用して、ポインタとオフセット間で行われる変換。

オフセット変数が参照されると、**OFFSET** 属性およびオフセット変数で指定された区域変数のアドレスによって、オフセット変数はポインタ値に暗黙に変換されます。**POINTER** 組み込み関数を使用すれば、オフセットをポインタ値に明示的に変換することができます。次の例では、ステートメントは、区域 B 内のオフセット 0 によって識別される基底付き変数の記憶位置を示すポインタ値を、P に割り当てます。

```
decl P pointer, 0 offset(A), B area;
P = pointer(0, B);
```

この区域変数は、オフセット変数に関連付けられた区域変数とは異なっているので、そのオフセット値が別の区域で有効であるかを確認しなければなりません。例えば、区域 A が区域 B に割り当てられたあとでこの関数が呼び出された場合は、そのオフセット値は有効です。

**OFFSET** 組み込み関数は、**POINTER** 組み込み関数とは対照的に、与えられたポインタと区域から得られたオフセット値を返します。この場合、そのポインタ値は、その区域内での基底付き変数の位置を示していなければなりません。

ポインタ値は、そのポインタ値およびその区域のアドレスを使用して、オフセットに変換されます。したがって、この変換ができるのは、**OFFSET** 属性内で指定された区域内のアドレスに結び付けられたポインタ値に限られます。

**NULL** 組み込み関数または **SYSNULL** 組み込み関数の値に割り当てる場合を除いて、区域に関連付けられていないオフセット変数への変換や、このオフセット変数からの変換を試みると、エラーになります。

複数割り当ての場合、ロケータは暗黙に変換されることはありません。

### ロケータ参照

ロケータ参照とは、ロケータ変数（修飾付きまたは添え字付きでもよい）または、ロケータ値を返す関数参照のいずれかのことです。

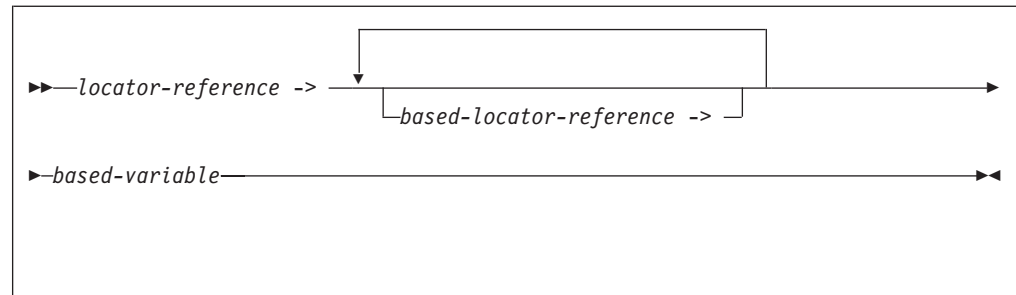
ロケータ参照は、次のように使用することができます。

- 基底付き変数の宣言に関連付けて、ロケータ修飾子として使用できます。
- 比較演算で使用できます。例えば、**IF** ステートメント内で使用できます。
- プロシージャ参照内で引数として使用することができます。

**PL/I** はオフセットをポインタ値に暗黙に変換するため、オフセット参照とポインタ参照のどちらも使用することができます。

### ロケータ修飾

ロケータ修飾とは、ロケータ基底付き変数の特定の世代を識別するために、1 つ以上のロケータ参照を基底付き参照に関連付けることです。これを、ロケータで修飾された参照といいます。複合記号 **->** は、「～で修飾された」または「～を指す」という意味を表します。明示的に修飾された参照の構文図を次に示します。

**locator-reference****based-locator-reference**

データの位置を指定します。

次の例では、X は基底付き変数であり、P はロケータ変数であり、Q は基底付きロケータ変数です。

```
P -> Q -> X
```

この参照は、基底付きロケータ Q、およびロケータ P の値によって識別される X の世代を意味しています。X と Q は、明示的にロケータ修飾されている といいます。

複数のロケータ修飾子を使用している場合、それらの値の計算は順に左から右へ行われます。

基底付き変数の参照を暗黙に修飾することもできます。暗黙に修飾された基底付き変数の世代を判別するために使われるロケータ参照は、基底付き変数と一緒に宣言されたものです。次の例では、ALLOCATE ステートメントは、ポインタ変数 P の値をセットします。したがって、X を参照すると、割り振られたストレージが参照されます。

```
decl X fixed bin based(P) init(0);
allocate X;
X = X + 1;
```

代入ステートメントで X を参照していますが、これは P によって暗黙にロケータで修飾されます。X を参照するとき、次の例のように明示的にロケータで修飾することもできます。

```
P->X = P->X + 1;
```

次の代入ステートメントが実行されると、上記の場合と同じ結果になります。

```
Q = P;
Q->X = Q->X + 1;
```

基底付き変数と一緒に宣言されるロケータも基底付きであってもかまいません。したがって、ロケータ修飾子のチェーンになることがあります。例えば、次のようなポインタおよび基底付き変数を使用することができます。

```
declare (P(10),Q) pointer,
 R pointer based (Q),
 V based (P(3)),
 W based (R),
 Y based;
allocate R,V,W;
```

先のように宣言し、割り振りを行った場合、下記の参照はすべて正しい参照です。

```
P(3) -> V
V
Q -> R -> W
R -> W
W
```

最初の 2 つの参照は同じことを意味し、その次の 3 つも同じことを意味します。Y を参照するときは、それを修飾するロケータ変数を指定しなければなりません。

## ロケータ修飾のレベル

基底付き変数を修飾するポインターは、1 レベルのロケータ修飾を表します。オフセットは、区域内で暗黙に修飾されているので、2 レベルのロケータ修飾を表します。レベルの数は、添え字付きのロケータであるかどうか、もしくは構造体または共用体のエレメントであるかどうかとは無関係です。次の例では、X、P -> X、および Q -> P -> X という参照は、3 レベルのロケータ修飾を表しています。

```
declare X based (P),
 P pointer based (Q),
 Q offset (A);
```

## POINTER 変数とその属性

ポインター変数は、基底付き変数の宣言内に書いたとき、ロケータ修飾子として書いたとき、BASED 属性内に書いたとき、あるいは ALLOCATE、LOCATE、READ、または FETCH の各ステートメントの SET オプション内に書いたときにコンテキスト上から宣言されます。ポインター変数を明示的に宣言することもできます。



省略形: PTR

基底付き変数の世代をもはや識別しないポインター変数、例えば、基底付き変数がすでに解放された場合の値は、未定義です。ポインターで修飾される変数を参照するときは、そのポインターに値を入れておかなければなりません。

## 基底付き変数のための組み込み関数

ALLOCATE 組み込み関数を使用すれば、基底付き変数のストレージを獲得できます。また PLIFREE 組み込みサブルーチンを使用すれば、そのストレージを解放できます。AUTOMATIC 組み込み関数を使用しても、基底付き変数のストレージを獲得できますが、この関数を使用して獲得したストレージは、明示的に解放してはなりません。AUTOMATIC 組み込み関数で割り振られたストレージは、それが割り振られているブロックが終了したときに自動的に解放されます。

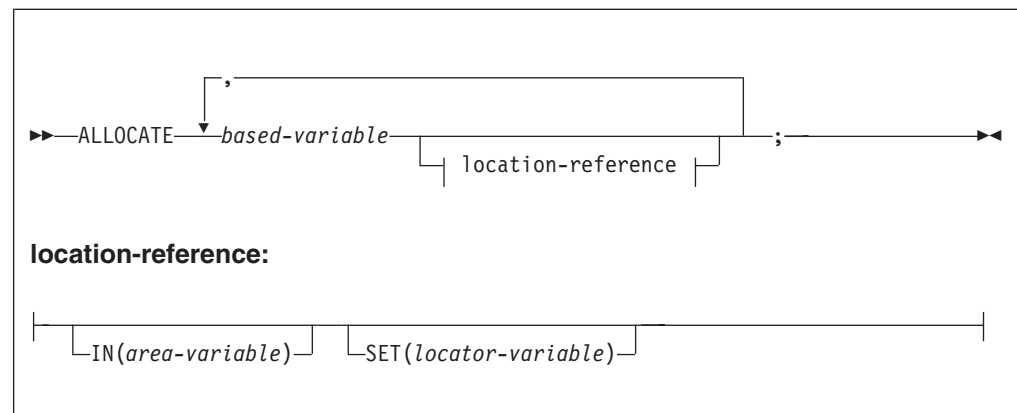


ADDR 組み込み関数は、変数の先頭バイトを指すポインター値を返します。  
ENTRYADDR 組み込み関数は、入りが呼び出されたときに、最初の実行される命令のアドレスを示すポインター値を返します。 NULL 組み込み関数は、PL/I のヌル・ポインターを返し、SYSNULL 組み込み関数は、システムのヌル・ポインターを返します。

注: NULL 組み込み関数と SYSNULL 組み込み関数は、同じように比較を行えますが、必ずしも等しいというわけではありません。アプリケーション・プログラムの作成において、関数の等価性に依存するような記述をすべきではありません。

## 基底付き変数のための ALLOCATE ステートメント

ALLOCATE ステートメントは、プロシージャー・ブロックの境界とは関係なく、基底付き変数にストレージを割り振り、その記憶位置を示すために使用されるロケータ変数をセットします。



省略形: ALLOC

### based variable

レベル 1 の添え字なし変数

### IN

ストレージを割り振る区域変数を指定します。区域の詳細については、271 ページの『区域データとその属性』を参照してください。

### SET

割り振られたストレージの位置を示す値にセットされるロケータ変数を指定します。SET オプションを省略する場合は、基底付き変数の宣言で指定されたロケータを使用しなければなりません。基底付き変数を宣言する場合の構文の詳細については、261 ページの『基底付きストレージとその属性』および 263 ページの『ロケータ・データ』を参照してください。

基底付き変数と被制御変数の両方を、同一の ALLOCATE ステートメントで割り振ることができます。被制御変数の構文については、258 ページの『被制御変数のための ALLOCATE ステートメント』を参照してください。

## 基底付き変数のための **ALLOCATE**

IN オプションを指定したときや、SET オプションでオフセット変数を指定したときは、区域内でストレージが割り振られます。これらのオプションの指定順序は任意です。区域内での割り振りの場合は、次のことに注意してください。

- 基底付き変数に必要なストレージがその区域内にないときは、AREA 条件が起こります。
- オフセット変数使用時に IN オプションを指定しない場合、オフセット変数を宣言するときに区域参照を指定しておく必要があります。

区域を使用しない場合は、ロケータ変数はポインター変数でなければなりません。基底付き変数のためのストレージが使用可能でない場合、STORAGE 条件が起こります。

基底付き変数が REFER を使用している場合、そのサイズは実行時に計算されます。計算の結果、値が大きすぎて FIXED BIN(31) 変数に適合しない場合、プログラムはエラーとなり、訂正する必要があります。この状態では、STORAGE 条件は起こりません。その代わり、ONCODE=3809 が設定された ERROR 条件が以下のいずれかの場合に起こります。

- SIZE 条件が使用可能になっている
- BASED 構造体がライブラリー呼び出しを介してマップされている

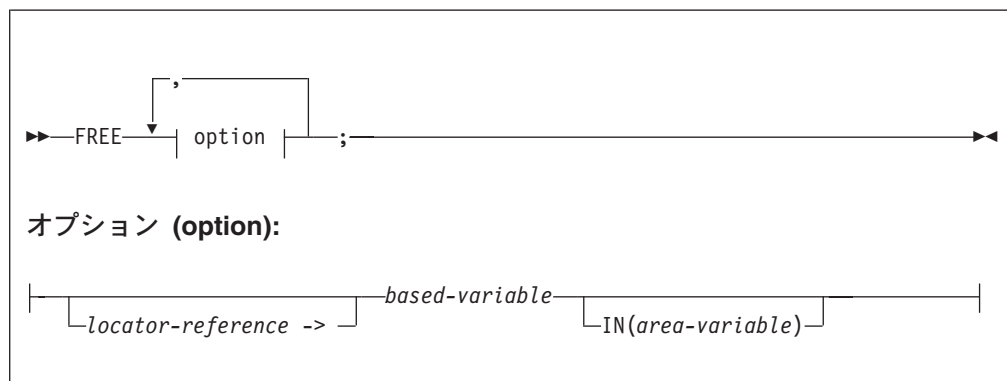
これらの条件のどちらも該当しない場合、予測不能な結果が生じます。

基底付き変数に割り振られるストレージの大きさは、その変数の属性に左右されるほか、その変数の次元、長さ、またはサイズが割り振り時に指定されるときは、それらにも左右されます。これらの属性は、基底付き変数の宣言から判別されます。

基底付きの構造体や共用体には、調整可能な配列境界、ストリングの長さ、または区域のサイズを含むことができます (269 ページの『REFER オプション (自己定義データ)』を参照)。基底付き変数の場合、エクステンントとしてアスタリスクを表記することはできません。

## 基底付き変数のための **FREE** ステートメント

FREE ステートメントは、基底付き変数や被制御変数に割り振られているストレージを解放します。



### **locator-reference ->**

基底付き変数の特定の世代を解放します。複合記号 `->` は、「～で修飾された」

または「～を指す」という意味を表します。基底付き変数が明示的にローケータで修飾されていない場合は、BASED 属性で宣言されたローケータ変数が、解放されるデータの世代を識別するために使われます。ローケータが 1 つも宣言されていない場合、このステートメントはエラーになります。

#### based variable

添え字なしの、レベル 1 の基底付き変数でなければなりません。

**IN** 解放されるストレージが区域内に割り振られている場合は、このオプションを指定するか、または基底付き変数を、対応する区域と一緒に宣言されたオフセットで修飾しなければなりません。基底付き変数が区域内に割り振られていない場合は、IN オプションを指定することはできません。割り振り時に区域を指定すると、基底付きストレージがターゲット区域の中に割り振られます。このような割り振りは、IN オプションでターゲット区域を指定すれば解放することができます。

基底付き変数と被制御変数の両方を、同一の FREE ステートメントで解放することができます。被制御変数の構文については、260 ページの『被制御変数のための FREE ステートメント』を参照してください。

基底付き変数を使用してストレージを解放することができるのは、それと同じデータ属性を持つ基底付き変数に割り振られているストレージを解放する場合だけです。

解放されるストレージの大きさは、基底付き変数の属性 (ストレージ解放の時点での境界または長さ、あるいはその両方を含む) に左右されます。ユーザーは、この大きさが割り振られたストレージの大きさと一致しているかを判別する必要があります。変数が割り振られていない場合の結果は予測不能です。

#### 暗黙の開放

基底付き変数は、必ずしも FREE ステートメントで明示的に解放する必要はありません。しかし、(FREE ステートメントで) 基底付き変数を明示的に解放することをお勧めします。

基底付きストレージはすべて、プログラムの終了時に解放されます。

## REFER オプション (自己定義データ)

自己定義構造体または共用体とは、それ自身のフィールドについての情報 (ストリングの長さなど) を含んでいる構造体または共用体です。このデータを処理できるように、基底付き構造または共用体を宣言することができます。ストリングの長さ、配列の境界、区域のサイズはすべて、構造体内または共用体内で宣言した変数 (参照オブジェクト) によって定義することができます。その構造体または共用体が割り振られる (ALLOCATE ステートメントまたは LOCATE ステートメントによって) とき、式の値が参照オブジェクト変数に割り当てられます。それ以外にこの構造体または共用体を参照したときは、参照オブジェクトの値が使われます。

基底付き構造体または共用体を宣言するときに REFER オプションを指定して、その構造体または共用体を割り振る時点で式の値を参照オブジェクトに割り当てること、およびその式の値で構造体内または共用体内の別の変数の長さ、境界、もしくは

はサイズを表すことができます。REFER オプションで長さ、境界、またはサイズを指定する場合の構文は次のとおりです。

►—*expression*—REFER—(*member-variable*)—◄

### expression

この *expression* (式) の値は、構造体または共用体が (ALLOCATE もしくは LOCATE を使用して) 割り振られたときに、メンバーの長さ、境界、あるいはサイズを定義します。この式が計算され、FIXED BINARY (31,0) に変換されます。この式のアペラントとして使用する変数は、この REFER オプションを含んでいる構造体または共用体に属してはなりません。

構造体または共用体への後続の参照では、REFER オプションのメンバーの長さ、境界、もしくはサイズを、*member-variable* (参照オブジェクト) の現行値から獲得します。

### member-variable

参照オブジェクトは、次の規則に従わなければなりません。

- 同じレベル 1 の構造体または共用体のメンバーでなければならず、REFER オプションの中でそのオブジェクトを指定するメンバーの前になければなりません。
- 計算できるものでなければなりません。
- ロケータ修飾 (264 ページの『ロケータ修飾』を参照) をしたり、添え字を付けたりすることはできません。
- 配列の一部であってはなりません。

次の例の宣言では、基底付き構造体 STR が配列 Y とエレメント X で構成されていることを指定しています。

```
declare 1 STR based(P),
 2 X fixed binary(31,0),
 2 Y (L refer (X)),
 L fixed binary(31,0) init(1000);
```

STR が割り振られるとき、上限は、X に割り当てられている L の現行値にセットされます。ほかの場所 (P をセットするための READ ステートメントなどで) Y を参照すると、X に入っている制限値が使われます。

REFER オプションを持つメンバーに INITIAL 属性を指定すると、参照オブジェクトに値が割り当てられてから、メンバーの初期設定が行われます。

構造体または共用体の宣言で利用できる REFER オプションの数に制限はありません。

参照オブジェクトの値は、プログラムの実行中に変更してはなりません。参照オブジェクトの値が変更された場合、集合などを解放するエラーが発生します。

また、REFER エクステンントを定義する式の中で使用する変数は、その REFER を使用する DECLARE を含むブロック (またはその親ブロックの 1 つ) 内で宣言されて

いる必要があります。変数のいずれかが宣言されていない場合、その変数は暗黙宣言に関する通常の規則に従って暗黙的に宣言されます。つまり、`DECLARE` を含む最外部のブロックに、その変数の `DECLARE` が追加されます。

したがって、次のコードの中で、サブルーチン `inner_proc` 内での変数 `m` の宣言と割り当ては、`ALLOCATE` ステートメントに影響しません。`ALLOCATE` ステートメントは、メイン・ブロックで暗黙的に宣言された未初期化の `m` を使用します。

```
refertst: proc options(main);

 dcl
 1 a based,
 2 n fixed bin(31),
 2 c char(m refer(n));

 call inner_proc;

 inner_proc: proc;

 dcl m fixed bin(31);
 dcl p pointer;

 m = 15;
 allocate a set(p);
 end;
end;
```

---

## 区域データとその属性

区域変数は、基底付き変数を割り振るために予約される主記憶域の区域を定義するものです。`ALLOCATE` ステートメントや `FREE` ステートメントを使用すれば、この予約されたストレージを基底付き変数に割り振ったり、基底付き変数から解放したりすることができます。区域変数のストレージ・クラスはどれでもかまいませんが、区域変数に `ALIGNED` を指定しなければなりません。

基底付き変数を割り振るときに区域の指定を省略すると、使用可能などこかのストレージが取得されます。したがって、割り振られた複数の基底付き変数が主記憶域全体にわたって分散していることもあります。内部処理の場合は、項目はポインターの使用によって容易にアクセスされるので、分散していても支障はありません。しかし、割り振られた項目をデータ・セットに伝送する場合は、それらを 1 つにまとめる必要があります。区域変数に割り振られた項目はすでに 1 つにまとまっているので、1 つの単位として伝送や割り当てを行うことができ、しかもそれらを個別に処理することもできます。

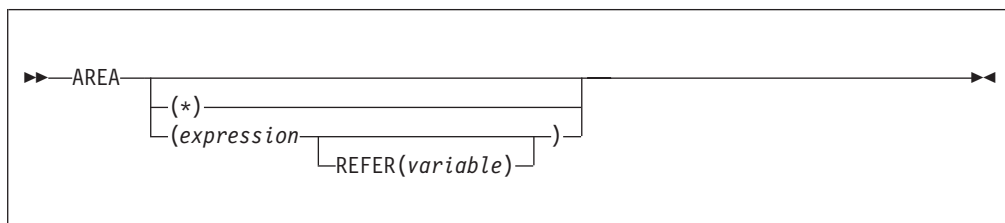
ある区域変数内での基底付き変数の位置は、その区域変数の開始位置からの変位として識別できると便利です。この目的のためにオフセット変数が用意されています。

区域はその含まれる割り振りで、完全に割り当てまたは伝送することができます。そのため、基底付き割り振りのセットは、割り当てと入出力のための単位として扱うことができ、各割り振りは独自の識別を保持します。

区域のサイズは、ストリングの長さや配列の境界と同じ方法で調節できるので、式やアスタリスク (被制御区域パラメーターの場合)、または `REFER` オプション (基底付き区域の場合) を使用して指定することができます。

## 区域データとその属性

OFFSET 属性または IN オプション内に書いた変数には、コンテキスト上から、AREA 属性が与えられます。変数の AREA 属性を明示的に宣言することもできます。



### expression

区域のサイズを指定します。 *expression* またはアスタリスクが指定されていなければ、デフォルトは 1000 になります。

- \* 宣言される区域変数がパラメーターの場合は、サイズをアスタリスクで指定することができます。

### REFER

REFER オプションの説明については、269 ページの『REFER オプション (自己定義データ)』を参照してください。

ストレージ・クラスが AUTOMATIC または CONTROLLED である区域のサイズは、予約されるストレージのバイト数を表す値になる式で指定します。

区域が BASED 属性を持っているときは、区域のサイズは定数で指定しなければなりません。ただし、その区域が基底付き構造体または共用体のメンバーで、しかも REFER オプションを使用する場合は例外です。

静的ストレージ・クラスの区域サイズは、制限付き式で指定しなければなりません。

AREA 属性を宣言する例を次に示します。

```
declare area1 area(2000),
 area2 area;
```

宣言されたサイズの区域が予約され、その予約された区域の前にさらに 16 バイトが付けられます。この 16 バイトには、使用中のストレージの大きさなどの制御情報の詳細が入ります。

実際に使用される予約済みのストレージの大きさは、区域のエクステント といえます。区域変数が割り振られた時点では、そこにはなにも入っていないので、区域のエクステントはゼロです。最大エクステントはその区域のサイズです。実行中いつでも、区域内で基底付き変数を割り振ることも解放することもできます。したがって、区域のエクステントは変化します。

基底付き変数が解放されると、その変数が占有していたストレージは別の割り振りに使用可能になります。ある区域内の使用可能なストレージのチェーンは保持されます。チェーンの先頭は制御情報内に保持されます。基底付き変数に必要なストレージの容量はそれぞれ異なっているので、それらを割り振ったり解放したりすれば、割り振りの容量と使用可能なスペースの容量が一致しないときには必然的にすき間が生じます。これらのすき間は区域のエクステントに含まれます。

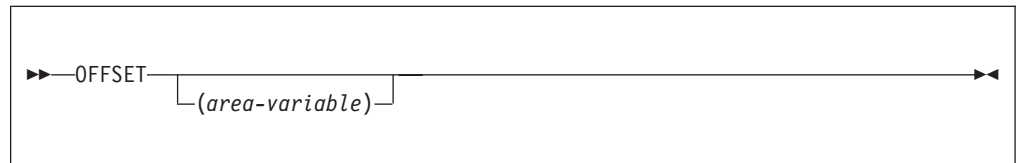


どのような演算子 (比較演算子を含む) も、区域変数に使用することはできません。

## オフセット・データとその属性

オフセット・データは、必ず区域変数と一緒に使われます。オフセット変数の値は、区域変数内での基底付き変数の位置を、その区域変数の開始位置からの変位として示します。基底付き変数は相対的な位置で示されるので、区域変数が主記憶域の別の部分に割り当てられても、オフセット値は無効になりません。

オフセット変数を使用しても、区域内でポインター変数を使用できなくなるわけではありません。



区域変数とオフセット変数の関連付けは、永続的なものではありません。 `POINTER` 組み込み関数を使用すれば、オフセット変数を任意の区域変数に関連付けることができます (263 ページの『ロケータの変換』を参照)。このような関連付けを宣言しておくことの利点は、このオフセット変数を参照すると、関連付けられている区域変数を参照することになるという点です。区域変数の指定を省略すると、このオフセット変数は、`POINTER` 組み込み関数の使用を介してしかロケータ修飾子として使用することができません。

### オフセット変数のセット

オフセット変数の値は、下記のいずれかの方法でセットすることができます。

- `ALLOCATE` ステートメントによってセットします。
- 別のロケータ変数の値、またはユーザー定義の関数から戻されたロケータ値の割り当てによってセットします。
- 組み込み関数 `NULL`、`SYSNULL`、`ADDR`、`ENTRYADDR`、`OFFSETADD`、`OFFSETSUBTRACT`、`OFFSETVALUE`、または `OFFSET` によってセットします。

区域変数の指定を省略したときは、そのオフセット変数は、`POINTER` 組み込み関数の使用を介してロケータ修飾子として使用することしかできません。

### オフセット変数の例

次の例を考えてみてください。

```
dc1 X based(0),
 Y based(P),
 A area,
 O offset(A);

allocate X;
allocate Y in(A);
```

区域 `A` とオフセット `O` のストレージ・クラスは、デフォルトによって `AUTOMATIC` になります。最初の `ALLOCATE` ステートメントは、次のステートメントと同等です。

```
allocate x in(A) set(0);
```

2 番目の ALLOCATE ステートメントは、次のステートメントと同等です。

```
allocate Y in(A) set(P);
```

次の例は、オフセット変数を使用して区域変数内にリストを作成するときの方法を示しています。

```
dc1 A area,
 (T,H) offset(A),
 1 STR based(H),
 2 P offset(A),
 2 data;

allocate STR in(A);
T=H;

do loop;
 allocate STR set(T->P);
 T=T->P;
:
end;
```

## 区域変数のための組み込み関数

EMPTY 組み込み関数は、区域変数を初期設定してこれを空にし、それに対して行われている可能性があるすべての割り振りを解放します。これが区域変数の初期状態で、そこにはまだなにも割り振りがされていません。AVAILABLEAREA 組み込み関数は、その区域内で行うことができる割り振りの最大サイズを返します。

## 区域の割り当て

代入ステートメントを使用して、区域参照の値を 1 つ以上の区域変数に割り当てることができます。区域から区域への割り当てを行うと、ターゲット区域内のすべての割り振りが解放され、次に、ソース区域のエクステンツがターゲット区域に割り当てられ、ソース区域のすべてのオフセットがターゲット区域で有効になります。

次に例を示します。

```
declare X based (0(1)),
 0(2) offset (A),
 (A,B) area;

alloc X in (A);
X = 1;
alloc X in (A) set (0(2));
0(2) -> X = 2;
B = A;
```

POINTER 組み込み関数を使用すると、POINTER (0(2),B)->X と 0(2)->X という参照は、それぞれ区域 B と区域 A で割り振られた同じ値を表します。

割り振りを含んでいない区域がターゲット区域に割り当てられると、ターゲット区域内のすべての割り振りが解放されるだけです。

区域割り当てを使用すれば、元の区域の境界を超えて基底付き変数のリストを拡張することができます。ある区域内に基底付き変数を割り振ろうとしても、その変数を収容するのに必要なフリー・ストレージがその区域内にないか、またはある区域を別の区域に割り当てようとして、十分な大きさがないと、AREA 条件が起こりま



す。この条件の ON ユニットを使用すれば、不適当な区域の参照を修飾しているポインタの値を変更して、別の区域を指すようにすることができます。ON ユニットからの戻りにおいて、割り振りが新規の区域内で再度試されます。あるいは別の方法として、AVAILABLEAREA 組み込み関数を使用して、これから行おうとする割り振りが、AREA 条件を起こさずに対象とする区域内で可能であるかどうかを判別することができます。また、ON ユニットはその区域を書き出して、それを EMPTY にリセットすることもできます。

## 区域の入出力

区域の機能を使用すれば、基底付き変数のリスト全体を 1 つの単位として、RECORD ファイルとの間で入出力を行うことができます。出力の場合、区域のエクステントと 16 バイトの制御情報が伝送されます (ただし、区域が構造体内または共用体内にあり、しかもその構造体または共用体の最後の項目でない場合は例外で、そのときは宣言されているサイズ分が伝送されます)。したがって、区域内の未使用部分がデータ・セットのスペースを取ることはありません。

区域のエクステントは変化するので、可変長レコードを使用してください。必要になる最大レコードの長さは、区域の長さ (区域サイズ +16) です。

---

## リスト処理

リスト処理とは、データの集まりを処理するための多くの手法に付けられた名前です。配列、構造体、および共用体もデータの集まりを処理するために使われますが、リスト処理手法は、プログラムの実行中にデータの集まりを無限に再配列したり、広げたりすることができるという点で、融通性があります。ここでは、これらの手法については説明しませんが、基底付き変数とロケータ変数がこの種の処理の基礎としてどのような働きをするかを説明します。

リスト処理では、多数の基底付き変数 (それぞれが 1 つ以上の世代を持っている) を 1 つのリスト内に入れることができます。このリスト内のメンバーは、ほかのメンバーまたはほかのリストの位置を指し示す 1 つ以上のポインタをメンバー内に持つことによって、相互に関連しています。基底付き変数を割り振るときには、主記憶域内のどこにその変数を割り振るかを指定することはできません (ただし、どの区域内に割り振りたいかを指定することはできます)。実際には、チェーニングしている項目は主記憶域全体にわたって分散していることもあります。しかし、それぞれのポインタをアクセスすれば、次のメンバーが見つかります。リスト内のメンバーは、通常は、ポインタ変数を含む構造体または共用体です。次の例では、構造体のリストが作成されます。

```
dc1 1 STR based(H),
 2 P pointer,
 2 data,
 T pointer;

 allocate STR;
 T=H;

 do loop;
 allocate STR set(T->P);
 T=T->P;
 T->P=null;
 :
end;
```

これらの構造体は、STR のいくつかの世代であり、各世代の中のポインター変数 P によって相互にリンクされます。リストを作成している間、ポインター変数 T は前の世代を識別します。最初の ALLOCATE ステートメントは、世代を示すようポインター H をセットします。つまり、ポインター H はリストの開始点 (リストの先頭) を示します。2 番目の ALLOCATE ステートメントは、前の世代の中にあるポインター P がこの新しい世代の位置を示すよう、ポインター P をセットします。代入ステートメント `T=T->P;` はポインター T を更新し、新規の世代の位置を識別できるようにします。代入ステートメント `T->P=NULL;` は、リストの最後の肯定のディレクティブを指定して、NULL の最後の世代内にポインターを設定します。

図 19 は、一方向のチェーンを図解したものです。

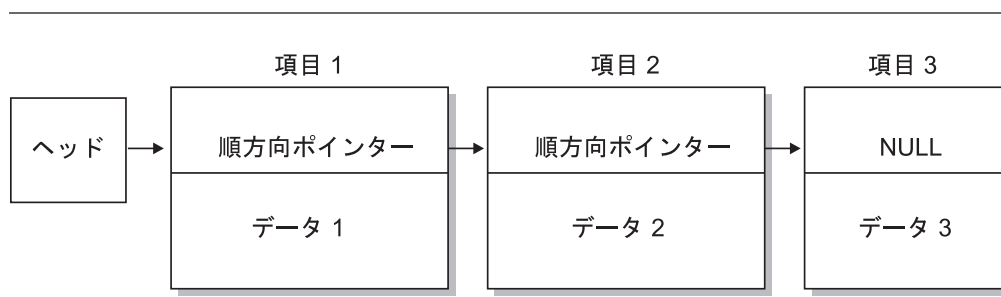


図 19. 一方向のチェーンの例

各世代の中にある P の値が、各世代ごとに別々のポインター変数に割り当てられているのでない限り、STR の各世代は、リストが作成された際の順序でしかアクセスできません。上の例の場合、下記のステートメントを使用すれば、各世代を順にアクセスすることができます。

```

do T=H
 repeat(T->P)
 while (T->=null);
 :
 :
 T->data;
 :
 :
end;
```

先に挙げたいくつかの例は、一方向のリストを作成する簡単なリスト処理手法です。別のポインター変数をこの構造体内または共用体内に追加すれば、さらに複雑なリストを作成することができます。別のポインター変数を追加したとすれば、それで前の世代を指すことができます。それにより、リストは双方向となります。リストの任意の項目から直前の項目と次の項目に、該当するポインター値を使用してアクセスすることができます。最新のポインター値を NULL の値にセットする代わりに、リスト内の最初の項目を指すようにセットすれば、リング状リスト (循環リスト) を作成することができます。

リストは、1 つの基底付き変数の世代だけで構成する必要はありません。複数のポインター値を適切にセットすれば、複数の異なる基底付き構造体または共用体の世代を 1 つのリスト内に入れることができます。それらのポインターの値を操作することによって、リストに項目を追加したり、リストから項目を削除したりすることができます。ポインターを操作することによってリストを再構成することができ、その結果リスト内のデータの処理が簡素化されます。

## ASSIGNABLE 属性と NONASSIGNABLE 属性

ASSIGNABLE 属性と NONASSIGNABLE 属性は、関連づけられた変数が、割り当てのターゲットとなり得るかどうかを指定します。



省略形: ASGN、NONASGN

デフォルト: ASSIGNABLE

変数が NONASSIGNABLE 属性を持つ場合には、この変数は割り当てることができません。

項目記述子に NONASSIGNABLE 属性がある場合、その引数は、対応する ENTRY が呼び出されても変更されないものと見なされます。引数が定数であると、仮引数は作成されません。

ENTRY 記述子に ASSIGNABLE および NONASSIGNABLE 属性を使用することは推奨されません。代わりに、属性 INONLY、INOUT、および OUTONLY を使用するようにしてください。

ASSIGNABLE 属性および NONASSIGNABLE 属性は、構造体または共用体のメンバーに影響を与えます。



省略形: ASGN、NONASGN

デフォルト: ASSIGNABLE

変数が NONASSIGNABLE 属性を持つ場合には、この変数は割り当てることができません。

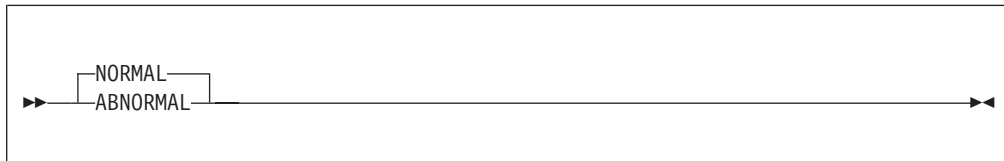
項目記述子に NONASSIGNABLE 属性がある場合、その引数は、対応する ENTRY が呼び出されても変更されないものと見なされます。引数が定数であると、仮引数は作成されません。

ASSIGNABLE 属性および NONASSIGNABLE 属性は、構造体または共用体のメンバーに影響を与えます。

### NORMAL 属性と ABNORMAL 属性

NORMAL 属性と ABNORMAL 属性は、関連づけられた変数が、いつでも変更の対象となるかどうかを指定します。

ABNORMAL 属性は、変数の値が、複数のステートメント間または 1 つのステートメント内で変更可能であることを指定します。ABNORMAL 属性を持つ変数は、必要とされるたびにストレージから取り出され、変更されるたびにストレージに記憶されます。ABNORMAL 属性を持つ変数の場合、どのような最適化も行うことはできません。



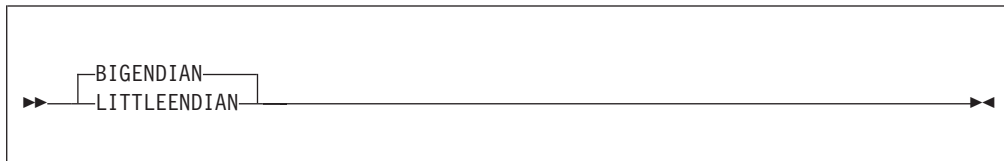
デフォルト: NORMAL

NORMAL 属性および ABNORMAL 属性は、構造体または共用体のメンバーに影響を与えます。

ABNORMAL 属性が、INITIAL 値を持つ INTERNAL STATIC 変数に適用される場合、その変数 (INITIAL 値とともに) は、他の用途に使用されていない場合でも、生成オブジェクト・コードに表示されます。

### BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性

BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性は、関連した変数を格納する際に、最上位数字または最下位数字のどちらを最初に格納するかを指定します。BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性は、FIXED BINARY 変数、ORDINAL 変数、OFFSET 変数、および AREA 変数と、VARYING スtring変数以外では無視されます。



デフォルト: BIGENDIAN。ただし、Intel の場合は LITTLEENDIAN がデフォルトです。

BIGENDIAN は、変数 (可変Stringの場合、変数の長さを表す接頭部) が格納されるときに、最上位バイトが最初に格納されることを表します。このフォーマットは、z/OS と RS/6000 に固有のスタイルです。

LITTLEENDIAN は、それとは逆に変数の最下位バイトが最初に格納されることを表します。このフォーマットは、Windows に固有のスタイルです。

AREA 変数に LITTLEENDIAN または BIGENDIAN 属性が設定されると、コンパイラおよびライブラリーによって管理される制御値を保持するフォーマットだけに影響を与えます。AREA 変数に格納されているユーザー変数、または AREA 変数のユーザー変数を指すのに使われるオフセット変数には、影響しません。

次の例は、BIGENDIAN 変数と LITTLEENDIAN 変数が保管される方法を示したものです。組み込み関数 HEXIMAGE は、X と Y が、実際に保管される方法を明らかにします。

```
decl X fixed bin(15) bigendian;
decl Y fixed bin(15) littleendian;
```

```
X = 258;
Y = 258;
```

```
display(heximage(addr(X), stg(X))); /* displays 0102 */
display(heximage(addr(Y), stg(Y))); /* displays 0201 */
```

対照的に HEX 組み込み関数は、上の例で示された X と Y に関して、次のような処理をします。

```
display (hex(X)); /* displays 0102 */
display (hex(Y)); /* displays 0102 */
```

BIGENDIAN と LITTLEENDIAN は、命令のセマンティクスにはなにも影響を及ぼさず、また変数のストレージ所要量にも影響しません。

BIGENDIAN 属性と LITTLEENDIAN 属性は、構造体または共用体のメンバーに影響を与えます。

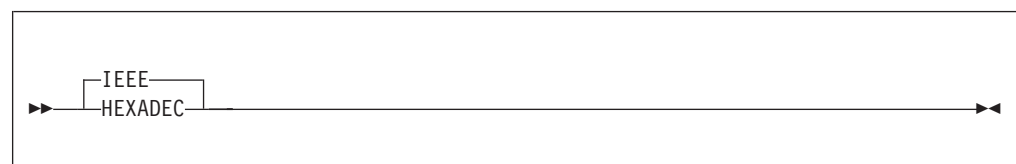
BIGENDIAN と LITTLEENDIAN の使用に関する詳細は、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

NATIVE 属性と NONNATIVE 属性は、BIGENDIAN と LITTLEENDIAN の同義語ですが、これらの属性が BIGENDIAN と LITTLEENDIAN のどちらを意味するかは、システムによって異なります。

- z/OS と RS/600 では、NATIVE は BIGENDIAN を意味します。
- Windows では、NATIVE は LITTLEENDIAN を意味します。

## HEXADEC 属性と IEEE 属性

HEXADEC および IEEE は、関連した変数を保管する際に、IBM 16 進浮動小数点フォーマットを使用するか、IEEE フォーマットを使用するかを指定します。HEXADEC 属性と IEEE 属性は、浮動小数点変数の場合以外には無視されます。



デフォルト: IEEE。ただし、z/OS の場合は HEXADEC がデフォルトです。

## HEXADEC および IEEE

HEXADEC は、変数が 16 進数 (z/OS) フォーマットで保管されることを表します。

IEEE は、変数が IEEE フォーマットを使用して保管されることを表します。

DEFAULT コンパイラー・オプションの HEXADEC と IEEE サブオプションを使用して、この属性のデフォルトを変更することができます。

Windows および AIX プラットフォームでは、すべての計算は、IEEE の浮動小数点を使用して行われるので、HEXADEC で宣言された変数は必要に応じて IEEE に変換されます。

z/OS プラットフォームでは、浮動小数点の計算は、次の 3 セットの浮動小数点命令を使用して行うことができます。

- IBM 16 進浮動小数点
- IEEE 2 進浮動小数点
- IEEE 10 進浮動小数点

z/OS プラットフォームで浮動小数点の計算にどのセットの命令を使用するかは、次の 2 つのコンパイラー・オプションによって決まります。

- FLOAT(DFP) を指定した場合
  - 結果が FLOAT DEC となる計算はすべて、IEEE 10 進浮動小数点命令を使用して行われます。
  - 結果が FLOAT BIN となる計算はすべて、DEFAULT コンパイラー・オプションの HEXADEC および IEEE サブオプションで指定されたフォーマット用の浮動小数点命令を使用して行われます。
- FLOAT(NODFP) を指定した場合
  - 結果が FLOAT となる計算はすべて、DEFAULT コンパイラー・オプションの HEXADEC および IEEE サブオプションで指定されたフォーマット用の浮動小数点命令を使用して行われます。

したがって、FLOAT(NODFP) および DEFAULT(HEXADEC) オプションのもとでは、すべての計算は 16 進浮動小数点命令を使用して行われ、IEEE で宣言された変数は HEXADEC に変換されます。一方、FLOAT(NODFP) および DEFAULT(IEEE) オプションのもとでは、すべての計算は、IEEE 2 進浮動小数点命令を使用して行われ、HEXADEC で宣言された変数は必要に応じて IEEE に変換されます。

FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションのもとでは、IEEE および HEXADEC 属性は FLOAT BIN でのみ有効で、DEFAULT(IEEE/HEXADEC) オプションは FLOAT BIN にのみ適用されます。

---

## CONNECTED 属性と NONCONNECTED 属性

エレメント、配列、および大構造体または複数の共用体は、常に連結ストレージに割り振られます。非連結ストレージへの参照は、より大きな集合からの不連続項目から構成される集合へ参照を行う場合にのみ行われます (197 ページの『配列のクロスセクション』を参照。) 例えば、次の構造体では、介在配列 A.B および A.C は、両方とも非連結ストレージにあります。



```
1 A(10),
2 B,
2 C;
```



省略形: CONN、NONCONN

デフォルト: NONCONNECTED

CONNECTED 属性は、被制御集合パラメーターにしか適用されず、レベル 1 の名前では指定することができません。この属性によって、パラメーターの参照が連結ストレージに限られます。そのため、パラメーターをレコード単位の入出力のターゲットまたはソースとして使用するか、もしくはストリング・オーバーレイ定義の基数として使用することができます。パラメーターが連結であり、CONNECTED 属性が使用される場合、この連結パラメーターへの参照用に、より効率の良いオブジェクト・コードが生成されます。

パラメーターが不連続ストレージを占有している場合、NONCONNECTED を指定しなければなりません。次の例では、NONCONNECTED 属性は、sum\_Slice ルーチンが、連続していない可能性のあるエレメントを持つ 1 次元の配列を処理することを示しています。最初の呼び出しでは、sum\_Slice は最初の行に渡されます。これは連結ストレージにあります。しかし、2 番目の呼び出しでは、sum\_Slice は最初の列に渡されます。これは非連結ストレージにあります。

```
dc1 A(10,10) fixed bin(31);

display(sum_Slice(A(1,*))); /* first row */
display(sum_Slice(A(*,1))); /* first column */

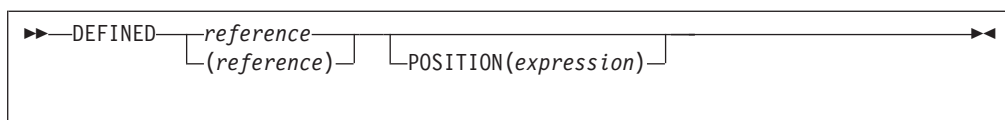
sum_Slice:proc(X) returns(fixed bin(31));

 dc1 X (*) fixed bin(31) nonconnected; /* default */
 return(sum(X));
end;
```

## DEFINED 属性と POSITION 属性

DEFINED 属性は、宣言される変数が、指定された基本変数のストレージの一部または全体に関連付けられることを指定します。

UNION 属性を指定すると、より明快な方法で同じ目的を達することができ、また属性や精度の異なる変数にオーバーレイすることもできます。また、DEFINED 属性では、定義済み変数または基本変数によるアクセスがすべての定義済み変数で反映されますが、共用体では、共用体のメンバーは常に 1 つしか有効ではありません。UNION 属性の構文の詳細については、199 ページの『UNION 属性』を参照してください。



省略形: DEF (DEFINED の場合)、POS (POSITION の場合)

## reference

宣言される変数に関連付けられるストレージを持つ変数 (基本変数) に対する参照。宣言される変数は、定義済み変数 です。基本変数は `EXTERNAL` でも `INTERNAL` でもよく、パラメーターでも構いません (ストリング・オーバーレイ定義の中で、パラメーターは連結ストレージを参照している必要があります)。ただし、`BASED` または `DEFINED` であってはなりません。基本変数の値を変更すると、定義済み変数の値がそれに応じて変更されます。その逆も同様です。

基本変数がデータ集合である場合、定義済み変数はデータ全体で構成することも、データの指定部分だけで構成することもできます。

定義済み変数は、基本変数の属性を継承しません。定義済み変数は INTERNAL にする必要があり、レベル 1 の ID でなければなりません。この変数は次元属性を持つことができます。属性は INITIAL、AUTOMATIC、BASED、CONTROLLED、STATIC、またはパラメーターであってはなりません。

単純、iSUB、およびストリング・オーバーレイの 3 つの定義タイプがあります。

有効になる定義タイプは、次のように決定されます。

1. **POSITION** 属性が指定されている場合は、**STRING・オーバーレイ定義**が有効になります。
2. 基本変数に指定されている添え字に **iSUB** 変数への参照が含まれている場合、**iSUB** 定義が有効になります。
3. **iSUB** 変数も **POSITION** 属性も存在せず、基本変数と定義済み変数が後述の基準に従って一致している場合は、単純定義が有効になります。
4. どれも当てはまらない場合は、**STRING・オーバーレイ定義**が有効になります。

**POSITION** 属性が指定されている場合は、基本変数に **iSUB** 参照が含まれていてはなりません。

基本変数と定義済み変数が一致するのは、引数として渡されたときの基本変数が、定義済み変数の属性 (DEFINED 属性を除く) を持つパラメーターと一致している場合です。このためには、パラメーターの配列の境界、ストリングの長さ、および区域サイズがすべてアスタリスクによって指定されていることが前提になります。

単純定義と iSUB 定義の場合、PICTURE 属性は反復因数を除いて同一の PICTURE 属性にだけ一致します。ストリング・オーバーレイ定義内で参照が有効な基本変数を指定するためには、参照が連結ストレージ内にあることが必要です。マッチング規則は完全にオーバーライドできますが、オーバーライドによってプログラムに意図しない副次作用が出る可能性があります。



配列の境界、ストリングの長さ、または区域サイズに対して指定される値、または派生する値は、基本変数の値と必ずしも一致していなくても構いません。ただし、定義済み変数は、対応する基本配列、ストリング、または区域に収まるようにする必要があります。

定義済みデータを参照する際には、STRINGRANGE、SUBSCRIPTRANGE、および STRINGSIZE の条件が、基本変数ではなく、定義済み変数の配列境界とストリングの長さに生じます。

値の決定と名前の解釈は、次の順序で行われます。

1. 変数を宣言するブロックに入ったときに、定義済み変数の配列境界、ストリングの長さ、および区域サイズが計算されます。
2. 定義済み変数を参照するということは、基本変数の現行世代を参照することです。仮引数が作成されずに、定義済み変数が引数として渡されると、それに対応するパラメーターは、引数が渡された時点での基本変数の現行世代を参照します。呼び込まれたプロシージャー内で基本変数が再割り振りされた場合にも、このことは引き続き当てはまります。
3. 定義済み変数への参照が行われたときに、基本変数と定義済み変数の添え字を評価する順序は定義されていません。

定義済み変数が、位置合わせされていない固定長 BIT であるエレメントが入っている構造体または共用体である場合は、定義済み変数の中のすべての配列境界およびストリング長を、定数として指定する必要があります。

定義済み変数に BIT 属性がある場合、次の条件下では予期しない結果が生じる可能性があります。

- 基本変数がバイト境界上でない
- 定義済み変数が基本変数の最初の位置に定義されておらず、定義済み変数が次の用途に使用されている場合
  - サブルーチン呼び出しのパラメーター (つまり、内部保管データとして参照されている)
  - PUT ステートメントの引数
  - 組み込み関数の引数 (ライブラリー呼び出し)
  - 基本変数が被制御であり、定義済み変数が次元付きで可変の配列境界を指定して宣言されている場合
- 定義済み変数がすべて、位置合わせされていない固定長ビット・ストリングからなる場合、定義済み変数の配列境界、ストリング長、および領域サイズがコンパイル時に分かっている必要があります。

## 非連結ストレージ

DEFINED 属性は配列をオーバーレイできます。このため、配列式は非連結ストレージ内の配列エレメント (ストレージ内で隣接していない配列エレメント) を参照できます。次の場合に、連続したエレメントを含む配列式が非連結ストレージを参照できます。

- ・ スtring配列を、より長いエレメントを持つString配列に対して定義する場合。定義済み配列の連続エレメントは、基本配列と定義済み配列のエレメントの長さに差があるために分離され、非連結ストレージに保管されます。

別の配列に対してオーバーレイ定義された配列は、常に非連結ストレージに入れられることが前提になります。

### 単純定義

単純定義によって、要素変数、配列変数、または構造変数を別の名前で参照できます。

定義済み変数と基本変数は、任意のデータ・タイプで構成できますが、一致している必要があります (前述のとおり)。定義済み変数のエレメントと、対応する基本変数のエレメントごとに、 `ALIGNED` 属性と `UNALIGNED` 属性が一致している必要があります。

定義済み変数は次元属性を持つことができます。

配列の単純定義では、次のことが当てはまります。

- ・ 基本変数には、配列のクロスセクションを指定できます。
- ・ 定義済み変数に対して指定する次元数は、基本変数に対して指定する次元数と等しくなければなりません。
- ・ 定義済み配列の境界の対によって指定される範囲は、対応する基本配列の境界の対によって指定される範囲と等しいか、範囲の中に含まれている必要があります。

Stringの単純定義では、定義済みStringの長さは基本Stringの長さ以下であることが必要です。

区域の単純定義では、定義済み区域のサイズは基本区域のサイズと等しくなければなりません。

定義済み変数の対応部分が同じ最大長の可変Stringであれば、基本変数は可変Stringであっても、また可変Stringを含んでいても構いません。

例:

```
DCL A(10,10,10),
 X1(2,2,2) DEF A,
 X2(10,10) DEF A(*,*,5),
 X3 DEF A(L,M,N);
```

X1 は、A のそれぞれの行、列、および平面のうち、最初の 2 つのエレメントからなる 3 次元配列です。X2 は、A の 5 つ目の平面からなる 2 次元配列です。X3 は、添え字式 L、M、および N によって識別されるエレメントからなるエレメントです。

```
DCL B CHAR(10),
 Y CHAR(5) DEF B;
```

Y は、B の最初の 5 文字からなる文字Stringです。

```
DCL C AREA(500),
 Z AREA(500) DEF C;
```

Z は、C 上で定義される区域です。

```
DCL 1 D UNALIGNED,
 2 E,
 2 F,
 3 G CHAR(10) VAR,
 3 H,
 1 S UNALIGNED DEF D,
 2 T,
 2 U,
 3 V CHAR(10) VAR,
 3 W;
```

S は、D 上で定義される構造体です。単純定義の場合、2 つの構造体の編成は同一でなければなりません。T への参照は E への参照になり、V は G に、その他も同様です。

## iSUB 定義

iSUB 定義を使用すると、基本配列の指定したエレメントからなる定義済み配列を作成できます。定義済み配列と基本配列はスカラー配列でなければならず、任意のデータ・タイプで構成でき、同一の属性を持っている必要があります (次元属性を除く)。

定義済み変数には、次元属性が必要です。定義済み配列の宣言の中で、基本配列には添え字を付ける必要があります、添え字の位置をアスタリスクとして指定することはできません。

iSUB 変数は、基本配列の添え字リスト内での、定義済み配列の次元に対する参照です。基本配列の添え字リストにある少なくとも 1 つの添え字は、iSUB 式でなければなりません。この式は、評価時に基本配列に必要な添え字を指定します。i の値は、n を定義済み配列の次元数として、1 から n までの範囲です。基本配列の添え字の数は、基本配列の次元数と等しくなければなりません。

定義済み配列への参照が添え字式を指定していない場合、添え字の評価は、参照を含む式または割り当ての評価時に行われます。

i の値は整数として指定されます。iSUB 式の中で、iSUB 変数は REAL FIXED BINARY(31,0) 変数として扱われます。

定義済み変数への参照にある添え字は、基本変数の添え字リストに対応する iSUB がない場合でも評価されます。

iSUB 定義済み変数は、GET DATA または PUT DATA ステートメントのデータ・リストに入れることはできません。

例:

```
DCL A(10,10) FIXED BIN
 X(10) FIXED BIN DEF(A(1SUB,1SUB));
```

X は、A の対角線で構成される 1 次元配列です。X(i) は、A(i,i) と同じストレージを参照します。

```
DCL B(5,10) FIXED BIN
 Y(10,5) FIXED BIN DEF(A(2SUB,1SUB));
```

Y は、境界を転置した B のエレメントで構成される 2 次元配列です。Y(i,j) と X(j,i) は同じストレージを参照します。

### ストリング・オーバーレイ定義

ストリング・オーバーレイ定義を使用すると、定義済み変数を基本変数のストレージに関連付けることができます。定義済み変数と基本変数は、両方ともストリングまたはピクチャー・データでなければなりません。

定義済み変数と基本変数のどちらも、ALIGNED 属性または VARYING 属性を持つことはできません。

定義済み変数と基本変数はともに、次のいずれかのクラスに属していなければなりません。

- 次のものからなるビット・クラス
  - 固定長のビット変数
  - 固定長のビット変数の集合体
- 次のものからなる文字クラス
  - 固定長の文字変数
  - 文字ピクチャー変数または数字ピクチャー変数
  - 上記 2 つの集合体
- 次のものからなるグラフィック・クラス
  - 固定長のグラフィック変数
  - 固定長のグラフィック変数の集合体
- 次のものからなるワイド文字クラス
  - 固定長のワイド文字変数
  - 固定長のワイド文字変数の集合体

例:

```
DCL A CHAR(100),
 V(10,10) CHAR(1) DEF A;
```

V は、文字ストリング A のすべてのエレメントからなる 2 次元の配列です。

```
DCL B(10) CHAR(1),
 W CHAR(10) DEF B;
```

W は、配列 B のすべてのエレメントからなる文字ストリングです。

### POSITION 属性

POSITION 属性は、ストリング・オーバーレイ定義だけで使用でき、定義済み変数の先頭になる基本変数内のビット、文字、グラフィック、またはワイド文字を指定します。

POSITION 属性の式は、基本変数の先頭からの相対的な位置を指定します。この式で指定する値は、1 から n の範囲内の値にすることができます。ただし、n は次のように定義されます。

$$n = N(b) - N(d) + 1$$

ここで、N(b) は基本変数のビット、文字、グラフィック、またはワイド文字の数、N(d) は定義済み変数のビット、文字、グラフィック、またはワイド文字の数です。

定義済み項目を参照するたびに、この式が計算され、整数値に変換されます。

POSITION 属性を省略すると、POSITION(1) と見なされます。

定義済み変数がビット・クラス集合である場合、以下の点に注意してください。

- POSITION 属性には整数しか指定できません。
- 基本変数は、添え字付きであってはなりません。

基本変数は、連結ストレージ内のデータを参照している必要があります。

例:

```
DCL C(10,10) BIT(1),
 X BIT(40) DEF C POS(20);
```

X は、C の 20 番目のエレメントから 40 個のエレメントで構成されるビット・ストリングです。

```
DCL E PIC'99V.999',
 Z1(6) CHAR(1) DEF (E),
 Z2 CHAR(3) DEF (E) POS(4),
 Z3(4) CHAR(1) DEF (E) POS(2);
```

Z1 は、10 進数字ピクチャー E のすべてのエレメントからなる文字ストリング配列です。Z2 は、ピクチャー E のエレメント '999' からなる文字ストリングです。

Z3 は、ピクチャー E のエレメント '9.99' からなる文字ストリング配列です。

```
DCL A(20) CHAR(10),
 B(10) CHAR(5) DEF (A) POSITION(1);
```

B の最初の 50 文字は、A の最初の 50 文字からなります。POSITION(1) を明示的に指定しなければなりません。そうしない場合は、単純定義が使用され、結果は異なったものになります。

## INITIAL 属性

INITIAL 属性は、変数にストレージが割り振られるときにその変数に割り当てられる初期値を指定するものです。要素変数には、初期値を 1 つしか指定することができません。配列変数には複数の初期値を指定することができます。共用体変数は、要素変数か配列変数にかかわらず、その基本名を個別に初期化するという方法でのみ初期化することができます。構造体型が定義された変数は、VALUE 型関数を INITIAL 属性と共に使用することで初期化できます。定数、定義済みデータ、制御なしパラメーター、および非 LIMITED 静的入り口変数に、INITIAL 属性を与えることはできません。

INITIAL 属性には以下の形式があります。

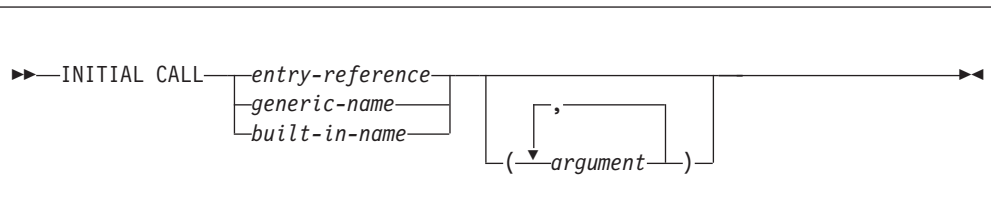
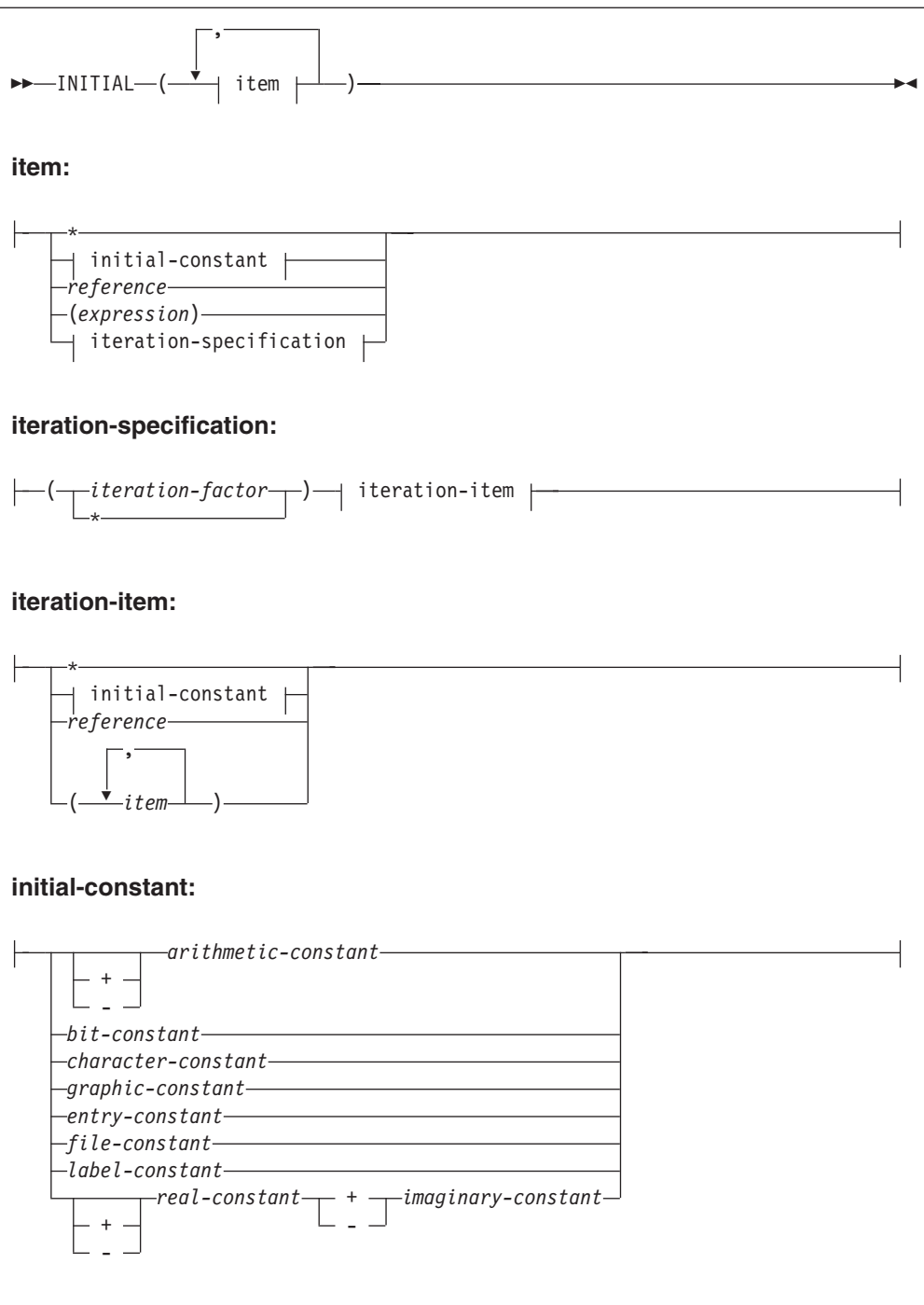
1. 最初の形式 INITIAL では、初期定数、式、または関数参照を指定します。その値が、ストレージ割り振り時に変数に割り当てられます。
2. 2 番目の形式 INITIAL CALL では、初期化を実行するためにプロシーチャーを呼び出すことを (CALL オプションで) 指定します。変数の初期設定は、呼び出

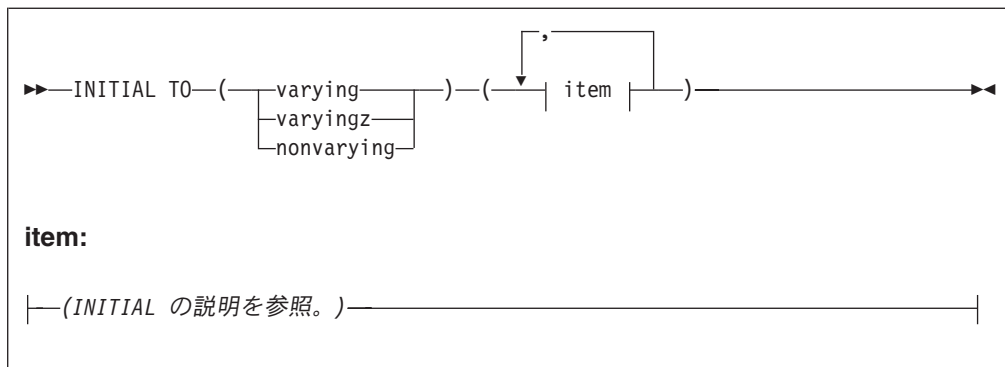
## INITIAL

されたルーチンの実行中に割り当てによって行われます (ルーチンが関数として呼び出されて値を呼び出し点に戻すという方法で初期設定が行われるのではありません)。

3. 3 番目の形式 INITIAL TO では、ポインター (またはポインターの配列) が INITIAL LIST に指定された文字ストリングのアドレスで初期化されることを指定します。また、ストリングにも TO キーワードで示された属性があります。

INITIAL 形式は DEFINE STRUCTURE ステートメントの基本名で使用できますが、INITIAL CALL および INITIAL TO 形式は使用できないことに注意してください。型付き変数の初期化については、749 ページの『VALUE』を参照してください。





## 省略形: INIT、INIT CALL、INIT TO

- \* エレメントを、反復因数として使用する場合を除き、初期化しないままにしておくことを指定します。

## 反復因数

配列のエレメントを初期設定するときに、項目を何回反復するかを指定します。

反復因数は、式であってもアスタリスクであってもかまいません。

- 式は、FIXED BINARY(31) に変換されます。静的変数の場合は、定数でなければなりません。
- アスタリスクは、残りのエレメントを指定された値に初期設定しなければならないことを示します。

反復因数と初期値の両方にアスタリスクを使用することはできません。

反復因数に負またはゼロの値を指定すると、初期設定は行われません。

## constant

## reference

## expression

これらは、初期設定される変数に割り当てられる初期値を指定します。

## INITIAL CALL

INITIAL CALL では、渡される入り口参照および引数リストは、103 ページの『ブロックの活動化』に記載されているような、ブロックを活動化するために設定された条件を、満たしていなければなりません。

INITIAL CALL は、静的データの初期設定に使用することはできません。

次の例では、A のすべてのエレメントは、どのエレメントも INITIAL 属性を必要とすることなく、X'00' に初期設定されています。

```

dcl 1 A automatic,
 2 ...,
 2 ...,
 2 * char(0) initial call plifill(addr(A), '00'X, stg(A));

```

INITIAL CALL 属性を持つ AUTOMATIC 変数は、他の用途に使用されない場合でも保存されます (プログラムのロジックによってコールを実行する必要がある場合に備えて)。

INITIAL CALL ステートメントによって呼び出されたプロシージャータ、FETCH ステートメントまたは RELEASE ステートメントで指定されており、主記憶域に存



在しない場合、INITIAL CALL ステートメントは、そのプロシーチャーの動的ロードを開始します。(動的ロードの詳細については、118 ページの『外部プロシーチャーの動的ロード』を参照してください。)

### INITIAL TO

静的固有のポインターにのみ使用してください。ポインター (または、ポインターの配列) が INITIAL LIST で指定された文字ストリングのアドレスで初期化されることを指定します。また、ストリングに TO キーワードで示された属性があることも指定します。

次の例では、pdays は曜日を含む varyingz ストリングのアドレスの文字で初期化されます。

```
dc1 pdays(7) static ptr init to(varyingz)
 ('Sunday',
 'Monday',
 'Tuesday',
 'Wednesday',
 'Thursday',
 'Friday',
 'Saturday');
```

INITIAL TO で初期化されたポインターによって識別された値を変更しないでください。この値を読み取り専用のストレージに入れることができますが、値を変更しようとするとは記憶保護例外になることがあります。前述の例の配列 pdays では、次の例は正しくない割り当てです。

```
dc1 x char(30) varz based;

pdays(1)->x = 'Sonntag';
```

## 配列変数の初期設定

配列に指定した初期値は、行を主体とした順序で (最後の添え字が最も頻繁に変化する)、配列の連続している各エレメントに割り当てられます。指定されている初期値が多過ぎる場合は、超過している値は無視されます。指定が十分でない場合は、残りの配列は初期設定されません。

ストリングの配列を初期設定するときは、ストリング反復因数と反復因数の両方を指定することができます。どちらか一方だけを指定したときは、ストリング定数が括弧で囲まれていない限り、ストリング反復因数と見なされます。

反復因数は \* で指定できます。この場合は、残りのエレメントがすべて指定された値で初期設定されます。

以下の例は、ストリング反復因数と反復因数の使用法 (および両者の違い) を示しています。

```
((2)'A') は ('AA') と同等です。
((2)('A')) は ('A','A') と同等です。
((2)(1)'A') は ('A','A') と同等です。
((*)(1)'A') は ('A','A'...'A') と同等です。
```

区域変数は、割り振られると EMPTY 組み込み関数の値で初期設定されます。区域変数の INITIAL 文節は無視されます。

INITIAL 属性内の項目の属性とデータ項目自体の属性とが異なっている場合は、これらの属性の間に互換性がある限りにおいて、変換が行われます。

INITIAL 属性は、REFER 文節の対象として使用することはできません。

## 共用体の初期設定

共用体メンバーは、初期値を持つことができます。ただし、共用体が静的である場合、INITIAL 属性を持つことができる共用体のメンバーは 1 つだけです。共用体が静的でない場合、INITIAL 属性は指定された順に適用されます。後続の初期値は、その前の値を重ね書きします。

次の例では、NT1 の宣言は、これが静的ストレージ属性を持つ場合は無効になります。

```
dc1
1 NT1 union automatic,
2 Numeric_translate_table1 char(256)
 init((256)'00'X),
2 *,
3 * char(240),
3 * char(10) init('0123456789'),
2 * char(0);

dc1
1 NT2 union static,
2 Numeric_translate_table2 char(256),
2 *,
3 * char(rank('0'))
 init((1)(low(rank('0'))))),
3 * char(10) init('0123456789'),
3 * char((256-(rank('0'))-10))
 init((1)(low((256-(rank('0'))-10)))),
```

NT2 の宣言は、これが静的ストレージ・クラスを持っても有効です。さらに、NT2 宣言は、EBCDIC の実行モードと ASCII の実行モードの間で移植性があります。

## 静的変数の初期設定

プログラムのロード時に割り振られる変数 (つまり、静的変数) の場合、その変数はプログラムの実行中割り振られたままになっているので、INITIAL 属性で指定した値は 1 回だけ割り当てられます。(フェッチされるプロシーチャーの静的ストレージは、そのプロシーチャーがロードされるたびに割り振られ、初期設定されます。)

静的変数が INITIAL 属性を使用して初期設定される場合、その初期値は制限付き式として指定されなければなりません。エクステントの指定は、制限付き式でなければなりません。

静的変数を初期設定する際の制約事項は、次のとおりです。

- STATIC ENTRY 変数には LIMITED 属性がなければなりません (140 ページの『LIMITED 属性』を参照してください)。
- INITIAL は、静的フォーマット変数には使用することができません。
- INITIAL は、構造体または共用体の一部ではないラベル変数に使用することができます。この場合、ラベル変数は CONSTANT 属性になります。
- INITIAL は、AREA 変数には無効です。

- 静的共用体のただ 1 つのメンバーだけが、INITIAL を指定できます。
- RESERVED 属性を持たない STATIC EXTERNAL 項目が、複数の宣言で INITIAL 属性を指定された場合、指定された値はどのような場合でも同じでなければなりません。

## 自動変数の初期設定

自動変数の場合、その変数は、それを宣言しているブロックが活動化されるたびに割り振られるので、指定した初期値は割り振りのたびに割り当てられます。

## 基底付き変数と被制御変数の初期設定

基底付き変数と被制御変数の場合、その変数は ALLOCATE ステートメント (基底付き変数のときは LOCATE ステートメントも可) の実行時に割り振られるので、指定した初期値は割り振りのたびに割り当てられます。

基底付き変数のストレージが、ALLOCATE や AUTOMATIC 組み込み関数を使用して割り振られると、初期値は割り当てられません。また区域変数の場合では、区域は暗黙にも EMPTY に初期設定されません。

## 例

次の例では、Name にストレージが割り振られたときに、文字定数 'John Doe' (右側にブランクが埋め込まれて 10 文字になる) が Name に割り当てられます。

```
decl Name char(10) init('John Doe');
```

次の例では、Pi が割り振られたときに、それに 3.1416 という値が初期設定されます。

```
decl Pi fixed dec(5,4) init(3.1416);
```

次の例では、式  $B \times C$  の値で A を初期設定することを指定しています。

```
declare A init((B*C));
```

次の例では、A の最初の 920 個のエLEMENTはそれぞれ 0 にセットされ、次の 80 個のエLEMENTは、5,5,5,9 を 20 回繰り返したものになります。

```
declare A (100,10) initial
 ((920)0, (20) ((3)5,9));
```

次の例では、A の第 1、第 3、および第 4 のELEMENTが初期設定されます。配列のその他の部分は初期設定されません。配列 B は全体が初期設定され、最初の 25 個のエLEMENTは 0 に、次の 25 個は 1 に、残りのELEMENTは 0 にそれぞれセットされます。構造体 C では、次元 (8) が D と E に継承されており、D の最初のエLEMENTだけが初期設定されます。E は全部のエLEMENTが初期設定されます。

```
declare A(15) character(13) initial
 ('John Doe',
 *,
 'Richard Row',
 'Mary Smith'),

 B (10,10) decimal fixed(5)
 init((25)0,(25)1,(*)0),
```

```
1 C(8),
 2 D initial (0),
 2 E initial((*)0);
```

構造体または共用体の配列を宣言するときに、別の構造体または共用体と同じ構造体フォーマットにするための **LIKE** 属性を指定した場合、その別の構造体または共用体のエレメントがすでに初期設定されていると、この構造体または共用体の配列における最初の構造体または共用体だけが初期設定されます。

次の例では、構造体の配列において J(1).H と J(1).I だけが初期設定されます。

```
declare 1 G,
 2 H initial(0),
 2 I initial(0),
1 J(8) like G;
```

## 第 11 章 入出力

|                                    |     |                                      |     |
|------------------------------------|-----|--------------------------------------|-----|
| データ・セット . . . . .                  | 296 | BUFFERED 属性と UNBUFFERED 属性 . . . . . | 302 |
| 連続 . . . . .                       | 297 | ENVIRONMENT 属性 . . . . .             | 303 |
| 索引付き . . . . .                     | 297 | KEYED 属性 . . . . .                   | 303 |
| 相対 . . . . .                       | 297 | PRINT 属性 . . . . .                   | 303 |
| 領域内 . . . . .                      | 297 | ファイルのオープンとクローズ . . . . .             | 303 |
| ファイル . . . . .                     | 297 | OPEN ステートメント . . . . .               | 304 |
| FILE 属性 . . . . .                  | 297 | 暗黙オープン . . . . .                     | 306 |
| RECORD 属性と STREAM 属性 . . . . .     | 301 | CLOSE ステートメント . . . . .              | 308 |
| INPUT 属性、OUTPUT 属性、および UPDATE      |     | FLUSH ステートメント . . . . .              | 309 |
| 属性 . . . . .                       | 301 | SYSPRINT および SYSIN . . . . .         | 309 |
| SEQUENTIAL 属性と DIRECT 属性 . . . . . | 302 |                                      |     |

PL/I の入出力ステートメント (READ、WRITE、GET、PUT など) を使用すれば、計算機の主記憶装置と補助記憶装置との間でデータを伝送することができます。プログラムの外部にあるデータの集まりをデータ・セットといいます。データ・セットからプログラムへデータを伝送することを入力といい、プログラムからデータ・セットへデータを伝送することを出力といいます。(端末を使用している場合には、「データ・セット」は端末も意味することがあります。)

PL/I の入出力ステートメントは、データ・セットの論理的な編成に関係するものであり、データ・セットの物理特性とは関係がありません。したがって、プログラムの実行時に使用される入出力装置についての特別な知識がなくても、プログラムを設計することができます。データ・セット内の物理編成ではなく、データの論理的な側面を主眼にソース・プログラムを処理することができるように、PL/I ではファイルと呼ばれるデータ・セットのモデルを採用しています。同じファイルを、プログラムの実行中の別々の時点で、別々のデータ・セットに関連づけることができます。

PL/I には、ストリームとレコードの 2 通りのデータ伝送方法があります。

ストリーム指向データ伝送では、データ・セット内のデータの編成はプログラムでは無視され、データは、文字フォーマットの個々のデータ値が連続するストリームと見なされます。入力の場合は、データは文字フォーマットから内部フォーマットに変換され、出力の場合は、内部フォーマットから文字フォーマットに変換されます。

ストリーム指向データ伝送の詳細については、321 ページの『第 13 章 ストリーム指向データ伝送』を参照してください。

ストリーム指向データ伝送は、文字フォーマットで用意された入力データを処理したり、可読フォーマットの出力を作成したりする (編集する必要がある) 場合に使用することができます。プログラムが対話式システムのもとで実行されているときは、ストリーム指向データ伝送を使用すれば、実行時に端末からプログラムと同期通信することができます。

データの書式作成が可能という点で、ストリーム指向データ伝送はレコード単位データ伝送よりも多様性があります。しかし、その結果、実行時間は増加します。

レコード単位データ伝送では、データ・セットは個別レコードの集まりと見なされます。外部メディア上のレコードは、普通は内部ストレージに入っているレコードをそのままコピーしたものです。レコード単位データ伝送時にはデータ変換は行われません。すなわち、入力の場合は、データはデータ・セットに記録されているとおりの形で伝送され、出力の場合は、データは内部で記録されているとおりの形で伝送されます。

レコード単位データ伝送の詳細については、311 ページの『第 12 章 レコード単位データ伝送』を参照してください。

レコード単位データ伝送は、2 進数、10 進数、または文字などのフォーマットで表記されているデータが入っているファイル进行处理する場合に使用することができます。

レコード単位データ伝送は、ストリーム指向データ伝送に比べて、データの処理方法の点と、処理できるデータ・セットのタイプの点で多様性があります。データは、それが主記憶域にあるとおりの形でデータ・セットに記録されるため、どのようなデータ・タイプでも可能です。なにも変換は行われませんが、ユーザーはデータ構造について確実に把握している必要があります。

同じデータ・セットを、ある時点ではストリーム指向データ伝送で処理し、別の時点ではレコード単位データ伝送で処理することもできます。ただし、その場合は、データ・セット内の項目はすべて文字フォーマットでなければなりません。

この章の以降の節では、データ・セットの種類、ファイルを記述するための属性、およびデータを伝送するためのファイルのオープンとクローズの方法について説明します。PL/I で認識されるデータ・セット編成のタイプの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

---

## データ・セット

データ・セットは、端末から入力したり端末に出力したりする場合に使用されるほかにも、磁気テープ装置、直接アクセス記憶装置 (DASD) などの各種の補助記憶装置メディアに記憶されます。これらの記憶メディアは、その種類に関係なく、データの収集、記憶、伝送を行うための共通の方法を使用できるという特性を持っています。データがデータ・セットにどのように記録され、そのあと、プログラムに伝送されるためにどのように取り出されるかは、データ・セットの編成の仕方によって異なります。データ・セットへのレコードの記憶と、データ・セットからのレコードの取り出しは、連続する物理位置または論理位置に基づいて順次に行われるか、またはデータ伝送ステートメントで指定されたキーを使用して直接行われます。

PL/I は、次のタイプのデータ・セット編成をサポートします。

- 連続
- 索引付き
- 相対
- 領域内

このようなデータ・セット編成は、データの記憶方法とデータのアクセスに使用する手法において異なります。



## 連続

連続データ・セット編成では、レコードは、それらの連続する物理的な位置のみをもとに編成されています。データ・セットが作成されると、レコードは、それらが示される順に続けて書き込まれます。レコードは、それらが書き込まれた順でしか取り出されません。

## 索引付き

索引付きデータ・セット編成では、レコードは、各レコードのキーにもとづいて、論理的な順序で書き込まれます。索引付きデータ・セットは、直接アクセス装置に置かれる必要があります。文字ストリング・キーによって、レコードが識別され、レコードの直接検索、置換、追加、および削除を行うことができます。また、順次処理も行うことができます。

## 相対

相対データ・セット編成では、番号付きレコードが互いに相対的な位置に書き込まれます。レコードは、1 から始まり、続き番号で番号付けされます。相対データ・セットは、直接アクセス装置に置かれる必要があります。レコード番号を指定するキーによって、レコードが識別され、レコードの直接検索、置換、追加、および削除が行われます。また、順次処理も行うことができます。

## 領域内

領域内データ・セット編成は、番号付けされた複数の領域に分割され、その各領域は、レコードを 1 つ持つことができます。領域は、ゼロから始まり、順番に番号付けされます。領域は、データ伝送ステートメント内でその領域番号（また、おそらくキー）を指定することによってアクセスすることができます。キーは領域番号を指定し領域を識別することによって、レコードのすべて直接検索、置換、追加、および削除を最適化することができます。

---

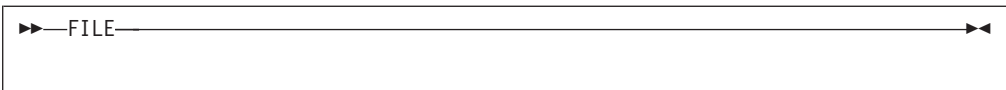
## ファイル

データ・セット内の物理編成ではなく、データの論理的な側面を主眼にソース・プログラムを処理することができるように、PL/I ではファイル と呼ばれるデータ・セットのモデルを採用しています。入出力ステートメントがどのように関連データ・セットにアクセスし、処理するかは、これらのモデルによって異なります。データ・セットとは異なり、ファイルは原始プログラム内では意味を持たず、プログラムの外部で物理的に存在するものではありません。

ファイルを表す名前は、FILE 属性を持っています。

## FILE 属性

FILE 属性は、対応する名前がファイル定数またはファイル変数であることを指定します。



ファイル定数に、いずれかのファイル記述属性が付いていると、そのファイル定数には FILE 属性が暗黙に付けられます。ある名前を、入出力ステートメントの FILE オプションに書くか、または任意の入出力条件に対する ON ステートメント内に書けば、その名前をファイル定数としてコンテキスト上から宣言することができます。

ファイル定数

PL/I プログラムで処理するデータ・セットは、それぞれファイル定数に関連づけられていなければなりません。

それぞれのファイル定数の個々の特性は、ファイル記述属性によって記述されます。これらの属性は、代替属性と追加属性の 2 つのカテゴリーに分類されます。

代替 属性とは、属性のグループ内から選択される属性です。あるグループ内の択一属性の 1 つが明示的にも暗黙的にも宣言されておらず、しかもそのグループ内の属性が必須である場合には、デフォルトの属性が使用されます。

表 29 では、PL/I の代替ファイル属性をリストしています。

表 29. 代替ファイル属性

| グループ・タイプ    | 代替属性                                                | デフォルトの属性                                                                             |
|-------------|-----------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 使用法関数       | STREAM または RECORD<br>INPUT または OUTPUT または<br>UPDATE | STREAM<br>INPUT                                                                      |
| アクセスバッファリング | SEQUENTIAL または DIRECT<br>BUFFERED または<br>UNBUFFERED | SEQUENTIAL<br>BUFFERED<br>(SEQUENTIAL ファイルの場合)<br><br>UNBUFFERED<br>(DIRECT ファイルの場合) |
| 有効範囲        | EXTERNAL または INTERNAL                               | EXTERNAL                                                                             |

追加 属性とは、明示的に宣言しなければならない属性、または明示的に宣言された別の属性によって暗黙に定義される属性です。追加属性には、ENVIRONMENT、KEYED および PRINT があります。追加属性 KEYED は、DIRECT 属性によって暗黙に定義されます。追加属性 PRINT は、出力ファイル名 SYSPRINT によって暗黙に定義することができます。

表 30 は、それぞれのデータ伝送タイプに適用される属性を示したものです。

表 30. データ伝送のタイプによる属性

| 伝送のタイプ  | 属性                                       |
|---------|------------------------------------------|
| ストリーム指向 | ENVIRONMENT<br>INPUT および OUTPUT<br>PRINT |



表 30. データ伝送のタイプによる属性 (続き)

| 伝送のタイプ | 属性                      |
|--------|-------------------------|
| レコード単位 | STREAM                  |
|        | BUFFERED および UNBUFFERED |
|        | DIRECT および SEQUENTIAL   |
|        | ENVIRONMENT             |
|        | INPUT、OUTPUT、および UPDATE |
|        | KEYED                   |
|        | RECORD                  |

表 31 には、ファイル属性の正しい組み合わせが示されています。

表 31. PL/I ファイルを宣言するときの属性

| ファイル・<br>タイプ       | S<br>T<br>R<br>E<br>A<br>M                          | RECORD                                              |                                      |                                 |                                      |                                 | 凡例:                                                |
|--------------------|-----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|----------------------------------------------------|
|                    |                                                     | SEQUENTIAL                                          |                                      |                                 | DIRECT                               |                                 |                                                    |
| データ・<br>セットの<br>編成 | C<br>o<br>n<br>s<br>e<br>c<br>u<br>t<br>i<br>v<br>e | C<br>o<br>n<br>s<br>e<br>c<br>u<br>t<br>i<br>v<br>e | R<br>e<br>l<br>a<br>t<br>i<br>v<br>e | I<br>n<br>d<br>e<br>x<br>e<br>d | R<br>e<br>l<br>a<br>t<br>i<br>v<br>e | I<br>n<br>d<br>e<br>x<br>e<br>d | I指定または暗黙指定が必要<br>Dデフォルト<br>Oオプション<br>S指定が必要<br>-無効 |
| ファイル属性             |                                                     |                                                     |                                      |                                 |                                      |                                 | 暗黙指定属性                                             |

|                     |   |   |   |   |   |   |                    |
|---------------------|---|---|---|---|---|---|--------------------|
| FILE                | I | I | I | I | I | I |                    |
| INPUT <sup>1</sup>  | D | D | D | D | D | D | FILE               |
| OUTPUT              | O | O | O | O | O | O | FILE               |
| ENVIRONMENT         | O | O | O | O | O | O | FILE               |
| STREAM              | D | - | - | - | - | - | FILE               |
| PRINT <sup>1</sup>  | O | - | - | - | - | - | FILE STREAM OUTPUT |
| RECORD              | - | I | I | I | I | I | FILE               |
| UPDATE <sup>2</sup> | - | O | O | O | O | O | FILE RECORD        |
| SEQUENTIAL          | - | D | D | D | - | - | FILE RECORD        |
| KEYED <sup>3</sup>  | - | - | O | O | I | I | FILE RECORD        |
| DIRECT              | - | - | - | - | S | S | FILE RECORD KEYED  |

注:

<sup>1</sup> INPUT 属性を持つファイルは、PRINT 属性を持つことはできません。

<sup>2</sup> UPDATE は、テープ・ファイルには無効です。

<sup>3</sup> KEYED は、INDEXED 出力と RELATIVE 出力の場合は必須です。

有効範囲については、173 ページの『宣言の有効範囲』で説明されています。

ファイル定数に、この章で説明しているいずれかのファイル記述属性が付いていると、そのファイル定数には FILE 属性が暗黙に付けられます。ある名前を、入出力ステートメントの FILE オプションに書くか、または任意の入出力条件に対する ON ステートメント内に書けば、その名前をファイル定数としてコンテキスト上から宣言することができます。

次の例では、名前 Master は、ファイル定数として宣言されています。

```
declare Master file;
```

### ファイル変数

ファイル変数は、FILE 属性と VARIABLE 属性を持ちますが、どのファイル定数記述属性も持つことはできません。ファイル変数には、ファイル定数を割り当てることができます。割り当て後、ファイル変数を参照することは、割り当てられたファイル定数を参照することと同じになります。

レコード単位の伝送ステートメントを使用して、データ・セットのファイル変数の値を伝送することができます。伝送後は、そのデータ・セットのファイル変数の値は有効でないことがあります。

VARIABLE 属性は、58 ページの『VARIABLE 属性』で説明されている環境において暗黙に定義されます。

次の例に示す宣言 Account はファイル変数として宣言され、Acct1 と Acct2 は、ファイル定数として宣言されています。このあと、これらのファイル定数をこのファイル変数に割り当てることができます。

```
declare Account file variable,
 Acct1 file,
 Acct2 file;
```

構文については、58 ページの『VARIABLE 属性』を参照してください。

### ファイル参照の指定

ファイル参照は、ファイル定数、ファイル変数、または FILE 属性を持つ値を戻す関数参照のいずれかです。ファイル参照は、次のように使用することができます。

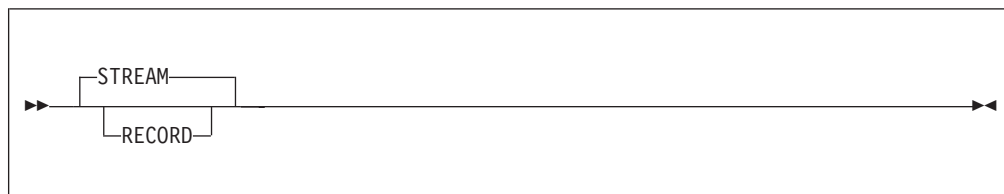
- FILE または COPY オプション内で、使用されます。
- 関数またはサブルーチンに渡される引数として使用されます。
- ON、SIGNAL、および REVERT ステートメントの入出力条件を修飾するために使用されます。
- RETURN ステートメント内の式として、使用されます。

ファイル定数の値を表すファイル変数を利用して、そのファイル定数用の ON ユニットを設定できます (382 ページの『ファイル変数のための ON ユニット』を参照してください)。次の例では、L1 と L2 のラベルが付いている 2 つのステートメントは、同じファイルに対してヌルの ON ユニットを指定しています。

```
dcl F file,
 G file variable;
G=F;
L1: on endfile(G);
L2: on endfile(F);
```

## RECORD 属性と STREAM 属性

RECORD 属性と STREAM 属性は、ファイルに使用されるデータ伝送の種類を表します。



### デフォルト設定: STREAM

RECORD は、そのファイルが物理的に別個のレコードの集まりから構成されており、各レコードは任意のフォーマットの 1 つまたは複数のデータ項目から構成されていることを示すものです。各レコードは、1 つのエントリティとして、変数との間で伝送されます。

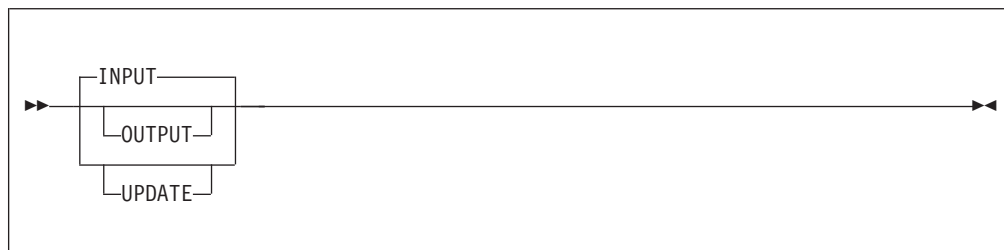
STREAM は、そのファイルのデータが文字フォーマットのデータ項目の連続するストリームであり、そのストリームから各変数へ、またはそれぞれの式からそのストリームへ割り当てられることを示すものです。

STREAM 属性を持つファイルは、OPEN、CLOSE、GET、および PUT 入出力ステートメントの FILE オプションでのみ指定することができます。

RECORD 属性を持つファイルは、OPEN、CLOSE、READ、WRITE、REWRITE、LOCATE、および DELETE 入出力ステートメントの FILE オプションでのみ指定することができます。

## INPUT 属性、OUTPUT 属性、および UPDATE 属性

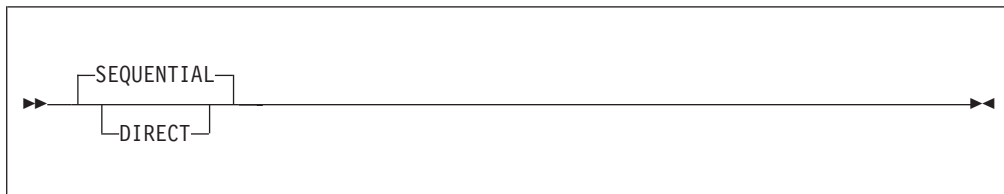
INPUT、OUTPUT および UPDATE の各機能属性は、ファイルに対して行うことができるデータ伝送の方向を表します。INPUT は、データ・セットからプログラムへデータを伝送することを表します。OUTPUT は、新しいデータ・セットを作成するために、または既存データ・セットを拡張するために、プログラムからデータ・セットへデータを伝送することを表します。UPDATE (RECORD ファイルにのみ適用される) は、どちらの方向へもデータを伝送できることを表します。SEQUENTIAL ファイルの場合、UPDATE 属性の宣言は「その場所で更新」モードを表します。



### デフォルト設定: INPUT

## SEQUENTIAL 属性と DIRECT 属性

SEQUENTIAL アクセス属性と DIRECT アクセス属性は、RECORD ファイルにのみ適用され、ファイル内のレコードをどのようにアクセスするかを表します。



省略形: SEQUENTIAL の場合は SEQL

デフォルト設定: SEQUENTIAL

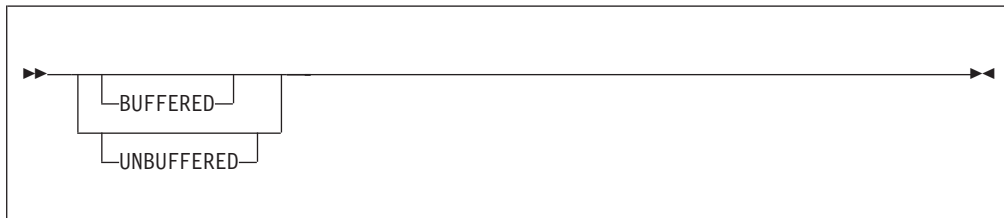
DIRECT 属性は、データ・セットのレコードを直接アクセスできることを表します。データ・セット内のレコードの位置は、文字ストリングであるキーによって突き止められます。したがって、DIRECT 属性を指定すると、KEYED 属性が暗黙に定義されます。関連データ・セットは、直接アクセス記憶装置上になければなりません。

SEQUENTIAL 属性は、連続データ・セットまたは相対データ・セットのレコードを物理的な順序でアクセスすること、および索引付きデータ・セットのレコードをキー・シーケンス順でアクセスすることを表します。ある一定のデータ・セット編成では、SEQUENTIAL 属性を持つファイルを直接アクセスのために使用したり、ランダム・アクセスと順次アクセスの混合のために使用したりすることができます。この場合、そのファイルは追加属性 KEYED を持っていなければなりません。

SEQUENTIAL UPDATE ファイルの場合は、データ・セットの既存のレコードを変更することも、無視することも、(データ・セットが INDEXED のときに) 削除することもできます。

## BUFFERED 属性と UNBUFFERED 属性

バッファリング (緩衝技法) 属性は、RECORD ファイルにのみ適用されます。



省略形: BUFFERED の場合は BUF、また UNBUFFERED の場合は UNBUF

デフォルト設定: BUFFERED は SEQUENTIAL ファイルのデフォルトです。  
UNBUFFERED は、DIRECT ファイルのデフォルトです。

BUFFERED 属性は、RECORD ファイルの各レコードが、データ・セットへ伝送される時、またはデータ・セットから伝送される時に、中間記憶バッファを通らなければならないことを表します。これによって、移動モード処理と位置指定モード処理の両方を行うことができます。

UNBUFFERED 属性は、データ・セットのレコードがバッファを通る必要がなく、変数に関連づけられている主記憶域へ、またはその主記憶域から、直接に伝送できることを表します。このため、移動モード処理しか行うことができません。

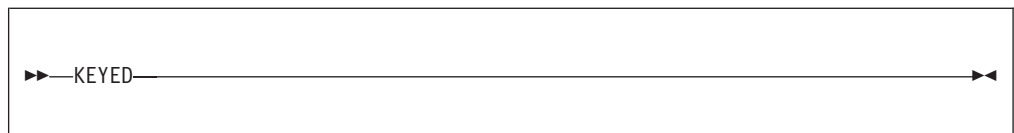
## ENVIRONMENT 属性

ENVIRONMENT 属性の特性リストは、PL/I 言語の一部でない各種のデータ・セット特性を指定します。特性と使用法の完全なリストと説明については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

注：特性は PL/I 言語の一部ではないため、それらの特性をファイル宣言で使用すると、アプリケーション・プログラムの移植性が制限されることがあります。

## KEYED 属性

KEYED 属性は、RECORD ファイルにのみ適用され、索引付きデータ・セットおよび相対データ・セットに関連づけられなければなりません。この属性は、ファイル内のレコードを、レコード入出力ステートメントのキー・オプションのいずれか 1 つ (KEY、KEYTO、または KEYFROM) によってアクセスできることを表します。



どのキー・オプションも使用しない場合は、KEYED 属性を指定する必要はありません。

## PRINT 属性

PRINT 属性については、343 ページの『PRINT 属性』を参照してください。

---

## ファイルのオープンとクローズ

ファイルがデータ・セットに関連づけられていないうちは、そのファイルを入出力ステートメントによるデータ伝送に使用することはできません。ファイルをオープンするということは、ファイルをデータ・セットに関連づけることであり、外部記憶メディアが使用可能かどうかを調べ、そのメディアの位置を決め、必要なオペレーティング・システム・サポートを割り振るということです。処理の完了時には、ファイルはクローズされなければなりません。ファイルをクローズするということは、ファイルとデータ・セットの関係を解くことです。

PL/I には、これらの機能を行うために、OPEN と CLOSE という 2 つのステートメントがあります。ただし、これらのステートメントを使用するかどうかはオプションです。OPEN ステートメントが実行されなかったファイルは、そのファイルを

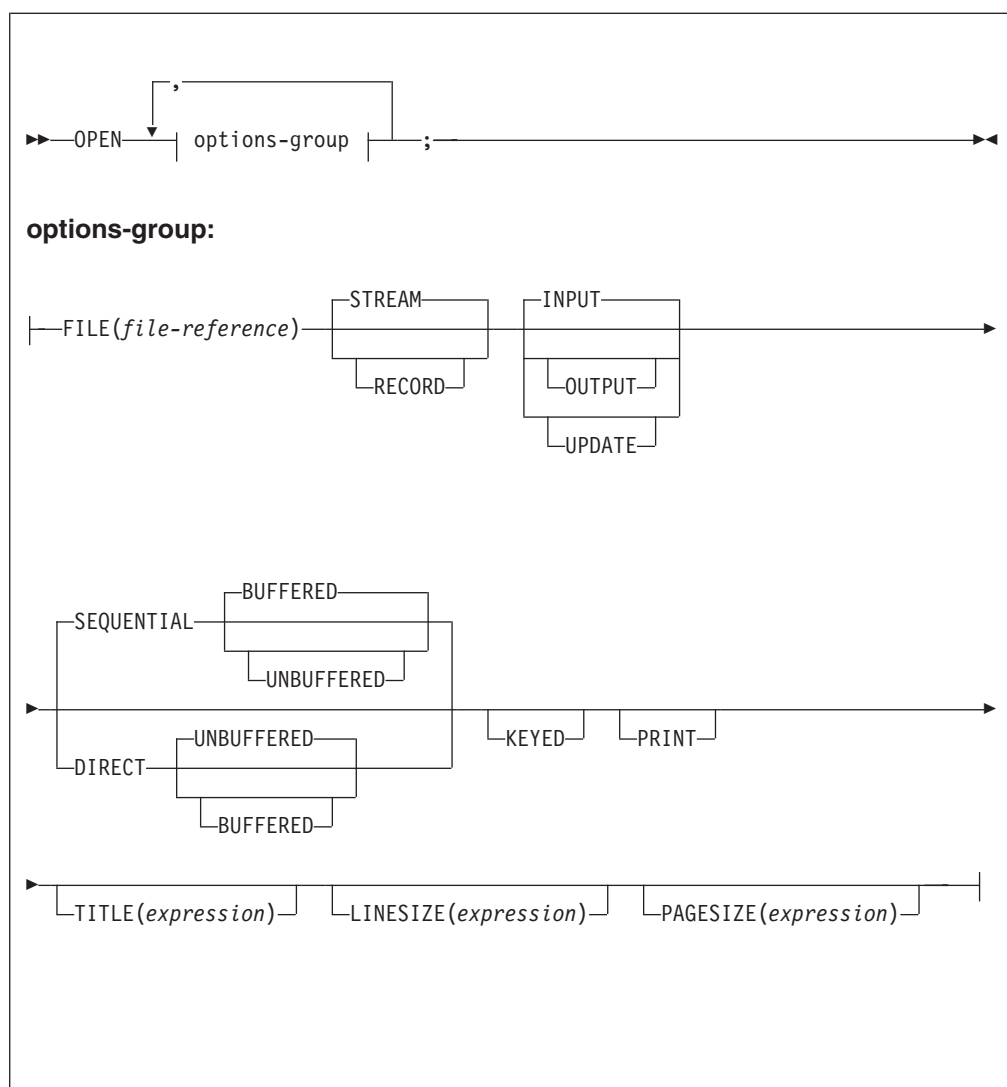
## ファイルのオープンとクローズ

参照する最初のデータ伝送ステートメントが実行されている間に暗黙にオープンされます。この場合、**DECLARE** ステートメントで指定されたファイル情報（および伝送ステートメントから派生するデフォルトの値）を使用してファイルがオープンされます。同様に、ファイルが **PL/I** の終了前にクローズされない場合、**PL/I** は終了処理中にそのファイルをクローズします。

ストリーム入力、順次入力、または順次更新のファイルがオープンされたときは、関連データ・セットは最初のレコードに位置付けられます。

## OPEN ステートメント

**OPEN** ステートメントは、ファイルをデータ・セットに関連づけます。これによって、**OPEN** ステートメントで指定された属性と **DECLARE** ステートメントで指定された属性が組み合わせられます。また、オープンされるファイルに必要な属性の一部がまだ宣言されていない場合は、このステートメントでファイルの属性の指定を完成させることができます。



**OPEN** ステートメントのオプションの指定順序は任意です。

**FILE**

データ・セットに関連付けられるファイルの名前を指定します。

**STREAM, RECORD,  
INPUT, OUTPUT, UPDATE,  
DIRECT, SEQUENTIAL,  
BUFFERED, UNBUFFERED,  
KEYED, および PRINT**

これらのオプションは、ファイル宣言で指定した属性を補足する属性を表します。同一ファイルを参照する OPEN ステートメントと DECLARE ステートメントの両方で、同じ属性を指定する必要はありません。レコード入出力とストリーム入出力の属性のリストは、298 ページの表 30 を参照してください。

STREAM ファイルがオープンされると、最初の GET または PUT ステートメントは、ステートメント・オプションまたはフォーマット項目により、アクセスする最初のレコードを指定できます。ステートメント・オプションまたはフォーマット項目は、 $n$  行をスキップしたあとにレコードにアクセスすることを指定します。ついで、ファイルは  $n$  番目のレコードの先頭に位置づけられます。ステートメント・オプションまたはフォーマット項目がない場合、初期ファイルは、最初の行もしくは最初のレコードの先頭に位置づけられます。そのファイルが PRINT 属性を持っているときは、最初の行または最初のレコードの 1 桁目に物理的に位置づけられます。

すでにオープンされているファイルをオープンしても、そのファイルに影響はありません。

**TITLE**

*expression* (式) の内容によって、なにが指定されているかがわかります。

TITLE 属性の詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

**LINESIZE**

このファイルに対する後続の処理での行の長さ (バイト数) を表す値で、整数値に変換されます。印刷フォーマット項目や制御フォーマット項目を使用することによって、あるいは GET または PUT ステートメントのオプションによって、新しい行を開始することができます。新しい行を開始するための明示的な処置が取られる前に、行の終わりを越えた位置にファイルを位置付けようとすると、新しい行が開始され、この新しい行の始まりにファイルが位置付けられます。

PRINT ファイルのデフォルトの行サイズは 120 です。

LINESIZE オプションは、STREAM OUTPUT ファイルの場合にのみ指定することができます。

**PAGESIZE**

計算後、整数値に変換される、1 ページあたりの行数を表す値です。この限界値を超えるような操作が試みられた最初の時点で ENDPAGE 条件が起きます。そのあと、PRINT ファイルへの伝送時に、PAGE フォーマット項目を使用することによって、あるいは PUT ステートメントの PAGE オプションによって、新しいページを開始することができます。デフォルトのページ・サイズは 60 です。



PAGESIZE オプションは、PRINT 属性を持っているファイルにのみ指定することができます。

## 暗黙オープン

OPEN ステートメントがまだ実行されていないファイルを参照する GET、PUT、READ、WRITE、LOCATE、REWRITE、または DELETE ステートメントが実行されると、そのファイルは暗黙にオープンされます。

COPY オプション付きの GET ステートメントが実行されると、COPY オプションで指定したファイル、または出力ファイル SYSPRINT (COPY オプションでファイルの指定を省略したとき) が暗黙にオープンされることがあります。COPY オプションで指定したファイルが暗黙にオープンされると、STREAM 属性と OUTPUT 属性が暗黙に定義されます。

表 32 は、左欄のステートメントによってファイルが暗黙にオープンされたとき、暗黙に定義される属性を示したものです。

表 32. 暗黙オープンによって暗黙に定義される属性

| ステートメント | 暗黙に定義される属性                 |
|---------|----------------------------|
| GET     | STREAM、INPUT               |
| PUT     | STREAM、OUTPUT              |
| READ    | RECORD、INPUT <sup>注</sup>  |
| WRITE   | RECORD、OUTPUT <sup>注</sup> |
| LOCATE  | RECORD、OUTPUT、SEQUENTIAL   |
| REWRITE | RECORD、UPDATE              |
| DELETE  | RECORD、UPDATE              |

注:

UPDATE が明示的に宣言されていない場合に限り、INPUT および OUTPUT が READ および WRITE ステートメントのデフォルト属性になります。

表 32 のいずれかのステートメントによってファイルを暗黙にオープンするということは、上記と同じ属性が指定されているファイルに明示的な OPEN ステートメントを使用することと同じ効果があります。

ファイル宣言内に指定した属性と、ファイルをオープンした結果として暗黙に定義される属性との間に、矛盾があってはなりません。例えば、INPUT 属性と UPDATE 属性は矛盾しており、UPDATE 属性と STREAM 属性も矛盾しています。

表 32 にリストされたデフォルトの属性が適用される前に、前述の暗黙の属性が適用されます。暗黙に定義される属性が矛盾を引き起こすこともあります。デフォルトの属性が適用されたあとで属性が矛盾していると、UNDEFINEDFILE 条件が起こります。



表 33. 組み合わせ後の属性と暗黙に定義される属性

| 組み合わせ後の属性  | 暗黙に定義される属性    |
|------------|---------------|
| UPDATE     | RECORD        |
| SEQUENTIAL | RECORD        |
| DIRECT     | RECORD、KEYED  |
| PRINT      | OUTPUT、STREAM |
| KEYED      | RECORD        |

次の 2 つの例で、ファイル定数とファイル変数を使用して明示的にオープンしたときに組み合わせられる属性を示します。

### ファイル定数の例

```
declare Listing file stream;
open file(Listing) print;
```

OPEN ステートメントが実行されると、属性が組み合わせられて、STREAM と PRINT という属性が付けられます。暗黙の属性が適用されて、属性は STREAM、PRINT、および OUTPUT となります。デフォルトが適用されたあとの属性は、STREAM、PRINT、OUTPUT、および EXTERNAL となります。

### ファイル変数の例

```
declare Account file variable,
 (Acct1,Acct2) file
 output;

Account = Acct1;
open file(Account) print;

Account = Acct2;
open file(Account) record unbuf;
```

ファイル Acct1 がオープンされて、その属性 (明示的に宣言された属性と暗黙に定義された属性) は STREAM、EXTERNAL、PRINT、および OUTPUT になります。ファイル Acct2 が、RECORD、EXTERNAL、および OUTPUT の各属性を付けてオープンされます。

### 暗黙オープンの例

```
declare Master file keyed internal;

read file (Master)
 into (Master_Record)
 keyto(Master_Key);
```

組み合わせ (READ ステートメントの実行による暗黙オープンのため) 後の属性は、KEYED、INTERNAL、RECORD、INPUT です ( そのほかに暗黙に定義される属性はありません)。デフォルトが適用されたあとの属性は、KEYED、INTERNAL、RECORD、INPUT、SEQUENTIAL です。

### ファイル定数の宣言の例

```
declare File3 input direct environment(regional(1))
```

## 暗黙オープン

この宣言は 3 つのファイル属性、INPUT、DIRECT、および ENVIRONMENT を指定します。その他の暗黙に定義される属性は、FILE (3 つのうちどの属性によっても暗黙に定義される)、および RECORD と KEYED (DIRECT によって暗黙に定義される) です。有効範囲は、デフォルトによって EXTERNAL となります。ENVIRONMENT 属性は、データ・セットが REGIONAL(1) 編成であることを表します。

先の宣言では、必要なすべての属性が DECLARE ステートメントで指定されているか、または暗黙に定義されています。これらの属性を、OPEN ステートメントで変更 (または無効に) することはできません。

次の例のように宣言しておけば、invntry を別々の目的でオープンすることができます。

```
declare invntry file;
```

次の例では、ファイル属性は、先の例の DECLARE ステートメントで指定された (あるいは暗黙に定義される) 属性と同じになります。

```
open file (Invntry)
 update sequential;
```

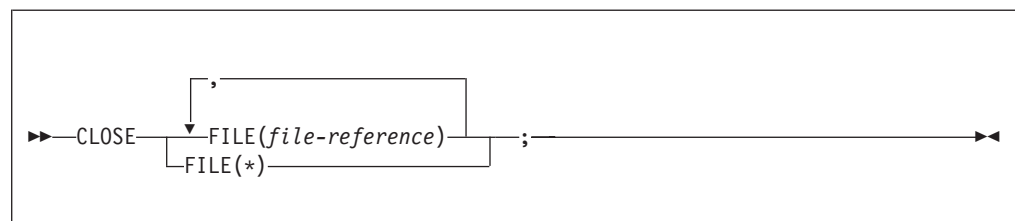
このようにしてオープンされたファイルがクローズされたあとであれば、別の一組の属性を指定して同じファイルをオープンすることができます。例えば、次の OPEN ステートメントを使用すれば、KEYTO または KEY オプションを使用してレコードを読み取ることができます。

```
open file (Invntry)
 input sequential keyed;
```

ファイルは SEQUENTIAL であるので、このデータ・セットを順次にアクセスすることも、さらに、READ ステートメントで KEY オプションを指定すれば直接にアクセスすることもできます。この種のファイルの場合、READ ステートメントで KEY オプションを指定すれば、指定したレコードが読み取られます。後続の READ ステートメントで KEY オプションを省略すると、KEY 順の次のレコードから順次に読み取られます。

## CLOSE ステートメント

CLOSE ステートメントは、そのデータ・セットからオープンされたファイルを分離します。



### FILE

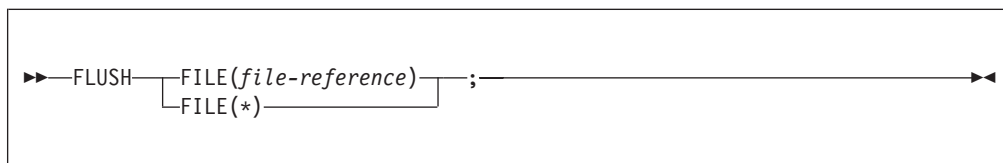
データ・セットから分離されるファイルの名前を指定します。CLOSE FILE(\*) と指定すると、オープンしているファイルがすべてクローズされます。

CLOSE ステートメントは、明示的にまたは暗黙にオープンされたときにセットされたすべてのファイル属性を、ファイルから切り離すこともします。必要ならば、後続の OPEN ステートメントで、この同じファイルに対して新しい属性を指定することができます。ただし、DECLARE ステートメントでこのファイル定数に明示的に与えた属性は、そのまま効力を持ち続けます。

すでにクローズされたファイルをクローズしても、なんの影響もありません。クローズされたファイルは再びオープンすることができます。CLOSE ステートメントを使用してファイルをクローズしなくても、ファイルは、プログラムの終了時にクローズされます。

## FLUSH ステートメント

FLUSH ステートメントは、1 つまたはすべてのファイルをフラッシュするのに使用します。



### FILE

出力ファイルの名前を指定します。

FLUSH ステートメントはオープンしている 1 つの出力ファイル (\* を指定した場合はオープンしているすべての出力ファイル) に関連したバッファをフラッシュします。このような処理は通常はファイルのクローズ時やプログラムの終了時に起きますが、FLUSH ステートメントを指定すると、確実にバッファがフラッシュされてから他の処理に進むようにすることができます。

## SYSPRINT および SYSIN

すべての PL/I プログラム用に使用できるファイルが 2 つ提供されています。1 つは入力ファイル SYSIN、もう 1 つは出力ファイル SYSPRINT です。これらのファイルは、明示的に宣言したりオープンしたりする必要はありません。SYSIN のデフォルト属性は STREAM INPUT で、SYSPRINT のデフォルト属性は STREAM OUTPUT PRINT です。SYSPRINT は 7 文字を超えていますが、SYSIN と SYSPRINT のどちらのファイル名もデフォルト属性 EXTERNAL を持っています。

コンパイラは、上に説明した特殊用途のために SYSIN および SYSPRINT という名前を予約していません。これらの名前は、SYSIN ファイルと SYSPRINT ファイルを識別すること以外の用途にも使用できます。SYSIN と SYSPRINT には他の属性を適用できますが、SYSPRINT が STREAM OUTPUT ファイルとして宣言またはオープンされる場合は、INTERNAL 属性が宣言されていなければデフォルトで PRINT 属性が適用されます。



---

## 第 12 章 レコード単位データ伝送

|                                |     |                         |     |
|--------------------------------|-----|-------------------------|-----|
| データ伝送 . . . . .                | 311 | FILE オプション . . . . .    | 315 |
| 位置合わせされていないビット・ストリング . . . . . | 311 | FROM オプション . . . . .    | 315 |
| 可変長ストリング . . . . .             | 312 | IGNORE オプション . . . . .  | 316 |
| 区域変数 . . . . .                 | 312 | INTO オプション . . . . .    | 316 |
| データ伝送ステートメント . . . . .         | 312 | KEY オプション . . . . .     | 317 |
| READ ステートメント . . . . .         | 313 | KEYFROM オプション . . . . . | 317 |
| WRITE ステートメント . . . . .        | 313 | KEYTO オプション . . . . .   | 318 |
| REWRITE ステートメント . . . . .      | 314 | SET オプション . . . . .     | 318 |
| LOCATE ステートメント . . . . .       | 314 | 処理モード . . . . .         | 319 |
| DELETE ステートメント . . . . .       | 315 | 移動モード . . . . .         | 319 |
| データ伝送ステートメントのオプション . . . . .   | 315 | 位置指定モード . . . . .       | 319 |

この章では、レコード単位データ伝送に使用される入出力ステートメントの機能を説明します。レコード単位データ伝送とストリーム指向データ伝送の両方に同じように適用される PL/I の機能 (ファイルの宣言、ファイル属性、およびファイルのオープンとクローズなど) については、『第 11 章 入出力』で説明しています。ENVIRONMENT 属性の構文については、303 ページの『ENVIRONMENT 属性』を参照してください。それぞれのデータ・セット編成ごとの環境特性とレコード入出力データ伝送ステートメントの詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

レコード単位データ伝送では、データ・セット内のデータは、オペレーティング・システムで受け入れ可能な任意のフォーマットで記録されているレコードの集まりです。レコード単位データ伝送時には、データ変換は行われません。つまり、入力の場合は、READ ステートメントが実行されると、1 つのレコードがデータ・セット内に記録されているとおりの形でプログラム変数に伝送されるか、あるいはレコードを指すポインターがセットされます。出力の場合は、ステートメント WRITE、REWRITE、または LOCATE が実行されると、1 つのレコードが内部的に記録されているとおりの形でプログラム変数から伝送されます。ファイルに伝送された情報の長さが N (設定されたレコード長 M より小さい) である場合、最新の M から N を引いたバイト数の結果の値は未定義です。

---

### データ伝送

パラメーターや DEFINED 変数も含むほとんどの変数を、レコード単位データ伝送ステートメントで伝送することができます。一般に、この章で説明することがらは、すべての変数にあてはまります。

注: データ集合は、連結ストレージ内になければなりません。 入力または出力に漢字ストリングを指定する場合は、そのファイルに SCALARVARYING オプションを指定しなければなりません。 データについてのその他の考慮事項は、以降の節で説明しています。

### 位置合わせされていないビット・ストリング

次のものを伝送することはできません。

## 位置合わせされていないビット・ストリング

- 位置合わせされていない固定長ビット・ストリングである BASED 変数、DEFINED 変数、パラメーター変数、添え字付き変数、または構造体基本エレメント変数。
- 位置合わせされていない固定長ビット・ストリングを最初または最後の基本エレメントとして持つ小構造体 (ただし、その基本エレメントが、その小構造体を含んでいる大構造体の最初または最後のエレメントである場合を除きます)。
- DEFINED 属性を持つ大構造体か、またはパラメーターである大構造体のうち、位置合わせされていない固定長ビット・ストリングを最初または最後のエレメントとして持つもの。

## 可変長ストリング

可変長ストリングを指定した位置指定モードの出力ステートメント (314 ページの『LOCATE ステートメント』を参照してください) は、そのストリングの最大長に等しい長さを持つフィールドを伝送します。VARYINGZ ストリングでは、ヌル終了文字も伝送されます。VARYING ストリングでは、ストリングの現行の長さを示す 2 バイトの接頭部も伝送されます。このため、ENVIRONMENT 属性の SCALARVARYING オプションをファイルに指定する必要があります。

可変長ストリング変数を指定してある移動モードの出力ステートメント (313 ページの『WRITE ステートメント』および 314 ページの『REWRITE ステートメント』を参照してください) は、ストリングの現行の長さだけ伝送します。VARYINGZ ストリングでは、ヌル終了文字も伝送されます。VARYING ストリングでは、ENVIRONMENT 属性の SCALARVARYING オプションがファイルに指定されている場合のみ、2 バイトの接頭部と一緒に伝送されます。

読み取りと書き込みに可変長ストリングを使用すると、未定義または未知の長さを持つことができるレコードにアクセス可能になります。

## 区域変数

位置指定モードの出力ステートメントで区域変数を指定すると、宣言された区域サイズに 16 バイト (制御情報が入っている接頭部の長さ) を加えた長さのフィールドが伝送されます。

移動モードの出力ステートメントでエレメント区域変数を指定するか、または最後のエレメントが区域変数である構造体を指定すると、区域の現在のエクステントと 16 バイトの接頭部だけが伝送されます。

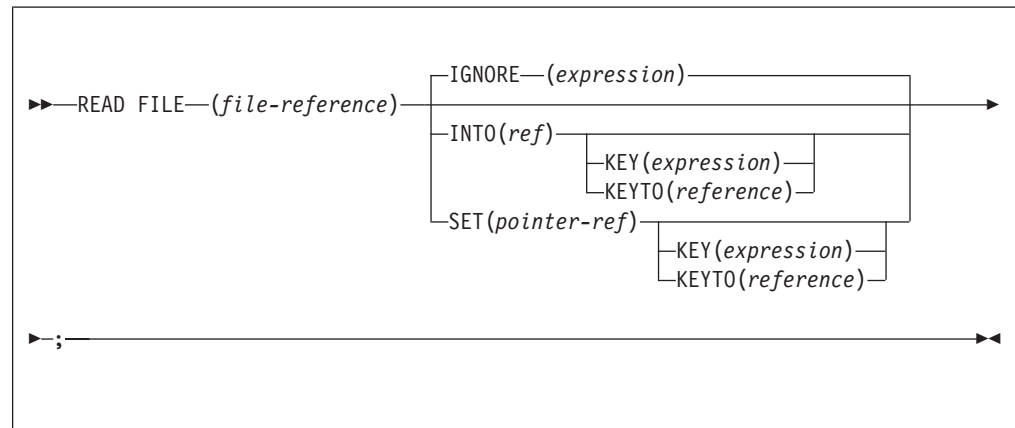
---

## データ伝送ステートメント

データ・セットとの間でレコードを伝送するためのデータ伝送ステートメントは、READ、WRITE、LOCATE、および REWRITE です。DELETE ステートメントは、UPDATE ファイルからレコードを削除します。どのデータ伝送ステートメントを使用できるかは、ファイルの属性によって決まります。ステートメント・オプションについては、315 ページの『データ伝送ステートメントのオプション』を参照してください。データ伝送ステートメントの変数については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## READ ステートメント

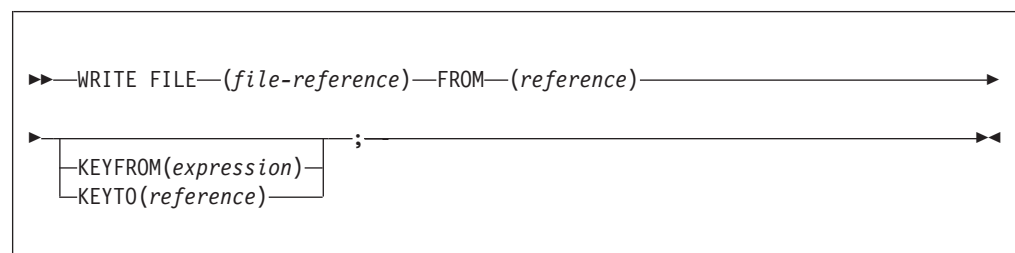
READ ステートメントは、任意の INPUT または UPDATE ファイルに対して使用することができます。これによって、レコードがデータ・セットからプログラム変数へ伝送されるか、またはストレージ内のレコードを指すポインターがセットされます。



キーワードの指定順序は任意です。INTO、SET、IGNORE のどのオプションも付いていなければ、READ ステートメントは、READ IGNORE(1) と同等です。

## WRITE ステートメント

WRITE ステートメントは、SEQUENTIAL UPDATE ファイル (VSAM の場合)、DIRECT UPDATE ファイル、および任意の OUTPUT ファイルに対して使用できます。このステートメントは、プログラムからレコードを伝送し、それをデータ・セットに追加します。



キーワードの指定順序は任意です。

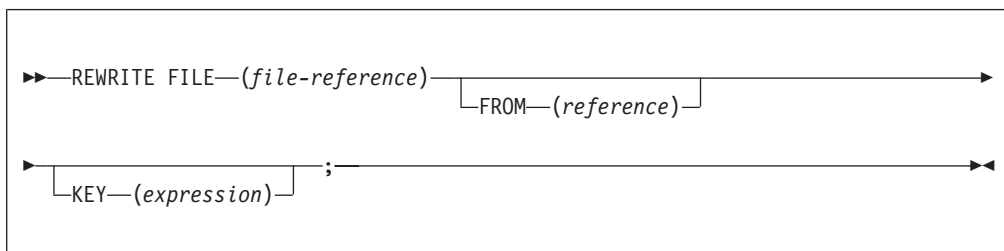
WRITE ステートメントは、SEQUENTIAL UPDATE ファイルとしてアクセスされる連続データ・セットを更新するためには使用できません。SEQUENTIAL UPDATE ファイルによって設定された連続データ・セットを更新するためには、READ ステートメントを使用してレコードを取り出してから、REWRITE ステートメントを使用してそれを更新する必要があります。

また、既存の順次ファイルの末尾にレコードを追加する場合は、そのファイルを OUTPUT として開き、DD ステートメントに DISP=MOD (z/OS バッチの下で実行されている場合)を指定するか、環境変数に APPEND(Y) (Windows、AIX、または z/OS UNIX の下で実行されている場合) を指定してください。



## REWRITE ステートメント

REWRITE ステートメントは、UPDATE ファイルのレコードを置き換えます。SEQUENTIAL UPDATE ファイルの場合は、REWRITE ステートメントは、ファイルから読み込まれた最後のレコードが再書き込みされることを指定します。必然的に、再書き込みまでにレコードが読み込まれている必要があります。DIRECT UPDATE ファイルの場合は、どのレコードも、まず読み取られたかどうかに関係なく、再書き込みができます。



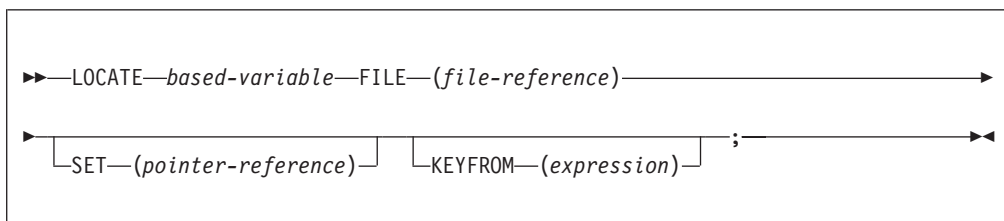
キーワードの指定順序は任意です。DIRECT 属性を持つ UPDATE ファイルや、SEQUENTIAL 属性と UNBUFFERED 属性の両方を持つ UPDATE ファイルの場合、FROM オプションを指定しなければなりません。

FROM オプションの指定のない REWRITE ステートメントを実行すると、次のような結果になります。

- 最後に読み取られたレコードが、INTO オプションが指定された READ ステートメントで読み取られたものである場合は、FROM オプションが指定されていない REWRITE ステートメントを実行しても、データ・セット内のそのレコードは変わりません。
- 最新のレコードが、SET オプションが指定された READ ステートメントで読み取られた場合、そのレコードは、SET オプション内のポインター変数によって識別される変数でどのような割り当てが行われても更新されます。

## LOCATE ステートメント

LOCATE ステートメントは、OUTPUT SEQUENTIAL BUFFERED ファイルを位置指定モードで処理する場合にのみ使用することができます。このステートメントは、出力バッファ内のストレージを基底付き変数に割り振り、次のレコードの位置を指すポインターをセットします。位置指定モードの処理の詳細については、319 ページの『位置指定モード』を参照してください。



キーワードの指定順序は任意です。



**based-variable**

添え字なしのレベル 1 の基底付き変数でなければなりません。

**DELETE ステートメント**

DELETE ステートメントは、UPDATE ファイルからレコードを削除します。

```

▶▶DELETE FILE—(file-reference)—KEY—(expression)—;

```

キーワードの指定順序は任意です。KEY オプションを省略すると、最後に読み取られたレコードが削除されます。別の READ ステートメントが処理されるまで、KEY が指定されていない後続の DELETE または REWRITE ステートメントを実行することはできません。KEY オプションが含まれる場合、キーによってアドレス指定されたレコードが検出されると、これを削除します。

**データ伝送ステートメントのオプション**

レコード単位データ伝送ステートメントでどのオプションを使用できるかは、ファイルの属性や、関連データ・セットの特性によって異なります。

**FILE オプション**

どのレコード単位データ伝送ステートメントでも、FILE オプションを指定しなければなりません。このオプションは、行われる操作の対象となるファイルを表します。FILE オプションの例は、本節の各ステートメントごとに記載しています。指定したファイルが現行処理でまだオープンされていないときは、暗黙にオープンされます。

**FROM オプション**

FROM オプションは、レコードをどの要素変数または集合変数から書き出すかを指定します。このオプションは、任意の OUTPUT または DIRECT UPDATE ファイルを参照する WRITE ステートメント内で使用しなければなりません。また、任意の UPDATE ファイルを参照する REWRITE ステートメント内で使用することもできます。

変数が集合の場合、その変数は連結ストレージ内になければなりません。位置合わせされていない固定長ビット・ストリングは、場合によっては許可されないことがあります（詳細は、311 ページの『データ伝送』を参照してください）。

FROM で参照する変数は、可変長のエレメント・ストリング変数であってもかまいません。FROM オプションを指定して WRITE ステートメントを使用すると、現行の長さの可変長ストリングだけが、データ・セットに伝送されます。VARYINGZ ストリングでは、ヌル終了文字が付加され、これも伝送されます。VARYING ストリングでは、ENVIRONMENT 属性の SCALARVARYING オプションがファイルに指定されている場合のみ、長さを指定する 2 バイトの接頭部が付加されます。

## FROM

レコードは、整数バイトの長さとして伝送されます。したがって、バイト境界に合わせられていないビット・ストリング (または、最初または最後のエレメントがビット・ストリングである構造体) が伝送される場合は、レコードの最初または最後に、ストリングの一部ではないビットが含まれることになります。

SEQUENTIAL UPDATE ファイルを参照する REWRITE ステートメントでは、FROM オプションを省略することができます。最後に読み取られたレコードが、INTO オプションが指定された READ ステートメントで読み取られたものである場合は、FROM オプションが指定されていない REWRITE ステートメントを実行しても、データ・セット内のそのレコードは変わりません。しかし、最後に読み取られたレコードが、SET オプションが指定された READ ステートメントで読み取られたものである場合は、そのレコード (どのような割り当てによっても更新される) がデータ・セットに書き戻されます。

次の例では、ステートメントは変数 Mas\_Rec の値を出力ファイル Master に書き出すように指定しています。

```
write file (Master) from (Mas_Rec);
```

REWRITE ステートメントは、UPDATE ファイルから最後に読み取られたレコードを Mas\_Rec で置き換えることを指定しています。

```
rewrite file (Master) from (Mas_Rec);
```

## IGNORE オプション

IGNORE オプションは、任意の SEQUENTIAL INPUT または SEQUENTIAL UPDATE ファイルを参照する READ ステートメント内で使用することができます。

IGNORE オプション内の式が計算され、整数値  $n$  に変換されます。  $n$  がゼロよりも大であると、  $n$  個のレコードが無視されます。つまり、同じファイルを参照する後続の READ ステートメントは、  $(n+1)$  番目のレコードをアクセスすることになります。  $n$  が 1 未満であると、READ ステートメントにはなにも影響しません。

次の例では、ファイル内の次からの 3 つのレコードを無視することを指定しています。

```
read file (In) ignore (3);
```

## INTO オプション

INTO オプションは、論理レコードをどの要素変数または集合変数の中に読み込むかを指定します。このオプションは、任意の INPUT または UPDATE ファイルを参照する READ ステートメント内で使用することができます。

変数が集合の場合、その変数は連結ストレージ内になければなりません。位置合わせされていない固定長ビット・ストリングは、場合によっては許可されないことがあります (詳細は、311 ページの『データ伝送』を参照してください)。

INTO で参照する変数は、可変長のエレメント・ストリング変数であってもかまいません。 VARYINGZ ストリングでは、各レコードにヌル終了文字が含まれます。 VARYING ストリングでは、ファイルに ENVIRONMENT 属性の

SCALARVARYING オプションが指定されていると、各レコードにはストリング・データの長さを指定する 2 バイトの接頭部が含まれます。

入力時に SCALARVARYING が宣言されていなければ、ストリングの長さはレコードの長さから計算され、2 バイトの接頭部として付加されます (VARYING ストリングの場合)。VARYING ビット・ストリングの長さは、この計算で 8 の倍数に切り上げられるので、計算後の長さは宣言された最大の長さより大きくなる場合があります。

次の例は、次の順序のレコードを変数 RECORD\_1 の中に読み込むことを指定しています。

```
read file (Detail) into (Record_1);
```

## KEY オプション

KEY オプションは、レコードを識別するための文字キー、グラフィック・キーまたはワイド文字キーを指定します。このオプションは、INPUT または UPDATE ファイルを参照する READ ステートメント内や、DIRECT UPDATE ファイルを参照する REWRITE ステートメント内で使用することができます。

KEY オプションは、KEYED ファイルにのみ適用されます。KEY オプションは、ファイルが DIRECT 属性を持つ場合には必ず指定しなければなりませんが、ファイルが SEQUENTIAL 属性および KEYED 属性を持つ場合には指定してもしなくてもかまいません。

KEY オプション内の式が計算され、それが文字、グラフィック、またはワイド文字でないときは、キーを表す文字値に変換されます。どのレコードが読み取られるかは、この文字値、グラフィック値、またはワイド文字値によって決まります。

次の例では、変数 Stkey に入っている文字値で識別されるレコードを、変数 Item の中に読み込むように指定しています。

```
read file (Stpck) into (Item) key (Stkey);
```

## KEYFROM オプション

KEYFROM オプションは、レコードの伝送先となるデータ・セット上のレコードを識別するための文字キー、グラフィック・キー、またはワイド文字キーを指定します。このオプションは、ファイル KEYED OUTPUT または DIRECT UPDATE を参照する WRITE ステートメント内、もしくは LOCATE ステートメント内で使用することができます。

KEYFROM オプションは、KEYED ファイルにのみ適用します。式が計算され、それが文字、グラフィック、またはワイド文字でないときは、文字ストリングに変換されて、そのレコードが次に書き出されるときにキーとして使用されます。

相対データ・セットは、KEYFROM オプションを使用して作成することができます。この場合、レコード番号をキーとして指定します。

KEYFROM オプションを使用して、REGIONAL(1) データ・セットを作成することができます。この場合、領域番号をキーとして指定します。

## KEYFROM

索引付きデータ・セットの場合、KEYFROM は、記録されるキーを指定しますが、その長さはデータ・セットに指定されたキーの長さと等しくなければなりません。

次の例では、Loanrec の値をファイル Loans のレコードとして書き出すことと、Loanno の文字ストリング値をキーとして使用する（このキーを使用すれば、このレコードを取り出すことができる）ことを指定しています。

```
write file (Loans) from (Loanrec) keyfrom (Loanno);
```

## KEYTO オプション

KEYTO オプションは、レコードのキーが割り当てられる文字変数、グラフィック変数、またはワイド文字変数を指定します。KEYTO オプションでは、STRING 以外の任意のストリング疑似変数を指定することができます。数字ピクチャー指定を付けて宣言した変数を指定することはできません。KEYTO オプションは、SEQUENTIAL INPUT ファイル、または SEQUENTIAL UPDATE ファイルを参照する READ ステートメントで指定することができます。

KEYTO オプションは、KEYED ファイルにのみ適用されます。

KEYTO 変数への割り当ては、常に、INTO 変数への割り当て後に行われます。キー指定が正しくないことが検出されると、KEY 条件が起こります。値は次のように割り当てられます。

- ・ 索引付きデータ・セットの場合、記録されたキーは、文字変数の宣言された長さに合わせて、右側が埋め込まれるかまたは切り捨てられます。
- ・ 相対 データ・セットの場合、レコード番号は文字ストリングに変換されます。このとき、先行ゼロは、文字変数の宣言された長さに合わせて、消去されるか、切り捨てられるか、または左側に埋め込まれます。
- ・ REGIONAL(1) データ・セットの場合、8 文字の領域番号は、文字変数の宣言された長さに合わせて、左側に埋め込まれるかまたは切り捨てられます。文字変数が可変長のときは、領域番号の先行ゼロは切り捨てられ、ストリングの長さは有効数字の桁数にセットされます。領域番号がすべてゼロであるときは、ゼロが 1 つだけになるように切り捨てられます。

このような埋め込みまたは切り捨てに関しては、KEY 条件は起こりません。

次の例では、ファイル Detail 内の次のレコードを変数 Invntry の中に読み込むことと、そのレコードのキーを変数 Keyfld に割り当てることを指定しています。

```
read file (Detail) into (Invntry) keyto (Keyfld);
```

## SET オプション

SET オプションは、READ ステートメントまたは LOCATE ステートメントで使うことができます。READ ステートメントの場合、読み取られるレコードを指すためにセットされるポインター変数を指定します。LOCATE ステートメントの場合、次に出力するレコードを指すためにセットされるポインター変数を指定します。

LOCATE ステートメントで SET オプションを省略すると、レコード変数と一緒に宣言されているポインターがセットされます。 VARYING スtringを送送するときは、そのファイルに対して SCALARVARYING オプションを指定しておかなければなりません。

次の例では、次の順次レコードのバッファ内場所を指すように、ポインター変数 P の値をセットすることを指定しています。

```
read file (X) set (P);
```

## 処理モード

レコード単位データ伝送には、2 通りのデータ処理方法があります。

**移動モード** データを変数に移動させたり、変数から移動させたりして、データを処理します。

### 位置指定モード

データをバッファ内に入れたまま処理することができます。データ伝送ステートメントが実行されると、バッファ内そのレコードに割り振られているストレージの位置がポインター変数に割り当てられます。位置指定モードは BUFFERED ファイルにのみ適用されます。

どちらの処理モードが使用されるかは、指定するデータ伝送ステートメントとオプションによって決まります。

## 移動モード

移動モードでは、READ ステートメントは、レコードをデータ・セットから INTO オプションで指定された変数に伝送します。 WRITE ステートメントまたは REWRITE ステートメントは、レコードを FROM オプションで指定された変数からデータ・セットに伝送します。 INTO オプションや FROM オプションで指定する変数は、どのストレージ・クラスであってもかまいません。

次に、移動モードの入力の例を示します。

```
Eof_In = '0'b;
on endfile(In) Eof_In = '1'B;
read file(In) into(Data);
do while (~Eof_In);
:
/* process record */
read file(In) into(Data);
end;
```

## 位置指定モード

位置指定モードでは、バッファの位置がポインター変数に割り当てられます。基底付き変数は、レコードについて記述しています。別々の基底付き変数を使用すれば、同じデータを別々に解釈させることができます。また、位置指定モードを使用すれば、自己定義レコードを読み取ることもできます。自己定義レコードでは、そのレコードの一部に入っている情報が、そのレコードの残りの部分の構造体を表します。例えば、そのような情報としては、配列の境界や、そのデータの属性に合わせてどの基底付き構造体を使用する必要があるかを表すコードなどがあります。

## 位置指定モード

SET オプションが指定された READ ステートメントは、レコードが入っているバッファを示すために、SET オプションで指定されたポインター変数をセットします。したがって、このポインター変数で修飾された基底付き変数を使用すれば、レコードのデータを参照することができます。

このポインター値は、同じファイルを参照する次の READ ステートメントまたは CLOSE ステートメントが実行されるまで有効です。

SET オプションで指定したポインター変数を使用されるか、または SET を省略した場合は基底付き変数の宣言内で指定したポインター変数を使用されます。このポインター値は、同じファイルを参照する次のステートメント LOCATE、WRITE、または CLOSE が実行されるまで有効です。REFER オプションで指定された基底付き変数のコンポーネントを初期設定します。

LOCATE ステートメントは、次のレコードを構築することができるだけの大きさを持つ区域に、ポインター変数をセットします。

LOCATE ステートメントを実行したあとは、LOCATE ステートメントによってセットされたポインター変数で修飾された基底付き変数に、値を直接割り当てることができます。

次に、位置指定モードの入力の例を示します。

```
dc1 1 Data based(P),
2
:
:
;

on endfile(In)
;
read file(In) set(P);
do while (~endfile(In));
:
/* process record */
read file(In) set(P);
end;
```

次に、位置指定モードの出力の例を示します。

```
dc1 1 Data based(P);
2
:
:
;

do while (More_records_to_write);
locate Data file(Out);
:
/* build record */
end;
```



## 第 13 章 ストリーム指向データ伝送

|                              |     |                               |     |
|------------------------------|-----|-------------------------------|-----|
| データ伝送ステートメント . . . . .       | 322 | データ・ディレクティブ・データの構文 . . . . .  | 332 |
| GET ステートメント . . . . .        | 322 | GET データ・ディレクティブ . . . . .     | 333 |
| PUT ステートメント . . . . .        | 323 | PUT データ・ディレクティブ . . . . .     | 334 |
| データ伝送ステートメントのオプション . . . . . | 324 | 編集ディレクティブのデータ指定 . . . . .     | 335 |
| COPY オプション . . . . .         | 324 | GET 編集ディレクティブ . . . . .       | 337 |
| データ指定オプション . . . . .         | 324 | PUT 編集ディレクティブ . . . . .       | 338 |
| FILE オプション . . . . .         | 327 | FORMAT ステートメント . . . . .      | 340 |
| LINE オプション . . . . .         | 327 | リスト・ディレクティブ・データ指定 . . . . .   | 340 |
| PAGE オプション . . . . .         | 327 | リスト・ディレクティブ・データの構文 . . . . .  | 340 |
| SKIP オプション . . . . .         | 328 | GET リスト・ディレクティブ . . . . .     | 341 |
| STRING オプション . . . . .       | 328 | PUT リスト・ディレクティブ . . . . .     | 342 |
| データ・リスト項目の伝送 . . . . .       | 330 | PRINT 属性 . . . . .            | 343 |
| データ・ディレクティブのデータ指定 . . . . .  | 331 | ストリーム入出力での DBCS データ . . . . . | 345 |
| データ・ディレクティブ・データの制限 . . . . . | 331 |                               |     |

この章では、ストリーム指向データ伝送に使用される入出力ステートメントを説明します。ストリーム指向データ伝送とレコード単位データ伝送の両方に適用される機能（ファイル、ファイル属性、ファイルのオープンとクローズなど）については、295 ページの『第 11 章 入出力』で説明しています。

ストリーム指向データ伝送では、データ・セットは、文字フォーマット、グラフィック・フォーマット、または混合フォーマットのデータ値の連続するストリームとして処理されます。プログラムでは、一般的にレコード境界が無視されます。ただし、データ・セットは一連のデータ行から構成されていると見なされるので、ストリーム指向データ伝送によって作成またはアクセスされるデータ・セットにはそれぞれ、行のサイズが対応しています。通常、1 行はデータ・セットの 1 レコードと同じですが、行サイズは必ずしもレコード・サイズと同じではありません。

ストリーム指向データ伝送ステートメントで FILE オプションを指定する代わりに STRING オプションを指定すれば、内部でデータを移動させることができます。STRING オプションを指定したときは入出力操作ではありませんが、この章では STRING オプションの使用方法も説明します。

ストリーム指向データ伝送は、リスト・ディレクティブ伝送、データ・ディレクティブ伝送、編集ディレクティブ伝送の 3 種類に分けられます。

### リスト・ディレクティブ・データ伝送

データ・リスト項目の値が伝送されます。ストリーム内の値のフォーマットを指定する必要はありません。それらの値は、外部では、ブランクまたはコンマで区切られた定数のリストとして記録されます。

### データ・ディレクティブ・データ伝送

データ・リスト項目の値だけでなく、それらの名前も伝送されます。ユーザーがストリーム内の値のフォーマットを指定する必要はありません。たとえ DBCS データが存在しなくても、変数名に DBCS 文字が含まれる場合は、ENVIRONMENT 属性の GRAPHIC オプションを指定する必要があります。

### 編集ディレクティブ・データ伝送

データ・リスト項目の値が伝送されますが、ユーザーがストリーム内の値のフォーマットを指定する必要があります。それらの値は、外部では、フォーマット・リストに従って 1 文字ずつ (またはグラフィック 1 文字ずつ) 処理される文字または漢字ストリングとして記録されます。

以降の節では、データ伝送ステートメントとそれらのオプション、およびリスト・ディレクティブ・データ、データ・ディレクティブ・データ、編集ディレクティブ・データの指定方法について説明します。2 バイト文字の使用方法については、345 ページの『ストリーム入出力での DBCS データ』を参照してください。

## データ伝送ステートメント

ストリーム指向データ伝送では、GET ステートメントと PUT ステートメントを使用します。GET ステートメントおよび PUT ステートメントを使用して処理できるのは連続ファイルだけです。

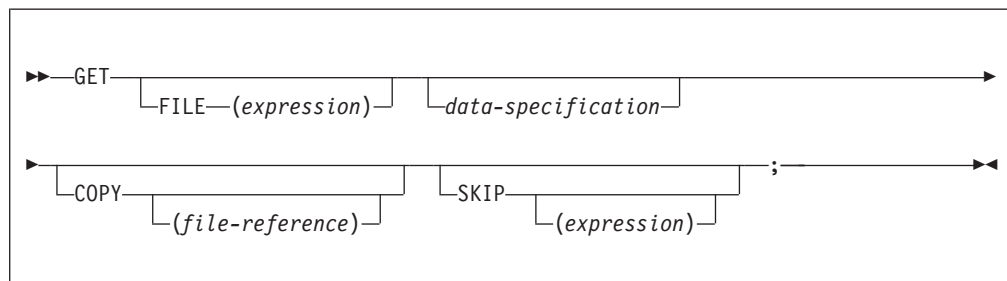
データ値が割り当てられる変数または疑似変数や、データ値の伝送元の式は、通常、それぞれの GET または PUT ステートメントのデータ指定で指定します。また、これらのステートメントでは、データ値の送り出し元や受け入れ先を表すオプションを指定したり、ストリーム内で先行のデータ値から相対的にどの位置にデータ値があるかを示すオプションを指定したりすることもできます。ストリーム方式のデータ伝送ステートメントのオプションについては、324 ページの『データ伝送ステートメントのオプション』を参照してください。

## GET ステートメント

GET ステートメントは、STREAM 入力データ伝送ステートメントであり、次のいずれかを行います。

- データ・セットからのデータ値を、1 つまたは複数の変数に割り当てます。
- ストリングからのデータ値を、1 つまたは複数の変数に割り当てます。

ストリーム入力ファイルの場合、次の GET ステートメントの構文を使用してください。



キーワードの指定順序は任意です。SKIP オプションを指定しない場合、データ指定を書かなければなりません。



ストリングから伝送する場合、次の GET ステートメントの構文を使用してください。

```
▶▶—GET STRING—(expression)—data-specification—;————▶◀
```

FILE オプションまたは STRING オプションが指定されない場合、FILE(SYSIN) が想定されます。SYSIN は暗黙に宣言された FILE STREAM INPUT EXTERNAL です。

## PUT ステートメント

PUT ステートメントは、次のことが可能な STREAM 出力データ伝送ステートメントです。

- 値をストリーム出力ファイルへ伝送します。
- 値を文字変数に割り当てます。

ストリーム出力ファイルを使用する場合、次の PUT ステートメントの構文を使用してください。

```
▶▶—PUT—┌──FILE—(file-reference)──┐┌──data-specification──┐————▶◀
 └──────────────────────────┘└──────────────────────────┘

▶──┌──PAGE──┐┌──LINE—(expression)──┐┌──data-specification──┐————▶◀
 └──SKIP──┘└──(expression)──┘└──────────────────────────┘
 └──LINE—(expression)──┘└──────────────────────────┘
```

キーワードの指定順序は任意です。いずれかの制御オプション (PAGE、SKIP、または LINE) を指定するときのみ、データ指定を省略することができます。

しかし、文字ストリングへ伝送する場合は次の PUT ステートメントの構文を使用してください。

```
▶▶—PUT STRING—(expression)—data-specification—;————▶◀
```

---

## データ伝送ステートメントのオプション

### COPY オプション

COPY オプションは、読み取られたソース・データ・ストリームを変更せずに、STREAM OUTPUT ファイルへ書き出すことを指定します。ファイル参照の指定を省略すると、出力ファイル SYSPRINT が想定されます。入力ストリーム中に新しいレコードが現れると、COPY ファイルで新しいレコードが始められます。以下に例を示します。

```
get file(sysin) data(A,B,C) copy(DPL);
```

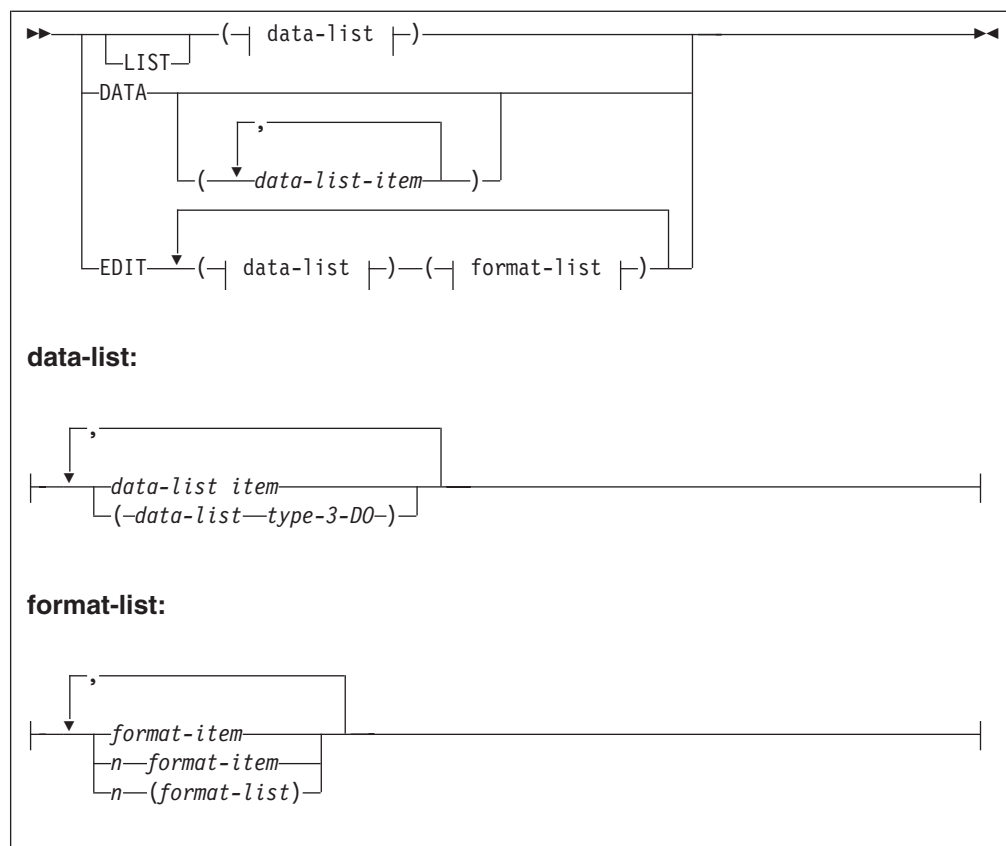
この例では、入力ストリーム中の A、B、および C に割り当てられている値が、同じ名前を持つ変数に伝送されるだけでなく、入力ストリーム中にあるときとまったく同じ形のままでファイル DPL に書き出されます。入力時にスキップされ、内部変数に伝送されないデータ値も、そのまま出力ストリーム中にコピーされます。

COPY オプションが指定された GET ステートメントの実行中になんらかの条件が起こり、ON ユニットに制御が移され、その ON ユニット内で同じファイルを参照する別の GET ステートメントが実行されたとします。次に、その ON ユニットから最初の GET ステートメントに制御が戻されると、その GET ステートメントは、COPY オプションに指定されなかった場合と同様に実行されます。ON ユニット内で、COPY オプションに関連付けられているファイルを参照する PUT ステートメントが実行された場合には、伝送されるデータの位置は、最後に伝送された COPY データ項目のすぐあとになるとは限りません。

COPY オプションで指定したファイルが現行プログラム内でまだオープンされていないときは、そのファイルは、ストリーム出力伝送用に現行プログラム内で暗黙にオープンされます。

### データ指定オプション

GET ステートメントや PUT ステートメント内のデータ指定は、伝送されるデータを指定するためのものです。



GET または PUT ステートメントでデータ・リストを記入し、キーワード LIST、DATA、EDIT のいずれも付けなかったときには、LIST が想定されます。

**重要:** データ・リストの前に LIST、DATA、または EDIT が付いていないステートメントでは、データ・リストは、GET キーワードまたは PUT キーワードの直後になければなりません。必須オプションは、データ・リストのあとに指定してください。

**DATA** 331 ページの『データ・ディレクティブのデータ指定』を参照してください。

**EDIT** 335 ページの『編集ディレクティブのデータ指定』を参照してください。

**LIST** 340 ページの『リスト・ディレクティブ・データ指定』を参照してください。

#### data-list item

入力の場合、編集ディレクティブ伝送とリスト・ディレクティブ伝送のデータ・リスト項目 (data-list item) は、エレメント、配列、または構造変数のいずれかになることができます。データ・ディレクティブ・データ指定のデータ・リスト項目は、要素変数、配列変数、または構造変数のいずれでもかまいません。データ・ディレクティブのデータ・リスト内の名前は、添え字付きまたはローケータ修飾付きであってはなりません。ただし、修飾付き (つまり、構造体のメンバー) またはストリング・オーバーレイ定義済みの名前を使用することはできます。

出力の場合、編集ディレクティブ・データおよびリスト・ディレクティブ・データ指定のデータ・リスト項目は、要素式、配列式、または構造式のいずれでもかまいません。データ・ディレクティブ・データ指定のデータ・リスト項目は、要素変数、配列変数、または構造変数のいずれでもかまいません。ローケータ修飾付きであってはなりませんが、修飾付き（つまり、構造体のメンバー）またはストリング・オーバーレイ定義済みの名前を使用することはできます。

データ・リスト項目のデータ・タイプとしては、任意の計算データを使用できます (CONSTANT または VALUE 属性がない場合に限り)。また PUT ステートメントでは、データ・タイプとして POINTER も使用できます。データ・タイプが非計算タイプである場合、項目の内容は、HEX 組み込み関数を項目に適用して項目が指定された場合のように伝送されます (PUT DATA の場合、その 16 進値は引用符で囲まれ、その後に接尾部 BX が付けられます)。

データ・リスト内の配列変数または構造変数は、データ・リスト内に  $n$  個の項目 ( $n$  は、その配列または構造体のエレメント項目の数) を書くのと同じことです。編集ディレクティブ伝送のときは、それぞれのエレメント項目の 1 つがデータ・フォーマット項目の別々の使用方法に関連付けられます。

### data-list type-3-DO

Type 3 DO 指定の構文は、224 ページの『DO ステートメント』で説明しています。type 3 DO が指定されたデータ・リスト項目は、GET ステートメントのデータ・ディレクティブ・データのリストでは使用できません。

最後の反復指定が処理されると、次のデータ・リスト項目の処理が続けられます。

構文図で示されているように、それぞれの反復指定は括弧で囲まなければなりません。データ指定として 1 つの反復指定だけを書くときは、データ・リストを囲むための括弧と反復指定を囲むための括弧が別々に必要になるので、外側に 2 組の括弧が必要になります。

反復指定がネストされているときは、最右端の DO が、ネスティングの外側のレベルになります。以下に例を示します。

```
get list (((A(I,J)
 do I = 1 to 2)
 do J = 3 to 4));
```

上の例では、添え字を区別するための括弧の他に、三組の括弧があります。最外部の一組の括弧は、データ指定に必要な括弧です。次の一組は、外側の反復指定に必要な括弧です。3 番目の一組は、内側の反復指定に必要な括弧です。

このステートメントは、次のネストされた DO グループと機能的に同等です。

```
do J = 3 to 4;
 do I = 1 to 2;
 get list (A (I,J));
 end;
end;
```

上の例では、次の順序で、配列 A のエレメントに値が割り当てられます。

A(1,3), A(2,3), A(1,4), A(2,4)

#### format list

format-list (フォーマット・リスト) の説明については、335 ページの『編集ディレクティブのデータ指定』を参照してください。

## FILE オプション

FILE オプションは、行われる操作の対象となるファイルを指定します。そのファイルは、STREAM ファイルでなければなりません。ファイル・タイプ・データ項目の宣言方法については、297 ページの『ファイル』を参照してください。

GET ステートメントに FILE オプションあるいは STRING オプションのいずれも指定されていない場合は、入力ファイル SYSIN がデフォルトです。PUT ステートメントにいずれも指定されていない場合は、出力ファイル SYSPRINT がデフォルトです。

## LINE オプション

LINE オプションは、PRINT ファイルの場合にのみ指定することができます。LINE オプションは、データ・セットの新しい現在行を定義します。式が計算され、整数値  $n$  に変換されます。現行ページの  $n$  番目の行が新しく現在行になります。現行ページで少なくとも  $n$  行がすでに書き出されている場合や、OPEN ステートメントの PAGESIZE オプションで指定した限界値より  $n$  の方が大きい場合は、ENDPAGE 条件が起こります。 $n$  がゼロ以下の場合には、値として 1 が使用されます。 $n$  が現在行を指定していると、ENDPAGE 条件が起こります。ただし、ファイルが 1 桁目に位置づけられているときは例外で、その場合は、SKIP(0) オプションを指定したときと同じ結果になります。

データ指定 (ある場合) によって定義された値が伝送される前に、LINE オプションの効力が生じます。1 つの PUT ステートメントで PAGE オプションと LINE オプションの両方を指定したときは、まず PAGE オプションが適用されます。以下に例を示します。

```
put file(List) data(P,Q,R) line(34) page;
```

この例では、変数 P、Q、R の値が、新しいページの 34 行目から、データ・ディレクティブ・フォーマットで印刷されます。

ファイルのオープン後、最初の GET ステートメントで LINE オプションを指定したときの効果については、304 ページの『OPEN ステートメント』を参照してください。

対話モードで端末に出力する場合、LINE オプションを指定すると 3 行スキップされます。

## PAGE オプション

PAGE オプションは、PRINT ファイルの場合にのみ指定することができます。このオプションは、データ・セット内の新しい現行ページを定義します。1 つの PUT ステートメントで PAGE と LINE の両方を指定したときは、まず PAGE オプショ

ンが適用されます。データ指定 (ある場合) によって定義された値が伝送される前に、PAGE オプションの効力が生じます。

PAGE オプションが指定された PUT ステートメントが実行されるか、PAGE フォーマット項目が検出されるか、または ENDPAGE 条件が起こるまで、現行ページのままです。上記のいずれかが起こると、新しいページが定義されます。新しいページでは 1 行目が暗黙に定義されます。

対話モードで端末に出力する場合、PAGE オプションを指定すると 3 行スキップされます。

## SKIP オプション

SKIP オプションは、データ・セット内の新しい現在行 (またはレコード) を指定します。式が計算され、整数値  $n$  に変換されます。データ・セットは、現在行 (レコード) から数えて  $n$  番目の行 (レコード) の先頭に位置付けられます。 *expression* (式) を省略すると、デフォルトとして SKIP(1) が使用されます。

データ指定 (ある場合) によって定義された値が伝送される前に、SKIP オプションの効力が生じます。以下に例を示します。

```
put list(X,Y,Z) skip(3);
```

この例では、変数 X、Y、Z の値が、出力ファイル SYSPRINT の現在行の後の 3 行目の行から印刷されます。

PRINT 以外のファイルや入力ファイルの場合に、SKIP オプションの式の値がゼロ以下のときには、1 の値が使用されます。PRINT ファイルの場合に、 $n$  がゼロ以下であると、現在行の先頭に位置づけられます。

ファイルのオープン後、最初の GET ステートメントで SKIP オプションを指定したときの効果については、304 ページの『OPEN ステートメント』を参照してください。

SKIP( $n$ ) が発行されたときに現行ページに  $n$  行未満しか残っていないと、ENDPAGE 条件が起こります。

会話モードを使って端末で印刷する場合、SKIP( $n$ ) の  $n$  が 3 より大きいときは、SKIP(3) と見なされます。3 行より多くスキップすることはできません。

## STRING オプション

GET ステートメントおよび PUT ステートメントで STRING オプションを指定すると、主記憶域とデータ・セットの間をデータが伝送されるのではなく、主記憶域のある記憶場所から別の記憶場所へデータが伝送されます。DBCS データ項目は、STRING オプションを指定して使用することはできません。

STRING オプションが指定された GET ステートメントは、文字ストリングに変換したあとで、式から得られるデータ値をデータ・リスト項目に割り当てることを指定します。このオプションを使用する各 GET 操作は、常に、そのストリングの左端の文字位置から開始します。そのストリングの文字数が、データ指定で指定した文字の総数より少ないときは、ERROR 条件が起こります。

STRING オプションが指定された PUT ステートメントは、データ・リスト項目の値を、指定された文字変数または疑似変数に割り当てることを指定します。PUT 操作は、必要に応じて変換を行ったあと、ストリングの左端の文字位置から値の割り当てを開始します。ブランクや区切り文字は、通常の入出力操作と同様に挿入されます。ストリングにデータが入りきらないときは、ERROR 条件が起こります。

GET DATA ステートメントに STRING オプションが付いているときは、NAME 条件は起こりません。その代わりに、GET DATA ステートメントに FILE オプションがついており、NAME 条件が起こるとこのような状況では、ERROR 条件が起こります。

STRING オプションには、次のような制約事項があります。

- COLUMN 制御フォーマット・オプションと STRING オプションを併用することはできません。
- PUT ステートメントの STRING オプションに疑似変数を指定することはできません。

STRING オプションは編集ディレクティブ伝送で使用する場合に最も役立ちます。このオプションを使用すれば、データ収集またはデータ分散処理を 1 つのステートメントで行うことができ、また、レコード単位のステートメントによって伝送される文字ストリングをストリーム指向で処理することもできます。

以下に例を示します。

```
read file (Inputr) into (Temp);
get string(Temp) edit (Code) (F(1));
If Code = 1 then
 get string (Temp) Edit (X,Y,Z)
 (X(1), 3 F(10,4));
```

この READ ステートメントは、入力ファイル Inputr からレコードを読み取ります。最初の GET ステートメントは STRING オプションを使用して、そのレコードの最初のバイトからコードを取り出し、それを Code に割り当てます。そのコードが 1 のときは、2 番目の GET ステートメントが STRING オプションを使用して、そのレコードに入っている値を X、Y、および Z に割り当てます。2 番目の GET ステートメントは、ストリング Temp の最初の文字を無視するように指定しています (フォーマット・リスト内の X(1) フォーマット項目)。無視された文字は、最初の GET ステートメントで Code に割り当てられた文字と同じものです。

PUT ステートメント内の STRING オプションの例は次のとおりです。

```
put string (Record) edit
 (Name) (X(1), A(12))
 (Pay#) (X(10), A(7))
 (Hours*Rate) (X(10), P'$999V.99');

write file (Outprt) from (Record);
```

PUT ステートメントはスペース処理フォーマット項目 X(1) を使用して、文字変数に割り当てられる最初の文字が 1 つのブランクであることを指定しています。このブランクは、印刷前にシングル・スペースの行送りをすることを表す ANS 縦方向キャリッジ位置指定文字コードです。このあと、変数 Name の値、変数 Pay# の



値、および式  $\text{Hours} \times \text{Rate}$  の値が割り当てられます。WRITE ステートメントは、レコード単位の伝送を使用してレコードをファイル `Outprt` に書き出すように指定します。

STRING オプションで参照した変数を、データ・リスト内の名前や別名として使用してはなりません。以下に例を示します。

```
declare S char(8) init('YYMMDD');
put string (S) edit
 (substr (S, 3, 2), '/',
 substr (S, 5, 2), '/',
 substr (S, 1, 2))
 (A);
```

この PUT ステートメントが実行されると、S の値は 'MM/DD/YY' ではなく、'MM/bb/MM' になります。最初のデータ項目の伝送後に S がブランクにされるためです。STRING オプションで指定した変数にもとづく基底付き変数または定義済み変数をデータ・リスト内に書いた場合も、上記と同じような結果になります。

---

## データ・リスト項目の伝送

データ・リスト項目が複素数モードのときは、実数部分が伝送されたあと虚数部分が伝送されます。

データ・リスト項目が配列式の場合は、配列のエレメントは行の大きい順に伝送されます。すなわち、配列の右端の添え字が最も頻繁に変化します。

データ・リスト項目が構造式のときは、構造体のエレメントは、構造体の宣言で指定された順序で伝送されます。

次に例を示します。

```
declare 1 A (10),
 2 B,
 2 C;
put file(X) list(A);
```

このステートメントは、次の順序で出力されます。

```
A.B(1) A.C(1) A.B(2) A.C(2) A.B(3)
A.C(3)...
```

しかし、次のように宣言する場合は、

```
declare 1 A,
 2 B(10),
 2 C(10);
```

同じ PUT ステートメントを使用しても、次の順序で出力されます。

```
A.B(1) A.B(2) A.B(3) ... A.B(10)
A.C(1) A.C(2) A.C(3) ... A.C(10)
```

リスト・ディレクティブ伝送または編集ディレクティブ伝送の入力ステートメントで使用するデータ・リスト内で、ある変数に値が割り当てられ、同じデータ・リスト内の後方でこの変数が参照されると、その新しい値が使用されます。以下に例を示します。

```
get list (N,(X(I) do I=1 to N),J,K,);
 substr (Name, J,K));
```



このステートメントが実行されると、下記の順序で値が伝送され、割り当てられます。

1. 新しい値が N に割り当てられます。
2. 反復指定に指定されているとおりに、X(1)、X(2)、...X(N) の順に、エレメントが配列 X に割り当てられます。割り当てられる項目の数を指定するために、N の新しい値が使われます。
3. 新しい値が J に割り当てられます。
4. 新しい値が K に割り当てられます。

---

## データ・ディレクティブのデータ指定

DATA データ指定の構文については、324 ページの『データ指定オプション』を参照してください。

データ・リスト項目内の構造体エレメントの名前は、あいまいさが生じない程度に修飾すればよいので、完全に修飾する必要はありません。

データ・リストを省略すると、データ・ディレクティブ・ステートメントで指定可能なすべての計算関係の変数からなるデータ・リストが想定されます。

出力の場合は、データ・リスト内のすべての項目が伝送されます。

---

## データ・ディレクティブ・データの制限

添え字付きの変数はデータ・ディレクティブ入力では、使用できません。

データ・ディレクティブ入出力用のデータ・リストにおける基底付き変数の参照を、明示的にロケータ修飾することはできません。以下に例を示します。

```
dc1 Y based(Q), Z based;
put data(Y);
```

変数 Z は伝送できません。伝送するには、明示的にロケータで修飾される必要があります。

データ・リストの基底付き変数には、以下の制限があります。

- 変数は、OFFSET 変数を基底とすることはできません。
- 変数を基底付きにするポインターは、DEFINED ストレージであることはできません。
- 変数を基底付きにするポインターが BASED 自身である場合は、基底付きポインターのチェーンは、BASED でも DEFINED でもないポインターで終了しなければなりません。

データ・リストの定義済み変数は、以下の制限があります。

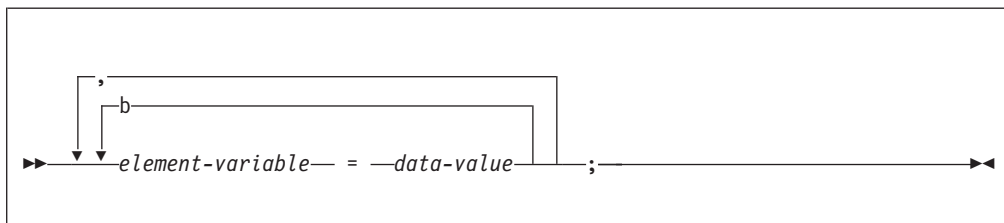
- ピクチャー変数または文字変数でなければならない。
- 被制御変数上で定義されていない。
- エレメントまたは配列のクロスセクション上で定義されていない。
- 非定数 POSITION 属性で定義されていない。

## データ・ディレクティブのデータ指定

タイプ付き構造体をデータ・ディレクティブ入出力ステートメントに使用することはできません。

### データ・ディレクティブ・データの構文

データ・ディレクティブ・データの伝送を行うときのストリームは、エレメント割り当てのリストという形をとります。エレメント割り当ては定数の符号の有無にかかわらず、変数名や等号と同じように、文字フォーマットまたはグラフィック・フォーマットで表します。



入力の場合は、エレメント割り当てを空白またはコンマのどちらかで区切ることができます。修飾された名前の中のピリオド、添え字、添え字の括弧、および代入記号の前後には、空白がいくつあってもかまいません。出力の場合は、エレメント割り当ては空白で区切られます。 PRINT ファイルの場合、項目はプログラムのタブ設定値に従って区切られます。

ストリーム中のそれぞれのデータ値は、リスト・ディレクティブ伝送のところで説明したいずれかの構文フォーマットをとります。リスト・ディレクティブ伝送の構文についての説明は、340 ページの『リスト・ディレクティブ・データの構文』を参照してください。

ストリーム中のデータ値の長さは、対応する変数の宣言されている属性および (名前も含まれているので) 完全に修飾された添え字付きの名前の長さによって決まります。コード化算術データ、数字データ、ビット・ストリング・データから変換された出力項目の長さは、リスト・ディレクティブ伝送での出力データの長さと同じであり、『第 5 章 データ変換』で説明した文字タイプへのデータ変換の規則に従います。

入力ストリーム中の修飾された名前は、完全に修飾されていなければなりません。

ストリーム中の修飾された名前に介在添え字が付いてはなりません。例えば、Y が次のように宣言されているとします。

```
declare 1 Y(5,5),
 2 A(10),
 3 B,
 3 C,
 3 D;
```

この場合は、エレメント名をストリーム中に入れるときは、次のようなフォーマットでなければなりません。

```
Y.A.B(2,3,8)= 8.72
```

## GET データ・ディレクティブ

GET ステートメントの詳細については、322 ページの『GET ステートメント』を参照してください。

データ・リストを使用するときは、各データ・リスト項目は要素変数、配列変数、または構造変数でなければなりません。データ・リスト内の名前に添え字が付いてはなりませんが、修飾された名前を使用することはできます。ストリーム内のすべての名前は、データ・リストに現れている必要があります。ただし、名前の順序は同じである必要はなく、またデータ・リストはストリーム内にはない名前を含むことができます。

データ・リスト内の名前がストリーム中にない場合は、その名前を持つ変数の値は変わりません。

データ・リスト内にはない名前や識別不能な要素変数がストリーム中にあると、NAME 条件が起こります。

セミコロン (引用符で囲まれていないもの) またはファイルの終わりが認識されると、伝送が終了し、データ・リストの指定の有無に関係なく、そのステートメントで実際に伝送されたエレメント割り当ての数が判別されます。

例えば、次のデータ・リストを考えてみましょう。A、B、C、D はそれぞれ要素変数の名前です。

```
Data (B, A, C, D)
```

このデータ・リストを、次のような入力データ・ストリームに関連付けたとします。

```
A= 2.5, B= .0047, D= 125, Z= 'ABC';
```

この場合、C は、データ・リスト内に書かれていますが、ストリーム中にはありません。したがって、C の値は変わりません。Z はデータ・リスト内に書かれていないので、NAME 条件が起こります。

データ・リスト内に配列名を書く場合、添え字付きの名前をデータ・リスト内に書くことはできませんが、ストリーム中にはその配列の添え字付き参照があってもかまいません。配列全体がストリーム内に現れる必要はありません。実際にストリーム内に現れるこれらのエレメントのみが割り当てられます。添え字が範囲外であるか、欠落しているときは、NAME 条件が起こります。

以下に例を示します。

```
declare X (2,3);
```

このとき、下記のデータ・リストと入力データ・ストリームについて考えてみましょう。

**データ指定**      **入力データ・ストリーム**

```
data (X) X(1,1)= 7.95,
 X(1,2)= 8085,
 X(1,3)= 73;
```

## GET データ・ディレクティブ

データ・リストには配列名しか書いていませんが、入力ストリームには配列の個々のエレメントの値を入れることができます。この場合は、3 つのエレメントのみが割り当てられます。配列のその他の部分は変更されません。

データ・リスト内に構造体、小構造体、または構造体エレメントの名前を書く場合、データ・リスト内では完全に修飾する必要はありませんが、ストリーム中には完全修飾名を入れなければなりません。以下に例を示します。

```
dcl 1 In,
 2 Partno,
 2 Descrp,
 2 Price,
 3 Retail,
 3 Whsl;
```

In.Price.Retail の中に値を読み込むときは、入力データ・ストリームは次のフォーマットになっていなければなりません。

```
In.Price.Retail=1.23;
```

データ指定は、次のうちのどれでもかまいません。

```
data(In)
data(Price)
data(In.Price)
data(Retail)
data(Price.Retail)
data(In.Retail)
data(In.Price.Retail)
```

## PUT データ・ディレクティブ

PUT ステートメントの詳細については、323 ページの『PUT ステートメント』を参照してください。

データ・リスト項目は、要素変数、配列変数、構造変数、反復指定のどれでもかまいません。データ・リスト内に書かれている名前が、その値と一緒に、空白で区切られたセミコロンで終了するエレメント割り当てのリストの形で伝送されます。PRINT ファイルの場合は、項目はプログラムのタブ設定値によって区切られます (343 ページの『PRINT 属性』を参照してください)。

それぞれの PUT ステートメントで伝送された最後のデータ項目のあとで、セミコロンがストリーム中に書き出されます。

名前は混合ストリングとして伝送されます。この混合ストリングには、SBCS 文字または DBCS 文字 (あるいは両方) を含むことができます。DBCS フォーマットで表現された SBCS 文字がある場合は、まずそれが SBCS に変換されます。以下に例を示します。

```
put data (<.A>B<.Ckk>);
```

これは次のようにして伝送されます。

```
ABC<kk>=value-of-variable
```

注: 上の例では、<.A>B<.Ckk> はスカラー変数です。

数字変数の文字ストリング値が、有効な算術定数（符号付きまたは符号なしの）もしくは複素数式を表していないとき、データ・ディレクティブ出力の出力結果を後続のデータ・ディレクティブ入力で使用することはできません。

文字データの場合、文字ストリングの内容は引用符で囲まれて書き出されます。文字ストリング内にあるそれぞれの引用符は、連続する 2 つの引用符で表されます。

次に、データ・ディレクティブ伝送（入力と出力）の例を示します。

```
declare (A(6), B(7)) fixed;
get file (X) data (B);
do I = 1 to 6;
 A (I) = B (I+1) + B (I);
end;
put file (Y) data (A);
```

入力ストリーム:

```
B(1)=1, B(2)=2, B(3)=3,
B(4)=1, B(5)=2, B(6)=3, B(7)=4;
```

出力ストリーム:

```
A(1)= 3 A(2)= 5 A(3)= 4 A(4)= 3
A(5)= 5 A(6)= 7;
```

次に例を示します。

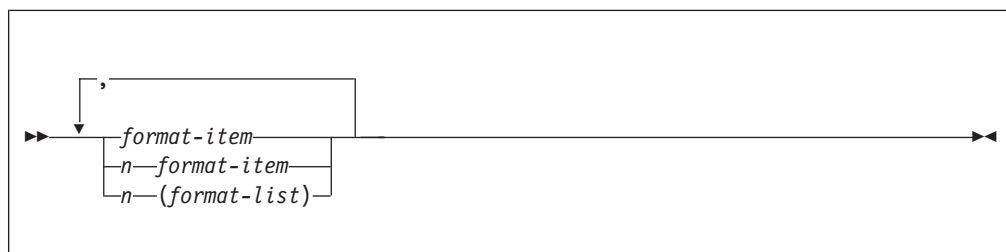
```
dcl 1 A,
 2 B FIXED,
 2 C,
 3 D FIXED;
A.B = 2;
A.D = 17;
put data (A);
```

出力ストリーム中のデータ・フィールドは次のようになります。

```
A.B= 2 A.C.D= 17;
```

## 編集ディレクティブのデータ指定

EDIT データ指定の構文については、324 ページの『データ指定オプション』を参照してください。



- n** 反復因数を指定します。括弧で囲んだ式か、整数のどちらかです。整数を指定するときは、整数とそのあとのフォーマット項目 (format-item) をブランクで区切らなければなりません。

反復因数は、関連づけられたフォーマット項目またはフォーマット・リストが、連続して  $n$  回使用されることを指定します。ゼロまたは負数の反復因数は、対

応するフォーマット項目またはフォーマット・リストをスキップし、使用しないことを表します (そのデータ・リスト項目は次のデータ・フォーマット項目に関連付けられます)。

反復因数を式で表したときは、その式が計算され、整数に変換されます。この計算と変換は、一組の繰り返しにつき 1 回だけ行われます。

反復因数に対応するフォーマット項目またはフォーマット・リストは、反復因数のすぐ右に書かれている項目または項目リストです。

### **format item**

データ・フォーマット項目、制御フォーマット項目、またはリモート・フォーマット項目を指定します。フォーマット項目の構文と詳細については、『第 14 章 編集ディレクティブのフォーマット項目』で説明します。

### **Data-format items**

単一データ項目の文字表記またはグラフィック表記を記述するものです。以下のとおりです。

|          |        |
|----------|--------|
| <b>A</b> | 文字     |
| <b>B</b> | ビット    |
| <b>C</b> | 複素数    |
| <b>E</b> | 浮動小数点  |
| <b>F</b> | 固定小数点  |
| <b>G</b> | グラフィック |
| <b>L</b> | 行      |
| <b>P</b> | ピクチャー  |
| <b>V</b> | 行の表示   |

### **制御フォーマット項目**

ファイルに関連付けられているデータ・セットのレイアウトを指定するものです。以下のとおりです。

COLUMN  
LINE  
PAGE  
SKIP  
X

### **リモート・フォーマット項目**

別の場所にある **FORMAT** ステートメントのラベル定数を値として持つラベル参照を指定するものです。その **FORMAT** ステートメント内にその場所に適応するフォーマット項目を書きます。ラベル参照項目は次のものです。

#### **R(ラベル参照)**

このラベルとは、**FORMAT** ステートメントのラベル定数名のことです。R フォーマット項目の指定については、357 ページの『R フォーマット項目』を参照してください。

最初のデータ・フォーマット項目は最初のデータ・リスト項目に、2 番目のデータ・フォーマット項目は 2 番目のデータ・リスト項目に、というように対応づけられます。フォーマット・リスト内のデータ・フォーマット項目の数が、関連データ・リスト内の項目の数より少ないときは、そのフォーマット・リストが再使用されます。余分なフォーマット項目は無視されます。

例えば、フォーマット・リスト内に 5 つのデータ・フォーマット項目があり、関連データ・リストでは、10 個の項目を伝送することを指定したとします。このとき、データ・リスト内の 6 番目の項目は最初のデータ・フォーマット項目に対応づけられます (以下同様)。フォーマット・リスト内に 10 個のデータ・フォーマット項目があり、関連データ・リストには 5 つの項目しかないとすれば、6 番目から 10 番目までのフォーマット項目は無視されます。

制御フォーマット項目が検出されると、制御処置が実行されます。

PAGE 制御フォーマット項目と LINE 制御フォーマット項目は、PRINT ファイルの場合にのみ使用でき、したがって PUT ステートメント内でだけ使用できます。SKIP、COLUMN、および X フォーマット項目は、入力的时候も出力的时候も使用できます。

フォーマット項目 PAGE、SKIP、および LINE はそれぞれ、PUT ステートメント (SKIP の場合は GET ステートメントも) の対応するオプションと同じ働きをします。ただし、フォーマット項目は、フォーマット・リストで検出されたときに効力を生じますが、オプションは、データが伝送される前に効力を生じる点が異なっています。

COLUMN フォーマット項目は、GET STRING ステートメントまたは PUT STRING ステートメントで使用することはできません。

ファイルのオープン後、最初の GET または PUT ステートメントで制御フォーマット項目を指定したときの効果については、304 ページの『OPEN ステートメント』を参照してください。

変数の中に読み込まれた値を、同じデータ・リスト内の後方にある別の変数に対応するフォーマット項目内で使用することができます。

```
get edit (M,String_A,I,String_B) (F(2),A(M),X(M),F(2),A(I));
```

この例では、最初の 2 文字が M に割り当てられます。この M の値は、String\_A に割り当てられる文字の個数、および I に 2 文字が割り当てられる前に無視される文字の個数を表します。I に割り当てられた値は、String\_B に割り当てられる文字の個数を示すために使用されます。

入力処理中に変数に割り当てられた値を、後方にあるデータ項目に対応するフォーマット項目内の式で使用することができます。フォーマット項目内の式は、そのフォーマット項目が使用されるたびに計算され、整数に変換されます。

最後のデータ・リスト項目の処理が終わると、伝送が完了します。後続のフォーマット項目 (制御フォーマット項目も含めて) は無視されます。

## GET 編集ディレクティブ

GET ステートメントの詳細については、322 ページの『GET ステートメント』を参照してください。

ストリーム中のデータは、文字やグラフィックの連続したストリングであり、ある値と次の値の間に区切り文字はありません。それぞれのデータ値の文字数は、フォーマット・リスト内のフォーマット項目によって指定します。それらの文字は、対



## GET 編集ディレクティブ

応するフォーマット項目に従って解釈されます。データ・リストの処理が終わると、GET ステートメントの実行が終わり、フォーマット項目が残っていてもそれらは無視されます。

それぞれのデータ・フォーマット項目は、データ・リスト項目に関連付けられる文字またはグラフィックの個数を表し、また、データ値をどのように解釈するかも表します。データ値は、必要に応じて変換され、関連データ・リスト項目に割り当てられます。

入力ストリーム中の固定小数点 2 進データ値と浮動小数点 2 進データ値は、必ず 10 進数で表記しなければなりません。F、P、E のフォーマット項目を使用してそれらの値をアクセスすれば、それらの値は割り当ての時点で 2 進表記に変換されます。

ストリーム中のブランクや引用符はすべて、文字と見なされます。ストリングを引用符で囲まないこと、引用符を二重にしないこと、およびビット・ストリングを識別するために文字 B や漢字ストリングを識別するために文字 G を使用しないことに注意してください。ストリーム中の文字を、指定された方法で解釈できない場合には、CONVERSION 条件が起こります。

例

```
get edit (Name, Data, Salary)(A(N), X(2), A(6), F(6,2));
```

この例では、次のことを指定します。

- ストリーム中の最初の N 個の文字は、文字ストリングと見なされ、Name に割り当てられます。
- 次の 2 文字はスキップされます。
- その次の 6 文字は、文字フォーマットで Data に割り当てられます。
- さらに次の 6 文字は 10 進固定小数点定数 (符号の有無は任意) と見なされ、Salary に割り当てられます。

## PUT 編集ディレクティブ

PUT ステートメントの詳細については、323 ページの『PUT ステートメント』を参照してください。

それぞれのデータ・リスト項目の値が、対応するフォーマット項目によって指定された文字表記またはグラフィック表記に変換され、フォーマット項目によって指定された幅のフィールドに入れてストリーム中に書き出されます。データ・リストの処理が終わると、PUT ステートメントの実行が終わり、フォーマット項目が残っていてもそれらは無視されます。

出力の場合、2 進数項目は 10 進数値に変換されるので、対応する F フォーマット項目や E フォーマット項目では、変換後の 10 進数に換算してフィールドの幅と小数点の位置を指定しなければなりません。P フォーマット項目の場合は、これらをピクチャー指定で指定します。

出力の場合、出力ストリーム中のデータ値を区切るためにブランクが挿入されるわけではありません。ストリング・データは、フィールド内で左寄せされ、指定の幅を占めます。算術データは右寄せされます。算術データを文字タイプに変換すると



きの規則に従うので、(先行ゼロがブランクで置き換えられるほかに) 最高 3 つの先行ブランクが挿入されることがありますが、フィールド内の変換後の算術項目には、通常、最低 1 つはブランクが先頭に付いています。ただし、指定したフィールド幅が短くて先行ブランクを挿入できない場合は、先行ブランクはストリーム中に挿入されません。指定したフィールド幅が短すぎる場合は、算術項目では左側が切り捨てられ、ストリング項目では右側が切り捨てられ、SIZE 条件または STRINGSIZE 条件が起こります。

### 例 1

```
put edit('Inventory='||Inum,Invcode)(A,F(5));
```

この例では、'Inventory=' が Inum の値と連結されて、その結果の文字ストリングの長さと同じ幅のフィールドに入れてストリーム中に書き出されます。そのあと、Invcode の値が、F フォーマット項目で指定されているとおりに文字に変換され、5 文字の幅のフィールド内で右寄せされて (先行文字はブランク)、ストリーム中に書き出されます。

### 例 2

次の例では、COLUMN、LINE、PAGE、および SKIP フォーマット項目を、相互に組み合わせて使用する方法を示しています。

```
put edit ('Quarterly Statement')
 (page, line(2), A(19))(Acct#, Bought, Sold, Payment, Balance)
 (skip(3), A(6), column(14), F(7,2), column(30), F(7,2),
 column(45), F(7,2), column(60), F(7,2));
```

この PUT ステートメントは、次のことを指定しています。

1. 見出しとして Quarterly Statement が、出力ファイル SYSPRINT の新しいページの 2 行目に書き出されます。
2. 2 行スキップします。出力内の次の行は、見出しから 3 行目か、もしくは報告書の 5 行目になります。
3. 次の値が書き出されます。
  - Acct#、 1 桁目から開始します。
  - Bought、 14 桁目から開始します。
  - Sold、 30 桁目から開始します。
  - Payment、 45 桁目から開始します。
  - Balance 60 桁目です。

### 例 3

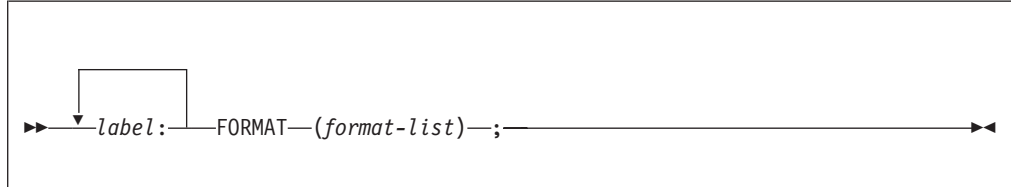
この例では、Name の値は N 文字のフィールド内で左寄せされた文字ストリングとしてストリーム中に挿入されます。

```
put edit (Name,Number,City) (A(N),A(N-4),A(10));
```

Number は N-4 文字のフィールド内で左寄せされます。また City は 10 文字のフィールド内で左寄せされます。

## FORMAT ステートメント

FORMAT ステートメントは、伝送されるデータのフォーマットを制御するために、編集ディレクティブ・データ伝送ステートメントで使用するのことができるフォーマット・リストを指定するものです。



**label** これは、357 ページの『R フォーマット項目』で説明されているリモート・フォーマット項目 R のラベル参照と同じです。

### format list

335 ページの『編集ディレクティブのデータ指定』に説明されているとおりに指定します。

GET または PUT EDIT ステートメントでは、このフォーマット・リスト・オプション内に、R フォーマット項目を記入することができます。R フォーマット項目で表されるフォーマット・リストのその部分は、そこで識別された FORMAT ステートメントによって与えられます。

FORMAT ステートメントに関連付けられた条件接頭語は無効です。

---

## リスト・ディレクティブ・データ指定

LIST データ仕様の構文については、324 ページの『データ指定オプション』を参照してください。

リスト・ディレクティブ・データの指定の例は次のとおりです。

```
list (Card_Rate, Dynamic_Flow)
```

```
list ((Thickness(Distance)
 do Distance = 1 to 1000))
```

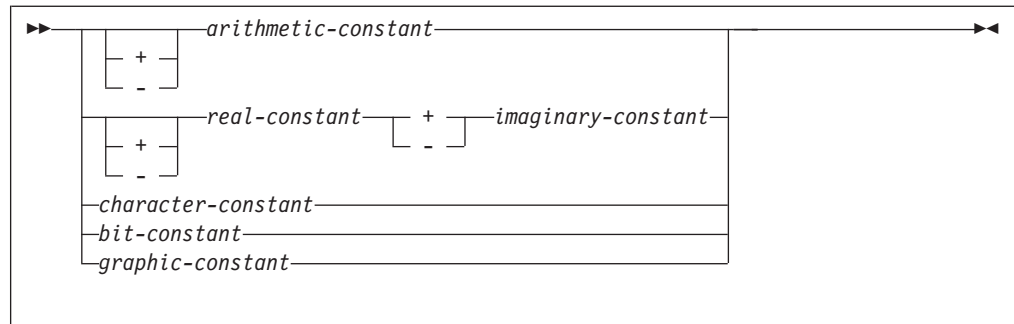
```
list (P, Z, M, R)
```

```
list (A*B/C, (X+Y)**2)
```

最後の例のデータ指定には式が書かれているので、これは出力の場合にしか使用できません。これらの式は、ステートメントの実行時に計算され、結果の値がストリームの中に入れられます。

## リスト・ディレクティブ・データの構文

入力の場合も出力の場合も、ストリーム中のデータ値は、文字またはグラフィックで表記されます。



ストリングの反復因数を使用することはできません。実定数の前に付ける符号のあとや、複素数式の中央にある (+) または (-) の前後に、ブランクがあってはなりません。

ストリーム中のデータ値の長さは、そのデータ値の属性 (精度や長さも含めて) によって決まります。変換規則およびそれが精度に及ぼす影響の詳細については、85 ページの『第 5 章 データ変換』の中の文字タイプへの変換の箇所で説明しています。

## GET リスト・ディレクティブ

GET ステートメントについては、322 ページの『GET ステートメント』を参照してください。

入力の場合、ストリーム中のデータ値はブランクまたはコンマで区切られなければなりません。この分離文字の前後には、ブランクがいくつあってもかまいません。データ・ストリーム中のブランク以外の最初の文字がコンマである場合や、2 つのコンマがブランク (いくつでも構いません) で区切られている場合、それはストリーム中のヌル・フィールドを表します。ヌル・フィールドは、関連データ・リスト項目の値を変更せずそのままにしておくことを表します。

入力の場合、定数または複素数式のリストの伝送が終了するのは、リストが使い尽くされたとき、またはファイルの終わりに達したときです。定数の伝送の場合は、次の GET ステートメントに備えて、ファイルがストリームの中で位置付けられます。

項目をコンマで区切ったとき、次の GET ステートメントの実行時に走査される最初の文字は、コンマのすぐあとの文字です。

```
Xbb,bbbXX
—
```

項目をブランクだけで区切ったとき、走査される最初の文字は、次の非ブランク文字です。

```
XbbbbXXX
—
```

ただし、これは、レコードの終わりに達していない場合に当てはまります。レコードの終わりに達した場合は、ファイルはレコードの終わりに位置づけられます。

```
Xbb-bbXXX
—
```

## GET リスト・ディレクティブ

ただし、レコードの終わりが (コンマ以外の) 非空白文字のすぐあとにあり、次のレコードが空白で始まる場合は、ファイルは次のレコード内の最初の非空白文字に位置づけられます。

```
X-bbbXXX
—
```

レコードがコンマで終わっているときは、後続レコードは、次の GET ステートメントで要求されるまで読み取られません。

データが文字定数のときは、前後の引用符が取り除かれて、囲まれていた文字が文字ストリングとして解釈されます。二重引用符は一重引用符と見なされます。

データがビット定数のときは、前後の引用符と末尾の文字 B が取り除かれて、囲まれていた文字がビット・ストリングとして解釈されます。

データが 16 進定数 (X, BX, B4, GX) のときは、前後の引用符と接尾部が取り除かれて、囲まれていた文字が、文字、ビット、または漢字ストリングの 16 進表記として解釈されます。

データが混合定数のときは、前後の引用符と接尾部 M が取り除かれたあと、囲まれていた定数が文字ストリングとして解釈されます。

データがグラフィック定数のときは、前後の引用符と末尾の文字 G が取り除かれて、囲まれていたグラフィックが漢字ストリングとして解釈されます。

データが算術定数または複素数式のときは、定数によってまたは式を計算するときの規則によって暗黙に定義される基数、スケール、モード、および精度を持つコード化算術データとして解釈されます。

## PUT リスト・ディレクティブ

PUT ステートメントの詳細については、323 ページの『PUT ステートメント』を参照してください。

データ・リスト項目の (グラフィック以外の) 値が文字表記に変換されて、データ・ストリームに伝送されます。伝送された連続したデータ値は、空白で区切られます。PRINT ファイルの場合は、項目はプログラムのタブ設定値によって区切られます (343 ページの『PRINT 属性』を参照してください)。

算術値は文字に変換されます。

2 進データ値は、10 進表記に変換されてから、ストリーム中に書き出されます。

数字値の場合は、文字値が伝送されます。

ビット・ストリングは、文字ストリングに変換されます。その文字ストリングは引用符で囲まれて、あとに文字 B が付きます。

ストリングは、次のようにして書き出されます。

- ファイルに PRINT 属性が付いていない場合は、前後に引用符が付けられ、ストリング内の一重引用符やアポストロフィは 2 つの引用符で置き換えられます。フィールドの幅は、ストリングの現在の長さに、付加された引用符の数を加えた長さになります。
- ファイルに PRINT 属性が付いている場合は、前後の引用符が付けられることはなく、ストリング内の一重引用符やアポストロフィが変更されることもありません。フィールドの幅は、ストリングの現在の長さです。

混合ストリングは、次のようにして書き出されます。

- ファイルに PRINT 属性が付けられていない場合は、SBCS 引用符と文字 M が付けられます。含まれている SBCS 引用符は、2 つの引用符で置き換えられます。
- ファイルが PRINT 属性を持つと、前後の引用符と文字 M が付けられることはなく、含まれている一重引用符は変更されません。

漢字ストリングは次のようにして書き出されます。

- ファイルに PRINT 属性が付けられていない場合は、前後の SBCS 引用符と文字 G が付けられます。前後の引用符は SBCS 引用符なので、ストリング内のグラフィック引用符は一重グラフィック引用符で表されます (つまり、変更されません)。
- ファイルが PRINT 属性を持つと、前後の引用符と文字 G は付けられず、グラフィック引用符は、一重グラフィック引用符になります (つまり変更されません)。

## PRINT 属性

PRINT 属性は、STREAM 属性と OUTPUT 属性を持つファイルの場合に指定できます。この属性はそのファイルが印刷される予定であることを示します。すなわち、ファイルと関連したデータを、最初はほかのメディアに書き出されていても、印刷されたページに現れることを示します。

▶▶—PRINT—◀◀

PRINT を指定したときは、PRINT ファイルの各レコードの最初のデータ・バイトは米国標準規格 (ANS) 印刷制御文字を入れるために予約されます。この制御文字は、PL/I によって挿入されます。

リスト・ディレクティブ・データ伝送またはデータ・ディレクティブ・データ伝送で伝送されるデータ値は、自動的に左マージンに合わせられ、また、システムで定義され、事前設定されているタブ位置に合わせられます。

PRINT ファイルのレイアウトは、表 34 にリストされているオプションおよびフォーマット項目を使用して制御することができます。

表 34. PRINT ファイルのオプションとフォーマット項目

| ステートメント | ステートメントの<br>オプション | 編集ディレクティ<br>ブのフォーマット |                            |
|---------|-------------------|----------------------|----------------------------|
|         |                   | 項目                   | 結果                         |
| OPEN    | LINESIZE(n)       | -                    | 行の文字数を設定します。               |
| OPEN    | PAGESIZE(n)       | -                    | ページの行数を設定します。              |
| PUT     | PAGE              | PAGE                 | 新しいページにスキップします。            |
| PUT     | LINE(n)           | LINE(n)              | 指定された行にスキップします。            |
| PUT     | SKIP[(n)]         | SKIP[(n)]            | 指定された行数だけスキップしま<br>す。      |
| PUT     | -                 | COLUMN(n)            | 行の中の指定された桁にスキップし<br>ます。    |
| PUT     | -                 | X(n)                 | 行の中にブランク桁を作って位置を<br>設定します。 |

LINESIZE と PAGESIZE は、ページの印刷区域（脚注を除く）の大きさを設定するためのものです。LINESIZE オプションは、各印刷行に印刷される文字の最大文字数を表します。PRINT ファイルの場合、このオプションを省略すると、120 文字と見なされます。PRINT 以外のファイルではデフォルトの値はありません。PAGESIZE オプションは各印刷ページの最大の印刷行数を指定します。指定しない場合は、デフォルトの値の 60 が使用されます。以下に例を示します。

```
open file(Report) output stream print PAGESIZE(55) LINESIZE(110);
on endpage(Report) begin;
 put file(Report) skip list (Footing);
 Pageno = Pageno + 1;
 put file(Report) page list ('Page '||Pageno);
 put file(Report) skip (3);
end;
```

この OPEN ステートメントは、ファイル Report を PRINT ファイルとしてオープンします。PAGESIZE(55) という指定は、各ページに最大 55 行書き出せることを示しています。すでに 55 行が書き出された（またはスキップされた）あと、同じページへの書き出しが試みられると、ENDPAGE 条件が起こります。ENDPAGE 条件が起こったとき、暗黙に取られる処置は新しいページへのスキップですが、この例に示したように、ON ステートメントを使用してユーザー独自の処置を設定することもできます。

LINESIZE(110) は、ページの各行に最大 110 文字書き出せることを示しています。110 文字を超える行を書き出そうとすると、余分の文字は次の行に書き出されます。

56 行目に書き出そうとすると（または 55 行目を超えてスキップしようとする）、ENDPAGE 条件が起こり、ここに示した開始ブロックが実行されます。ENDPAGE 条件は、1 ページあたり 1 回しか起こりません。したがって、ENDPAGE 条件が起こったあと、指定の PAGESIZE を超えて印刷を続けることができます。例えば、各ページの最下部にフットィングを書き出すような場合には、この方法が役立ちます。

最初の PUT ステートメントでは、1 行スキップすることと、文字ストリングと推定されるフットィングの値を 57 行目に印刷する (ENDPAGE 条件が起こったとき、現在行は常に PAGESIZE+1 です) ことを指定しています。ページ番号 Pageno

が 1 つだけ増やされ、ファイル Report が次のページにセットされ、文字定数 'Page' と新しいページ番号が連結されて印刷されます。最後の PUT ステートメントが実行されると 3 行スキップされるので、次は 4 行目から印刷されることになります。制御は、開始ブロックから、ENDPAGE 条件を引き起こした PUT ステートメントに戻されます。ただし、その PUT ステートメントに SKIP または LINE オプションが指定されていても、それらは影響を及ぼしません。

---

## ストリーム入出力での DBCS データ

リスト・ディレクティブ伝送またはデータ・ディレクティブ伝送で DBCS データを使用する場合は、そのファイルの ENVIRONMENT 属性で GRAPHIC オプションを指定しておかなければなりません。また、データ・ディレクティブ伝送では、DBCS データがないときでも、DBCS 名を指定する場合は、GRAPHIC オプションを指定しておかなければなりません。このとき DBCS 継続規則が適用されますが、この規則は 26 ページの『DBCS 継続規則』で説明した規則と同じものです。編集ディレクティブ伝送でグラフィックがどのように処理されるかについては、335 ページの『編集ディレクティブのデータ指定』を参照してください。





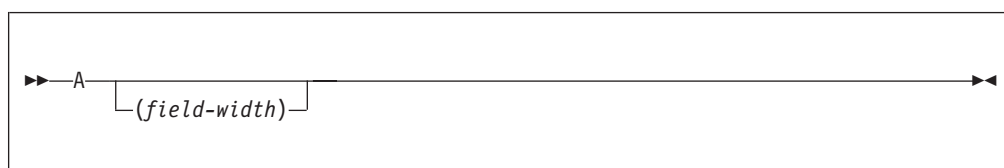
## 第 14 章 編集ディレクティブのフォーマット項目

|                           |     |                         |     |
|---------------------------|-----|-------------------------|-----|
| A フォーマット項目 . . . . .      | 347 | LINE フォーマット項目 . . . . . | 355 |
| B フォーマット項目 . . . . .      | 348 | P フォーマット項目 . . . . .    | 356 |
| C フォーマット項目 . . . . .      | 349 | PAGE フォーマット項目 . . . . . | 356 |
| COLUMN フォーマット項目 . . . . . | 349 | R フォーマット項目 . . . . .    | 357 |
| E フォーマット項目 . . . . .      | 350 | 例 . . . . .             | 357 |
| F フォーマット項目 . . . . .      | 353 | SKIP フォーマット項目 . . . . . | 358 |
| G フォーマット項目 . . . . .      | 354 | V フォーマット項目 . . . . .    | 358 |
| L フォーマット項目 . . . . .      | 355 | X フォーマット項目 . . . . .    | 359 |

この章では、GET、PUT、または FORMAT ステートメントのフォーマット・リスト内に書くことができる編集ディレクティブの各フォーマット項目を説明します。(335 ページの『編集ディレクティブのデータ指定』も参照してください。) フォーマット項目は、アルファベット順に説明してあります。

### A フォーマット項目

文字 (A) フォーマット項目は、文字値の表記を記述するものです。



#### *field-width*

データ・ストリーム中で、そのストリングが入っている (または、これから入る) 文字桁の数を指定します。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値 (負であってはならない) に変換されます。

GET EDIT ステートメントで長さを指定せずに A フォーマット項目を指定すると、コンパイラから警告メッセージが発行され、その項目は L フォーマット項目として扱われます (エラー・メッセージが発行され、長さ 1 が割り当てられるわけではありません)。

入力の場合は、指定した文字数がデータ・ストリームから取り出され、データ・リスト項目に割り当てられます (必要に応じて、変換、切り捨て、または埋め込みが行われます)。入力の場合、フィールド幅を必ず指定しなければなりません。フィールド幅がゼロのときは、ストリングはヌル・ストリングになります。ストリーム中の引用符は、ストリング内の文字と見なされます。

次の例を考えてみてください。

```
get file (Infile) edit (Item) (A(20));
```

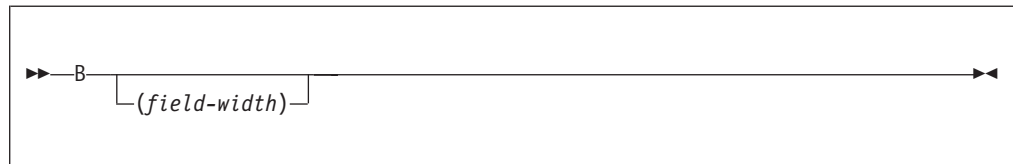
この GET ステートメントは、Infile 内にある次の 20 文字を Item に割り当てます。この値は、フォーマット項目 A(20) で指定された文字表記から、Item 用に宣言された属性によって指定される表記に変換されます。

## A フォーマット

出力の場合は、データ・リスト項目が必要に応じて文字ストリングに変換され、指定のフィールド幅に合わせて、切り捨てまたはブランクの追加が右側で行われたあと、データ・ストリーム中に書き出されます。フィールド幅がゼロのときは、データ・ストリーム中になにも書き出されません。ストリングを囲むための引用符が挿入されることはなく、ストリング内の引用符も二重にされません。フィールド幅を省略すると、データ・リスト項目の文字ストリングの長さに等しい幅が (必要に応じて、『第 5 章 データ変換』に示した規則に従って変換後に) 想定されます。

## B フォーマット項目

ビット (B) フォーマット項目は、ビット値の文字表記を記述するものです。各ビットは、0 または 1 という文字で表されます。



### *field-width*

データ・ストリーム中で、ビット・ストリングが入っている (または、これから入る) 文字桁の数を指定します。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値 (負であってはならない) に変換されます。

入力の場合は、文字表記のビット・ストリングは指定のフィールド内のどこにあってもかまいません。フィールド内のビット・ストリングの前後にブランクがあってもよく、それらのブランクは無視されます。ビット・ストリングがデータ・リスト項目に割り当てられるとき、必要に応じて変換が行われます。入力の場合、フィールド幅を必ず指定しなければなりません。フィールド幅がゼロのときは、ストリングはヌル・ストリングになります。ストリング中に 0 と 1 以外の文字 (埋め込まれたブランク、引用符、文字 B など) があると、CONVERSION 条件が起こります。

出力の場合は、文字表記のビット・ストリングが指定のフィールド内で左寄せされ、必要に応じて右側で切り捨てまたはブランクの追加が行われます。また、必要に応じて、ビット・ストリングへの変換も行われます。引用符や識別文字 B が挿入されることはありません。フィールド幅がゼロのときは、データ・ストリーム中に何も書き出されません。フィールド幅を省略すると、データ・リスト項目のビット・ストリングの長さに等しい幅が (必要に応じて、『第 5 章 データ変換』に示した規則に従って変換後に) 想定されます。

以下に例を示します。

```
declare Mask bit(25);
put file(Maskfile) edit (Mask) (B);
```

この PUT ステートメントは、Mask の値を 0 と 1 からなる 25 文字のストリングとして Maskfile に書き出します。

## C フォーマット項目

複素数 (C) フォーマット項目は、複素数データ値の文字表記を記述するものです。実数フォーマット項目 (*real-format-item*) で、データ・ストリーム中の複素数データ値の実数部分と虚数部分を記述します。

►►C—(*real-format-item*)——►►

### *real-format-item*

F フォーマット項目、E フォーマット項目、または P フォーマット項目のいずれか 1 つを使用して指定します。P フォーマット項目では、数字データを記述しなければなりません。

入力の場合は、入力ストリーム中に文字 I があると、CONVERSION 条件が起こります。

出力の場合は、文字 I が虚数部分に付けられることはありません。2 番目の実数フォーマット項目 (1 つしかないときは最初の実数フォーマット項目) が F 項目か E 項目の場合、虚数部分の値がゼロより小さいときにのみ符号が伝送されます。実数フォーマット項目が P 項目の場合は、S、-、+ のいずれかのピクチャー文字が指定されているときにのみ符号が伝送されます。

I を付けたいときは、データ・リスト内の別個のデータ項目として、複素数項目を指定する変数のすぐあとに I を指定します。そして、I にフォーマット項目 (A または P) を対応させます。2 番目の実数フォーマット項目が指定された場合、これは無視されます。

## COLUMN フォーマット項目

COLUMN フォーマット項目は、ファイルを、現在行または次の行の指定された桁位置に位置付けます。

►►COLUMN—(*character-position*)——►►

### *character-position*

式を指定します。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値 (負であってはならない) に変換されます。

ファイルが現在行の指定された桁位置をまだ通り過ぎていない場合、ファイルはその位置に位置付けられます。ファイルがすでに指定された文字位置の後ろに位置付けられている場合は、現在行は完了し新しい行が開始されます。フォーマット項目は、その後、次の行に適用されます。

指定した桁位置が現在行の最右端の桁位置より右にある場合や、桁位置を表す式の値が 1 より小さい場合は、桁位置 1 が想定されます。

最右端の桁位置は、次のようにして決められます。

- 出力ファイルのときは、行サイズによって決められます。
- 入力ファイルのときは、現在の論理レコードの長さから行サイズが決められ、それによって最右端の桁位置が決められます。

GET STRING ステートメントまたは PUT STRING ステートメントで COLUMN を使用してはなりません。

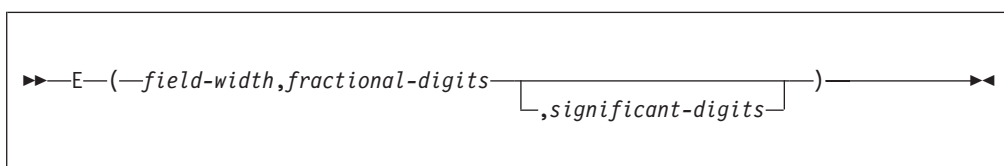
グラフィックまたはワイド文字を含む入力行や出力行に対しては、COLUMN を使用することはできません。

入力の場合、介在文字桁は無視されます。

出力の場合、介在文字桁にはブランクが入ります。

## E フォーマット項目

浮動小数点 (E) フォーマット項目は、実数の浮動小数点 10 進算術データ値の文字表記を記述するものです。



### *field-width*

フィールド内の桁の総数を表します。この値は、フォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $w$  に変換されます。 $w$  は負であってはなりません。

### *fractional-digits*

小数点の右側にある小数部の桁数を表します。この値は、フォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $d$  に変換されます。 $d$  は負であってはなりません。

### *significant-digits*

小数部になければならない数字の桁数を表しています。この値は、フォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $s$  に変換されます。 $s$  は負であってはなりません。

PUT ステートメントでは、 $w$  が正、 $p$  が最大浮動小数点精度、 $e$  が指数を表すために使用する桁数である場合、以下の項目が真でなければなりません。

- $s > 0$
- $d \leq p$
- $s \leq (p + 1)$
- $s \geq d$
- if  $d = 0$ ,  $w \geq s + e + 2$
- if  $d > 0$  and  $s > d$ ,  $w \geq s + e + 3$
- if  $d > 0$  and  $s = d$ ,  $w \geq s + e + 4$

$w$  の値は field-width、 $d$  の値は fractional-digits、 $s$  の値は significant-digits です。  
 $e$  の値は、DEFAULT コンパイラ・オプションの E サブオプションで決まります。

入力の場合は、データ・ストリーム中のデータ値は、実数の 10 進浮動小数点定数または実数の 10 進固定小数点定数 (どちらの場合も符号はあってもなくてもよい) でなければならず、それ以外のときは CONVERSION 条件が起こります。データ値は、指定したフィールド内のどこにあってもかまいません。(便宜上、符号付き指数の前に付ける E は省略することができます。)

フィールド幅を表す値には、先行ブランクや後書きブランク、指数部の桁、正符号 (+) または負符号 (-) (オプション) の桁、文字 E (オプション) の桁、および小数部の小数点 (オプション) の桁を計算に入れます。

データ値は、指定されたフィールドの任意の場所に現れることができます。ブランクをフィールド内のデータ値の前後に置くことができ、それらは無視されます。フィールド全体がブランクのときには、CONVERSION 条件が起こります。小数点がない場合、fractional-digits は小数部の桁のうち仮想小数点の右側にある桁の桁数を示します。小数点为数の中にある場合は、fractional-digits の指定は無効にされます。

$field-width$  が 0 のときは、データ・リスト項目にはなにも割り当てられません。

次に例を示します。

```
get file(A) edit (Cost) (E(10,6));
```

このステートメントは、A から次の 10 文字を取り出して、それらを浮動小数点 10 進数として解釈します。小数点は小数部の右端 6 桁の前にあると見なされます。この数の値は変数 COST の属性に変換され、この変数に割り当てられます。

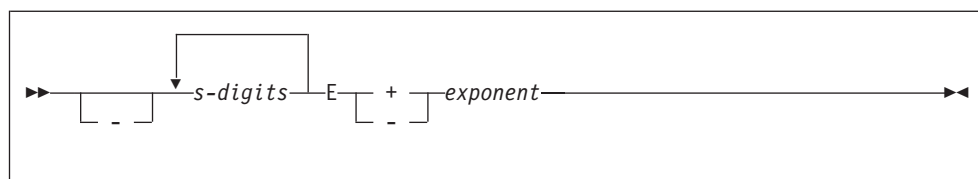
出力の場合は、データ・リスト項目が浮動小数点に変換され、必要に応じて四捨五入されます。データの丸めは次のようにして行われます。まず、切り捨てによって右から数字が切り捨てられ、この数字が 5 より大きい場合、切り捨てられる数字の左の数字に 1 が追加されます。この加算が行われると、指数が調整されることがあります。

出力ストリーム中に書き出された文字ストリングは、下記のいずれかの構文になります。

注:

1. 文字ストリングのエレメントの間にブランクを入れることはできません。
  2. 指数の長さは、浮動小数点データ・タイプおよび DEFAULT コンパイラ・オプションの E サブオプションの設定に応じて、2 または 4 桁にすることができます。以下の説明では、この長さを  $e$  で示しています。
- $d=0$  の場合

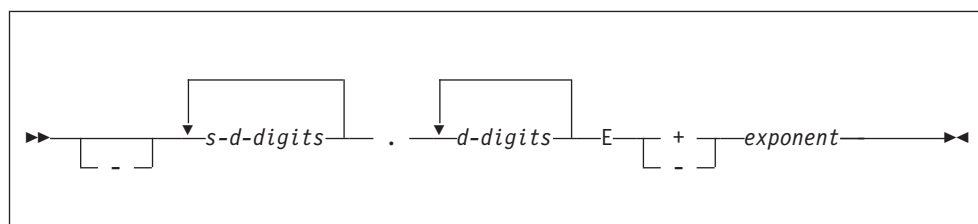
## E フォーマット



正の値のときは  $w \geq s+e+2$ 、負の値のときは  $w \geq s+e+3$  でなければなりません。

値がゼロ以外のときは、小数部の先頭桁がゼロ以外の値になるように指数が調整されます。値がゼロのときは、小数部のすべての桁（最右端の桁は除く）でゼロ消去が行われます。

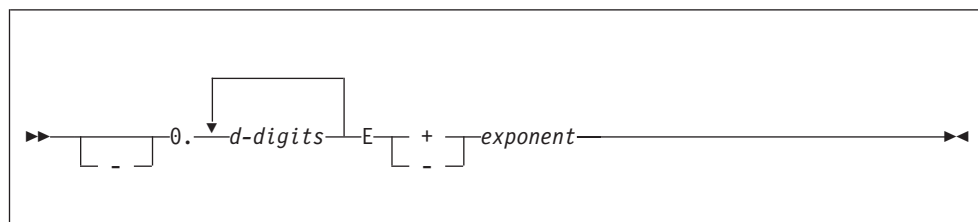
- $0 < d < s$  の場合



正の値のときは  $w \geq s+e+3$ 、負の値のときは  $w \geq s+e+5$  でなければなりません。

値がゼロ以外のときは、小数部の先頭桁がゼロ以外の値になるように指数が調整されます。値がゼロのときは、小数点の左側にあるすべての桁（最初の桁は除く）でゼロ消去が行われます。ほかのすべての桁にはゼロが入ります。

- $d=s$  の場合



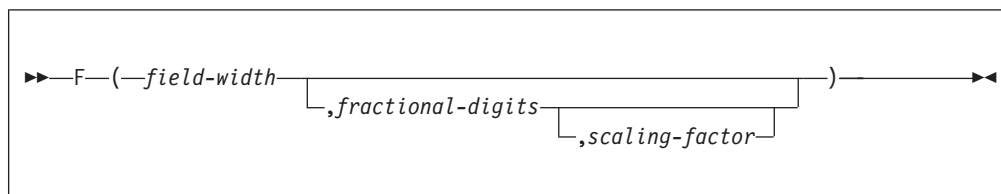
正の値のときは  $w \geq d+e+5$ 、負の値のときは  $w \geq d+e+6$  でなければなりません。

値がゼロ以外の値のときは、小数部分の最初の桁がゼロ以外の値になるように指数が調整されます。値がゼロの値のときは、どの桁にもゼロが入ります。

フィールド幅が短すぎて有効数字や符号が失われる場合は、SIZE 条件が起きます。出力の場合、指定したフィールドが文字ストリングでいっぱいにならないときは、文字ストリングは右寄せされ、左側にブランクが埋め込まれます。

## F フォーマット項目

固定小数点 (F) フォーマット項目は、実数の固定小数点 10 進算術値の文字表記を記述するものです。



### *field-width*

フィールド内の桁の総数を表します。この値は、フォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $w$  に変換されます。変換された値は、負数であってはなりません。

### *fractional-digits*

小数点の右側にある小数部の桁数を表します。この値は、フォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $d$  に変換されます。変換された値は、負数であってはなりません。 *fractional-digits* が省略された場合、この値は 0 と見なされます。

### *scaling-factor*

小数部になければならない数字の桁数を表しています。この値は、フォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $p$  に変換されます。

入力の場合は、データ・ストリーム中のデータ値は、実数の 10 進固定小数点定数 (符号はあってもなくてもよい) でなければならず、それ以外のときは、CONVERSION 条件が起こります。データ値は、指定したフィールド内のどこにあってもかまいません。フィールド内のデータ値の前後にブランクがあってもよく、それらのブランクは無視されます。フィールド全体がブランクのときは、ゼロと解釈されます。

*scaling-factor* を省略し、しかもフィールド内に小数点がない場合、 *fractional-digits* を表す式は、データ値の桁のうち仮想小数点の右側にある桁の桁数を示します。データ値の中に小数点がある場合は、 *fractional-digits* を表す式は無効にされます。

*scaling-factor* を指定すると、データ・ストリーム中のデータ値に、10 の  $p$  乗 ( $p$  は位取り係数を表す整数値) が乗算されます。したがって、 $p$  が正の数ならば、そのデータ値の小数点は、指定された位置から右へ  $p$  桁分移動したところにあるものと見なされます。また、 $p$  が負の数ならば、そのデータ値の小数点は、与えられた位置から左へ  $p$  桁分移動したところにあるものと見なされます。小数点がつく位置は、実際に小数点があればその位置であり、小数点が表示されていない場合は *fractional-digits* を表す式によって指定された位置です。

*field-width* が 0 のときは、データ・リスト項目にはなにも割り当てられません。

出力の場合は、データ・リスト項目が必要に応じて固定小数点に変換されます。浮動小数点データは、FIXED DECIMAL (N,q) に変換されます。ここで  $q$  は、



## F フォーマット

*fractional-digits* に指定した値です。ストリーム中のデータ値は、必要に応じて四捨五入された文字表記の実数の 10 進固定小数点であり、指定したフィールドに右寄せで入れられます。

10 進固定小数点タイプから文字タイプへの変換は、通常の変換規則に従って行われます。余分な桁は、変換後のストリングの数値の前にブランクとして示されます。また先行ゼロはブランクに変換されるので (ただし小数点のすぐ左のゼロは除く)、数値の前に余分のブランクが現れることがあります。小数点または負符号 (-) が書き出されるときは、どちらも先行ブランクの 1 つと置き換わります。

*field-width* だけを指定したときは、数の整数部分だけが書き出されます。小数点は示されません。

*field-width* と *fractional-digits* を指定したときは、数の整数部分と小数部分の両方が書き出されます。*fractional-digits* の値 (*d*) がゼロより大きければ、右端 *d* 桁の前に小数点が挿入されます。*fractional-digits* が *d* より小さければ、後続のゼロが付けられます (値 *d* は *field-width* より小さくなければなりません)。項目の絶対値が 1 より小さいときは、小数点の前に 0 が 1 つ付けられます。小数点の左側にあるすべての桁 (すぐ左の 1 桁は除く) では、先行ゼロのゼロ消去が行われます。

データの丸めは次のようにして行われます。切り捨てによって、右の切り捨てられる数字が 5 以上の場合は、切り捨てられる数字の左の数字に 1 が追加されます。

出力において、データ・リスト項目が 0 より小さい場合は、負符号 (-) が文字表示の前に付けられます。0 より大きいか等しい場合は、符号は付けられません。したがって、負の値の場合には、符号、小数点、および小数点のすぐ左の 0 を桁数として *field-width* に含めることを考慮する必要があります。

*field-width* が短すぎて文字が失われる場合は、SIZE 条件が起こります。

以下に例を示します。

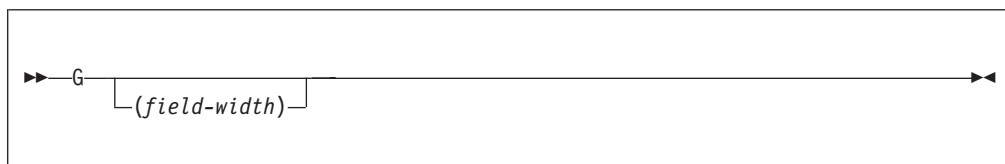
```
declare Total fixed(4,2);
put edit (Total) (F(6,2));
```

この PUT ステートメントでは、Total の値を文字表記の固定小数点数に変換し、出力ファイル SYSPRINT に書き出すことを指定しています。最後の 2 つの数字の前に小数点が挿入され、この数は 6 文字フィールドに右寄せで入れられます。先行ゼロ (小数点のすぐ左にあるゼロは除く) はブランクに変えられ、必要に応じて負符号 (-) が最初の数字の左に付きます。

---

## G フォーマット項目

コンパイラーの場合、グラフィック (G) フォーマット項目は、漢字ストリングの表記を記述するものです。





*field-width*

データ・ストリーム中で、漢字ストリングが入っている (または入れられる) グラフィック桁 (2 バイト) の個数を指定します。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値 (負であってはならない) に変換されます。1 つのグラフィックを形成する 2 バイトの中間で行の終わりになってはなりません。

入力の場合は、指定した個数のグラフィックがデータ・ストリームから取り出され、データ・リスト項目に割り当てられます (必要に応じて、切り捨てや埋め込みが行われます)。入力の場合、*field-width* を必ず指定しなければなりません。

*field-width* がゼロのときは、ストリングはヌル・ストリングになります。

出力の場合は、データ・リスト項目が *field-width* に合わせて右側で切り捨てられたか、(埋め込み用グラフィックで) 拡張されたあと、データ・ストリーム中に書き出されます。ストリングを囲むための引用符が挿入されることはなく、識別用接尾部 *G* が挿入されることもありません。*field-width* がゼロのときは、データ・ストリーム中にはなにも書き出されません。*field-width* を省略したときは、データ・リスト項目の漢字ストリングの長さに等しい幅が想定されます。

次の例では、ファイル OUT に GRAPHIC オプションが指定してあると、6 バイトが伝送されます。

```
declare A graphic(3);
put file(Out) edit (A) (G(3));
```

---

## L フォーマット項目

入力の場合は、L は、行の終わりまでのすべてのデータがデータ項目に割り当てられるものであることを表します。



出力の場合は、L は、データ項目 (必要に応じて、右側をブランクで埋め込まれている) が出力行の残りを埋めるものであることを表します。

---

## LINE フォーマット項目

LINE フォーマット項目は、PRINT ファイルの現行ページのどの行に次のデータ・リスト項目を印刷するかを指定します。または ENDPAGE 条件を引き起こします。


*line-number*

式で表すことができます。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値 (負であってはならない) に変換されます。

## LINE フォーマット

必要に応じて、ブランク行が挿入されます。

指定した *line-number* (行番号) が現在行の行番号以下である場合や、指定した行が OPEN ステートメントの PAGESIZE オプションでセットされた限界 (またはデフォルトの限界) を超えている場合は、ENDPAGE 条件が起こります。ただし、指定した *line-number* が現在行の行番号に等しく、しかも 1 桁目の文字がまだ伝送されていない場合は例外であり、そのときは、SKIP(0) 項目を指定した場合と同じ結果になります (つまり、行送りせずに復帰します)。

*line-number* がゼロのときは、1 と見なされます。

---

## P フォーマット項目

ピクチャー (P) フォーマット項目は、実数の数字の値や文字の値の文字表記を記述するものです。

入力の場合は、P フォーマット項目のピクチャー指定によって、データ・ストリーム中にあるデータ項目のフォーマットを記述したり、数字指定の場合は、項目の算術値がどのように解釈されるかを記述したりします。ここに指定した文字がストリーム中になくときは、CONVERSION 条件が起こります。

出力の場合は、データ・リスト内の対応するエレメントの値が、ピクチャー指定で指定したフォーマットに変換されてから、データ・ストリーム中に書き出されます。

▶▶—P—'*picture-specification*'————▶▶

*picture-specification*

361 ページの『第 15 章 ピクチャー指定文字』で詳しく説明しています。

以下に例を示します。

```
get edit (Name, Total) (P'AAAAA',P'9999');
```

このステートメントが実行されるとき、ファイル SYSIN が入力ファイルであると見なされます。SYSIN から入力された最初の 5 文字は、英字またはブランクでなければならない、それらは Name に割り当てられます。次の 4 文字は数字でなければならない、それらは Total に割り当てられます。

---

## PAGE フォーマット項目

PAGE フォーマット項目は、新しいページを設定することを指定します。これは、PRINT ファイルの場合にのみ使用できます。

▶▶—PAGE————▶▶

新しいページを開始すると、ファイルは次のページの 1 行目に位置づけられます。

## R フォーマット項目

リモート (R) フォーマット項目は、FORMAT ステートメント内のフォーマット・リストを使用することを指定します (340 ページの『FORMAT ステートメント』に説明があります)。

▶—R—(*label-reference*)——▶

### *label-reference*

FORMAT ステートメントのラベル定数を値として持つラベル参照です。

R フォーマット項目とそこで指定した FORMAT ステートメントは、同一ブロックの内部になければならず、両方ともそのブロックの同一の呼び出し内にある必要があります。

リモート FORMAT ステートメントでは、*label-reference* (ラベル参照) としてそれ自体を参照する R フォーマット項目を書くことはできません。また、別のリモート FORMAT ステートメントを参照することによって、結果的にもとの FORMAT ステートメントを参照することもできません。

GET ステートメントまたは PUT ステートメントに対して割り込み可能な条件は、参照されるリモート FORMAT ステートメントに対しても割り込み可能になっていなければなりません。

ON ユニットが 1 つの GET ステートメントまたは PUT ステートメントだけで構成されているときは、そのステートメントが 1 つのブロックになるので、そのステートメント内にリモート・フォーマット項目を書くことはできません。

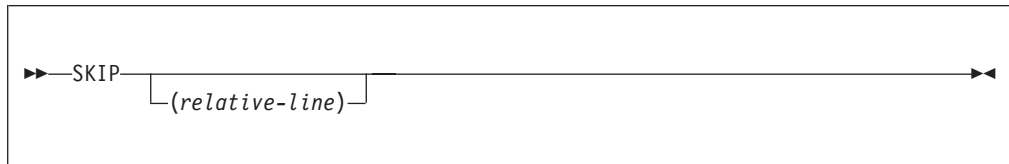
## 例

```
declare Switch label;
get file(In) list(Code);
if Code = 1 then
 Switch = L1;
else
 Switch = L2;
get file(In) edit (W,X,Y,Z)
 (R(Switch));
L1: format (4 F(8,3));
L2: format (4 E(12,6));
```

Switch は、ラベル変数として宣言されています。2 番目の GET ステートメントは、2 つの FORMAT ステートメントのどちらでも使うことができます。

## SKIP フォーマット項目

SKIP フォーマット項目は、新しい行を現在行として定義することを指定します。



### *relative-line*

式を指定します。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値  $n$  に変換されます。変換された値は、負の数であってはならず、また、32,768 未満でなければなりません。PRINT ファイル以外のファイルのときは、この値はゼロより大きくなければなりません。この値がゼロであるか、または省略されていると、1 と見なされます。

新しい行は、現在行から  $n$  行だけあとにある行になります。

$n$  が 1 より大きい場合は、1 行または複数の行が入力時に無視されます。出力時には、1 行または複数のブランク行が挿入されます。

値  $n$  は、PRINT ファイルに限り、ゼロであることがあります。この場合には、位置付けは、現在行の先頭になります。前に印刷された文字に上重ね印刷されることがあります。

PRINT ファイルの場合、指定した *relative-line* が OPEN ステートメントの PAGESIZE オプションでセットされた限界（またはデフォルトの限界）を超えていると、ENDPAGE 条件が起こります。

SKIP フォーマット項目が、ファイルのオープン後に最初に実行される項目である場合は、最初のページの  $n$  行目から出力が開始されます。 $n$  がゼロまたは 1 である場合、最初のページの最初の行から出力が開始されます。

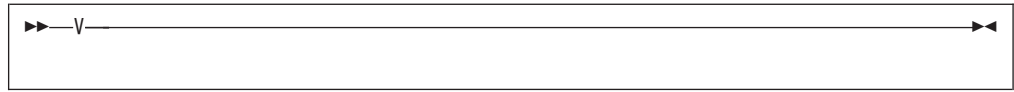
以下に例を示します。

```
get file(In) edit(Man,Overtime)
 (skip(1), A(6), COL(60), F(4,2));
```

このステートメントは、ファイル In に関連付けられているデータ・セットを新しい行に位置づけます。その行の最初の 6 文字が Man に割り当てられ、60 桁目から始まる 4 文字が Overtime に割り当てられます。

## V フォーマット項目

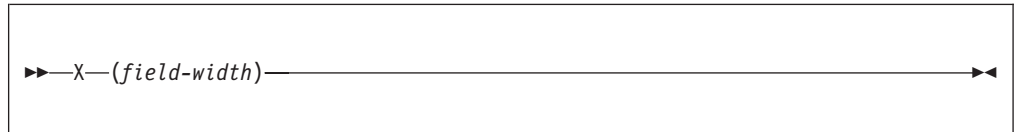
入力の場合は、V は、行の終わりまでのすべてのデータがデータ項目に割り当てられるものであることを表します。ただし、V フォーマット項目で読み取られた文字は、フラッシュされず、表示されるだけです。これらの文字は、他のフォーマット項目で読み取られた場合にのみフラッシュされます。



V フォーマット項目は、出力では無効です。

## X フォーマット項目

間隔 (X) フォーマット項目は、データ・ストリーム中のあるデータ値と次のデータ値の間隔を指定します。



### *field-width*

式を指定します。この式は、このフォーマット項目が使用されるたびに評価され、整数値 (負であってはならない) に変換されます。この整数値は、データ・ストリーム中の現在位置から次のフィールドまでの間にある桁の桁数を表します。

入力の場合は、指定した桁数だけデータ・ストリーム中で水平送りされ、それらの桁はプログラムに伝送されません。

以下に例を示します。

```
get edit (Number, Rebate)
 (A(5), X(5), A(5));
```

入力ファイル **SYSIN** からの次の 15 文字は次のように処理されます。最初の 5 文字は **Number** に割り当てられ、次の 5 文字は無視され、残りの 5 文字は **Rebate** に割り当てられます。

出力の場合は、指定した個数のブランク文字がストリーム中に挿入されます。

以下に例を示します。

```
put file(Out) edit (Part, Count) (A(4), X(2), F(5));
```

**Part** の値を表す 4 文字、2 つのブランク文字、**Count** の固定小数点値を表す最後の 5 文字は、**Out** という名前のファイルに書き出されます。



## 第 15 章 ピクチャー指定文字

|                          |     |                        |     |
|--------------------------|-----|------------------------|-----|
| ピクチャー反復因数 . . . . .      | 361 | 通貨記号の定義 . . . . .      | 369 |
| 文字データ用のピクチャー文字 . . . . . | 362 | 符号と通貨記号 . . . . .      | 370 |
| 数字データ用のピクチャー文字 . . . . . | 363 | 貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼ |     |
| 数字と小数点 . . . . .         | 364 | ロ置き換え文字 . . . . .      | 373 |
| ゼロ消去 . . . . .           | 366 | 指数文字 . . . . .         | 374 |
| 挿入文字 . . . . .           | 367 | 位取り係数 . . . . .        | 375 |

ピクチャー指定とは、一連のピクチャー文字を一重または二重引用符で囲んだものです。この文字は、文字データ項目または数字データ項目の各位置の内容、および出力の内容を記述します。この指定は、次の 2 つの方法で行われます。

- 宣言内の PICTURE 属性の一部として行われます。
- 編集ディレクティブ入出力の P フォーマット項目 (356 ページの『P フォーマット項目』に説明があります) の一部として行われます。

ピクチャー指定は、文字データ項目または数字データ項目を記述します。A または X のピクチャー文字は、文字ピクチャー指定としてピクチャー指定を定義します。それ以外の場合は、数字ピクチャー指定です。

文字ピクチャー項目 とは、英字、10 進数、ブランク、通貨記号、および句読点文字で形成することができる項目です。

数字ピクチャー項目 とは、10 進数、オプションの小数点、オプションの文字 E、およびオプションの 1 つまたは 2 つの正符号 (+) と負符号 (-) だけで形成することができる項目です。算術データには普通に対応づけられるその他の文字 (通貨記号など) も指定できますが、そのような文字は数字変数の算術値の一部ではありません。ただし、そのような文字は、数字と一緒にストレージに保管され、その変数の文字値の一部となります。

値がピクチャー変数に割り当てられるときや、P フォーマット項目によって印刷されるときに、ピクチャー指定が異なれば値の表記がどのように異なるかを、この章に記載されている図で示します。それらの図には、データの元の値、そのデータが割り当てられる (または書き出される) 際に入っていた変数の属性、ピクチャー指定、および数字変数またはピクチャー文字変数の文字値が示されています。

2 種類のピクチャー指定の概念については、以降で個別に説明します。

### ピクチャー反復因数

ピクチャー反復因数は、そのすぐあとにあるピクチャー文字を繰り返す回数を指定します。



▶▶ (n) ◀◀

- n** 整数です。括弧内にブランクがあってはなりません。 **n** が 0 のときは、ピクチャー文字は無視されます。

例えば、次の 2 つのピクチャー指定は、同じことを記述しています。

```
'999V99'
'(3)9V(2)9'
```

---

## 文字データ用のピクチャー文字

文字ピクチャー指定は、無変更の文字データ項目を記述します。これによって、使用可能な文字セット全体の特定のサブセットに属する文字しかデータ項目のその文字位置に入れられないことを指定できます。データは、英字、10 進数、およびブランクから形成できます。

文字ピクチャー指定内に記入できる文字は、**X** と **A** と **9** だけです。これらの各文字は、文字値の中の 1 文字桁を表し、そこには次のような文字を入れることができます。

- X** 1 バイトをなす 8 ビットで表されており、ビットを組み合わせてできる 256 文字のうちの任意の文字。
- A** 任意の英字、または特別言語 (#, @, \$) 文字、またはブランク。
- 9** 任意の数字またはブランク (9 ピクチャー指定文字は、文字データの場合にのみブランクを使用することができます)。

文字値がピクチャー文字データ項目に割り当てられる (または伝送される) ときには、1 文字ずつ、対応するピクチャー指定文字で指定されたとおりであるかが検査されます。文字データがその位置の指定と一致しない場合、先行ゼロの除外が、**CONVERSION** 条件が起こります。(ただし、レコード単位の伝送を行うか、別名を使用するかして値を変更した場合は、検査は行われません。) 以下に例を示します。

```
declare Part# picture 'AAA99X';
put edit (Part#) (P'AAA99X');
```

次の値は、Part# の値として有効です。

```
'ABC12M'
'bbb09/'
'XYZb13'
```

次の値は、Part# の値としては有効ではありません (下線で示した文字が無効文字です)。

```
'AB123M'
'ABC1/2'
'Mb#A5;
```

363 ページの表 35 に、文字ピクチャー指定の例を示します。



表 35. 文字ピクチャー指定の例

| ソース属性        | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定  | 文字値     |
|--------------|-----------------------|----------|---------|
| CHARACTER(5) | '9B/2L'               | XXXXXX   | 9B/2L   |
| CHARACTER(5) | '9B/2L'               | XXX      | 9B/     |
| CHARACTER(5) | '9B/2L'               | XXXXXXXX | 9B/2Lbb |
| CHARACTER(5) | 'ABCDE'               | AAAAA    | ABCDE   |
| CHARACTER(5) | 'ABCDE'               | AAAAAA   | ABCDEb  |
| CHARACTER(5) | 'ABCDE'               | AAA      | ABC     |
| CHARACTER(5) | '12/34'               | 99X99    | 12/34   |
| CHARACTER(5) | 'L26.7'               | A99X9    | L26.7   |

## 数字データ用のピクチャー文字

数字データは数値を表します。ピクチャー指定には、文字データ・ピクチャー文字 X または A を含むことはできません。数字データ用のピクチャー文字は、データの編集を指定することもできます。

数字変数は、その使用方法に応じて、2 種類の値を持つと考えられます。変数のタイプは次のとおりです。

**算術** 算術値は、データ項目の 10 進数、仮想小数点の位置、符号 (省略可能)、および指数 (符号は省略可能) か位取り係数で表される値です。数字変数の算術値が使用されるのは、次の場合です。

- 数字変数が、コード化算術値またはビット値を求める式の中で使われているとき (これには、+, -, \*, /, \*\*, %, ^, ~, &, !, および比較演算子を用いる式も含まれます。文字ストリングを持つ式でも数字変数の算術値を使用します。)
- 数字変数がコード化算術変数、数字変数、またはビット変数に割り当てられるとき
- 編集ディレクティブの入出力において、C、E、F、B、および P (数字) フォーマット項目とともに使用されるとき

数字変数の算術値が内部コード化算術表記に変換されます。

**文字値** 文字値は、データ項目の 10 進数と、ピクチャー指定内に書かれているすべての編集文字と挿入文字とで表される値です。ただし、ピクチャー文字 V、K、または F で指定される仮想小数点の位置は文字値に含まれません。数字変数の文字値が使用されるのは、以下の場合です。

- 数字変数が文字式の中で使用されているとき
- 文字変数に割り当てられるとき
- リスト・ディレクティブ出力またはデータ・ディレクティブ出力によって、そのデータが印刷されるとき
- 数字変数で定義された、または数字変数にもとづいた文字変数が参照されたとき
- 編集ディレクティブ出力で A または P (文字) フォーマット項目によって、数字変数が印刷されるとき

データ変換は不要です。

数字データは、10 進数、小数点 (省略可能)、文字 E (省略可能)、および 1 つまたは 2 つの正符号 (+) または負符号 (-) だけから形成することができます。算術データには普通に関連づけられるその他の文字 (通貨記号など) も指定できますが、そのような文字は数字変数の算術値の一部ではありません。ただし、そのような文字は、数字と一緒にストレージに保管され、その変数の文字値の一部となります。

数字指定は、1 つまたは複数のフィールドから構成され、各フィールドが固定小数点を記述します。浮動小数点指定は、2 つのフィールド (小数部を記述するフィールドと指数を記述するフィールド) からなります。第 1 フィールドは、V ピクチャー指定文字を挿入することによって、サブフィールドに分けることができます。V の前のデータ (ある場合) と V のあとのデータ (ある場合) が数字指定のサブフィールドです。

数字データのピクチャー指定では、各フィールドに、数字桁を指定するピクチャー文字が最低 1 つはなければなりません。ただし、このピクチャー文字は数字 9 である必要はなく、他のピクチャー文字、例えばゼロ抑制文字 (Z または \*) などでも数字桁を指定してもかまいません。

注: K、V、F 以外のすべての文字は、文字表記の中に文字が存在することを表します。

数字指定用のピクチャー文字については、次の節を参照してください。

- ピクチャー文字 9 および V で指定されたデータについては、『数字と小数点』を参照してください。
- ピクチャー文字 Z およびアスタリスク (\*) で指定されたピクチャー・データについては、366 ページの『ゼロ消去』を参照してください。
- 挿入文字 (小数点、コンマ、スラッシュ、および B) の使用については、367 ページの『挿入文字』を参照してください。
- 小数点および挿入文字を V ピクチャー文字と使用する場合については、368 ページの『挿入文字と小数点文字』を参照してください。
- ユーザー独自の文字 (複数の場合もある) を通貨記号として定義する方法については 369 ページの『通貨記号の定義』を、符号および通貨記号の使用については 370 ページの『符号と通貨記号』を参照してください。
- 貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼロ置き換え文字の機能に使用されるピクチャー文字 CR、DB、T、I、R、および Y については、373 ページの『貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼロ置き換え文字』を参照してください。
- 指数に使用されるピクチャー文字 K および E については、374 ページの『指数文字』を参照してください。
- 位取り係数に使用されるピクチャー文字 F については、375 ページの『位取り係数』を参照してください。
- ピクチャー反復文字については、361 ページの『ピクチャー反復因数』を参照してください。

## 数字と小数点

固定小数点 10 進数値を表す数字指定では、ピクチャー文字 9 と V を使用します。

- 9 関連データ項目内のこの位置に 10 進数が入ることを指定します。(数字データのピクチャー指定文字 9 は、文字データの場合は対応する文字がブランクであってはならないという点で文字データの指定とは異なります。)

n 個のピクチャー文字 9 からなるストリングは、その項目が長さ n の文字ストリング (変更不能) で、各文字は数字 (0 から 9) であることを表します。以下に例を示します。

```

dcl digit picture'9',
 Count picture'999',
 XYZ picture '(10)9';

```

使用例は次のとおりです。

```

dcl 1 Record,
 2 Data char(72),
 2 Identification char(3),
 2 Sequence pic'99999';
dcl Count fixed dec(5);
:
Count=Count+1;
Sequence=Count;
write file(Output) from(Record);

```

- V 関連データ項目内のこの位置に小数点があると見なすことを指定します。ただし、実際の小数点または 10 進コンマをこの位置に挿入することを指定するわけではありません。割り当てられる値の整数部分と小数部分は、位取り係数 F ( $\pm x$ ) が指定されている場合はそれによって修正されてから、文字 V に位置合わせされます。したがって、割り当てられる値は左端と右端のどちらかで切り捨てられたり、数字ゼロで拡張されたりすることがあります。(左端で有効数字が切り捨てられたときは、結果は未定義となり、可能であれば SIZE 条件が起こります。)

固定小数点 10 進数値のピクチャー指定 (または浮動小数点 10 進数値のピクチャー指定の第 1 フィールド) 内に文字 V がないときは、フィールド指定の最右端に V があると見なされます。したがって、割り当てられる値は必要に応じて切り捨てられ、整数になることがあります。

文字 V は、1 つのピクチャー指定に 1 回しか記入できません。

以下に例を示します。

```

dcl Value picture 'Z9V999';
Value = 12.345;
dcl Cvalue char(5);
Cvalue = Value;

```

Cvalue には、Value の値が割り当てられた後、'12345' が入っています。

表 36 に、数字と小数点文字の例を示します。

表 36. 数字と小数点文字の例

| ソース属性    | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定 | 文字値   |
|----------|-----------------------|---------|-------|
| FIXED(5) | 12345                 | 99999   | 12345 |
| FIXED(5) | 12345                 | 99999V  | 12345 |
| FIXED(5) | 12345                 | 999V99  | 未定義   |

表 36. 数字と小数点文字の例 (続き)

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定 | 文字値   |
|------------|-----------------------|---------|-------|
| FIXED(5)   | 12345                 | V99999  | 未定義   |
| FIXED(7)   | 1234567               | 99999   | 未定義   |
| FIXED(3)   | 123                   | 99999   | 00123 |
| FIXED(5,2) | 123.45                | 999V99  | 12345 |
| FIXED(7,2) | 12345.67              | 9V9     | 未定義   |
| FIXED(5,2) | 123.45                | 99999   | 00123 |

注: 文字値が未定義のときは、SIZE 条件が起こります。

## ゼロ消去

ピクチャー文字 Z とアスタリスク (\*) は、文字値の条件付き数字桁を指定します。これを使用すれば、先行ゼロをアスタリスクまたはブランクで置き換えることができます。先行ゼロとは、固定小数点数の左端の数字桁または浮動小数点数の 2 つの部分の左端にある数字桁に入っているゼロのうち、仮想小数点の左側にあり、しかもその前に 1 から 9 の数字がないようなゼロのことです。数字の左端にあるゼロ以外の桁、および数値の右側にあるすべての桁 (ゼロであってもゼロでなくてもかまわない) は、有効数字を表します。

**Z** 条件付き数字桁を指定するもので、データのこの位置に先行ゼロがあれば、それはブランクで置き換えられます。先行ゼロ以外の数字はそのまま変りません。ピクチャー文字 Z は、ピクチャー文字 \* または浮動文字が記入されているのと同じフィールド内に記入することはできません。また、フィールド内で任意のピクチャー文字の右側に記入することもできません。

**\*** 条件付き数字桁を指定します。先行ゼロがアスタリスクで置き換えられる点を除けば、その使用方法はピクチャー文字 Z と同じです。ピクチャー文字 \* は、ピクチャー文字 Z や浮動文字が記入されているのと同じフィールド内に記入することはできません。また、フィールド内で任意のピクチャー文字の右側に記入することもできません。

表 37 に、ゼロ抑制文字の例を示します。

表 37. ゼロ抑制文字の例

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定 | 文字値   |
|------------|-----------------------|---------|-------|
| FIXED(5)   | 12345                 | ZZZ99   | 12345 |
| FIXED(5)   | 00100                 | ZZZ99   | bb100 |
| FIXED(5)   | 00100                 | ZZZZZ   | bb100 |
| FIXED(5)   | 00000                 | ZZZZZ   | bbbbb |
| FIXED(5,2) | 123.45                | ZZZ99   | bb123 |
| FIXED(5,2) | 001.23                | ZZZV99  | bb123 |
| FIXED(5)   | 12345                 | ZZZV99  | 未定義   |
| FIXED(5,2) | 000.08                | ZZZVZZ  | bbb08 |
| FIXED(5,2) | 000.00                | ZZZVZZ  | bbbbb |

表 37. ゼロ抑制文字の例 (続き)

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定    | 文字値        |
|------------|-----------------------|------------|------------|
| FIXED(5)   | 00100                 | *****      | **100      |
| FIXED(5)   | 00000                 | *****      | *****      |
| FIXED(5,2) | 000.01                | ***V**     | ***01      |
| FIXED(5,2) | 95                    | \$\$\$9.99 | \$\$\$0.95 |
| FIXED(5,2) | 12350                 | \$\$\$9.99 | \$123.50   |

注: 文字値が未定義のときは、SIZE 条件が起こります。

ピクチャー文字 Z またはアスタリスクをピクチャー文字 V の右側に記入するときは、その指定の小数部分の全数字桁と整数部分の全数字桁に、それぞれ Z またはアスタリスク・ピクチャー文字を記入しなければなりません。ピクチャー文字 V の右側にある全数字桁がゼロ消去ピクチャー文字であるとき、値の小数部分のゼロが抑制されるのは、小数部分のすべての桁にゼロが入っており、しかも整数部分のすべての桁が抑制されたときだけです。したがって、そのデータ項目の文字値はブランクまたはアスタリスクだけになります。小数部分に 1 つでも有効数字が含まれているときは、小数部分の数字はブランクやアスタリスクでは置き換えられません。

## 挿入文字

ピクチャー文字のコンマ (,), 小数点 (.), スラッシュ (/), およびブランク (B) を指定すると、数字データ内の対応する位置にその文字が挿入されます。これらの文字は、数字桁や文字桁を示すものではなく、数字や文字の間に挿入されます。ただし、文字値の中では、いずれの文字も、その文字が消去されるか否かに関係なく 1 つの文字桁を表しています。コンマ、小数点、およびスラッシュは条件付き挿入文字であり、一連のゼロ抑制文字の間にあるときには消去されることもあります。ブランクは無条件挿入文字であり、対応する位置にブランクを常に挿入することを指定します。

挿入文字は、文字値にだけ適用され、そのデータ項目の算術値に関してはなにも指定しません。挿入文字を使用しても、固定小数点 10 進数のピクチャー指定内で小数点 (または 10 進コンマ) 位置合わせを指定したことにはなりませんし、挿入文字はデータ項目の算術値の一部ではありません。小数点位置合わせは、ピクチャー文字 V および F によって制御されます。

### コンマ (,), 小数点 (.), またはスラッシュ (/)

ゼロ消去が行われない限り、数字データ内の対応する位置にこれらの文字が挿入されます。ゼロ消去が行われたときは、下記の場合にのみこれらの文字が挿入されます。

- ・ 挿入位置より左側に、抑制されていない数字がある場合。
- ・ 挿入位置のすぐ左に V があり、データ項目の小数部分に有効数字がある場合。
- ・ ピクチャー指定の先頭が挿入位置である場合。
- ・ 挿入位置より前にあるのが、数字桁を指定しない文字だけである場合。

上記以外の場合にゼロ消去が行われるときは、コンマ、小数点、またはスラッシュ挿入文字は、その前にある文字と等しくゼロ抑制文字と見なされます。

**B** 数字データの文字値の対応する位置に、ブランク文字を挿入することを指定します。

## 挿入文字と小数点文字

小数点、コンマ、またはスラッシュを V と一緒に使用すれば、固定小数点数（または浮動小数点数）の整数部分の終わりと小数部分の始まりを区切る位置に、小数点（またはコンマ、スラッシュ）を挿入できます。この機能は、V を使用しても小数点の印刷ができないので、印刷時に必要になる場合があります。小数点は、V の直前または直後になければなりません。小数点が V の直前にある場合は、すべての小数桁が有効な場合でも、未消去の数字が V の左に現れる場合にのみ挿入されます。V のすぐあとにある小数点は、V の右側にあるすべての数字が消去されたときに消去されますが、小数桁に消去されていない数字がある（間にゼロがあってもよい）ときは挿入されます。

次に各国で使用されている 10 進数の規則の例を示します。

```
declare A picture 'Z,ZZZ,ZZZV.99',
 B picture 'Z.ZZZ.ZZZV,99',
 C picture 'ZBZZZBZZZV,99';
A,B,C = 1234;
A,B,C = 1234.00;
```

A、B、C はそれぞれ 9 桁の数を表し、7 番目と 8 番目の数字の間に小数点または小数コンマが想定されています。小数点挿入文字によって指定された実際の小数点は、算術値の一部ではありませんが、文字値ではその一部です。2 つの代入ステートメントは、次のように A、B、C に同じ文字値を割り当てます。

```
1,234.00 /* value of A */
1.234,00 /* value of B */
1 234,00 /* value of C */
```

次の例では、割り当て中に小数点の位置合わせが文字 V で行われます。Rate が印刷される場合、'762.00' のように示されますが、その算術値は 7.6200 です。

```
declare Rate picture '9V99.99';
Rate = 7.62;
```

表 38 に、挿入文字の例を示します。

表 38. 挿入文字の例

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定       | 文字値          |
|------------|-----------------------|---------------|--------------|
| FIXED(4)   | 1234                  | 9,999         | 1,234        |
| FIXED(6,2) | 1234.56               | 9,999V.99     | 1,234.56     |
| FIXED(4,2) | 12.34                 | ZZ.VZZ        | 12.34        |
| FIXED(4,2) | 00.03                 | ZZ.VZZ        | bbb03        |
| FIXED(4,2) | 00.03                 | ZZV.ZZ        | bb.03        |
| FIXED(4,2) | 12.34                 | ZZV.ZZ        | 12.34        |
| FIXED(4,2) | 00.00                 | ZZV.ZZ        | bbbbbb       |
| FIXED(9,2) | 1234567.89            | 9,999,999.V99 | 1,234,567.89 |
| FIXED(7,2) | 12345.67              | **,999V.99    | 12,345.67    |
| FIXED(7,2) | 00123.45              | **,999V.99    | ***123.45    |
| FIXED(9,2) | 1234567.89            | 9.999.999V,99 | 1.234.567,89 |
| FIXED(6)   | 123456                | 99/99/99      | 12/34/56     |



表 38. 挿入文字の例 (続き)

| ソース属性    | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定   | 文字値       |
|----------|-----------------------|-----------|-----------|
| FIXED(6) | 123456                | 99.9/99.9 | 12.3/45.6 |
| FIXED(6) | 001234                | ZZ/ZZ/ZZ  | bbb12/34  |
| FIXED(6) | 000012                | ZZ/ZZ/ZZ  | bbbbbb12  |
| FIXED(6) | 000000                | ZZ/ZZ/ZZ  | bbbbbbbbb |
| FIXED(6) | 000000                | **/**/**  | *****     |
| FIXED(6) | 000000                | **B**B**  | **b**b**  |
| FIXED(6) | 123456                | 99B99B99  | 12b34b56  |
| FIXED(3) | 123                   | 9BB9BB9   | 1bb2bb3   |
| FIXED(2) | 12                    | 9BB/9BB   | 1bb/2bb   |

## 通貨記号の定義

通貨記号は、数字データの文字値を表示するピクチャー文字として使用することができます。この記号には、ドル符号 (\$) またはユーザーが選択した任意の記号を使用できます。また、< と > の文字で囲まれた一連の文字も記号とすることができます。



< 通貨記号の開始を表します。この文字は、エスケープ文字としての役割を果たします。< を文字として使用したい場合は、<< と指定しなければなりません。

**char** これは、通貨記号 (複数の場合もある) の一部となる任意の文字です。

> 通貨記号の終わりを表します。文字 > を使用する場合には、<> と指定する必要があります。

複数の > は、浮動ストリングを表します (371 ページで説明されています)。

一般的な挿入ストリングには、次のものがあります。

<DM> ドイツ・マルクを表します。  
 <Fr> フランス・フランを表します。  
 <K\$> カリスタン・ドルを表します。  
 <Sur.f> スリナム・ギルダーを表します。  
 <\$> ドル符号を表します。

文字 < または > がシーケンス内になければならない場合、新たに別の < をその文字の前に付けなければなりません。こうすることによって、< はエスケープ文字としての役目も果たします。

< > で囲まれたシーケンス全体で 1 つの「記号」を表し、それによってある数字の文字値を表します。記号を浮動ピクチャー文字として表す必要がある場合は、「< >」のあとに > を指定して、各オカレンスを表してください。

以下に例を示します。

**Pic '<DM>>>.>>9,V99'**

10 文字の数字ピクチャーを表し、割り当てのあとは 11 文字になります。

**Pic '<Sur.f>999,V99'**

7 文字の数字ピクチャーを表し、割り当てのあとは 11 文字になります。

**Pic '<K\$>>>.>>9.V99'**

10 文字の数字ピクチャーを表し、割り当てのあとは 11 文字になります。

**Pic '<\$>>>.>>9.V99'**

10 文字の数字ピクチャーを表し、割り当てのあとは 10 文字になります。

**Pic '\$\$\$,\$\$9.V99'**

上のピクチャー指定と同じ値になります。

通貨記号の定義例をさらに挙げます。

```
dc1 P pic'<DM>9.999,V99';
P = 1234.40; /* Yields 'DM1.234,40' */
```

```
dc1 P pic'<DM>9.999,V99';
P = 34.40; /* Yields 'DM 34,40' */
```

```
dc1 P pic'<DM>>>.>>9,V99';
P = 1234.40; /* Yields 'DM1.234,40' */
```

```
dc1 P pic'<DM>>>.>>9,V99';
P = 34.40; /* Yields ' DM34,40' */
```

```
dc1 P pic'9.999,V99<K$>';
P = 1234.40; /* Yields '1.234,40K$' */
```

この章では、**通貨記号** という用語と \$ 記号は、ドル符号またはユーザー定義の任意の通貨記号を指します。

## 符号と通貨記号

ピクチャー文字 S、+、および - は、数字データ内の符号を指定します。ピクチャー文字 \$ (通貨記号) は、数字データの文字値の中の通貨記号を指定します。各フィールドでは、1 種類の符号文字しか使用できません。

### 通貨記号

通貨記号を指定します。

次に例を示します。

```
dc1 Price picture '$99V.99';
Price = 12.45;
```

Price の文字値は、'\$12.45' です。Price の算術値は 12.45 です。



文字を通貨記号として指定する場合の詳細については、369 ページの『通貨記号の定義』を参照してください。

- S データ値が  $\geq 0$  の場合は正符号 (+) を指定します。それ以外の場合は、負符号 (-) を指定します。使用規則は、通貨記号の場合と同じです。

次の例を考えてみてください。

```
dc1 Root picture 'S999';
```

値 50 は '+050' として、値 0 は '+000' として、値 -243 は '-243' としてそれぞれ保持されます。

- + データ値が  $\geq 0$  の場合は正符号 (+) を指定します。それ以外の場合は、ブランクを指定します。使用規則は、通貨記号の場合と同じです。
- データ値が  $< 0$  の場合は負符号 (-) を指定し、それ以外の場合はブランクを指定します。使用規則は、通貨記号の場合と同じです。

符号および通貨記号は、固定的に使用することも浮動的に使用することもできます。

## 固定的使用

固定的に使用すると、符号、通貨記号、またはブランクが対応する位置に入ります。固定文字として使用される S、+、または - は、浮動小数点指定の小数部フィールド内や指数フィールド内の全数字桁の右側または左側に記入することができ、固定小数点の全数字桁の右側または左側に記入することができます。

## 浮動的使用

浮動的に使用すると、先行ゼロが消去されます。この場合、ピクチャー文字と対応した右端の抑制位置に符号、ブランク、または通貨記号が含まれます (すべての数字桁が浮動文字で占められ、データ項目の値がゼロであり、浮動文字が挿入されない場合は除きます)。

浮動文字であることを示すには、ピクチャー・フィールド内にその文字を複数記入します。浮動文字が浮動する範囲内のすべての数字桁に、その浮動文字を記入しなければなりません。浮動文字を記入するときは、同じ浮動文字を連続して記入しなければなりません。任意で、V およびいずれか 1 つの挿入文字 (コンマ、小数点、スラッシュ、または B) を使用することができます。浮動ストリングの途中またはすぐ後にある挿入文字のスラッシュ、コンマ、または小数点は、浮動ストリングの一部と見なされます。文字 B が記入されている位置には常に、ブランクが挿入されます。データ項目の算術値がゼロの場合以外は、V は浮動ストリングを終了します。その場合、V は無視されます。ピクチャー指定の 1 つのフィールドにつき、浮動ストリングを 1 つだけ記入することができます。浮動ストリングの前に数字桁があってはならず、ピクチャー文字 \* や Z が記入されているフィールド内に浮動ストリングがあってはなりません。

浮動文字のストリング内にスラッシュ、コンマ、または小数点がある場合、データ内の対応する桁には下記のいずれかの文字が入ります。

- その位置の左側に有効数字があるときは、スラッシュ、コンマ、または小数点が入ります。
- その位置のすぐ右側に、フィールドの最左端の有効数字があるときは、浮動記号が入ります。

- その位置より複数桁右側に、フィールドの最左端の有効数字があるときは、ブランクが入ります。

浮動ストリングに  $n$  個の浮動文字が含まれていると、そのストリングは、 $n-1$  個の条件付き数字桁に対応させられます。最左端の浮動文字に関連付けられる桁には、その浮動文字かブランクしか入れてはならず、数字を入れることはできません。1 つのフィールド内で 2 つの異なるピクチャー文字を浮動的に使用することはできません。

浮動ストリング内に V がある場合、V の前にある部分が 1 つのサブフィールドになり、V のあとにあるサブフィールドの全数字桁もまた、第 2 サブフィールドとなる浮動ストリングの一部でなければなりません。

V のあとのすべての数字桁に浮動文字を記入した場合、そのサブフィールドでゼロ消去が行われるのは、整数桁の数字も小数桁の数字もすべてゼロのときだけです。このとき、編集されたデータ項目はすべてブランクになります (ただし、フィールドの先頭に挿入文字がある場合、その挿入文字は例外です)。小数桁にゼロ以外の数字があると、小数桁全体がゼロ消去されずに残っています。

ピクチャーへの割り当ての途中または割り当て前に、10 進数の小数桁の数字が切り捨てられ、その結果、ゼロの値になった場合は、切り捨てが行われる前の 10 進数の値に対応する符号がピクチャー内に挿入されます。したがって、ピクチャー内の符号は、10 進数値がどのように計算されたかに左右されます。

372 ページの表 39 に、符号と通貨記号の例を示します。

表 39. 符号と通貨記号の例

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定     | 文字値      |
|------------|-----------------------|-------------|----------|
| FIXED(5,2) | 123.45                | \$999V.99   | \$123.45 |
| FIXED(5,2) | 012.00                | 99\$        | 12\$     |
| FIXED(5,2) | 001.23                | \$ZZZV.99   | \$bb1.23 |
| FIXED(5,2) | 000.00                | \$ZZZV.ZZ   | bbbbbbb  |
| FIXED(1)   | 0                     | \$\$\$.\$   | bbbbbb   |
| FIXED(5,2) | 123.45                | \$\$\$9V.99 | \$123.45 |
| FIXED(5,2) | 001.23                | \$\$\$9V.99 | bb\$1.23 |
| FIXED(2)   | 12                    | \$\$\$,999  | bbb\$012 |
| FIXED(4)   | 1234                  | \$\$\$,999  | b\$1,234 |
| FIXED(5,2) | 2.45                  | SZZZV.99    | +bb2.45  |
| FIXED(5)   | 214                   | SS,SS9      | bb+214   |
| FIXED(5)   | -4                    | SS,SS9      | bbbb-4   |
| FIXED(5,2) | -123.45               | +999V.99    | b123.45  |
| FIXED(5,2) | -123.45               | -999V.99    | -123.45  |
| FIXED(5,2) | 123.45                | 999V.99S    | 123.45+  |
| FIXED(5,2) | 001.23                | ++B+9V.99   | bbb+1.23 |
| FIXED(5,2) | 001.23                | --9V.99     | bbb1.23  |
| FIXED(5,2) | -001.23               | SSS9V.99    | bb-1.23  |

## 貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼロ置き換え文字

同じフィールド内で、ピクチャー文字 CR、DB、T、I、および R をほかの符号文字と一緒に使用することはできません。

### 貸方と借方

CR (貸方) と DB (借方) は、実数の数字データ項目の符号を指定します。

**CR** データ値が <0 の場合は、対応する位置に CR という文字を入れることを指定します。それ以外の場合は、その位置に 2 つのブランクが入ります。CR を記入できる位置は、フィールドの全数字桁の右側だけです。

**DB** データ値が <0 の場合は、対応する位置に DB という文字を入れることを指定します。それ以外の場合は、その位置に 2 つのブランクが入ります。DB を記入できる位置は、フィールドの全数字桁の右側だけです。

### オーバーパンチ

任意のピクチャー文字 T、I、または R (オーバーパンチ文字として知られる) は、1 つの文字が対応する数字およびデータ項目の符号を表すことを指定します。浮動小数点指定は、2 つのフィールド (小数部を記述するフィールドと指数を記述するフィールド) からなります。オーバーパンチ文字は、フィールド内の任意の数字桁について指定することができます。

T、I、および R ピクチャー文字は、入力文字が解釈される方法を指定します。表 40 に示します。

表 40. T、I、および R ピクチャー文字の解釈

| T または I | T または R | 数字 |
|---------|---------|----|
| + 付きの数字 | - 付きの数字 |    |
| 文字      | 文字      |    |
| {       | }       | 0  |
| A       | J       | 1  |
| B       | K       | 2  |
| C       | L       | 3  |
| D       | M       | 4  |
| E       | N       | 5  |
| F       | O       | 6  |
| G       | P       | 7  |
| H       | Q       | 8  |
| I       | R       | 9  |

T、I、および R は以下の値を指定します。

**T** 入力時には、T は、文字 { から I と数字 0 から 9 が正の値を表し、文字 } から R が負の値を表すことを指定します。

出力時には、T は、入力データが正の値を表す場合には、対応する位置に文字 { から I の 1 つを含み、入力データが負の値を表す場合には文字 } から R の 1 つを含むことを指定します。T は '9' ピクチャー指定文字が生じるすべての場所に記入することができます。以下に例を示します。

```
dc1 Credit picture 'ZZV9T';
```

## 貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼロ置き換え

文字表示は 4 文字です。+21.05 は '210E' として保持されます。 -0.07 は 'bb0P' として保持されます。

- I** 入力時には、I は、文字 { から I と数字 0 から 9 が正の値を表すことを指定します。

出力時には、I は、入力データが正の値を表す場合には、対応する位置に文字 { から I の 1 つを含み、入力データが負の値を表す場合には数字 0 から 9 の 1 つを含むことを指定します。

- R** 入力時には、R は、文字 } から R が負の値を表し、数字 0 から 9 が正の値を表すことを指定します。

出力時には、R は、入力データが負の値を表す場合には、対応する位置に文字 } から R の 1 つを含み、入力データが正の値を表す場合には数字 0 から 9 の 1 つを含むことを指定します。以下に、例を示します。

```
dc1 X fixed decimal(3);
get edit (x) (P'R99');
```

上記の指定は、入力ストリームの次の 3 つの位置内で、'132' を見付けると X を 132 に設定し、'J32' を見付けると X を -132 に設定します。

### ゼロ置き換え文字

- Y** 指定された数字桁にあるゼロを、無条件にブランク文字で置き換えることを指定します。

表 41 に、貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼロ置き換え文字の例を示します。

表 41. 貸方記号、借方記号、オーバーパンチ、およびゼロ置き換え文字の例

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定    | 文字値       |
|------------|-----------------------|------------|-----------|
| FIXED(3)   | -123                  | \$Z.99CR   | \$1.23CR  |
| FIXED(4,2) | 12.34                 | \$ZZV.99CR | \$12.34bb |
| FIXED(4,2) | -12.34                | \$ZZV.99DB | \$12.34DB |
| FIXED(4,2) | 12.34                 | \$ZZV.99DB | \$12.34bb |
| FIXED(4)   | 1021                  | 999I       | 102A      |
| FIXED(4)   | -1021                 | Z99R       | 102J      |
| FIXED(4)   | 1021                  | 99T9       | 10B1      |
| FIXED(5)   | 00100                 | YYYYY      | bb1bb     |
| FIXED(5)   | 10203                 | 9Y9Y9      | 1b2b3     |
| FIXED(5,2) | 000.04                | YYYVY9     | bbbbb4    |

### 指数文字

ピクチャー文字 K と E は、浮動小数点 10 進数を記述する数字指定の指数フィールドを区切ります。指数フィールドは、浮動小数点の数字ピクチャー指定の最後のフィールドです。ピクチャー文字 K と E を、同じピクチャー指定内に記入することはできません。

- K** 対応する桁の右側が指数フィールドであることを指定します。この文字は、数字データ項目内の文字を指定するものではありません。

**E** 対応する桁に、指数フィールドの始まりを示す文字 **E** が入ることを指定します。

文字値の中では指数の値が調整されて、第 1 フィールド (小数部) の最初の有効数字が、ピクチャー指定内の最初の数字指定子 (それがゼロ抑制文字であっても) に対応する桁に入るようにされます。

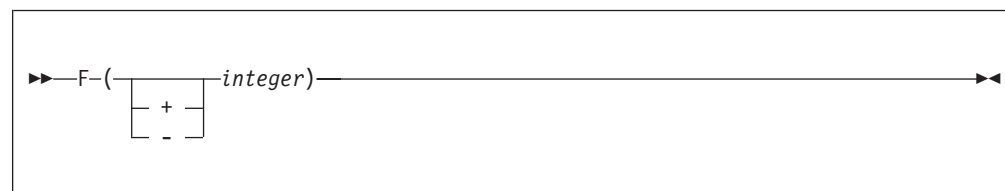
表 42 に、指数文字の例を示します。

表 42. 指数文字の例

| ソース属性    | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定      | 文字値         |
|----------|-----------------------|--------------|-------------|
| FLOAT(5) | .12345E06             | V.99999E99   | .12345E06   |
| FLOAT(5) | .12345E-06            | V.99999ES99  | .12345E-06  |
| FLOAT(5) | .12345E+06            | V.99999KS99  | .12345+06   |
| FLOAT(5) | -123.45E+12           | S999V.99ES99 | -123.45E+12 |
| FLOAT(5) | 001.23E-01            | SSS9.V99ESS9 | +123.00Eb-3 |
| FLOAT(5) | 001.23E+04            | ZZZV.99KS99  | 123.00+02   |
| FLOAT(5) | 001.23E+04            | SZ99V.99ES99 | +123.00E+02 |
| FLOAT(5) | 001.23E+04            | SSSSV.99E-99 | +123.00Eb02 |

## 位取り係数

ピクチャー文字 **F** は、固定小数点 10 進数のピクチャー位取り係数を指定します。この文字は、ピクチャー指定の右端に 1 回だけ記入することができます。



**F** ピクチャー位取り係数を指定します。ピクチャー位取り係数は、変数の算術値における小数点の位置が、文字値における仮想小数点の位置からどれだけ右に (ピクチャー位取り係数が正の場合) または左に (負の場合) あるかを表します。

ピクチャー文字 **V** のあとにある数字の個数から、**F** で指定した整数を引いた値が、-128 から 127 の範囲内になければなりません。

表 43 に、ピクチャー位取り係数文字の例を示します。

表 43. 位取り係数文字の例

| ソース属性      | ソース・データ<br>(定数フォーマット) | ピクチャー指定     | 文字値    |
|------------|-----------------------|-------------|--------|
| FIXED(4,0) | 1200                  | 99F(2)      | 12     |
| FIXED(7,0) | -1234500              | S999V99F(4) | -12345 |
| FIXED(5,5) | .00012                | 99F(-5)     | 12     |
| FIXED(6,6) | .012345               | 999V99F(-4) | 12345  |



---

## 第 16 章 条件処理

|                                  |     |                              |     |
|----------------------------------|-----|------------------------------|-----|
| 条件接頭語 . . . . .                  | 377 | 動的に派生した ON ユニット . . . . .    | 382 |
| 条件接頭語の有効範囲 . . . . .             | 379 | ファイル変数のための ON ユニット . . . . . | 382 |
| OPTIMIZATION によって起こる条件 . . . . . | 380 | REVERT ステートメント . . . . .     | 384 |
| ON ユニット . . . . .                | 380 | SIGNAL ステートメント . . . . .     | 384 |
| ON ステートメント . . . . .             | 380 | RESIGNAL ステートメント . . . . .   | 385 |
| ヌル ON ユニット . . . . .             | 381 | 複数条件 . . . . .               | 385 |
| ON ユニットの有効範囲 . . . . .           | 381 | CONDITION 属性 . . . . .       | 385 |

PL/I プログラムの実行中には、さまざまなイベントが発生します。ユーザーは、これらのイベントに対してテスト、応答、または回復アクションを行うことができます。これらのイベントは、条件と呼ばれ、検出されたときに発生します。条件には、起こることが予期できないエラー（オーバーフローや入出力伝送エラーなど）もあれば、起こると分かっているエラー（入力ファイルの終わりなど）もあります。SIGNAL ステートメントを使用して条件をプログラム中に直接発生させることができます（この方法はテスト中に非常に役立ちます）。

条件をアプリケーションで制御できるようにするには、その条件を割り込み可能にします。また、割り込み可能な条件が起こるとアクションが確立されます。条件が割り込み禁止になっていると、その条件が起こってもなんのアクションも実行されません。プログラムはそのイベントが起こったことを認知しません。確立されるアクションは、ON ユニットであることもあれば、その条件に対して定義された暗黙アクションである場合もあります。

呼び出された ON ユニットは、パラメーターのないプロシージャと見なされます。ON ユニットを使用する場合には、条件を引き起こした原因を調べる際に役立つ組み込み関数と疑似変数が提供されます。疑似変数は、エラーを訂正して回復する際によく使用されます。417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』に、組み込み関数と疑似関数を示しています。

多くの条件では、暗黙アクションとして ERROR 条件が発生します。したがって、ERROR 条件は、それぞれの条件を個別に検査するのではなく、多数の異なる条件を検査するのに使用される共通の条件です。この点で ONCODE 組み込み関数は特に便利なもので、これを使用すればそれらの条件を起こしている状況を区別することができます。検出される条件やエラーに対応するコードについては、「メッセージおよびコード」にリストが記載されています。

---

### 条件接頭語

条件によっては、その条件を割り込み可能にするのか、割り込み禁止にするのかを指定することができます。条件が割り込み可能な場合、コンパイラーは、条件の検出に必要な追加のコードを生成します。条件が割り込み禁止の場合は、追加のコードは生成されません。

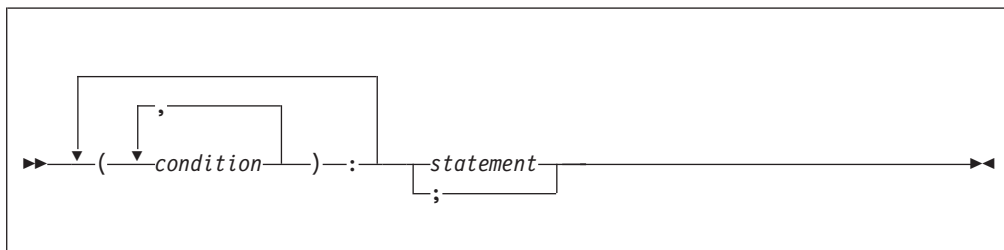
条件を割り込み禁止にするということは、つまり条件が起こらないようにするということです。条件が起こった場合は、プログラムにエラーがあるということを意味します。



例えば、SUBSCRIPTRANGE 条件が割り込み可能な場合、コンパイラーは追加のコードを生成して、あらゆる配列指標が必ずその配列の境界内に収まるようにします。SUBSCRIPTRANGE 条件が割り込み禁止だと、追加コードは生成されないため、無効な配列指標が使用されて予期不能な結果となります。

条件がハードウェアによって検出されると、条件の割り込み禁止は無効になります。

条件接頭語を使用すれば、上記のような条件について、割り込み可能にするか、割り込み禁止にするかを指定できます。



### condition

条件の中には、常に割り込み可能になっており、割り込み禁止にすることができないものもあります。さらに、割り込み禁止にするのでない限り、割り込み可能になっているものもあります。逆に、割り込み可能にするのでない限り、割り込み禁止になっているものもあります。条件は、387 ページの『第 17 章 条件』にリストされています。

### statement

条件接頭語は、ステートメント DECLARE、DEFAULT、FORMAT、OTHERWISE、END、ELSE、ENTRY、および % ステートメントでは使用することができません。条件接頭語の有効範囲については、379 ページの『条件接頭語の有効範囲』を参照してください。

次の例では、(size) : が条件接頭語です。条件付き接頭部は、対応する条件が接頭部の有効範囲内で割り込み可能であることを表します。

```
(size): L1: X=(I**N) / (M+L);
```

条件は、条件名を指定する条件接頭語を使用して、割り込み可能にすることができます。また、条件名を指定する条件接頭語の前に空白を入れずに NO を付ければ、条件を割り込み禁止にすることができます。条件のタイプと状況を表 44 に示します。

表 44. 条件のクラスと状況

| クラスと条件                 | 状況             |
|------------------------|----------------|
| 計算 (データの処理、式の計算、および計算) |                |
| CONVERSION             | デフォルトにより割り込み可能 |
| FIXEDOVERFLOW          | デフォルトにより割り込み可能 |
| INVALIDOP              | デフォルトにより割り込み可能 |
| OVERFLOW               | デフォルトにより割り込み可能 |
| UNDERFLOW              | 常に割り込み可能       |
| ZERODIVIDE             | デフォルトにより割り込み可能 |
| 入出力                    |                |



表 44. 条件のクラスと状況 (続き)

| クラスと条件                           | 状況             |
|----------------------------------|----------------|
| ENDFILE                          | 常に割り込み可能       |
| ENDPAGE                          | 常に割り込み可能       |
| KEY                              | 常に割り込み可能       |
| NAME                             | 常に割り込み可能       |
| RECORD                           | 常に割り込み可能       |
| TRANSMIT                         | 常に割り込み可能       |
| UNDEFINEDFILE                    | 常に割り込み可能       |
| プログラム・チェックアウト (プログラムの開発、デバッグに有効) |                |
| SIZE                             | デフォルトにより割り込み禁止 |
| STRINGRANGE                      | デフォルトにより割り込み禁止 |
| STRINGSIZE                       | デフォルトにより割り込み禁止 |
| SUBSCRIPTRANGE                   | デフォルトにより割り込み禁止 |
| その他                              |                |
| ANYCONDITION                     | 常に割り込み可能       |
| AREA                             | 常に割り込み可能       |
| ATTENTION                        | 常に割り込み可能       |
| CONDITION                        | 常に割り込み可能       |
| ERROR                            | 常に割り込み可能       |
| FINISH                           | 常に割り込み可能       |
| STORAGE                          | 常に割り込み可能       |

条件を割り込み可能にしたり、割り込み禁止にしたりすることがパフォーマンスに与える影響については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## 条件接頭語の有効範囲

条件接頭語の有効範囲 (つまり、その接頭部が適用されるプログラムの部分) は、その接頭部が付けられているステートメントまたはブロックです。このステートメントの実行時に呼び出される可能性のあるプロシージャや ON ユニットには、その接頭部は必ずしも適用されません。

ステートメント `PACKAGE`、`PROCEDURE` または `BEGIN` に付けられた条件接頭語は、対応する `END` ステートメントまでのすべてのステートメント (`END` も含めて) に適用されます。これには、そのブロック内にネストされている他の `PROCEDURE` ステートメントや `BEGIN` ステートメントも含まれます。

あるブロック内で条件の状況を再定義するには、そのブロック内のステートメント (`PROCEDURE` ステートメントや `BEGIN` ステートメントを含む) に接頭部を付けます (このようにすれば、ネストされたブロック内で条件の割り込み可能または割り込み禁止を再定義することができます)。そのような再定義は、その接頭部が付けられているステートメントを実行する場合にのみ適用されます。ネストされた `PROCEDURE` ステートメントまたは `BEGIN` ステートメントの場合は、そのステートメントが定義されているブロックとそのブロックに含まれている他のブロック (ある場合) にのみ適用されます。

## OPTIMIZATION によって起こる条件

OPTIMIZATION が有効である場合、ある同じ式について複数回出てくる条件は、1 回しか起こらない可能性があります。次の例では、IX の条件 SUBSCRIPTRANGE は、1 回しか起こりません。

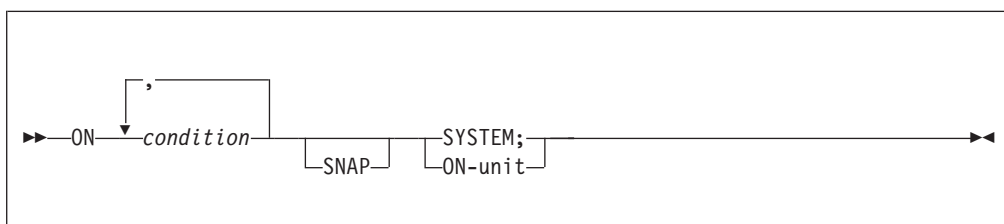
```
call P (55);
(subscriptrange): P: proc (IX);
 dcl (Ar, Br, Cr) (10);
 Ar(IX) = Ar(IX) + Br(IX);
 T = Cr(IX);
End P;
```

## ON ユニット

どの条件についても暗黙アクションが定められています。割り込み可能な条件が起こると、この暗黙アクションが実行されます。ただし、その条件についての ON ユニットが有効になっているときは別です。暗黙アクションが ERROR を起こすもので、この条件に対して ON ユニットが確立されていない場合は、エラー条件が起こる前にメッセージが書き込まれます。

## ON ステートメント

ON ステートメントは、あるアクションを設定するためのステートメントです。このアクションは、引き続いて設定された条件の有効範囲内で割り込み可能な条件が引き続いて起こると実行されます。



### condition

387 ページの『第 17 章 条件』に説明されている条件、または CONDITION 属性によって定義されている条件のいずれかです。

### SNAP

割り込み可能条件が起こったとき、その条件に関する診断情報が印刷されることを指定します。SNAP オプションのアクションが行われてから、ON ユニットのアクションが行われます。

SNAP と SYSTEM を指定すると、暗黙アクションが取られた直後に SNAP 情報が印刷されます。

### SYSTEM

暗黙アクションを実行することを指定します。すべての条件に関して同じ暗黙アクションが取られるとは限りませんが、ほとんどの条件の場合、メッセージが印刷され、ERROR 条件が引き起こされます。条件ごとの暗黙アクションについては、387 ページの『第 17 章 条件』で説明します。

### ON-unit

指定された条件が起こり、しかも割り込み可能であるときに実行されるアクション

ンを指定します。ON-unit そのものの中にステートメント (複数も可) を書いて、実行されるアクションを定義します。ON ステートメントが実行されることを、指定の条件に関する ON ユニットが確立される といいます。ON ユニットは、ON ステートメントが実行される時点では実行されません。指定された条件が生じた場合のみ実行されます。

ON ユニットは、ラベルなしの単一の単純ステートメント、またはラベルなしの開始ブロックのどちらでもかまいません。単純ステートメントの場合は、BEGIN、DECLARE、DEFAULT、DO、END、ENTRY、FORMAT、ITERATE、LEAVE、OTHERWISE、PROCEDURE、RETURN、SELECT、WHEN、または % ステートメント以外の任意のステートメントとすることができます。ON ユニットが開始ブロックの場合は、RETURN ステートメントは開始ブロック内のネストされたプロシージャー内にのみ現れます。LEAVE ステートメントは開始ブロック内のネストされた DO グループ内にのみ現れます。

ただし、セミコロン (;) または RESIGNAL ステートメントのいずれかでのみ形成されている ON ユニットを除き、ON ユニットは、それがああるブロックに対して内部的なプロシージャー (パラメーターなしの) と見なされます。ON ユニット内で参照された名前は、その条件が起こったときの環境で知られている名前ではなく、その ON ユニットを指定した ON ステートメントが実行されたときの環境で知られている名前です。

ON ユニットの実行が完了すると、通常は、その ON ユニットに制御を渡したブロックに制御が戻されます。プロシージャーの場合と同様に、GO TO ステートメントを使用して ON ユニットの外に制御を移すことができ、その場合は、GO TO ステートメントで指定した場所に制御権が移され、正常な戻りは行われません。

ON ユニットからどこの場所に制御が戻されるかは、それぞれの条件によって異なります。条件ごとの正常な戻りについては、387 ページの『第 17 章 条件』で説明します。

## ヌル ON ユニット

ヌル・ステートメント ON ユニットが実行されると、その条件からの正常な戻りが実行されます。

ヌル ON ユニットを使用することは、次の 2 つの理由から、条件を割り込み禁止にすることと同じではありません。

- ヌル ON ユニットはどの条件に対しても指定できますが、条件のなかには割り込み禁止にすることができないものがあります。
- 条件を割り込み禁止にした場合、その条件が発生したかどうかは検査されないため、実行時間を節約することができます。(ヌル ON ユニットを指定した場合は、PL/I はその条件が発生したかどうかを検査します。)

## ON ユニットの有効範囲

ON ステートメントが実行されると、条件の発生時に取られる処置が指定されます。設定されたアクションは、別の ON ステートメントまたは REVERT ステートメントの実行によって無効にされない限り、また ON ステートメントが実行されるブロックが終了しない限り、そのブロック全体および動的に派生したすべてのプロ

ック全体で設定されたままになっています。(動的に派生したすべての ON ユニットの詳細については、『動的に派生した ON ユニット』を参照してください。)

別の ON ステートメントで同じ条件を指定したときは、次のようになります。

- 前に実行された ON ステートメントで指定したものと同じ条件を、あとで実行されるステートメントで指定し、前の ON ステートメントを含んでいるブロックから動的に派生したブロック内であとの ON ステートメントが実行されたときは、前の ON ステートメントで指定した処置が一時的に中断され、スタックされます。REVERT ステートメントが実行されるか、またはあとの ON ステートメントを含んでいるブロックが終了すると、保留されていたアクションが復元されます。

ブロックから制御が戻されると、そのブロックを活動化したときにすでに設定されていたすべてのアクションが再設定されます。したがって、あるブロックですでに設定されているアクションを、そのブロックから呼び出されたサブルーチンで変更することはできません。

- 後ろの ON ステートメントと前の ON ステートメントの双方が、同一の呼び出しで呼び出された同一のブロックの内部にある場合は、前の ON ステートメントによって設定されたアクションは論理的に無効になります。別の ON ステートメントを実行する (または、無効にされた ON ステートメントを再び実行する) のでない限り、無効にされたアクションが再び設定されることはありません。

## 動的に派生した ON ユニット

ON ユニットの実行中に条件が起こり、その条件によりさらに別の ON ユニットの指定することがあります。ある ON ユニット内で条件が起こったか、または SIGNAL ステートメントによって条件が引き起こされたために別の ON ユニットに入った場合、その別の ON ユニットの、動的に派生した ON ユニットといえます。動的に派生した ON ユニットから正常に戻ると、その条件を引き起こした ON ユニットの環境が再び設定されます。

ERROR ON ユニット内で ERROR 条件が起こったとき、同一の ERROR ON ユニットが実行されると、再び ERROR 条件が起こってループ状態になります。ループ状態になって最大ネスト・レベルを超えると、メッセージが印刷され、アプリケーションは終了します。次の方法を使用すれば、このような状況で発生するループを防止することができます。

```
on error begin;
on error system;
:
:
end;
```

## ファイル変数のための ON ユニット

ON ステートメントでファイル変数を指定した場合は、その ON ユニットの設定時にその変数の現行値であるファイル定数が参照されます。

**例 1**

```

dc1 F file,
 G file variable;
 G = F;
L1: on endfile(G);
L2: on endfile(F);

```

ラベル L1 と L2 が付いている 2 つのステートメントは同等です。

**例 2**

```

declare FV file variable,
FC1 file,
FC2 file;
FV = FC1;
on endfile(FV) go to Fin;
:
FV = FC2;
read file(FC1) into (X1);
read file(FV) into (X2);

```

最初の READ ステートメントの実行中に ENDFILE 条件が起これば、ON ユニットに入ります。これは、この ON ユニットがファイル FC1 を参照しているためです。しかし、2 番目の READ ステートメントの実行中に ENDFILE 条件が起これば、この READ ではファイル FC2 を参照しているため、この ON ユニットには入りません。

**例 3**

```

E: procedure;
declare F1 file;
on endfile (F1) goto L1;
call E1 (F1);
:
E1: procedure (F2);
declare F2 file;
on endfile (F2) go to L2;
read file (F1);
read file (F2);
end E1;

```

E1 の中で F1 がファイルの終わりになると、E1 の中の F2 用の ON ユニットに入ります。E1 の中で ON ユニットを指定しなかったとき、F1 または F2 の ENDFILE 条件が起これば、E の中の F1 用の ON ユニットに入ることになります。

**例 4**

```

declare FV file variable,
FC1 file,
FC2 file;

do FV=FC1,FC2;
on endfile(FV) go to Fin;
end;

```

ファイル変数を指定している ON ステートメントが複数回実行され、なおかつ、その変数とそのつど異なる値を取る場合は、それぞれの実行のたびに別々の ON ユニットが設定されます。

## REVERT ステートメント

あるブロックで **REVERT** ステートメントが実行されると、指定の条件に関してそのブロック内で実行された **ON** ユニットが取り消されます。そして、そのブロックが活動化されたときにすでに設定されていた **ON** ユニットが再び設定されます。**REVERT** ステートメントの影響を受ける **ON** ステートメントは、その **REVERT** ステートメントを含んでいるブロックの内部にある **ON** ステートメントのうち、同一の呼び出しで呼び出されたそのブロック内ですでに実行されたものだけです。

**condition**

387 ページの『第 17 章 条件』に説明されている条件、または CONDITION 属性によって定義されている条件のいずれかです。

REVERT ステートメントが ON ユニットを取り消すのは、次の 2 つの条件が両方とも成立する場合に限ります。

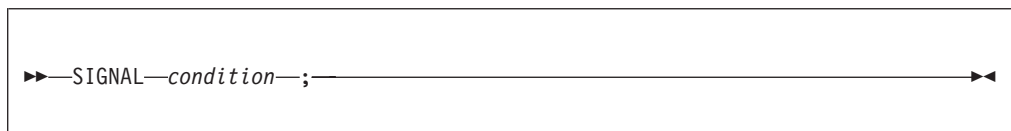
1. 派生元に適用可能であり、かつ **REVERT** ステートメントでリストされた条件を指定する **ON** ステートメントが、ブロックの活動化後に実行された。
2. 指定された条件付きの **REVERT** ステートメントが、同じブロック内で実行されたことがない。

これらの 2 つの条件のどちらかが成立しない場合には、REVERT ステートメントはヌル・ステートメントと見なされます。

## SIGNAL ステートメント

**SIGNAL** ステートメントを使用すれば、条件を引き起こすことができます。 プログラムのテスト時にこのステートメントを使用して、ON ユニットのアクションが妥当であるかどうかを検査したり、指定の条件に正しいアクションが対応しているかを判別したりすることができます。条件が割り込み禁止になっていない限り、設定されているアクションが取られます。

指定した条件が割り込み禁止になっているときは、**SIGNAL** ステートメントはヌル・ステートメントと同等になります。

**condition**

387 ページの『第 17 章 条件』に説明されている条件、または `CONDITION` 属性によって定義されている条件のいずれかです。



## RESIGNAL ステートメント

RESIGNAL ステートメントによって、現行の ON ユニットは終了して、別の ON ユニットが同一の条件で制御を獲得できるようになります。処理は、RESIGNAL を実行している ON ユニットが存在せず、制御を獲得しなかった場合と同様に続けます。これによって、複数の ON ユニットが同一条件で制御を獲得することができます。

```
▶▶—RESIGNAL—;—————▶▶
```

ただし、RESIGNAL は 1 個の ON ユニット内、またはそこから動的に派生したもののにおいてのみ有効です。

## 複数条件

複数条件とは、複数の条件が同時に起こることをいいます。

複数条件が起こり得るのは、次の条件の場合です。

RECORD (400 ページの『RECORD 条件』を参照)。

TRANSMIT (405 ページの『TRANSMIT 条件』を参照)。

TRANSMIT 条件が常に最初に処理されます。TRANSMIT の ON ユニットから正常に戻らなかったときは、RECORD 条件は無視されます。

複数条件は、順番に処理されます。次のイベントのいずれかが起こると、後続の条件は処理されません。

- ある条件の処理中に、その条件の暗黙アクション、ON ユニットからの正常な戻り、または ON ユニット内の異常終了によって、プログラムが終了した場合。
- GO TO ステートメントによって ON ユニットの外に制御が移され、その結果、正常に戻る事ができなかった場合。

## CONDITION 属性

CONDITION 属性は、宣言された名前がプログラマー定義の条件を示すことを指定します。

```
▶▶—CONDITION——————▶▶
```

ON、SIGNAL、または REVERT ステートメント内に CONDITION 条件と一緒に書いた名前は、条件名であることがコンテキスト上から宣言されます。

デフォルトの有効範囲は EXTERNAL です。CONDITION 条件の例は、391 ページに示されています。





---

## 第 17 章 条件

|                            |     |                             |     |
|----------------------------|-----|-----------------------------|-----|
| ANYCONDITION 条件 . . . . .  | 387 | NAME 条件 . . . . .           | 399 |
| AREA 条件 . . . . .          | 389 | OVERFLOW 条件 . . . . .       | 400 |
| ATTENTION 条件 . . . . .     | 389 | RECORD 条件 . . . . .         | 400 |
| CONDITION 条件 . . . . .     | 390 | SIZE 条件 . . . . .           | 401 |
| CONVERSION 条件 . . . . .    | 391 | STORAGE 条件 . . . . .        | 402 |
| ENDFILE 条件 . . . . .       | 393 | STRINGRANGE 条件 . . . . .    | 403 |
| ENDPAGE 条件 . . . . .       | 394 | STRINGSIZE 条件 . . . . .     | 404 |
| ERROR 条件 . . . . .         | 395 | SUBSCRIPTRANGE 条件 . . . . . | 405 |
| FINISH 条件 . . . . .        | 396 | TRANSMIT 条件 . . . . .       | 405 |
| FIXEDOVERFLOW 条件 . . . . . | 396 | UNDEFINEDFILE 条件 . . . . .  | 406 |
| INVALIDOP 条件 . . . . .     | 397 | UNDERFLOW 条件 . . . . .      | 407 |
| KEY 条件 . . . . .           | 398 | ZERODIVIDE 条件 . . . . .     | 408 |

この章では、各条件をアルファベット順に説明します。一般的には、それぞれの条件ごとに下記のことを説明します。

- **状況** - プログラムの開始時に、条件が割り込み可能/割り込み禁止のどちらになっているかを示す標識、および条件を割り込み禁止にする方法（できる場合）または割り込み可能にする方法。 378 ページの表 44 は、条件をタイプ別に分類し、状況を示したものです。また、これは、割り込み可能なものを割り込み禁止にする条件をリストします。
- **結果** - 条件を引き起こした操作の結果。条件が割り込み可能になっている場合と割り込み禁止になっている場合に分けて説明します。場合によっては、結果が未定義のこともあります。
- **原因と構文** - どのような場合にその条件が起こるかを含め、条件について述べます。 SIGNAL ステートメントによって起こる条件については、 384 ページの『SIGNAL ステートメント』を参照してください。
- **暗黙アクション** - 割り込み可能条件が起こり、しかもその条件の ON ユニットが確立されていないときに取られる処置。
- **正常な戻り** - ON ユニットが正常終了した場合に制御が戻される場所。 ON ユニットの外へ制御権を移動する GO TO ステートメントは、ON ユニットの異常終了です。 SIGNAL ステートメントによって条件 (ERROR 条件は除く) が引き起こされた場合、正常な戻りでは、SIGNAL のすぐあとのステートメントに戻ります。
- **条件コード** - プログラムの検査で検出される条件やエラーに対応するコード。各コードの解説は、「メッセージおよびコード」の『条件コード』の章に記載されています。

---

### ANYCONDITION 条件

#### 状況

ANYCONDITION は常に使用可能です。

#### 結果

結果は、基礎的な条件の場合と同じです。

## 原因と構文

SIGNAL ANYCONDITION は使用できません。ANYCONDITION は、条件をトラップする ON ユニットを確立 (または取り消し) する ON (および REVERT) ステートメントでのみ使用できます。それらの条件には、CONDITION 条件も含まれます。この条件はブロック内で起こるもので、そのブロック内にあるほかの適格な ON ユニットによってトラップされません。

次に示す例では、すべての ERROR 条件は、開始ブロック内で処理され、FINISH 条件は、システムによって処理され、その他のすべての条件は、*handle\_All\_Others* という名前のルーチンの呼び出しによって処理されることになります。

```
on error
begin;
:
:
end;

on finish system;
on anycondition call Handle_all_others;
```

注: 無限ループを避けるために、ON ANYCONDITION を使用する時には ON FINISH (前述の例にあるように) の使用が必要になる場合があります。

条件が発生すると、呼び出しスタックが調べられ (逆方向に)、その条件の ON ユニットを含むブロックが検索されます。そのような ON ユニット、または ON ANYCONDITION ON ユニットを含む最初のブロックが検出されると、検索は停止します。そのような ON が検出されず、その条件が暗黙アクションによって ERROR にプロモートされる場合は (またその場合に限り)、スタックが再度調べられ、ON ERROR ON ユニットが検索されます。

ANYCONDITION ON ユニット内で ONCONDID 組み込み関数を使用して、どの条件が処理されているかを判別することができます。また、ONCONDCOND 組み込み関数を使用すれば、CONDITION 条件の名前を判別することができます。ONFILE のようなほかの ON 組み込み関数を使用すれば、正確な原因を判別し、その他の関連する情報を知ることができます。これらの組み込み関数については、417 ページの『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』にまとめてあります。

▶▶—ANYCONDITION—◀◀

## 省略形

ANYCOND

## 暗黙アクション

暗黙アクションは、基礎的な条件の場合と同じです。

## 正常な戻り

正常な戻りは、基礎的な条件の場合と同じです。

## 条件コード

ANYCONDITION に固有の条件コードはありません。

---

## AREA 条件

### 状況

AREA 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

AREA 条件を引き起こす割り振りまたは割り当ての試みは、なんの影響も及ぼしません。

### 原因と構文

AREA 条件は、次のいずれかの場合に起こります。

- ある区域内に基底付き変数を割り振ろうとしたが、その割り振りに必要なフリー・ストレージがその区域内にない場合。
- 区域の割り当てを実行しようとしたが、ソース区域内の割り振りを収容するのに必要なストレージがターゲット区域内にない場合。

ON ユニットで ONAREA 組み込み関数を使用して、AREA 条件を引き起こした AREA 参照の名前を取得できます。ONAREA 組み込み関数について詳しくは、『第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン』の『ONAREA』を参照してください。



### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

ON ユニットからの正常な戻りに際して、次の処置が取られます。

- この条件が割り振りによって起こり、しかも ON ユニットがヌル ON ユニットである場合は、割り振りが再び試みられることはありません。
- この条件が割り振りによって起こった場合は、割り振りが再び試みられますが、その前に、区域参照が計算し直されます。したがって、ON ユニットで、不適当な区域を参照するよう修飾しているポインターの値を変更して、そのポインターが別の区域を指し示すようにしておけば、新しい区域内で割り振りが再び試みられます。
- この条件が区域割り当てまたは SIGNAL ステートメントによって起こった場合は、この条件が起こった場所から実行が続行されます。

### 条件コード

360、361、362

---

## ATTENTION 条件

### 状況

ATTENTION 条件は常に割り込み可能です。

## ATTENTION

### 結果

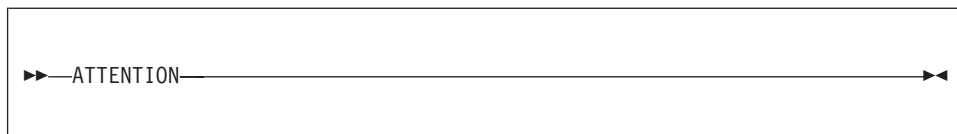
この条件が起こると、ATTENTION の ON ユニットに入ります。 ATTENTION ON ユニットがない場合は、この条件は無視されるため、アプリケーションは終了されます。

### 原因と構文

ATTENTION 条件は、ユーザーが、特定のキーの組み合わせを押してアプリケーションに割り込んだときに起こります。この特定のキーは、オペレーティング・システムによって以下のように異なります。

- Windows では、CTRL-BRK および CTRL-C。ユーザーが CTRL-BRK または CTRL-C キーの組み合わせを入力した結果、ATTENTION ON ユニットは Windows 上でドリブンされません。暗黙アクションが実行されます。
- ホストでは、(使用可能であれば) ATTN キー。

またこの条件は、SIGNAL ATTENTION ステートメントによっても起こります。



### 省略形

ATTN

### 暗黙アクション

アプリケーションは終了します。

### 正常な戻り

ATTENTION の ON ユニットから戻ると、プログラム内の、この条件が起こった場所のすぐあとから処理が再開されます。

### 条件コード

400

---

## CONDITION 条件

### 状況

CONDITION 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

CONDITION 条件を使用すると、該当する CONDITION 条件の SIGNAL ステートメントが実行されるたびに実行されるような ON ユニットを確立することができます。

デバッグの援助として、この条件を使用して、プログラムの現在の状況を示す情報を印刷する ON ユニットを確立することができます。

### 原因と構文

CONDITION 条件は、SIGNAL ステートメントによって引き起こされます。SIGNAL ステートメントにどの名前が指定されているかによって、どの CONDITION 条件が引き起こされるかが決まります。SIGNAL ステートメントを使用すれば、プログラム内のどこからでもその ON ユニットを実行させるこ

とができます。名前の有効範囲に関しては、通常の規則が適用されます。条件名はデフォルトでは EXTERNAL ですが、INTERNAL と宣言することもできます。

次に、CONDITION 条件の使用例を示します。

```
dc1 Test condition;
```

```
on condition (Test)
begin;
:
end;
```

開始ブロックは、次に示すステートメントが実行されるときは必ず実行されます。

```
signal condition (Test);
```

▶▶—CONDITION—(name)—◀◀

#### 省略形

COND

#### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、SIGNAL ステートメントの次のステートメントから実行が続行されます。

#### 正常な戻り

SIGNAL ステートメントの次のステートメントから実行が続けられます。

#### 条件コード

500

## CONVERSION 条件

#### 状況

CONVERSION は、NOCONVERSION 条件接頭語の有効範囲内を除き、プログラム全体にわたって割り込み可能です。ONSOURCE、ONCHAR、および ONWSOURCE 疑似変数を CONVERSION の ON ユニットで使用すれば、変換エラーを訂正することができます。

#### 結果

CONVERSION 条件が起こったとき、結果フィールド全体の内容は未定義です。

#### 原因と構文

CONVERSION 計算条件は、文字データ、ワイド文字、またはグラフィック・データを変換する際に無効な変換が試みられると起こります。この試みは、内部的に行われることも、入出力処理中に行われることもあります。例えば、次のような場合、この条件が起こります。

- ビット・データに変換される文字データ内に、0 でも 1 でもない文字がある場合。

## CONVERSION

- 数字フィールドまたはコード化算術値に変換される文字値の中に、算術定数 (符号は任意) の表記でない文字や、複素定数を表す式が含まれている場合。
- 文字に変換されるグラフィック (DBCS) スtringが、SBCS に変換できないグラフィックを含む場合。
- 文字ピクチャー項目に変換される値の中に、そのピクチャー指定で許可されていない文字が含まれている場合。

文字データの変換は、必ず左から右へ文字単位で行われ、無効文字が検出されるたびに、この条件が起こります。また、すべての文字がブランクのときもこの条件が起こります。ただし、下記の場合は例外です。

- F フォーマット項目の入力の場合。ゼロの値が想定されます。
- E フォーマット項目の入力の場合。場合によっては、ON ユニットに繰り返し入ることがあるので注意してください。

ヌル・Stringまたは 1 つ以上のブランクから成るStringが数値変数に割り当てられた場合、CONVERSION 条件は起こらないことに注意してください。

先行ゼロの除外が、この条件に対して指定されている現在の処置が実行されます (CONVERSION が割り込み禁止でない場合)。指定された処置が ON ユニットである場合、無効文字はその ON ユニット内で置き換えることができます。

- ソース・データが文字のときは、ONSOURCE または ONCHAR 疑似変数を使用します。
- ソース・データがワイド文字のときは、ONWSOURCE または ONWCHAR 疑似変数を使用します。
- ソース・データがグラフィックのときは、ONGSOURCE 類似変数を使用します。

CONVERSION 条件が起こったとき、この条件が割り込み禁止になっていると、プログラムはエラーになります。

グラフィック・データから非グラフィック・データへの変換中に CONVERSION 条件が起きた場合、ONCHAR および ONSOURCE 組み込み関数には有効なソース・データは含まれません。ONGSOURCE 組み込み関数には、もとのグラフィック・ソース・データが入っています。グラフィック変換は、ONGSOURCE 疑似変数が CONVERSION の ON ユニットで使用され、CONVERSION 条件を起こしたグラフィック・データの修正を試みる場合に再試行されます。ONGSOURCE 疑似変数を CONVERSION の ON ユニットで使用しない場合、ERROR 条件が起こります。



▶—CONVERSION—▶

### 省略形

CONV

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

**正常な戻り**

CONVERSION 条件が文字ストリング・ソース (グラフィック・ソースではない) で引き起こされ、かつ ONSOURCE または ONCHAR 疑似変数のいずれかが ON ユニットで使用される場合、プログラムは ON ユニットからの戻り時に変換を再試行します。

CONVERSION がグラフィック・ソースで引き起こされ、かつ ONGSOURCE 疑似変数が ON ユニットで使用される場合、プログラムは ON ユニットからの戻り時に変換を再試行します。

CONVERSION がワイド文字ソースで引き起こされ、かつ ONWSOURCE 疑似変数が ON ユニットで使用される場合、プログラムは ON ユニットからの戻り時に変換を再試行します。

変換エラーがこれらの疑似変数によって修正されないと、プログラムはループします。

**条件コード**

600-672

---

**ENDFILE 条件**
**状況**

ENDFILE 条件は常に割り込み可能です。

**結果**

指定されたファイルがこの条件が起こってからクローズされない場合、このファイルに対する後続の GET または READ ステートメントは失敗し、これによって新たな ENDFILE 条件が引き起こされます。

ただし、ファイルは、ENDFILE ON ユニットでクローズしてはいけません。つまり、ファイルは ON ユニットの終了後にのみクローズします。

**原因と構文**

ENDFILE 入出力条件は処理中に起こる可能性があり、GET ステートメントまたは READ ステートメントで指定したファイルの終わりを越えて読み取ろうとすると起こります。この条件は、SEQUENTIAL INPUT ファイル、SEQUENTIAL UPDATE ファイル、および STREAM INPUT ファイルにのみ適用されます。

レコード単位データ伝送では、READ ステートメントの実行中にファイルの終わりが検出されると、ENDFILE 条件が起こります。

ストリーム指向データ伝送では、GET ステートメントの実行中に、GET ステートメントのデータ・リスト内の項目の伝送が完了する前、またはデータ項目が伝送されたあと次のデータ項目が伝送される前のいずれかでファイルの終わりが検出されると、ENDFILE 条件が起こります。データ項目の処理中にファイルの終わりが検出された場合や、X フォーマット項目の処理中にファイルの終わりが検出された場合は、ERROR 条件が起こります。

►►—ENDFILE—(*file-reference*)—►►



file-reference (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

ENDFILE を引き起こした GET または READ ステートメントのすぐあとのステートメントから実行が続けられます。

この条件の ON ユニット内でファイルをクローズした場合は、正常な戻りの結果がどうなるかはわかりません。ファイルをクローズした ON ユニットから出るときは、GO TO ステートメントを使用しなければなりません。

### 条件コード

70

---

## ENDPAGE 条件

### 状況

ENDPAGE 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

ENDPAGE 条件が起こると、現在行の行番号は、PAGESIZE オプション (デフォルトは 60) で指定した行番号より 1 だけ大きい値になります。したがって、同じページに書き続けることができます。ON ユニットで PAGE オプションまたは PAGE フォーマット項目を実行して現在行を 1 にセットすれば、新しいページを開始することができます。

ON ユニットで新しいページを開始しない限り、現在行の行番号は無限に増えてゆく可能性があります。後続の LINE オプションまたは LINE フォーマット項目で現在行の行番号以下の行番号を指定すれば、ENDPAGE 条件は起こらず、現在行が 1 にセットされて新しいページが開始されます。ただし例外として、現在行の行番号が指定された行番号に等しく、しかもファイルが現在行の 1 桁目に位置づけられている場合は、ENDPAGE 条件は起こりません。

データ伝送中に ENDPAGE 条件が起こったときは、ON ユニットから戻ると、データが現在行 (ON ユニットで変更された可能性がある) に書き出されます。ENDPAGE 条件が LINE または SKIP オプションによって引き起こされたときは、ON ユニットから戻ると、LINE または SKIP で指定された処置は無視されます。

### 原因と構文

PUT ステートメントが実行された結果として、現行ページに関して指定されている限界を超えて新しい行を開始しようとする、ENDPAGE 入出力条件が起こります。この限界は OPEN ステートメントの PAGESIZE オプションで指定することができます。PAGESIZE を指定しないと、デフォルトの限界である 60 が適用されます。データ伝送時に (編集ディレクティブの PUT ステートメントの場合は対応するフォーマット項目も含む)、LINE オプションまたは SKIP オプションを使用すれば、この限界を超えることができます。また、LINE オプションまたは LINE フォーマット項目で、現在行の行番号より小さい行番号を指定したときも、ENDPAGE 条件が起こることがあります。ENDPAGE 条件は、



SIGNAL ステートメントによって引き起こされる場合を除いて、1 ページに 1 回しか起こりません。

▶▶—ENDPAGE—(*file-reference*)—◀◀

*file-reference* (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

#### 暗黙アクション

新しいページが開始されます。この条件が SIGNAL ステートメントによって引き起こされた場合、実行は影響を受けず、SIGNAL ステートメントの次のステートメントから実行は継続されます。

#### 正常な戻り

上で述べたようにして PUT ステートメントの実行が続けられます。

#### 条件コード

90

## ERROR 条件

#### 状況

ERROR 条件は、常に割り込み可能です。

#### 結果

エラー・メッセージは、ON ユニットがアクティブでない場合に ERROR 条件が起こったときか、または ON ユニットが GOTO (ブロックから出る) を使用してこの条件からの回復を行わないときに出力されます。

#### 原因と構文

ERROR 条件は、多くの条件の暗黙アクションです。したがって、ERROR 条件は、それぞれの条件を個別に検査するのではなく、多数の異なる条件を検査するのに使用される共通の条件です。

ERROR 条件は、次の場合に起こります。

- ある条件で暗黙アクションが取られ、それによって ERROR 条件が引き起こされた場合。
- SUBSCRIPTRANGE CONVERSION などの条件の正常な戻り処置が取られたとき、または再試行が行われない場合。
- プログラムの実行中にエラー (ほかの PL/I 定義の条件を引き起こさないもの) が起こった場合。
- SIGNAL ERROR ステートメントを実行した場合。

ERROR 条件のループを回避するために、ON ERROR ブロックの最初のステートメントを ON ERROR SYSTEM にしてください。

▶▶—ERROR—◀◀

## ERROR

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、FINISH 条件が起こります。

### 正常な戻り

暗黙アクションが取られます。

### 条件コード

1000 以上のすべてのコードは ERROR 条件です。

---

## FINISH 条件

### 状況

FINISH 条件は常に割り込み可能です。

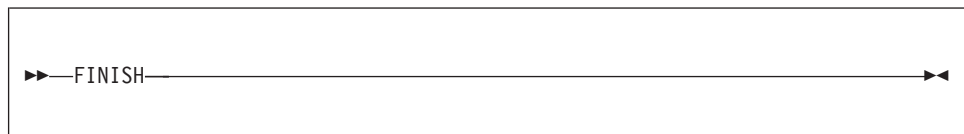
### 結果

制御が FINISH の ON ユニットに移り、処理を続行します。

### 原因と構文

FINISH 条件は、プロシージャーを終了するステートメントの実行中に起こります。次の処置が行われます。

- 正常終了の場合 - 主プロシージャーが PL/I の場合にのみ、FINISH ON ユニット (確立されている場合) に制御が移ります。
- 異常終了の場合 - FINISH ON ユニットがアクティブ・ブロックにある場合は、FINISH ON ユニットに制御が移ります。



### 暗黙アクション

- この条件がメジャー・タスクで起こった場合、なんの処置も取られません。つまり、この条件が起こった場所から処理が続けられます。
- この条件が別の条件の暗黙アクションの一部として起こった場合、プログラムは終了されます。

### 正常な戻り

処理は、その条件が起こった場所から再開します。条件が SIGNAL ステートメントによって引き起こされた場合、その SIGNAL ステートメントのあとのステートメントで処理が再開されます。

### 条件コード

4

---

## FIXEDOVERFLOW 条件

### 状況

NOFIXEDOVERFLOW を指定している条件接頭語の有効範囲を除けば、FIXEDOVERFLOW 条件はプログラム全体にわたって割り込み可能です。

### 結果

無効な FIXED DECIMAL 操作の結果は未定義です。

### 原因と構文

計算関係の条件である FIXEDOVERFLOW 条件は、FIXED DECIMAL 算術演算の結果の長さが、有効な最大の長さを超えたときに起こります。

FIXED BINARY 操作の場合は、FIXEDOVERFLOW 条件は起こりません。

FIXEDOVERFLOW 条件と SIZE 条件は次の点で異なります。SIZE 条件は、演算結果が変数の宣言されているサイズを超えたときに起こります。一方、FIXEDOVERFLOW 条件は、演算結果の長さが計算機で許可されている最大の長さを超えたときに起こります。

FIXEDOVERFLOW 条件が起こったとき、この条件が割り込み禁止になっていると、プログラムはエラーになります。



### 省略形

FOFL

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

この条件が起こったすぐあとの位置に制御が戻されます。

### 条件コード

310

注: SIZE 条件が割り込み禁止になっているときに、固定小数点 10 進変数に大きすぎる数を割り当てようとすると、FIXEDOVERFLOW 条件が起こることがあります。

## INVALIDOP 条件

### 状況

INVALIDOP 条件は、NOINVALIDOP 条件接頭語の有効範囲を除いて、プログラムの全体にわたって割り込み可能です。

### 結果

無効な操作の結果は未定義です。

### 原因と構文

計算関係の条件である INVALIDOP 条件は、次のいずれかが IEEE 浮動小数点式の計算中に検出されたときに起こります。

- 無限大と無限大の減算
- 無限大に 0 を乗算
- 無限大と無限大の除算
- ゼロをゼロで除算
- 無効な浮動小数点データ

▶▶INVALIDOP◀◀

#### 暗黙アクション

エラー条件が発生します。

#### 正常な戻り

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

#### 条件コード

290

## KEY 条件

#### 状況

KEY 条件は常に割り込み可能です。

#### 結果

キー順レコードが未定義のため、キー順レコードが入っているステートメントは無視されます。

#### 原因と構文

KEY 入出力条件は、指定されたキーを持つレコードが検出されないときに起こります。この条件は、キー順レコードの処理中にのみ起こる可能性があります。また、以下にリストした条件コードの場合にこの条件が起こります。

データ・セットを参照する LOCATE ステートメントを使用したとき、この LOCATE ステートメントに対する KEY 条件は、そのファイルを参照する次の WRITE または LOCATE ステートメントが実行されるときまで、もしくはファイルがクローズされるときまで起こりません。

▶▶KEY—(*file-reference*)◀◀

*file-reference* (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

#### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

#### 正常な戻り

KEY 条件を引き起こしたステートメントのすぐあとのステートメントに制御が渡されます。

この条件の ON ユニット内でファイルをクローズした場合は、正常な戻りの結果がどうなるかはわかりません。ファイルをクローズした ON ユニットから出るときは、GO TO ステートメントを使用しなければなりません。

#### 条件コード

50-58

## NAME 条件

### 状況

NAME 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

指定されたデータは未定義です。

### 原因と構文

NAME 入出力条件は、FILE オプションが指定されたデータ・ディレクティブ GET ステートメントの実行中に起こる可能性があります。この条件は、次のいずれの場合にも起こります。

- 332 ページの『データ・ディレクティブ・データの構文』で説明した構文規則に従っていない場合。
- 名前が欠落しているか、正しくない場合。次に例を示します。
  - データ・リスト中に対応する名前がない。
  - データ・リストがない場合に、その名前がこのブロック内で知られていない。
  - 修飾された名前が完全には修飾されていない。
  - DBCS のどちらかのバイトの値が、有効な値の範囲 (X'41' から X'FE') 内 にない。
- 添え字リストが欠落しているか、正しくない場合。次に例を示します。
  - 添え字が欠落している。
  - 添え字の個数が正しくない。
  - 添え字が 10 桁を超える (先行ゼロは無視される)。
  - 添え字が、変数の現在の割り振りで使用できる範囲内にない。

ON ユニット内で DATAFIELD 組み込み関数を使用すると、不正なデータ・フィールドを検索する場合があります。

▶▶—NAME—(*file-reference*)————▶▶

*file-reference* (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

### 暗黙アクション

正しくないデータ・フィールドが無視され、メッセージが印刷されて、GET ステートメントの実行が続行されます。

### 正常な戻り

ストリーム中の次の名前を使用して GET ステートメントの実行が続けられます。

### 条件コード

10

---

## OVERFLOW 条件

### 状況

NOOVERFLOW を指定している条件接頭語の有効範囲を除けば、OVERFLOW 条件はプログラム全体にわたって割り込み可能です。

### 結果

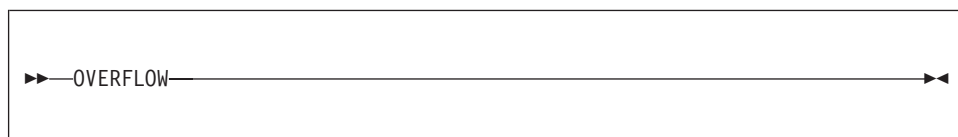
無効な浮動小数点演算の結果は未定義です。

### 原因と構文

計算関係の条件である OVERFLOW 条件は、浮動小数点数の大きさがシステムで定められている最大の大きさを超えたときに起こります。

OVERFLOW 条件と SIZE 条件は次の点で異っています。SIZE 条件は、演算結果が変数の宣言されているサイズを超えたときに起こります。一方 OVERFLOW 条件は、演算結果が計算機で許可されている最大の大きさを超えたときに起こります。

OVERFLOW 条件が起こったとき、この条件が割り込み禁止になっていると、プログラムはエラーになります。



### 省略形

OFL

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

エラー条件が発生します。

### 条件コード

300

---

## RECORD 条件

### 状況

RECORD 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

指定されたファイルの長さ接頭部が間違えて伝送される可能性があります。

### 原因と構文

RECORD 入出力条件は、指定されたレコードが切り捨てられたときに起こります。この条件は、READ、WRITE、LOCATE、または REWRITE 処理中にのみ起こる可能性があります。

SCALARVARYING オプションがファイルに適用されている場合は (位置指定モードを使用して可変長ストリングを伝送するときのファイルにはこのオプションを適用しなければならない)、2 バイトの長さの接頭部が可変長ストリング・エレメントと一緒に伝送されます。RECORD 条件が起こったとき、長さ接頭部

はリセットされません。 SCALARVARYING オプションがファイルに適用されていない場合は、長さ接頭部は伝送されません。つまり、入力の場合、可変長ストリングの現在の長さは、レコードの長さとストリングの最大の長さのうち短い方にセットされます。



file-reference (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

#### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

#### 正常な戻り

RECORD 条件を引き起こしたステートメントのすぐあとのステートメントから実行が続けられます。

この条件の ON ユニット内でファイルをクローズした場合は、正常な戻りの結果がどうなるかはわかりません。ファイルをクローズした ON ユニットから出るときは、GO TO ステートメントを使用しなければなりません。

#### 条件コード

20-24

## SIZE 条件

#### 状況

SIZE 条件は、SIZE 条件接頭語の有効範囲内を除き、プログラム全体にわたって割り込み禁止です。

#### 結果

割り当ての結果は未定義です。

#### 原因と構文

計算関係の条件である SIZE 条件は、変数や中間結果への割り当て時に、または入出力処理中に、高位の (つまり、左端の) 有効数字 (2 進数または 10 進数) が失われたときにのみ起こります。データ・タイプ、基数、スケール、または精度が異なっているときの変換時にも有効数字が失われることがあります。SIZE 条件が使用不可であっても、インラインで実行されない変換であれば、条件が起こる可能性があります。

SIZE 条件は、あるデータ項目に割り当てられているサイズの値が、(この値がその項目が占有しているストレージの実際のサイズではない場合も) そのデータ項目の宣言されている (またはデフォルトの) サイズを超えると起こります。例えば、精度 (20) の固定小数点 2 進数項目は、ストレージではフルワードを占有しますが、FIXED BINARY (20) を超える大きさの値をこの項目に割り当てようとすると SIZE 条件が起こります。

SIZE 条件の検査が行われると、ストレージ・スペースと実行時間の両方の点でオーバーヘッドが必要です。したがって、この条件は主にプログラム・テストに



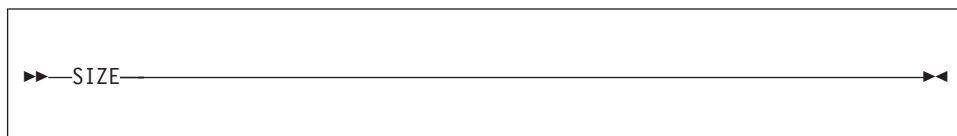
## SIZE

使用されます。実稼働プログラムではこの条件を取り除くことができます。テストと実稼働アプリケーション・プログラムについての詳細は、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

SIZE 条件と FIXEDOVERFLOW 条件は次の点で異なります。

FIXEDOVERFLOW 条件は、計算された固定小数点値の値が、システムの許可する最大値を超えるとときに起こります。値を割り当てるとき、その値の計算で FIXEDOVERFLOW 条件が起こったか否かには関係なく、SIZE 条件が起こる可能性があります。

SIZE 条件が起こったとき、この条件が割り込み禁止になっていると、プログラムはエラーになります。



### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

この条件が起こったすぐあとの位置に制御が戻されます。

### 条件コード

340、341

---

## STORAGE 条件

### 状況

STORAGE は常に使用可能です。

### 結果

結果は、この条件を起こしたストレージ割り振りの試みを示す変数のタイプによって異なります。

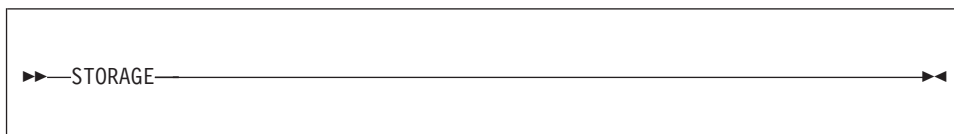
- 被制御変数の ALLOCATE ステートメントの後には、その変数の世代は割り振られません。その被制御変数を参照すると、ALLOCATE ステートメントの前にあるその変数の世代 (ある場合) をアクセスすることになります。
- 基底付き変数の ALLOCATE ステートメントのあとには、その変数は割り振られないため、対応するポインターも未定義です。
- 基底付き変数の ALLOCATE 組み込み関数のあとには、その変数は割り振られないため、対応するポインターの使用も未定義です。

### 原因と構文

STORAGE 条件が起こると、プログラムは、BASED または CONTROLLED のストレージを AREA の外部に割り振ろうと試みる ALLOCATE 組み込み関数または ALLOCATE ステートメントが失敗した場合に制御を獲得します。AREA 内の ALLOCATE ステートメントの失敗によって、AREA 条件が引き起こされます。

AUTOMATIC 組み込み関数が失敗しても、STORAGE 条件は起こりません。

STORAGE 条件の ON ユニットは、割り振り済みストレージの解放を試みることができます。ON ユニットは、十分なストレージを解放できない場合、必要なステップを行い、診断情報を失うことなくプログラムを終了することができます。



#### 暗黙アクション

エラー条件が発生します。

#### 正常な戻り

エラー条件が発生します。

#### 条件コード

450、451

## STRINGRANGE 条件

#### 状況

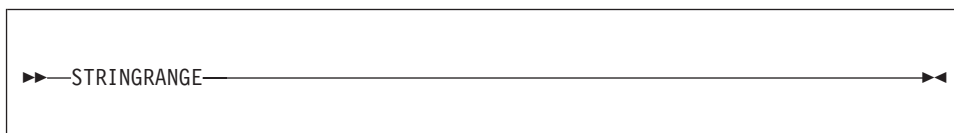
STRINGRANGE 条件は、STRINGRANGE 条件接頭語の有効範囲内を除き、プログラム全体にわたって割り込み禁止です。

#### 結果

指定された SUBSTR の値は変更されます。

#### 原因と構文

SUBSTR 参照についての引数の値が、SUBSTR 組み込み関数の規則に従わなかった場合は、STRINGRANGE プログラム・チェックアウト条件が常に起こります。無効な引数への参照が行われるたびに、この条件が起こります。



#### 省略形

STRG

#### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、「正常な戻り」の説明どおりに処理が続けられます。

#### 正常な戻り

次のように定義される値を持つよう訂正された SUBSTR 参照を使用して、実行が続けられます。

ソース・ストリングの長さ (ON ユニットが指定されている場合はその実行後) を  $k$ 、開始点を  $i$ 、サブストリングの長さを  $j$  と仮定します。

- $i$  が  $k$  より大きいと、この値は、ヌル・ストリングとなります。
- $i$  が  $k$  以下であると、この値は、ソース・ストリングの  $m$  番目の文字、ビット、ワイド文字、またはグラフィックから開始するサブストリングになる。

## STRINGRANGE

り、 $m$  および  $n$  が以下によって定義されている場合に、このサブストリングは、 $n$  個の文字、ビット、ワイド文字、またはグラフィックになります。

$$M = \max(I, 1)$$

$$N = \max(0, \min(J + \min(I, 1) - 1, K - M + 1))$$

上記は、 $J$  を指定した場合です。

$$N = K - M + 1$$

上記は、 $J$  を指定しない場合です。

新しい引数は必ず範囲内にあります。

$i$  と  $j$  の値は、ON ユニットに入る前に確立されます。これらの値は、ON ユニットから戻ったときに計算し直されません。

$k$  の値は、SUBSTR の最初の引数が可変長ストリングである場合には、ON ユニット内で変更になることがあります。値  $n$  は、ON ユニットから戻る際に  $k$  の新しい値を使用して再計算されます。

条件コード

350

---

## STRINGSIZE 条件

状況

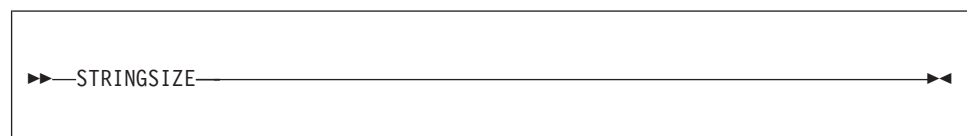
STRINGSIZE 条件は、STRINGSIZE 条件接頭語の有効範囲内を除き、プログラム全体にわたって割り込み禁止です。

結果

この条件の処置が取られたあと、切り捨てられたストリングがそのターゲット・ストリングに割り当てられます。ソース・ストリングがターゲット・ストリング内に収まるように、ソース・ストリングの右端の文字、ビット、ワイド文字、またはグラフィックが切り捨てられています。

原因と構文

STRINGSIZE プログラム・チェックアウト条件は、あるストリングを、それより短い最大長を持つターゲット・ストリングに割り当てようとするとき起こります。



省略形

STRZ

暗黙アクション

メッセージが印刷され、処理が続けられます。

正常な戻り

この条件が起こった位置から実行が続けられます。

条件コード  
150、151

## SUBSCRIPTRANGE 条件

### 状況

SUBSCRIPTRANGE 条件は、SUBSCRIPTRANGE 条件接頭語の有効範囲内を除き、プログラム全体にわたって割り込み禁止です。

### 結果

SUBSCRIPTRANGE 条件が起こった場合、無効な添え字の値は未定義のため、どのような参照になるかわかりません。

### 原因と構文

SUBSCRIPTRANGE プログラム・チェックアウト条件は、計算後の添え字が指定された限界内に存在しないことが検出されたときに起こります。

SUBSCRIPTRANGE 条件の発生とその他の添え字の計算がどのような順序で行われるかはわかりません。



### 省略形

SUBRG

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

SUBSCRIPTRANGE の ON ユニットから正常に戻ると、ERROR 条件が起こります。

### 条件コード

520

## TRANSMIT 条件

### 状況

TRANSMIT 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

TRANSMIT 条件が起こると、伝送されたデータのいずれかが正しくない可能性があります。

### 原因と構文

TRANSMIT 入出力条件は、どの入出力処理時にも起こる可能性があります。この条件は、レコード（ブロック化されていればブロック）の訂正不能な伝送エラーによって引き起こされます。この訂正不能な伝送エラーとは、実行中に訂正できなかった入出力エラーのことです。記録メディアが損傷していたり、指定やセットアップが正しくないような場合、このエラーが起こることがあります。

## TRANSMIT

入力の場合は、潜在的に不正なレコードが伝送されたあとで、TRANSMIT 条件が起こります。レコードがブロック化されているときは、そのブロック内の後続の各レコードごとに TRANSMIT 条件が起こります。

出力の場合は、伝送後に TRANSMIT 条件が起こります。レコードがブロック化されているときの伝送は、それぞれの出力ステートメントが実行されたときではなく、ブロックがいっぱいになったときに行われます。

スパン・レコードの更新処理時には、レコードの最後のセグメントでのみ TRANSMIT 条件が起こります。同一ブロック内の後続のレコードではこの条件は起こりませんが、それらのレコードの保安全性は保証できません。



►►—TRANSMIT—(*file-reference*)—◄◄

*file-reference* (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

### 正常な戻り

エラーが起こらなかった場合と同様に処理が続けられます。したがって、TRANSMIT 条件を引き起こしたステートメントまたはデータ項目によって、別の条件 (例えば、RECORD 条件) が引き起こされることがあります。

この条件の ON ユニット内でファイルをクローズした場合は、正常な戻りの結果がどうなるかはわかりません。ファイルをクローズした ON ユニットから出るときは、GO TO ステートメントを使用しなければなりません。

### 条件コード

40-46

---

## UNDEFINEDFILE 条件

### 状況

UNDEFINEDFILE 条件は常に割り込み可能です。

### 結果

指定されたファイルは、アプリケーション・プログラムに対して未定義です。

### 原因と構文

UNDEFINEDFILE 入出力条件は、ファイルのオープンに失敗するたびに起こります。複数のファイルを指定している OPEN ステートメントによってオープンしようとした場合、指定されているすべてのファイルのオープンが試みられたあとで、この条件が起こります。

同じ OPEN ステートメント内の複数のファイルについて UNDEFINEDFILE 条件が起こった場合は、その OPEN ステートメントにファイル名が記述されている順に (右から左へ)、ON ユニットが実行されます。

データ伝送ステートメントで、ファイルが暗黙にオープンされるときにこの条件が起こった場合は、ON ユニットから正常に戻ると、そのデータ伝送ステートメント

ントの残りの部分から処理が続けられます。 ON ユニット内でファイルがオープンされなかった場合は、そのステートメントは処理を続けられず、ERROR 条件が起こります。

UNDEFINEDFILE 条件は、属性の指定が矛盾している場合 (例えば、 DIRECT と PRINT をともに指定する) に起こるだけでなく、次の場合にも起こります。

- ブロック・サイズがレコード・サイズより小さいとき (ただし、スパン・レコードの場合は除く)。
- LINESIZE が許可されている最大値を超えているとき。
- INDEXED データ・セットの作成時に、KEYLENGTH がゼロであるか、または指定されていないとき。
- INDEXED データ・セットの場合に、KEYLENGTH + KEYLOC の値がレコード長を超えるような KEYLOC オプションを指定したとき。
- STREAM データ・セットの場合に、V フォーマットの論理レコードの長さとして 18 バイト未満の値を指定したとき。
- FB フォーマット・レコードのブロック・サイズとして、レコード・サイズの整数倍でない値を指定したとき。
- VB フォーマット・レコードの場合に、指定した論理レコードの長さが、指定したブロック・サイズより少なくとも 4 バイト小さい値になっていないとき。

►►—UNDEFINEDFILE—(*file-reference*)—◄◄

*file-reference* (ファイル参照) はスカラー参照でなければなりません。

#### 省略形

UNDF

#### 暗黙アクション

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

#### 正常な戻り

最後の ON ユニットが正常に完了すると、この条件を引き起こしたステートメントのすぐあとのステートメントに制御が移されます。

#### 条件コード

80-89、91-95

## UNDERFLOW 条件

#### 状況

UNDERFLOW 条件は、NOUNDERFLOW 条件接頭語の有効範囲を除き、プログラム全体にわたって割り込み可能です。

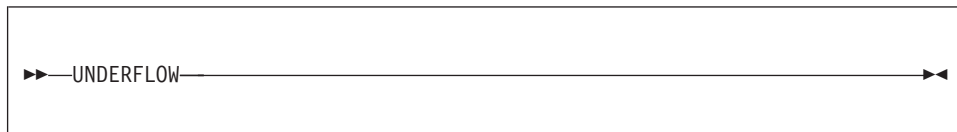
#### 結果

結果が未定義である場合は、z/OS 上での IEEE 浮動小数点を除いて、無効な浮動小数点数値が 0 にセットされます。

### 原因と構文

計算関係の条件である UNDERFLOW 条件は、浮動小数点数の大きさが、許可されている最小値より小さいときに起こります。等しい数同士の減算の場合は、UNDERFLOW 条件は起きません (この種のエラーを有効桁エラーといいます)。

式  $X^{(-Y)}$  (ここで、 $Y > 0$ ) は、 $X^Y$  の逆数を取ることによって計算できます。そのため、OVERFLOW 条件は、UNDERFLOW 条件の代わりに起こることがあります。



### 省略形

UFL

### 暗黙アクション

z/OS 上で IEEE 浮動小数点式 (2 進数または 10 進数のいずれか) の値を求めているときに、例外が発生しない限り、メッセージが出力され、条件が発生した位置から実行が続行されます。z/OS 上で IEEE 浮動小数点例外の値を求めているときに例外発生した場合は、メッセージが出力され、ERROR 条件が発生します。

### 正常な戻り

z/OS 上で IEEE 浮動小数点式 (2 進数または 10 進数のいずれか) の値を求めているときに例外が発生しない限り、条件が発生した位置から直後の位置に制御が戻されます。z/OS 上で IEEE 浮動小数点例外の値を求めているときに例外が発生した場合は、ERROR 条件が発生します。

### 条件コード

330

---

## ZERODIVIDE 条件

### 状況

ZERODIVIDE 条件は、NOZERODIVIDE 条件接頭語の有効範囲内を除き、プログラム全体にわたって割り込み可能です。

### 結果

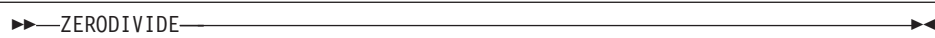
ゼロによる除算の結果は未定義です。

### 原因と構文

計算関係の条件である ZERODIVIDE 条件は、ゼロによる除算を試みたときに起こります。この条件は、固定小数点の除算でも浮動小数点の除算でも起こります。浮動小数点の除算で割られる数もゼロである場合は、INVALIDOP 条件が起こります。

ZERODIVIDE 条件が起こったとき、この条件が割り込み禁止になっていると、プログラムはエラーになります。



**省略形**

ZDIV

**暗黙アクション**

メッセージが印刷され、ERROR 条件が起こります。

**正常な戻り**

エラー条件が発生します。

**条件コード**

320

**ZERODIVIDE**

## 第 18 章 マルチスレッド化機能

|                          |     |                           |     |
|--------------------------|-----|---------------------------|-----|
| スレッドの作成 . . . . .        | 412 | 条件処理 . . . . .            | 415 |
| ATTACH ステートメント . . . . . | 412 | タスク・データとタスク属性 . . . . .   | 415 |
| 例 . . . . .              | 413 | THREADID 組み込み関数 . . . . . | 415 |
| スレッドの終了 . . . . .        | 413 | スレッド間のデータの共用 . . . . .    | 416 |
| スレッドの完了の待機 . . . . .     | 414 | スレッド間のファイルの共用 . . . . .   | 416 |
| スレッドの切り離し . . . . .      | 414 |                           |     |

PL/I のプログラムは、1 つまたは複数のプロシージャからできています。プログラムは、普通は単一の実行単位として実行されるか、単一の実行単位の一部として実行されます。プロシージャが別のプロシージャを呼び出す場合、制御は呼び出されたプロシージャに渡され、呼び出した側のプロシージャの実行は、呼び出されたプロシージャが制御を戻すまで中断されます。このような単一の制御フローをとまなう実行は、*同期* フローといいます。

PL/I のマルチスレッド機能を使用すると、呼び出す側のプロシージャから、呼び出されたプロシージャに制御が解放されません。その代わりに、さらに追加の制御フローが確立され、両方のプロシージャが並行して実行されます。このような並行プロシージャの実行は、*非同期* フローといいます。

PL/I のマルチスレッド機能によって、PL/I プログラムの各部分の実行が複数のスレッドを使用して非同期に行えるようになります。**スレッド**は、コンピューター・システムのリソースを獲得するために競合する作業単位です。スレッドは、OS PL/I におけるタスクとは同等ではありません。あるプログラム内では主スレッドを除き、そのプログラム内にあるスレッドは必ず他のスレッドから独立しており互いに無関係です。あるプロシージャが別のプロシージャをスレッドとして呼び出す場合、この処置は、スレッドの接続 または作成といいます。

1 つまたは複数のスレッドの実行が、1 つの**プロセス**内で起こることを PL/I プログラムと考えることができます。PL/I は、複数のプロセスまたはタスクを作成したり管理したりする機能を持っていませんが、単一のプログラム (プロセス) において複数のスレッドを作成したり管理したりすることはできます。

通常は、プロセスごとに 1 つのアプリケーション・スレッドがあります。複数のスレッドを接続 (作成) して、次のようなことができます。

- より短い経過時間内に作業の一部を行う。そのようなアプリケーションはユーザーと対話を行わないバッチ・アプリケーションにすることができます。例えば、あるプロシージャは、PL/I プログラムをコンパイルするスレッドを接続する場合があります。
- 1 つのプログラムの頻繁な応答部分を 1 つ目のスレッドが分担し、入出力を別のスレッドが分担し、通常の応答部分を 3 つ目のスレッドが分担して実行する。
- 場合によっては活動停止中の計算機システムのリソースを使用する。このようなリソースには、入出力装置ばかりでなく CPU も含まれることがあります。
- 応答時間が問題になるリアルタイムのマルチユーザー・アプリケーションを導入する。

- 信頼性を確保するために作業の一部を単独に分離する。つまり、独立しているほかの各部分が処理されている一方で、ジョブの一部に起こった障害を分離できます。

注: オペレーティング・システムのサービスは、PL/I が適切な機能を提供する場合には、直接に使用する必要はありません。

---

## スレッドの作成

スレッドは次のような性格を持ちます。

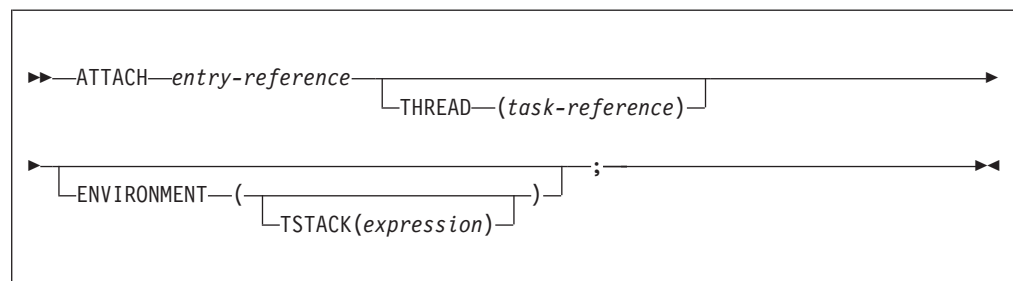
- 独立した作業単位です。
- プロセスやシステム内において他のスレッドと並行的にかつそれらから独立して実行されます。
- 他のスレッドを接続できます。
- あるスレッドの完了を待機できます。
- 自分自身または他のスレッドを停止できます。

スレッドによって同期的に呼び出されたプロシーチャーや関数は、そのスレッドの実行の一部となります。

---

## ATTACH ステートメント

スレッドの接続 (または作成) は、ATTACH ステートメントを実行して行います。デフォルトを使用したくなければ、スレッドの特性を明示的に指定できます。



### entry

**LIMITED** 入り口変数の名前、または外部の入り口名やレベル 1 のプロシーチャー名を指定します。内部プロシーチャーや取り出し可能プロシーチャーの名前は指定できません。ATTACH された入り口は、パラメーターを持たない、または厳密に 1 つの **BYVALUE POINTER** パラメーターを持つものとして宣言されなければなりません。ただし、プロシーチャーに **LIMITED** 入り口変数を割り当て、その入り口変数をスレッドとして接続すれば、プロシーチャーを取り出すことはできます。

新しいスレッドに引数を渡すことができます。これはちょうど **CALL** ステートメントで同期した入り口に引数を渡すのと同様です。

### THREAD (task reference)

スレッドと関連づけられるタスク変数の名前を指定します。タスク変数は、名前を付ければスレッドを参照するために使用できます。

明示的に宣言しない限り、コンテキスト宣言で変数に名前が付与されます。

**THREAD** オプションを指定しない場合、接続されたスレッドを、別のスレッドによって停止させたり待機させたりすることができません。

スレッドが **THREAD** オプションを指定して接続された場合、そのスレッドに関連付けられたすべてのシステム・リソースを解放するには、**DETACH** ステートメントを使用して切り離さなければなりません (414 ページの『スレッドの切り離し』を参照してください)。

スレッドの作成にオペレーティング・システムのサービスを直接に使用することはできません。

#### **ENVIRONMENT (省略形: ENV)**

環境的な特性を指定します。通常はオペレーティング・システムに依存します。

#### **TSTACK (expression)**

Intel 上では、接続されるスレッドで使用されるスタックのサイズを指定します。式は **FIXED BINARY(31,0)** にする必要があります。スタック・サイズを指定しないと、実行時のデフォルトが使用されます。

z/OS 上では、**TSTACK** は無視され、スタックのサイズは **LE** によって決定されます。

## 例

```
attach input (File1);

attach input (File2)
 thread (T2);
```

付加されたプロシージャーは、サポートされる任意のリンケージを持つことができます。

---

## スレッドの終了

スレッドは、次のような場合に終了します。

- 先頭のプロシージャー (当該スレッド内の初期プロシージャー) に対応している **END** ステートメントに達する場合。
- **ERROR** 条件が発生し、**ERROR ON** ユニットが存在しないか、あるいは **ERROR ON** ユニットが正常に終了する場合 (その **ON** ユニットの **END** ステートメントに達するか、**RESIGNAL** ステートメントを実行する場合)。
- 当該スレッド内のいずれかのプロシージャーで **EXIT** ステートメントが実行される場合。
- プログラム内の開始スレッドが終了する場合。
- そのプログラムのいずれかのスレッドで **STOP** ステートメントが実行される場合。これはプログラム全体を停止し、主スレッドを含めてすべてのスレッドを終了させます。

**FINISH** 条件は、プログラム終了を引き起こしたスレッド内でのみ発生します。スレッドが実際に終了する前にそのスレッド内に確立されているいずれかの **ON** ユニットに制御が渡されます。

## スレッドの終了

前述の場合を除き、あるスレッドが終了するとき、終了するそのスレッドが主スレッドでない限り、他のスレッドは終了しません。主スレッドが終了する場合は、それが終了する前に、他のすべてのスレッドが停止し終了します。

あるスレッドが終了すると、そのスレッドのスタック空間のみが解放されます。割り振られたストレージ、オープンしたファイルなどのような他のすべてのリソースは、そのまま残されます。スレッドが必要としたなんらかのリソースが解放され、オープンしたファイルがクローズされたことをユーザーは確認しなければなりません。ただし、それらがまだアクティブの他のスレッドで必要であるならば別です。

主スレッドが終了すると、すべてのリソースが解放され、ファイルがクローズされます。

---

## スレッドの完了の待機

スレッドを待機するには、WAIT ステートメントを使用します。

```
▶▶—WAIT—THREAD—(task-reference)—;—▶▶
```

### THREAD (*task-reference*)

THREAD オプションには、プロセスが待機しているスレッドを指定します。現行のスレッドは、指定したスレッドが終了するまで中断されます。指定したスレッドが終了すると、すぐに現行のスレッドが再開します。

```
WAIT THREAD (TI1);
```

---

## スレッドの切り離し

DETACH ステートメントは、THREAD オプションを使用して接続されたスレッドに関連付けられているシステム・リソースを解放するために使用します。

```
▶▶—DETACH—THREAD—(task-reference)—;—▶▶
```

### THREAD (*task-reference*)

THREAD オプションには、切り離すスレッドを指定します。

通常このステートメントは、終了するスレッドの WAIT ステートメントの直後に実行します。

## 条件処理

新しいスレッドが作成されたとき、ON ユニットが確立されることを想定しているわけではありません。スレッドが作成されたときに有効である ON ユニットは、新しく接続されたスレッドによって継承はされません。あるスレッド内で起こった条件は、そのスレッド内で処理されるだけで、スレッド境界を超えて処理されることはありません。

例えば、スレッド **A** がファイル **F** をオープンし、次に **A** がスレッド **T** を作成すると仮定します。すると、**T** は、ENDFILE 条件を発生させます。ON ENDFILE 条件がスレッド **T** 自体の中に確立されていないと、ERROR 条件が **T** 内で起こり、通常の条件処理作業がすべてスレッド **T** 内部で行われます。スレッド **A** が ENDFILE や ERROR に ON ユニットを確立しているか否かということは、スレッド **T** の実行に影響を及ぼしません。

スレッドは、条件処理の必要がある場合には、該当する条件に対応した ON ユニットを確立しておかなければなりません。スレッドを超えて条件を知らせるメカニズムはありません。

ATTENTION 条件を起こすために CTRL-BREAK を使用すると、その ATTENTION 条件は、ATTACH ステートメントによって作成されたどのスレッドでもなく、主スレッドの中でのみ起こります。

## タスク・データとタスク属性

タスク変数は、スレッド ID、サービス・カテゴリー、およびディスパッチング優先順位などのスレッド関連情報を保持しています。明示的な宣言、または THREAD オプションの中に示されたことによる暗黙の指定によって、変数は TASK 属性を付与されます。



タスク変数とスレッドとの関連付けは、そのスレッドを作成する ATTACH ステートメントの THREAD オプションでタスク参照を指定することによって行われます。タスク変数は、それが関連付けられているスレッドがアクティブであれば、アクティブです。タスク変数は、それがスレッドと関連づけられる前に割り振られていなければならない、関連づけられたスレッドがアクティブである間は解放できません。アクティブなタスク変数は、別のスレッドと関連づけることはできません。

## THREADID 組み込み関数

THREADID (スレッド ID の短縮形) は、POINTER 値を戻します。この値は、接続されたスレッドのオペレーティング・システム・スレッド ID のアドレスです。



▶▶—THREADID—(—x—)————▶▶

この組み込み関数によって使用される値は、`DosSetPriority` のようなシステム機能に対するパラメーターとして使用することができますが、`DosKillThread` へのパラメーターとして使用してはなりません。

**x** タスク参照。 *x* の値は、`ATTACH` ステートメントの `THREAD` オプションですでに設定されているはずです。

---

## スレッド間のデータの共用

すべての静的データと被制御データは、スレッドの間で共用されます。その他のすべてのデータも、それが割り振られており、スレッドのすべてがそのデータの使用を終わりにしない限り、引数/パラメーターおよび基底付き参照を介して共用されます。例えば、接続する側のスレッドの持つ自動変数は、接続される側のスレッドと共用され、接続する側のブロックは、接続される側のスレッドが共用変数の使用を終わりにするまで終了することはできません。

データの逐次化に関しては、ユーザーが責任を持たねばなりません。被制御データの新しい世代が割り振られたり、既存の世代が解放される場合、一部のスレッドがより古い世代やもはや存在しない世代に依然としてアクセスしていることがあります。このような場合、予期せぬ結果を引き起こします。

すべての割り振られたストレージは、明示的に解放しない限り、プログラムが終了するまで解放されません。

`PL/I` は、`AREA` 変数内の `ALLOCATE` や `FREE` は逐次化しません。

---

## スレッド間のファイルの共用

すべてのファイルがスレッド間で共用されます。スレッド (`MAIN` 以外) がファイルをオープンする場合、そのファイルは、そのスレッドの終了前にクローズする必要があります。

`MAIN` スレッドでオープンされたファイルは、明示的にクローズされるか、または、プログラムが終了するまでクローズされません。`z/OS` での言語環境プログラム・メッセージ・ファイルを除き、ファイル使用をシリアルライズしない場合の結果は、異常終了を含めた予測不能なものになるおそれがあります。

逐次化に関しては、ユーザーが責任を持たねばなりません。『スレッド間のデータの共用』を参照してください。

メッセージ・ファイルと表示ステートメントは、`PL/I` によって自動的に逐次化されます。

## 第 19 章 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン

|                                               |     |                          |     |
|-----------------------------------------------|-----|--------------------------|-----|
| 組み込み関数、疑似変数、および組み込みサブルーチンの宣言および呼び出し . . . . . | 421 | CDS . . . . .            | 461 |
| BUILTIN 属性 . . . . .                          | 421 | CEIL . . . . .           | 462 |
| 組み込み関数および疑似変数の呼び出し . . . . .                  | 421 | CENTERLEFT . . . . .     | 463 |
| 組み込みサブルーチンの呼び出し . . . . .                     | 422 | 例 . . . . .              | 463 |
| 組み込み関数、疑似変数、および組み込みサブルーチンの引数の指定 . . . . .     | 422 | CENTRELEFT . . . . .     | 464 |
| 引数の集合 . . . . .                               | 422 | CENTERRIGHT . . . . .    | 465 |
| ヌル引数およびオプション引数 . . . . .                      | 423 | 例 . . . . .              | 465 |
| 数学関数の精度 . . . . .                             | 423 | CENTRERIGHT . . . . .    | 466 |
| 組み込み関数のカテゴリー . . . . .                        | 423 | CHARACTER . . . . .      | 467 |
| 算術組み込み関数 . . . . .                            | 423 | 例 . . . . .              | 467 |
| 配列処理組み込み関数 . . . . .                          | 424 | CHARGRAPHIC . . . . .    | 468 |
| バッファ管理組み込み関数 . . . . .                        | 424 | 例 1 . . . . .            | 468 |
| 条件処理組み込み関数 . . . . .                          | 425 | 例 2 . . . . .            | 468 |
| 日付/時刻組み込み関数 . . . . .                         | 426 | CHARVAL . . . . .        | 469 |
| 浮動小数点の照会組み込み関数 . . . . .                      | 429 | CHECKSTG . . . . .       | 470 |
| 浮動小数点演算組み込み関数 . . . . .                       | 429 | COLLATE . . . . .        | 471 |
| 入出力組み込み関数 . . . . .                           | 430 | COMPARE . . . . .        | 472 |
| 整数演算組み込み関数 . . . . .                          | 430 | 例 . . . . .              | 472 |
| 数学組み込み関数 . . . . .                            | 430 | COMPLEX . . . . .        | 473 |
| その他の組み込み関数 . . . . .                          | 431 | CONJG . . . . .          | 474 |
| 序数処理組み込み関数 . . . . .                          | 432 | COPY . . . . .           | 475 |
| 精度処理組み込み関数 . . . . .                          | 432 | COS . . . . .            | 476 |
| 疑似変数 . . . . .                                | 433 | COSD . . . . .           | 477 |
| ストレージ制御組み込み関数 . . . . .                       | 434 | COSH . . . . .           | 478 |
| ストリング処理組み込み関数 . . . . .                       | 435 | COUNT . . . . .          | 479 |
| サブルーチン . . . . .                              | 437 | CS . . . . .             | 480 |
| ABS . . . . .                                 | 439 | CURRENTSIZE . . . . .    | 482 |
| ACOS . . . . .                                | 440 | CURRENTSTORAGE . . . . . | 484 |
| ADD . . . . .                                 | 441 | DATAFIELD . . . . .      | 485 |
| ADDR . . . . .                                | 442 | DATE . . . . .           | 486 |
| ADDRDATA . . . . .                            | 443 | DATETIME . . . . .       | 487 |
| ALL . . . . .                                 | 444 | DAYS . . . . .           | 488 |
| ALLOCATE . . . . .                            | 445 | 例 . . . . .              | 488 |
| ALLOCATION . . . . .                          | 446 | DAYSTODATE . . . . .     | 490 |
| ALLOCsize . . . . .                           | 447 | DAYSTOSECS . . . . .     | 491 |
| ANY . . . . .                                 | 448 | DECIMAL . . . . .        | 492 |
| ASIN . . . . .                                | 449 | DIMENSION . . . . .      | 493 |
| ATAN . . . . .                                | 450 | DIVIDE . . . . .         | 494 |
| ATAND . . . . .                               | 451 | EDIT . . . . .           | 495 |
| ATANH . . . . .                               | 452 | 例 . . . . .              | 495 |
| AUTOMATIC . . . . .                           | 453 | EMPTY . . . . .          | 496 |
| AVAILABLEAREA . . . . .                       | 454 | ENDFILE . . . . .        | 497 |
| 例 . . . . .                                   | 454 | ENTRYADDR . . . . .      | 498 |
| BINARY . . . . .                              | 455 | ENTRYADDR 疑似変数 . . . . . | 499 |
| BINARYVALUE . . . . .                         | 456 | EPSILON . . . . .        | 500 |
| BIT . . . . .                                 | 457 | ERF . . . . .            | 501 |
| BITLOCATION . . . . .                         | 458 | ERFC . . . . .           | 502 |
| BOOL . . . . .                                | 459 | EXP . . . . .            | 503 |
| BYTE . . . . .                                | 460 | EXPONENT . . . . .       | 504 |
|                                               |     | FILEDDINT . . . . .      | 505 |
|                                               |     | FILEDDTEST . . . . .     | 506 |

## 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン

|                      |     |                                       |     |
|----------------------|-----|---------------------------------------|-----|
| FILEDDWORD . . . . . | 507 | 例 . . . . .                           | 553 |
| FILEID . . . . .     | 508 | LOG . . . . .                         | 554 |
| FILEOPEN . . . . .   | 509 | LOGGAMMA . . . . .                    | 555 |
| FILEREAD . . . . .   | 510 | LOG2 . . . . .                        | 556 |
| FILESEEK . . . . .   | 511 | LOG10. . . . .                        | 557 |
| FILETELL . . . . .   | 512 | LOW . . . . .                         | 558 |
| FILEWRITE . . . . .  | 513 | LOWERCASE . . . . .                   | 559 |
| FIXED. . . . .       | 514 | LOWER2 . . . . .                      | 560 |
| FIXEDBIN . . . . .   | 515 | 例 . . . . .                           | 560 |
| FIXEDDEC . . . . .   | 516 | MAX . . . . .                         | 561 |
| FLOAT . . . . .      | 517 | MAXEXP. . . . .                       | 562 |
| FLOATBIN . . . . .   | 518 | 例 (Intel の値) . . . . .                | 562 |
| FLOATDEC . . . . .   | 519 | 例 (AIX の値) . . . . .                  | 562 |
| FLOOR . . . . .      | 520 | 例 (z/OS の 16 進値). . . . .             | 562 |
| GAMMA . . . . .      | 521 | 例 (z/OS の IEEE 2 進浮動小数点数値) . . . . .  | 562 |
| GETENV . . . . .     | 522 | 例 (z/OS の IEEE 10 進浮動小数点数値) . . . . . | 562 |
| GRAPHIC. . . . .     | 523 | MAXLENGTH . . . . .                   | 563 |
| 例 1 . . . . .        | 523 | 例 . . . . .                           | 563 |
| 例 2 . . . . .        | 524 | MEMCONVERT . . . . .                  | 564 |
| HANDLE . . . . .     | 525 | MEMCU12 . . . . .                     | 565 |
| HBOUND. . . . .      | 526 | MEMCU14 . . . . .                     | 566 |
| HEX . . . . .        | 527 | MEMCU21 . . . . .                     | 567 |
| 例 1 . . . . .        | 527 | MEMCU24 . . . . .                     | 568 |
| 例 2 . . . . .        | 527 | MEMCU41 . . . . .                     | 569 |
| HEXIMAGE . . . . .   | 529 | MEMCU42 . . . . .                     | 570 |
| HIGH . . . . .       | 530 | MEMINDEX. . . . .                     | 571 |
| HUGE. . . . .        | 531 | 例 . . . . .                           | 571 |
| IAND . . . . .       | 532 | MEMSEARCH . . . . .                   | 572 |
| IEOR . . . . .       | 533 | 例 . . . . .                           | 572 |
| IMAG . . . . .       | 534 | MEMSEARCHR. . . . .                   | 573 |
| IMAG 疑似変数 . . . . .  | 535 | 例 . . . . .                           | 573 |
| INDEX . . . . .      | 536 | MEMVERIFY . . . . .                   | 574 |
| 例 . . . . .          | 536 | 例 . . . . .                           | 574 |
| INOT . . . . .       | 537 | MEMVERIFYR. . . . .                   | 575 |
| 例 . . . . .          | 537 | 例 . . . . .                           | 575 |
| IOR. . . . .         | 538 | MIN . . . . .                         | 576 |
| ISFINITE . . . . .   | 539 | MINEXP . . . . .                      | 577 |
| ISIGNED . . . . .    | 540 | 例 (Intel の値) . . . . .                | 577 |
| 例 . . . . .          | 540 | 例 (AIX の値) . . . . .                  | 577 |
| ISINF . . . . .      | 541 | 例 (z/OS の 16 進値). . . . .             | 577 |
| ISLL . . . . .       | 542 | 例 (z/OS の IEEE 2 進浮動小数点数値) . . . . .  | 577 |
| 例 . . . . .          | 542 | 例 (z/OS の IEEE 10 進浮動小数点数値) . . . . . | 577 |
| ISMAIN . . . . .     | 543 | MOD . . . . .                         | 578 |
| ISNAN. . . . .       | 544 | 例 . . . . .                           | 578 |
| ISNORMAL . . . . .   | 545 | MPSTR . . . . .                       | 580 |
| ISRL . . . . .       | 546 | MULTIPLY . . . . .                    | 581 |
| 例 . . . . .          | 546 | NULL . . . . .                        | 582 |
| ISZERO . . . . .     | 547 | OFFSET . . . . .                      | 583 |
| IUNSIGNED . . . . .  | 548 | OFFSETADD . . . . .                   | 584 |
| 例 . . . . .          | 548 | OFFSETDIFF . . . . .                  | 585 |
| LBOUND. . . . .      | 549 | OFFSETSUBTRACT . . . . .              | 586 |
| LEFT . . . . .       | 550 | OFFSETVALUE. . . . .                  | 587 |
| 例 . . . . .          | 550 | OMITTED . . . . .                     | 588 |
| LENGTH . . . . .     | 551 | ONAREA . . . . .                      | 589 |
| LINENO . . . . .     | 552 | ONCHAR. . . . .                       | 590 |
| LOCATION . . . . .   | 553 | ONCHAR 疑似変数 . . . . .                 | 591 |

|                                       |     |
|---------------------------------------|-----|
| ONCODE . . . . .                      | 592 |
| ONCONDCOND . . . . .                  | 593 |
| ONCONDID . . . . .                    | 594 |
| ONCOUNT . . . . .                     | 595 |
| ONFILE . . . . .                      | 596 |
| ONGSOURCE . . . . .                   | 597 |
| ONGSOURCE 疑似変数 . . . . .              | 598 |
| ONKEY . . . . .                       | 599 |
| ONLINE . . . . .                      | 600 |
| ONLOC . . . . .                       | 601 |
| ONOFFSET . . . . .                    | 602 |
| ONSOURCE . . . . .                    | 603 |
| ONSOURCE 疑似変数 . . . . .               | 604 |
| ONSUBCODE . . . . .                   | 605 |
| ONWCHAR . . . . .                     | 606 |
| ONWCHAR 疑似変数 . . . . .                | 607 |
| ONWSOURCE . . . . .                   | 608 |
| ONWSOURCE 疑似変数 . . . . .              | 609 |
| ORDINALNAME . . . . .                 | 610 |
| ORDINALPRED . . . . .                 | 611 |
| ORDINALSUCC . . . . .                 | 612 |
| PACKAGENAME . . . . .                 | 613 |
| PAGENO . . . . .                      | 614 |
| PICSPEC . . . . .                     | 615 |
| PLACES . . . . .                      | 616 |
| 例 (Intel の値) . . . . .                | 616 |
| 例 (AIX の値) . . . . .                  | 616 |
| 例 (z/OS の 16 進値) . . . . .            | 616 |
| 例 (z/OS の IEEE 2 進浮動小数点数値) . . . . .  | 616 |
| 例 (z/OS の IEEE 10 進浮動小数点数値) . . . . . | 616 |
| PLIASCII . . . . .                    | 617 |
| PLICANC . . . . .                     | 618 |
| PLICKPT . . . . .                     | 619 |
| PLIDELETE . . . . .                   | 620 |
| PLIDUMP . . . . .                     | 621 |
| PLIEBCDIC . . . . .                   | 622 |
| PLIFILL . . . . .                     | 623 |
| 例 . . . . .                           | 623 |
| PLIFREE . . . . .                     | 624 |
| PLIMOVE . . . . .                     | 625 |
| 例 . . . . .                           | 625 |
| PLIOVER . . . . .                     | 626 |
| PLIREST . . . . .                     | 627 |
| PLIRETC . . . . .                     | 628 |
| PLIRETV . . . . .                     | 629 |
| PLISAXA . . . . .                     | 630 |
| PLISAXB . . . . .                     | 631 |
| PLISAXC . . . . .                     | 632 |
| PLISAXD . . . . .                     | 633 |
| PLISRTA . . . . .                     | 634 |
| PLISRTB . . . . .                     | 635 |
| PLISRTC . . . . .                     | 636 |
| PLISRTD . . . . .                     | 637 |
| PLITRAN11 . . . . .                   | 638 |
| PLITRAN12 . . . . .                   | 639 |
| PLITRAN21 . . . . .                   | 640 |

|                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| PLITRAN22 . . . . .             | 641 |
| POINTER . . . . .               | 642 |
| POINTERADD . . . . .            | 643 |
| POINTERDIFF . . . . .           | 644 |
| POINTERSUBTRACT . . . . .       | 645 |
| POINTVALUE . . . . .            | 646 |
| POLY . . . . .                  | 647 |
| PRECISION . . . . .             | 648 |
| PRED . . . . .                  | 649 |
| PRESENT . . . . .               | 650 |
| PROCEDURENAME . . . . .         | 651 |
| PROD . . . . .                  | 652 |
| PUTENV . . . . .                | 653 |
| RADIX . . . . .                 | 654 |
| RAISE2 . . . . .                | 655 |
| 例 . . . . .                     | 655 |
| RANDOM . . . . .                | 656 |
| RANK . . . . .                  | 657 |
| REAL . . . . .                  | 658 |
| REAL 疑似変数 . . . . .             | 659 |
| REG12 . . . . .                 | 660 |
| REM . . . . .                   | 661 |
| REPATTERN . . . . .             | 662 |
| REPEAT . . . . .                | 664 |
| REPLACEBY2 . . . . .            | 665 |
| REVERSE . . . . .               | 666 |
| 例 . . . . .                     | 666 |
| RIGHT . . . . .                 | 667 |
| 例 . . . . .                     | 667 |
| ROUND . . . . .                 | 668 |
| FIXED の ROUND . . . . .         | 668 |
| IEEE 10 進浮動小数点の ROUND . . . . . | 668 |
| IEEE 2 進浮動小数点の ROUND . . . . .  | 669 |
| IBM 16 進浮動小数点の ROUND . . . . .  | 669 |
| ROUNDDEC . . . . .              | 670 |
| SAMEKEY . . . . .               | 671 |
| SCALE . . . . .                 | 672 |
| SEARCH . . . . .                | 673 |
| 例 . . . . .                     | 673 |
| 例 . . . . .                     | 673 |
| SEARCHR . . . . .               | 675 |
| 例 . . . . .                     | 675 |
| SECS . . . . .                  | 676 |
| 例 . . . . .                     | 676 |
| SECSTODATE . . . . .            | 677 |
| SECSTODAYS . . . . .            | 678 |
| SIGN . . . . .                  | 679 |
| SIGNED . . . . .                | 680 |
| SIN . . . . .                   | 681 |
| SIND . . . . .                  | 682 |
| SINH . . . . .                  | 683 |
| SIZE . . . . .                  | 684 |
| 例 . . . . .                     | 685 |
| SOURCEFILE . . . . .            | 686 |
| SOURCELINE . . . . .            | 687 |
| SQRT . . . . .                  | 688 |

## 組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチン

|                      |     |                       |     |
|----------------------|-----|-----------------------|-----|
| SQRTF . . . . .      | 689 | UNALLOCATED . . . . . | 717 |
| STACKADDR . . . . .  | 690 | UNSIGNED . . . . .    | 718 |
| STORAGE . . . . .    | 691 | UNSPEC . . . . .      | 719 |
| STRING . . . . .     | 692 | UNSPEC 疑似変数. . . . .  | 721 |
| STRING 疑似変数. . . . . | 694 | 例 . . . . .           | 721 |
| SUBSTR . . . . .     | 695 | UPOS . . . . .        | 722 |
| SUBSTR 疑似変数. . . . . | 696 | UPPERCASE. . . . .    | 723 |
| SUBTRACT . . . . .   | 697 | USUBSTR . . . . .     | 724 |
| SUCC . . . . .       | 698 | USURROGATE . . . . .  | 725 |
| SUM . . . . .        | 699 | UVALID . . . . .      | 726 |
| SYSNULL . . . . .    | 700 | UWIDTH . . . . .      | 728 |
| SYSTEM . . . . .     | 701 | VALID . . . . .       | 729 |
| TALLY . . . . .      | 702 | VALIDDATE . . . . .   | 730 |
| 例 . . . . .          | 702 | 例 . . . . .           | 730 |
| TAN . . . . .        | 703 | VARGLIST . . . . .    | 731 |
| TAND . . . . .       | 704 | VARGSIZE . . . . .    | 732 |
| TANH . . . . .       | 705 | VERIFY . . . . .      | 733 |
| THREADID . . . . .   | 706 | 例 . . . . .           | 733 |
| TIME . . . . .       | 707 | VERIFYR. . . . .      | 734 |
| TINY . . . . .       | 708 | 例 . . . . .           | 734 |
| TRANSLATE . . . . .  | 709 | WCHARVAL . . . . .    | 735 |
| 例 . . . . .          | 709 | WEEKDAY . . . . .     | 736 |
| TRIM . . . . .       | 710 | WHIGH . . . . .       | 737 |
| 例 . . . . .          | 710 | WIDECHAR . . . . .    | 738 |
| TRUNC . . . . .      | 711 | WLOW . . . . .        | 739 |
| TYPE . . . . .       | 712 | XMLCHAR . . . . .     | 740 |
| TYPE 疑似変数. . . . .   | 713 | 例 . . . . .           | 740 |
| ULENGTH . . . . .    | 714 | Y4DATE . . . . .      | 742 |
| ULENGTH8 . . . . .   | 715 | Y4JULIAN . . . . .    | 743 |
| ULENGTH16. . . . .   | 716 | Y4YEAR . . . . .      | 744 |

多くの共通タスクが組み込み関数、サブルーチン、および疑似変数の形で使用可能です。これらの共通タスクを使用することにより、作成するコードの数が減り、信頼性の高い迅速な処理ができます。

この章では、組み込み関数、サブルーチン、および疑似変数をアルファベット順にリストしています。一般的に、次のようなフォーマットで記述します。

- 参照構文を示す見出し
- 戻される値の説明、または、疑似変数の値のセット
- 引数の説明
- 関数または疑似変数の使用時のその他の修飾

組み込み関数の省略形には、宣言（明示的またはコンテキスト）と名前の有効範囲が分かれています。次に例を示します。

```
dcl (Dim, Dimension) builtin;
```

上記は、多重宣言ではありません。

```
dcl Binary file;
X = Bin (var, 6,3);
```

上記は、*Bin* が *Binary* 組み込み関数の省略形であっても、有効です。

## 組み込み関数、疑似変数、および組み込みサブルーチンの宣言および呼び出し

組み込み関数、疑似変数、およびサブルーチンは、内容に従って宣言するか明示的に宣言することができます。

### BUILTIN 属性

BUILTIN 属性は、その名前が組み込み関数、疑似変数、またはサブルーチンであることを指定します。

▶—BUILTIN—◀

組み込まれた名前は、プログラマー定義の名前として使用できます。プログラマー定義の宣言または同じ名前の使用を、含まれているブロックから継承している、どのブロック内でも、組み込まれた名前に対して BUILTIN を宣言できます。以下に BUILTIN 属性を持つ組み込み名の例を示します。

#### 例 1

```

1 A: procedure;
 declare Sqrt float binary;
2 X = Sqrt;

3 B: Begin;
 Declare Sqrt builtin;
 Z = Sqrt(P);
 end B;

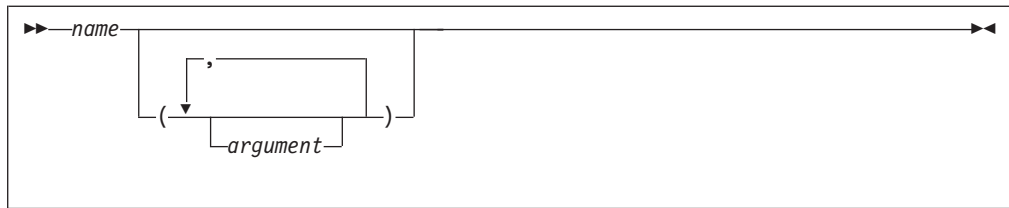
 end A;
```

次に例を示します。

- 1** Sqrt は、プログラマー定義の名前です。
- 2** 変数 X への割り当ては、プログラマー定義の名前 Sqrt への参照です。
- 3** Sqrt は、B 内の Sqrt への参照が組み込み関数への参照で、**1** で宣言されたプログラマー定義の名前 Sqrt でないことが認識されるように、BUILTIN 属性によって宣言されます。

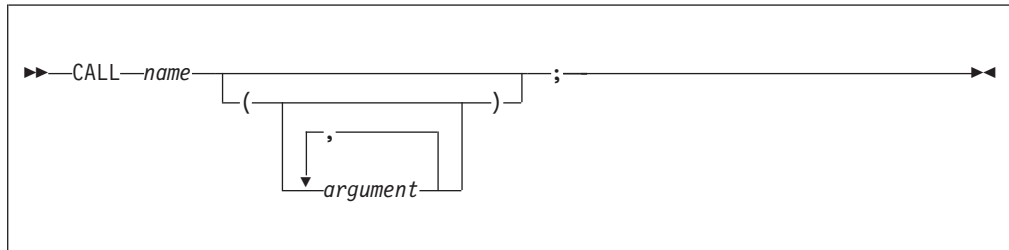
### 組み込み関数および疑似変数の呼び出し

組み込み関数および疑似変数の呼び出しに使われる構文は、次のとおりです。



## 組み込みサブルーチンの呼び出し

組み込みサブルーチンの呼び出しに使われる構文は、次のとおりです。



## 組み込み関数、疑似変数、および組み込みサブルーチンの引数の指定

引数は式で表すことができ、評価、およびデータ変換規則に従って組み込み関数に適したデータ・タイプに変換されます。

## 引数の集合

引数を持つすべての組み込み関数および疑似変数は、配列引数を持つことができます (複数の引数が配列の場合は、境界は同一でなければなりません)。

- ADDR、ALLOCATION、CURRENTSIZE、SIZE、STRING、および配列処理組み込み関数は、エレメント値を戻します。
- コンパイラ・オプション USAGE(UNSPEC(ANS)) の下では、UNSPEC はエレメント値を戻します。USAGE(UNSPEC(IBM)) は値の配列を戻します。
- その他のすべての関数は、値の配列を戻します。

配列引数の指定は、1 つ以上の引数が制御変数によって修正される添え字付き配列参照である DO グループに、関数参照または疑似変数を指定するのと同様です。

以下に例を示します。

```

dcl A(2) char(2) varying;
dcl B(2) char(2)
 init('AB','CD');
dcl C(2) fixed bin
 init(1,2);
A=substr(B,1,C);

```

結果は、A(1) には値 A が入り、A(2) には値 CD が入ります。

構造体または共用体の引数を受け入れることができる組み込み関数および疑似変数は、ADDR、ALLOCATION、CURRENTSIZE、SIZE、STRING、および UNSPEC で



す。UNSPEC を構造体または共用体に適用できるのは、コンパイラー・オプション `USAGE(UNSPEC((ANS))` が有効な場合のみです。

## ヌル引数およびオプション引数

組み込み関数には、引数が必要ないものもあります。それらを `BUILTIN` 属性によって明示的宣言するか、参照にリストされているヌル引数 (例えば、`ONCHAR()`) を内容に従って宣言する必要があります。それ以外の場合は、名前は組み込み関数として認識されません。

## 数学関数の精度

結果の精度は、次の 2 つの要因に影響されます。

- 引数の精度
- アルゴリズムの精度

ほとんどの引数には、エラーが含まれています。与えられた引数のエラーは、関数を評価する前に、いくつかのステップで累積されていることがあります。入力変換による新しいデータにもエラーが含まれていることがあります。結果の精度に対する引数のエラーの影響は、結果を計算するアルゴリズムではなく、すべて数学関数の性質によって決まります。本書では、このタイプの引数エラーは、説明しません。

インライン機械命令を使って組み込まれた数学組み込み関数では、異なる精度の結果が生成されます。

## 組み込み関数のカテゴリー

以降の節に、組み込み関数、サブルーチン、および疑似変数をリストしてあります。

これらの表には、完全な関数名だけがリストされています。既存の省略形は、各組み込み関数、サブルーチン、および疑似変数の説明の節に記述されています。

## 算術組み込み関数

算術組み込み関数により、次のことが可能になります。

- 算術値の特性を判別する。例えば、`SIGN` 関数は、算術変数の符号を示します。
- ルーチンの算術演算を実行する。

表 45 には、算術組み込み関数とそれぞれの簡単な説明をリストしています。

算術関数には、1 つまたは複数の引数から結果のデータ・タイプを派生するものもあります。引数のデータ・タイプが異なるときは、85 ページの『第 5 章 データ変換』で説明されているように変換されます。

表 45. 算術組み込み関数

| 関数                | 説明                      |
|-------------------|-------------------------|
| <code>ABS</code>  | 値の絶対値を計算する。             |
| <code>CEIL</code> | ある値より大きいか等しい最小の整数を計算する。 |

表 45. 算術組み込み関数 (続き)

| 関数       | 説明                                    |
|----------|---------------------------------------|
| COMPLEX  | 与えられた実数および虚数部分によって複素数を返す。             |
| CONJG    | ある値の共役複素数を返す。                         |
| FLOOR    | ある値より小さいか等しい最大の整数を計算する。               |
| IMAG     | 複素数の虚数部分を返す。                          |
| MAX      | 2 つまたはそれ以上の値の最大値を計算する。                |
| MIN      | 2 つまたはそれ以上の値の最小値を計算する。                |
| MOD      | ある値で別の値を除算したときの剰余のモジュラー等価を返す。         |
| RANDOM   | 類似ランダム値を返す。                           |
| REAL     | 複素数の実数部分を返す。                          |
| REM      | ある値を別の値で除算したときの剰余を計算する。               |
| ROUND    | 指定された桁で値を丸める。                         |
| ROUNDDEC | 指定された桁で 10 進数値を丸める。                   |
| SIGN     | 値が負、ゼロ、または正の場合に、それぞれ -1, 0 または 1 を返す。 |
| TRUNC    | ある値を切り捨ててできる整数を計算する。                  |

## 配列処理組み込み関数

配列処理組み込み関数は、配列引数を演算して、1 つのエLEMENT値を返します。次の関数に必要な引数の変換は、関数の説明に示されています。424 ページの表 46 には、配列処理組み込み関数がリストされています。

表 46. 配列処理組み込み関数

| 関数        | 説明                               |
|-----------|----------------------------------|
| ALL       | 配列のすべてのELEMENTのビット単位の「and」を計算する。 |
| ANY       | 配列のすべてのELEMENTのビット単位の「or」を計算する。  |
| DIMENSION | 配列のある次元のELEMENTの数を返す。            |
| HBOUND    | 配列の次元の上限を返す。                     |
| LBOUND    | 配列の次元の下限を返す。                     |
| POLY      | 2 つの配列の浮動小数点近似値を返す。              |
| PROD      | 配列のすべてのELEMENTの積を計算する。           |
| SUM       | 配列のすべてのELEMENTの和を計算する。           |

## バッファ管理組み込み関数

バッファ管理組み込み関数は、アドレスと複数バイトによって指定するストレージ域である、「バッファ」で演算を行います。また、PLIFILL、PLIMOVE、および PLIOVER 組み込みサブルーチンは、バッファの管理に役立ちます。表 47 には、バッファ管理組み込み関数がリストされています。

表 47. バッファ管理組み込み関数

| 関数       | 説明                       |
|----------|--------------------------|
| COMPARE  | 2 つのバッファを比較する。           |
| HEXIMAGE | バッファの 16 進表示の文字ストリングを返す。 |

表 47. バッファ管理組み込み関数 (続き)

| 関数         | 説明                                                                                                                                  |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| MEMCONVERT | ソース・バッファ内のデータを、指定したソース・コード・ページから指定したターゲット・コード・ページに変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管し、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。 |
| MEMCU12    | ソース・バッファ内のデータを、UTF-8 から UTF-16 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。                  |
| MEMCU14    | ソース・バッファ内のデータを、UTF-8 から UTF-32 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。                  |
| MEMCU21    | ソース・バッファ内のデータを、UTF-16 から UTF-8 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。                  |
| MEMCU24    | ソース・バッファ内のデータを、UTF-16 から UTF-32 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。                 |
| MEMCU41    | ソース・バッファ内のデータを、UTF-32 から UTF-8 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。                  |
| MEMCU42    | ソース・バッファ内のデータを、UTF-32 から UTF-16 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返す。                 |
| MEMINDEX   | バッファ中にある 1 つのストリングまたはバッファの位置を検出する。                                                                                                  |
| MEMSEARCH  | バッファ内で、あるストリングの 1 つの要素の最初のカレンスを検索する。                                                                                                |
| MEMSEARCHR | バッファ内でストリングの 1 つの要素の最初のカレンスを右から検索する。                                                                                                |
| MEMVERIFY  | バッファ内で、あるストリングの 1 つの要素の最初の非カレンスを検索する。                                                                                               |
| MEMVERIFR  | バッファ内でストリングの 1 つの要素の最初のカレンスを右から検索する。                                                                                                |
| XMLCHAR    | 構造体に対応する XML をバッファに書き込む。                                                                                                            |

## 条件処理組み込み関数

条件処理組み込み関数を使うと、発生した条件の原因を判別できます。

これらの関数の使用は、次の ON ユニットまたは動的子孫の範囲内でのみ有効です。

- 組み込み関数への条件特定
  - 暗黙処置として発生したときの、ERROR 条件または FINISH 条件
- その他の用途は、状況に応じて判別されます。

表 48. 条件処理組み込み関数

| 関数         | 説明                            |
|------------|-------------------------------|
| DATAFIELD  | NAME 条件が発生したときのストリングの値を返す。    |
| ONAREA     | AREA 条件が発生する AREA 参照の名前を返す。   |
| ONCHAR     | 変換条件の原因となる文字の値を返す。            |
| ONCODE     | 条件コード値を返す。                    |
| ONCONDCOND | 処理中の CONDITION 条件の名前を返す。      |
| ONCONDID   | 特定の条件を識別する番号を返す。              |
| ONCOUNT    | 未解決の条件の番号を返す。                 |
| ONFILE     | 条件が発生したファイルの名前を返す。            |
| ONGSOURCE  | 変換条件の原因となる漢字ストリングの値を返す。       |
| ONKEY      | 条件が発生したレコードのキーを返す。            |
| ONLINE     | 条件が発生したソースの行番号を返す。            |
| ONLOC      | 条件の原因となるプロシージャの名前を返す。         |
| ONOFFSET   | 条件が発生したブロック内のオフセットを返す。        |
| ONSOURCE   | 変換条件の原因となるストリングの値を返す。         |
| ONSUBCODE  | 特定の入出力エラーに関する追加情報を提供する整数値を返す。 |
| ONWCHAR    | 変換条件の原因となるワイド文字の値を返す。         |
| ONWSOURCE  | 変換条件の原因となるワイド文字ストリングの値を返す。    |

## 日付/時刻組み込み関数

これらの組み込み関数は、日付および時刻の情報を日、秒数、および文字の日付/タイム・スタンプで戻すまたは処理します。これらの組み込み関数のなかには、使われる日付/時刻のパターンを指定できるものがあります。 427 ページの表 49 には、サポートされている日付/時刻組み込み関数をリストしてあります。 428 ページの表 50 には、サポートされている日付/時刻のパターンをリストしてあります。

これらの関数の時間帯と精度は、システムによって決まります。

**リリアン形式:** リリアン形式という名前は、グレゴリオ暦の作成者である Luigi Lilio の名前から付けられています。このフォーマットでは、グレゴリー・カレンダーの始めからの日数または秒数で日付を表します。この形式は、経過時間を含む計算を実行するのに役立ちます。

リリアン形式では、経過した日を 1582 年 10 月 14 日から数えます。したがって、1 日目は 1582 年 10 月 15 日金曜日です。例えば、1988 年 5 月 16 日は、リリアン形式では 148138 です。リリアン形式の日付の有効範囲は、1 から 3,074,324 (1582 年 10 月 15 日から 9999 年 12 月 31 日) までです。

経過秒数の場合は、リリアン形式では、1582 年 10 月 14 の 00:00:00 で開始されます。例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は 86,401 (24\*60\*60+1) リリアン秒で、1988 年 5 月 16 日の 19:01:01 は 12,799,191,661 リリアン秒です。リリアン形式の秒の有効範囲は、86,400 から 265,621,679,999.999 (9999 年 12 月 31 日 23:59:59:) 秒です。

表 49. 日付/時刻組み込み関数

| 関数         | 説明                                                       |
|------------|----------------------------------------------------------|
| DATE       | YYMMDD のパターンの現在の日付を戻す。                                   |
| DATETIME   | ユーザー指定のパターンまたはデフォルトのパターン YYYYMMDDHHMISS999 で現在の日付と時刻を戻す。 |
| DAYS       | 日付/時刻パターンのストリングに対応する日を示す数、または今日の日付を示す数を戻す。               |
| DAYSTODATE | 日を示す数を日付/時刻パターンのストリングに変換する。                              |
| DAYSTOSECS | 日を示す数を秒を示す数に変換する。                                        |
| REPATTERN  | 1 つのパターンでは日付を保持している値をとり、2 番目のパターンでは日付に変換された値を戻す。         |
| SECS       | 日付/時刻パターンのストリングに対応する秒数、または今日の日付を示す秒数を戻す。                 |
| SECSTODATE | 秒数を日付/時刻パターンのストリングに変換する。                                 |
| SECSTODAYS | 秒数を日を示す数に変換する。                                           |
| TIME       | パターン HHMISS999 で現在の時刻を戻す。                                |
| VALIDDATE  | ストリングに有効な日付があるかどうかを示す。                                   |
| WEEKDAY    | 現在の日または指定された DAYS 値に対応する曜日を戻す。                           |
| Y4DATE     | パターン 'YYMMDD' を使って日付の値をとり、2 桁の年を 4 桁の年にして日付の値を戻す。        |
| Y4JULIAN   | パターン 'YYDDD' を使って日付の値をとり、2 桁の年を 4 桁の年にして日付の値を戻す。         |
| Y4YEAR     | パターン 'YY' を使って日付の値をとり、2 桁の年を 4 桁の年にして日付の値を戻す。            |

428 ページの表 50 は、次のフォーマットを使用しています。

**YYYY** 4 桁の年  
**YY** 2 桁の年  
**ZY** 2 桁の年 (先行ゼロを消去)  
**MM** 2 桁の月  
**ZM** 2 桁の月 (先行ゼロを消去)  
**MMM** 3 文字の月 (例 :DEC)  
**Mmm** 3 文字の月 (例 :Dec)  
**DD** 指定された月での 2 桁表示の日付  
**ZD** 指定された月での 2 桁表示の日付 (先行ゼロを消去)  
**DDD** 指定された年での日数  
**HH** 指定された日での時間数  
**MI** 指定された時間内の分数  
**SS** 指定された分内の秒数

**999** 指定された秒内のミリ秒の数

注: 3 文字の月パターンでは、大文字と小文字を正確に一致させる必要があります。

HH、MI、SS、または 999 を使用していてもサポートされる唯一のパターンは、YYYYMMDDHHMISS999 のパターンです。

表 50. 日付/時刻のパターン

|        | 4 桁の年             | 2 桁の年    |
|--------|-------------------|----------|
| 年から書き  | YYYYMMDD          | YYMMDD   |
| 始める場合  | YYYYMMDD          | YYMMDD   |
|        | YYYYMmmDD         | YYMmmDD  |
|        | YYYYDDD           | YYDDD    |
|        | YYYYMM            | YYMM     |
|        | YYYYMMM           | YYMMM    |
|        | YYYYMmm           | YYMmm    |
|        | YYYY              | YY       |
|        | YYYYMMDDHHMISS999 |          |
| 月から書き  | MMDDYYYY          | MMDDYY   |
| 始める場合  | MMDDYYYY          | MMDDYY   |
|        | MmmDDYYYY         | MmmDDYY  |
|        | MMYYYY            | MMYY     |
|        | MMMYYYY           | MMMYYY   |
|        | MmmYYYY           | MmmYY    |
| 日から書き  | DDMMYYYY          | DDMMYY   |
| 始める場合  | DDMMYYYY          | DDMMYY   |
|        | DDMmmYYYY         | DDMmmYY  |
|        | DDDDYYYY          | DDDDYY   |
| DB2    | YYYY-MM-DD        | YY-MM-DD |
| フォーマット | MM/DD/YYYY        | MM/DD/YY |
|        | DD.MM.YYYY        | DD.MM.YY |
| ゼロなし   |                   | ZY-ZM-ZD |
|        |                   | YY-ZM-ZD |
|        |                   | ZM/ZD/ZY |
|        |                   | ZM/ZD/YY |
|        |                   | ZD.ZM.ZY |
|        |                   | ZD.ZM.YY |

日がパターンから省略されている場合、値が 1 であると仮定します。月と日の両方が省略されている場合、両方とも値が 1 であると仮定します。

MMM を使用しているときは日付を 3 つの大文字で書き、Mmm を使用しているときは最初の文字を大文字で書き後の 2 文字を小文字で書かなければなりません。

入力では、「ゼロなし」のパターンの日付値は、8 文字未満になる場合があります。例えば、2008 年 1 月 20 日という日付は、パターン「ZY-ZM-ZD」に合わせると 8-1-20 と指定されます。出力では、これらのいずれかのパターンとして生成されるストリングは、ゼロ消去の場合、末尾ブランクで補われ、常に 8 文字になります。

## 浮動小数点の照会組み込み関数

浮動小数点の照会組み込み関数は、指定した浮動小数点変数の引数についての情報を返します。

表 51. 浮動小数点の照会組み込み関数

| 関数       | 説明                                      |
|----------|-----------------------------------------|
| EPSILON  | 1 と次の正数間のスペースを返す。                       |
| HUGE     | 浮動小数点変数が保持できる最大の正の有限値を返す。               |
| ISFINITE | 浮動小数点値が NAN でなく、正または負の無限大でないかどうかを示す。    |
| ISINF    | 浮動小数点値が無限大であるかどうかを示す。                   |
| ISNAN    | 浮動小数点値が NAN であるかどうかを示す。                 |
| ISNORMAL | 浮動小数点値がゼロ、非正規化数、無限大、または NaN でないかどうかを示す。 |
| ISZERO   | 浮動小数点値がゼロであることを示す。                      |
| MAXEXP   | 指数の最大値を返す。                              |
| MINEXP   | 指数の最小値を返す。                              |
| PLACES   | 浮動小数点の値のモデル精度を返す。                       |
| RADIX    | 浮動小数点の値のモデル基数を返す。                       |
| TINY     | 浮動小数点変数が保持できる正の最小値を返す。                  |

## 浮動小数点演算組み込み関数

浮動小数点演算組み込み関数は、指定した浮動小数点変数で数学演算を実行し、演算結果を返します。

表 52. 浮動小数点演算組み込み関数

| 関数       | 説明                     |
|----------|------------------------|
| EXPONENT | 浮動小数点の値の指数部分を返す。       |
| PRED     | 浮動小数点の値の前の次に表示可能な値を返す。 |
| SCALE    | 浮動小数点数を基数の整数乗で乗算する。    |
| SUCC     | 浮動小数点の値の後の次に表示可能な値を返す。 |



## 入出力組み込み関数

入力および出力組み込み関数により、ファイルの現在の状態を判別できます。

表 53. 入出力組み込み関数

| 関数         | 説明                                     |
|------------|----------------------------------------|
| COUNT      | 最後の GET または PUT 時に伝送されたデータ項目の数を返す。     |
| ENDFILE    | ファイルがオープンされていて、ファイルの終わりに到達しているかどうかを示す。 |
| FILEDDINT  | 指定したファイル属性の値を返す。                       |
| FILEDDTEST | 指定したファイルに指定の属性が適用される場合、値 1 を返す。        |
| FILEDDWORD | 指定したファイル属性の文字ストリングを返す。                 |
| FILEID     | ファイルのシステム・トークン値を返す。                    |
| FILEOPEN   | ファイルがオープンしているかどうかを示す。                  |
| FILEREAD   | ファイルから読み取る。                            |
| FILESEEK   | 現在のファイル位置を新しい位置に変更する。                  |
| FILETELL   | 現在のファイル位置を示している値を返す。                   |
| FILEWRITE  | ファイルに書き込む。                             |
| LINENO     | プリント・ファイルに関連した現在の行番号を返す。               |
| PAGENO     | プリント・ファイルに関連した現在のページ番号を返す。             |
| SAMEKEY    | 同じキーで別のレコードが続くレコードかどうかを示す。             |

## 整数演算組み込み関数

整数演算組み込み関数は、整変数で演算を実行し、演算結果を戻します。

表 54. 整数演算組み込み関数

| 関数        | 説明                                       |
|-----------|------------------------------------------|
| IAND      | 複数の固定小数点 2 進数の値のビット単位の「and」を計算する。        |
| IEOR      | 2 つの固定小数点 2 進数の値のビット単位の「exclusive」を計算する。 |
| INOT      | 固定小数点 2 進数の値のビット単位の「not」を計算する。           |
| IOR       | 複数の固定小数点 2 進数の値のビット単位の「or」を計算する。         |
| ISIGNED   | ビット・パターンを変更せずに、整数を符号付き整数にキャストする。         |
| ISLL      | 固定小数点 2 進数の値を「論理的に」左に桁移動する。              |
| ISRL      | 固定小数点 2 進数の値を「論理的に」右に桁移動する。              |
| IUNSIGNED | ビット・パターンを変更せずに、整数を符号なし整数にキャストする。         |
| LOWER2    | 固定小数点 2 進数の値を 2 の整数乗によって除算する。            |
| RAISE2    | 固定小数点 2 進数の値を 2 の整数乗で乗算する。               |

## 数学組み込み関数

これらの関数はすべて、浮動小数点の値で演算を行い、浮動小数点の結果を生成します。浮動小数点でない引数は、変換されます。これらの関数の精度については、423 ページの『数学関数の精度』で説明されています。 431 ページの表 55 に、数学組み込み関数をリストします。

表 55. 数学組み込み関数

| 関数       | 説明                                             |
|----------|------------------------------------------------|
| ACOS     | 逆余弦を計算する。                                      |
| ASIN     | 逆正弦を計算する。                                      |
| ATAN     | 逆正接を計算する。                                      |
| ATAND    | 逆正接を度で計算する。                                    |
| ATANH    | 双曲線逆正接を計算する。                                   |
| COS      | 余弦を計算する。                                       |
| COSD     | 余弦を度で計算する。                                     |
| COSH     | 双曲線余弦を計算する。                                    |
| ERF      | 誤差関数を計算する。                                     |
| ERFC     | 誤差関数の補数を計算する。                                  |
| EXP      | e の累乗を計算する。                                    |
| GAMMA    | ガンマ関数を計算する。                                    |
| LOG      | 自然対数を計算する。                                     |
| LOG10    | 底 10 の常用対数を計算する。                               |
| LOG2     | 底 2 の対数を計算する。                                  |
| LOGGAMMA | ガンマ関数のログを計算する。                                 |
| SIN      | 正弦を計算する。                                       |
| SIND     | 正弦を度で計算する。                                     |
| SINH     | 双曲線正弦を計算する。                                    |
| SQRT     | 平方根を計算する。                                      |
| SQRTF    | SQRT をインラインで計算する (ハードウェア・アーキテクチャーによって処理可能な場合)。 |
| TAN      | 正接を計算する。                                       |
| TAND     | 正接を度で計算する。                                     |
| TANH     | 双曲線正接を計算する。                                    |

## その他の組み込み関数

これまでのカテゴリーのいずれにも該当しない組み込み関数を表 56 にリストします。

表 56. その他の組み込み関数

| 関数      | 説明                                                       |
|---------|----------------------------------------------------------|
| BYTE    | CHARVAL の同義語。                                            |
| CDS     | ダブル比較およびスワップ の以前の値と現行値が等しいかどうかを示す FIXED BINARY(31) 値を戻す。 |
| CHARVAL | 整数に対応する文字値を戻す。                                           |
| COLLATE | 照合順序を指定する文字 (256) スtringを戻す。                             |
| CS      | 比較およびスワップ の以前の値と現行値が等しいかどうかを示す FIXED BINARY(31) 値を戻す。    |
| GETENV  | 指定した環境変数を表す値を戻す。                                         |
| HEX     | 値の 16 進表示の文字Stringを戻す。                                   |

表 56. その他の組み込み関数 (続き)

| 関数            | 説明                                |
|---------------|-----------------------------------|
| ISMAIN        | 現行プロシージャがメインかどうかを示す。              |
| OMITTED       | 呼び出しでパラメーターが指定されていないかどうかを示す。      |
| PACKAGENAME   | 包含パッケージの名前を返す。                    |
| PLIRETV       | PL/I の戻りコード値を返す。                  |
| PRESENT       | 呼び出しでパラメーターが提供されていないかどうかを示す。      |
| PROCEDURENAME | ネストされた最も近いプロシージャの名前を返す。           |
| PUTENV        | 新しい環境変数を追加するか、または既存の環境変数の値を変更する。  |
| RANK          | 文字、あるいはワイド文字に対応する整数値を返す。          |
| REG12         | 現在の動的保存域のアドレスを返す。                 |
| SOURCEFILE    | ステートメントが含まれているファイルの名前を返す。         |
| SOURCELINE    | ステートメントが含まれている行の番号を返す。            |
| STACKADDR     | 現在の動的保存域のアドレスを返す。                 |
| STRING        | ストリングの集合のすべてのエレメントの連結であるストリングを返す。 |
| SYSTEM        | コマンドによって戻される値を返す。                 |
| THREADID      | タスクのスレッド ID を返す。                  |
| UNSPEC        | 値の内部表示のビット・ストリングを返す。              |
| VALID         | 変数の内容が宣言に有効であるかどうかを示す。            |
| WCHARVAL      | 整数に対応するワイド文字値を返す。                 |

## 序数処理組み込み関数

序数処理データ組み込み関数は、指定された序数に関する情報を返します。

表 57. 序数処理組み込み関数

| 関数          | 説明                      |
|-------------|-------------------------|
| ORDINALNAME | 序数の名前を指定する文字ストリングを返します。 |
| ORDINALPRED | 序数が次に低い値を返します。          |
| ORDINALSUCC | 次に高い序数値を返します。           |

## 精度処理組み込み関数

精度処理組み込み関数により、指定された精度で変数を演算し、演算結果の値を返します。

表 58. 精度処理組み込み関数

| 関数      | 説明                   |
|---------|----------------------|
| ADD     | 指定された精度で、2 つの値を追加する。 |
| BINARY  | 値を 2 進数に変換する。        |
| DECIMAL | 値を 10 進数に変換する。       |
| DIVIDE  | 指定された精度で、2 つの値を除算する。 |

表 58. 精度処理組み込み関数 (続き)

| 関数        | 説明                     |
|-----------|------------------------|
| FIXED     | 値を固定小数点に変換する。          |
| FIXEDBIN  | 値を固定小数点 2 進数に変換する。     |
| FIXEDDEC  | 値を固定小数点 10 進数に変換する。    |
| FLOAT     | 値を浮動小数点に変換する。          |
| FLOATBIN  | 値を浮動小数点 2 進数に変換する。     |
| FLOATDEC  | 値を浮動小数点 10 進数に変換する。    |
| MULTIPLY  | 指定された精度で、2 つの値を乗算する。   |
| PRECISION | 値を、指定の精度に変換する。         |
| SIGNED    | 値を符号付き固定小数点 2 進数に変換する。 |
| SUBTRACT  | 指定された精度で、2 つの値を減算する。   |
| UNSIGNED  | 値を符号なし固定小数点 2 進数に変換する。 |

## 疑似変数

疑似変数は、受信フィールドを表します。疑似変数をネストすることはできません。例えば、次のものは正しくありません。

```
unspec(substr(A,1,2)) = '00'B;
```

疑似変数が存在できるのは、次のような場合のみです。

- 代入ステートメントの左側。
- DO 指定内のターゲットであり、なおかつ、その疑似変数が SUBSTR、REAL、IMAG または UNSPEC のいずれかである場合。
- GET ステートメントのデータ・リスト内、または PUT ステートメントの STRING オプション内。
- KEYTO オプションまたは REPLY オプション内のストリング名として。

疑似変数には次のものがあります。

表 59. 組み込み疑似変数

| 関数        | 説明                                   |
|-----------|--------------------------------------|
| ENTRYADDR | 呼び出される入りのアドレスで入り口変数を設定する。            |
| IMAG      | 複素数の虚数部分を割り当てる。                      |
| ONCHAR    | 変換条件の原因となる文字の値を設定する。                 |
| ONGSOURCE | 変換条件の原因となる漢字ストリングの値を設定する。            |
| ONSOURCE  | 変換条件の原因となるストリングの値を設定する。              |
| REAL      | 複素数の実数部分を割り当てる。                      |
| STRING    | ストリングの集合のすべてのエレメントの連結であるストリングを割り当てる。 |
| SUBSTR    | ストリングのサブストリングを割り当てる。                 |
| ONWCHAR   | 変換条件の原因となるワイド文字の値を設定する。              |
| ONWSOURCE | 変換条件の原因となるワイド文字ストリングの値を設定する。         |

表 59. 組み込み疑似変数 (続き)

| 関数     | 説明                                         |
|--------|--------------------------------------------|
| TYPE   | タイプ付き構造体または共用体をハンドルによって位置付けられたストレージに割り当てる。 |
| UNSPEC | 値の内部表示であるビット・ストリングを割り当てる。                  |

## ストレージ制御組み込み関数

ストレージ制御組み込み関数により、ストレージ所要量および変数の位置を判別して、特殊値の区域およびロケータ変数への割り当て、オフセット値とポインター値間の変換の実行、被制御変数の世代番号の入手、およびオブジェクトとクラスのデータおよび手法の参照が可能です。表 60 に、ストレージ制御組み込み関数をリストします。

表 60. ストレージ制御組み込み関数

| 関数             | 説明                                               |
|----------------|--------------------------------------------------|
| ADDR           | 変数のアドレスを戻す。                                      |
| ADDRDATA       | 可変ストリングに適用されるときに、ストリングの最初のデータ・バイトのアドレスを戻す。       |
| ALLOCATE       | ヒープ内に、指定されたサイズのストレージを割り振る。                       |
| ALLOCATION     | 被制御変数の現在の世代番号を戻す。                                |
| ALLOCSIZE      | 特定のポインターとともに割り振られたストレージ量を示す FIXED BIN(N,0) 値を戻す。 |
| AUTOMATIC      | スタック内に、指定されたサイズのストレージを割り振る。                      |
| AVAILABLEAREA  | 区域内で、単一の作成可能な最大割り振りサイズを戻す。                       |
| BINARYVALUE    | ポインター、オフセット、または序数を整数に変換する。                       |
| BITLOCATION    | バイト内での変数のビット・オフセットを戻す。                           |
| CHECKSTG       | 割り振られていたストレージが破壊されていないかどうかを判別するビット (1) 値を戻す。     |
| CURRENTSIZE    | 変数の現行サイズを戻す。                                     |
| CURRENTSTORAGE | CURRENTSIZE の同義語。                                |
| EMPTY          | 「空の」区域を戻す。                                       |
| ENTRYADDR      | 入り口に関連したルーチンのアドレスを戻す。                            |
| HANDLE         | タイプ付き構造体または共用体にハンドルを戻す。                          |
| LOCATION       | 構造体内の変数のバイト・オフセットを戻す。                            |
| NULL           | ヌル・ポインター値を戻す。                                    |
| OFFSET         | ポインターをオフセットに変換する。                                |
| OFFSETADD      | 整数をオフセットに追加する。                                   |
| OFFSETDIFF     | 2 つのオフセットを減算する。                                  |
| OFFSETSUBTRACT | オフセットから整数を減算する。                                  |
| OFFSETVALUE    | 整数をオフセットに変換する。                                   |
| POINTER        | オフセットをポインターに変換する。                                |
| POINTERADD     | 整数をポインターに加える。                                    |
| POINTERDIFF    | 2 つのポインターを減算する。                                  |

表 60. ストレージ制御組み込み関数 (続き)

| 関数              | 説明                                                 |
|-----------------|----------------------------------------------------|
| POINTERSUBTRACT | ポインターから整数を減算する。                                    |
| POINTERVALUE    | 整数またはハンドルをポインターに変換する。                              |
| SIZE            | 変数の最大サイズを戻す。                                       |
| STORAGE         | SIZE の同義語。                                         |
| SYSNULL         | システム・ヌル・ポインターの値を戻す。                                |
| TYPE            | ハンドルによって位置付けされるタイプ付き構造体または共用体を戻す。                  |
| UNALLOCATED     | 指定されたポインター値が割り振り済みストレージの開始点であるかどうかを示すビット (1) 値を戻す。 |
| VARGLIST        | プロシージャーに渡された最初のオプション・パラメーターのアドレスを戻す。               |
| VARGSIZE        | byvalue パラメーターが占めるバイト数を戻す。                         |

## ストリング処理組み込み関数

ストリング処理組み込み関数は、ビット・ストリング、文字ストリング、漢字ストリング、およびワイド文字ストリングの処理を簡素化するものです。ストリングの引数は、データ変換規則、または関数の記述で与えられた規則のどちらかに従ったストリングに変換される算術式で表されます。

注: LOWERCASE、TRANSLATE、TRIM、または UPPERCASE など、CHARACTER データのみをサポートする関数もあります。

表 61. ストリング処理組み込み関数

| 関数          | 説明                                    |
|-------------|---------------------------------------|
| BIT         | 値をビットに変換する。                           |
| BOOL        | 2 ビット・ストリングでブール演算を実行する。               |
| CENTERLEFT  | 値が中央から左方向に配置されたストリングを戻す。              |
| CENTERRIGHT | 値が中央から右方向に配置されたストリングを戻す。              |
| CENTRELEFT  | CENTERLEFT の同義語。                      |
| CENTRERIGHT | CENTERRIGHT の同義語。                     |
| CHARACTER   | 値を文字ストリングに変換する。                       |
| CHARGRAPHIC | GRAPHIC ストリングを混合文字ストリングに変換する。         |
| COPY        | ストリングのコピーが n 個含まれるストリングを戻す。           |
| EDIT        | 与えられたピクチャー指定に変換された値で構成されるストリングを戻す。    |
| GRAPHIC     | 値をグラフィックに変換する。                        |
| HIGH        | 照合順序の最も高い文字を n 回コピーして構成される文字ストリングを戻す。 |
| INDEX       | ストリング中にある 1 つのストリングの位置を検出する。          |
| LEFT        | 左詰めの値が入っているストリングを戻す。                  |
| LENGTH      | ストリングの現行の長さを戻す。                       |

表 61. ストリング処理組み込み関数 (続き)

| 関数         | 説明                                                                              |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| LOW        | 照合順序の最も低い文字を $n$ 回コピーして構成される文字ストリングを返す。                                         |
| LOWERCASE  | A から Z までの文字すべてを対応する小文字に変換した文字ストリングを返す。                                         |
| MAXLENGTH  | ストリングの最大長を返す。                                                                   |
| MPSTR      | 論理境界でストリングを切り捨て、混合文字ストリングを返す。                                                   |
| PICSPEC    | 与えられたピクチャー指定を持つと想定される値で構成されるストリングを返す。                                           |
| REPEAT     | $n+1$ 回コピーしたストリングを返す。                                                           |
| REPLACEBY2 | 一部の文字が、文字のペアに「変換された」ストリングを返す。                                                   |
| REVERSE    | ストリングの反転表示を返す。                                                                  |
| RIGHT      | 右寄せの値が入っているストリングを返す。                                                            |
| SEARCH     | 別のストリング内で、あるストリングの 1 つの要素の最初のオカレンスを検索する。                                        |
| SEARCHR    | 別のストリング内でストリングの 1 つの要素の最初のオカレンスを右から検索する。                                        |
| SUBSTR     | ストリングのサブストリングを割り当てる。                                                            |
| TALLY      | ストリングで 1 つのストリングが発生する回数を返す。                                                     |
| TRANSLATE  | 2 つの変換ストリングに基づいてストリングを変換する。                                                     |
| TRIM       | 指定された文字をストリングの左および右からトリムする。                                                     |
| ULENGTH    | CHAR または WIDECHAR ストリングの UTF 文字数を返す。                                            |
| ULENGTH8   | CHAR または WIDECHAR ストリングの UTF ストリングが UTF-8 に変換されている場合に必要な CHAR ストリングの長さを返す。      |
| ULENGTH16  | CHAR または WIDECHAR ストリングの UTF ストリングが UTF-16 に変換されている場合に必要な WIDECHAR ストリングの長さを返す。 |
| UPOS       | CHAR または WIDECHAR ストリングの $n$ 番目の UTF 文字の位置を返す。                                  |
| UPPERCASE  | a から z までの文字すべてを対応する大文字に変換した文字ストリングを返す。                                         |
| USUBSTR    | UTF ストリングのサブストリングを返す。                                                           |
| USURROGATE | CHAR または WIDECHAR ストリングの最初の UTF サロゲート・ペアの索引を返す。                                 |
| UVALID     | CHAR または WIDECHAR ストリングに有効な UTF データが入っているかどうかを示す。                               |
| UWIDTH     | CHAR または WIDECHAR ストリングの $n$ 番目の UTF 文字の幅を返す。                                   |
| VERIFY     | 別のストリング内でストリングの 1 つの要素の最初の非オカレンスを検索する。                                          |
| VERIFYR    | 別のストリング内でストリングの 1 つの要素の最初の非オカレンスを右から検索する。                                       |
| WHIGH      | 最上位のワイド文字 ('ffffwx) を $n$ 回コピーして構成されるワイド文字ストリングを返す。                             |
| WIDECHAR   | 値をワイド文字ストリングに変換する。                                                              |



表 61. ストリング処理組み込み関数 (続き)

| 関数   | 説明                                                 |
|------|----------------------------------------------------|
| WLOW | 最下位のワイド文字 ('0000'wx) を n 回コピーして構成されるワイド文字ストリングを戻す。 |

## サブルーチン

組み込みサブルーチンは、組み込み関数が結果を戻すのに対して、結果を戻す必要がないその他の演算を実行します。

表 62. 組み込みサブルーチン

| 関数        | 説明                                                                                                |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| PLIASCII  | EBCDIC から ASCII に変換する。                                                                            |
| PLICANC   | 自動再始動機能を取り消し (z/OS のみ)                                                                            |
| PLICKPT   | 実行時リスタートのためのチェックポイント (z/OS のみ)                                                                    |
| PLIDELETE | ハンドルに関連したストレージを解放する。                                                                              |
| PLIDUMP   | 現在のオープン・ファイル、現在場所への呼び出しパスなどについての情報をダンプする。                                                         |
| PLIEBCDIC | ASCII から EBCDIC に変換する。                                                                            |
| PLIFILL   | 指定されたバイト値によって、アドレスに n バイトを埋める。                                                                    |
| PLIFREE   | ヒープ・ストレージを指すポインタに関連したストレージを解放する。                                                                  |
| PLIMOVE   | 1 つのアドレスから別のアドレスへ n バイト移動する。                                                                      |
| PLIOVER   | ソースとターゲットの、可能性のあるオーバーラップを補いながら、1 つのアドレスから別のアドレスへ n バイト移動する。                                       |
| PLIREST   | プログラム実行を再始動 (z/OS のみ)                                                                             |
| PLIRETC   | PL/I 戻りコード値を設定する。                                                                                 |
| PLISAXA   | プログラムのバッファ内にある XML 文書に対して、SAX フォーマットの構文解析を実行する。                                                   |
| PLISAXB   | ファイル内にある XML 文書に対して、SAX フォーマットの構文解析を実行する。                                                         |
| PLISAXC   | プログラムのバッファ内にある XML 文書に対して、SAX フォーマットの構文解析を実行する。                                                   |
| PLISAXD   | プログラムのバッファ内にある XML 文書に対して、XML 妥当性検査による SAX スタイル構文解析の実行を可能にする。                                     |
| PLISRTA   | DFSORT を使用することにより、入力ファイルをソートして、ソートされた出力ファイルの作成を可能にする。                                             |
| PLISRTB   | DFSORT を使用することにより、E15 PL/I 終了プロシージャで提供される入力レコードをソートして、ソートされた出力ファイルの作成を可能にする。                      |
| PLISRTC   | DFSORT を使用することにより、入力ファイルをソートして、E35 PL/I 終了プロシージャで処理されるソートされたレコードの作成を可能にする。                        |
| PLISRTD   | DFSORT を使用することにより、E15 PL/I 終了プロシージャで提供される入力レコードをソートして、E35 PL/I 終了プロシージャで処理されるソートされたレコードの作成を可能にする。 |

表 62. 組み込みサブルーチン (続き)

| 関数           | 説明                                                                 |
|--------------|--------------------------------------------------------------------|
| PLITRAN $xy$ | $x$ バイト・バッファを $y$ バイト・バッファに変換する。 $x$ および $y$ は、1 と 2 の任意の組み合わせを表す。 |

## ABS

ABS は、 $x$  の絶対値を返します。ABS は、 $x$  の正の値です。



**x** 式。

結果は、REAL モードです。結果には、 $x$  の基数、スケール、および精度が含まれています。ただし、 $x$  が COMPLEX FIXED(p,q) の場合は除きます。 $x$  が COMPLEX FIXED(p,q) の場合、結果は REAL FIXED(min(n,p+1),q) になります。n には、DECIMAL では N が、BINARY では M が入ります。

---

## ACOS

ACOS は、 $x$  ラジアン の逆余弦の近似を実数の浮動小数点の値で戻します。



►► ACOS( $x$ ) ◄◄

**x** 実数式。ABS( $x$ ) <= 1

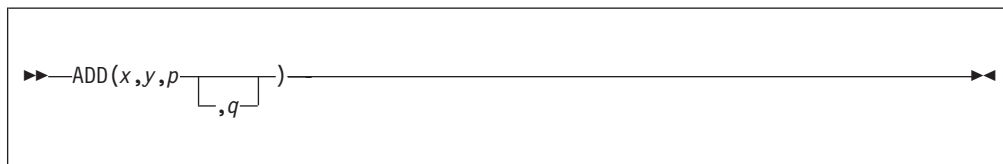
結果は次の範囲内の値です。

$$0 \leq \text{ACOS}(x) \leq \pi$$

また、結果は、 $x$  の基数と精度になります。

**ADD**

ADD は、 $x$  と  $y$  の和を  $p$  と  $q$  で指定された精度で戻します。結果の基数、スケール、およびモードは、PRECTYPE コンパイラ・オプションによって規則が変更されないかぎり、式の評価規則によって決まります。



$x$  および  $y$   
式。

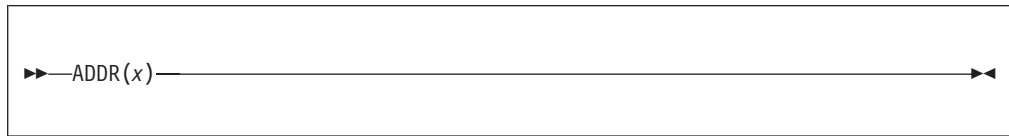
**p** 制限付き式。演算を通して維持される桁数を指定します。

**q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。結果が固定小数点の場合に、 $q$  が省略されるときは、位取り係数ゼロがデフォルトです。結果が浮動小数点の場合は、 $q$  は省略します。

ADD は、減算されるオペランドの接頭部に負符号 (-) を付けて、減算に使用できます。

## ADDR

ADDR は、 $x$  の世代を識別するポインター値を戻します。



**x** 参照。 ADDR は、次のもの以外のデータ・タイプ変数、データ編成変数、位置合わせ変数、およびストレージ・クラス変数を参照します。

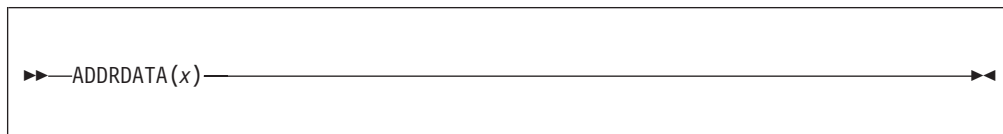
- 位置合わせされていない固定長のビット・ストリングである変数への添え字付き参照。
- DEFINED 変数または BASED 変数、または位置合わせされていない固定長のビット・ストリングの単純パラメーターへの参照。
- 最初の基本エレメントが位置合わせされていない固定長のビット・ストリングである小構造体または共用体 (ただし、その小構造体を含んでいる大構造体または共用体の最初のエレメントになっている場合を除く)。
- DEFINED 属性を持つ大構造体か共用体、またはパラメーターである大構造体か共用体で、位置合わせされていない固定長のビット・ストリングを最初のエレメントとするもの。
- 連結ストレージを参照しない参照。

$x$  の参照先と結果を次に示します。

- 集合パラメーターの場合は、CONNECTED 属性を保持している必要があります。
- 集合の場合は、戻り値は最初のエレメントを識別します。
- コンポーネントまたはセクション間の集合の場合は、戻り値では添え字および構造体または共用体の修飾が考慮されます。
- 可変ストリングの場合は、戻り値は 2 バイトの接頭部を識別します。
- 区域。戻り値は、制御情報を示しています。
- 現行プログラムに割り振られていない被制御変数の場合は、ヌル・ポインター値が戻されます。
- 基底付き変数の場合は、結果は明示的に  $x$  を修飾するポインター (表示される場合) か、 $x$  の宣言 (存在する場合) で  $x$  に関連付けられたポインター、またはヌル・ポインターの値です。
- パラメーターであり、仮引数が作成されている場合は、戻り値は仮引数を識別します。

## ADDRDATA

ADDRDATA は  $x$  の世代を識別するポインター値を戻します。



**x** 参照。

ADDRDATA は、以下のインスタンスを除き、ADDR 組み込み関数と同じです。

- 可変ストリングに適用されるときに、ADDRDATA は、(長さフィールドの最初のデータ・バイトのアドレスではなく) ストリングの最初のデータ・バイトのアドレスを戻す。

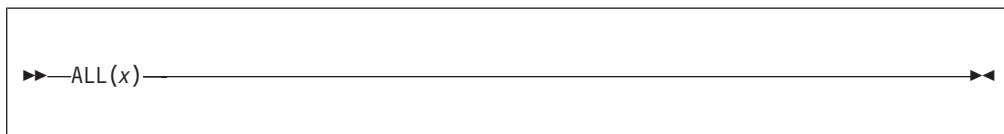


## ALL

---

## ALL

ALL は、 $x$  の各エレメントに対応するビットがあり、1 の場合は、各ビットが 1 のビット・ストリングを戻します。結果の長さは、最も長いエレメントと同じです。



**x** 計算配列式。  $x$  がビット・ストリング配列ではない場合、 $x$  はビット・ストリング配列に変換されます。

## ALLOCATE

ALLOCATE は、ヒープ・ストレージにサイズ  $n$  のストレージを割り振り、割り振り済みストレージにポインターを戻します。



省略形: ALLOC

**n** 式。  $n$  は負であってはなりません。必要な場合には、 $n$  は、REAL FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

ストレージで要求量が使用可能でない場合は、STORAGE 条件が発生します。

---

## ALLOCATION

ALLOCATION は、 $x$  の現行プログラムでアクセス可能な世代番号を指定する  
FIXED BINARY(31,0) を戻します。



▶—ALLOCATION( $x$ )—▶

省略形: ALLOCN

**x** レベル 1 の添え字なし被制御変数です。

現行プログラムで  $x$  が割り振られていない場合は、結果はゼロになります。

## ALLOCsize

ALLOCsize は、指定されたポインタとともに割り振られたストレージ量を与えている FIXED BIN(31,0) 値を戻します。この組み込み関数を使用するには、CHECK(STORAGE) コンパイル時オプションも指定しなければなりません。



```

 >>—ALLOCsize(p)—<<

```

**p** ポインタの式。

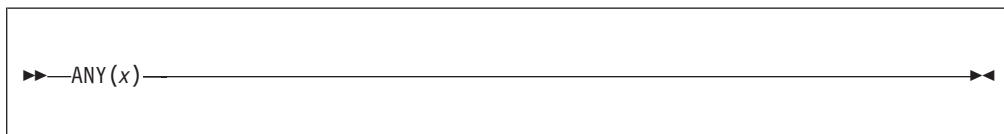
ポインタが割り振り済みストレージの始まりを示していない場合、ALLOCsize は 0 を戻します。

ALLOCsize に渡されたポインタは、最も近いダブルワードに「切り捨て」られ、切り捨てられた値は、同様に切り捨てられた場合のすべての割り振り済みアドレスに対して比較されることに注意してください。

---

**ANY**

ANY は、 $x$  の任意の要素の対応するビットがあり、1 の場合は、各ビットが 1 のビット・ストリングを返します。結果の長さは、最も長い要素と同じです。



**x** 計算配列式。  $x$  がビット・ストリング配列ではない場合、 $x$  はビット・ストリング配列に変換されます。

## ASIN

ASIN は、 $x$  ラジアンでの逆正弦の近似を実数の浮動小数点の値で戻します。



▶▶ASIN( $x$ )◀◀

**x** 実数式。ABS( $x$ ) <= 1

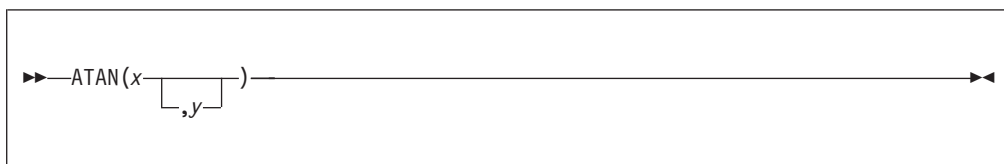
結果は次の範囲内の値です。

$$-\pi/2 \leq \text{ASIN}(x) \leq \pi/2$$

また、結果は、 $x$  の基数と精度になります。

## ATAN

ATAN は、 $x$  ラジアンまたは比率  $x/y$  の逆正接の近似を浮動小数点の値で戻します。



### x および y

式。

$x$  が単独で指定されている場合は、結果は  $x$  の基数と精度になり、次の範囲内の値です。

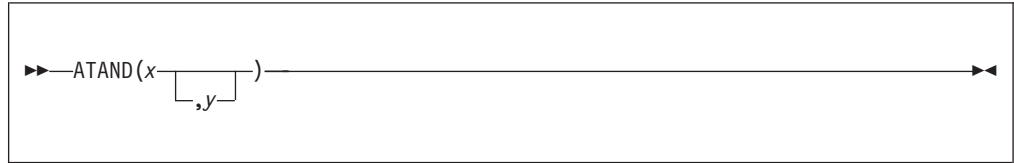
$$-\pi/2 < \text{ATAN}(x) < \pi/2$$

$x$  と  $y$  が指定される場合は、それぞれ実数でなければなりません。  $x$  と  $y$  が両方ともゼロの場合は、エラーになります。  $x$  と  $y$  のその他のすべての値の結果には、長い方の引数の精度、式の規則で決まる基数、および次の式で指定される値が含まれます。

|                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| ATAN( $x/y$ )             | $y > 0$ の場合                |
| $\pi/2$                   | $y = 0$ および $x > 0$ の場合    |
| $-\pi/2$                  | $y = 0$ および $x < 0$ の場合    |
| $\pi + \text{ATAN}(x/y)$  | $y < 0$ および $x \geq 0$ の場合 |
| $-\pi + \text{ATAN}(x/y)$ | $y < 0$ および $x < 0$ の場合    |

## ATAND

ATAND は、 $x$  ラジアンまたは比率  $x/y$  の逆正接の近似を実数の浮動小数点の値で返します。



### x および y

式。

$x$  が単独で指定される場合は、 $x$  は実数でなければなりません。結果は、 $x$  の基数と精度になり、次の範囲内の値です。

$$-90 < \text{ATAND}(x) < 90$$

$x$  と  $y$  が指定される場合は、それぞれ実数でなければなりません。結果の値は、次の式で指定されます。

$$(180/\pi) * \text{ATAN}(x,y)$$

引数の要件および結果の属性については、450 ページの『ATAN』を参照してください。



---

## ATANH

ATANH は、 $x$  の基数、モード、および精度を保持する浮動小数点数で、 $x$  の双曲線逆正接の近似値を戻します。



▶▶—ATANH( $x$ )——▶◀

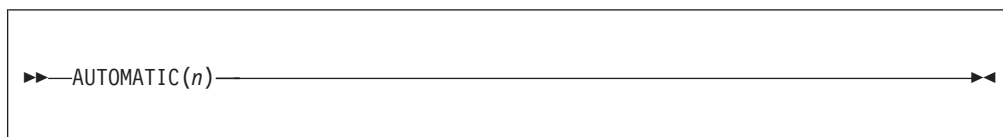
**x** 式。  $\text{ABS}(x) < 1$

結果は、次の式で指定される値になります。

$$\text{LOG}((1 + x)/(1 - x))/2$$

## AUTOMATIC

AUTOMATIC は、自動ストレージにサイズ  $n$  のストレージを割り振り、割り振り済みストレージにポインターを戻します。



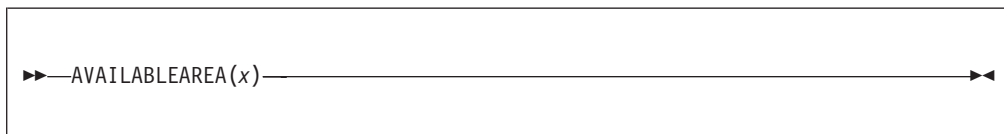
省略形: AUTO

**n** 式。  $n$  は負であってはなりません。必要な場合には、 $n$  は、REAL FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

獲得されたストレージを明示的に解放することはできません。ストレージは、そのブロックが終了したときに自動的に解放されます。

## AVAILABLEAREA

AVAILABLEAREA は、FIXED BINARY(31,0) 値を返します。 AVAILABLEAREA によって戻される値は、区域  $x$  から入手可能な最も大きい単一割り振りサイズです。



$x$  AREA 属性付き参照。

### 例

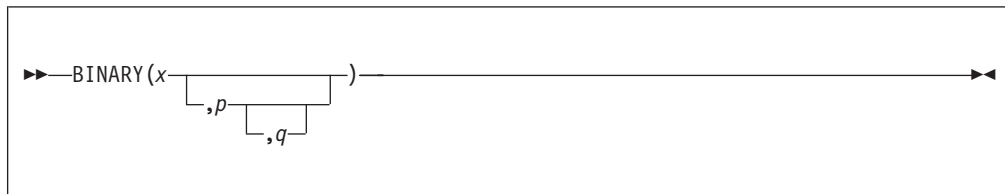
```

dcl Uarea area(1000);
dcl Pz ptr;
dcl C99z char(99) varyingz based(Pz);
dcl (SizeBefore, SizeAfter) fixed bin(31);
SizeBefore = availablearea(Uarea); /* returns 1000 */
Alloc C99z in(Uarea);
SizeAfter = availablearea(Uarea); /* returns 896 */
dcl C9 char(896) based(Pz);
Alloc C9 in(Uarea);

```

## BINARY

BINARY は、 $p$  および  $q$  で指定される精度で、 $x$  の 2 進数の値を戻します。結果には、 $x$  のモードとスケールが含まれています。



省略形: BIN

**x** 式。

**p** 制限付き式。演算を通して維持する桁数を指定します。実行の限界を超えることはできません。

**q** 制限付き式。結果の位取り係数を指定します。固定小数点の結果の場合は、 $p$  が指定され、 $q$  が省略されると、位取り係数ゼロがデフォルトになります。結果が浮動小数点の場合は、 $q$  は省略します。

$p$  と  $q$  が両方とも省略される場合は、結果の精度は基数変換の規則により決まります。

---

## BINARYVALUE

BINARYVALUE は、 $x$  の変換された値である FIXED BINARY(31,0) 値を返します。 $x$  は、ポインター、オフセット、または序数です。



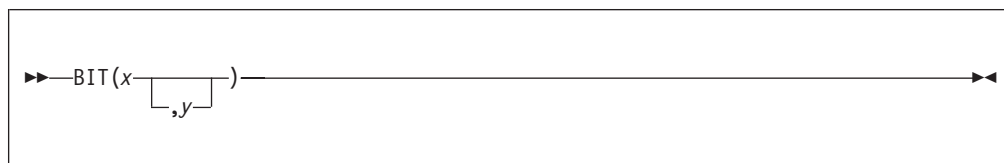
►—BINARYVALUE( $x$ )—◄

省略形: BINVALUE

$x$  式。

## BIT

BIT は、 $x$  のビット値である結果を戻し、 $y$  で指定される長さをとります。

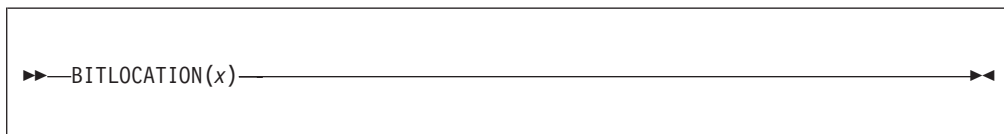


**x** 式。

**y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。 $y$  が省略される場合は、長さはタイプ変換の規則によって決められます。  $y = 0$  の場合は、結果はヌルのビット・ストリングです。  $y$  は負であってはなりません。

## BITLOCATION

BITLOCATION は、 $x$  を含むバイト内で、ビット  $x$  の位置である FIXED BINARY(31,0) の結果を戻します。戻り値は、必ず、0 から 7 の間 ( $0 \leq \text{値} \leq 7$ ) です。



省略形: BITLOC

**x** 位置合わせされていないビット・タイプの参照。  $x$  に位置合わせがされていないビット・タイプがある場合は、値 0 が戻されます。

$x$  は、添え字であってはいけません。

BITLOCATION は、制限付きの式で使用できます。制限は次のとおりです。

\*BITLOC( $x$ ) が

- 定数エクステントを保持する必要がある変数  $y$  のエクステント
- または、定数値を保持する必要がある変数  $y$  の値

BITLOC( $x$ ) を使用して上記の制限を設定する場合は、 $y$  の前に  $x$  を宣言する必要があります。

例については、553 ページの『LOCATION』を参照してください。

# BOOL

BOOL は、 $x$  と  $y$  のブール演算  $z$  の結果であるビット・ストリングを戻します。結果の長さは、長いオペランド  $x$  または  $y$  と同じです。

►►—BOOL( $x,y,z$ )—◄◄

## x および y

式。必要な場合には、 $x$  および  $y$  は、ビット・ストリングに変換されます。 $x$  および  $y$  の長さが異なる場合は、長さが同じになるように短い方の右側がゼロで埋められます。

## z

式。必要な場合には、 $z$  は、長さ 4 のビット・ストリングに変換されます。 $x$  からのビットが  $y$  からのビットと一致するときは、結果の対応するビットは  $z$  のビットによって次のように選択されます。

| x | y | 結果         |
|---|---|------------|
| 0 | 0 | $z$ のビット 1 |
| 0 | 1 | $z$ のビット 2 |
| 1 | 0 | $z$ のビット 3 |
| 1 | 1 | $z$ のビット 4 |



## BYTE

BYTE は、CHARVAL の同義語です。詳細については、469 ページの『CHARVAL』を参照してください。

## CDS

CDS は、ダブル比較およびスワップ の以前の値と現行値が等しいかどうかを示す FIXED BINARY(31) 値を返します。

►—CDS(*p, q, x*)—◄

**p** 以前の FIXED BINARY(63) 値のアドレス。

**q** 現行の FIXED BINARY(63) 値のアドレス。

**x** 新しい FIXED BINARY(63) 値。

CDS は、「現行」値と「以前の」値を比較します。これらの値が等しい場合は、「現行」値を上書きして「新しい」値がコピーされ、値 0 が返されます。これらの値が等しくない場合は、「以前の」値を上書きして「現行」値がコピーされ、値 1 が返されます。

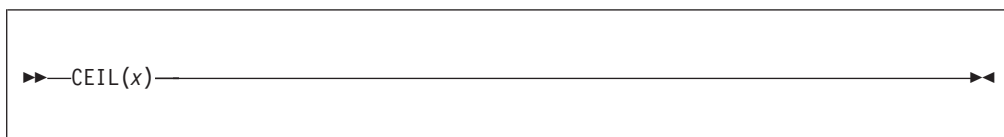
z/OS 上では、CDS 組み込み関数は CDS 命令をインプリメントしています。この関数について詳しくは、「*Principles of Operations*」の付録を参照してください。

Intel 上では、CDS 組み込み関数は Intel cmpxchg8 命令を使用します。同じように、CS 組み込み関数は cmpxchg4 命令を使用します。

---

**CEIL**

CEIL は、 $x$  より大きいか等しい最も小さい整数値を判別し、結果にこの値を割り当てます。



**x** 実数式。

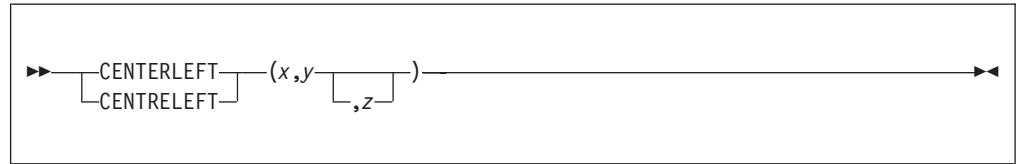
結果は、 $x$  のモード、スケール、および精度になります。ただし  $x$  が精度  $(p,q)$  の固定小数点のとき、結果の精度は、次の式で表されます。

$$(\min(N, \max(p-q+1, 1)), 0)$$

この場合  $N$  は、使用できる最大の桁数です。

## CENTERLEFT

CENTERLEFT は、長さ  $y$  で必要な場合に左側と右側が文字  $z$  で埋められたストリングの中央 (または中央から 1 つ左よりの位置) に、ストリング  $x$  を挿入した結果のストリングを戻します。  $z$  の値の指定は、オプションです。



省略形: CENTER

**x** 文字に変換される式。

**y** FIXED BINARY(31,0) に変換される式。

**z** オプションの式。  $z$  が指定された場合は、CHARACTER(1) NONVARYING タイプでなければなりません。

## 例

```

dcl Source char value('Feel the Power');
dcl Target20 char(20);
dcl Target21 char(21);

Target20 = center (Source, length(Target20), '*');
/* '***Feel the Power***' - exactly centered */

Target21 = center (Source, length(Target21), '*');
/* '***Feel the Power***' - leaning left! */

```

$z$  が省略される場合は、埋め込み文字にブランクが使われます。

---

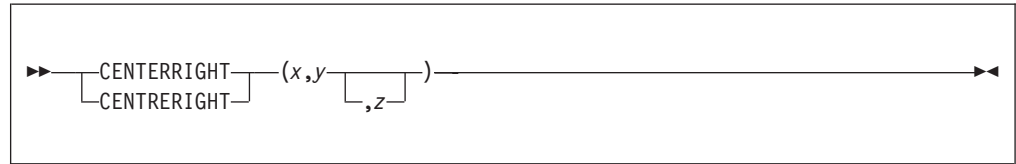
## **CENTRELEFT**

省略形: CENTRE

CENTRELEFT は、CENTERLEFT の同義語です。

## CENTERRIGHT

CENTERRIGHT は、長さ  $y$  で必要な場合に左側と右側が文字  $z$  で埋められたストリングの中央 (または中央より 1 つ右よりの位置) に、ストリング  $x$  を挿入した結果のストリングを戻します。  $z$  の値の指定は、オプションです。



- x** 文字に変換される式。
- y** FIXED BINARY(31,0) に変換される式。
- z** オプションの式。  $z$  が指定された場合は、CHARACTER(1) NONVARYING タイプでなければなりません。

### 例

```

dcl Source char value('Feel the Power');
dcl Target20 char(20);
dcl Target21 char(21);

Target20 = centerright (Source, length(Target20), '*');
/* '***Feel the Power***' - exactly centered */

Target21 = centerright (Source, length(Target21), '*');
/* '****Feel the Power***' - leaning right! */

```

$z$  が省略される場合は、埋め込み文字に空白が使われます。

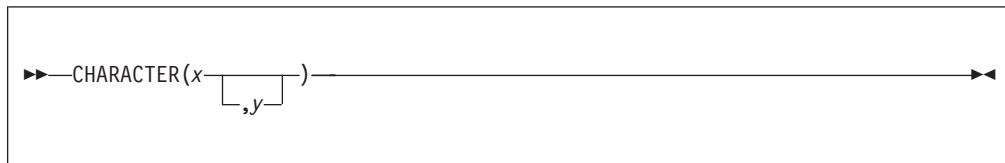
---

## **CENTRERIGHT**

CENTRERIGHT は、CENTERRIGHT の同義語です。

## CHARACTER

CHARACTER は、 $y$  で指定された長さで文字値  $x$  を戻します。また、CHARACTER は、グラフィックから文字タイプへの変換もサポートします。



省略形: CHAR

**x** 式。

$n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  がグラフィックでない場合は、CHARACTER は文字に変換された  $x$  を戻します。

$x$  が GRAPHIC のときは、CHARACTER は SBCS 文字に変換された  $x$  を戻します。DBCS 文字が SBCS 等価なものに変換できない場合は、CONVERSION 条件が発生します。

$x$  の値は、チェックされません。

**y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。

$y$  が省略される場合は、長さはタイプ変換の規則によって決められます。

$y$  は負であってはなりません。

$y = 0$  の場合は、結果はヌル文字ストリングです。

## 例

GRAPHIC から文字への変換

```

dcl X graphic(6);
dcl A char (6);
A = char(X);

```

**X の値**

.A.B.C.D.E.F

**中間結果**

ABCDEF

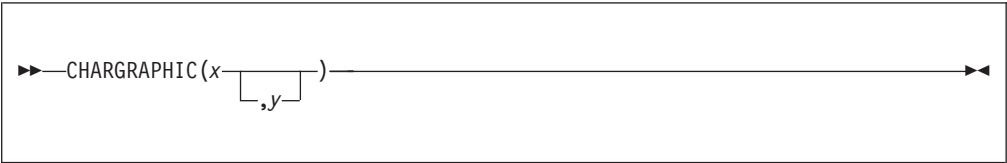
**A に割り当てられる値**

ABCDEF



# CHARGRAPHIC

CHARGRAPHIC は、GRAPHIC (DBCS) スtring  $x$  を  $y$  で指定された長さで混合文字Stringに変換します。



省略形: CHARG

**x** 式。

$x$  は、GRAPHIC Stringでなければなりません。CHARACTER は、混合文字Stringに変換される  $x$  を戻します。

**y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。

$y$  が省略される場合は、長さはタイプ変換の規則によって決められます。

$y$  は負であってはなりません。

$y = 0$  の場合は、結果はヌル文字Stringです。

次の規則が適用されます。

- $y = 1$  の場合は、結果は 1 ブランクの文字Stringです。
- $y$  が文字Stringを入れるのに必要な長さより大きい場合は、結果は SBCS ブランクで埋まります。
- $y$  が文字Stringを入れるのに必要な長さより小さい場合は、結果が切り捨てられます。GRAPHIC の後ろで切り捨て、必要ならば SBCS のブランクを追加してStringの長さを完全にすることによって、安全性が保持されます。

## 例 1

GRAPHIC から文字へ変換します。 $y$  は、結果を入れるのに必要な長さです。

```
dc1 X graphic(6);
dc1 A char (12);
A = char(X,12);
```

| X の値         | 中間結果         | A に割り当てられる値  |
|--------------|--------------|--------------|
| .A.B.C.D.E.F | .A.B.C.D.E.F | .A.B.C.D.E.F |

## 例 2

GRAPHIC から文字へ変換します。 $y$  は、結果を入れるには長さが短過ぎます。

```
dc1 X graphic(6);
dc1 A char (12);
A = char(X,11);
```

| X の値         | 中間結果         | A に割り当てられる値 |
|--------------|--------------|-------------|
| .A.B.C.D.E.F | .A.B.C.D.E.F | .A.B.C.D.Eb |

## CHARVAL

CHARVAL は、整数に対応する CHARACTER(1) 値を戻します。

►►CHARVAL(—(—*n*—)———►◄

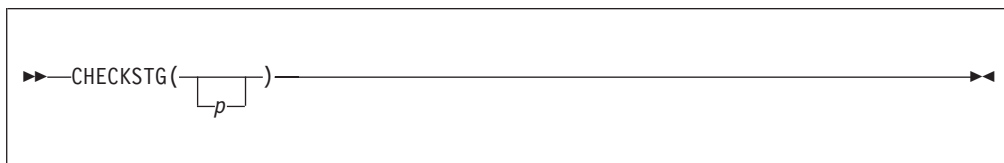
**n** 式。必要な場合には、UNSIGNED FIXED BIN(8) に変換されます。

CHARVAL(*n*) のビット値は *n* と同じですが (つまり、UNSPEC(CHARVAL(*n*)) は UNSPEC(*n*) と等しい)、属性は CHARACTER(1) です。

CHARVAL は RANK の逆です (文字に適用した場合)。

## CHECKSTG

CHECKSTG は、指定されたポインター値が、割り振られた正常なストレージの開始点であるかどうかを示すビット (1) 値を戻します。ポインター値が与えられていない場合、CHECKSTG は、すべての割り振り済みストレージが正しいかどうかを判別します。この組み込み関数を使用するには、CHECK(STORAGE) コンパイル時オプションも指定しなければなりません。



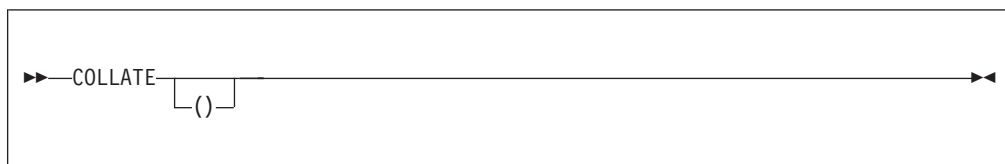
**p** ポインターの式。

割り振りが行われる場合、その後ろに、'ffx' に設定される余分の 8 バイトが続きます。それらのバイトが変更されていない場合、割り振りは、正しい と見なされます。

ポインターの式は、BASED 変数に割り振られたストレージを示さなければなりません。

## COLLATE

COLLATE は、256 の可能な CHARACTER(1) 値を各照合命令で 1 回比較する CHARACTER(256) スtringを戻します。



## COMPARE

COMPARE は、次のような FIXED BINARY(31,0) 値を戻します。

- アドレス x とアドレス y の z バイトが同一の場合は、ゼロ。
- アドレス x の z バイトがアドレス y の z バイトよりも小さい場合は、負の値。
- アドレス x の z バイトがアドレス y の z バイトよりも大きい場合は、正の値。

►►—COMPARE(x,y,z)—◄◄

### x および y

式。両方に POINTER タイプまたは OFFSET タイプを保持していなければなりません。OFFSET の場合は、式を AREA 修飾を使用して宣言する必要があります。

z FIXED BINARY(31,0) に変換される式。

## 例

```

dcl Result fixed bin;
dcl 1 Str1,
 2 B fixed bin(31),
 2 C pointer,
 2 * union,
 3 D char(4),
 3 E fixed bin(31),
 3 *,
 4 * char(3),
 4 F fixed bin(8) unsigned,
 2 * char(0);
dcl 1 Template nonasn static,
 2 * fixed bin(31) init(16), /* 'X' */
 2 * pointer init(null()),
 2 * char(4) init(''),
 2 * char(0);

call plimove(addr(Str1), addr(Template), stg(Str1));
Result = compare(addr(Str1), addr(Template), stg(Str1)); /* 0 */
D = 'DSA ';
Result = compare(addr(Str1), addr(Template), stg(Str1)); /* 1 */
B = 15; /* '00000F00'X */
D = 'DSA ';
Result = compare(addr(Str1), addr(Template), stg(Str1)); /* -1 */

```

## COMPLEX

COMPLEX は、複合値  $x + yI$  を戻します。

▶▶—COMPLEX( $x,y$ )——▶▶

省略形: CPLX

**x および y**

実数式。

$x$  および  $y$  の基数が異なる場合は、10 進数の引数は 2 進数に変換されます。  
スケールが異なる場合は、固定小数点の引数は浮動小数点に変換されます。結果は、共通の基数およびスケールになります。

固定小数点の場合は、結果の精度は次の式で指定されます。

$$(\min(N, \max(p1-q1, p2-q2) + \max(q1, q2)), \max(q1, q2))$$

上記の場合、 $(p1, q1)$  と  $(p2, q2)$  は、それぞれ  $x$  と  $y$  の精度であり、 $N$  は許可される最大の桁数です。

必要な変換が行われたあとで、引数が浮動小数点の場合には、結果には長い方の引数の精度になります。

---

## CONJG

CONJG は、 $x$  の共役複素数、つまり、虚数部の符号を逆にした式の値を戻します。



►►—CONJG( $x$ )—►►

**x** 式。

$x$  が実数の場合は、 $x$  は複素数に変換されます。結果は、 $x$  の基数、スケール、モードおよび精度になります。

## COPY

COPY は、ストリング  $x$  のコピーが連結された  $y$  で構成されるストリングを返します。

▶—COPY( $x,y$ )—▶

**x** 式。

$x$  に、計算タイプ (必須) とストリング・タイプを保持している必要があります。そうでないと、文字に変換されます。

**y** 負以外の値を使用した整数式。繰り返し回数を指定します。  $y$  には、計算タイプを保持している必要があります、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

$y$  がゼロの場合は、結果はヌル・ストリングです。

以下のコードを例として示します。

```
copy('Walla ',1) /* returns 'Walla ' */
repeat('Walla ',1) /* returns 'Walla Walla ' */
```

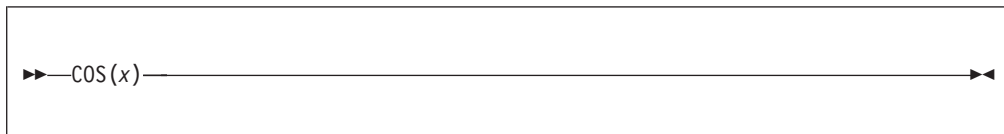
repeat( $x,n$ ) は、copy( $x,n+1$ ) と同等です。



---

**COS**

COS は、 $x$  の基数、精度、およびモードの浮動小数点で、 $x$  の余弦の近似を返します。



**x** ラジアン値を使用した式。

## COSD

COSD は、 $x$  の基数および精度の浮動小数点で、 $x$  の余弦の近似を戻します。




►►COSD( $x$ )◄◄

**x** 度の値の実数式。

---

## COSH

COSH は、 $x$  の基数、精度、およびモードの浮動小数点で、 $x$  の双曲線余弦の近似を戻します。



►►—COSH( $x$ )—►◄

$x$  式。

## COUNT

COUNT は、 $x$  に対する最新の GET 命令または PUT 命令での、伝送されるデータ項目の数を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。



▶▶—COUNT( $x$ )—◀◀

**x** ファイル参照。ファイルは、オープン状態で、STREAM 属性を持っている必要があります。

$x$  に対する GET 命令または PUT 命令の伝送項目のカウントは、最初のデータ項目が伝送される前にゼロに初期化され、リストの各データ項目が伝送された後で 1 ずつ増加されます。 $x$  が、現行プログラムでオープンされていない場合は、ゼロが返されます。

GET 命令または PUT 命令時に ON ユニットまたはプロシージャに入り、ON ユニットまたはプロシージャ内で、 $x$  に対して GET 命令または PUT 命令が実行される場合には、COUNT の値は新しい命令を実行するためにリセットされ、オリジナルの GET 命令または PUT 命令がカウントされるときに復元されます。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

CS は、比較およびスワップの以前の値と現行値が等しいかどうかを示す FIXED BINARY(31) 値を返します。

→ CS(p,q,x) →

**p** 以前の FIXED BINARY(31) 値のアドレス。

**q** 現行の FIXED BINARY(31) 値のアドレス。

**x** 新しい FIXED BINARY(31) 値。

CS は、「現行」値と「以前の」値を比較します。これらの値が等しい場合は、「現行」値を上書きして「新しい」値がコピーされ、値 0 が返されます。これらの値が等しくない場合は、「以前の」値を上書きして「現行」値がコピーされ、値 1 が返されます。

したがって、CS は次の PL/I 関数としてインプリメントできますが、この場合 CS はアトミックではなくなります。:

```
cs: proc(old_Addr, current_Addr, new)
 returns(fixed bin(31) byvalue)
 options(byvalue);

 dcl old_Addr pointer;
 dcl current_Addr pointer;
 dcl new fixed bin(31);

 dcl old fixed bin(31) based(old_addr);
 dcl current fixed bin(31) based(current_addr);

 if current = old then
 do;
 current = new;
 return(0);
 end;
 else
 do;
 old = current;
 return(1);
 end;
 end;
```

z/OS 上では、CS 組み込み関数は CS 命令をインプリメントしています。この関数について詳しくは、「*Principles of Operations*」の付録を参照してください。

Intel 上では、CDS 組み込み関数は cmpxchg4 命令を使用します。cmpxchg4 関数は、「現行」値、「新しい」値、および「以前の」値のアドレスを受け取ります。関数は元の「現行」値を返し、「現行」値が「以前の」値と等しい場合だけ、「現行」値を「新しい」値に更新します。

このため Intel 上では、CS 組み込み関数は次のインライン関数によってインプリメントされます。

```

cs: proc(old_Addr, current_Addr, new)
 returns(fixed bin(31) byvalue)
 options(byvalue);

 dcl old_Addr pointer;
 dcl current_Addr pointer;
 dcl new fixed bin(31);

 dcl old fixed bin(31) based(old_addr);
 dcl current fixed bin(31) based(current_addr);

 if cmpxchg4(current_Addr, new, old) = old then
 do;
 return(0);
 end;
 else
 do;
 old = current;
 return(1);
 end;
 end;
end;

```

## CURRENTSIZE

CURRENTSIZE は、処理系定義ストレージを与える FIXED BINARY 値を、バイトで返します。この値は、 $x$  によって要求されます。



►—CURRENTSIZE( $x$ )—►

- $x$  任意のデータ・タイプ、データ編成、およびストレージ・クラスを持つ変数。ただし、下記のものは除きます。
- 位置合わせされていない固定長ビット・ストリングである BASED 変数、DEFINED 変数、パラメーター変数、添え字付き変数、構造変数、または共用体基底付き変数。
  - 最初または最後の基本エレメントが位置合わせされていない固定長のビット・ストリングである小構造体または共用体 (ただし、その小構造体を含んでいる大構造体または共用体の最初または最後のエレメントになっている場合を除く)。
  - BASED 属性、DEFINED 属性、またはパラメーター属性を持つ大構造体か共用体、またはパラメーターである大構造体か共用体で、位置合わせされていない固定長のビット・ストリングを最初または最後のエレメントとするもの。
  - 連結ストレージにない変数。

CURRENTSIZE( $x$ ) によって戻される値は、次の状況で伝送されるバイト数として定義されます。

```
declare F file record output
 environment(scalarvarying);
write file(F) from(S);
```

$x$  がスカラー可変長ストリングの場合は、戻り値にはストリングの長さの接頭辞と現在使われているバイト数が含まれます。 $x$  には、ストリングの未使用のバイト数は含まれません。

$x$  がスカラー区域の場合は、戻り値には、区域制御バイトと区域の現在のエクステントが含まれます。 $x$  には、区域の最後の未使用のバイト数は含まれません。

$x$  が区域または可変長ストリングを含む集合の場合は、戻り値には、区域制御バイト、区域の最大サイズ、ストリングの長さの接頭辞、およびストリングの最大長でのバイト数が含まれます。この規則の例外を次に示します。

$x$  が、非次元区域を最後のエレメントとして持つ構造体または共用体の場合は、戻り値には、区域の制御バイトおよび区域の現行エクステントが含まれます。 $x$  には、区域の最後での未使用のバイト数は含まれません。

変数が割り振られていない場合、CURRENTSIZE 組み込み関数を調節可能エクステントとともに、BASED 変数上で使用してはなりません。

CMPAT(V3) コンパイラー・オプションでは、CURRENTSIZE は FIXED BIN(63) 値を返します。その他のすべての CMPAT オプションでは、FIXED BIN(31) 値を返します。

CURRENTSIZE 組み込み関数の例については、684 ページの『SIZE』を参照してください。



---

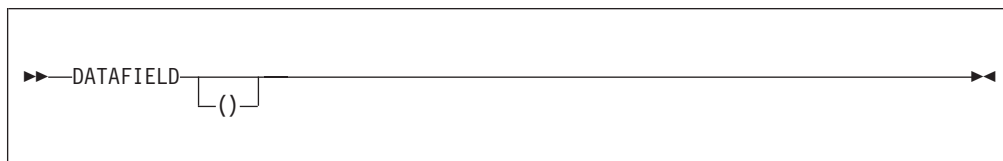
# CURRENTSTORAGE

省略形: CSTG

CURRENTSTORAGE は、CURRENTSIZE の同義語です。詳細については、482 ページの『CURRENTSIZE』を参照してください。

## DATAFIELD

DATAFIELD は、NAME 条件の ON ユニット (またはその動的子孫) のコンテキストにあります。文字ストリングを返しますが、その値は条件が発生したフィールドのコンテキストです。また、DATAFIELD も、NAME 条件の暗黙処置の一部として発生した ERROR 条件または FINISH 条件の ON ユニット (またはその動的子孫) のコンテキストにもあります。



条件が発生したストリングに DBCS ID、GRAPHIC データ、または混合文字データが含まれる場合は、DATAFIELD は混合文字ストリングを返します。

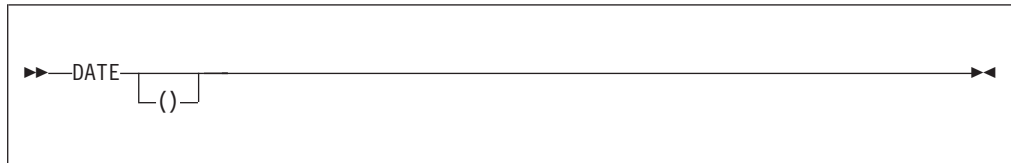
コンテキスト以外で DATAFIELD が使われている場合は、ヌル・ストリングが戻されます。

## DATE

---

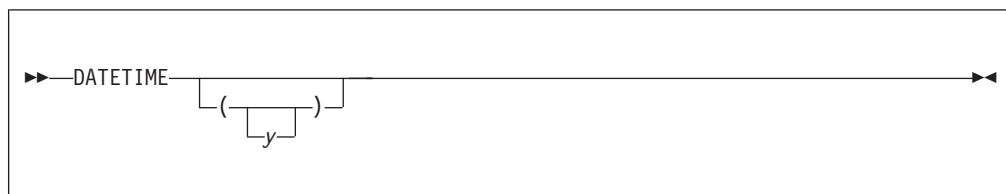
## DATE

DATE は、YYMMDD フォーマットの日付を含む非可変文字 (6) のストリングを戻します。



## DATETIME

DATETIME は、デフォルトまたはユーザー指定のフォーマットのどちらかで、今日の日付の文字ストリング・タイム・スタンプを戻します。



**y** 式。

存在する場合は、戻される日付/時刻のパターンを指定します。 *y* が指定されない場合は、デフォルトの日付/時刻のパターン「YYYYMMDDHHMISS999」が想定されます。

許可されるパターンについては、428 ページの表 50 を参照してください。

*y* に計算タイプ (必須) および文字タイプを保持する必要があります。そうでないと、文字に変換されます。

DATETIME の使用例については、488 ページの『DAYS』を参照してください。

Timeline diagram showing the sequence of events for a project. The timeline starts with "DAYS" and ends with a double arrow. The sequence of events is: (, d, ,p, ,w, ), followed by a long horizontal line and a final double arrow.

- ### 例

488 Enterprise PL/I for z/OS: Enterprise PL/I 言語解説書

許可されるパターンを 428 ページの表 50 にリストしてあります。リリアン形式の説明については、426 ページの『日付/時刻組み込み関数』を参照してください。

**DAYSTODATE**( $-d$ ,  $p$ ,  $w$ )

- 許可されるパターンを 428 ページの表 50 にリストしてあります。リリアン形式の説明については、426 ページの『日付/時刻組み込み関数』を参照してください。

490 Enterprise PL/I for z/OS: Enterprise PL/I 言語解説書

## DAYSTOSECS

DAYSTOSECS は、日数  $x$  に対応する秒数である FLOAT BINARY(53) の値を返します。



▶—DAYSTOSECS( $x$ )—▶

**x** 式。

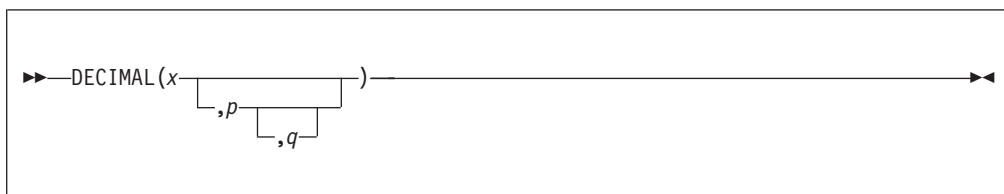
$x$  は、計算タイプでなければなりません。また、必要な場合には、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

DAYSTOSECS( $x$ ) は、 $x*(24*60*60)$  と同じです。



## DECIMAL

DECIMAL は、 $p$  および  $q$  で指定される精度で、 $x$  の 10 進数の値を返します。結果には、 $x$  のモードとスケールが含まれています。



省略形: DEC

**x** 参照。

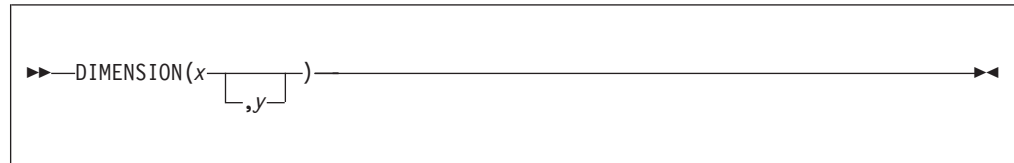
**p** 演算で維持される桁数を指定する制限付き式。

**q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。結果が固定小数点の場合に、 $p$  が与えられ、 $q$  が省略されるときは、位取り係数はゼロと見なされます。結果が浮動小数点の場合は、 $q$  は省略します。

$p$  と  $q$  が両方とも省略される場合は、結果の精度は基数変換の規則により決まります。

## DIMENSION

DIMENSION は、 $x$  の次元  $y$  の現行エクステントを指定する FIXED BINARY 値を返します。



省略形: DIM

**x** 配列参照。  $x$  の次元数は、 $y$  よりも小さくはなりません。

**y**  $x$  の特定の次元を指定する式。必要な場合には、 $y$  は FIXED BINARY(31,0) に変換されます。  $y$  は、1 以上でなければなりません。  $y$  が提供されない場合は、デフォルトを 1 にします。

配列が 1 次の場合のみ、 $y$  を省略できます。

$y$  が  $x$  の次元よりも大きい場合は、DIMENSION 関数は未定義の値を返します。

CMPAT(V3) コンパイラー・オプションでは、DIMENSION は FIXED BIN(63) 値を返します。 CMPAT(V2) および CMPAT(LE) コンパイラー・オプションでは、DIMENSION は、FIXED BIN(31) 値を返しますが、CMPAT(V1) コンパイラー・オプションでは、FIXED BIN(15) 値を返します。

DIMENSION の代わりに LBOUND および HBOUND を使用することをお勧めします。

- 494 Enterprise PL/I for z/OS: Enterprise PL/I 言語解説書

## EDIT

EDIT は、長さ LENGTH(y) の文字ストリングを戻します。EDIT の値は、y で与えられたピクチャー指定を使用して宣言された変数に x が指定された場合の結果と同じです。

有効なピクチャー文字については、361 ページの『第 15 章 ピクチャー指定文字』を参照してください。

▶—EDIT(x,y)—▶

**x** 式。

x に、計算タイプを保持する必要があります。

**y** ストリング式。

y に文字タイプを保持し、PICTURE データ項目に有効なピクチャー文字を指定する必要があります。y に有効なピクチャー指定がない場合は、ERROR 条件が発生します。

## 例

```

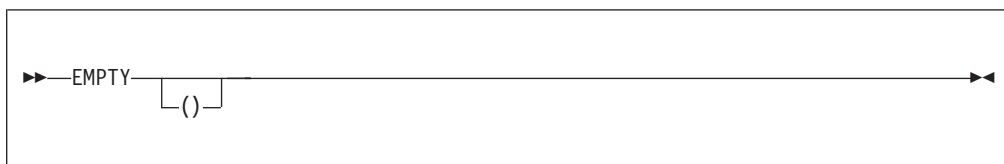
dcl pic1 char(9) init ('ZZZZZZZ9');
dcl pic2 char(7) init ('ZZ9V.99');
dcl num fixed dec (9) init (123456789);
z = edit (num, pic1); /* '123456789' */
z = edit (num, pic2); /* '789.00' */
z = edit (num, substr(pic1,8)); /* '89' */
z = edit (num, substr(pic2,1,5)); /* '789.' */
z = edit (num, substr(pic1,7,3)); /* '789' */
z = edit (num, substr(pic2,3,5)); /* '9.00' */
z = edit ('1', substr(pic1,7,3)); /* ' 1' */
z = edit ('PL/I', 'AAXA'); /* 'PL/I' */
z = edit ('PL/I', 'AAAA'); /* raises conversion */

```

x を y で指定したピクチャー指定に編集できない場合は、発生した条件は x が y に設定されているピクチャー指定と同じピクチャー指定がある PICTURE データ項目に割り当てられた場合に発生する条件です。

## EMPTY

EMPTY は、ゼロ・エクステンツの区域を戻します。EMPTY は、区域のすべての割り振りを解放するのに使われます。



この関数の値は、変数が割り振られたときに、区域変数に割り当てられます。以下に例を示します。

```
declare A area,
 I based (P),
 J based (Q);

allocate I in(A), J in (A);
A = empty();

/* Equivalent to: free I in (A), J in (A); */
```

## ENDFILE

ENDFILE は、ファイルの最後に到達したときに、'1'B を返します。到達しない場合は、'0'B を返します。ファイルがオープンされていない場合は、ERROR 条件が発生します。



►►—ENDFILE(*x*)—————◄◄

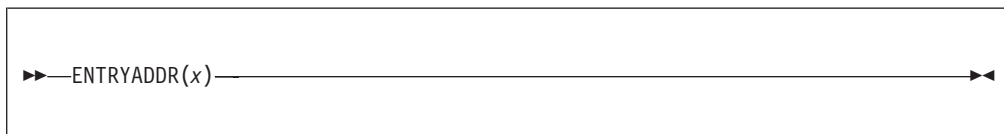
**x** ファイル参照。

ENDFILE は、バイトストリーム・ファイル (例えば、FILEREAD 組み込み関数の使用を必要とするファイル) のファイルの終わり条件を検出するために使用できます。

---

## ENTRYADDR

ENTRYADDR は、入り口  $x$  が呼び出された場合に、最初に行われた命令のアドレスであるポインター値を返します。入り口  $x$  は、ネストされていないプロシージャーを表す必要があります。



**x** 入り口参照。

$x$  がフェッチ可能な入り口定数の場合は、ENTRYADDR が実行される前に  $x$  をフェッチする必要があります。ただし、 $x$  が解放された場合は、ENTRYADDR は SYSNULL を返します。

## ENTRYADDR 疑似変数

ENTRYADDR 疑似変数は、呼び出される入りのアドレスを使用して、入りの変数  $x$  を初期化します。




**x** 入りの参照。

**注:** ENTRYADDR 変数に提供されたアドレスが内部プロシージャのアドレスの場合、結果は保証されません。



### EPSILON

EPSILON は、 $x$  が 1 のときに、 $x$  と次の正の数の間のスペースである浮動小数点値を返します。戻り値は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。



▶—EPSILON( $x$ )—▶

**x** REAL FLOAT 式。

EPSILON( $x$ ) は定数であり、制限付き式に使用できます。

## ERF

ERF は、 $x$  の誤差関数の近似を実数の浮動小数点の値で戻します。

▶—ERF( $x$ )—▶

**x** 実数式。

結果は  $x$  の基数と精度であり、次の式で指定されます。

$$(2/\sqrt{\pi}) \int_0^x \text{EXP}(-(t^2))dt$$

---

## ERFC

ERFC は、 $x$  の誤差関数の補数の近似を実数の浮動小数点の値で戻します。



►►ERFC( $x$ )◄◄

**x** 実数式。

結果は  $x$  の基数と精度であり、次の式で指定されます。

$$1 - \text{ERF}(x)$$

## EXP

EXP は、自然対数の底  $e$  の  $x$  乗の近似を浮動小数点の値で戻します。



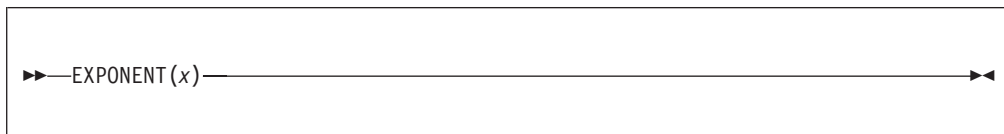
►►EXP( $x$ )◄◄

**x** 式。

結果は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。

## EXPONENT

EXPONENT は、 $x$  の指数部分である FIXED BINARY(31,0) 値を戻します。



**x** 式。  $x$  は、REAL FLOAT として宣言しなければなりません。

EXPONENT( $x$ ) は、 $x$  の「数学」指数ではありません。  $x = 0$  の場合は、EXPONENT( $x$ ) = 0 です。  $x$  が 0 以外の場合は、EXPONENT( $x$ ) は次のような固有の数  $e$  です。

$$\text{radix}(x)^{(e-1)} \leq \text{abs}(x) < \text{radix}(x)^e$$

したがって、EXPONENT(1e0) は 1 であり、0 ではありません。

FILEDDINT

FILEDDINT は、ファイル *x* の属性 *c* の値である FIXED BIN(31) 値を戻します。



- x** ファイル参照。
- c** 照会される属性を保持する文字ストリング。

FILEDDINT を使用している場合、以下は、*c* の有効な値です。

|          |          |
|----------|----------|
| blksize  | keylen   |
| bufsize  | keyloc   |
| delay    | reccsize |
| filesize | retry    |

ONCODE 1010 の ERROR 条件は、ファイルがオープンしていないか、照会されている属性がファイルに無効な場合に発生します。

FILEDDINT(*x*, 'BLKSIZE') は、z/OS でのみ有効です。FILEDDINT(*x*, 'BLKSIZE') は CONSECUTIVE ファイルのブロック・サイズを戻します。HFS ファイルの場合は 0 を戻し、VSAM ファイルの場合にも 0 を戻します。

FILEDDINT(*x*, 'FILESIZE') は、z/OS で、HFS ファイルの場合を除き 0 の値を戻します。

FILEDDINT(*x*, 'KEYLOC') および FILEDDINT(*x*, 'KEYLEN') は VSAM KSDS ファイルにのみ有効です。

## FILEDDTEST

FILEDDTEST は、属性 *c* がファイル *x* に適用する場合に値 1 を保持する FIXED BIN(31) 値を返します。属性 *c* がファイル *x* に適用しない場合は、0 の値を返します。



►►—FILEDDTEST(*x*,*c*)—◄◄

**x** ファイル参照。

**c** 照会される属性を保持する文字ストリング。

FILEDDTEST を使用している場合、以下は、*c* の有効な値です。

|            |               |
|------------|---------------|
| append     | graphic       |
| bkwd       | lrmskip       |
| ctlasa     | print         |
| delimit    | prompt        |
| descendkey | scalarvarying |
| genkey     | skip0         |

ONCODE 1010 の ERROR 条件は、ファイルがオープンしていないか、照会されている属性がファイルに無効な場合に発生します。

## FILEDDWORD

FILEDDWORD は、ファイル  $x$  の属性  $c$  の値である文字ストリングを返します。

►►—FILEDDWORD( $x, c$ )——►►

**x** ファイル参照。

**c** 照会される属性を保持する文字ストリング。

FILEDDWORD を使用している場合、以下は、 $c$  の有効なオプションです。

|              |         |
|--------------|---------|
| access       | putpage |
| amthd        | recfm   |
| action       | share   |
| charset      | type    |
| filename     | typef   |
| organization |         |

これらのオプションは以下の値を返します。

- ACCESS は、SEQUENTIAL または DIRECT を返します。
- ACTION は、INPUT、OUTPUT、または UPDATE を返します。
- AMTHD は、z/OS プラットフォームでは VSAM KSDS、VSAM ESDS、または VSAM RRDS を返し、Windows または AIX プラットフォームでは FILESYS、DDM、BTREVE、または ISAM を返します。
- CHARSET は ASCII または EBCDIC を返します。
- z/OS プラットフォームの場合、FILENAME は、HFS ファイルの完全修飾パス名、およびその他のすべてのファイルの MVS データ・セット名を返します。ただし、DSN=NULLFILE と DD DUMMY のいずれかで指定されたファイルについては、値「NULLFILE」を返します。PDS または PDSE のメンバーである MVS データ・セットについては、戻された名前にメンバー名が含まれています。Windows および AIX プラットフォームでは、ファイルの完全修飾パス名を返します。
- ORGANIZATION は、CONSECUTIVE、RELATIVE、REGIONAL(1)、または INDEXED を返します。
- RECFM は、ファイルの適切なレコード・フォーマット設定、および VSAM ファイルについては U を返します。このオプションは z/OS でのみ有効です。
- SHARE は NONE、READ、または ALL を返します。
- TYPE は、RECORD または STREAM を返します。
- TYPEF は、固有ファイルのタイプを返します。

ONCODE 1010 の ERROR 条件は、ファイルがオープンしていないか、照会されている属性がファイルに無効な場合に発生します。


FILEDDWORD( $x, 'RECFM'$ ) は、z/OS でのみ有効です。



---

## FILEID

FILEID は、PL/I ファイル定数またはファイル変数のシステム・トークンである  
FIXED BIN(31) 値を戻します。



►—FILEID(x)—◄

**x** ファイル参照。

このトークンを PL/I ステートメントによって達成するどのような目的のためにも使用しないでください。

z/OS では、トークンは、RECORD または STREAM ファイルに関連した DCB のアドレス、または VSAM RECORD ファイルに関連した ACB のアドレスを保持します。トークンは他のファイルでは無効です。注: アプリケーションが DCB または ACB を読み取れるように、DCB または ACB アドレスが提供されています。DCB および ACB を変更しないでください。

ONCODE 1010 の ERROR 条件は、ファイルがオープンしていない場合に発生します。

## FILEOPEN

FILEOPEN に戻される値は、ファイル  $x$  がオープンされている場合は '1'B、ファイルがオープンされていない場合は '0'B です。




▶—FILEOPEN( $x$ )—▶

**x** ファイル参照。

### FILEREAD

FILEREAD により、ファイル  $x$  から位置  $y$  に  $z$  ストレージの単位 (バイト) が読み取られます。そして、実際に読み込まれたストレージの単位の数に戻されます。



►—FILEREAD( $x,y,z$ )—◄

- x** ファイル参照。
- y** タイプ POINTER または OFFSET による式。タイプが OFFSET の場合は、式は、AREA 属性によって宣言される OFFSET 変数でなければなりません。
- z** FIXED BIN(31,0) に変換される計算タイプによる式。

FILEREAD が読み取れるのは、TYPE(U) のファイルのみです。

## FILESEEK

FILESEEK は、ファイル  $x$  と関連した現在のファイル位置をファイル内の新しい位置に変更します。ファイル上での次の操作は、新しい位置で行われます。また、ファイル位置の変更が成功し、ゼロ以外である場合は、0 の FIXED BIN(31) 値を返します。FILESEEK は、C での fseek 関数と同等です。

▶▶—FILESEEK( $x,y,z$ )——▶▶

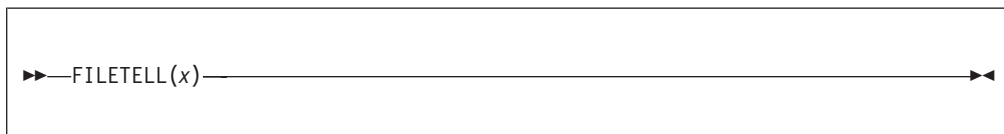
- x** ファイル参照。
- y** ファイル・ポインターが  $z$  に対して相対的に移動されることになっている位置の数を示す FIXED BINARY(31) 値。
- z** ファイル・ポインターの移動の起点を示す FIXED BINARY(31) 値。次の値が有効です。
  - 1** ファイルの始め
  - 0** ファイル・ポインターの現在位置
  - 1** ファイルの終わり

FILESEEK は、TYPE(U) のファイルでのみ使用できます。

---

### FILETELL

FILETELL は、ファイル  $x$  の現在位置を示す FIXED BINARY(31) 値を返します。返される値は、ファイルの始めを相対的に示すオフセットです。FILETELL は、C での ftell 関数と同等です。



**x** ファイル参照。

FILETELL は、TYPE(U) のファイルでのみ使用できます。

## FILEWRITE

FILEWRITE により、位置  $y$  からファイル  $x$  に  $z$  ストレージの単位 (バイト) が書き込まれます。そして、実際に書き込まれたストレージの単位の数に戻されます。



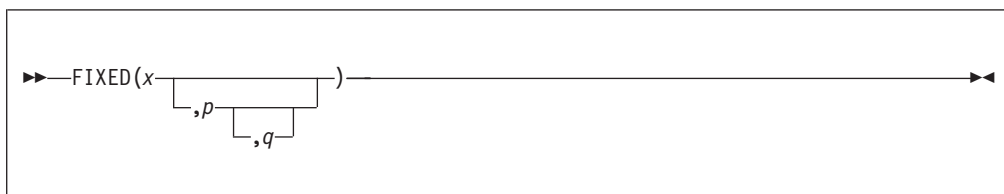
»—FILEWRITE( $x,y,z$ )—«

- x** ファイル参照。
- y** タイプ POINTER または OFFSET による式。タイプが OFFSET の場合は、式は、AREA 属性によって宣言される OFFSET 変数でなければなりません。
- z** FIXED BIN(31,0) に変換される計算タイプによる式。

FILEWRITE は、TYPE(U) のファイルにのみ書き込みを行います。

## FIXED

FIXED は、 $p$  および  $q$  で指定される精度で、 $x$  の固定小数点の値を戻します。結果には、 $x$  の基数とモードが含まれています。



**x** 式。

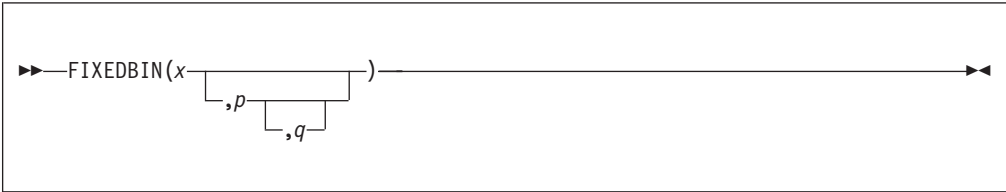
**p** 結果の合計桁数を指定する制限付き式。これは、実行の限界を超えてはいけません。

**q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。  $q$  が省略される場合は、位取り係数はゼロと想定されます。

$p$  と  $q$  の両方が省略される場合、デフォルト値として、2 進数の結果の場合 (15,0)、10 進数の結果の場合 (5,0) が使用されます。

FIXEDBIN

FIXEDBIN は、関数のパラメーターとして明示的に指定されない限り、ソースから導き出した精度およびスケールで FIXED BIN 値を返します。



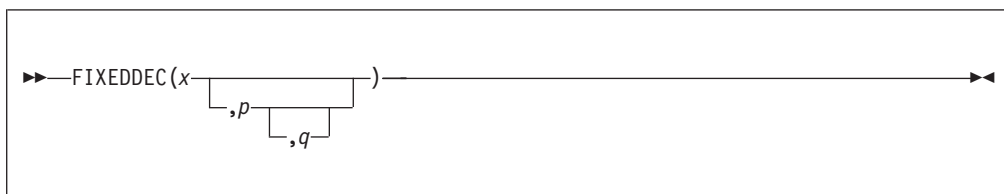
- x** 式。
- p** 結果の合計桁数を指定する制限付き式。これは、実行の限界を超えてはいけません。
- q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。 *q* が省略される場合は、位取り係数はゼロと想定されます。
- p* と *q* が両方とも省略される場合は、結果の精度は次の表に従ってソースにより決まります。

| ソース                              | 結果                                                                                                                                                    |
|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| FIXED BIN( <i>p</i> , <i>q</i> ) | FIXED BIN( <i>p</i> , <i>q</i> )                                                                                                                      |
| FIXED DEC( <i>p</i> , <i>q</i> ) | FIXED BIN( <i>r</i> , <i>s</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = min( <i>M</i> ,1+CEIL( <i>p</i> *3.32))<br><i>s</i> = CEIL(ABS( <i>q</i> *3.32))*SIGN( <i>q</i> ) |
| FLOAT BIN( <i>p</i> )            | FIXED BIN( <i>p</i> ,0)                                                                                                                               |
| FLOAT DEC( <i>p</i> )            | FIXED BIN( <i>r</i> ,0)<br>ここで、 <i>r</i> = min( <i>M</i> ,CEIL( <i>p</i> *3.32))                                                                      |
| BIT                              | FIXED BIN( <i>M</i> ,0)                                                                                                                               |
| CHAR、GRAPHIC、または WIDECHAR        | FIXED BIN( <i>r</i> ,0)<br>ここで、 <i>r</i> = min( <i>M</i> ,1+CEIL( <i>N</i> *3.32))                                                                    |



## FIXEDDEC

FIXEDDEC は、関数のパラメーターとして明示的に指定されない限り、ソースから導き出した精度およびスケールで FIXED DEC 値を返します。



**x** 式。

**p** 結果の合計桁数を指定する制限付き式。これは、実行の限界を超えてはいけません。

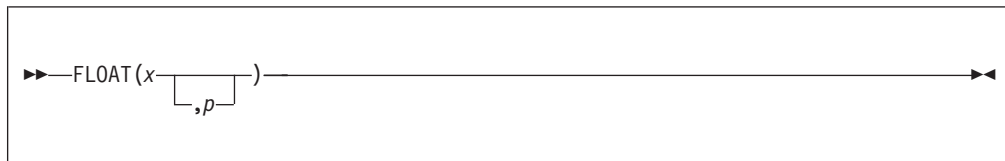
**q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。 *q* が省略される場合は、位取り係数はゼロと想定されます。

*p* と *q* が両方とも省略される場合は、結果の精度は次の表に従ってソースにより決まります。

| ソース                              | 結果                                                                                                                                        |
|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| FIXED BIN( <i>p</i> , <i>q</i> ) | FIXED DEC( <i>r</i> , <i>s</i> )<br>ここで、 $r = \min(N, 1 + \text{CEIL}(p/3.32))$<br>$s = \text{CEIL}(\text{ABS}(q/3.32)) * \text{SIGN}(q)$ |
| FIXED DEC( <i>p</i> , <i>q</i> ) | FIXED DEC( <i>p</i> , <i>q</i> )                                                                                                          |
| FLOAT BIN( <i>p</i> )            | FIXED DEC( <i>r</i> ,0)<br>ここで、 $r = \min(N, \text{CEIL}(p/3.32))$                                                                        |
| FLOAT DEC( <i>p</i> )            | FIXED DEC( <i>p</i> ,0)                                                                                                                   |
| BIT                              | FIXED DEC( <i>r</i> ,0)<br>ここで、 $r = \min(N, 1 + \text{CEIL}(M/3.32))$                                                                    |
| CHAR、GRAPHIC、または<br>WIDECHAR     | FIXED DEC( <i>N</i> ,0)                                                                                                                   |

# FLOAT

FLOAT は、 $p$  で指定される精度で、 $x$  の浮動小数点の近似値を戻します。結果には、 $x$  の基数とモードが含まれています。



**x** 式。

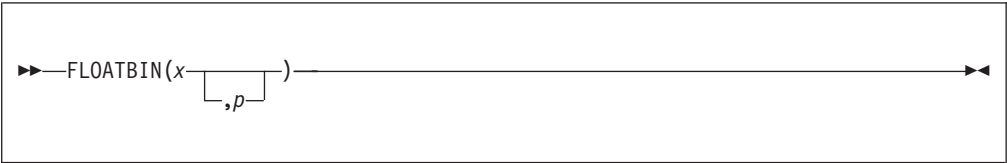
**p** 結果の最小桁数を指定する制限付き式。

$p$  が省略される場合は、結果の精度は基数変換の規則により決まります。

$p$  が省略される場合は、デフォルト値として、2 進数の結果の場合 15、10 進数の結果の場合 5 が使用されます。

FLOATBIN

FLOATBIN は、関数のパラメーターとして明示的に指定されない限り、ソースから導き出した精度で FLOAT BIN 値を返します。



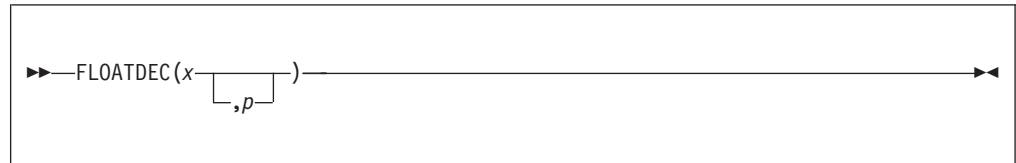
- x** 式。
- p** 結果の合計桁数を指定する制限付き式。これは、実行の限界を超えてはいけません。

*p* が省略された場合は、結果の精度は、次の表に従ってソースにより決まります。

| ソース                          | 結果                                                             |
|------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| FIXED BIN( <i>p,q</i> )      | FLOAT BIN( <i>p</i> )                                          |
| FIXED DEC( <i>p,q</i> )      | FLOAT BIN( <i>r</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = CEIL( <i>p</i> *3.32) |
| FLOAT BIN( <i>p</i> )        | FLOAT BIN( <i>p</i> )                                          |
| FLOAT DEC( <i>p</i> )        | FLOAT BIN( <i>r</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = CEIL( <i>p</i> *3.32) |
| BIT                          | FLOAT BIN( <i>M</i> )                                          |
| CHAR、GRAPHIC、または<br>WIDECHAR | FLOAT BIN( <i>r</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = CEIL( <i>N</i> *3.32) |

# FLOATDEC

FLOATDEC は、関数のパラメーターとして明示的に指定されない限り、ソースから導き出した精度で FLOAT DEC 値を返します。



**x** 式。

**p** 結果の合計桁数を指定する制限付き式。これは、実行の限界を超えてはいけません。

*p* が省略された場合は、結果の精度は、次の表に従ってソースにより決まります。

| ソース                              | 結果                                                             |
|----------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| FIXED BIN( <i>p</i> , <i>q</i> ) | FLOAT DEC( <i>r</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = CEIL( <i>p</i> /3.32) |
| FIXED DEC( <i>p</i> , <i>q</i> ) | FLOAT DEC( <i>p</i> )                                          |
| FLOAT BIN( <i>p</i> )            | FLOAT DEC( <i>r</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = CEIL( <i>p</i> /3.32) |
| FLOAT DEC( <i>p</i> )            | FLOAT DEC( <i>p</i> )                                          |
| BIT                              | FLOAT DEC( <i>r</i> )<br>ここで、 <i>r</i> = CEIL( <i>M</i> /3.32) |
| CHAR、GRAPHIC、または<br>WIDECHAR     | FLOAT DEC( <i>N</i> )                                          |

---

## FLOOR

FLOOR は、 $x$  以下の最大の整数値を返します。



**x** 実数式。

結果のモード、基数、スケール、および精度は、引数と一致します。 $x$  が精度  $(p,q)$  を使用した固定小数点のときは、結果の精度は次の式で与えられます。

$$(\min(n, \max(p-q+1, 1)), 0)$$

この場合、 $n$  は、使用できる最大桁数です。FIXED DECIMAL の場合は  $N$  が入り、FIXED BINARY の場合は  $M$  が入ります。

## GAMMA

GAMMA は、次の式で与えられる  $x$  のガンマの近似値です。

$$\text{gamma}(x) = \int_0^{\infty} (u^{x-1})(e^{-u})du$$

GAMMA は、 $x$  の基数、モード、および精度で浮動小数点の値を返します。

▶—GAMMA( $x$ )—◀

**x** 実数式。  $x$  の値は、ゼロより大きくなければなりません。

---

### GETENV

GETENV は、指定した環境変数を表す文字値を戻します。



▶▶ GETENV(*x*) ◀◀

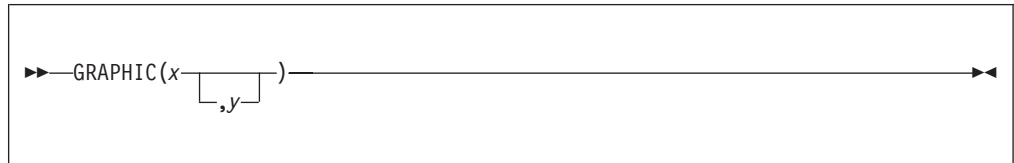
**x** 環境変数を命名する式。

## GRAPHIC

GRAPHIC を使用すれば、文字 (または混合文字) データを GRAPHIC データに明示的に変換することができます。その他のすべてのデータは、最初に文字に変換され、次に GRAPHIC データ・タイプに変換されます。

GRAPHIC は、 $y$  で指定されるグラフィック記号での長さをとる  $x$  のグラフィック値を戻します。

文字は、グラフィックに変換されます。 $x$  の内容は、変換時に妥当性がチェックされます。このとき、グラフィック定数と混合文字定数をチェックするときに使用するのと同じ規則が使われます。



**x** 式。 $x$  が GRAPHIC のときは、 $x$  は長さ変更の対象で、適用可能な埋め込みまたは切り捨てが行われます。 $x$  がグラフィック以外のときは、必要な場合には文字に変換されます。SBCS 文字は、同等の DBCS 文字に変換されます。

**y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。 $y$  が省略される場合は、長さはタイプ変換の規則によって決められます。

$y$  は負であってはなりません。

$y = 0$  の場合は、結果はヌルの漢字ストリングです。

次の規則が適用されます。

- $y$  が漢字ストリングを入れるのに必要な長さより大きい場合は、結果はグラフィックのブランクで埋まります。
- $y$  が漢字ストリングを入れるのに必要な長さより小さい場合は、結果が切り捨てられます。

### 例 1

結果を入れるのに十分な大きさのターゲットでの CHARACTER から GRAPHIC の変換の場合

```

dcl X char (11) varying;
dcl A graphic (11);
A = graphic(X,8);

```

| X の値       | 中間結果                 | A に割り当てられる値            |
|------------|----------------------|------------------------|
| ABCDEFGHIJ | .A.B.C.D.E.F.G.H.I.J | .A.B.C.D.E.F.G.H.b.b.b |
| 123        | .1.2.3               | .1.2.3.b.b.b.b.b.b.b   |
| 123A.B.C   | .1.2.3.A.B.C         | .1.2.3.A.B.C.b.b.b.b.b |

この場合、.b は、DBCS ブランクです。



### 例 2

結果を入れるには短すぎるターゲットでの CHARACTER から GRAPHIC の変換の場合

```
dcl X char (10) varying;
dcl A graphic (8);
A = graphic(X);
```

**X の値**

ABCDEFGHIJ

**中間結果**

.A.B.C.D.E.F.G.H.I.J

**A に割り当てられる値**

.A.B.C.D.E.F.G.H

## HANDLE

HANDLE は、タイプ付き構造体  $x$  にハンドルを戻します。

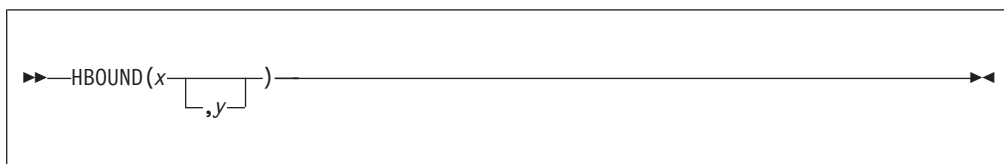


▶▶—HANDLE( $x$ )—▶▶

**x**   タイプ付き構造体。

## HBOUND

HBOUND は、 $x$  の次元  $y$  の現行の上限を指定する FIXED BINARY 値で返します。



**x** 配列参照。  $x$  の次元数は、 $y$  よりも小さくはありません。

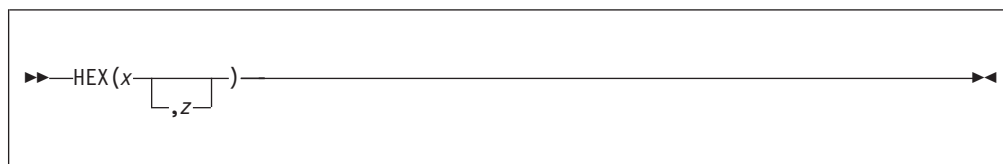
**y**  $x$  の特定の次元を指定する式。必要な場合には、 $y$  は FIXED BINARY(31,0) に変換されます。  $y$  は、1 以上でなければなりません。  $y$  が提供されない場合は、デフォルトを 1 にします。

配列が 1 次の場合のみ、 $y$  を省略できます。

CMPAT(V3) コンパイラー・オプションでは、HBOUND は FIXED BIN(63) 値を返します。 CMPAT(V2) および CMPAT(LE) コンパイラー・オプションでは、HBOUND は、FIXED BIN(31) 値を返しますが、CMPAT(V1) コンパイラー・オプションでは、FIXED BIN(15) 値を返します。

# HEX

HEX は、 $x$  が入っているストレージの 16 進数表示である文字ストリングを返します。



HEX( $x$ ) は、長さ  $2 * \text{サイズ}(x)$  の文字ストリングを返します。

HEX( $x, z$ ) は、出力ストリングの 8 文字のすべてのセット間に挿入された文字  $z$  付きの  $x$  を含む文字ストリングを返します。その長さは、 $2 * \text{サイズ}(x) + ((\text{サイズ}(x) - 1)/4)$  です。

コンパイラー・オプション USAGE(HEX(CSTG)) では、VARYING と VARYINGZ ストリングについて、上記計算で使用される長さは、 $\text{stg}(x)$  ではなく、 $\text{cstg}(x)$  に基づきます。

**x** 変数を表す式。  $x$  を含む全バイト数は、16 進数に変換されます。

**z** 式。  $z$  が指定された場合は、CHARACTER(1) NONVARYING タイプでなければなりません。

整数、オフセット、およびポインター値は、ビッグ・エンディアン形式で与えられます。

## 例 1

```

dcl Sweet char(5) init('Sweet');
dcl Sixteen fixed bin(31) init(16) littleendian;
dcl XSweet char(size(Sweet)*2+(size(Sweet)-1)/4);
dcl XSixteen char(size(Sixteen)*2+(size(Sixteen)-1)/4);

XSweet = hex(Sweet, '-');
/* '53776565-74' */

XSweet = heximage(addr(Sweet), length(Sweet), '-');
/* '53776565-74' */

XSixteen = hex(Sixteen, '-');
/* '00000010' - bytes reversed */

XSixteen = heximage(addr(Sixteen), stg(Sixteen), '-');
/* '10000000' - bytes NOT reversed */

```

## 例 2

```

dcl X fixed bin(15) littleendian;
dcl Y fixed bin(15) bigendian;

X = 258; /* stored as '0201'B4 */
Y = 258; /* stored as '0102'B4 */

display (hex(X)); /* displays 0102 */
display (hex(Y)); /* displays 0102 */

```

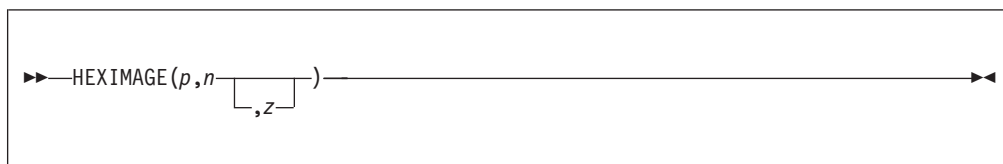
## HEX

```
display (heximage(addr(X), stg(X))); /* displays 0201 */
display (heximage(addr(Y), stg(Y))); /* displays 0102 */
```

注: この関数は、ストレージの  $x$  の正確なイメージを戻しません。正確なイメージが必要な場合は、HEXIMAGE 組み込み関数を使用してください。

## HEXIMAGE

HEXIMAGE は、指定された位置のストレージの 16 進数表示である文字ストリングを返します。



HEXIMAGE(p,n) は、位置  $p$  でのストレージの  $n$  バイトの 16 進表示である文字ストリングを返します。その長さは、 $2 * n$  です。

HEXIMAGE(p,n,z) は、出力ストリングの 8 文字の各セット間に挿入された文字  $z$  付きの位置  $p$  でのストレージの  $n$  の 16 進表示である文字を返します。その長さは、 $(2 * n) + ((n - 1)/4)$  です。

- p** ロケーター・タイプ (POINTER または OFFSET) を保持していなければならない制限付き式。  $p$  が OFFSET の場合、AREA 属性を保持している必要があります。
- n** 式。  $n$  には、計算タイプを保持している必要があります、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。
- z**  $z$  が指定された場合は、CHARACTER(1) NONVARYING タイプでなければなりません。

HEXIMAGE 組み込み関数の例については、527 ページの『HEX』を参照してください。

---

## HIGH

HIGH は、長さ  $x$  の文字ストリングを戻します。各文字は、照合順序の最上位の文字 (16 進数の FF) です。



»—HIGH( $x$ )—«

**x** 式。必要な場合には、 $x$  は正の実数固定小数点の 2 進数の値に変換されます。  
 $x = 0$  の場合は、結果はヌル文字ストリングです。

## HUGE

HUGE は、 $x$  の想定可能な正の最大値を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。



►—HUGE( $x$ )—◄

**x** 式。  $x$  は、属性 REAL FLOAT を保持する必要があります。

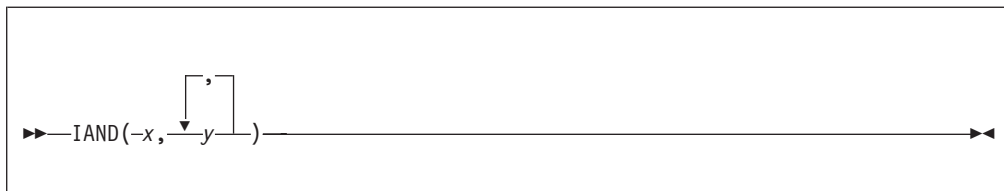
HUGE( $x$ ) は定数であり、制限付き式で使用できます。



---

IAND

IAND は、引数の論理 AND を戻します。



*x* および *y*

計算タイプを保持する必要がある式。

REAL FIXED BIN(*p*,0) ではない引数があると、その引数は SIGNED REAL FIXED BIN(*p*,0) に変換されます。

引数のいずれかが SIGNED の場合、UNSIGNED の引数はすべて SIGNED に変換されます。

結果は REAL FIXED BIN( max(*p*<sub>1</sub>,*p*<sub>2</sub>,...), 0 ) となります。すべての引数が UNSIGNED の場合は、結果も UNSIGNED です。

## IEOR

IEOR は、 $x$  と  $x$  の論理排他 OR を戻します。すべての引数が UNSIGNED の場合は、結果も UNSIGNED です。

▶—IEOR( $x,y$ )—▶

$x$  および  $y$

計算タイプを保持する必要がある式。

REAL FIXED BIN( $p,0$ ) ではない引数があると、その引数は SIGNED REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換されます。

引数のいずれかが SIGNED の場合、UNSIGNED の引数はすべて SIGNED に変換されます。

結果は REAL FIXED BIN(  $\max(p_1,p_2,\dots)$ , 0 ) となります。すべての引数が UNSIGNED の場合は、結果も UNSIGNED です。

---

### IMAG

IMAG は、 $x$  の虚数部を返します。結果のモードは実数です。結果は、 $x$  の基数、スケール、および精度になります。




►—IMAG( $x$ )—◄

**x** 式。  $x$  は、実数の場合は複素数に変換され、該当するゼロ値が返されます。

## IMAG 疑似変数

IMAG 疑似変数は、実数値または複素数の実数部分を  $x$  の虚数部分の係数に割り当てます。



▶—IMAG( $x$ )—▶

**x** 複素数参照。

## INDEX

INDEX は、 $y$  と等しいサブストリングの  $x$  内の開始位置を示すスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。また、処理を開始する  $x$  内の位置を指定することもできます。



**x** 検索されるストリング式。

**y** 検索元のストリング式。

**n**  $n$  は、処理を開始する  $x$  内の位置を指定します。  $y$  には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

$x$  内で  $y$  が発生しない場合、または  $x$  か  $y$  のどちらかが長さゼロがある場合は、値ゼロが返されます。

$n$  が 1 より小さい場合、または  $n$  が  $1 + \text{length}(x)$  よりも大きい場合は、STRINGRANGE 条件が発生し、結果は 0 になります。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

## 例

```
dcl tractatus char
 value('Wovon man nicht sprechen kann, ' ||
 'darueber muss man schweigen.');

dcl pos fixed bin init(1);

pos = index(tractatus, 'man', pos+1); /* pos = 07 */
pos = index(tractatus, 'man', pos+1); /* pos = 46 */
pos = index(tractatus, 'man', pos+1); /* pos = 00 */
```

## INOT

INOT は、 $x$  の論理 NOT を戻します。

►► INOT( $x$ ) ◄◄

$x$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が REAL FIXED BIN( $p,0$ ) の場合、その結果は REAL FIXED BIN( $p,0$ ) であり、 $x$  が UNSIGNED の場合、結果も UNSIGNED です。それ以外の場合、 $x$  は SIGNED REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換され、その結果は同じ属性を持ちます。

INOT( $x$ ) には  $x$  と反対の符号が付きますが、INOT( $x$ ) は  $-x$  と同じではありません。

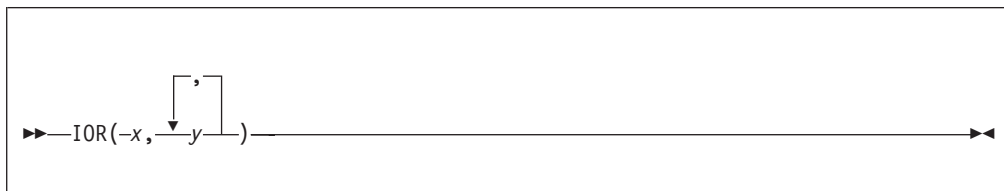
### 例

```
inot(0) /* produces -1 */
inot(-1) /* produces 0 */
inot(+1) /* produces -2 */
```

---

IOR

IOR は、引数の論理 OR を戻します。



$x$  および  $y$

計算タイプを保持する必要がある式。

REAL FIXED BIN(p,0) ではない引数があると、その引数は SIGNED REAL FIXED BIN(p,0) に変換されます。

引数のいずれかが SIGNED の場合、UNSIGNED の引数はすべて SIGNED に変換されます。

結果は REAL FIXED BIN(  $\max(p_1, p_2, \dots)$ , 0 ) となります。すべての引数が UNSIGNED の場合は、結果も UNSIGNED です。

## ISFINITE

ISFINITE は、呼び出される引数が NAN でなく、正または負の無限大でもない場合に、'1'B を戻します。そうでなければ、'0'B を戻します。



►—ISFINITE(x)—◄

**x** REAL FLOAT DECIMAL 式。

FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションは有効でなければなりません。

引数のフォーマットが何であれ、浮動小数点例外は発生しません。



## ISIGNED

ISIGNED( $x$ ) は、ビット・パターンを変更せずに  $x$  を符号付き整数値にキャストした結果を返します。



$x$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が整数でない (つまり位取り係数ゼロの REAL FIXED BIN でない) 場合、 $x$  は REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換されます。

ISIGNED( $x$ ) は、整数  $x$  に対して、 $x$  と同じビット・パターンを持つ値を返しますが、その値の属性は SIGNED FIXED BIN( $p$ ) になります。

$x$  が UNSIGNED の場合、 $p$  は次のように指定されます。

$\text{precision}(x) = 8, 16, 32$ 、または  $64$  の場合、 $p = \text{precision}(x) - 1$ 。そうでなければ、 $p = \text{precision}(x)$ 。

$x$  が SIGNED の場合、 $p$  は  $x$  の精度に等しい値。

### 例

ISIGNED('ff\_ff\_ff\_ff'xu) は、SIGNED FIXED BIN(31) 値  $-1$  と同等です。

## ISINF

ISINF は、呼び出される引数が無限大である場合に、'1'B を戻します。そうでなければ、'0'B を戻します。



►►—ISINF(*x*)—◄◄


**x** REAL FLOAT DECIMAL 式。

FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションは有効でなければなりません。

引数のフォーマットが何であれ、浮動小数点例外は発生しません。

## ISLL

ISLL( $x,n$ ) は、論理的に  $x$  を左に  $n$  桁シフトし、右側にゼロを埋め込んだ結果を返します。



$x$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$n$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が REAL FIXED BIN( $p,0$ ) および SIGNED の場合、結果は SIGNED REAL FIXED BIN( $r,0$ ) です。  $p \leq M1$  の場合は  $r = M1$  で、  $p > M1$  の場合は  $r = M2$  です。

$x$  が REAL FIXED BIN( $p,0$ ) および UNSIGNED の場合、結果は UNSIGNED REAL FIXED BIN( $r+1,0$ ) です。  $p \leq (M1+1)$  の場合は  $r = (M1+1)$ 、  $p > M1$  の場合は  $r = (M2+1)$  です。

それ以外の場合、 $x$  は SIGNED REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換され、その結果は上記と同じ属性を持ちます。

$n$  が負の場合、または  $n$  が  $r$  より大きい場合、結果は未定義です。

注: RAISE2( $x,n$ ) と異なり、ISLL( $x,n$ ) は、 $x$  とは別の符号が付く場合があります。

## 例

```
isll(+6,1) /* produces 12 */
isll(2147483645,1) /* produces -6 */
```

## ISMAIN


ISMAIN() は、呼び出されるプロシージャが OPTIONS(MAIN) 属性を持つ場合に、'1'B を返します。そうでなければ、'0'B を返します。

▶▶—ISMAIN—(—)—▶◀

---

## ISNAN

ISNAN は、呼び出される引数が NAN である場合に、'1'B を戻します。そうでなければ、'0'B を戻します。



▶—ISNAN(*x*)—▶◀

The diagram shows the function signature ISNAN(x) enclosed in a rectangular box. A horizontal line with arrowheads at both ends passes through the box, with the text ISNAN(x) positioned on it.

**x** REAL FLOAT DECIMAL 式。

FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションは有効でなければなりません。

引数のフォーマットが何であれ、浮動小数点例外は発生しません。

## ISNORMAL

ISNORMAL は、呼び出される引数がゼロ、非正規数、無限大、または NaN でない場合に、'1'B を返します。そうでなければ、'0'B を返します。



►— ISNORMAL(x) —◄

**x** REAL FLOAT DECIMAL 式。

FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションは有効でなければなりません。

引数のフォーマットが何であれ、浮動小数点例外は発生しません。

## ISRL

$\text{ISRL}(x,n)$  は、論理的に  $x$  を右に  $n$  桁シフトし、左側にゼロを埋め込んだ結果を返します。

►►— $\text{ISRL}(x,n)$ —◄◄

$x$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$n$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が REAL FIXED BIN(p,0) であり、なおかつ、

- $x$  が SIGNED の場合、その結果は SIGNED REAL FIXED BIN(p,0) です。
- $x$  が UNSIGNED の場合、その結果は UNSIGNED REAL FIXED BIN(p,0) です。

それ以外の場合、 $x$  は SIGNED REAL FIXED BIN(p,0) に変換され、その結果は同じ属性を持ちます。

$n$  が負の場合、または  $n$  が M より大きい場合は、結果は定義されません。

$x$  が負でない場合は、 $\text{ISRL}(x,n)$  は  $\text{LOWER2}(x,n)$  と等しく、 $x$  が負の場合は、 $\text{ISRL}(x,n)$  は  $n=0$  でなければ正になります。

## 例

```
isrl(+6,1) /* produces 3 */
isrl(-6,1) /* produces 2147483645 */
```

## ISZERO

ISZERO は、呼び出される引数がゼロである場合に、'1'B を戻します。そうでなければ、'0'B を戻します。



►—ISZERO(*x*)—◄

**x** REAL FLOAT DECIMAL 式。

FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションは有効でなければなりません。

引数のフォーマットが何であれ、浮動小数点例外は発生しません。



## IUNSIGNED

IUNSIGNED( $x$ ) は、ビット・パターンを変更せずに  $x$  を符号なし整数値にキャストした結果を返します。



$x$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が整数でない (つまり位取り係数ゼロの REAL FIXED BIN でない) 場合、 $x$  は REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換されます。

IUNSIGNED( $x$ ) は、整数  $x$  に対して、 $x$  と同じビット・パターンを持つ値を返しますが、その値の属性は UNSIGNED FIXED BIN( $p$ ) になります。

$x$  が SIGNED の場合、 $p$  は次のように指定されます。

$\text{precision}(x) = 7, 15, 31$ 、または  $63$  の場合、 $p = \text{precision}(x) + 1$ 。そうでなければ、 $p = \text{precision}(x)$ 。

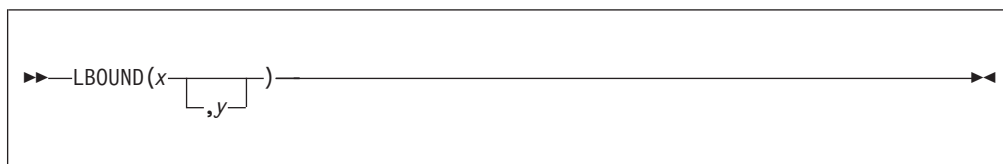
$x$  が UNSIGNED の場合、 $p$  は  $x$  の精度に等しい値になります。

### 例

IUNSIGNED('ff\_ff\_ff\_ff'xn) は、最大の UNSIGNED FIXED BIN(32) 値と同等です。

## LBOUND

LBOUND は、 $x$  の次元  $y$  の現行の下限を指定する FIXED BINARY 値で返します。



**x** 配列参照。  $x$  の次元数は、 $y$  よりも小さくはありません。

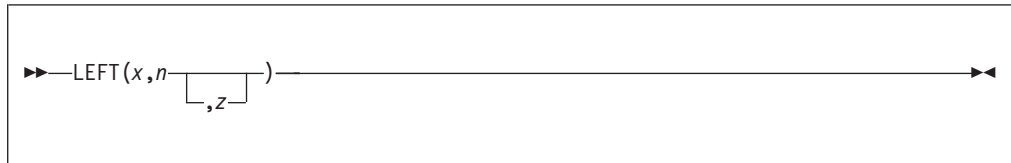
**y**  $x$  の特定の次元を指定する式。必要な場合には、 $y$  は FIXED BINARY(31,0) に変換されます。  $y$  は 1 以上でなければなりません。  $y$  が提供されない場合は、デフォルトを 1 にします。

配列が 1 次の場合にのみ、 $y$  を省略できます。

CMPAT(V3) コンパイラー・オプションでは、LBOUND は FIXED BIN(63) 値を返します。 CMPAT(V2) および CMPAT(LE) コンパイラー・オプションでは、LBOUND は、FIXED BIN(31) 値を返しますが、CMPAT(V1) コンパイラー・オプションでは、FIXED BIN(15) 値を返します。

## LEFT

LEFT は、string の左端に、長さ  $n$  の string  $x$  を挿入し、必要なら文字  $z$  で右側を埋めた結果の string を戻します。



- x** 式。  $x$  に、計算タイプ (必須) と文字タイプを保持している必要があります。そうでない場合は、 $x$  は、CHARACTER に変換されます。
- n** 式。  $n$  に、計算タイプ (必須) と文字タイプを保持している必要があります。 $n$  に属性 FIXED BINARY(31,0) がない場合は、 $n$  はこの属性に変換されます。
- z** 式。  $z$  が指定された場合、 $z$  は CHARACTER(1) NONVARYING タイプでなければなりません。

## 例

```

dcl Source char value('One Hundred SCIDS Marks');
dcl Target char(30);

Target = left (Source, length(Target), '*');
 /* 'One Hundred SCIDS Marks*****' */

```

$z$  が省略される場合は、埋め込み文字にblankが使われます。

## LENGTH

LENGTH は、 $x$  の現行の長さを指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。



**x**    ストリング式。  $x$  が 2 進数の場合はビット・ストリングに変換され、それ以外の場合は、文字ストリングに変換されます。

LENGTH 組み込み関数の例については、563 ページの『MAXLENGTH』を参照してください。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

---

## LINENO

LINENO は、 $x$  の現行の行数を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。



►—LINENO( $x$ )—◄

**x** ファイル参照。

ファイルは、オープン状態で、PRINT 属性を持っている必要があります。ファイルがオープンされていない場合、または PRINT 属性がない場合は、0 が返されます。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

## LOCATION

LOCATION は、メンバー  $x$  があるレベル -1 の構造体または共用体内での、 $x$  のバイト位置を指定する FIXED BINARY 値を返します。



### 省略形: LOC

**x** 構造体または共用体のメンバー名  $x$  が構造体または共用体のメンバーでない場合は、値 0 が戻されます。 $x$  に BIT 属性がある場合は、LOCATION によって戻される値は、 $x$  を含むバイト位置です。

$x$  は、添え字であってははいけません。

LOCATION は、制限付きの式で使用できます。LOC( $x$ ) が次のいずれかに設定するのに使われる場合は、 $y$  の前に  $x$  を宣言する必要があります。

- 定数エクステントを保持する必要がある変数  $y$  のエクステント
- 定数値を保持する必要がある変数  $y$  の値

CMPAT(V3) コンパイラー・オプションでは、LOCATION は FIXED BIN(63) 値を返します。その他のすべての CMPAT オプションでは、FIXED BIN(31) 値を返します。

## 例

```

dcl 1 Table static,
 2 Tab2loc fixed bin(15) nonasgn init(loc(Tab2)),
 /* location is 0; gets initialized to 8 */
 2 Tab3loc fixed bin(15) nonasgn init(loc(Tab3)),
 /* location is 2; gets initialized to 808 */
 2 Length fixed bin nonasgn init(loc(End)),
 /* location is 4 */
 2 * fixed bin,
 2 Tab2(20,20) fixed bin,
 /* location is 8 */
 2 Tab3(20,20) fixed bin,
 /* location is 808 */

 2 F2_loc fixed bin nonasgn init(loc(F2)),
 /* location is 1608; gets initialized to 1612 */
 2 F2_bitloc fixed bin nonasgn init(bitloc(F2)),
 /* location is 1610; gets initialized to 1 */

 2 Flags, /* location is 1612 */
 3 F1 bit(1),
 3 F2 bit(1), /* bitlocation is 1 */
 3 F3 bit(1),
 2 Bits(16) bit, /* location is 1613 */
 2 End char(0);

```

---

## LOG

LOG は、 $x$  の自然対数 (底  $e$  の対数) の近似を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。



►►—LOG( $x$ )—◄◄

**x** 式。  $x$  は、ゼロより大きくなければなりません。

## LOGGAMMA

LOGGAMMA は、 $x$  のガンマ関数の対数の近似を浮動小数点の値で戻します。 $x$  のガンマは、次の式で指定されます。

$$\text{gamma}(x) = \int_0^{\infty} (u^{x-1})(e^{-u})du$$

LOGGAMMA は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。

►►—LOGGAMMA( $x$ )———►◄


**x** 実数式。 $x$  の値は、ゼロより大きくなければなりません。



---

## LOG2

LOG2 は、 $x$  の 2 進対数 (底 2 の対数) の近似を実数の浮動小数点で戻します。戻り値は、 $x$  の基数と精度になります。




►—LOG2( $x$ )—◄

**x** 実数式。  $x$  の値は、ゼロより大きくなければなりません。

## LOG10

LOG10 は、 $x$  の常用対数 (底 10 の対数) の近似を実数の浮動小数点で戻します。  
戻り値は、 $x$  の基数と精度になります。



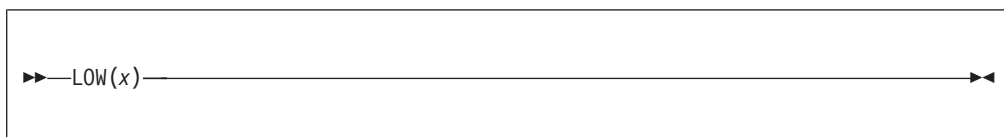
►—LOG10( $x$ )—◄

**x** 実数式。この値はゼロより大きくなければなりません。

---

## LOW

LOW は、長さ  $x$  の文字ストリングを戻します。各文字は、照合順序の最下位の文字 (16 進数の 00) です。



**x** 式。必要な場合には、 $x$  は正の実数固定小数点の 2 進数の値に変換されます。  
 $x = 0$  の場合は、結果はヌル文字ストリングです。

# LOWERCASE

LOWERCASE は、A から Z までの英字すべてを同等な小文字に変換した文字ストリングを戻します。

▶—LOWERCASE(*x*)—◀

**x** 式。必要に応じ、*x* は文字に変換されます。

LOWERCASE(*x*) は次のステートメントと同等です。

```
TRANSLATE(x,
 'abcdefghijklmnopqrstuvwxyz',
 'ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ')
```

## LOWER2

LOWER2( $x,n$ ) は、次の値を戻します。

$$\text{floor}(x * (2^{-n}))$$

LOWER2( $x,n$ ) は、次の値を戻します。

$$\text{floor}(x * (2^{-n}))$$

▶—LOWER2( $x,n$ )—▶

注: LOWER2( $x,n$ ) は、アセンブラー SRA( $x,n$ ) と同等です。

$x$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$n$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が SIGNED REAL FIXED BIN( $p,0$ ) の場合、その結果は同じ属性です。それ以外の場合、 $x$  は SIGNED REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換され、その結果は同じ属性を持ちます。

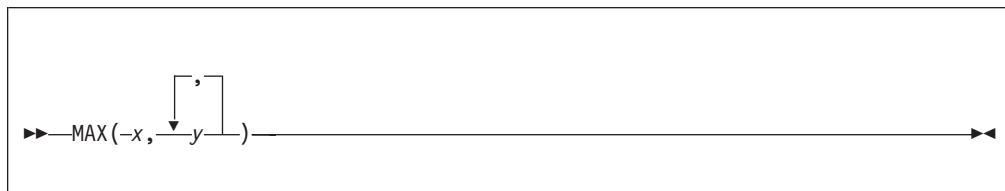
$n$  が負の場合、または  $n$  が M より大きい場合は、結果は定義されません。

### 例

```
lower2 (+6,1) /* Produces 3 */
lower2 (-6,1) /* Produces -3 */
lower2 (-7,1) /* Produces -4 */
```

## MAX

MAX は、複数の式の集合から最大値を戻します。



**x および y**  
式。

すべての引数は、実数でなければなりません。結果は、引数の共通の基数およびスケールを持つ実数です。

引数が次の精度を使用した固定小数点の引数である場合は、次のようになります。

$$(p1, q1), (p2, q2), \dots, (pn, qn)$$

結果の精度は、次の式によって指定されます。

$$(\min(N, \max(p1 - q1, p2 - q2, \dots, pn - qn) + \max(q1, q2, \dots, qn)), \max(q1, q2, \dots, qn))$$

この場合 N は、使用できる最大の桁数です。

引数が次の精度を使用した浮動小数点である場合は、次のようになります。

$$p1, p2, p3, \dots, pn$$

結果の精度は、次の式によって指定されます。

$$\max(p1, p2, p3, \dots, pn)$$

許可される引数の最大数は 64 です。

## MAXEXP

MAXEXP は、EXPONENT(x) が取ることができる最大値 FIXED BINARY(31,0) 値を戻します。



**x** 式。 *x* は、REAL 属性および FLOAT 属性をとる必要があります。

MAXEXP(x) は定数で、制限付き式に使用できます。

### 例 (Intel の値)

|                   |                                  |
|-------------------|----------------------------------|
| maxexp(x) = 00128 | for x float bin(p), p <= 21      |
| maxexp(x) = 01024 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| maxexp(x) = 16384 | for x float bin(p), 53 < p       |
| maxexp(x) = 00128 | for x float dec(p), p <= 6       |
| maxexp(x) = 01024 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| maxexp(x) = 16384 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (AIX の値)

|                  |                                  |
|------------------|----------------------------------|
| maxexp(x) = 0128 | for x float bin(p), p <= 21      |
| maxexp(x) = 1024 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| maxexp(x) = 1024 | for x float bin(p), 53 < p       |
| maxexp(x) = 0128 | for x float dec(p), p <= 6       |
| maxexp(x) = 1024 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| maxexp(x) = 1024 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の 16 進値)

|                |                                  |
|----------------|----------------------------------|
| maxexp(x) = 63 | for x float bin(p), p <= 21      |
| maxexp(x) = 63 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| maxexp(x) = 63 | for x float bin(p), 53 < p       |
| maxexp(x) = 63 | for x float dec(p), p <= 6       |
| maxexp(x) = 63 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| maxexp(x) = 63 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の IEEE 2 進浮動小数点数値)

|                   |                                  |
|-------------------|----------------------------------|
| maxexp(x) = 128   | for x float bin(p), p <= 21      |
| maxexp(x) = 1024  | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| maxexp(x) = 16384 | for x float bin(p), 53 < p       |
| maxexp(x) = 128   | for x float dec(p), p <= 6       |
| maxexp(x) = 1024  | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| maxexp(x) = 16384 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の IEEE 10 進浮動小数点数値)

|                  |                                 |
|------------------|---------------------------------|
| maxexp(x) = 97   | for x float dec(p), p <= 7      |
| maxexp(x) = 385  | for x float dec(p), 7 < p <= 16 |
| maxexp(x) = 6145 | for x float dec(p), 16 < p      |

## MAXLENGTH

MAXLENGTH は、ストリングの最大長を返します。

▶—MAXLENGTH(*x*)—▶

**x** 式。 *x* に、計算タイプ (必須) とストリング・タイプを保持している必要があります。そうでないと、文字に変換されます。

### 例

```

dcl x char(20);
dcl y char(20) varying;

x, y = '';

x = copy('*', length(x)); /* fills x with '*' */
y = copy('*', length(y)); /* leaves y unchanged */

x = copy('-', maxlength(x)); /* fills x with '-' */
y = copy('-', maxlength(y)); /* fills y with '-' */

```

*y* の最初の割り当ては、未変更のままになります。上記のコードの断片で使用される場合、*length(y)* は、ゼロを返す (*y* は VARYING であり、事前に '' とセットされている) ためです。

しかし、*y* への 2 番目の割り当てでは、*maxlength(y)* が 20 (*y* の宣言された長さ) を返すため、- 符号が 20 個入ります。



## MEMCONVERT

MEMCONVERT は、ソース・バッファ内のデータを、指定したソース・コード・ページから指定したターゲット・コード・ページに変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管し、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を戻します。

►►MEMCONVERT(—p—,—n—,—c—,—q—,—m—,—d—)——►◄

- p** ターゲット・バッファのアドレス。
- n** ターゲット・バッファの長さ。
- c** ターゲット・コード・ページ。
- q** ソース・バッファのアドレス。
- m** ソース・バッファの長さ。
- d** ソース・コード・ページ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

いずれかのバッファ長がゼロの場合は、結果はゼロです。

コード・ページは、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

コード・ページは、有効でサポートされているコード・ページを指定している必要があります。

## MEMCU12

MEMCU12 は、ソース・バッファ内のデータを、UTF-8 から UTF-16 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返します。

►►MEMCU12(—*p*—,—*n*—,—*q*—,—*m*—)————►◄

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**m** ソース・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

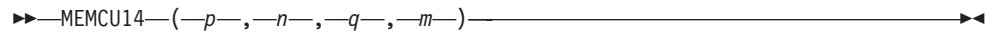
バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファが小さすぎる場合、または、ソース UTF-8 が無効な場合は、値 -1 が返されます。

z/OS の場合、この組み込み関数は ARCH レベル 7 以上が必要になります。

## MEMCU14

MEMCU14 は、ソース・バッファ内のデータを、UTF-8 から UTF-32 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返します。



MEMCU14(-p-, -n-, -q-, -m-)

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**m** ソース・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファが小さすぎる場合、または、ソース UTF-8 が無効な場合は、値 -1 が返されます。

z/OS の場合、この組み込み関数は ARCH レベル 7 以上が必要になります。

## MEMCU21

MEMCU21 は、ソース・バッファ内のデータを、UTF-16 から UTF-8 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返します。

►►MEMCU21(—*p*—,—*n*—,—*q*—,—*m*—)————►◄

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**m** ソース・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

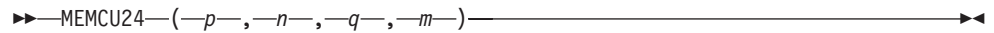
バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファが小さすぎる場合、または、ソース UTF-16 が無効な場合は、値 -1 が返されます。

z/OS の場合、この組み込み関数は ARCH レベル 7 以上が必要になります。

## MEMCU24

MEMCU24 は、ソース・バッファ内のデータを、UTF-16 から UTF-32 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返します。



MEMCU24(-p-, -n-, -q-, -m-)

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**m** ソース・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファが小さすぎる場合、または、ソース UTF-16 が無効な場合は、値 -1 が返されます。

z/OS の場合、この組み込み関数は ARCH レベル 7 以上が必要になります。

## MEMCU41

MEMCU41 は、ソース・バッファ内のデータを、UTF-32 から UTF-8 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返します。

►►MEMCU41(—*p*—,—*n*—,—*q*—,—*m*—)————►◄

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**m** ソース・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファが小さすぎる場合、または、ソース UTF-32 が無効な場合は、値 -1 が返されます。

z/OS の場合、この組み込み関数は ARCH レベル 7 以上が必要になります。

## MEMCU42

MEMCU42 は、ソース・バッファ内のデータを、UTF-32 から UTF-16 に変換し、ターゲット・バッファ内に結果を保管して、ターゲット・バッファに書き込まれるバイト数を指定する、スケールなしの REAL FIXED BINARY 値を返します。

►►MEMCU42(—*p*—,—*n*—,—*q*—,—*m*—)◄◄

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**m** ソース・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファが小さすぎる場合、または、ソース UTF-32 が無効な場合は、値 -1 が返されます。

z/OS の場合、この組み込み関数は ARCH レベル 7 以上が必要になります。

## MEMINDEX

MEMINDEX は、指定したサブストリングのバッファ内で開始位置を示すスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。

3 つの引数を使用すると、関数の構文は以下のようになります。

```
MEMINDEX(—p—,—n—,—x—)
```

**p** 検索されるバッファのアドレス。

**n** 検索されるバッファの長さ。

**x** 検索のターゲットとして使用するストリング式。

4 つの引数を使用すると、関数の構文は以下のようになります。

```
MEMINDEX(—p—,—n—,—q—,—m—)
```

**p** 検索される最初のバッファのアドレス。

**n** 検索される最初のバッファの長さ。

**q** 検索のターゲットとして使用する 2 番目のバッファのアドレス。

**m** 検索のターゲットとして使用する 2 番目のバッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

3 つの引数を使用する場合は、ターゲットのストリング式は、タイプ CHARACTER (PICTURE を含む)、GRAPHIC、または WIDECHAR を保持している必要があります。バッファ長は、そのストリング・タイプの単位の数として解釈されます。

4 つの引数を使用する場合は、バッファ長はバイト数を指定し、文字検索が行われます。

VARYING または VARYINGZ のストリング X およびストリング Y では、関数 MEMINDEX( ADDRDATA(X), LENGTH(X), Y ) は、INDEX( X, Y ) と同じ値を返します。

## 例

```
dc1 cb(128*1024) char(1);
dc1 wb(128*1024) widechar(1);
dc1 pos fixed bin(31);
/* 128K bytes searched for the character string 'test' */
pos = memindex(addr(cb), stg(cb), 'test');
/* 256K bytes searched for the string 'test' as widechar */
pos = memindex(addr(wb), stg(wb), wchar('<'));
```



## MEMSEARCH

MEMSEARCH は、指定のストリングにある任意の文字、グラフィック、またはワイド文字がバッファにある場合、そのバッファ内の (左側の) 最初の位置を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。

►—MEMSEACRH—(—*p*—,—*n*—,—*x*—)————►◄

**p** 検索されるバッファのアドレス。

**n** 検索されるバッファの長さ。

**x** ストリング式。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があります、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ストリング式 *x* は、タイプ CHARACTER (PICTURE を含む)、GRAPHIC、または WIDECHAR を保持している必要があります。バッファ長は、そのストリング・タイプの単位の数として解釈されます。

アドレス *p* および長さ *n* は、*x* に存在する任意の文字、グラフィック、ワイド文字を検索する「ストリング」を指定します。

バッファ長 *n* がゼロであるか、または *x* がヌル・ストリングである場合は、結果はゼロです。

バッファに *x* がない場合は、結果はゼロです。

### 例

```

dcl cb(128*1024) char(1);
dcl wb(128*1024) widechar(1);
dcl pos fixed bin(31);

/* 128K bytes searched from the left for a numeric */
pos = memsearch(addr(cb), stg(cb), '012345789');

/* 256K bytes searched from the left for a widechar '0' or '1' */
pos = memsearch(addr(wb), stg(wb), '0030_0031'wx);

```

## MEMSEARCHR

MEMSEARCHR は、指定のストリングにある任意の文字、グラフィック、またはワイド文字がバッファにある場合、そのバッファ内の（右側の）最初の位置を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。



**p** 検索されるバッファのアドレス。

**n** 検索されるバッファの長さ。

**x** ストリング式。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があります、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ストリング式  $x$  は、タイプ CHARACTER (PICTURE を含む)、GRAPHIC、または WIDECHAR を保持している必要があります。バッファ長は、そのストリング・タイプの単位の数として解釈されます。

アドレス  $p$  および長さ  $n$  は、 $x$  に存在する任意の文字、グラフィック、ワイド文字を検索する「ストリング」を指定します。

バッファ長  $n$  がゼロであるか、または  $x$  がヌル・ストリングである場合は、結果はゼロです。

バッファに  $x$  がない場合は、結果はゼロです。

## 例

```

dcl cb(128*1024) char(1);
dcl wb(128*1024) widechar(1);
dcl pos fixed bin(31);

/* 128K bytes searched from the right for a numeric */
pos = memsearchr(addr(cb), stg(cb), '012345789');

/* 256K bytes searched from the right for a widechar '0' or '1' */
pos = memsearchr(addr(wb), stg(wb), '0030_0031'wx);

```

## MEMVERIFY

MEMVERIFY は、指定したストリング内にはない 文字、グラフィック、またはワイド文字の (左側から) 最初のバッファーで位置を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。

►—MEMVERIFY—(—*p*—,—*n*—,—*x*—)——►◄

**p** 検索されるバッファーのアドレス。

**n** 検索されるバッファーの長さ。

**x** ストリング式。

バッファー長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファー長は、負数であってはなりません。

ストリング式 *x* は、タイプ CHARACTER (PICTURE を含む)、GRAPHIC、または WIDECHAR を保持している必要があります。バッファー長は、そのストリング・タイプの単位の数として解釈されます。

アドレス *p* および長さ *n* は、*x* に存在しない任意の文字、グラフィック、ワイド文字を検索する「ストリング」を指定します。

バッファー長 *n* がゼロであるか、または *x* がヌル・ストリングである場合は、結果はゼロです。

バッファー内のすべての文字、グラフィック、またはワイド文字が *x* に存在する場合は、結果はゼロです。

## 例

```

dcl cb(128*1024) char(1);
dcl wb(128*1024) widechar(1);
dcl pos fixed bin(31);

/* 128K bytes searched from the left for a non-numeric */
pos = memverify(addr(cb), stg(cb), '012345789');

/* 256K bytes searched from the left for the a non-blank widechar */
pos = memverify(addr(wb), stg(wb), '0020'wx);

```

## MEMVERIFYR

MEMVERIFYR は、指定したストリング内にはない 文字、グラフィック、またはワイド文字の (右側から) 最初のバッファーで位置を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を戻します。



**p** 検索されるバッファーのアドレス。

**n** 検索されるバッファーの長さ。

**x** ストリング式。

バッファー長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファー長は、負数であってはなりません。

ストリング式  $x$  は、タイプ CHARACTER (PICTURE を含む)、GRAPHIC、または WIDECHAR を保持している必要があります。バッファー長は、そのストリング・タイプの単位の数として解釈されます。

アドレス  $p$  および長さ  $n$  は、 $x$  に存在しない任意の文字、グラフィック、ワイド文字を検索する「ストリング」を指定します。

バッファー長  $n$  がゼロであるか、または  $x$  がヌル・ストリングである場合は、結果はゼロです。

バッファー内のすべての文字、グラフィック、またはワイド文字が  $x$  に存在する場合は、結果はゼロです。

## 例

```
dc1 cb(128*1024) char(1);
dc1 wb(128*1024) widechar(1);
dc1 pos fixed bin(31);

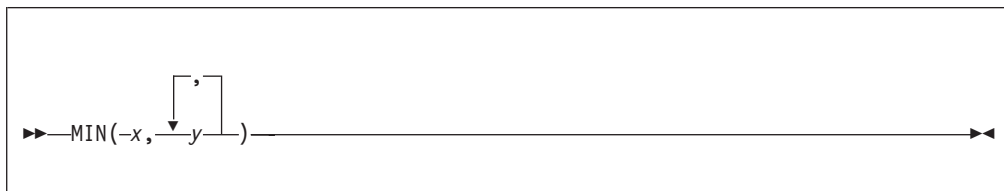
/* 128K bytes searched from the right for a non-numeric */
pos = memverify(addr(cb), stg(cb), '012345789');

/* 256K bytes searched from the right for the a non-blank widechar */
pos = memverify(addr(wb), stg(wb), '0020'wx);
```

---

**MIN**

MIN は、1 つ以上の式の集合から、最小値を戻します。



**x および y**  
式。

すべての引数は、実数でなければなりません。結果は、引数の共通の基数およびスケールを持つ実数です。

結果の精度は、561 ページの『MAX』の説明と同じです。

許可される引数の最大数は 64 です。

## MINEXP

MINEXP は、EXPONENT(x) が取ることができる最小値の FIXED BINARY(31,0) 値を返します。



**x** 式。 *x* は、REAL 属性および FLOAT 属性をとる必要があります。

MINEXP(x) は定数で、制限付き式に使用できます。

### 例 (Intel の値)

|                    |                                  |
|--------------------|----------------------------------|
| minexp(x) = -00125 | for x float bin(p), p <= 21      |
| minexp(x) = -01021 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| minexp(x) = -16831 | for x float bin(p), 53 < p       |
| minexp(x) = -00125 | for x float dec(p), p <= 6       |
| minexp(x) = -01021 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| minexp(x) = -16831 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (AIX の値)

|                   |                                  |
|-------------------|----------------------------------|
| minexp(x) = -0125 | for x float bin(p), p <= 21      |
| minexp(x) = -1021 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| minexp(x) = -0968 | for x float bin(p), 53 < p       |
| minexp(x) = -0125 | for x float dec(p), p <= 6       |
| minexp(x) = -1021 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| minexp(x) = -0968 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の 16 進値)

|                 |                                  |
|-----------------|----------------------------------|
| minexp(x) = -64 | for x float bin(p), p <= 21      |
| minexp(x) = -64 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| minexp(x) = -50 | for x float bin(p), 53 < p       |
| minexp(x) = -64 | for x float dec(p), p <= 6       |
| minexp(x) = -64 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| minexp(x) = -50 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の IEEE 2 進浮動小数点数値)

|                    |                                  |
|--------------------|----------------------------------|
| minexp(x) = -125   | for x float bin(p), p <= 21      |
| minexp(x) = -1021  | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| minexp(x) = -16381 | for x float bin(p), 53 < p       |
| minexp(x) = -125   | for x float dec(p), p <= 6       |
| minexp(x) = -1021  | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| minexp(x) = -16381 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の IEEE 10 進浮動小数点数値)

|                   |                                 |
|-------------------|---------------------------------|
| minexp(x) = -94   | for x float dec(p), p <= 7      |
| minexp(x) = -382  | for x float dec(p), 7 < p <= 16 |
| minexp(x) = -6142 | for x float dec(p), 16 < p      |

## MOD

MOD は、次を満たす負以外の最小値  $R$  を戻します。

$$(x - R)/y = n$$

$n$  は、整数値です。すなわち、 $R$  は  $y$  で割り切れるように、 $x$  から減算する負でない最小値です。

▶▶ MOD( $x,y$ ) ◀◀

**x** 実数式。

**y** 実数式。  $y = 0$  の場合は、ZERODIVIDE 条件が発生します。

結果  $R$  は、引数と共通の基数およびスケールを持つ実数です。結果が浮動小数点の場合は、精度は  $x$  および  $y$  の大きい方になります。結果が固定小数点の場合は、精度は次の式で指定されます。

$$(\min(n, p2 - q2 + \max(q1, q2)), \max(q1, q2))$$

( $p1, q1$ ) と ( $p2, q2$ ) は、それぞれ  $x$  と  $y$  の精度であり、 $n$  には、FIXED DECIMAL の場合は  $N$  が入り、FIXED BINARY の場合は  $M$  が入ります。

$x$  および  $y$  の位取り係数が異なる固定小数点の場合は、 $R$  が計算される前に、小さい位取り係数の引数が大きい位取り係数に変換されます。変換が失敗すると、結果は不定になります。

結果の属性が FIXED BIN であり、1 つ以上のオペランドに属性 UNSIGNED FIXED BIN がある場合、以下の条件の両方が真でない限り、結果は SIGNED 属性を持ちます。

- すべてのオペランドが UNSIGNED FIXED BIN である。
- RULES(ANS) コンパイラー・オペランドが有効である。

上記のいずれかの条件が true でない場合、UNSIGNED オペランドはそれぞれ SIGNED に変換されます。オペランドが大きすぎる場合は、変換によって以下が行われます。

- SIZE が有効である場合は SIZE 条件が発生します。
- SIZE が有効でない場合は負の値が生成されます。

次の例では、MOD 組み込み関数と REM 組み込み関数を対比しています。

REM 組み込み関数については、661 ページの『REM』を参照してください。

## 例

```
rem(+10, +8) = 2
mod(+10, +8) = 2
```

```
rem(+10, -8) = 2
mod(+10, -8) = 2
```

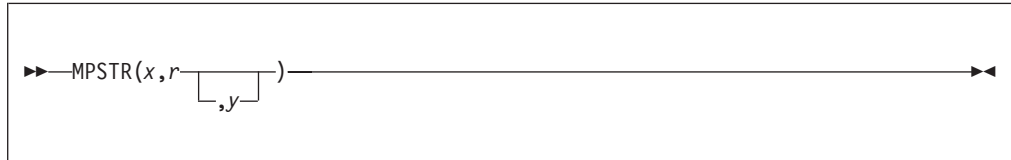
```
rem(-10, +8) = -2
mod(-10, +8) = 6

rem(-10, -8) = -2
mod(-10, -8) = 6
```



## MPSTR

MPSTR は、論理境界でストリングを切り捨て、混合文字ストリングを戻します。例えば、MPSTR は、2 バイト文字をバイト間では切り捨てません。戻されるストリングの長さは、式  $x$  の長さ、または  $y$  で指定された値と等しくなります。ストリングの処理は、式  $r$  で選択された規則によって次のように判別されます。



- x** 文字ストリングの結果が出る式。必要な場合には、 $x$  の値は文字に変換されます。
- r** 1 文字の結果が出る式。式は GRAPHIC であることはできません。必要な場合には、文字に変換されます。

式  $r$  は、ストリングの処理に使われる規則を指定します。 $r$  で使われる文字およびその規則を次に示します。

### V または v

混合ストリング  $x$  を検証し、混合ストリングを戻します。

### S または s

ヌル DBCS ストリングを除去して新しいストリングを作成し、混合ストリングを戻します。

V および S の両方が指定される場合は、順番が指定された順番に関係なく、V は S より優先されます。

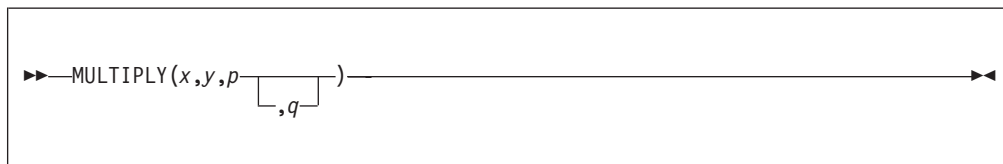
V を指定せずに S が指定された場合は、ストリング  $x$  は有効なストリングであると想定されます。ストリングが無効の場合は、結果は不定になります。

**注:** Intel および AIX では、パラメーター  $r$  は無視されます。

- y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。 $y$  が省略される場合は、長さはタイプ変換の規則によって決められます。 $y$  の値は、負であってははいけません。 $y = 0$  の場合は、結果はヌル文字ストリングです。 $y$  が  $x$  を入れるのに必要な長さより大きい場合は、結果はブランクで埋められます。 $y$  が  $x$  を入れるのに必要な長さより小さい場合は、結果は右から超過した文字を廃棄する (SBCS 文字の場合) か、必要な DBCS 文字 (2 バイト一組) を廃棄して切り捨てます。

## MULTIPLY

MULTIPLY は、 $x$  と  $y$  の積を  $p$  と  $q$  で指定された精度で戻します。結果の基数、スケール、およびモードは、PRECTYPE コンパイラー・オプションによって規則が変更されないかぎり、式の評価規則によって決まります。



**x および y**

式。

**p** 演算を通して維持する桁数を指定する制限付き式。

**q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。固定小数点の場合に、 $q$  が省略されると、位取り係数ゼロが想定されます。結果が浮動小数点の場合は、 $q$  は省略します。

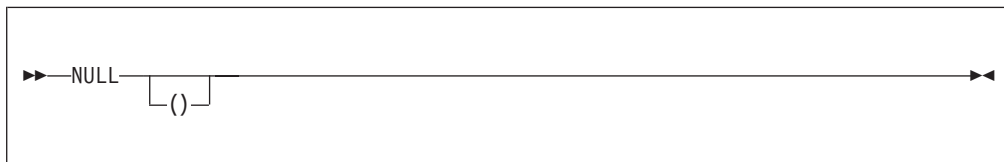
なお、FIXED DECIMAL に適用する際は、計算結果が指定した精度  $p$  にとって大き過ぎても最大インプリメンテーション値未満である場合は、以下のようになります。

- SIZE が使用不可の場合は、FIXEDOVERFLOW 条件は発生せず、結果は切り捨てられます。
- SIZE が使用可能な場合には、SIZE 条件が発生します。

なお、上記テキストは、デフォルトでないコンパイラー・オプション DECIMAL(FOFLONMULT) が有効な場合、偽になります。その場合、SIZE が使用不可で結果が大きすぎると、FIXEDOVERFLOW が発生します。

### NULL

NULL は、ヌル・ポインター値を戻します。ヌル・ポインター値は、変数の生成を識別しません。ヌル・ポインター値は、ハンドルに割り当てられ、ハンドルと比較されます。ヌル・ポインター値は、組み込み関数の値のオフセット変数への割り当てによって OFFSET に変換されます。



## OFFSET

OFFSET は、ポインター参照  $x$  から派生するオフセット値および区域  $y$  に関連したオフセット値を戻します。 $x$  がヌル・ポインター値の場合は、ヌル・オフセット値が戻されます。

▶—OFFSET—(— $x$ —,— $y$ —)——▶◀

**x** ポインター参照。  $x$  は、区域  $y$  内で基底付き変数の生成を識別するか、ヌル・ポインター値でなければなりません。

**y** 区域参照。

$x$  がエレメント参照の場合は、 $y$  は要素変数でなければなりません。

---

### OFFSETADD

OFFSETADD は、引数の合計を戻します。

▶—OFFSETADD(*x*,*y*)—▶

**x** 式。 *x* は、OFFSET として指定されなければなりません。

**y** 式。 *y* には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

## OFFSETDIFF

OFFSETDIFF は、引数間の算術差を表す FIXED BINARY(31,0) 値を返します。



▶—OFFSETDIFF(*x*,*y*)—▶

**x** および **y**

式。両方とも OFFSET として指定されなければなりません。

---

## OFFSETSUBTRACT

OFFSETSUBTRACT は、OFFSETADD( $x$ , $-y$ ) と同等です。



▶—OFFSETSUBTRACT( $x$ , $y$ )—▶

**x** 式。  $x$  は、OFFSET として指定されなければなりません。

**y** 式。  $y$  には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

## OFFSETVALUE

OFFSETVALUE は、 $x$  の変換された値であるオフセット値を戻します。



▶—OFFSETVALUE( $x$ )—◀

**x** 式。  $x$  には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。



---

**OMITTED**

OMITTED が含まれているプロシーチャーの呼び出しで、 $x$  という名前のパラメーターが省略される場合は、OMITTED は '1'B である BIT(1) 値を戻します。



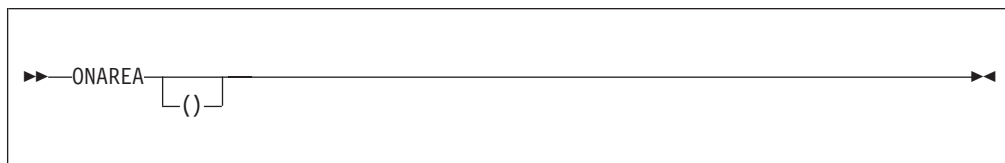
▶—OMITTED( $x$ )—▶

**x** BYADDR 属性付きのレベル -1 の添え字なしパラメーター。

**注:** この引数は、呼び出し側コードの対応する ENTRY 宣言で OPTIONAL として宣言する必要があります。

## ONAREA

ONAREA は、AREA 条件が発生する AREA 参照の名前である値を持つ文字ストリングを返します。参照に DBCS 名が含まれる場合、返されるストリングは混合文字ストリングです。この関数は、AREA 条件、あるいは AREA 条件の暗黙処置として発生した ERROR 条件または FINISH 条件の、ON ユニット (またはその動的派生物のいずれか) のコンテキスト内にあります。

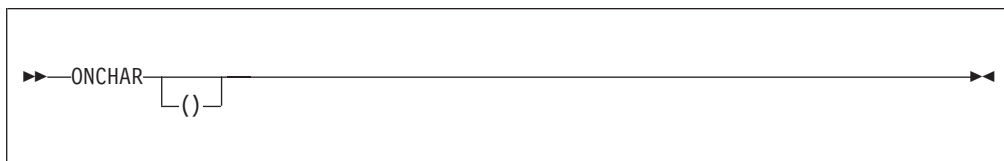


ONAREA 組み込み関数がコンテキスト外で使用された場合は、ヌル・ストリングが返されます。

AREA 参照が長すぎるか、複雑すぎる場合は、ヌル・ストリングが返されます。

## ONCHAR

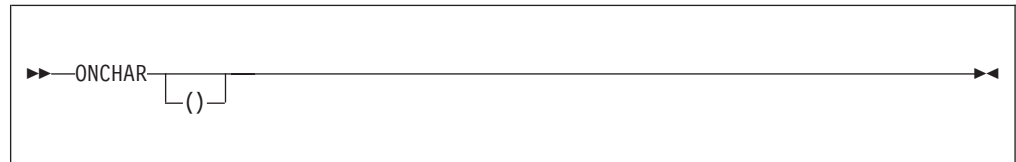
ONCHAR は、CONVERSION 条件が発生する原因となる文字を含む character(1) ストリングを返します。この関数は、CONVERSION 条件の ON ユニットの中か、CONVERSION 条件の暗黙処置として発生した ERROR 条件または FINISH 条件の ON ユニット (またはそれらの ON ユニットから動的に派生したもの) の中にあります。



ONCHAR 組み込み関数がコンテキスト以外で使われる場合は、ブランクが返されます。

## ONCHAR 疑似変数

ONCHAR 疑似変数は、ONCHAR 組み込み関数の現行値を設定します。疑似変数に割り当てられたエレメントの値は、長さ 1 の文字値に変換されます。再変換される時には、新しい文字が使われます (85 ページの『第 5 章 データ変換』の変換を参照してください)。

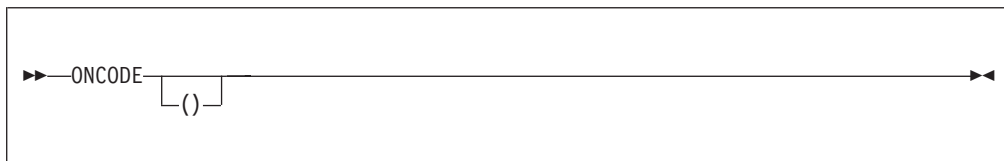


疑似変数は、コンテキスト以外では使用してはいけません。

## ONCODE

ONCODE 組み込み関数は、最後の条件の原因によって決まる固定小数点の 2 進数の値を提供します。ONCODE は、特定の条件、例えば ERROR 条件を発生するさまざまな状況を区別するのに使用できます。検出された条件およびエラーに対応するコードについては、特定の条件を参照してください。

ONCODE は、条件コードである実数の固定小数点の 2 進数の値を戻します。ONCODE は、ON ユニットまたはその動的子孫のコンテキストにあります。条件コードのすべての定義は「メッセージおよびコード」に記載されています。

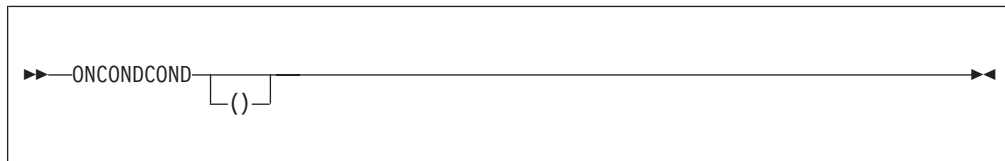


コンテキスト以外で ONCODE が使われている場合は、ゼロが戻されます。

## ONCONDCOND

ONCONDCOND は、値が CONDITION 条件が発生する条件の名前である不変文字列として返します。名前が DBCS 名の場合は、ONCONDCOND は混合文字列として返されます。ONCONDCOND は、次の状況のコンテキストにあります。

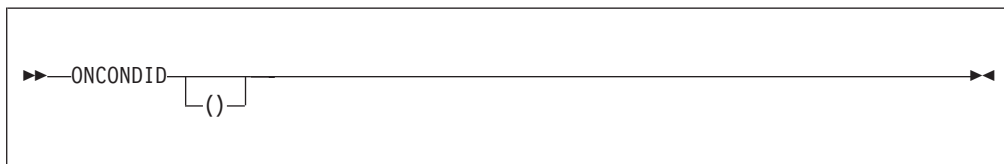
- CONDITION ON ユニットまたはそれらから動的に派生したもの
- CONDITION 条件をトラップする ANYCONDITION ON ユニット、またはこのような ON ユニットから動的に派生したもの



コンテキスト以外で ONCONDCOND が使われている場合は、ヌル・文字列が返されます。

## ONCONDID

ONCONDID (ON 条件 ID の省略形) は、ON ユニットでハンドルされている条件を識別する FIXED BINARY(31,0) 値を返します。ONCODE は、ON ユニットまたはそれらから動的に派生したものの 1 つのコンテキストにあります。



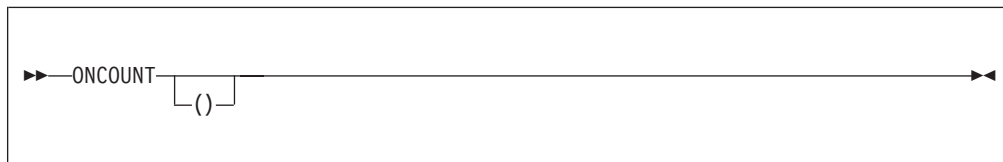
ONCONDID によって戻される値は、次の DECLARE ステートメントで指定されます。

```
declare (condid_area value(1),
 condid_attention value(2),
 condid_condition value(3),
 condid_conversion value(4),
 condid_endfile value(5),
 condid_endpage value(6),
 condid_error value(7),
 condid_finish value(8),
 condid_fixedoverflow value(9),
 condid_invalidop value(10),
 condid_key value(11),
 condid_name value(12),
 condid_overflow value(13),
 condid_record value(14),
 condid_size value(15),
 condid_storage value(16),
 condid_stringrange value(17),
 condid_stringsize value(18),
 condid_subscriptrange value(19),
 condid_transmit value(20),
 condid_undefinedfile value(21),
 condid_underflow value(22),
 condid_zerodivide value(23)
) fixed bin(31);
```

コンテキスト以外で ONCONDID が使われている場合は、ゼロが戻されます。

## ONCOUNT

ONCOUNT は、ON ユニットが入力されたときに、依然としてハンドルされる条件の数を指定するスケールのない FIXED BINARY 値を返します（385 ページの『複数条件』を参照）。ONCOUNT は、ON ユニットまたは ON ユニットから動的に派生したものの中にあります。



コンテキスト以外で ONCOUNT が使われている場合は、ゼロが返されます。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、返される結果の精度が決まります。

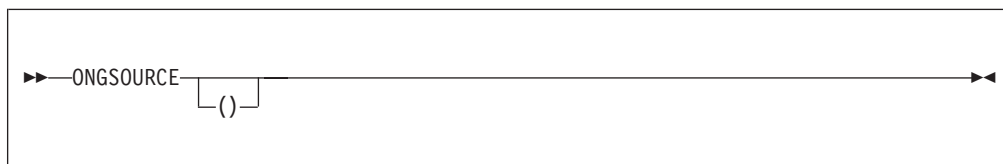


Diagram illustrating a file structure. A horizontal line represents the file. On the left, a double arrow points to the text "ONFILE". Below "ONFILE", a bracket indicates a range, with the text "()" below it. On the right, a double arrow points away from the line.

596 Enterprise PL/I for z/OS: Enterprise PL/I 言語解説書

## ONGSOURCE

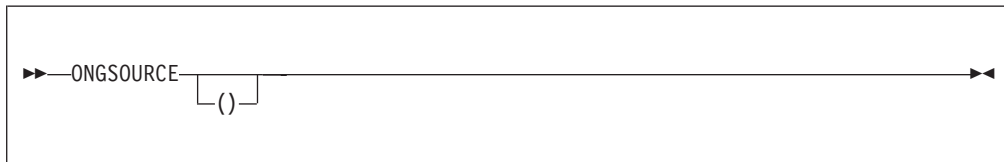
ONGSOURCE は、CONVERSION 条件が発生する原因となる DBCS 文字を含む漢字ストリングを戻します。また、この関数は、CONVERSION 条件か、CONVERSION 条件の暗黙処置として発生した ERROR 条件または FINISH 条件の ON ユニット (またはそれらから動的に派生したもの) の中にあります。



ONGSOURCE 組み込み関数がコンテキスト以外で使われる場合は、ヌル GRAPHIC ストリングが戻されます。

## ONGSOURCE 疑似変数

ONGSOURCE 疑似変数は、ONGSOURCE 組み込み関数の現行値を設定します。疑似変数に割り当てられたエレメントの値は、グラフィックに変換されます。再変換されるときには、このストリングが使われます。



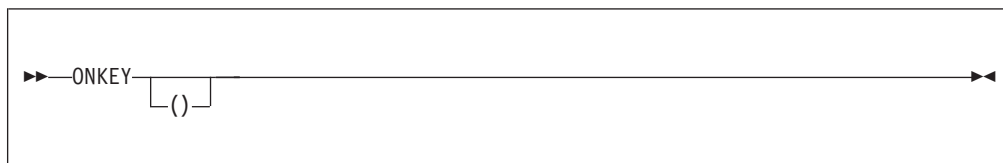
疑似変数は、コンテキスト以外では使用してはいけません。

## ONKEY

ONKEY は、値が入出力条件が発生するレコードのキーである文字STRINGを戻します。索引付きファイルの場合に、キーが GRAPHIC の場合は、STRINGは混合文字STRINGとして戻されます。ONKEY は、次のコンテキストにあります。

- ON ユニットまたはその動的子孫
- 入出力条件 (ENDFILE 以外)
- 入出力条件の暗黙処置として発生した ERROR 条件または FINISH 条件

ONKEY は、条件が発生するステートメントで KEY オプション、KEYTO オプション、または KEYFROM オプションが指定されていない場合でも、必ず、KEYED ファイルでの演算に設定されます。



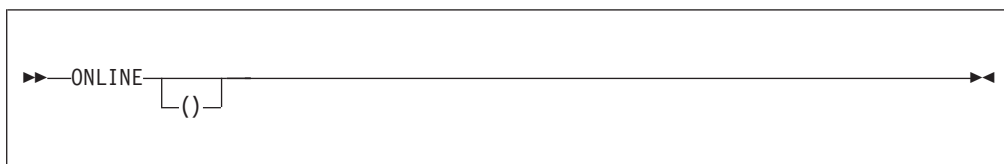
ONKEY の指定結果を次に示します。

- 入出力条件 (ENDFILE 以外) の場合、または、ERROR 条件か FINISH 条件の暗黙処置として発生したこれらの条件の場合は、結果はエラーが発生する入出力ステートメントで記録されたキーの値です。
- 相対データ・セットの場合は、結果は相対レコード数の文字STRING表示です。キーが間違えて指定された場合は、結果はソース・キーの最後の 8 文字です。ソース・キーが 8 文字より小さい場合は、8 文字になるように右側がブランクで埋まります。キーが正しく指定された場合は、文字STRINGは、必要ならば、左側がブランクで埋められた文字フォーマットの相対レコード数で構成されます。
- 更新済みレコードのキーが入力レコードのキーと異なるときに、索引付きデータ・セットに更新済みレコードを書き込む REWRITE ステートメントの場合は、結果は入力レコードの組み込みキーの値です。

コンテキスト以外で ONKEY が使われている場合は、ヌル・STRINGが戻されます。

### ONLINE

ONLINE は、条件が発生したソースの行番号である FIXED BIN(31) 値を返します。



ソース・プログラムは、GONUMBER オプションを指定してコンパイルされている必要があり、Windows では /debug オプションでリンクされている必要があります。

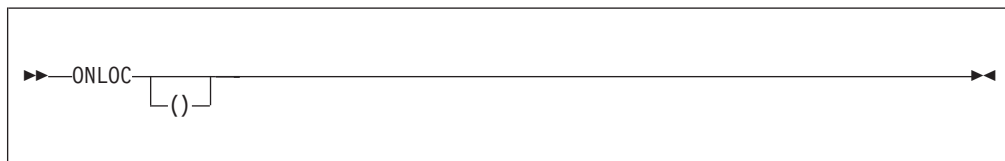
コンテキスト以外で ONLINE が使われている場合は、ゼロの値が戻されます。

## ONLOC

ONLOC は、値が条件が発生するプロシージャの現行呼び出しに使われるエンタリー・ポイントの名前である文字ストリングを戻します。

ONLOC は、CALL ステートメントまたは GOTO ステートメントに名前が表示されていても、常に複数のラベル指定の左端の名前を戻します。

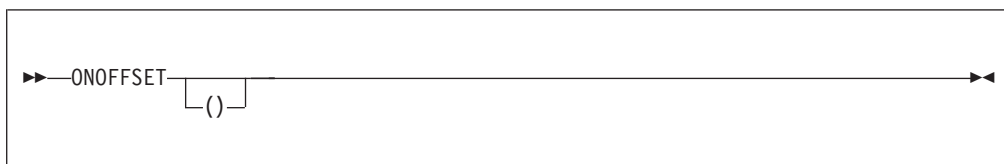
名前が DBCS 名の場合は、ONLOC は混合文字ストリングとして戻されます。  
ONLOC は、ON ユニットまたはその動的子孫のコンテキストにあります。



コンテキスト以外で ONLOC が使われている場合は、ヌル・ストリングが戻されます。

## ONOFFSET

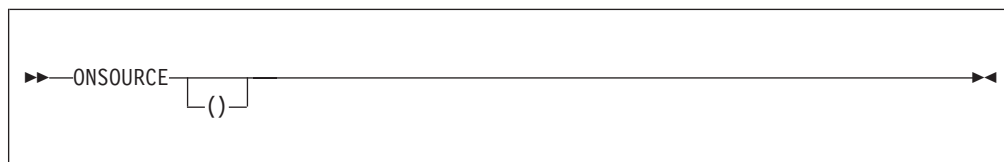
ONOFFSET は、条件が発生したユーザー・プロシージャの始め (または BEGIN ブロック) からのオフセットである FIXED BIN(31) 値を戻します。



コンテキスト以外で ONOFFSET が使われている場合は、ゼロの値が戻されます。

# ONSOURCE

ONSOURCE は、値が **CONVERSION** 条件が発生したときに処理中のフィールドの内容である文字ストリングを戻します。また、この関数は、**CONVERSION** 条件か、**CONVERSION** 条件の暗黙処置として発生した **ERROR** 条件または **FINISH** 条件の **ON** ユニット (またはそれらから動的に派生したもの) の中にあります。



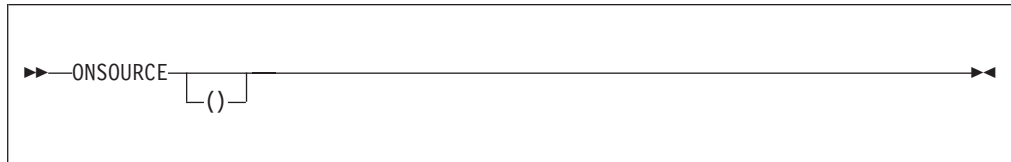
コンテキスト以外で **ONSOURCE** が使われている場合は、ヌル・ストリングが戻されます。

失敗した変換の中のソースが **COMPLEX** 値である場合、**ONSOURCE()** はその値の **REAL** 部分または **IMAG** 部分のみを表示します。



## ONSOURCE 疑似変数

ONSOURCE 疑似変数は、ONSOURCE 組み込み関数の現行値を設定します。疑似変数に割り当てられたエレメントの値は、文字ストリングに変換されます。また、必要な場合には、CONVERSION 条件が発生したフィールドの長さと一致するように、右側がブランクで埋められるか切り捨てられます。再変換されるときには、このストリングが使われます。



変換が再試行されるときは、疑似変数に割り当てられたストリングは、単一データ項目として処理されます。このため、エラーの訂正処理は、GET LIST ステートメントまたは GET DATA ステートメントの実行時に変換が発生するときに、複数のデータ項目を含むストリングを割り当てることはできません。ストリングにブランクまたはコンマがあると、CONVERSION が再発生します。

疑似変数は、コンテキスト以外では使用してはいけません。

ONSOURCE が 2 進定数でない場合は、ONSOURCE 疑似変数を 1 に設定してはなりません。例えば、ONSOURCE() が 'ERR' である場合、ONSOURCE() を '0'B に設定してはなりません。

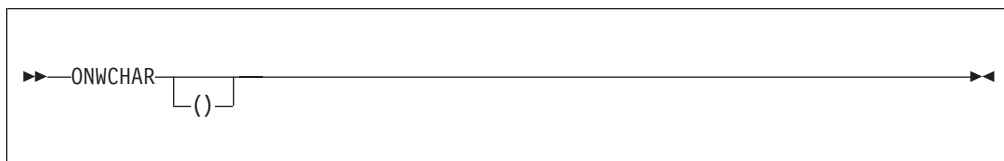
## ONSUBCODE

ONSUBCODE は、発生した入出力エラーに関する詳細を提供する FIXED BINARY(31,0) を戻します。これは、メッセージ IBM0236I および IBM0265I のために文書化された SUBCODE1 値に対応します。これらの値の定義は「メッセージおよびコード」に記載されています。

▶▶—ONSUBCODE()—▶▶

## ONWCHAR

ONWCHAR は、CONVERSION 条件が発生する原因となるワイド文字を含む widechar(1) スtringを戻します。この関数は、CONVERSION 条件の ON ユニットのなか、CONVERSION 条件の暗黙処置として発生した ERROR 条件または FINISH 条件の ON ユニット (またはそれらの ON ユニットから動的に派生したもの) の中にあります。



ONWCHAR 組み込み関数がコンテキスト以外で使われる場合は、ワイド文字ブランクが戻されます。

## ONWCHAR 疑似変数

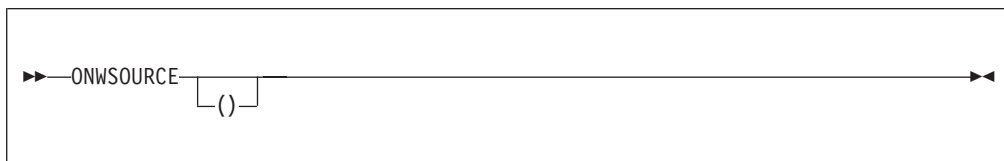
ONWCHAR 疑似変数は、ONWCHAR 組み込み関数の現行値を設定します。疑似変数に割り当てられたエレメントの値は、長さ 1 のワイド文字値に変換されます。再変換されるときには、新しいワイド文字が使われます (85 ページの『第 5 章 データ変換』の変換を参照してください)。



疑似変数は、コンテキスト以外では使用してはいけません。

## ONWSOURCE

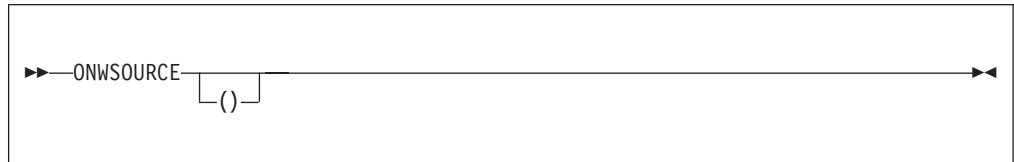
ONWSOURCE は、値が **CONVERSION** 条件が発生したときに処理中のフィールドの内容であるワイド文字ストリングを戻します。また、この関数は、**CONVERSION** 条件か、**CONVERSION** 条件の暗黙処置として発生した **ERROR** 条件または **FINISH** 条件の **ON** ユニット (またはそれらから動的に派生したもの) の中にあります。



コンテキスト以外で **ONWSOURCE** が使われている場合は、ヌル・ストリングが戻されます。

## ONWSOURCE 疑似変数

ONWSOURCE 疑似変数は、ONWSOURCE 組み込み関数の現行値を設定します。疑似変数に割り当てられたエレメントの値は、ワイド文字ストリングに変換されます。また、必要な場合には、CONVERSION 条件が発生したフィールドの長さと同じするように、右側がワイド文字ブランクで埋められるか切り捨てられます。再変換されるときには、このストリングが使われます。



変換が再試行されるときは、疑似変数に割り当てられたストリングは、単一データ項目として処理されます。このため、エラーの訂正処理は、GET LIST ステートメントまたは GET DATA ステートメントの実行時に変換が発生するときに、複数のデータ項目を含むストリングを割り当てることはできません。ストリングにブランクまたはコンマがあると、CONVERSION が再発生します。

疑似変数は、コンテキスト以外では使用してはいけません。

---

## ORDINALNAME

ORDINALNAME は、序数  $x$  に関連したセットのメンバーである不変文字ストリングを返します。



▶—ORDINALNAME( $x$ )—▶

**x** 参照。この関数には、序数タイプを保持している必要があります。

ORDINAL を計算式内で使用してはなりません。また、文字へ変換してもなりません。しかし、ORDINALNAME によって、ORDINAL に表示可能な値を取得することが可能なので、デバッグにおいて非常に役立ちます。

## ORDINALPRED

ORDINALPRED は、序数  $x$  が取ることができる 2 番目に低い値である序数を返します。



►—ORDINALPRED( $x$ )—◄

**x** 参照。この関数には、序数タイプを保持している必要があります。


戻される序数には、序数  $x$  と同じタイプを保持している必要があります。



---

## ORDINALSUCC

ORDINALSUCC は、序数  $x$  が取ることができる 2 番目に高い値である序数を返します。



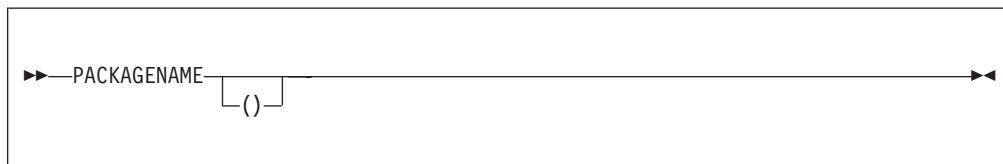
►►—ORDINALSUCC( $x$ )—◄◄

**x** 参照。この関数には、序数タイプを保持している必要があります。

戻される序数には、序数  $x$  と同じタイプを保持している必要があります。

## PACKAGENAME

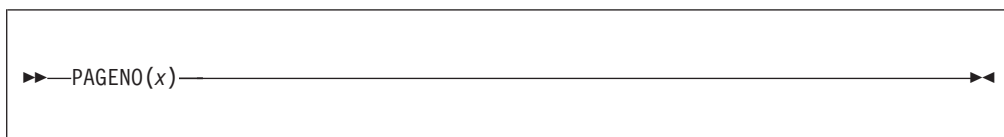
PACKAGENAME は、呼び出されたパッケージ名を含む不変文字ストリングを返します。現行のコンパイル単位にパッケージがない場合は、PACKAGENAME は最外部のプロシージャの名前を返します。



---

## PAGENO

PAGENO は、ファイル  $x$  に関連した現行ページ番号であるスケールのない FIXED BINARY31 値を返します。



**x** ファイル参照。ファイルは、オープン状態で、PRINT 属性を持っている必要があります。

ファイルが PRINT ファイルでない場合は、ERROR 条件が発生します。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

## PICSPEC

PICSPEC 組み込み関数は、CHARACTER から PICTURE タイプへデータをキャストします。

►► PICSPEC (—*x*—, —*y*—) ►►

**x** 式。

**y** ピクチャー指定。

式 *x* は、コンパイル時に既知となる長さの CHARACTER NONVARYING でなければなりません。

*y* は、最初の引数と同じ長さの外部表記を持つ、有効な PICTURE を指定する文字リテラルでなければなりません。

結果は、2 番目の引数によって指定された PICTURE タイプになります。

EDIT 組み込み関数とは異なり、変換は行われず、最初の引数がピクチャーに有効なデータを保持しているかを調べるチェックも行われません。

UNSPEC 組み込み関数のように、データの「タイプ」だけが変更されます。

そのため、例えば PICSPEC(*x*, '(5)9') では、*x* は CHAR(5) でなければなりません (ピクチャー指定 '(5)9' の長さは 4 文字であるものの、外部表記では 5 つの文字が必要なため)、*x* は実際に 5 つの数字を含んでいるかどうかチェックされることはありません。

$N = N + \text{PICSPEC}(X, '(5)9')$  という記述によって *x* が CHAR から PIC'(5)9' に変換されることはありませんが (この変換ではライブラリー呼び出しが必要)、*x* の内容は、PIC'(5)9' であると宣言されたかのように扱われます。

## PLACES

PLACES は、浮動小数点の式  $x$  を表すのに使われるモデル精度である FIXED BINARY(31,0) 値を戻します。

►—PLACES( $x$ )—◄◄

**x** 式。  $x$  は、REAL FLOAT として宣言しなければなりません。

PLACES( $x$ ) は定数で、制限付き式に使用できます。

### 例 (Intel の値)

|                    |                                  |
|--------------------|----------------------------------|
| places( $x$ ) = 24 | for x float bin(p), p <= 21      |
| places( $x$ ) = 53 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| places( $x$ ) = 64 | for x float bin(p), 53 < p       |
| places( $x$ ) = 24 | for x float dec(p), p <= 6       |
| places( $x$ ) = 53 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| places( $x$ ) = 64 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (AIX の値)

|                     |                                  |
|---------------------|----------------------------------|
| places( $x$ ) = 024 | for x float bin(p), p <= 21      |
| places( $x$ ) = 053 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| places( $x$ ) = 106 | for x float bin(p), 53 < p       |
| places( $x$ ) = 024 | for x float dec(p), p <= 6       |
| places( $x$ ) = 053 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| places( $x$ ) = 106 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の 16 進値)

|                    |                                  |
|--------------------|----------------------------------|
| places( $x$ ) = 6  | for x float bin(p), p <= 21      |
| places( $x$ ) = 14 | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| places( $x$ ) = 28 | for x float bin(p), 53 < p       |
| places( $x$ ) = 6  | for x float dec(p), p <= 6       |
| places( $x$ ) = 14 | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| places( $x$ ) = 28 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の IEEE 2 進浮動小数点数値)

|                     |                                  |
|---------------------|----------------------------------|
| places( $x$ ) = 24  | for x float bin(p), p <= 21      |
| places( $x$ ) = 53  | for x float bin(p), 21 < p <= 53 |
| places( $x$ ) = 113 | for x float bin(p), 53 < p       |
| places( $x$ ) = 24  | for x float dec(p), p <= 6       |
| places( $x$ ) = 53  | for x float dec(p), 6 < p <= 16  |
| places( $x$ ) = 113 | for x float dec(p), 16 < p       |

### 例 (z/OS の IEEE 10 進浮動小数点数値)

|                    |                                 |
|--------------------|---------------------------------|
| places( $x$ ) = 7  | for x float dec(p), p <= 7      |
| places( $x$ ) = 16 | for x float dec(p), 7 < p <= 16 |
| places( $x$ ) = 34 | for x float dec(p), 16 < p      |

## PLIASCII

PLIASCII は、位置  $y$  にある  $Z$  ストレージの単位 (バイト) を位置  $x$  で EBCDIC から ASCII に変換します。位置  $x$  および  $y$  にあるストレージは、同じ位置を指定しない限りオーバーラップしません。

►►—PLIASCII( $x,y,z$ )———◄◄

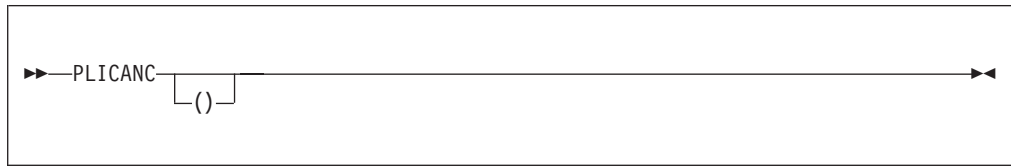
### $x$ および $y$

タイプ POINTER または OFFSET を持つ式。タイプが OFFSET の場合は、式は、AREA 属性によって宣言される OFFSET 変数でなければなりません。

$z$  FIXED BIN(31,0) に変換される計算タイプによる式。

### PLICANC

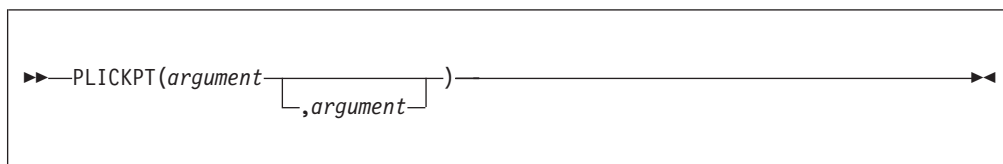
この組み込みサブルーチンを使って、自動再始動機能を取り消すことができます。



PLICANC の使用に関する情報については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLICKPT

この組み込みサブルーチンを使って、実行時再始動用チェックポイントを使用することができます。



PLICKPT の使用に関する情報については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。



---

## PLDELETE

この組み込みサブルーチンは、ハンドル  $x$  に関連したストレージを解放します。



▶▶—PLDELETE( $x$ )——▶▶

**x**   ハンドル式。

PLDELETE( $x$ ) は、ハンドルに関連したストレージを解放するには最適な方法です。このストレージは、通常、NEW タイプ付き関数によって取得されます。

CALL PLDELETE( $x$ ) は、CALL PLIFREE(PTRVALUE( $x$ )) と同等です。

## PLIDUMP

このサブルーチンにより、プログラムで使われるストレージの選択部分の定様式ダンプを獲得することができます。



▶▶—PLIDUMP(*argument*—  
                  └─, *argument*—┘)—▶▶

The diagram shows the function signature PLIDUMP(argument, argument) enclosed in a rectangular box. The first argument is underlined, and the second argument is enclosed in a bracket. The signature is flanked by double arrows pointing outwards.

PLIDUMP の使用に関する情報については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLIEBCDIC

PLIEBCDIC は、位置  $y$  にある  $Z$  ストレージの単位 (バイト) を位置  $x$  で ASCII から EBCDIC に変換します。位置  $x$  および  $y$  にあるストレージは、同じ位置を指定しない限りオーバーラップしません。

Diagram illustrating the function signature:  $\text{PLIEBCDIC}(x, y, z)$ . The signature is enclosed in a box with a double arrow pointing right at the start and a double arrow pointing left at the end.

### $x$ および $y$

タイプ `POINTER` または `OFFSET` を持つ式。タイプが `OFFSET` の場合は、式は、`AREA` 属性によって宣言される `OFFSET` 変数でなければなりません。

$z$  `FIXED BIN(31,0)` に変換される計算タイプによる式。

## PLIFILL

この組み込みサブルーチンは、バイト  $y$  の  $z$  コピーを変換、埋め込み、または切り捨てを行わずに位置  $x$  に移動します。

▶—PLIFILL( $x,y,z$ )—◀

- x** 式。  $x$  は、POINTER または OFFSET として宣言されなければなりません。  $x$  が OFFSET の場合は、 $x$  を AREA 属性で宣言する必要があります。
- y** CHARACTER(1) NONVARYING として宣言されなければなりません。
- z** FIXED BINARY(31,0) に変換される式。


## 例

```
dcl 1 Str1,
 2 B fixed bin(31),
 2 C pointer,
 2 * union,
 3 D char(4),
 3 E fixed bin(31),
 3 *,
 4 * char(3),
 4 F fixed bin(8) unsigned,
 2 * char(0)
 initial call plifill(addr(Str1), '00'x, stg(Str1));
```

---

## PLIFREE

この組み込みサブルーチンは、ALLOCATE 組み込み関数を使用して割り当てられたポインター  $p$  に関連したヒープ・ストレージを解放します。



```
▶▶—PLIFREE(p)————▶◀
```

**p**   ロケータ式。

PLIFREE は、ALLOCATE (ALLOC) の反対です。

## PLIMOVE

この組み込みサブルーチンは、位置  $y$  の  $z$  ストレージの単位 (バイト) を変換、埋め込み、または切り捨てを行わずに位置  $x$  に移動します。 PLIOVER 組み込みサブルーチンと異なり、位置  $x$  および  $y$  でのストレージは固有であると仮定されます。ストレージがオーバーラップする場合は、予期しない結果が発生することがあります。

▶—PLIMOVE( $x,y,z$ )—◀

### x および y

POINTER または OFFSET として宣言された式。タイプが OFFSET の場合は、 $x$  または  $y$  を AREA 属性によって宣言する必要があります。

### z 式。 $z$ には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

## 例

```

dcl 1 Str1,
 2 B fixed bin(31),
 2 C pointer,
 2 * union,
 3 D char(4),
 3 E fixed bin(31),
 3 *,
 4 * char(3),
 4 F fixed bin(8) unsigned,
 2 * char(0);
dcl 1 Template nonasn static,
 2 * fixed bin(31) init(200),
 2 * pointer init(null()),
 2 * char(4) init(''),
 2 * char(0);

call plimove(addr(Str1), addr(Template), stg(Str1));

```

## PLIOVER

この組み込みサブルーチンは、位置  $y$  の  $z$  ストレージの単位 (バイト) を変換、埋め込み、または切り捨てを行わずに位置  $x$  に移動します。 PLIMOVE 組み込みサブルーチンと異なり、位置  $x$  および  $y$  でのストレージはオーバーラップ可能です。



▶▶—PLIOVER( $x,y,z$ )—◀◀

### $x$ および $y$

POINTER または OFFSET として宣言された式。タイプが OFFSET の場合は、 $x$  または  $y$  を AREA 属性によって宣言する必要があります。

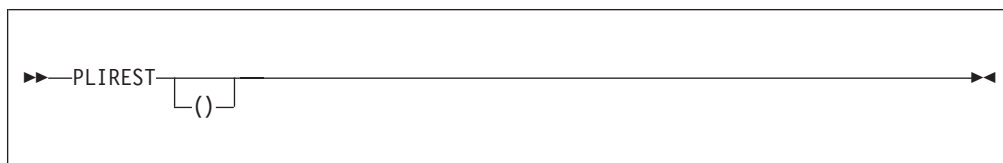
### $z$ 式。

$z$  には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

PLIOVER の使用法は、 $x$  および  $y$  のストレージをオーバーラップできることを除き、PLIMOVE と同じです (625 ページの『PLIMOVE』を参照)。

## PLIREST

この組み込みサブルーチンを使って、プログラム実行を再開することができます。



PLIREST の使用に関する情報については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。



## PLIRETC

この組み込みサブルーチンにより、呼び出されたこの PL/I プログラムまたは PLIRETV 組み込み関数を介した別の PL/I プロシージャで調べることができる、戻りコードを常に設定できます。

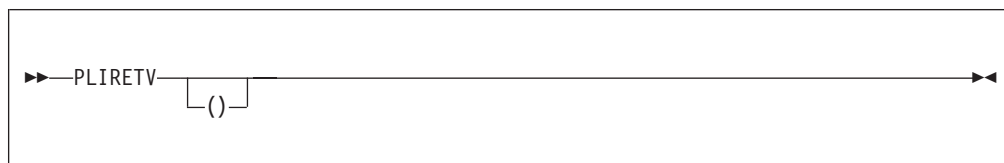


►►—PLIRETC(x)—◄◄

**x**    FIXED BINARY(31,0) 戻りコードを指定する式。

## PLIRETV

PLIRETV は、PL/I の戻りコードである FIXED BINARY(31,0) 値を返します。



PL/I の戻りコードの値は、CALL PLIRETC ステートメントで指定された最新の値です。

►► PLISAXA( $e, p, x, n$   $\lfloor c \rfloor$ ) ◀◀

- 詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLISAXB

この組み込みサブルーチンを使用すると、ファイル内にある XML 文書に対し、SAX フォーマットの構文解析を実行できます。

▶▶—PLISAXB(*e*,*p*,*x*  
                  └─┬─┘  
                  *c*)——▶▶

- e** イベント構造体
- p** 構文解析イベントに戻されるポインター値または「トークン」
- x** 入力ファイルを指定する文字ストリング式
- c** その XML のコード・ページの名称を指定する数値表現

詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLISAXC

この組み込みサブルーチンを使用すると、プログラムの 1 つ以上のバッファ内にある XML 文書に対し、SAX フォーマットの構文解析を実行できます。

```
►►—PLISAXC(e,p,x,n
 └─┬─┘
 c)—◄◄
```

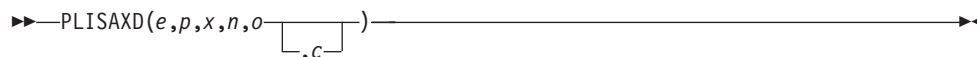
- e** イベント構造体
- p** 構文解析イベントに戻されるポインター値または「トークン」
- x** XML 文書があるバッファのアドレス
- n** そのバッファにあるデータのバイト数
- c** その XML 文書のコード・ページを指定する数値表現

PLISAXC は、z/OS XML System Services パーサーを使用しており、z/OS でのみサポートされます。

詳細については、「Enterprise PL/I for z/OS プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLISAXD

PLISAXD 組み込みサブルーチンは、XML 文書の XML 妥当性検査による SAX スタイル構文解析を提供します。



```
PLISAXD(e, p, x, n, o, c)
```

- e** イベント構造体
- p** 構文解析イベントに戻されるポインター値または「トークン」
- x** XML 文書があるバッファのアドレス
- n** そのバッファにあるデータのバイト数
- o** Optimized Schema Representation (OSR) を含むバッファのアドレス
- c** その XML 文書のコード・ページを指定する数値表現

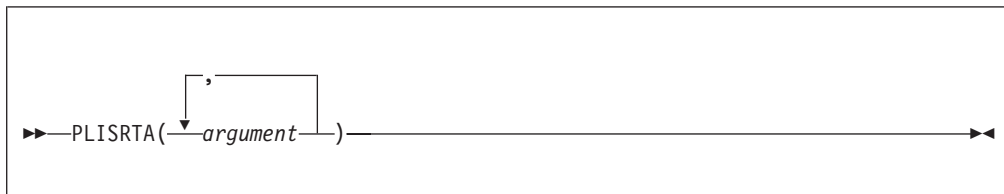
PLISAXD は、z/OS XML System Services パーサーを使用しており、z/OS でのみサポートされます。

詳細については、「Enterprise PL/I for z/OS プログラミング・ガイド」の『*Using the PLISAXD XML parser*』を参照してください。

注: OSR はスキーマのプリプロセス・バージョンです。OSR について詳しくは、「XML System Services User's Guide and Reference」を参照してください。

## PLISRTA

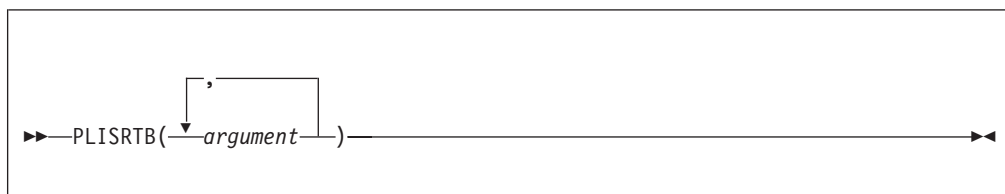
この組み込みサブルーチンにより、入力ファイルをソートして、ソートされた出力ファイルを作ることができます。



詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLISRTB

この組み込みサブルーチンにより、E15 PL/I 出力プロシージャによって提供される入力レコードをソートし、ソートされた出力ファイルを作ることができます。

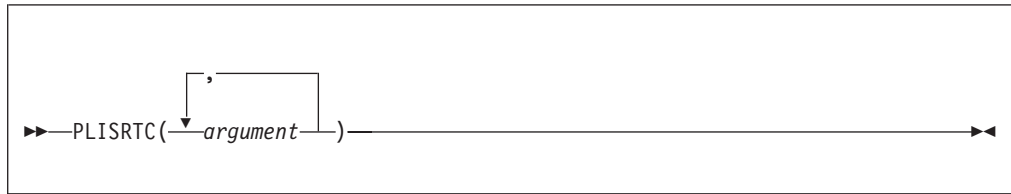


詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。



## PLISRTC

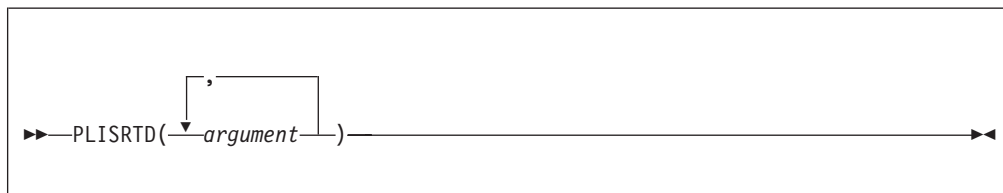
この組み込みサブルーチンにより、入力ファイルをソートして、E35 PL/I 出力プロセッサによって処理されるソートされたレコードを作ることができます。



詳細については、「Enterprise PL/I for z/OS プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLISRTD

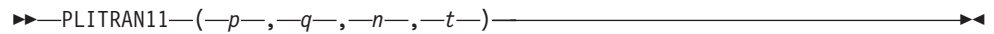
この組み込みサブルーチンにより、E15 PL/I 出力プロシージャによって提供される入力レコードをソートして、E35 PL/I 出力プロシージャによって処理されるソートされたレコードを作ることができます。



詳細については、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

## PLITRAN11

PLITRAN11 は、ソース・バッファの 1 バイト・データをターゲット・バッファの 1 バイト・データに変換します。



►—PLITRAN11—(—p—,—q—,—n—,—t—)—◄

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**n** ソース・バッファの長さ。

**t** 256 バイト変換テーブルのアドレス。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファの大きさは、ソース・バッファ以上でなければなりません。

変換テーブルは、ダブルワード境界に位置合わせされなければなりません。

## PLITRAN12

PLITRAN12 は、ソース・バッファの 1 バイト・データをターゲット・バッファの 2 バイト・データに変換します。

►►—PLITRAN12—(—*p*—,—*q*—,—*n*—,—*t*—)—►◄

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**q** ソース・バッファのアドレス。

**n** ソース・バッファの長さ。

**t** 512 バイト変換テーブルのアドレス。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

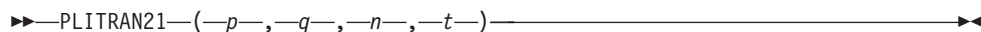
バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファの大きさは、ソース・バッファの 2 倍以上でなければなりません。

変換テーブルは、ダブルワード境界に位置合わせされなければなりません。

## PLITRAN21

PLITRAN21 は、ソース・バッファの 2 バイト・データをターゲット・バッファの 1 バイト・データに変換します。



►—PLITRAN21—(—p—,—q—,—n—,—t—)——►

- p** ターゲット・バッファのアドレス。
- q** ソース・バッファのアドレス。
- n** ソース・バッファの長さ。
- t** 64 K バイト変換テーブルのアドレス。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファの大きさは、ソース・バッファの半分以上でなければなりません。

変換テーブルは、ダブルワード境界に位置合わせされなければなりません。

## PLITRAN22

PLITRAN22 は、ソース・バッファの 2 バイト・データをターゲット・バッファの 2 バイト・データに変換します。

►►—PLITRAN22—(—*p*—,—*q*—,—*n*—,—*t*—)—►◄

- p** ターゲット・バッファのアドレス。
- q** ソース・バッファのアドレス。
- n** ソース・バッファの長さ。
- t** 128 K バイト変換テーブルのアドレス。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

ターゲット・バッファの大きさは、ソース・バッファ以上でなければなりません。

変換テーブルは、ダブルワード境界に位置合わせされなければなりません。

## POINTER

POINTER は、 $y$  によって指定された区域で、オフセット参照  $x$  によって指定される生成を識別するポインター値を返します。 $x$  がヌル・オフセット値の場合は、ヌル・ポインター値が返されます。



省略形: PTR

- x** オフセット参照。  $x$  は、ヌル・オフセット値です。そうでない場合は、 $x$  は、基底付き変数の生成を識別する必要があります。ただし、 $y$  にある必要はありません。 $y$  でそうでない場合は、生成は  $y$  での生成と同等でなければなりません。
- y** 区域参照。

最後の生成の割り当てまで、それぞれ同じ回数だけ変数が割り当てられ、解放された場合は、異なる区域での基底付き変数の生成は同等です。

## POINTERADD

POINTERADD は、その引数の和であるポインター値を戻します。

▶▶—POINTERADD(*x*,*y*)——▶▶

省略形: PTRADD

**x** ポインターの式。

**y** 計算タイプを保持する必要がある式。この式は、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

POINTERADD は、基底付き変数のロケーターとして使用できます。

POINTERADD は、減算されるオペランドの接頭部に負符号 (-) を付けることにより、減算に使用できます。

ポインターを増分するために、POINTERADD を使用する必要はありません。整数の場合と同じようにポインターを増分させるだけです。例えば、以下のように書き込む必要はありません。

```
p = pointeradd(p,2);
```

その代わりに、以下の同等ステートメントのどちらか 1 つを書き込むことができます。

```
p = p + 2;
p += 2;
```

しかし、POINTERADD は、以下の例にあるように、ポインターのロケーション・オフセットでのストレージ参照を取り消す際に便利です。

```
dcl x fixed bin(31), b based fixed bin(31);
x = pointeradd(p,2)->b;
```

PL/I のロケーターは参照でなければならないため、書き込みができないことにご注意ください。

```
x = (p + 2)->b;
```



---

### POINTERDIFF

POINTERDIFF は、2 つのポインター  $x$  および  $y$  間の差である FIXED BINARY(31,0) 結果を戻します。



▶—POINTERDIFF( $x,y$ )—▶◀

省略形: PTRDIFF

$x$  および  $y$

POINTER として宣言された式。

---

## POINTERSUBTRACT

POINTERSUBTRACT は、`POINTERADD(x,-y)` と同等です。

▶▶—POINTERSUBTRACT(*x*,*y*)——▶▶

省略形: PTRSUBTRACT

**x** ポインター式でなければなりません。

**y** 計算タイプを保持する必要がある式。この式は、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

---

## POINTINTERVALUE

POINTINTERVALUE は、変換された  $x$  の値であるポインター値を戻します。



▶—POINTINTERVALUE( $x$ )————▶

省略形: PTRVALUE

**x** HANDLE 属性か計算タイプのどちらかを保持する必要がある式。  $x$  に計算タイプがある場合は、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

POINTINTERVALUE( $x$ ) は、 $x$  が定数の場合に、静的ポインター変数を初期化するのに使われます。

## POLY

POLY は、1 次元配列式  $x$  から作られた 1 つの多項式の近似値を表す浮動小数点数値を返します。戻り値は、最初の引数と同じ属性を持ちます。POLY の構文は次のとおりです。

►►POLY(— $x$ —,— $y$ —)◄◄

$x$  配列式。

$y$  要素式。

$x$  は REAL FLOAT でなくてはなりません。また、必要に応じて  $y$  は  $x$  の属性に変換されます。

$x$  の下限が 0、上限が  $n$  である場合の結果は、係数が  $x$  によって与えられ、 $y$  の次元を  $n$  とする古典多項式になります。つまり、次のような結果になります。

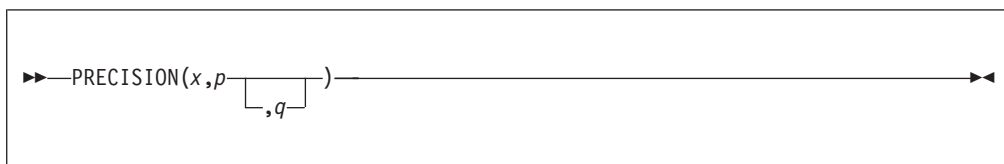
$$x(0) + x(1)*y + x(2)*y**2 + \dots + x(n)*y**n$$

$x$  の下限が  $m$ 、上限が  $n$  である一般的なケースでは、結果は次の多項式になります。

$$x(m) + x(m+1)*y + x(m+2)*y**2 + \dots + x(n)*y**(n-m)$$

## PRECISION

PRECISION は、 $p$  および  $q$  で指定される精度で、 $x$  の値を戻します。戻り値の基数、モードおよびスケールは、 $x$  の場合と同じです。



省略形: PREC

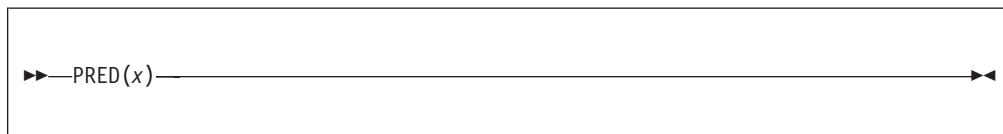
**x** 式。

**p** 制限付き式。  $p$  は、式  $x$  が変換後に持つ式の値である桁数を指定します。

**q** 制限付き式。結果の位取り係数を指定します。固定小数点の場合に、 $q$  が省略されると、位取り係数ゼロが想定されます。結果が浮動小数点の場合は、 $q$  は省略します。

## PRED

PRED は、 $x$  より小さい表示可能な最大数である浮動小数点の値を返します。戻り値は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。OVERFLOW は、そのような数がない場合に発生します。



**x** REAL FLOAT 式。

PRED(TINY(X)) は、ゼロを返し、UNDERFLOW を発生させることはありません。

---

## PRESENT

PRESENT(*x*) が含まれているプロシーチャーの呼び出しで、*x* という名前のパラメーターが存在する場合は、present(*x*) は '1'B である BIT(1) 値を戻します。



▶—PRESENT(*x*)—▶◀

**x** レベル 1 の添え字が付いていない BYADDR パラメーター。

**注:** この引数は、呼び出し側コードの対応する ENTRY 宣言で OPTIONAL として宣言する必要があります。

---

## PROCEDURENAME

PROCEDURENAME() は、この組み込み関数を呼び出すプロシージャー名を含む不変文字ストリングを戻します。

▶—PROCEDURENAME—(—)——▶◀

省略形: PROCNAME

PROCEDURENAME は、CALL ステートメントまたは GOTO ステートメントに名前が表示されていても複数のラベル指定の左端の名前を常に戻します。



---

## PROD

PROD は、 $x$  のすべてのエレメントの積を戻します。



▶▶—PROD( $x$ )—◀◀


**x** 配列式。  $x$  のエレメントがストリングの場合は、それらのエレメントは固定小数点の整数値に変換されます。

$x$  のエレメントが固定小数点の整数値またはストリングでない場合は、浮動小数点に変換され、結果は浮動小数点になります。

結果は、 $x$  の精度になります。ただし、固定小数点の整数値およびストリングの結果は精度 (n,0) の固定小数点になります。ここで、 $n$  は許可される最大桁数です。基数およびモードは、変換後の引数  $x$  と一致します。

## PUTENV

この関数は、新しい環境変数を追加するか、または既存の環境変数の値を変更します。



▶—PUTENV(*string*)—▶

### **string**

フォーマット *envvarname=value* の文字列。

成功した場合には、PUTENV は真 ('1'B) を返し、そうでない場合には、偽 ('0'B) を返します。

## RADIX

RADIX は、浮動小数点の式  $x$  を表すのに使われるモデルの基数である FIXED BINARY(31,0) 値を戻します。



**x** REAL FLOAT 式。

RADIX( $x$ ) は、 $x$  を表すために使用される浮動小数点フォーマットで決まります。それは次のとおりです。

- $x$  が IEEE 2 進浮動小数点フォーマットで保持されている場合は、2 になります。
- $x$  が IEEE 10 進浮動小数点フォーマットで保持されている場合は、10 になります。
- $x$  が z/OS 16 進フォーマットで保持されている場合は、16 になります。

RADIX( $x$ ) は、制限付き式に使用できます。

## RAISE2

$\text{RAISE2}(x,n)$  は値  $x*(2^{**}n)$  を返します。

▶— $\text{RAISE2}(x,n)$ —▶

$x$  式。  $x$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$n$  式。  $n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  が REAL FIXED BIN( $p,0$ ) および SIGNED の場合、結果は SIGNED REAL FIXED BIN( $r,0$ ) です。  $p \leq M1$  の場合は  $r = M1$  で、  $p > M1$  の場合は  $r = M2$  です。

$x$  が REAL FIXED BIN( $p,0$ ) および UNSIGNED の場合、結果は UNSIGNED REAL FIXED BIN( $r+1,0$ ) です。  $p \leq (M1+1)$  の場合は  $r = (M1+1)$ 、  $p > M1$  の場合は  $r = (M2+1)$  です。

それ以外の場合、 $x$  は SIGNED REAL FIXED BIN( $p,0$ ) に変換され、その結果は上記と同じ属性を持ちます。

$n$  が負の場合、または  $n$  が  $r$  より大きい場合、結果は未定義です。

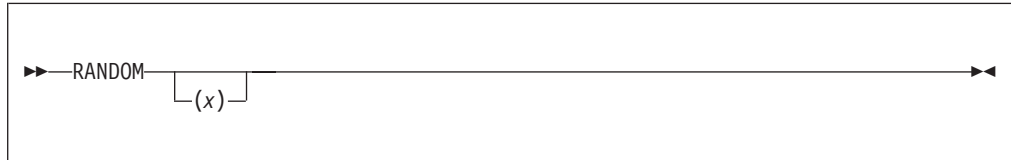
注:  $\text{RAISE2}(x,n)$  はアセンブラー  $\text{SLA}(x,n)$  と同等です。

### 例

```
raise2(6,1) /* produces 12 */
```

## RANDOM

RANDOM は、与えられたシード  $x$  を使用して生成されたランダム数 FLOAT BINARY(53) を戻します。  $x$  を省略すると、ランダム数は、シードを与えた最後の RANDOM 呼び出しのシードに基づくか、シードを与えた RANDOM がこれまでに呼び出されていない場合は、デフォルトの初期シード 1 に基づいて生成されます。



**x** 式。  $x$  に、計算タイプ (必須) および算術タイプを保持している必要があります。  $x$  は数値で、実数でなければなりません。  $x$  が指定された FIXED BINARY(31,0) でない場合は、 $x$  は変換されます。

$0 < x < 2,147,483,646$  でなければ ERROR 条件が発生します。

RANDOM によって生成される値は、 $0 < \text{random}(x) < 1$  で 0 と 1 の間に均等に分散します。値は、下記のとおり乗算合同式法を使用して生成されます。

```
seed(x) = mod(950706376 * seed(x - 1), 2147483647)
random(x) = seed(x) / 2147483647
```

シードは、マルチスレッド化アプリケーションの各スレッド内ではなく、プログラム・レベルで維持されます。

## RANK

RANK は、文字またはワイド文字に対応する整数値を戻します。



►► RANK(x) ◄◄

**x** 属性 CHAR (1) NONVARYING または WCHAR (1) NONVARYING を保持しなければなりません。

**x** が文字である場合、RANK(x) は `index(collate(),x)-1` として定義され、RANK は CHARVAL の逆になります。

**x** がワイド文字である場合、ビッグ・エンディアン・フォーマットで格納された **x** を **y** とすると、RANK(x) は UNSPEC(y) に等しくなります。

---

## REAL

REAL は、 $x$  の実数部分を戻します。結果には、 $x$  の基数、スケール、および精度が含まれます。



►►—REAL( $x$ )—◄◄

**x** 式。  $x$  が実数の場合は、 $x$  は複素数に変換されます。

## REAL 疑似変数

REAL 疑似変数は、実数値または複合値の実数部分を  $x$  の実数部分に割り当てます。



▶—REAL( $x$ )—▶

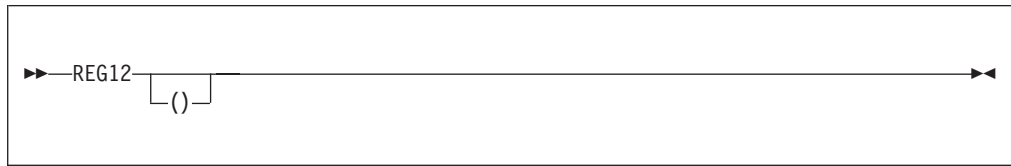
**x** 複素数参照。



---

**REG12**

REG12 は、レジスター 12 の現行値を保持するポインターを返します。



REG12 組み込み関数がストレージの変更に使われると、予測不能な結果が生じることがあります。

REG12 組み込み関数は、z/OS のみでサポートされます。

## REM

REM は、 $x$  を  $y$  で除算した剰余を戻します。これは、次の式で計算できます。

$$x - y * \text{trunc}(x/y)$$



▶—REM( $x,y$ )—▶

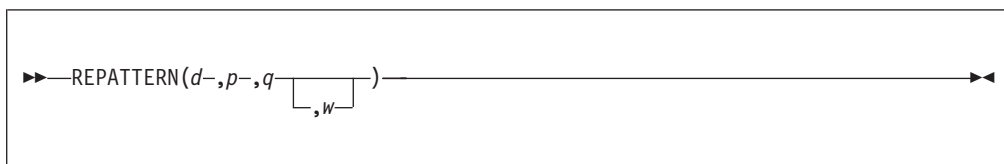
**x および y**

式。  $x$  および  $y$  は、計算タイプでなければなりません。また、算術タイプでも構いません。

REM 組み込み関数と MOD 組み込み関数の対比の例については、578 ページの『MOD』を参照してください。

## REPATTERN

1 つのパターンでは日付を保持している値をとり、2 番目のパターンでは日付に変換された値を戻します。



**d** 日付を表すstring式。 *d* の長さは、少なくともソース・パターン *q* の長さと同じでなければなりません。 *d* のほうが長い場合は、余分の文字を先行ブラックにしなければなりません。

*d* に、計算タイプ (必須) と文字タイプを保持している必要があります。そうでないと、文字に変換されます。

**p** ターゲット・パターン。サポートされている日付/時刻パターンの 1 つでなければなりません。

**q** ソース・パターン。サポートされている日付/時刻パターンの 1 つでなければなりません。

**w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、*w* は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

戻り値は、属性 CHAR(*m*) NONVARYING を持っています。 *m* は、ターゲット・パターン *p* の長さです。

許可されるパターンを 428 ページの表 50 にリストしてあります。リリアン形式の説明については、426 ページの『日付/時刻組み込み関数』を参照してください。

REPATTERN 組み込み関数は、以下の両方が真である場合に、指定されたインライン変換を実行します。

- ソースおよびターゲット・パターンで DDD、MMM、および Mmm エレメントを使用していない
- ソース・パターンにターゲットと同じ量の日付情報がある (つまり、ターゲットに年、月、日がある場合、ソースにも対応する情報が必要で、少なくともソース年の桁数がターゲットと同じである必要がある)。

例えば、以下のようになります。

- YYYYMMDD から DD.MM.YY の変換はインライン化されます。
- MM/DD/YYYY から YYMM への変換はインライン化されます。
- MMYYY から YYYYMMDD への変換はインライン化されません。

以下に、REPATTERN を使用して、年を 2 桁で表す日付パターンと 4 桁で表す日付パターンの間で変換を行う方法について、いくつかの例を示します。ただし、両

方のパターンが年の値を保持するのに同じ桁数を使用している場合でも、この組み込み関数を使用して、日付をあるサポートされたパターンから別のサポートされたパターンへ変換することができます。

```
REPATTERN('990101','YYYYMMDD','YYMMDD', 1950) returns '19990101'
REPATTERN('000101','YYYYMMDD','YYMMDD', 1950) returns '20000101'
REPATTERN('19990101','YYMMDD','YYYYMMDD', 1950) returns '990101'
REPATTERN('20000101','YYMMDD','YYYYMMDD', 1950) returns '000101'
REPATTERN('19490101','YYMMDD','YYYYMMDD', 1950) raises ERROR
```

### REPEAT

REPEAT は、 $y$  で指定された数だけ連結した  $x$  で構成されるビット・ストリング、文字ストリング、漢字ストリング、またはワイド文字ストリングを戻します。したがって、 $x$  の  $(y + 1)$  オカレンスがあります。



**x** 繰り返されるビット、文字、漢字、またはワイド文字の式。  $x$  が算術の場合は、次の変換が発生します。

- 2 進数の場合は、 $x$  はビット・ストリングに変換されます。
- 10 進数の場合は、 $x$  は文字ストリングに変換されます。

**y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。

$y$  がゼロまたは負の場合は、ストリング  $x$  が戻されます。 REPEAT 組み込み関数の例については、475 ページの『COPY』を参照してください。

## REPLACEBY2

REPLACEBY2 は、 $x$  の中の一部の文字を文字のペアで置き換えることによって形成される、固定長ストリングを戻します。

►►—REPLACEBY2—(— $x$ —,— $y$ —,— $z$ —)—►◄

**x** 置換できる文字があるかどうかを検索される文字式。

**y** 置換するペアの値を含む文字式。

**z** 置換される文字を含む文字式。

REPLACEBY2 は、 $x$  の各文字を次のように処理します。

$x$  中にある文字が  $z$  中で検出されると、 $y$  にある  $z$  に対応する文字ペアが結果にコピーされます。それ以外の場合は、 $x$  中の文字が結果にコピーされます。 $z$  に複数の同一文字が入っている場合は、左端のオカレンスが使われます。

ストリング  $y$  は、ストリング  $z$  の 2 倍の長さでなければなりません。

例として、REPLACEBY2( 'Rätsel', 'aeoeuess', 'äöüß') はストリング 'Raetsel' を戻します。

## REVERSE

REVERSE は、順序を反対にした  $x$  のエレメントを含む不変ストリングを戻します。

►—REVERSE( $x$ )—◄

- x** 式。  $x$  に、計算タイプ (必須) とストリング・タイプを保持している必要があります。  $x$  にストリング・タイプがない場合は、連結の規則に従って、ストリング (すなわち、数値からビット、文字、漢字、またはワイド文字) に変換されます。

### 例

```

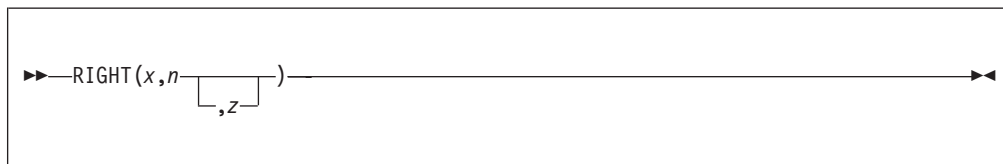
dcl Source char value('HARPO');
dcl Target char(length(Source));

Target = reverse (Source); /* 'OPRAH' */

```

## RIGHT

RIGHT は、長さ  $n$  の文字列  $x$  の右端に文字列  $x$  を挿入し、必要な場合に左側が文字  $z$  を埋めた結果の文字列を返します。  $z$  が省略される場合は、埋め込み文字に空白が使われます。



- x** 式。  $x$  に、計算タイプ (必須) を保持している必要があります。また、文字タイプを保持することもできます。そうでないと、文字に変換されます。
- n** 式。  $n$  には、計算タイプを保持している必要があります、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。
- z** 式。  $z$  が指定された場合、  $z$  は CHARACTER(1) NONVARYING タイプでなければなりません。

## 例

```

dcl Source char value('One Hundred SCIDS Marks');
dcl Target char(30);

Target = right (Source, length(Target), '*');
 /* '*****One Hundred SCIDS Marks' */

```



## ROUND

ROUND は、 $n$  で指定された桁で丸められた  $x$  の値を戻します。結果は、 $x$  のモード、基数、およびスケールになります。

►►—ROUND( $x,n$ )—◄◄

**x** 実数式。  $x$  が負の場合は、絶対値が丸められてから、符号が戻ります。

**n** オプションの符号付き整数。丸める桁を指定します。

## FIXED の ROUND

FIXED の結果の精度は、次の式によって得られます。

$$(\max(1, \min(p-q+1+n, N)), n)$$

ここで、 $(p,q)$  は  $x$  の精度で、 $N$  は許可される桁数の最大数です。したがって、 $n$  は結果の位取り係数を指定します。

$n$  は、FIXED データの位取り係数の制限に従う必要があります。  $n$  が 0 より大きい場合は、小数点の右から  $(n)$  番目の桁が丸められます。  $n$  がゼロまたは負の場合は、小数点の左から  $(1-n)$  番目の桁が丸められます。

結果の値は、次の式によって得られます。ここで、 $x$  が BINARY の場合は  $b = 2$  で、 $x$  が DECIMAL の場合は  $b = 10$  です。

$$\text{round}(x,n) = \text{sign}(x) * (b^{-n}) * \text{floor}(\text{abs}(x) * (b^n) + 1/2)$$

したがって、次の例では値 6.67 が出力となります。

```
dc1 X fixed dec(5,4) init(6.6666);

put skip list(round(X,2));
```

## IEEE 10 進浮動小数点の ROUND

IEEE DECIMAL FLOAT の結果の精度は、ソースの引数の精度と同じです。

結果の値は、次の式によって得られます。ここで、 $b = 10$  ( $=\text{radix}(x)$ ) で、 $e = \text{exponent}(x)$  です。

$$\text{round}(x,n) = \text{sign}(x) * (b^{(e-n)}) * \text{floor}(\text{abs}(x) * (b^{(n-e)}) + 1/2)$$

したがって、FLOAT(DFP) コンパイラー・オプションが有効である場合、以下の連続した 3.1415926d0 の丸めにより、次の値が算出されます。

```
dc1 x float dec(16) init(3.1415926d0);

display(round(x,1)); /* 3.000000000000000E+0000 */
display(round(x,2)); /* 3.100000000000000E+0000 */
display(round(x,3)); /* 3.140000000000000E+0000 */
display(round(x,4)); /* 3.142000000000000E+0000 */
display(round(x,5)); /* 3.141600000000000E+0000 */
display(round(x,6)); /* 3.141590000000000E+0000 */
```

## IEEE 2 進浮動小数点の ROUND

IEEE 2 進浮動小数点の結果の精度は、ソースの引数の精度と同じです。

コンパイラー・オプション USAGE(ROUND(IBM)) のもとでは、z/OS 上以外、結果の値はソースと同じになります。ここで、ソースがゼロでない場合は、結果は、ソースの右端ビットで定まることによって得られます。

コンパイラー・オプション USAGE(ROUND(ANS)) のもとでは、結果の値は次の式によって得られます。ここで、 $b = 2$  ( $=\text{radix}(x)$ ) で、 $e = \text{exponent}(x)$  です。

$$\text{round}(x,n) = \text{sign}(x) * (b^{(e-n)}) * \text{floor}(\text{abs}(x) * (b^{(n-e)}) + 1/2)$$

USAGE(ROUND(ANS)) のもとでは、丸めは基数 2 の丸めであり、認識の甘いユーザーが予測したものと異なる結果が出る場合があります。例えば、USAGE(ROUND(ANS)) でコンパイルされ、IEEE 2 進浮動小数点命令が使用された場合は、以下の連続した 3.1415926d0 の丸めにより、次の値が算出されます。

```
dc1 x float bin(53) init(3.1415926d0);

display(round(x,1)); /* 4.000000000000000E+0000 */
display(round(x,2)); /* 3.000000000000000E+0000 */
display(round(x,3)); /* 3.000000000000000E+0000 */
display(round(x,4)); /* 3.250000000000000E+0000 */
display(round(x,5)); /* 3.125000000000000E+0000 */
display(round(x,6)); /* 3.125000000000000E+0000 */
display(round(x,7)); /* 3.156250000000000E+0000 */
```

## IBM 16 進浮動小数点の ROUND

IBM 16 進浮動小数点の結果の精度は、ソースの引数の精度と同じです。

コンパイラー・オプション USAGE(ROUND(IBM)) のもとでは、z/OS 上以外、結果の値はソースと同じになります。ここで、ソースがゼロでない場合は、結果は、ソースの右端ビットで定まることによって得られます。

コンパイラー・オプション USAGE(ROUND(ANS)) のもとでは、結果の値は次の式によって得られます。ここで、 $b = 16$  ( $=\text{radix}(x)$ ) で、 $e = \text{exponent}(x)$  です。

$$\text{round}(x,n) = \text{sign}(x) * (b^{(e-n)}) * \text{floor}(\text{abs}(x) * (b^{(n-e)}) + 1/2)$$

USAGE(ROUND(ANS)) のもとでは、丸めは基数 16 の丸めであり、認識の甘いユーザーが予測したものと異なる結果が出る場合があります。例えば、USAGE(ROUND(ANS)) でコンパイルされ、IBM 16 進浮動小数点命令が使用された場合は、以下の連続した 3.1415926d0 の丸めにより、次の値が算出されます。

```
dc1 x float bin(53) init(3.1415926d0);

display(round(x,1)); /* 3.000000000000000E+00 */
display(round(x,2)); /* 3.125000000000000E+00 */
display(round(x,3)); /* 3.140625000000000E+00 */
display(round(x,4)); /* 3.141601562500000E+00 */
display(round(x,5)); /* 3.141586303710938E+00 */
display(round(x,6)); /* 3.141592979431152E+00 */
```

## ROUNDDEC

ROUNDDEC は、 $n$  で指定された桁で丸められた  $x$  の値を戻します。結果は、 $x$  のモード、基数、およびスケールになります。

►—ROUNDDEC( $x,n$ )—◄◄

**x** FIXED DECIMAL または DFP FLOAT の実数式。 $x$  が負の場合は、絶対値が丸められてから、符号が戻ります。

**n** オプションの符号付き整数。丸める桁を指定します。

$x$  が FIXED DECIMAL または PICTURE FIXED DECIMAL の場合、ROUNDDEC は ROUND と同じ結果を生成します。

$x$  が FLOAT DECIMAL または PICTURE FLOAT DECIMAL で、FLOAT(DFP) コンパイラーが有効である場合、ROUNDDEC は  $n$  桁めではなく、小数第  $n$  位で  $x$  を丸めます (ANSI 定義に従った ROUND 組み込み関数と同様)。例えば、以下の連続した 3141.592653589793d0 の丸めにより、次の値が算出されます。

```

dcl x float dec(16) init(3141.592653589793d0);

display(fixed(rounddec(x,1),15,7)); /* 3141.60000000 */
display(fixed(rounddec(x,2),15,7)); /* 3141.59000000 */
display(fixed(rounddec(x,3),15,7)); /* 3141.59300000 */
display(fixed(rounddec(x,4),15,7)); /* 3141.59270000 */
display(fixed(rounddec(x,5),15,7)); /* 3141.59265000 */
display(fixed(rounddec(x,6),15,7)); /* 3141.59265400 */
display(fixed(rounddec(x,7),15,7)); /* 3141.59265360 */

```

## SAMEKEY

SAMEKEY は、アクセスされたレコードに同じキーを持つ別のレコードが続いているかどうかを示す、長さ 1 のビット・ストリングを返します。



▶—SAMEKEY( $x$ )—◀

**x** ファイル参照。ファイルは、RECORD 属性をとる必要があります。

ファイル  $x$  での入出力操作が正常終了時、または RECORD 条件が発生する直前では、同じキーを持つ別のレコードが続いている処理レコードの場合は、SAMEKEY によってアクセスされる値が '1'B に設定されます。そうでない場合は、'0'B に設定されます。

また、SAMEKEY でアクセスされる値は、次の場合に '0'B に設定されます。

- RECORD 以外の条件が発生する入出力演算が、ファイルの位置が変更または失われる原因になる場合
- ファイルがオープンされていない場合
- 現行カーソル位置がファイル内にない場合

---

## SCALE

SCALE は、次の式に基づいて浮動小数点の値を戻します。

$$x * (\text{radix}(x))^n$$

結果は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。

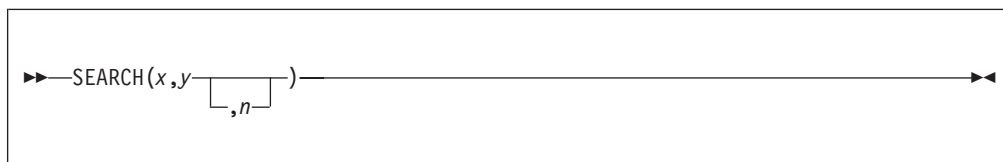
►►—SCALE( $x,n$ )—◄◄

**x** REAL FLOAT 式。

**n** 計算タイプを保持する必要がある式。この式は、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

## SEARCH

SEARCH は、別のストリングにある任意の 文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字が指定のストリングにある場合、そのストリング内の最初の位置を指定するスケールのない REAL FIXED BINARY 値を戻します。この関数に、検索を開始する位置を指定することもできます。



### x および y

式。x は、ストリング y に表示される文字、ビット、漢字、またはワイド文字を検索するストリングを指定します。

x または y はヌル・ストリングで、結果はゼロです。

x に y がいない場合は、結果はゼロです。

### n 式。n は、検索を開始する x 内の位置を指定します。y には、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

$1 \leq n \leq \text{LENGTH}(x)+1$  でない場合は、STRINGRANGE 条件 (割り込み可能な場合) が発生します。暗黙処置と通常の戻りは、結果ゼロになります。

BIFPREC コンパイラ・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

SEARCH は、数字のストリングにある区切り文字を検出するのに使われます。

## 例

```

dcl Source char value(' Our PL/I wields the Power ');
dcl Pos fixed bin(31);

/* Find occurrences of any of the characters 'P','o',or 'w' in source */

Pos = search (Source, 'Pow'); /* returns 6 for the 'P' */
Pos = search (Source, 'Pow', Pos+1); /* returns 11 for the 'w' */
Pos = search (Source, 'Pow', Pos+1); /* returns 22 for the 'P' */
Pos = search (Source, 'Pow', Pos+1); /* returns 23 for the 'o' */
Pos = search (Source, 'Pow', Pos+1); /* returns 24 for the 'w' */

Pos = index (source, 'Pow',1); /* returns 22 for the 'Pow' */

```

上記の例では、SEARCH は 3 文字 (P, o, または w) のどれかが表れる位置を戻します。INDEX はストリング Pow が表れる位置を戻します。

## 例

```

dcl Source char value (' 368,475;121.,856,478')
dcl Delims char(3) init (';,.'); /* string of delimiters */
dcl Number(5) char(3);
dcl Start fixed bin(31);
dcl End fixed bin(31);

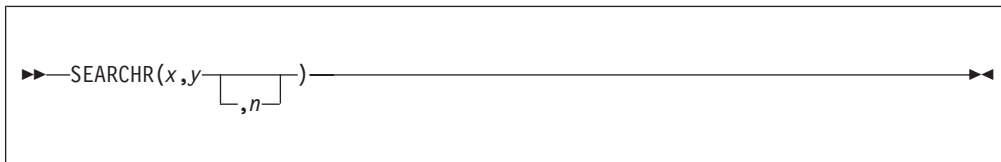
/* Extract the three-digit numbers from the source string */
/* by searching for the delimiters */

```

## SEARCH

```
Start = verify (Source, ' ');
 /* find start of first number */
End = search (Source, ',;.', Start);
 /* find end of first number */
if End = 0 then
 End = length (Source) + 1;
Number(1) = substr (Source, Start, 3); /* 368 */
Start = verify (Source, Delims, End);
 /* find start of second number */
End = search (Source, Delims, Start);
Number(2) = substr (Source, Start, 3); /* 475 */
```

## SEARCHR



SEARCHR 関数は、次のこと以外は SEARCH 組み込み関数と同じ演算を行います。

- 検索は、右から左に行われる。
- $n$  のデフォルトは  $\text{LENGTH}(x)$ 。
- $0 \leq n \leq \text{LENGTH}(x)$  でないと、STRINGRANGE 条件 (割り込み可能な場合) が発生します。暗黙処置と通常の戻りは、結果ゼロになります。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

SEARCH の構文は、673 ページの『SEARCH』で説明します。

### 例

```

dcl Source char value (' 555 Bailey Ave, San Jose, CA 95141, USA');
dcl Digits char value ('0123456789');
dcl (Start, End) fixed bin(31);
dcl Num char(20) var;

/* Find last number (i.e., zip code) */

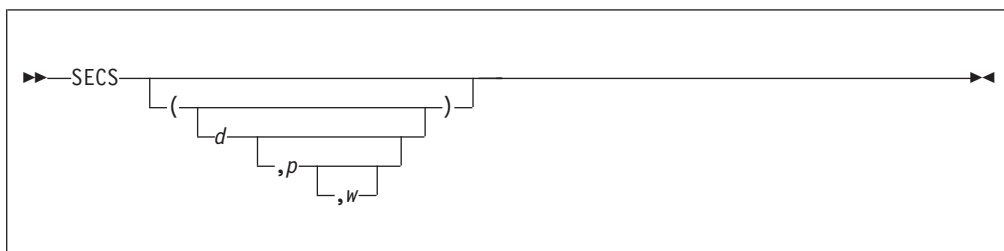
End = searchr (Source, Digits); /* returns 35 for the '1' */
Start = verifyr (Source, Digits, End); /* returns 30 for the ' ' */
Num = substr (Source, Start + 1, End - Start); /* extract number */

```



## SECS

SECS は、日付  $d$  に対応する秒数 (リリアン形式に基づく) を FLOAT BINARY(53) 値で戻します。



- d** 日付を表すstring式。存在する場合は、 $d$  は入力日付をパターン  $p$  に指定された日付/時刻を表示する文字stringとして指定します。 $d$  が指定されない場合は、「DATETIME()」が想定されます。

$d$  に、計算タイプ (必須) と文字タイプを保持している必要があります。そうでないと、文字に変換されます。

- p** サポートされている日付/時刻パターンの 1 つ。 $p$  が省略される場合は、デフォルトの日付/時刻のパターン「YYYYMMDDHHMISS999」が想定されます。

$p$  に、計算タイプ (必須) と文字タイプを保持している必要があります。そうでないと、文字に変換されます。

- w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、 $w$  は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

許可されるパターンを 428 ページの表 50 にリストしてあります。リリアン形式の説明については、426 ページの『日付/時刻組み込み関数』を参照してください。

## 例

```

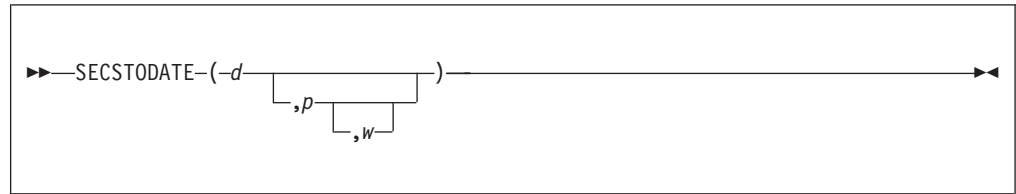
dcl Dayname (7) char(9) var static nonasgn init('Sunday',
 'Monday',
 'Tuesday',
 'Wednesday',
 'Thursday',
 'Friday',
 'Saturday');

dcl Jul4_1776_Secs float bin(53);
dcl Age_Tot_Secs pic 'Z,ZZZ,ZZZ,ZZZ,ZZ9';

Jul4_1776_Secs = secs('17760704','YYYYMMDD'); /* seconds */
Age_Tot_Secs = secs() - Jul4_1776_Secs; /* seconds since */
display('USA became independent on ' ||
 dayname(weekday(secstodays(Jul4_1776_Secs))) ||
 ', July 4, 1776 and at this very moment it has been ' ||
 Age_Tot_Secs, || ' seconds.');
```

## SECSTODATE

SECSTODATE は、 $d$  秒 (リリアン形式に基づく) に対応する  $p$  で指定された日付/時刻パターンを含む不変文字ストリングを戻します。



- d** 秒数 (リリアン形式) $d$ は、計算タイプでなければなりません。また、必要な場合には、FLOAT BIN(53) に変換されます。
- p** サポートされている日付/時刻パターンの 1 つ。省略される場合、 $p$  は、デフォルトの日付/時刻パターン「YYYYMMDDHHMISS999」(DATETIME で戻されるデフォルトのフォーマット) が想定されます。
- w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、 $w$  は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

許可されるパターンを 428 ページの表 50 にリストしてあります。リリアン形式の説明については、426 ページの『日付/時刻組み込み関数』を参照してください。

## SECSTODAYS

SECSTODAYS は、秒数  $x$  を日数に変換した数を表す FIXED BINARY(31,0) 値を返します。1 日に達しない秒は無視します。



►—SECSTODAYS( $x$ )—►

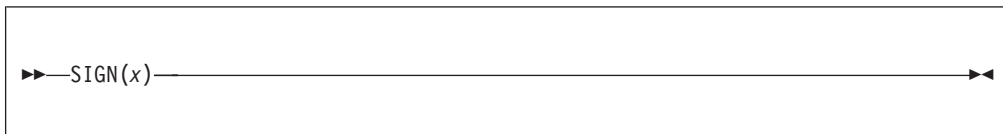
**x** 式。  $x$  は、計算タイプ (必須) を保持し、FLOAT BINARY(53) である必要があります。そうでない場合は、 $x$  は、FLOAT BINARY(53) に変換されます。

SECSTODAYS( $x$ ) は、 $x/(24*60*60)$  と同じです。

例については、676 ページの『SECS』を参照してください

## SIGN

SIGN は、 $x$  が正、ゼロ、または負であるかどうかを示すスケールのない REAL FIXED BINARY 値を返します。



**x** 実数式。

戻り値は、次の式で指定されます。

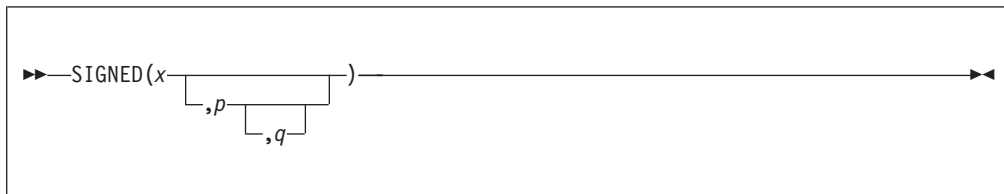
| x の値    | 戻される値 |
|---------|-------|
| $x > 0$ | +1    |
| $x = 0$ | 0     |
| $x < 0$ | -1    |

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

---

**SIGNED**

SIGNED は、 $p$  および  $q$  で指定された精度で、 $x$  の符号付き FIXED BINARY 値を戻します。



**x** 式。

**p** 演算を通して維持する桁数を指定する制限付き式。

**q** 結果の位取り係数を指定する制限付き式。固定小数点の結果の場合は、 $p$  が指定され、 $q$  が省略されると、位取り係数ゼロがデフォルトになります。

## SIN

SIN は、 $x$  の正弦の近似を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モードおよび精度になります。




▶—SIN( $x$ )—▶◀

**x** ラジアン値の式。

---

## SIND

SIND は、 $x$  の正弦の近似を実数の浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数および精度になります。




►►—SIND( $x$ )—◄◄

**x** 度で示される値を持つ実数式。

## SINH

SINH は、 $x$  の双曲線正弦の近似を表す浮動小数点の値を返します。戻り値は、 $x$  の基数、モードおよび精度になります。



►►—SINH( $x$ )—►►

**x** ラジアン値の式。



## SIZE

SIZE は、変数  $x$  に割り当てる処理系定義ストレージを与える FIXED BINARY 値を、バイトで返します。



**x** 任意のデータ・タイプ、データ編成、位置合わせ、およびストレージ・クラスを持つ変数。ただし、下記のものは除きます。

$x$  は、次のものであることはできません。

- 位置合わせされていない固定長ビット・ストリングである BASED 変数、DEFINED 変数、パラメーター変数、添え字付き変数、構造変数、または共用体基底付き変数。
- 最初または最後の基本エレメントが位置合わせされていない固定長のビット・ストリングである小構造体または共用体 (ただし、その小構造体を含んでいる大構造体または共用体の最初または最後のエレメントになっている場合を除く)。
- BASED 属性、DEFINED 属性、またはパラメーター属性を持つ大構造体か共用体、またはパラメーターである大構造体か共用体で、位置合わせされていない固定長のビット・ストリングを最初または最後のエレメントとするもの。
- 連結ストレージにない変数。

SIZE( $x$ ) によって戻される値は、次の状況で伝送される最大バイト数です。

```
declare F file record input
 environment(scalarvarying);
read file(F) into(x);
```

$x$  が次のものである場合

- 可変長ストリングの場合は、戻り値には、ストリングの長さの接頭辞、ストリングの最大長のバイト数が含まれています。
- 区域の場合は、戻り値には、区域制御バイト、区域の最大サイズが含まれています。
- 区域または可変長ストリングを含む集合の場合は、戻り値には、区域制御バイト、区域の最大サイズ、ストリングの長さ接頭辞、およびストリングの最大長のバイト数が含まれています。

変数が割り振られていない場合、SIZE 組み込み関数を調節可能エクステンションとともに、BASED 変数上で使用してはなりません。

CMPAT(V3) コンパイラー・オプションでは、SIZE は FIXED BIN(63) 値を返します。その他のすべての CMPAT オプションでは、FIXED BIN(31) 値を返します。

割り振られたバイト数を無視して、変数が現在必要とするバイト数を取得するには、CURRENTSIZE 組み込み関数を使用します。詳細については、482 ページの『CURRENTSIZE』を参照してください。

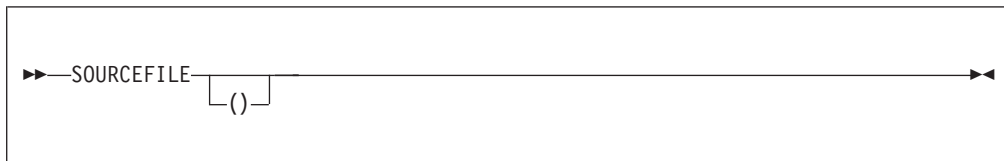
## 例

```
dcl Scids char(17) init('See you at SCIDS!') static;
dcl Vscids char(20) varying init('See you at SCIDS!') static;
dcl Stg fixed bin(31);

Stg = storage (Scids); /* 17 bytes */
Stg = currentsize (Scids); /* 17 bytes */
Stg = size (Vscids); /* 22 bytes */
Stg = currentsize (Vscids); /* 19 bytes */
Stg = size (Stg); /* 4 bytes */
Stg = currentsize (Stg); /* 4 bytes */
```

### SOURCEFILE

SOURCEFILE は、この関数が呼び出されるステートメントを含むファイルの名前をとる不変文字ストリングを返します。



SOURCEFILE は、制限付き式に使用できます。

戻されるストリングは、システムによって異なります。これらのストリングは、トレースおよびデバッグの目的にのみ使用する必要があります。

## SOURCELINE

SOURCELINE() は、ステートメントが含まれているこのファイル内で、この関数が呼び出されるステートメントの行番号である `FIXED BINARY(31,0)` 値を返します。ステートメントが、いくつかのソース行に拡張している場合は、ステートメントが開始する行の番号が返されます。




▶—SOURCELINE—(—)—▶

SOURCELINE() は、制限付き式に使用できます。

## Sqrt

Sqrt は、 $x$  の正の平方根の近似を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モードおよび精度になります。



►—Sqrt( $x$ )—►◄

**x** 式。  $x$  が実数の場合は、 $x$  はゼロより小さくてはいけません。

---

## SQRTF

SQRTF は、次のこと以外は、SQRT とまったく同じです。

- SQRTF は、ハードウェア・アーキテクチャーによって処理可能ならば、結果をインラインで計算する。
- 引数は、実数でなければならない。
- 無効な引数は、ハードウェア例外を生成する。
- 結果の正確度は、ハードウェアによって設定される。

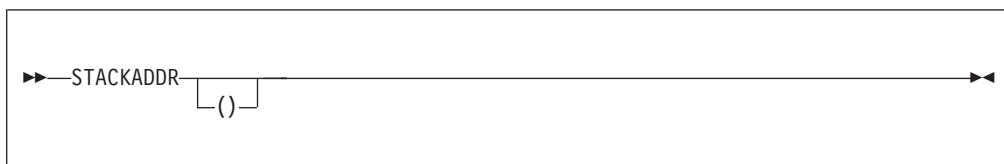
SQRTF は DFP ではサポートされていません。

定義および構文については、688 ページの『SQRT』を参照してください。

---

### STACKADDR

STACKADDR は、それが呼び出されたプロシージャ（または BEGIN ブロック）の動的保存域 (DSA) のアドレスを戻します。



STACKADDR 組み込み関数がストレージの変更に使用されると、予測不能な結果が生じることがあります。

---

## STORAGE

省略形: STG

STORAGE は、SIZE の同義語です。 684 ページの『SIZE』の構文を参照してください。



## STRING

STRING は、 $x$  のすべてのエレメントを連結したSTRINGを戻します。

►—STRING( $x$ )—◄

**x** 集合体参照またはエレメント参照。

STRING には、次の制限があります。

- 共用体を含む共用体または構造体には適用できない。
- スカラーに適用した場合は、スカラーはビット・STRING、文字STRING、ピクチャー漢字STRING、ピクチャー数値STRING、漢字STRING、またはワイド文字STRINGでなければなりません。
- 構造体に適用する場合は、構造体に埋め込みバイトがなく、構造体のエレメントは次のどちらかでなければなりません。
  - すべて位置合わせされていないビット・STRING。
  - すべて文字STRINGで、それぞれ文字STRING、ピクチャー付き列、またはピクチャー付き数値STRINGのどれか。
  - すべて漢字STRING。
  - すべてワイド文字STRING。
- 配列に適用する場合は、配列内のすべてのエレメントは、以前に説明した制限を受けます。

戻されるSTRINGのタイプは、以下の例外がありますが、基本エレメントの 1 つと同じタイプになります。

- 基本エレメントのいずれかが PICTURE である場合、戻されるタイプは CHARACTER タイプになります。
- 基本エレメントのいずれかが GRAPHIC タイプである場合、CHARACTER である必要がある STRINGOFGGRAPHIC コンパイラー・オプションが指定されていなければ、戻されるタイプは GRAPHIC になります。

有効な STRING ターゲットを次に示します。

```
dc1
 1 A,
 2 B bit(8),
 2 C bit(2),
 2 D bit(8);
```

```
dc1
 1 W,
 2 X char(2),
 2 Y pic'aa',
 2 Z char(6);
```

```
dc1
 1 W,
 2 X char(2),
 2 Y pic'99',
 2 Z char(6);
```

無効な STRING ターゲットを次に示します。

```
dc1
1 A,
2 B bit(8) aligned,
2 C bit(2),
2 D bit(8) aligned;
```

### STRING 疑似変数

STRING 疑似変数は、 $x$  がストリングのスカラーであるように、ストリングを  $x$  に割り当てます。  $x$  の残りのストリングは、ブランクまたはゼロ・ビットで埋められるか、可変長の場合は長さゼロが与えられます。



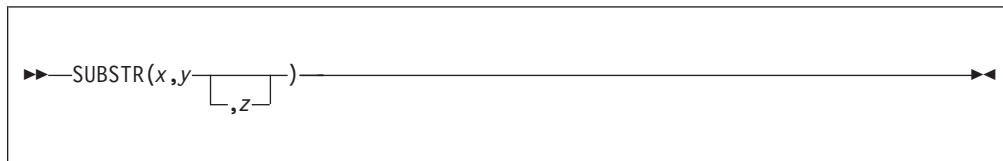
**x** 集合体参照またはエレメント参照。  $x$  の各基本エレメントは、すべてビット・ストリングかすべて文字ストリングでなければなりません。

STRING 疑似変数は、コンテキスト以外では使用してはいけません。

また、疑似変数は、STRING 組み込み関数に制限されます。制限の詳細については、692 ページを参照してください。

## SUBSTR

SUBSTR は、サブストリングを戻します。このサブストリングは、 $x$  の  $y$  および  $z$  によって指定されます。

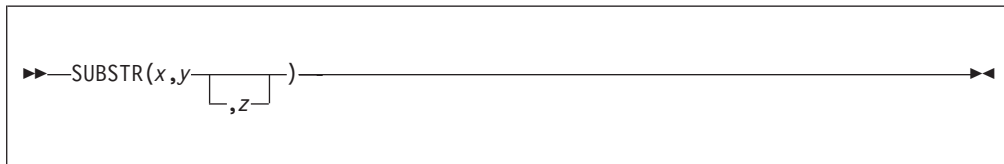


- x**    ストリング式。サブストリングが抜き出されるストリングを指定する。  $x$  がストリングでない場合は、文字に変換されます。
- y**    FIXED BINARY(31,0) に変換される式。  $y$  は、 $x$  の中のサブストリングの開始位置を指定する。
- z**    FIXED BINARY(31,0) に変換される式。  $z$  は、 $x$  の中のサブストリングの長さを指定します。 $z$  がゼロの場合は、ヌル・ストリングが戻されます。 $z$  が省略される場合は、戻されるサブストリングは  $x$  の位置  $y$  から  $x$  の終わりまでです。

$z$  が負または、 $y$  および  $z$  の値が  $x$  の現行の長さに全体が入らないサブストリングなどの場合は、STRINGRANGE 条件が発生します。  $y = \text{LENGTH}(x)+1$  および  $z = 0$  のときには、この条件は発生しません。 SUBSTR 組み込み関数の例については、 673 ページの『SEARCH』を参照してください。

## SUBSTR 疑似変数

SUBSTR 疑似変数は、 $x$  の  $y$  および  $z$  で指定されるstringの値をサブstringに割り当てます。 $x$  の剰余は、変更されません。可変stringへの割り当ては、stringの長さを変更しません。



- x** string reference.  $x$  is not a number.
  - y** expression.  $y$  is the starting position of the substring in  $x$ .  $y$  must be a fixed binary value that can be converted to a fixed binary value.
  - z** expression.  $z$  is the length of the substring in  $x$ .  $z$  is a real number that can be converted to a binary value. If  $z$  is zero, the substring is empty. If  $z$  is omitted, the substring is from  $y$  to the end of  $x$ .
- $y$  and  $z$  are optional.  $x$  must be an array. It is possible to use an array for  $y$  and  $z$ .

---

## SUBTRACT

SUBTRACT は、 $\text{ADD}(x, -y, p, q)$  と同等です。



▶—SUBTRACT( $x, y, p$   $q$ )—▶

引数の詳細については、441 ページの『ADD』の引数の説明を参照してください。

---

## SUCC

SUCC は、 $x$  より大きい表示可能な最小数である浮動小数点の値を戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。OVERFLOW 条件は、そのような数がない場合に発生します。



**x** REAL FLOAT 式。

SUCC は、次の関係を満たしています。

```
pred(succ(x)) = x
succ(pred(x)) = x
succ(x) = -pred(-x)
succ(0d0) = tiny(0d0)
```

## SUM

SUM は、 $x$  のすべてのエレメントの和を戻します。結果の基数、モード、およびスケールは、 $x$  の基数、モード、およびスケールと同じです。



►—SUM( $x$ )—◄

**x** 配列式。  $x$  のエレメントがストリングの場合は、それらのエレメントは固定小数点の整数値に変換されます。

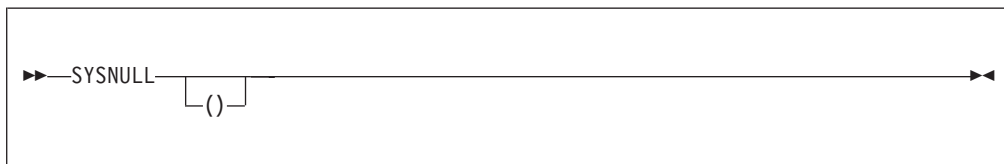
$x$  のエレメントが固定小数点の場合は、結果の精度は  $(N,q)$  です。  $N$  は、許可される桁の最大数で、 $q$  は  $x$  の位取り係数です。

$x$  のエレメントが浮動小数点の場合は、結果の精度は  $x$  と一致します。



### SYSNULL

SYSNULL は、システム・ヌル・ポインターの値を戻します。SYSNULL をハンドルに割り当て、SYSNULL とハンドルを比較することができます。SYSNULL を使用して静的ポインターおよびオフセット変数を初期化できます。

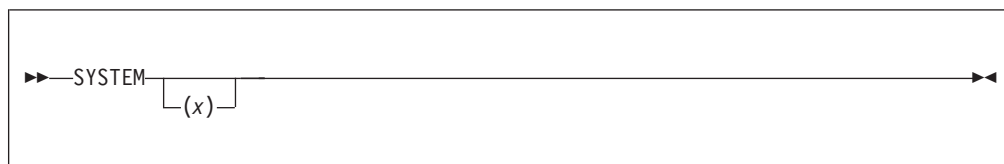


注: NULL および SYSNULL を比較すると等しい場合があります。ただし、これらが等しいということに基づいてコーディングしないでください。

582 ページの『NULL』も参照してください。

## SYSTEM

SYSTEM( $x$ ) は、 $x$  に含まれているコマンドで呼び出されるときにコマンド・プロセッサからの戻り値である FIXED BIN(31,0) 値を戻します。



**x**  $x$  に、計算タイプ (必須) と文字タイプを保持している必要があります。そうでない場合は、 $x$  は文字に変換されます。

---

## TALLY

TALLY は、ストリング  $x$  にストリング  $y$  が表示される回数を示す FIXED BINARY(31,0) 結果を戻します。  $x$  内に  $y$  が表示されない場合は、値 0 が戻されます。



▶—TALLY( $x,y$ )—◀

### $x$ および $y$

ストリング式。

$x$  および  $y$  の両方が計算タイプであり、文字、ビット、グラフィック、またはワイド文字タイプである必要があります。

$x$  または  $y$  はヌル・ストリングで、結果はゼロです。

## 例

```
TALLY ('We've got the Power!', 'power'); /* returns 0 */
TALLY ('We've got the Power!', 'Power'); /* returns 1 */
TALLY ('We've got the Power!', ' '); /* returns 3 */
TALLY ('We've got the Power!', 'e'); /* returns 4 */
TALLY ('1001'B, '1'B); /* returns 2 */
```

## TAN

TAN は、 $x$  の正接の近似を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モードおよび精度になります。



▶—TAN( $x$ )—▶


**x** ラジアン値の式。

## TAND

---

## TAND

TAND は、 $x$  の正接の近似を実数の浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数および精度になります。



►—TAND( $x$ )—◄

**x** 度で示される値を持つ実数式。

## TANH

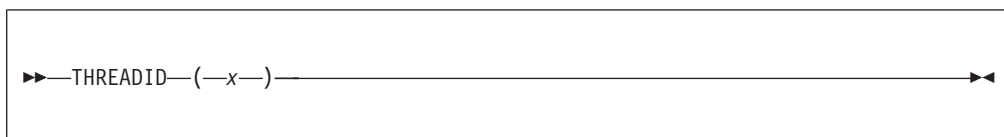
TANH は、 $x$  の双曲線正接の近似を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モードおよび精度になります。

▶—TANH( $x$ )—▶

**x** ラジアン値の式。

## THREADID

THREADID (スレッド ID の短縮形) は、POINTER 値を返します。この値は、接続されたスレッドのオペレーティング・システム・スレッド ID のアドレスです。



**x** タスク参照。 *x* の値は、ATTACH ステートメントの THREAD オプションですでに設定されているはずです。

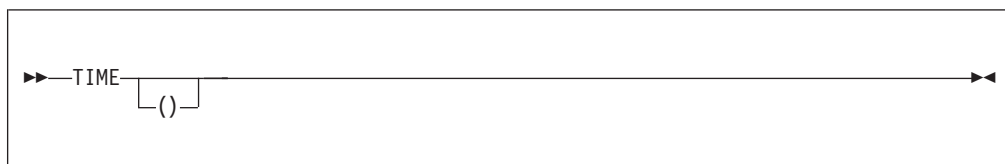
この組み込み関数によって戻される値を使用して、DosSetPriority などのシステム関数 (Windows の場合)、または posix 関数 (z/OS の場合) を呼び出すことができます。

現在実行中のスレッドのシステム・スレッド ID を取得するには、そのスレッドが実行されているプラットフォームに適した関数を呼び出す必要があります。そのため、Windows では GetCurrentThreadId、z/OS では pthread\_self を呼び出してください。

---

## TIME

TIME は、HHMISS999 のフォーマットで、文字ストリング・タイム・スタンプを戻します。





---

## TINY

TINY は、 $x$  が取ることができる正の最小値を浮動小数点の値で戻します。戻り値は、 $x$  の基数、モード、および精度になります。



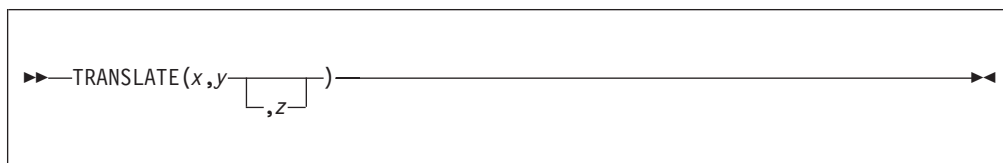
▶—TINY( $x$ )—▶

**x** REAL FLOAT 式。

TINY( $x$ ) は定数で、制限付き式に使用できます。

## TRANSLATE

TRANSLATE は、 $x$  と同じ長さの文字ストリングを戻します。



- x** 変換できる文字があるかどうかを検索される文字式。
- y** 文字の変換値を含む文字式。
- z** 変換される文字を含む文字式。  $z$  が省略される場合は、デフォルトは `collate()` です。

TRANSLATE は、 $x$  の各文字を次のように処理します。

$x$  の中にある文字が  $z$  に検出される場合は、 $y$  にある  $z$  に対応する文字が結果にコピーされます。それ以外の場合は、 $x$  の文字が結果にコピーされます。 $z$  に複数の同一文字が入っている場合は、左端のオカレンスが使われます。

$y$  は、 $z$  の長さと一致するように、右が空白で埋められるか、切り捨てられます。

すべての算術引数またはビット引数は、文字に変換されます。

TRANSLATE は、GRAPHIC または WIDECHAR のデータをサポートしません。

TRANSLATE は、2 番目および 3 番目の引数がりテラル、VALUE 属性を使用して宣言された名前付き定数、または制限付き式のいずれかである場合に、最も機能を発揮します。

### 例

```

dcl source char value("Ein Raetsel gibt es nicht.");
dcl target char(length(source));
dcl (to value ('ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ'),
 from value ('abcdefghijklmnopqrstuvwxyz')) char;

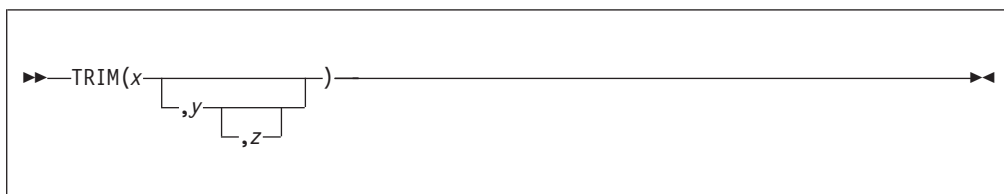
target = translate(source, to, from);
/* "EIN RAETSEL GIBT ES NICHT." */

```

上記の例における TRANSLATE 組み込み関数と同じ目的で UPPERCASE を使用することもできます。しかし、UPPERCASE 組み込み関数が規格英字のみを変換するのに対して、TRANSLATE は他の文字への変換に使用することができます。例えば、「Raetsel」が `a` のウムラウトを使用してつづられている場合、TRANSLATE は `a` のウムラウトを `A` のウムラウトに変換します (これらの文字が `from` ストリングおよび `to` ストリングにそれぞれ追加されている場合)。

## TRIM

TRIM は、片側または両端がトリムされた文字を使用した不変文字ストリングを返します。



**x、y、および z**  
式。

それぞれに、計算タイプ (必須) および属性 CHARACTER を保持している必要があります。そうでない場合は、変換されます。

*x* は、*y* によって定義された文字が左からトリムされ、*z* によって定義された文字が右からトリムされたストリングです。

*z* が省略される場合は、1 つのブランクを含む CHARACTER(1) NONVARYING ストリングをデフォルトにします。

*y* と *z* が両方とも省略される場合は、両方とも 1 つのブランクを含む CHAR(1) NONVARYING ストリングをデフォルトにします。

## 例

```

dcl Source char value(" *** PL/I's got the Power! *** ");
dcl Target char(length(Source)) varying;

Target = trim(Source, ' ', '* ');
/* "*** PL/I's got the Power!" */

```

## TRUNC

TRUNC は、 $x$  を切り捨ててできる整数値を返します。 $x$  が、正または 0 の場合は、 $x$  より小さいか等しい最も大きい整数値です。 $x$  が負の場合、 $x$  より大きいか等しい最も小さい整数値です。

▶—TRUNC( $x$ )—▶

**x** 実数式。

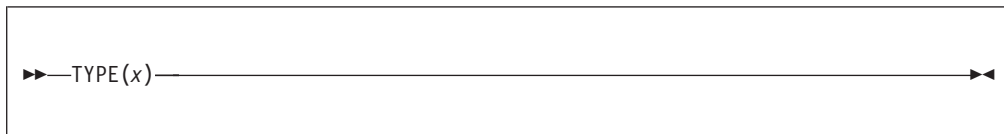
結果の基数、モード、スケール、精度は、 $x$  の基数、モード、およびスケールと同じです。 $x$  が精度  $(p,q)$  を使用した固定小数点であるときは、結果の精度は次の式によって指定されます。

$$(\min(N, \max(p-q+1, 1)), 0)$$

この場合  $N$  は、使用できる最大の桁数です。

### TYPE

TYPE は、ハンドル  $x$  によって位置付けされるタイプ付き構造体または共用体を戻します。

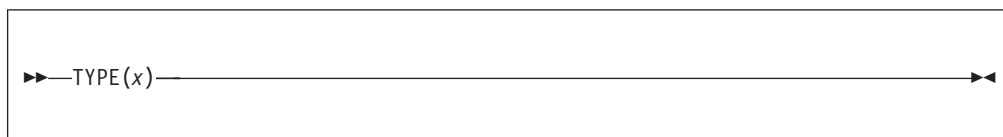


**x**   ハンドル

TYPE(x) は、タイプ付き構造体 (または共用体)  $x$  の参照を解除します。TYPE 組み込み関数の例については、713 ページの『TYPE 疑似変数』を参照してください。

## TYPE 疑似変数

TYPE 疑似変数は、タイプ付き構造体または共用体をハンドル  $x$  によって位置付けられたストレージに割り当てます。



**x**    ハンドル

定義済み構造体  $T$  が与えられると、次の割り当てが有効です。

```

dcl P1 handle T;
dcl P2 handle T;
dcl D1 type T;
dcl D2 type T;


D1 = type(P2); /* Assigns the storage located by P2 to D1 */
type(P1) = type(P2);
type(P1) = D2; /* Assigns D2 to the storage located by P1 */

```

---

## ULENGTH

ULENGTH は、ストリングに保持されている UTF 文字数である FIXED BIN(31) 値を返します。



►►—ULENGTH(*x*)—◄◄

**x** CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

*x* が CHARACTER タイプである場合、ストリングには有効な UTF-8 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

*x* が WIDECHAR タイプである場合、ストリングには有効な UTF-16 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

ULENGTH は、それぞれ CHAR または WIDECHAR 引数に保持された UTF-8 または UTF-16 文字の数を返します。ストリングが正規化されていない場合には文字数は返されません。そのため、例えば、UTF-8 では、小文字の a ウムラウトは、ストリング 'c3\_a4'x で正規化 (標準) 形式で表現するか、ストリング '61\_cc\_88'x として非正規化 (結合) 形式で表現できますが、ULENGTH は、ストリング 'c3\_a4'x に対しては 1 を返し、ストリング '61\_cc\_88'x に対しては 2 を返します。

## ULENGTH8

ULENGTH8 は、ストリングに保持されている UTF 文字が UTF-8 に変換されている場合に必要 CHAR ストリングの長さである FIXED BIN(31) 値を返します。



```

 >>—ULENGTH8(x)—<<

```

**x** CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

*x* が CHARACTER タイプである場合、ULENGTH8 は LENGTH と同じになり、ストリングは有効な UTF-8 データかどうか、検査されません。

*x* が WIDECHAR タイプである場合、ストリングには有効な UTF-16 データが入っている必要があります。また、ULENGTH8 は、*x* が UTF-16 から UTF-8 に変換されている場合に生じる CHAR ストリングの長さを返します。ストリングに有効な UTF-16 データが入っていない場合は、ERROR 条件が発生します。

例えば、*x* が WIDECHAR ストリング '004B\_00E4\_0073\_0065'wx である場合には、次のようになります。

- ULENGTH8(*x*) は 5 を返します



## ULENGTH16

ULENGTH16 は、ストリングに保持されている UTF 文字が UTF-16 に変換されている場合に必要となる WIDECHAR ストリングの長さである FIXED BIN(31) 値を返します。



**x** CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

*x* が CHAR タイプである場合、ストリングには有効な UTF-8 データが入っている必要があります。また、ULENGTH16 は、*x* が UTF-8 から UTF-16 に変換されている場合に生じる WIDECHAR ストリングの長さを返します。ストリングに有効な UTF-8 データが入っていない場合は、ERROR 条件が発生します。

*x* が WIDECHAR タイプである場合、ULENGTH16 は LENGTH と同じになり、ストリングは有効な UTF-16 データかどうか、検査されません。

例えば、*x* が CHARACTER ストリング '4b\_c3\_a4\_73\_65'*x* である場合には、次のようになります。

- ULENGTH16(*x*) は 4 を返します

## UNALLOCATED

UNALLOCATED は、指定されたポインター値が割り振り済みストレージの始まりであるかどうかを示すビット (1) 値を戻します。この組み込み関数を使用するには、CHECK(STORAGE) コンパイル時オプションも指定しなければなりません。



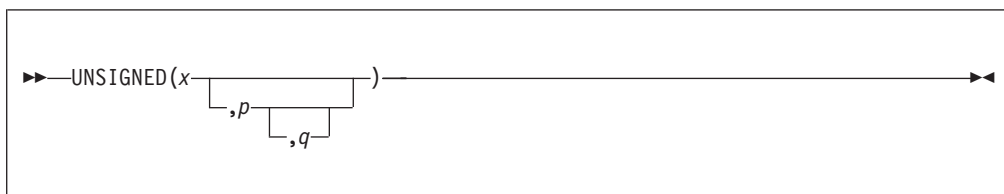
**p** ポインターの式。

指定されたポインター値が、ALLOCATE ステートメントまたは ALLOCATE 組み込み関数によって取得したストレージの始まりでない場合に、UNALLOCATED は bit(1) 値 '1'b を戻します。

なお、UNALLOCATED に渡されたポインターは、最も近いダブルワードに「切り捨て」られ、切り捨てられた値は、同様に切り捨てられた場合のすべての割り振り済みアドレスに対して比較されます。

## UNSIGNED

UNSIGNED は、 $p$  および  $q$  で指定された精度で、 $x$  の符号なしの FIXED BINARY 値を戻します。



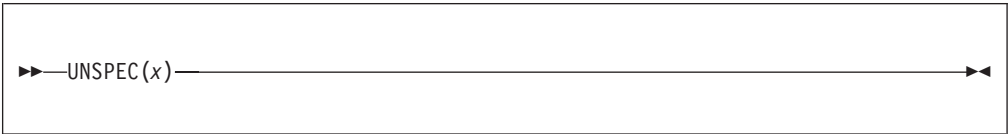
**x** 式。

**p** 整数。演算を通して維持される桁数を指定します。

**q** オプションの符号付き整数。結果の位取り係数を指定します。固定小数点の結果の場合は、 $p$  が指定され、 $q$  が省略されると、位取り係数ゼロがデフォルトになります。

UNSPEC

UNSPEC は、 $x$  の内部コードであるビット・ストリングを戻します。



$x$  スカラー、配列、構造体、または共用体の式。

UNSPEC 組み込み関数は、次の規則に従います。

- コンパイラー・オプション USAGE( UNSPEC(IBM)) の場合
  - 構造体参照と式の UNSPEC は使用できません。
  - 配列の UNSPEC 結果は、BIT の配列になります。
- コンパイラー・オプション USAGE( UNSPEC(ANS)) の場合
  - 集合体の場合、UNSPEC は埋め込みバイトまたはビットを含まないものにだけ使用できます。
  - 結果は常に BIT スカラーです。配列の UNSPEC 結果は、BIT の配列にはなりません。

注: UNSPEC の使用により、プログラムの移植性に影響を与えることがあります。

戻されるビット・ストリングの長さは、表 63 に示すように、 $x$  の属性によって決まります。

表 63. UNSPEC によって戻されるビット・ストリングの長さ

| ビット・ストリングの $x$ の属性<br>長さ |                                              |
|--------------------------|----------------------------------------------|
| 8                        | SIGNED FIXED BINARY(p,q), 1 <= p <= 7        |
|                          | UNSIGNED FIXED BINARY(p,q), 1 <= p <= 8      |
|                          | ORDINAL SIGNED PRECISION(p), 1 <= p <= 7     |
|                          | ORDINAL UNSIGNED PRECISION(p), 1 <= p <= 8   |
| 16                       | SIGNED FIXED BINARY(p,q), 8 <= p <= 15       |
|                          | UNSIGNED FIXED BINARY(p,q), 9 <= p <= 16     |
|                          | ORDINAL SIGNED PRECISION(p), 8 <= p <= 15    |
|                          | ORDINAL UNSIGNED PRECISION(p), 9 <= p <= 16  |
| 32                       | ENTRY LIMITED                                |
|                          | SIGNED FIXED BINARY(p,q), 16 <= p <= 31      |
|                          | UNSIGNED FIXED BINARY(p,q), 17 <= p <= 32    |
|                          | ORDINAL SIGNED PRECISION(p), 16 <= p <= 31   |
|                          | ORDINAL UNSIGNED PRECISION(p), 17 <= p <= 32 |
|                          | FLOAT BINARY(p), 1 <= p <= 21                |
|                          | DFP でない場合は、FLOAT DECIMAL(p), 1 <= p <= 6     |
|                          | DFP である場合は、FLOAT DECIMAL(p), 1 <= p <= 7     |
|                          | OFFSET                                       |
|                          | FILE 定数または変数                                 |
|                          | POINTER                                      |
|                          | HANDLE                                       |

表 63. UNSPEC によって戻されるビット・ストリングの長さ (続き)

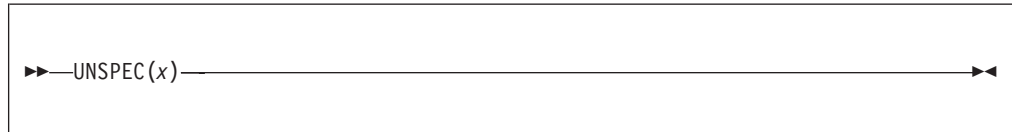
| ビット・ストリングの $x$ の属性<br>長さ |                                                                                                                                                                                                                                                  |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 64                       | SIGNED FIXED BINARY(p), $31 < p$<br>UNSIGNED FIXED BINARY(p), $32 < p$<br>FLOAT BINARY(p), $21 < p < 53$<br>DFP でない場合は、FLOAT DECIMAL(p), $7 \leq p \leq 16$<br>DFP である場合は、FLOAT DECIMAL(p), $8 \leq p \leq 16$<br>LABEL 定数または変数<br>ENTRY 定数または変数 |
| 128                      | FLOAT BINARY(p), $54 \leq p$<br>FLOAT DECIMAL(p), $17 \leq p$<br>TASK                                                                                                                                                                            |
| $n$                      | BIT(n)                                                                                                                                                                                                                                           |
| $8*n$                    | CHARACTER(n)PICTURE (長さ $n$ の文字ストリング値付き)                                                                                                                                                                                                         |
| $16*n$                   | GRAPHIC(n)WIDECHAR(n)                                                                                                                                                                                                                            |
| $16+n$                   | $n$ が $x$ の最大の長さの BIT(n) VARYING                                                                                                                                                                                                                 |
| $16+(8*n)$               | $n$ が $x$ の最大の長さの CHARACTER(n) VARYING                                                                                                                                                                                                           |
| $8+(8*n)$                | $n$ が $x$ の最大の長さの CHARACTER(n) VARYINGZ                                                                                                                                                                                                          |
| $16+(16*n)$              | $n$ が $x$ の最大の長さの GRAPHIC(n) VARYING、 $n$ が $x$ の最大の長さの WIDECHAR(n) VARYING                                                                                                                                                                      |
| $16+(16*n)$              | $n$ が $x$ の最大の長さの GRAPHIC(n) VARYINGZ、 $n$ が $x$ の最大の長さの WIDECHAR(n) VARYINGZ                                                                                                                                                                    |
| $8*(n+16)$               | AREA (n)                                                                                                                                                                                                                                         |
| $8*\text{FLOOR}(n)$      | $n = (p+2)/2$ の FIXED DECIMAL (p,q)                                                                                                                                                                                                              |

プログラム制御データの位置合わせおよびストレージ所要量は、サポートされるシステムをまたがって変更することができます。

$x$  が可変長ストリングの場合は、その 2 バイト接頭部が戻されるビット・ストリングに含まれます。 $x$  が区域の場合は、戻り値は制御情報を含みます。

## UNSPEC 疑似変数

UNSPEC 疑似変数は、直接、ビット値を  $x$  に割り当てます。変換は行いません。必要な場合には、ビット値は、 $x$  の長さが合うように、表 63 に従って、'0'B で右側が埋まります。



**x** 参照。

$x$  が可変長ストリングの場合は、その 2 バイト接頭部が、ビット値が割り当てられるフィールドに含まれます。 $x$  が区域の場合は、制御情報は、受信フィールドに含まれます。

疑似変数は、719 ページの『UNSPEC』で説明されている UNSPEC 組み込み関数の規則に従います。

注: UNSPEC の使用により、プログラムの移植性に影響を与えることがあります。

## 例

```

dcl 1 Str1 nonasgn static,
 2 * fixed bin(15) littleendian init(16), /* '1000'X */
 2 * char init('33'x),
 2 * bit init('1'b),
 2 Ba(4) bit init('1'b, '0'b, '1'b, '0'b),
 2 B3 bit(3) init('111'b),
 2 * char(0);
dcl Bit_Str1 bit(size(Str1)*8);
dcl Bit_Ba bit(dim(Ba)*length(Ba(1)));
dcl Bit_B3 bit(length(B3));

Bit_Ba = unspec(Ba); /* result is scalar '1010'B not an array */
Bit_B3 = unspec(B3); /* '111'B */
Bit_Str1 = unspec(Str1); /* '100033D7'B4 or
 '100033'B4 || '11010111'B */

```

## UPOS

UPOS は、ストリング内の  $n$  番目の UTF 文字の索引である FIXED BIN(31) 値を返します。



$x$  CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

$n$  計算タイプで、必要に応じて FIXED BIN(31) に変換される式。

$x$  が CHARACTER タイプである場合、ストリングには有効な UTF-8 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

$x$  が WIDECHAR タイプである場合、ストリングには有効な UTF-16 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

$n$  が正ではない場合、または  $n$  が ULENGTH( $x$ ) より大きい場合は、ゼロが返されます。それ以外の場合は、 $x$  が CHARACTER タイプの場合は、UPOS( $x,n$ ) は  $n$  番目の UTF-8 文字が開始するバイトの位置を返し、 $x$  が WIDECHAR タイプの場合は、UPOS( $x,n$ ) は  $n$  番目の UTF-16 文字が開始するワイド文字の位置を返します。

例えば、 $x$  が CHARACTER ストリング '4b\_c3\_a4\_66\_65\_72'x である場合には、次のようになります。

- UPOS( $x,1$ ) は 1 を返します
- UPOS( $x,2$ ) は 2 を返します
- UPOS( $x,3$ ) は 4 を返します
- UPOS( $x,4$ ) は 5 を返します
- UPOS( $x,5$ ) は 6 を返します

## UPPERCASE

UPPERCASE は、a から z までの英字すべてを同等な大文字に変換した文字ストリングを返します。



►—UPPERCASE(*x*)—◄

**x** 式。必要に応じ、*x* は文字に変換されます。

UPPERCASE(*x*) は次のステートメントと同等です。

```
TRANSLATE(x,
 'ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ',
 'abcdefghijklmnopqrstuvwxyz')
```



## USUBSTR

USUBSTR は、UTF スtringのサブStringを返します。

►►—USUBSTR( $x, i, j$ )—◄◄

**x** CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

**i** 計算タイプで、必要に応じて FIXED BIN(31) に変換される式。

**j** 計算タイプで、必要に応じて FIXED BIN(31) に変換される式。

$x$  が CHARACTER タイプである場合、Stringには有効な UTF-8 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

$x$  が WIDECHAR タイプである場合、Stringには有効な UTF-16 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

以下の場合に、(STRINGRANGE 条件ではなく) ERROR 条件も発生します。

- $i$  が 1 未満、または
- $j$  がゼロ未満、または
- $i + j - 1$  が ULENGTH( $x$ ) より大きい

$x$  が CHARACTER タイプの場合は、USUBSTR( $x, i, j$ ) は、 $i$  番目の UTF-8 文字で開始する  $x$  の  $j$  UTF-8 文字が入った CHARACTER Stringを返します。

$x$  が WIDECHAR タイプの場合は、USUBSTR( $x, i, j$ ) は、 $i$  番目の UTF-16 文字で開始する  $x$  の  $j$  UTF-16 文字が入った WIDECHAR Stringを返します。

一般的に、USUBSTR( $x, i, j$ ) は SUBSTR( $x, i, j$ ) と同じではありません。

例えば、 $x$  が CHARACTER String '4b\_c3\_a4\_66\_65\_72' $x$  である場合には、次のようになります。

- USUBSTR( $x, 1, 2$ ) は '4b\_c3\_a4' $x$  を返します
- USUBSTR( $x, 2, 1$ ) は 'c3\_a4' $x$  を返します
- USUBSTR( $x, 2, 2$ ) は 'c3\_a4\_66' $x$  を返します
- USUBSTR( $x, 3, 2$ ) は '66\_65' $x$  を返します

## USURROGATE

USURROGATE は、ストリング内の最初の UTF サロゲート・ペアの索引、またはストリングに UTF サロゲート・ペアがない場合はゼロの FIXED BIN(31) 値を返します。

**x** CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

*x* が CHARACTER タイプである場合、ストリングには有効な UTF-8 データが入っている必要があります。ただし、データの妥当性はチェックされません。データが無効な場合は、ERROR 条件は発生せず、プログラムがエラー状態になり、この関数が返す結果は予測不能になります。

*x* が WIDECHAR タイプである場合、ストリングには有効な UTF-16 データが入っている必要があります。ただし、データの妥当性はチェックされません。データが無効な場合は、ERROR 条件は発生せず、プログラムがエラー状態になり、この関数が返す結果は予測不能になります。

例として、音楽のト音記号は、UTF-16 サロゲート・ペア 'D834\_DD1E'wx で表され、したがって、以下のコードでは値 3 がリストされます。

```

dcl w wchar(20) varying;
dcl jx fixed bin;

w = '0020_0020_D834_DD1E'wx


jx = usurrogate(w);

put skip list(jx);

```

## UVALID

UVALID は、ストリングに有効な UTF データが入っている場合はゼロ、ストリングに有効な UTF データが入っていない場合には最初の無効エレメントの索引である、FIXED BIN(31) 値を返します。



**x** CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

**x** が CHARACTER タイプの場合は、UVALID(**x**) は、ストリングに有効な UTF-8 データが入っていれば 0 を返し、それ以外の場合は、最初の無効な UTF-8 データが開始しているバイトの索引を返します。

**x** が WIDECHAR タイプの場合は、UVALID(**x**) は、ストリングに有効な UTF-16 データが入っていれば 0 を返し、それ以外の場合は、最初の無効な UTF-16 データが開始しているワイド文字の索引を返します。

なお、UVALID は、(以下の規則に従って) ストリングに有効な UTF データが入っているかどうかを示します。バイトが特定の文字を表現するために実際に割り振られているかどうかは示しません。

UTF-8 データの場合、バイトの妥当性は、その範囲によって以下のように異なります。

- '00'x から '7f'x: 有効
- '80'x から 'c1'x: 無効
- 'c2'x から 'df'x: 後ろ 2 番目のバイトで、そのバイトが '80'x から 'bf'x の範囲にある場合は有効
- 'e0'x から 'ef'x: 後ろにさらに 2 バイトあり、以下の場合に有効
  - 最初のバイトが 'e0'x で、2 番目と 3 番目のバイトがそれぞれ 'a0'x から 'bf'x、'80'x から 'bf'x の範囲にある場合
  - 最初のバイトが 'e1'x から 'ec'x の範囲にあり、2 番目と 3 番目のバイトが '80'x から 'bf'x の範囲にある場合
  - 最初のバイトが 'ed'x で、2 番目と 3 番目のバイトがそれぞれ '80'x から '9f'x、'80'x から 'bf'x の範囲にある場合
  - 最初のバイトが 'ee'x から 'ef'x の範囲にあり、2 番目と 3 番目のバイトが '80'x から 'bf'x の範囲にある場合
- 'f0'x から 'f4'x: 後ろにさらに 3 バイトあり、以下の場合に有効
  - 最初のバイトが 'f0'x で、2 番目、3 番目、および 4 番目のバイトがそれぞれ '90'x から 'bf'x、'80'x から 'bf'x、'80'x から 'bf'x の範囲にある場合
  - 最初のバイトが 'f1'x から 'f3'x の範囲にあり、2 番目、3 番目、および 4 番目のバイトが '80'x から 'bf'x の範囲にある場合
  - 最初のバイトが 'f4'x で、2 番目、3 番目、および 4 番目のバイトがそれぞれ '80'x から '8f'x、'80'x から 'bf'x、'80'x から 'bf'x の範囲にある場合

- 'f5'x から 'ff'x: 無効


UTF-16 データの場合、ワイド文字の妥当性は、その範囲によって以下のように異なります。

- '0000'wx から '007f'wx: 有効。UTF-8 の場合は 1 バイト
- '0080'wx から '07ff'wx: 有効。UTF-8 の場合は 2 バイト
- '0800'wx から 'd7ff'wx: 有効。UTF-8 の場合は 3 バイト
- 'd800'wx から 'dbff'x: 少なくとも 'dc00'wx 以上の値を持つ 2 番目のワイド文字が後ろにある場合は有効。Unicode サロゲート・ペアであり、UTF-8 の場合は 4 バイト
- 'dc00'wx から 'ffff'wx: 有効。UTF-8 の場合は 3 バイト

---

UWIDTH

UWIDTH は、ストリング内の  $n$  番目の UTF 文字の幅である FIXED BIN(31) 値を返します。



►—UWIDTH( $x,n$ )—◄

$x$  CHARACTER または WIDECHAR タイプが必要な式。

$n$  計算タイプで、必要に応じて FIXED BIN(31) に変換される式。

$x$  が CHARACTER タイプである場合、ストリングには有効な UTF-8 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

$x$  が WIDECHAR タイプである場合、ストリングには有効な UTF-16 データが入っている必要があります。そうでない場合は、ERROR 条件が発生します。

$n$  が正ではない場合、または  $n$  が ULENGTH( $x$ ) より大きい場合は、ゼロが返されます。それ以外の場合は、 $x$  が CHARACTER タイプの場合は、UWIDTH( $x,n$ ) は  $n$  番目の UTF-8 文字の幅を返し、 $x$  が WIDECHAR タイプの場合は、UWIDTH( $x,n$ ) は  $n$  番目の UTF-16 文字の幅を返します。

例えば、 $x$  が CHARACTER ストリング '4b\_c3\_a4\_66\_65\_72'x である場合には、次のようになります。

- UWIDTH( $x,1$ ) は 1 を返します
- UWIDTH( $x,2$ ) は 2 を返します
- UWIDTH( $x,3$ ) は 1 を返します
- UWIDTH( $x,4$ ) は 1 を返します
- UWIDTH( $x,5$ ) は 1 を返します

## VALID

VALID は、次の条件のもとで、'1'B である BIT(1) 値を戻します。

- $x$  がピクチャーでその内容が  $x$  のピクチャー指定に有効な場合。
- $x$  が FIXED DECIMAL で、 $x$  のデータは有効な固定小数点である場合。

これらの条件と合わない場合は、結果は '0'B です。

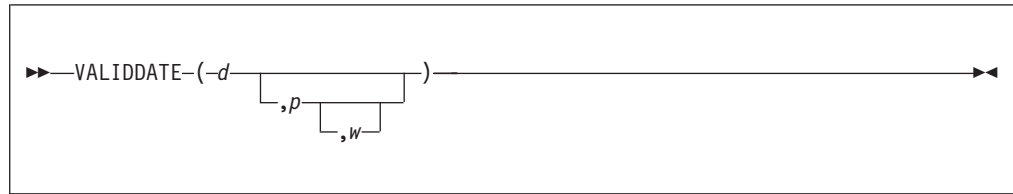


▶▶—VALID( $x$ )—◀◀

**x** 各ピクチャーまたは固定小数点タイプでの参照。

## VALIDDATE

文字列 *d* がパターン *p* と一致する日付/時刻値を保持する場合は、VALIDDATE は、'1'B を返します。



**d** 日付を表す文字列式。

*d* には、パターン *p* に従って日時を表す文字列式として入力日を指定します。

*d* に計算タイプ (必須) および文字タイプを保持する必要があります。そうでない場合は、*d* は文字に変換されます。

**p** サポートされている日付/時刻パターンの 1 つ。

存在する場合は、*d* の日付/時刻パターンを指定します。*p* が指定されない場合は、デフォルトの日付/時刻のパターン「YYYYMMDDHHMISS999」が想定されます。

*p* に計算タイプ (必須) および文字タイプを保持する必要があります。そうでない場合は、*p* は文字に変換されます。

**w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、*w* は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

許可されるパターンを 428 ページの表 50 にリストしてあります。リリアン形式の説明については、426 ページの『日付/時刻組み込み関数』を参照してください。

パターンに句読文字が含まれている場合、VALIDDATE はそれに一致する文字が入力文字列に含まれているかを確認します。例えばパターン YYYY-MM-DD の場合、VALIDDATE は 2008-03-14 を受け入れますが、2008.03.14 は受け入れません。

## 例

```

dcl duedate char(8);
dcl (b1,b2) bit(1);


duedate = '19950228';
b1 = validdate(duedate, 'YYYYMMDD'); /* b1 = '1'b */

duedate = '02301995';
b2 = validdate(duedate, 'DDMMYYYY'); /* b2 = '0'b */

```

## VARGLIST

VARGLIST は、引数の変数番号を持つプロシージャに渡された最初のオプション・パラメーターのアドレスを戻します。




▶—VARGLIST()—▶

VARGLIST は、最後のパラメーターが LIST 属性をとるプロシージャの中でのみ使用されます。



## VARGSIZE

VARGSIZE は、byvalue を渡された場合に変数がスタック上で占めるバイト数を返します。



▶—VARGSIZE(x)—▶

**x** 任意のデータ・タイプ、データ編成、位置合わせ、およびストレージ・クラスを持つ変数。ただし、下記のものは除きます。

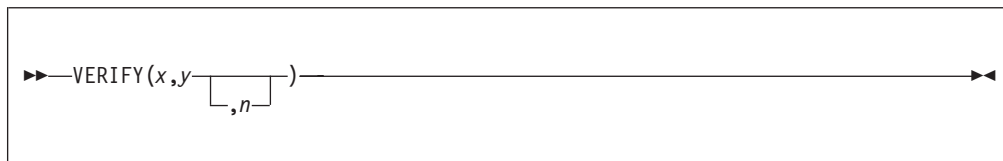
*x* は、次のものであることはできません。

- 位置合わせされていない固定長ビット・ストリングである **BASED** 変数、**DEFINED** 変数、パラメーター変数、添え字付き変数、構造変数、または共用体基底付き変数。
- 最初または最後の基本エレメントが位置合わせされていない固定長のビット・ストリングである小構造体または共用体 (ただし、その小構造体を含んでいる大構造体または共用体の最初または最後のエレメントになっている場合を除く)。
- **BASED** 属性、**DEFINED** 属性、またはパラメーター属性を持つ大構造体か共用体、またはパラメーターである大構造体か共用体で、位置合わせされていない固定長のビット・ストリングを最初または最後のエレメントとするもの。
- 連結ストレージにない変数。

VARGSIZE(*x*) は、byvalue を渡された場合に *x* がスタック上で占めるバイト数を返します。この値は、少なくとも SIZE(*x*) と同じ大きさになります。SIZE(*x*) によって戻される値が 4 バイトの倍数まで切り上げられる必要がある場合にはこの値はそれより大きくなります。

VARGSIZE は、最後のパラメーターが **LIST** 属性をとるプロシージャーの中でのみ使用されなければなりません。

`x` のすべての文字、ワイド文字、グラフィック、またはビットが `y` にある場合は、値ゼロが戻されます。`x` がヌル・ストリングの場合は、値ゼロが戻されます。`x` がヌル・ストリングでなく、`y` がヌル・ストリングの場合は、`n` の値が戻されます。`n` のデフォルトは 1 です。



VERIFY は、2 番目および 3 番目の引数がリテラル、VALUE 属性を使用して宣言された名前付き定数、または制限付き式のいずれかである場合に、最も機能を発揮します。

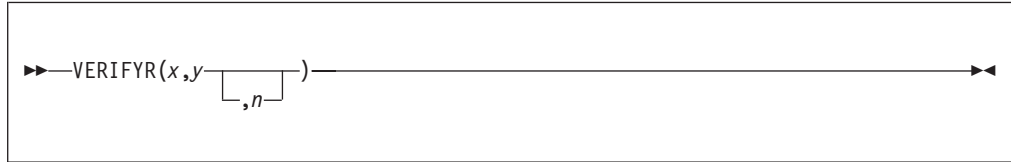
### 例

他の VERIFY 組み込み関数の例については、673 ページの『SEARCH』を参照してください。

## VERIFYR

VERIFYR 関数は、次のこと以外は VERIFY 組み込み関数と同じ演算を行います。

- 検査は、右から左に行われます。
- $n$  のデフォルトは LENGTH( $x$ )。



$0 \leq n \leq \text{LENGTH}(x)$  でないと、STRINGRANGE 条件 (割り込み可能な場合) が発生します。  $n = 0$  の場合は、結果はゼロです。

BIFPREC コンパイラー・オプションによって、戻される結果の精度が決まります。

引数の説明については、733 ページの『VERIFY』を参照してください。

## 例

```
X = 'a b ' ; /* Two blanks in each space */
Y = ' ' ; /* One blank */
N = length(X); /* N = 6 */
I = verifyr(X,Y,N); /* I = 4 */

do while (I > 0);
 display ('Nonblank at position ' || trim(I));
 N = I - 1;
 I = verifyr(X,Y,N);
end;
```

DO ループの最初のパススルーのあとで、 $N=3$  および VERIFYR( $X,Y,N$ ) は 1 を戻します。2 回目のパスのあとで、 $N=0$  で VERIFYR( $X,Y,N$ ) は 0 を戻し、ループが終了します。別の例については、675 ページの『SEARCHR』を参照してください。

## WCHARVAL

WCHARVAL は、整数に対応する WIDECHAR(1) 値を戻します。

▶—WCHARVAL—(— $n$ —)——▶

**n** 式。必要な場合には、UNSIGNED FIXED BIN(16) に変換されます。

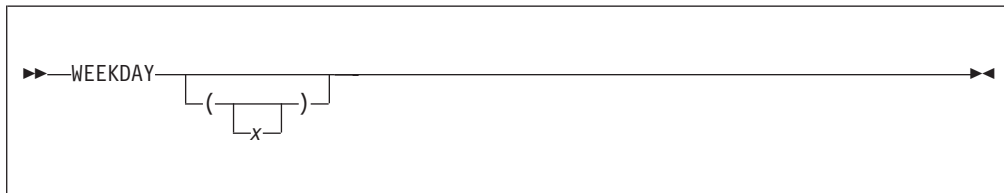
**n** がビッグ・エンディアン・フォーマットの場合、WCHARVAL(**n**) のビット値は **n** と同じですが (つまり、UNSPEC(WCHARVAL(**n**)) は UNSPEC(**n**) と等しい)、属性は WIDECHAR(1) です。

WCHARVAL は RANK の逆です (ワイド文字に適用した場合)。

---

WEEKDAY

WEEKDAY は、曜日に変換された日数  $x$  を FIXED BINARY(31,0) 値で戻します。ここで 1= 日曜日、2= 月曜日、... 7= 土曜日です。  $x$  が指定されない場合は、今日の日付と見なされます。



**x** 式。存在する場合は、 $x$  は、入力データを日数として指定します。存在しない場合は、 $x$  は、DAYS() であると想定されます。

$x$  がなく、今日の日付がシステムから利用できない場合は、結果のゼロが戻されます。

$x$  は、計算タイプでなければなりません。また、必要な場合には、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

WEEKDAY の例については、676 ページの『SECS』を参照してください。

## WHIGH

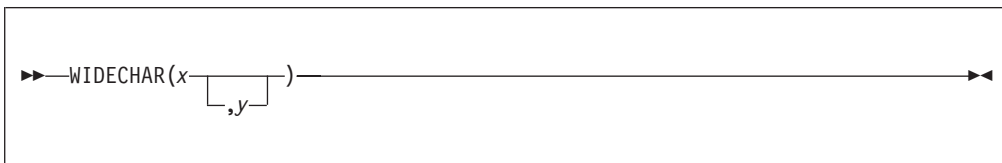
WHIGH は、それぞれ最大のワイド文字値 (16 進 FFFF) を持つワイド文字で構成される、長さ  $x$  のワイド文字ストリングを戻します。

A diagram showing a wide character string. It consists of a horizontal line with a double arrow pointing right at the left end and a double arrow pointing left at the right end. The text "WHIGH(x)" is centered on the line.

**x** 式。必要な場合には、 $x$  は正の実数固定小数点の 2 進数の値に変換されます。  
 $x = 0$  の場合は、結果はヌルのワイド文字ストリングです。

## WIDECHAR

WIDECHAR は、 $y$  で指定された長さでワイド文字値  $x$  を戻します。



省略形: WCHAR

**x** 式。

$n$  は、計算タイプでなくてはなりません。

$x$  の値は、チェックされません。

**y** 式。必要な場合には、 $y$  は、実数の固定小数点の 2 進数の値に変換されます。

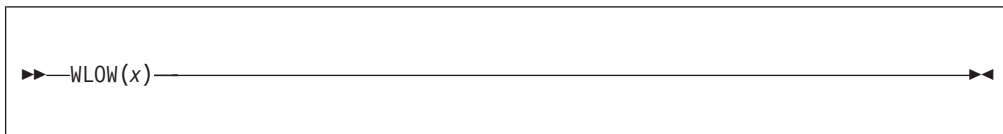
$y$  が省略される場合は、長さはタイプ変換の規則によって決められます。

$y$  は負であってはなりません。

$y = 0$  の場合は、結果はヌルのワイド文字ストリングです。

## WLOW

WLOW は、それぞれ最小のワイド文字値 (16 進 0000) を持つワイド文字で構成される、長さ  $x$  のワイド文字ストリングを戻します。



**x** 式。必要な場合には、 $x$  は正の実数固定小数点の 2 進数の値に変換されます。  
 $x = 0$  の場合は、結果はヌルのワイド文字ストリングです。



## XMLCHAR

XMLCHAR 組み込み関数は、構造体のデータを XML としてバッファにダンプします。XMLCHAR は、バッファに書き込まれたバイトの数を戻します。バッファが小さすぎる場合、構造体データは切り捨てられ、バッファが構造体を収容するのに必要なバイト数が戻されます。

►► XMLCHAR (—*x*—, —*p*—, —*n*—) —►◄

**x** 構造体参照。

**p** ターゲット・バッファのアドレス。

**n** ターゲット・バッファの長さ。

バッファ長は、計算タイプを保持している必要があり、FIXED BINARY(31,0) に変換されます。

バッファ長は、負数であってはなりません。

構造体参照の *x* には、ストリングや数値データなどの計算可能なデータのみが含まれていなければなりません。構造体参照の *x* には配列が含まれていることがありますが、構造体参照自体が配列である場合は、完全に添え字が付いていなければなりません。

構造体参照の *x* には、副構造体が含まれていることがありますが、含まれている副構造体は名前の変わりに \* を使用することはできません。ただし、基本エレメントの名前として \* を使用することはできますが、その場合、ターゲット・バッファに名前のないエレメントは書き込まれません。

xml が作成されると、以下ようになります。

- 構造体のすべての名前が、最初は「<」と「>」で、最後は「</」と「>」で囲まれて書き込まれます。
- 数値とビット・データは、文字に変換されます。
- 先行空白と末尾空白は、可能な限りトリムされます。

## 例

このコードがフラグメント化されている場合

```

dcl buffer char(800);
dcl written fixed bin(31);
dcl next pointer;
dcl left fixed bin(31);
dcl
 1 a,
 2 a1,
 3 b1 char(8),
 3 b2 char(8),
 2 a2,
 3 c1 fixed bin,
 3 c2 fixed dec(5,1);

```

```

b1 = ' t1';
b2 = 't2';
c1 = 17;
c2 = -29;
next = addr(buffer);
left = stg(buffer);
written = xmlchar(a, next, left);
next += written;
left -= written;

```

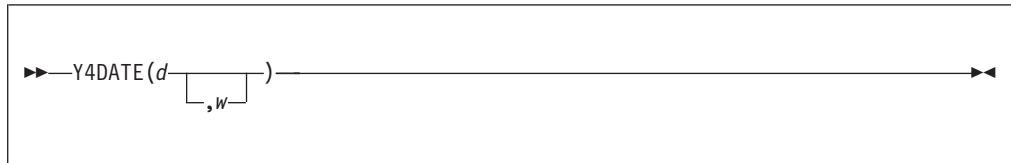
以下のバイトがバッファーに書き込まれ、書き込みは、72 にセットされます。

```
<A><A1><B1>t1</B1><B2>t2</B2></A1><A2><C1>17</C1><C2>-29.0</C2></A2>
```

デフォルトでは、生成された XML 内の変数名は、すべて大文字であることに注意してください。XML コンパイラー・オプションの CASE(ASIS) サブオプションを使用すると、宣言されたとおりの大 / 小文字で名前を表示することを指定できます。

## Y4DATE

Y4DATE は、パターン 'YYMMDD' を使って日付の値をとり、2 桁の年を 4 桁の年にして日付の値を戻します。



**d** 日付を表すストリング式。

*d* に計算タイプ (必須) および文字タイプを保持する必要があります。そうでない場合は、*d* は文字に変換されます。

**w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、*w* は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

戻り値は、属性 CHAR(8) NONVARYING をとっており、次のように計算されます。

```

dcl y2 pic'99';
dcl y4 pic'9999';
dcl cc pic'99';

y2 = substr(d,1,2);
cc = w/100;

if y2 < mod(w,100) then
 y4 = 100*cc + 100 + y2;
else
 y4 = 100*cc + y2;

return(y4 || substr(d,3));

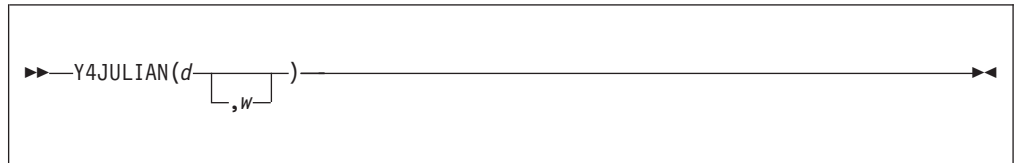
```

Y4DATE('990101',1950) は '19990101' を戻します。

Y4DATE('000101',1950) は '20000101' を戻します。

## Y4JULIAN

Y4JULIAN は、パターン 'YYDDD' を使って日付の値をとり、2 桁の年を 4 桁の年にして日付の値を戻します。



- d** 日付を表すstring式。 `d` の長さは、少なくとも 5 でなければなりません。5 より長い場合は、余分の文字を先行ブランクにしなければなりません。  
`d` に計算タイプ (必須) および文字タイプを保持する必要があります。そうでないと、文字に変換されます。
- w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、`w` は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

戻り値は、属性 CHAR(7) NONVARYING をとっており、次のように計算されます。

```

dcl y2 pic'99';
dcl y4 pic'9999';
dcl c pic'99';

y2 = substr(d,1,2);
cc = w/100;

if y2 < mod(w,100) then
 y4 = 100*cc + 100 + y2;
else
 y4 = 100*cc + y2;

return(y4 || substr(d,3));

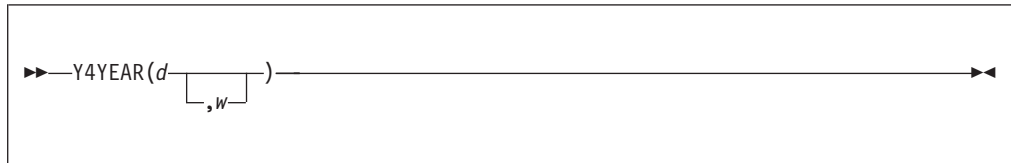
```

Y4JULIAN('99001',1950) は '1999001' を戻します。

Y4JULIAN('00001',1950) は '2000001' を戻します。

## Y4YEAR

Y4YEAR は、パターン 'YY' を使って日付の値をとり、2 桁の年を 4 桁の年にして日付の値を戻します。



- d** 日付を表すstring式。 *d* の長さは、少なくとも 2 でなければなりません。2 より長い場合は、余分の文字を先行ブランクにしなければなりません。  
*d* に計算タイプ (必須) および文字タイプを保持する必要があります。そうでないと、文字に変換されます。
- w** 整数に変換できる式 (1950 など) を指定します。負の場合、コードを実行するときに年の値から減算されるようにオフセットを指定します。省略される場合は、*w* は、WINDOW コンパイル時オプションに指定された値にデフォルトで設定されます。

戻り値は、属性 CHAR(4) NONVARYING を持っており、次のように計算されます。

```

dcl y2 pic'99';
dcl y4 pic'9999';
dcl c pic'99';

y2 = d;
cc = w/100;

if y2 < mod(w,100) then
 y4 = 100*cc + 100 + y2;
else
 y4 = 100*cc + y2;

return(y4);

```

Y4YEAR('99',1950) は '1999' を戻します。

Y4YEAR('00',1950) は '2000' を戻します。

---

## 第 20 章 タイプ付き関数

|                         |     |                  |     |
|-------------------------|-----|------------------|-----|
| タイプ付き関数の呼び出し . . . . .  | 745 | LAST . . . . .   | 747 |
| タイプ付き関数の引数の指定 . . . . . | 745 | 例 . . . . .      | 747 |
| タイプ付き関数の要旨 . . . . .    | 746 | NEW . . . . .    | 748 |
| BIND . . . . .          | 746 | RESPEC . . . . . | 748 |
| CAST . . . . .          | 746 | SIZE . . . . .   | 748 |
| FIRST . . . . .         | 747 | VALUE . . . . .  | 749 |
| 例 . . . . .             | 747 |                  |     |

タイプ付き関数を使用して、定義されたタイプを操作できます。タイプ付き関数は、次の方法で組み込み関数と区別します。

- 1 つ以上の引数が定義済みタイプである。
- それらを宣言することはできない。
- 引数は、( と ) との記号ではなく、(: と :) との複合記号で囲む。

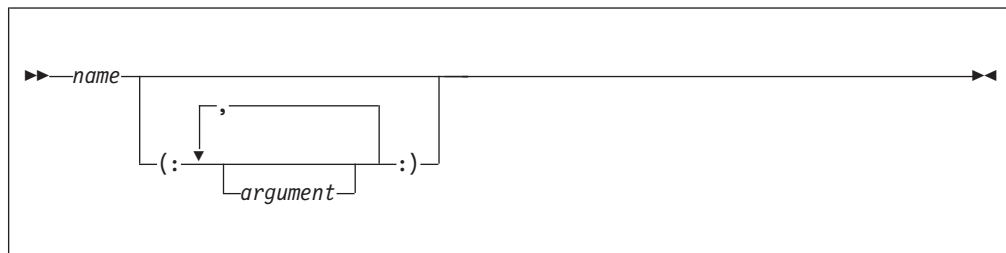
この章では、タイプ付き関数がアルファベット順にリストされています。一般的に、次のようなフォーマットで記述します。

- 参照構文を示す見出し
- 戻り値の説明
- 引数の説明
- 関数の使用時のその他の修飾

---

### タイプ付き関数の呼び出し

次の構文を使ってタイプ付き関数を呼び出します。



タイプ付き関数の引数は、区切り文字 (: および :) で囲みます。

---

### タイプ付き関数の引数の指定

タイプ付き関数の引数には、タイプ名 (別名、名前付き構造体および共用体、序数) と、その他のデータ・タイプが可能です。

## タイプ付き関数の要旨

表 64. タイプ付き関数

| 関数     | 説明                                        |
|--------|-------------------------------------------|
| BIND   | ポインタをタイプのハンドルに変換します。                      |
| CAST   | C の変換規則を使用して、式を指定のタイプに変換します。              |
| FIRST  | 最初の値を序数セットに戻します。                          |
| LAST   | 最後の値を序数セットに戻します。                          |
| NEW    | 構造体タイプのためにストレージを獲得し、獲得されたストレージにハンドルに戻します。 |
| RESPEC | 式のビット・パターンを変更せずに、式の属性を指定のタイプに変更します。       |
| SIZE   | タイプを表すために必要なストレージの量に戻します。                 |
| VALUE  | 対応する構造体型を持つ変数の初期化または代入を行います。              |

### BIND

BIND は、ポインタ  $p$  を構造体のタイプ  $t$  のハンドルに変換します。BIND は、タイプ付き構造体のメンバーのロケータとして使用できます。

▶▶—BIND—(:— $t$ —,— $p$ —:)—▶▶

$t$  構造体タイプの名前

$p$  ポインタの式

### CAST

CAST は、C の変換規則を使用して、式  $x$  をタイプ  $t$  に変換します。

▶▶—CAST—(:— $t$ —,— $x$ —:)—▶▶

$t$  「C タイプ」のスカラーの名前

$x$  同じく「C タイプ」のスカラー式

サポートされる「C タイプ」は次のとおりです。

- REAL FIXED BIN( $p,0$ )
- REAL FIXED DEC( $p,q$ ) ただし  $p \geq q$  かつ  $q \geq 0$
- NATIVE FLOAT
- ORDINAL
- POINTER または HANDLE

- LIMITED ENTRY

$x$  が FLOAT または FIXED DEC の場合、 $t$  は FLOAT、FIXED、または ORDINAL でなければならず、 $t$  が FLOAT または FIXED DEC の場合、 $x$  は FLOAT、FIXED、または ORDINAL でなければなりません。

必要な変換はすべて、ANSI C 規則に従って行われます。つまり、例えば CAST によって SIZE は発生せず、また負の値が UNSIGNED にキャストされた場合、結果は大きな正数になります。

IEEE DFP は、CAST によってサポートされません。

---

## FIRST

FIRST は、序数セット  $t$  の最初の値を戻します。

▶▶—FIRST—(:— $t$ —:)—▶▶

$t$  序数タイプの名前

### 例

```
define ordinal Color (Red,
 Orange,
 Yellow,
 Green,
 Blue,
 Indigo,
 Violet);

display (ordinalname(first(:Color:))); /* RED */
```

---

## LAST

LAST は、序数セット  $t$  の最後の値を戻します。

▶▶—LAST—(:— $t$ —:)—▶▶

$t$  序数タイプの名前

### 例

```
define ordinal Color (Red,
 Orange,
 Yellow,
 Green,
 Blue,
 Indigo,
```



## LAST

```
Violet);

display (ordinalname(last(:Color:))); /* VIOLET */
```

## NEW

NEW は、構造体タイプ  $t$  のヒープ・ストレージを獲得し、獲得したストレージにハンドルを戻します。

▶▶—NEW—(:— $t$ —:)—▶▶

$t$  構造体タイプの名前

NEW(: $t$ ) は、 BIND(:  $t$ , ALLOC( SIZE(: $t$ ) ) :) と等価です。

## RESPEC

RESPEC は、式のビット値を変更せずに、式  $x$  の属性をタイプ  $t$  に変更します。

▶▶—RESPEC—(:— $t$ —,— $x$ —:)—▶▶

$t$  スカラー型の名前

$p$  スカラー式

$x$  は  $t$  と同じでなければならず、  $x$  または  $t$  のどちらかが UNALIGNED BIT である場合は、両方とも UNALIGNED BIT にする必要があります (この場合、関数は何も行わないので意味のないものになります)。

例えば、 $t$  が属性 LIMITED ENTRY を持つタイプである場合、 RESPEC(  $t$ , sysnull() ) は「ヌル」関数ポインターを戻します。

## SIZE

SIZE は、タイプ  $t$  で宣言された変数に必要なストレージ必要量を戻します。

▶▶—SIZE—(:— $t$ —:)—▶▶

$t$  構造体タイプまたは共用体タイプの名前

## VALUE

VALUE 型付き関数は、対応する構造体型を持つ変数の初期化または代入を行います。

►—VALUE(*restricted-expression*)—◄

**t** 型付き構造体の名前。VALUE 関数は、型付き構造体 *t* のインスタンスをその初期値とともに返します。

VALUE 関数が部分的に初期化されている構造体型で使用されると、初期化されていないバイトおよびビットはゼロに設定されます。

VALUE 関数は、INITIAL 属性を持つ要素を含まない構造体型では使用できません。

VALUE 関数は、DEFINE STRUCTURE ステートメントの要素で、INIT 形式の INITIAL 属性と共に使用できます。ただし、INIT CALL および INIT TO を、DEFINE STRUCTURE ステートメントの要素で VALUE 関数と共に使用することはできません。

以下の例は、VALUE 関数の使用方法を示しています。

```
define struct
 1 b,
 2 b1 fixed bin init(17),
 2 b2 fixed bin init(19);

define struct
 1 c,
 2 c1 type b init(value(: b :)),
 2 c2 fixed bin init(23);

dcl x type c static init(value(: c :));
dcl y type c;

y = value(: c :);
```

**VALUE**

## 第 21 章 プリプロセッサの機能

|                                       |     |                               |     |
|---------------------------------------|-----|-------------------------------|-----|
| プリプロセッサ・オプション . . . . .               | 752 | QUOTE . . . . .               | 771 |
| プリプロセッサ走査 . . . . .                   | 753 | REPEAT . . . . .              | 772 |
| プリプロセッサ・ステートメント . . . . .             | 754 | SUBSTR . . . . .              | 772 |
| プリプロセッサ変数とデータ・エレメント . . . . .         | 756 | SYSPARM . . . . .             | 773 |
| プリプロセッサ参照とプリプロセッサ式 . . . . .          | 757 | SYSTEM . . . . .              | 773 |
| プリプロセッサ名の有効範囲 . . . . .               | 757 | SYSVERSION . . . . .          | 773 |
| プリプロセッサ・プロシージャ . . . . .              | 758 | TRANSLATE . . . . .           | 774 |
| プリプロセッサ・プロシージャの引数とパラ<br>メータ . . . . . | 759 | TRIM . . . . .                | 774 |
| %PROCEDURE ステートメント . . . . .          | 760 | UPPERCASE . . . . .           | 774 |
| プリプロセッサ RETURN ステートメント . . . . .      | 761 | VERIFY . . . . .              | 775 |
| プリプロセッサ ANSWER ステートメント . . . . .      | 761 | プリプロセッサ・ステートメント . . . . .     | 775 |
| プリプロセッサ組み込み関数 . . . . .               | 764 | %ACTIVATE ステートメント . . . . .   | 776 |
| COLLATE . . . . .                     | 764 | %ASSIGNMENT ステートメント . . . . . | 776 |
| COMMENT . . . . .                     | 765 | %DEACTIVATE ステートメント . . . . . | 777 |
| COMPILEDATE . . . . .                 | 765 | %DECLARE ステートメント . . . . .    | 777 |
| COMPILETIME . . . . .                 | 765 | %DO ステートメント . . . . .         | 780 |
| COPY . . . . .                        | 766 | %END ステートメント . . . . .        | 780 |
| COUNTER . . . . .                     | 767 | %GO TO ステートメント . . . . .      | 781 |
| DIMENSION . . . . .                   | 767 | %IF ステートメント . . . . .         | 781 |
| HBOUND . . . . .                      | 767 | %INCLUDE ステートメント . . . . .    | 782 |
| INDEX . . . . .                       | 768 | %INSCAN ステートメント . . . . .     | 783 |
| LBOUND . . . . .                      | 768 | %ITERATE ステートメント . . . . .    | 783 |
| LENGTH . . . . .                      | 769 | %LEAVE ステートメント . . . . .      | 784 |
| LOWERCASE . . . . .                   | 769 | %NOTE ステートメント . . . . .       | 784 |
| MACCOL . . . . .                      | 769 | %ヌル・ステートメント . . . . .         | 785 |
| MACLMAR . . . . .                     | 769 | %REPLACE ステートメント . . . . .    | 785 |
| MACNAME . . . . .                     | 770 | %SELECT ステートメント . . . . .     | 786 |
| MACRMAR . . . . .                     | 770 | %XINCLUDE ステートメント . . . . .   | 786 |
| MAX . . . . .                         | 770 | %XINSCAN ステートメント . . . . .    | 786 |
| MIN . . . . .                         | 770 | プリプロセッサの例 . . . . .           | 787 |
| PARMSET . . . . .                     | 771 | 例 1 . . . . .                 | 787 |

コンパイラには、ソース・プログラムを変更できるように、MACRO プリプロセッサが備わっています。MACRO あるいは PP(MACRO) コンパイル時オプションを指定すれば、コンパイルの前にプリプロセッサが実行されます。MACRO プリプロセッサは、プリプロセッサ入力を走査し、プリプロセッサ出力を生成します。プリプロセッサ出力は、コンパイラへの入力として利用することができます。

この章では、読者が本書全体にわたって説明されている PL/I 言語をすでに理解していることを前提に、プリプロセッサを説明します。

プリプロセッサ入力 は、文字ストリングです。下記のもの混在しています。

- プリプロセッサ・ステートメント。<sup>1</sup> プリプロセッサ・ステートメントは、プリプロセッサ走査によって検出されたときに実行されます (ただし、プリブ

1. 説明を明確にするために、本章では、プリプロセッサ・ステートメントにはすべて % 記号が付いています (実際には、プリプロセッサ・プロシージャ内で使用するときは、% 記号を付けません)。

ロセッサ・プロシージャーは例外であり、これは呼び出されてから実行されます。プリプロセッサ・ステートメント (プリプロセッサ・プロシージャー内にある場合を除く) の頭にはパーセント記号 (%) を付けます。ブランクを使用して、パーセント記号とそのステートメントの残りの部分とを区切ることもできます。

プリプロセッサは、プリプロセッサ・ステートメントを実行し、それに応じて入力テキストを変更します。プリプロセッサ・ステートメントを使用すれば、下記のいずれかの方法で入力テキストの一部を変更することができます。

- 入力テキスト内の任意の ID (およびオプションの引数リスト) をテキストの任意のストリングに変更することができます。
- 入力テキストのどの部分を、プリプロセッサ出力の中にコピーするかを指定することができます。
- ライブラリーに収められている文字のストリングを、プリプロセッサ入力の中に組み込むことができます。
- ・ リスト制御ステートメント。プログラムの印刷リストのレイアウトを制御するためのものです。これらのステートメントは、インソース・リスト (プリプロセッサ入力) とソース・リスト (プリプロセッサ出力) の両方に影響を与えます。これらについては、215 ページの『第 9 章 ステートメントとディレクティブ』で説明しています。
- ・ 入力テキスト。プリプロセッサ・ステートメントでもなくリスト制御ステートメントでもないプリプロセッサ入力です。入力テキストは PL/I 原始プログラムでもその他のテキストでも構いませんが、その入力テキストは、プリプロセッサ走査による入力テキストの処理 (下記を参照) に矛盾するものであってはなりません。

プリプロセッサ出力<sup>2</sup> は、文字のストリングで、下記のものが混在しています。

- ・ リスト制御ステートメント。プリプロセッサ入力に含まれていて、走査されたリスト制御ステートメントが、プリプロセッサ出力の中にコピーされます。
- ・ 出力テキスト。走査され、おそらく変更された入力テキストが、プリプロセッサ出力に組み入れられます。

コンパイル時オプションを指定することによって、プリプロセッサ入力を印刷したり、プリプロセッサ出力または入出力を印刷したり、データ・セットに書き出したりすることができます。

---

## プリプロセッサ・オプション

MACRO または PP(MACRO) コンパイル時オプションを指定すると、プリプロセッサが呼び出されます。

また、プリプロセッサだけに影響するコンパイラ・オプションを指定することもできます。オプションによっては、プリプロセッサの振る舞いを大きく変更するものもあります。特に重要なオプションは次のものです。

---

2. プリプロセッサによって置き換えられた出力は、定様式で示してあります。実際に実行したときに生成される置き換え後の出力は定様式になっていません。

**FIXED**

FIXED 変数の処理方法を指定します。このオプションには、次の 2 つのサブオプションがあります。

**BINARY**

FIXED 変数を BINARY として処理するように指定します。

**DECIMAL**

FIXED 変数を DECIMAL として処理するように指定します。

**CASE**

入力テキストを大文字に変換するかどうかを指定します。このオプションには、次の 2 つのサブオプションがあります。

**ASIS**

入力テキストを「現状のまま」にするように指定します。

**UPPER**

入力テキストを大文字に変換するように指定します。

**RESCAN**

このオプションは、プリプロセッサがテキストを再スキャンするときに、ID の大/小文字を扱う方法を指定します。このオプションには、次の 2 つのサブオプションがあります。

**ASIS**

再スキャンは大文字と小文字を区別します。

**UPPER**

再スキャンは大文字と小文字を区別しません。

**DBCS**

このオプションは、プリプロセッサが、テキストの置換時に DBCS を正規化するかどうかを指定します。このオプションには、次の 2 つのサブオプションがあります。

**EXACT**

入力テキストは「現状のまま」残され、プリプロセッサは <kk.B> と <kk>B を異なる名前として扱います。

**INEXACT**

入力テキストは「正規化」され、プリプロセッサは <kk.B> と <kk>B を同じ名前の 2 つのバージョンとして扱います。

これらのオプションのデフォルトは、FIXED(DECIMAL)、CASE(UPPER)、RESCAN (ASIS) および DBCS(INEXACT) です。

これらのオプションの指定方法について詳しくは、「プログラミング・ガイド」を参照してください。

---

## プリプロセッサ走査

プリプロセッサは、プリプロセッサ入力の始まりから走査を開始し、1 文字ずつ順に走査します。

デフォルトでは CASE(UPPER) オプションが有効で、プリプロセッサは、入力に含まれている小文字 (コメントおよびストリング定数内の小文字を除く) を大文字に変換します。ただし、CASE(ASIS) サブオプションが有効になっている場合、テキストは現状のままになります。

### プリプロセッサ・ステートメント

プリプロセッサ・ステートメントは検出されたときに実行されます。以下の処理を行うことができます。

- %DECLARE ステートメントを使用して、およびラベル接頭語として書くことによって、プリプロセッサを定義する。

プリプロセッサ変数を明示的に宣言しなければ、診断メッセージが出され、変数にはデフォルト属性 CHARACTER が与えられます。ただし、それ以後に実行される %ACTIVATE ステートメント内にその変数を書かない限り、その変数は置き換えのために活動化されません。変数は、プリプロセッサ・ステートメント内で参照できます。

- %DECLARE または %ACTIVATE ステートメントを使用して ID を活動化することにより、置き換え処理を開始させる。これについては、『入力テキスト』の項で説明します。
- %DEACTIVATE ステートメントを使用して ID を非活動化することにより、置き換え処理を終了させる。
- %NOTE ステートメントを使用してコンパイラ・リスト内にメッセージを生成する。
- 文字ストリングをプリプロセッサ入力に入れる。
- %GOTO、%IF、%NULL、%DO、または %END ステートメントを使用してプリプロセッサ入力内の別の場所からプリプロセッサ走査を続行させる。
- % 割り当て、または %DO ステートメントを使用してプリプロセッサ変数の値を変更する。
- %PROCEDURE、%RETURN、および %END ステートメントを使用してプリプロセッサ・プロシーチャーを定義する。プリプロセッサ式の中の関数参照によって、プリプロセッサ・プロシーチャーを呼び出すことができます。あるいは、関数プロシーチャー名がアクティブであれば、プリプロセッサによる入力テキストの走査中に関数参照が検出されると、プリプロセッサ・プロシーチャーが呼び出されます。

### リスト制御ステートメント

プリプロセッサ・プロシーチャーに含まれていないリスト制御ステートメントは、プリプロセッサ出力の中にコピーされます (各ステートメントごとに 1 行ずつ使われます)。

### 入力テキスト

アクティブ ID が新しい値で書き換えられた後の入力テキストが、プリプロセッサ出力の中にコピーされます。無効文字 (文字定数またはコメントの一部) は、プリプロセッサ出力内ではブランクで置き換えられます。置き換えを行うかどうかを判別するために、入力テキストが走査されて、下記のものが探索されます。

- この PL/I 文字セットの一部ではない文字。これらは区切り文字と見なされ、変更されずにそのままプリプロセッサ出力の中にコピーされます。
- PL/I 文字定数や PL/I コメント。これらは変更されずに、プリプロセッサによって入力テキストからプリプロセッサ出力に移されます。活動プリプロセッサ・プロシージャへの引数リスト内に書かれている場合は、この限りではありません。ただし、この場合、入力マージンと出力マージンが異なっているときには、ストリングやコメントが数行にまたがっていると、入力行数と出力行数が一致しないことがあります。出力は常に F フォーマットで行われ、そのマージンは 2 桁目と 72 桁目に決まっているので、特に入力が V フォーマットであれば、上記のことが起こります。このような場合、出力行の番号付けからも、入力行数と出力行数が一致していないことが分かります。
- アクティブ ID。新しい値で置き換えられる必要のある ID は、まず活動化しておかなければ置き換えられません。最初に、ID を %DECLARE ステートメントに挿入することで、その ID を活動化することができます。%DEACTIVATE ステートメントを実行すれば、その ID を非活動化することができます。その後、%ACTIVATE ステートメントまたは %DECLARE ステートメントを実行すれば、その ID を再び活動化することができます。

アクティブなプリプロセッサ変数の名前に一致する ID は、プリプロセッサ出力内ではその変数の値で置き換えられます。

ID が、アクティブなプリプロセッサ関数 (プログラマー作成の関数でも組み込み関数でもよい) の名前に一致したときは、そのプロシージャが呼び出されて、その呼び出しが、戻り値で置き換えられます。

ID を活動化するとき、RESCAN オプションと NORESCAN オプションのどちらかを指定することができます。NORESCAN オプションが適用されていると、値がただちにプリプロセッサ出力の中に挿入されます。RESCAN オプションが適用されていると、再走査が行われて、その値がテストされ、その値 (または値の一部) を別の値で書き換えることができるかどうか判別されます。別の値で置き換えられないときは、値がプリプロセッサ出力の中に挿入されます。別の値で置き換えることができるときは、置き換えをそれ以上できなくなるまで置き換え処理が続けられます。このようにして、置き換え可能なものをすべて置き換えたあとにだけ、プリプロセッサ出力への値の挿入が行われます。

置き換わる値には、% 記号、対になっていない引用符、対になっていないコメント区切り文字などが含まれてはなりません。

プリプロセッサ・ステートメントは、通常のテキストとは別の行に存在している必要があります。例外が 1 つあり、それは、形式 %; で指定されたヌル・ステートメントです。このようなヌル・ステートメントは、置換テキストと通常のテキストを連結するために使用できます。例えば、入力テキストが次のものであったとします。

```
%dcl A char;
%A = 'B';

dcl A%C fixed bin(31);
```

この場合、プリプロセッサは次の出力テキストを生成します。



```
dc1 BC fixed bin(31);
```

プリプロセッサ入力内の最後の文字を超えて走査が試みられたときに、走査が終了します。その時点で、プリプロセッサ出力が完成しているので、コンパイルを開始することができます。

---

## プリプロセッサ変数とデータ・エレメント

プリプロセッサ変数は、%DECLARE ステートメントで **FIXED** 属性または **CHARACTER** 属性を付けて指定します。他の属性をプリプロセッサ変数に対して宣言することはできません。また、属性を繰り返してはなりません。(ただし、プリプロセッサでは他の属性を提供しています。) すべての変数は、**STATIC** ストレージ・クラスと同等のストレージを持ちます。

%DECLARE 内の変数ごとに **FIXED** または **CHARACTER** 属性を指定することは必須ではありませんが、これを行うことは常にベスト・プラクティスとなります。

プリプロセッサ・データのタイプは、コード化算術データとストリング・データであり、次のいずれかです。

### **FIXED**

**FIXED** 属性を指定して宣言したプリプロセッサ変数には、デフォルトで属性 **DECIMAL(5,0)** が与えられます。

**FIXED(BINARY)** マクロ・プリプロセッサ・オプションが有効になっている場合は、属性 **BINARY(31,0)** が与えられます。

いずれの場合も、初期値 **0** が与えられます。

小数値はサポートされていません。

### **CHARACTER**

**CHARACTER** 属性を付けて宣言したプリプロセッサ変数には、**VARYING** 属性が与えられます。

初期値 **"** が与えられます。

### **BIT**

プリプロセッサ・ビット変数はありませんが、ビット定数を使用することはでき、比較演算子、連結演算子 (ビット・オペランドとともに使用するとき)、**NOT** 演算子、および **PARMSET** 組み込み関数が実行されるとビット値が作られます。 **%IF** ステートメント内のプリプロセッサ式は、ビット値に変換されます。

プリプロセッサによってサポートされる唯一の数値定数は、必要に応じて符号付きとなる、スケールなしの整数 (17 または -29 など) です。

プリプロセッサによってサポートされる唯一のストリング定数は、16 進表記を使用して指定される可能性のある文字およびビット・ストリングのいずれか (つまり、**X** または **BX** ストリング) です。

ストリングの反復因数を使用することはできません。ただし、**COPY** 組み込み関数を使用して定数を複製できます。

## プリプロセッサ参照とプリプロセッサ式

『第 4 章 式および参照』で説明したのと同じ方法で、プリプロセッサ参照をコーディングできますし、プリプロセッサ式が計算されます。ただし、以下の点に注意してください。

- プリプロセッサ式オペランドとして指定できるのは、プリプロセッサ変数、プリプロセッサ・プロシージャ参照、固定小数点 10 進定数、ビット定数、文字定数、およびプリプロセッサ組み込み関数参照だけです。
- 配列をプリプロセッサ・プロシージャの外部で宣言する (複数のプロシージャ間で共有できるように) ことはできますが、プロシージャの外部から参照することはできません (配列照会組み込み関数への最初の引数として参照する場合を除き)。
- 累乗演算記号 (\*\*) は使えません。
- FIXED(DECIMAL) オプションを指定した場合
  - 算術演算の場合、精度 (5,0) の 10 進数演算だけが行われます。つまり、各オペランドが精度 (5,0) の 10 進固定小数点整数値に変換された後で演算が行われ、10 進固定小数点の演算結果も精度 (5,0) に変換されます。例えば、 $3/5$  という式は、0.6 ではなく 0 と評価されます。

算術値に変換される文字値は、整数 (符号は省略可能) の形をしていなければなりません。ヌル・ストリングは 0 に変換されます。

- 固定小数点値がビット値に変換されると、常に、長さが  $\text{CEIL}(3.32*5)$ 、つまり 17 のストリングになります。
- 固定小数点値を文字値に変換すると、結果は常に長さ 8 のストリングになり、PL/I プログラム内で `FIXED DEC(5,0)` 値を `CHARACTER` に変換した結果と同じ値が得られます。
- FIXED(BINARY) オプションを指定した場合
  - 算術演算の場合、精度 (31,0) の 2 進演算だけが行われます。つまり、各オペランドが精度 (31,0) の 2 進固定小数点整数値に変換された後で演算が行われ、2 進固定小数点の演算結果も精度 (31,0) に変換されます。例えば、 $3/5$  という式は、0.6 ではなく 0 と評価されます。

算術値に変換される文字値は、整数 (符号は省略可能) の形をしていなければなりません。ヌル・ストリングは 0 に変換されます。

- 固定小数点値がビット値に変換されると、常に、長さが 31 のストリングになります。
- 固定小数点値が文字値に変換されると、先行ブランクが削除されるので、結果は可変長のストリングになります。

## プリプロセッサ名の有効範囲

プリプロセッサ名の有効範囲は、その名前がどこで宣言されているかによって決まります。プリプロセッサ・プロシージャ内で宣言されている名前の有効範囲は、そのプロシージャです。組み込まれたストリング内で宣言されている名前の有効範囲は、そのストリングと、そのストリングが組み込まれた後で走査されたすべての入力テキスト (ただし、同じ名前の宣言を含んでいるプリプロセッサ・ブ

ロシージャーは除く) です。その他の名前の有効範囲は、プリプロセッサ入力全体です (ただし、同じ名前の宣言を含んでいるプリプロセッサ・プロシージャーは除きます)。

---

## プリプロセッサ・プロシージャー

プリプロセッサ・プロシージャーは、%PROCEDURE ステートメントと %END ステートメントで区切られます。プロシージャーが RETURNS 属性を指定して定義されていない場合、プロシージャーに ANSWER ステートメントがなくても構いませんが、RETURN ステートメントがあってはなりません。逆に、プロシージャーが関数である場合は、プロシージャーに少なくとも 1 つの RETURN ステートメントが必要で、ANSWER ステートメントがあってはなりません。

プリプロセッサ・プロシージャー内で使用できるステートメントおよびグループは、次のとおりです。

- ・ プリプロセッサ ANSWER ステートメント
- ・ プリプロセッサ代入ステートメント
- ・ プリプロセッサ DECLARE ステートメント
- ・ プリプロセッサ DO グループ
- ・ プリプロセッサ GO TO ステートメント (プリプロセッサ・プロシージャー内の GO TO ステートメントは、そのプロシージャーの外へ制御権を移動することはできません。)
- ・ プリプロセッサ IF ステートメント
- ・ プリプロセッサ ITERATE ステートメント
- ・ プリプロセッサ LEAVE ステートメント
- ・ プリプロセッサ・ヌル・ステートメント
- ・ プリプロセッサ NOTE ステートメント
- ・ プリプロセッサ REPLACE ステートメント
- ・ プリプロセッサ RETURN ステートメント
- ・ プリプロセッサ SELECT グループ
- ・ %PAGE、%SKIP、%PRINT、および %NOPRINT リスト制御ステートメント

プリプロセッサ・プロシージャー内のプリプロセッサ・ステートメントの頭には、% 記号を付けません。

プリプロセッサ・プロシージャーをネストすることはできません。プリプロセッサ・プロシージャー内にプリプロセッサ ENTRY 宣言があってはなりません。

プリプロセッサ・プロシージャーの入り口名と、そのプロシージャーへ渡される引数リストをまとめて、関数参照 といいます。プリプロセッサ式の中の関数参照によって、プリプロセッサ・プロシージャーを呼び出すことができます。あるいは、関数プロシージャー名がアクティブであれば、プリプロセッサによる入力テキストの走査中に関数参照が検出されると、プリプロセッサ・プロシージャーが呼び出されます。プリプロセッサ・プロシージャーの入り口名を %DECLARE ステートメントで指定する必要はありません。

入り口名がアクティブであれば、そのプリプロセッサ・プロシージャは呼び出される前に走査される必要はありません。ただし、そのプリプロセッサ・プロシージャは下記のどちらかの中になければなりません。

- プリプロセッサ入力
- 呼び出し点の前に挿入されていたストリング

プリプロセッサ出力では、関数参照とその引数リストが、プリプロセッサ関数から返された値（つまり、RETURN ステートメント内のプリプロセッサ式の値）で書き換えられます。

## プリプロセッサ・プロシージャの引数とパラメーター

プロシージャ参照内の引数の個数と %PROCEDURE ステートメント内のパラメーターの個数とが同じである必要はありません。引数は、パラメーター・リストとの突き合わせが行われる前に計算されます。定位置引数の個数がパラメーターの個数よりも多い場合には、右側にある余分の引数が無視されます。（引数が関数参照であるときは、その引数が最終的には無視されるものであっても、その関数が呼び出されて実行されます。）関数参照によってセットされなかったパラメーターには、ゼロの値 (FIXED パラメーターの場合) またはヌル・ストリング (CHARACTER パラメーターの場合) が指定されます。

パラメーターを、関数参照によって複数回設定しないでください。ただし、あるパラメーターの値を複数回指定した（例えば、定位置とキーワードの両方で）ときは、エラーと診断されますが、左端に設定した値が呼び出しで使われます。

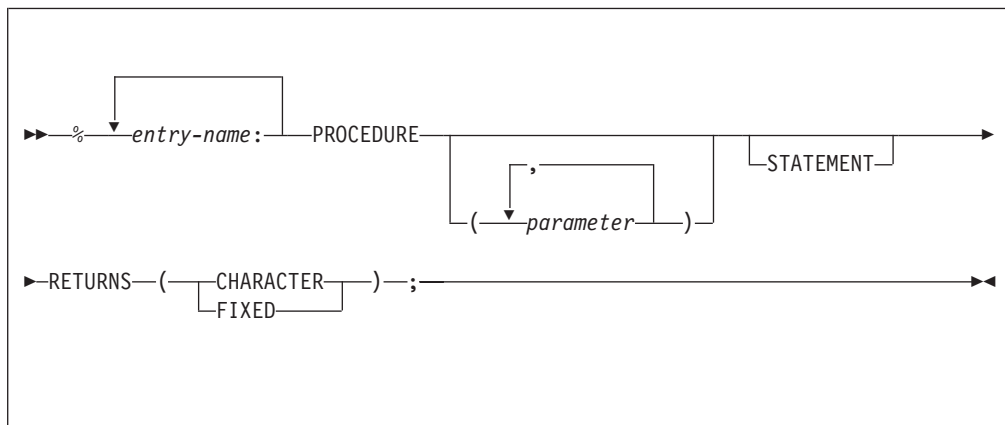
関数参照がプリプロセッサ・ステートメント内にあるときは、通常の方法で引数がパラメーターに関係付けられます。125 ページの『プロシージャへの引数の引き渡し』の項で説明したのと同じ方法で、仮引数が作られることがありますし、引数は対応するパラメーターの属性に変換されます。

関数参照が入力テキスト内に存在すると、仮引数が常に作成されます。引数は、ストリングとして解釈されます。コンマまたは右括弧を区切り文字として使用してください。ただし、対になっている括弧、対になっている単一引用符、または対になっているコメント区切り文字の間にあるコンマや右括弧は、区切り文字の働きをしません。例えば、定位置引数リスト (A(B,C),D) の引数は、ストリング A(B,C) とストリング D の 2 つです。引数内のブランク（先行ブランクや末尾ブランクも）は意味がありますが、そのようなブランクが行の終わりまで続いており、しかも引用符やコメント区切り文字で囲まれていない場合は、1 つのブランクで置き換えられます。

入力テキスト内で関数参照が検出されると、各引数が走査され、置き換えが可能かどうか調べられます。この置換アクティビティーは、その関数に渡された引数の個数に影響しません。置き換え処理によって引数内にコンマや括弧が入れても、それらは区切り文字とは見なされず、単に引数内の文字と見なされます。キーワード呼び出しが使われている場合、そのキーワード自体は置換アクティビティーに適しません。置き換えがすべて終わると、その結果の各引数が、その関数入り口名を持つプリプロセッサ・プロシージャ・ステートメント内の対応するパラメーターの属性で指定されるタイプに変換されます。

### %PROCEDURE ステートメント

%PROCEDURE ステートメントは、%END ステートメントと対になっており、プリプロセッサ・プロシージャーを区切る働きをします。 %PROCEDURE ステートメントの構文は次のとおりです。



省略形: %PROC

#### parameter

関数プロシージャーのパラメーターを指定します。

#### STATEMENT

関数参照が入力テキスト内にあり、しかもこの STATEMENT オプションが指定されているときは、次のとおりです。

- 引数を定位置引数リスト内に指定することも、キーワード参照によって指定することもできます。
- 参照の終わりは、セミコロンで示します。置き換えが行われると、このセミコロンは保持されません。

例えば、次のステートメントで始まるプリプロセッサ・プロシージャーがあるとして。

```
%FIND:PROC(A,B,C) STATEMENT...
```

これをプリプロセッサ式から呼び出すときは、関数参照の形式は次のとおりでなければなりません。

```
FIND(arg1,arg2,arg3)
```

関数参照が入力テキスト内にあるときは、下記のどの形式 (または類似の形式) で参照しても、このプロシージャーを呼び出すことができ、すべて同じ結果になります。

```
FIND(X,Y,Z);
```

```
FIND B(Y) C(Z) A(X);
```

```
FIND(X) C(Z) B(Y);
```

```
FIND(,Y,Z) A(X);
```

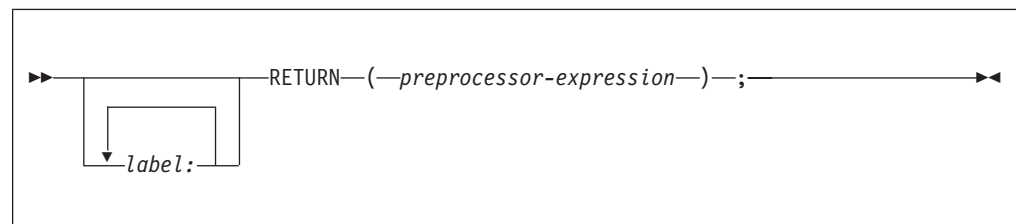
**RETURNS**

CHARACTER または FIXED 属性を RETURNS 属性リスト内に指定することにより、この関数プロシージャから返される値の属性を示さなければなりません。

**プリプロセッサ RETURN ステートメント**

プリプロセッサ RETURN ステートメントは、プリプロセッサ・プロシージャ内だけで、プロシージャに RETURNS 属性が指定されている場合に限り使用できます。したがって、このステートメントの頭には % 記号を付けてはなりません。このステートメントは、このプリプロセッサ・プロシージャの呼び出し点に値と制御を返します。RETURNS 属性を持つそれぞれのプリプロセッサ・プロシージャ内には、1 つ以上の RETURN ステートメントがなければなりません。

プリプロセッサ関数プロシージャから呼び出し点に返される値は、そのプロシージャ内の RETURN ステートメント内のプリプロセッサ式 (preprocessor-expression) で指定された値です。プリプロセッサ RETURN ステートメントの構文は、次のとおりです。

**preprocessor-expression**

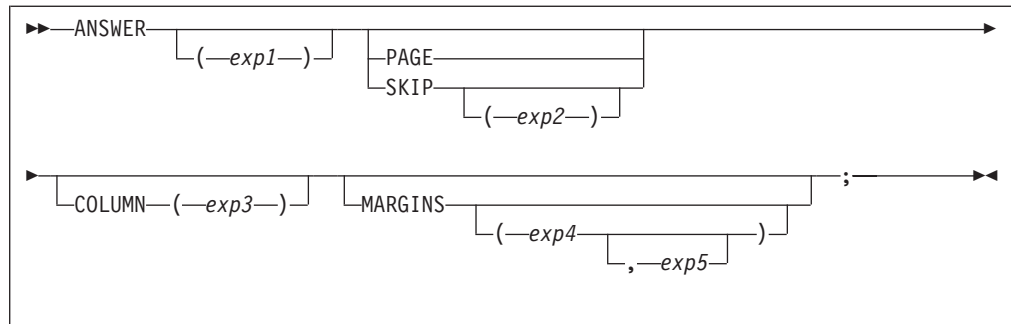
この値は、%PROCEDURE ステートメント内に指定されている RETURNS 属性に合わせて変換されてから、呼び出し点に戻されます。

**プリプロセッサ ANSWER ステートメント**

プリプロセッサ ANSWER ステートメントは、RETURNS 属性のないプリプロセッサ・プロシージャ内でだけ使用できます。

ANSWER ステートメントは、テキストを作成するか、またはほかのプリプロセッサ・プロシージャを呼び出します。あるいは、その両方を行います。応答されたテキストは、ソース・テキスト内のプリプロセッサ・プロシージャの呼び出しを置換します。ANSWER ステートメントは 1 つのプリプロセッサ・プロシージャ内で何回でも使うことができます。





**省略形：**ANSWER の場合は ANS、COLUMN の場合は COL、 MARGINS の場合は MAR です。

#### exp1

ANSWER テキストを表す文字式を表します。ANSWER テキストは、単一文字ストリング定数か、または合成されたプリプロセッサ式のいずれかにすることができます。

テキストが式の場合、式の計算は通常の方法で行われ、結果は単一文字ストリングに変換されます。

SCAN または RESCAN が有効な場合には、置換とプリプロセッサ・プロシージャ呼び出しのために、その文字ストリングが走査されます。この置換はそのプリプロセッサ・プロシージャの範囲内で行われ、応答されたテキストが戻される範囲内で行われることは**ありません**。それから、応答されたテキストがソース・テキスト内のプリプロセッサ呼び出しの点に挿入されます。テキストがソース・テキストに戻されたあとは、いかなる置換アクティビティーが行われても、そのテキストが走査されることはありません。

ストリング内の置換アクティビティーは、ソース・テキストの走査と置換のときに用いられるのと同じ規則に従って行われます。763 ページの『例』を参照してください。

#### PAGE

%PAGE ディレクティブを生成することによって、応答テキストを出力ソースの新規のページに強制的に入れるようにします。

#### SKIP

応答テキストを出力ソースの新規の行に強制的に入れるようにします。exp2 は、スキップされる行数を指定している算術式を表します。exp2 を省略した場合、デフォルトは 1 です。

#### COLUMN

ソース・プログラム行に応答テキストが入られるときの開始カラムを指定します。exp3 の値は、ソース・プログラム行内の応答テキストの開始カラム番号を示す算術式を表します。

#### MARGINS

出力テキストが出力レコード内に置かれる場所を指定します。exp4 の値は、出力テキストの左マージンを示す算術式を表します。exp5 の値は、出力テキストの右マージンを示す算術式を表します。

*exp5* に指定される値は、MACLMAR (左マージン) 組み込み関数と MACRMAR (右マージン) 組み込み関数によって戻される範囲内になければなりません。

ANSWER ステートメントの MARGINS オプションを指定しない場合の、デフォルトの値は MARGINS(MACLMAR,MACRMAR) です。オペランドを指定しないで MARGINS オプションを指定する場合は、デフォルトの値は MARGINS(MACCOL,MACRMAR) です。

同じプリプロセッサ・プロシージャールの中で、式を指定した RETURN ステートメントと ANSWER ステートメントの両方を一緒に使うことはできません。

## 例

```
%dcl (Expression, Single_string) entry;
%dcl (Deactivated_macro, Statement_function) entry;
%dcl Deactivated_variable character;
%deact Deactivated_variable, Deactivated_macro;
%Deactivated_variable = '** value of deactivated variable **';

%Deactivated_macro: procedure returns(character);
 return('** value of deactivated macro **');
%end;

%Statement_function: procedure(key1) stmt returns(fixed);
 dcl key1 fixed;
 return(key1 + key1);
%end;

%Expression: procedure;
 ANS(Counter) skip;
 ANS(Deactivated_macro) skip;
 ANS(Deactivated_variable) skip;
 /* The following is invalid: */
 /* ANS(Statement_function Key1(7)); */
%end;

%Single_string: procedure;
 ANS('Counter') skip;
 ANS('Deactivated_macro') skip;
 ANS('Deactivated_variable') skip;
 ANS('Statement_function Key1(7);') skip;
%end;

Expression /* Generates: */
 /* 00001 */
 /* ** value of deactivated macro ** */
 /* ** value of deactivated variable ** */

Single_string /* Generates: */
 /* Counter */
 /* Deactivated_macro */
 /* Deactivated_variable */
 /* 14 */
```



## プリプロセッサ組み込み関数

プリプロセッサ組み込み関数 と呼ばれる 1 組の事前定義関数の 1 つを、関数参照で呼び出すことができます。これらの組み込み関数の呼び出し方法は、プログラマー定義の関数の呼び出し方法と同じですが、正しい数の引数を指定しなければならない点だけが異なります。

プリプロセッサ組み込み関数は、次のとおりです。

|             |           |         |            |
|-------------|-----------|---------|------------|
| COLLATE     | INDEX     | MAX     | SYSTEM     |
| COMMENT     | LBOUND    | MIN     | SYSVERSION |
| COMPILEDATE | LENGTH    | PARMSET | TRANSLATE  |
| COMPILETIME | LOWERCASE | QUOTE   | TRIM       |
| COPY        | MACCOL    | REPEAT  | UPPERCASE  |
| COUNTER     | MACLMAR   | SUBSTR  | VERIFY     |
| DIMENSION   | MACNAME   | SYSPARM |            |
| HBOUND      | MACRMAR   |         |            |

プリプロセッサは、入力テキスト内のプリプロセッサ組み込み関数参照を、その組み込み関数名がアクティブであるときにだけ、実行します。 %DECLARE ステートメントまたは %ACTIVATE ステートメントを使用すれば、組み込み関数を活性化することができます。

プリプロセッサ・ステートメント内のプリプロセッサ組み込み関数名は、別の意味を持つように宣言されていない限り、組み込み関数として常にアクティブになっています。

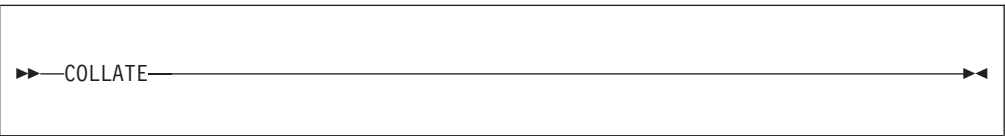
プリプロセッサ組み込み関数名をユーザー定義のプリプロセッサ・プロシージャの名前として使用している場合は、その名前を参照すると、組み込み関数ではなくそのプロシージャを参照することになります。そのような場合に、あるプリプロセッサ・プロシージャ内でその組み込み関数を使用するときは、BUILTIN 属性を指定してその ID を宣言しておかなければなりません。

次のプリプロセッサ組み込み関数の場合、引数は不要であり、ヌル引数を指定してはなりません。

|             |         |         |            |
|-------------|---------|---------|------------|
| COLLATE     | COUNTER | MACNAME | SYSTEM     |
| COMPILEDATE | MACCOL  | MACRMAR | SYSVERSION |
| COMPILETIME | MACLMAR | SYSPARM |            |

### COLLATE

COLLATE は、あり得る 256 の文字値を照合順序で 1 つずつ含む、長さ 256 の CHARACTER スtringを戻します。



## COMMENT

COMMENT は、CHARACTER 式をコメントに変換します。

▶▶—COMMENT(*x*)—◀◀

**x** コメントに変換される式。

*x* のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

*x* は /\* と \*/ で囲まれます。

*x* に /\* または \*/ の複合記号が入っている場合には、それぞれ、/> と </ によって置き換えられます。

## COMPILEDATE

COMPILEDATE は、コンパイル日時が入った長さ 17 の CHARACTER スtring を戻します。

▶▶—COMPILEDATE—◀◀

COMPILEDATE から戻されるStringのフォーマットは、次のとおりです。

|             |        |
|-------------|--------|
| <b>yyyy</b> | 現在の年   |
| <b>mm</b>   | 現在の月   |
| <b>dd</b>   | 現在の日   |
| <b>hh</b>   | 現在の時   |
| <b>mm</b>   | 現在の分   |
| <b>ss</b>   | 現在の秒   |
| <b>ttt</b>  | 現在のミリ秒 |

時間帯と精度は、システムによって決まります。

次の例は、プログラムの実行中に、COMPILEDATE から返されたStringを印刷する方法を示しています。

```
%DECLARE COMP_DATE CHAR;
%COMP_DATE=QUOTE(COMPILEDATE);
PUT EDIT (COMP_DATE) (A);
```

## COMPILETIME

COMPILETIME は、コンパイル日時が入った長さ 18 の CHARACTER String を戻します。

►►—COMPILETIME—◄◄

COMPILETIME から戻される字符串のフォーマットは、次のとおりです。

**DD** 日  
 . ピリオド  
**MMM** 月 (JAN、FEB、MAR など)  
 . ピリオド  
**YY** 年  
**b** ブランク  
**HH** 時  
 . ピリオド  
**MM** 分  
 . ピリオド  
**SS** 秒

「日」の先行ゼロはブランクで置き換えられます。その他の先行ゼロは消去されません。

時刻機構が使用可能でない場合は、返される字符串の最後の 8 文字は 00.00.00 となります。

次の例は、プログラムの実行中に、COMPILETIME から返された字符串を印刷する方法を示しています。

```
%DECLARE COMP_TIME CHAR;
%COMP_TIME=QUOTE(COMPILETIME);
PUT EDIT (COMP_TIME) (A);
```

## COPY

COPY は、字符串  $x$  のコピーを  $y$  回連結して構成される CHARACTER 字符串を戻します。

►►—COPY( $x,y$ )—◄◄

**x** 式。

$x$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

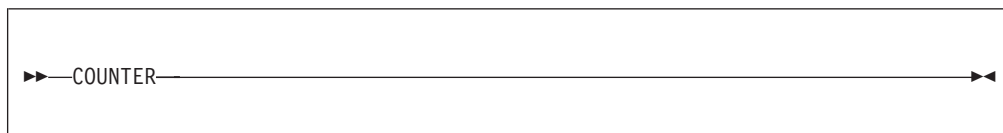
**y** 繰り返し回数を指定する式。  $y$  のタイプは FIXED でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$y$  は負であってはなりません。

$y$  がゼロの場合は、結果はヌル・字符串です。

## COUNTER

COUNTER は、10 進数が入った長さ 5 の CHARACTER スtring です。返される値は、最初の呼び出しの場合は 00001 で、その後呼び出されるたびに 1 ずつ増えます。

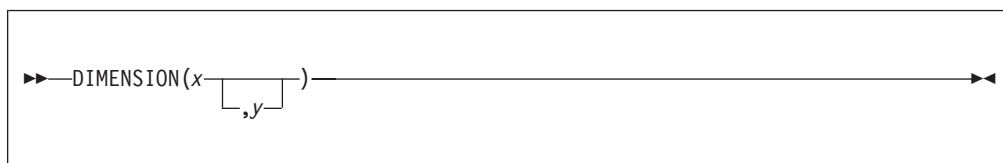


COUNTER が 99999 回呼び出されると、次の呼び出し時に診断メッセージが出され、00000 が返されます。その直後の呼び出しは、最初の呼び出しとして扱われます。

COUNTER 組み込み関数は、固有の名前を生成したり、数を数えたりするときに使用することができます。

## DIMENSION

DIMENSION は、 $x$  の次元  $y$  の現行エクステントを指定する FIXED 値を返します。



省略形: DIM

**x** 配列参照。  $x$  の次元数は、 $y$  よりも小さくてはなりません。

**y**  $x$  の特定の次元を指定する式。

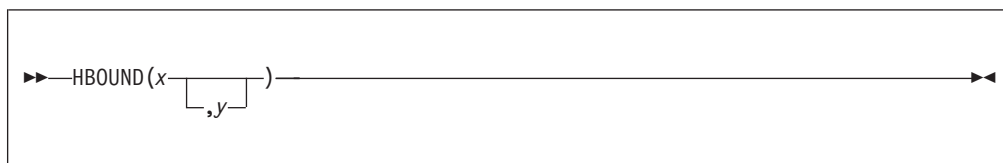
$y$  のタイプは FIXED でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$y$  は、1 以上でなければなりません。 $y$  が提供されない場合は、デフォルトを 1 にします。

配列が 1 次の場合のみ、 $y$  を省略できます。

## HBOUND

HBOUND は、 $x$  の次元  $y$  の現行の上限を FIXED 値で返します。



**x** 配列参照。  $x$  の次元数は、 $y$  よりも小さくてはなりません。

**y**  $x$  の特定の次元を指定する式。

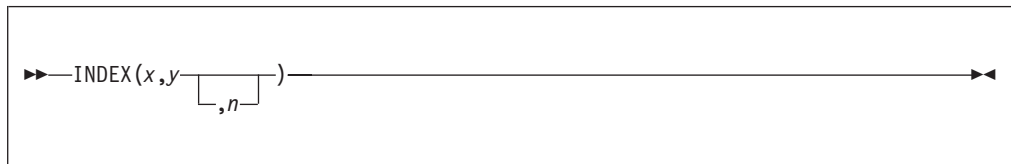
$y$  のタイプは **FIXED** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$y$  は、1 以上でなければなりません。 $y$  が提供されない場合は、デフォルトを 1 にします。

配列が 1 次の場合のみ、 $y$  を省略できます。

## INDEX

**INDEX** は、 $y$  と等しいサブストリングの  $x$  内の開始位置を示す **FIXED** 値を返します。また、 $x$  の処理を開始する位置を指定することもできます。



**x** 検索される式。

$x$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**y** 検索のターゲット式。

$y$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**n**  $n$  は、処理を開始する  $x$  内の位置を指定します。

$n$  のタイプは **FIXED** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

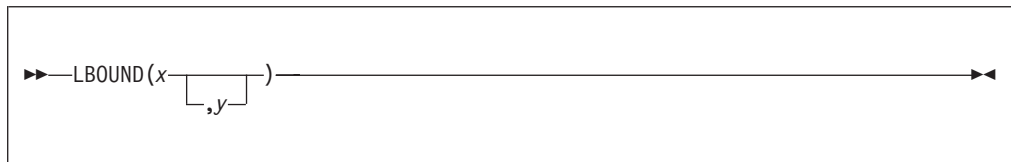
$x$  内で  $y$  が発生しない場合、または  $x$  か  $y$  のどちらかが長さゼロがある場合は、値ゼロが返されます。

$n$  は 0 より大きく、かつ  $1 + \text{LENGTH}(x)$  を超えないことが必要です。

$n = \text{LENGTH}(x) + 1$  の場合は、結果はゼロです。

## LBOUND

**LBOUND** は、 $x$  の次元  $y$  の現行の下限を **FIXED** 値で返します。



**x** 配列参照。  $x$  の次元数は、 $y$  よりも小さくてはなりません。

**y**  $x$  の特定の次元を指定する式。

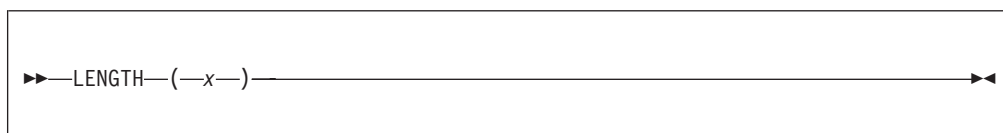
$y$  のタイプは **FIXED** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$y$  は、1 以上でなければなりません。 $y$  が提供されない場合は、デフォルトを 1 にします。

配列が 1 次の場合のみ、 $y$  を省略できます。

## LENGTH

**LENGTH** は、指定の文字式  $x$  の現在の長さを表す **FIXED** 値を返します。



$x$  式。

$x$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

## LOWERCASE

**LOWERCASE** は、A から Z の英字すべてを同等の小文字に変換した **CHAR** スtringを返します。

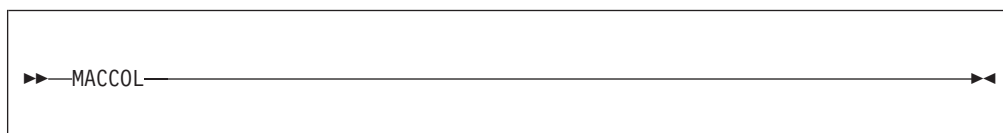


$x$  式。

$x$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

## MACCOL

**MACCOL** は、最外部のマクロ呼び出しが入っているソース・テキスト内で、そのマクロ呼び出しが始まっているカラムを表す **FIXED** 値を返します。



戻される値は、ネストされたマクロ呼び出しによって影響されません。

## MACLMAR

**MACLMAR** は、**MARGINS** コンパイラー・オプションにおける左ソース・マージンのカラム番号を表す **FIXED** 値を返します。

## MACLMAR

▶▶—MACLMAR—◀◀

「プログラミング・ガイド」の MARGINS オプションの説明を参照してください。

## MACNAME

MACNAME は、呼び出し元のプリプロセッサ・プロシージャーの名前を返します。

▶▶—MACNAME—◀◀

プリプロセッサ・プロシージャーの外部からの MACNAME の呼び出しは無効です。

## MACRMAR

MACRMAR は、MARGINS コンパイラ・オプションの右ソース・マージンのカラム番号を表す FIXED 値を返します。

▶▶—MACRMAR—◀◀

「プログラミング・ガイド」の MARGINS オプションの説明を参照してください。

## MAX

MAX は、複数の式の集合から最大値を返します。

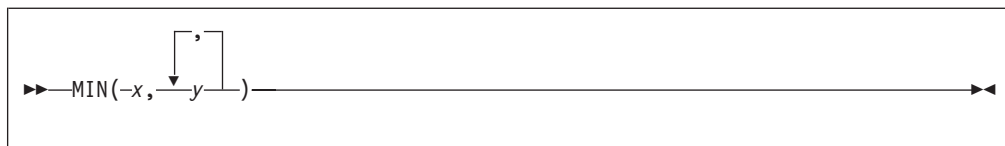
▶▶—MAX(—x,— $\begin{array}{c} \downarrow \\ \text{'} \\ \downarrow \end{array}$ y—)——◀◀

x および y  
式。

引数はすべて FIXED でなければならず、FIXED でないものはすべて FIXED に変換されます。

## MIN

MIN は、複数の式の集合から、最小値を返します。

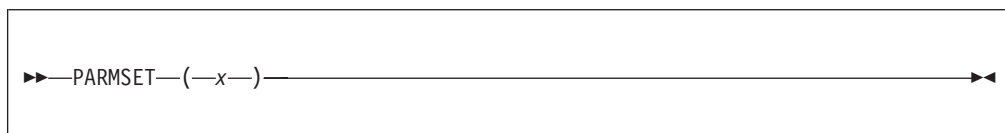


**x および y**  
式。

引数はすべて FIXED でなければならず、FIXED でないものはすべて FIXED に変換されます。

## PARMSET

PARMSET は、指定のパラメーターがプロシーチャーの呼び出し時に設定されたかどうかを示す BIT 値を返します。



**x** そのプリプロセッサー・プロシーチャーのパラメーターでなければなりません。

PARMSET 組み込み関数は、プリプロセッサー・プロシーチャー内でだけ使用することができます。

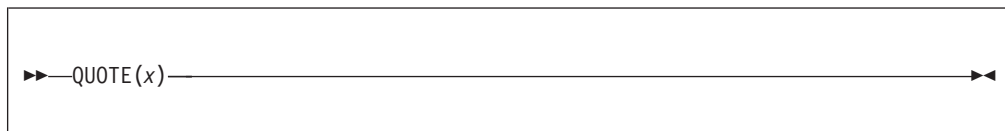
PARMSET から返される値は、そのプロシーチャーを呼び出した関数参照によってパラメーター **x** が明示的にセットされている場合はビット値 '1'B であり、セットされていない (つまり、プリプロセッサー式の中の関数参照で対応する引数が指定されなかったか、または入力テキスト内の関数参照で対応する引数がヌル・ストリングであった) 場合は、ビット値 '0'B です。

対応する引数が関数参照内に指定されていても、その関数参照が別のプリプロセッサー・プロシーチャー内にある場合は、PARMSET から '0'B が返されることがあります。次のようになります。

- その引数そのものが呼び出しプロシーチャーのパラメーターでないときは、値 '1'B が返されます。
- その引数が呼び出しプロシーチャーのパラメーターであるときは、呼び出しプロシーチャーそのものが呼び出されたときの指定されたパラメーターについての値が返されます。

## QUOTE

QUOTE は、**x** を有効な引用符付きストリングとして表す CHARACTER ストリングを返します。





## QUOTE

**x** 引用符付きストリングに変換される式。

$x$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$x$  に一重引用符が入っている場合には、各引用符が、それぞれ 2 つずつ連続する一重引用符に置き換えられます。

## REPEAT

**REPEAT** は、ストリング  $x$  のコピーを  $(y + 1)$  回連結して構成される **CHARACTER** ストリングを戻します。



**x** 式。

$x$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

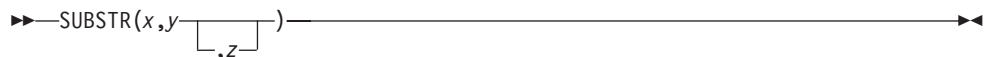
**y** 繰り返し回数を指定する式。  $y$  のタイプは **FIXED** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$y$  は負であってはなりません。

$y$  がゼロの場合は、結果は  $x$  です (必要に応じ、文字に変換される)。

## SUBSTR

**SUBSTR** は、サブストリングを戻します。このサブストリングは、 $x$  の  $y$  および  $z$  によって指定されます。



**x** サブストリングが抜き出されるストリングを指定する式。

$x$  のタイプは **CHARACTER** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**y**  $x$  中のサブストリングの開始位置を指定する式。

$y$  のタイプは **FIXED** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**z**  $x$  中のサブストリングの長さを指定する式。

$z$  のタイプは **FIXED** でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$z$  がゼロの場合は、ヌル・ストリングが戻されます。 $z$  が省略される場合は、戻されるサブストリングは  $x$  の位置  $y$  から  $x$  の終わりまでです。

$z$  は負でなければならず、 $y$  および  $z$  の値は、サブストリング全体が  $x$  の現在の長さに入るような値でなければなりません。

$y = \text{LENGTH}(x)+1$  かつ  $z = 0$  の場合は、ヌル・ストリングが戻されます。

## SYSPARM

SYSPARM は、SYSPARM コンパイラー・オプションの CHARACTER ストリング値を戻します。

▶▶—SYSPARM—◀◀

戻された値は大文字に変換されることはありません。コンパイラー・オプションに指定されたとおりの値が戻されます。詳細については、「プログラミング・ガイド」の「SYSPARM コンパイラー・オプション」の説明を参照してください。

SYSPARM を使用すると、プログラムの外部情報はソース・プログラムを変更しないでアクセスできます。

## SYSTEM

SYSTEM は、有効な SYSTEM コンパイラー・オプションの値が入っている CHARACTER ストリングを戻します。

▶▶—SYSTEM—◀◀

詳細については、「プログラミング・ガイド」の「SYSTEM コンパイラー・オプション」の説明を参照してください。

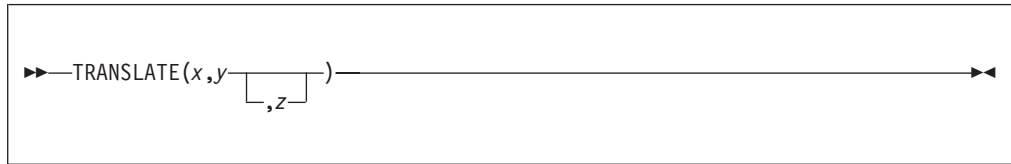
## SYSVERSION

SYSVERSION は、製品名、バージョン、リリース、およびモディフィケーション・レベルを含む CHARACTER ストリングを戻します。

▶▶—SYSVERSION—◀◀

## TRANSLATE

TRANSLATE は、選択した文字を変換した、 $x$  と同じ長さの CHARACTER ストリングを戻します。



**x** 変換できる文字を検索する対象を指定する式。

$x$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**y** 文字の変換値を含む式。

$y$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**z** 変換される文字を含む式。  $z$  が省略された場合のデフォルトは COLLATE です。

$z$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

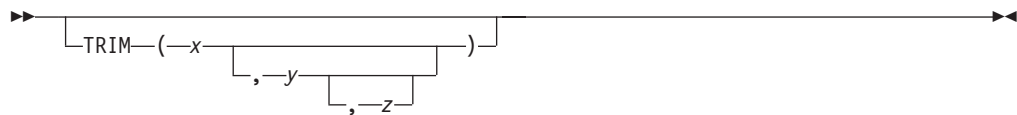
TRANSLATE は、 $x$  の各文字を次のように処理します。

$x$  の中にある文字が  $z$  に検出される場合は、 $y$  にある  $z$  に対応する文字が結果にコピーされます。それ以外の場合は、 $x$  の文字が結果にコピーされます。  $z$  に複数の同一文字が入っている場合は、左端のオカレンスが使われます。

$y$  は、 $z$  の長さと一致するように、右がblankで埋められるか、切り捨てられます。

## TRIM

TRIM は、入力ストリングの一方の端または両端から文字を切り取った CHAR ストリングを戻します。



## UPPERCASE

UPPERCASE は、a から z の英字すべてを同等の大文字に変換した CHAR ストリングを戻します。

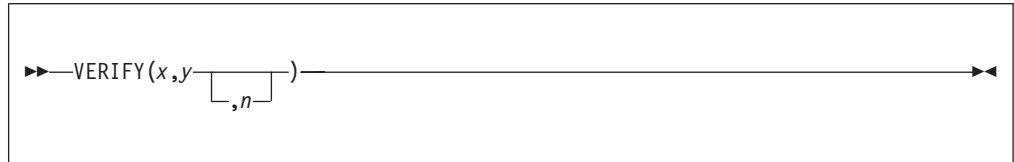


**x** 式。

$x$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

## VERIFY

VERIFY は、 $y$  にない左端の文字の  $x$  内での位置を示す FIXED 値を戻します。この関数により、処理を開始する  $x$  内の位置を指定できます。



**x** 式。

$x$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**y** 式。

$y$  のタイプは CHARACTER でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

**n**  $n$  は、処理を開始する  $x$  内の位置を指定します。

$n$  のタイプは FIXED でなければならず、それ以外の場合はこのタイプに変換されます。

$x$  のすべての文字が  $y$  にある場合は、値ゼロが戻されます。 $x$  がヌル・ストリングの場合は、値ゼロが戻されます。 $x$  がヌル・ストリングでなく、 $y$  がヌル・ストリングの場合は、 $n$  の値が戻されます。 $n$  のデフォルトは 1 です。

$n$  は 0 より大きく、かつ  $1 + \text{LENGTH}(x)$  を超えないことが必要です。

$n = \text{LENGTH}(x) + 1$  の場合は、結果はゼロです。

---

## プリプロセッサ・ステートメント

ここでは、プリプロセッサ・ステートメントをアルファベット順に取り上げて説明します。

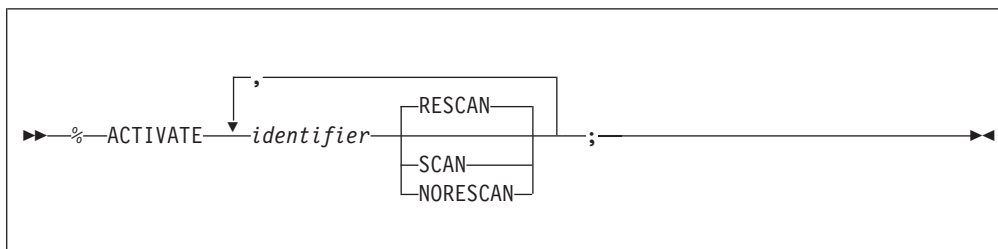
プリプロセッサ・ステートメント内でブランクを使用できるのであればどこにでも、コメントを記入できます。このようなコメントは、プリプロセッサ出力テキストには挿入されません。

すべてのプリプロセッサ・ステートメントにラベルを付けることができます。

%CONTROL ステートメントはサポートされません。このキーワードを記述してもエラーにはなりません、無視されます。

## %ACTIVATE ステートメント

%ACTIVATE ステートメントは、ID をアクティブにして、それに置換適格性を与えます。それ以後、その ID がアクティブになっている間は、入力テキスト内でその ID が検出されると、置き換え処置が開始されます。



省略形: %ACT

### identifier

プリプロセッサ変数名、プリプロセッサ・プロシージャ名、またはプリプロセッサ組み込み関数を指定します。

配列変数を参照する ID は指定できません。

### RESCAN

結果が出力に入れられる前に、すべての活動 ID を置換するのに必要な回数だけこの ID が置換されることを指定します。

### SCAN

結果が出力に入れられる前に、この ID が 1 回だけ置換されることを指定します。

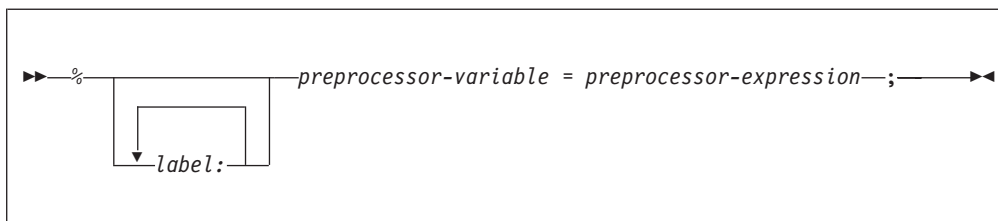
### NORESCAN

SCAN の同義語です。

すでにアクティブの ID に対して %ACTIVATE を使用しても特に影響はありませんが、走査状況が変わる可能性があります。

## %ASSIGNMENT ステートメント

%ASSIGNMENT ステートメントは、プリプロセッサ式を評価して、その結果をプリプロセッサ変数に割り当てます。

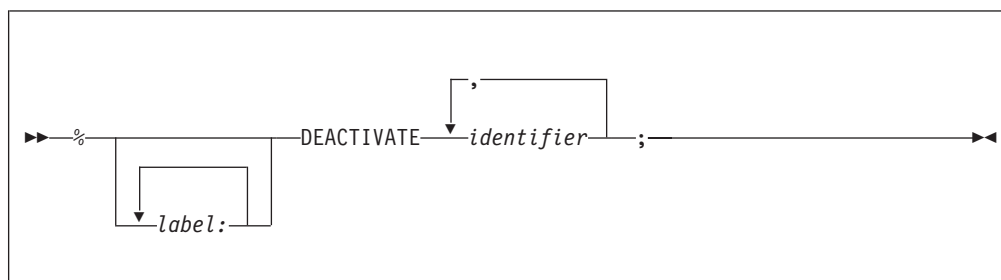


複合割り当てと多重割り当ては許可されていません。

配列を割り当てのターゲットにすることはできませんが、配列エレメントをターゲットにすることはできます。

## %DEACTIVATE ステートメント

%DEACTIVATE ステートメントは、ID を非活動化します。



省略形: %DEACT

### identifier

プリプロセッサ変数名、プリプロセッサ・プロシージャー名、またはプリプロセッサ組み込み関数名を指定します。

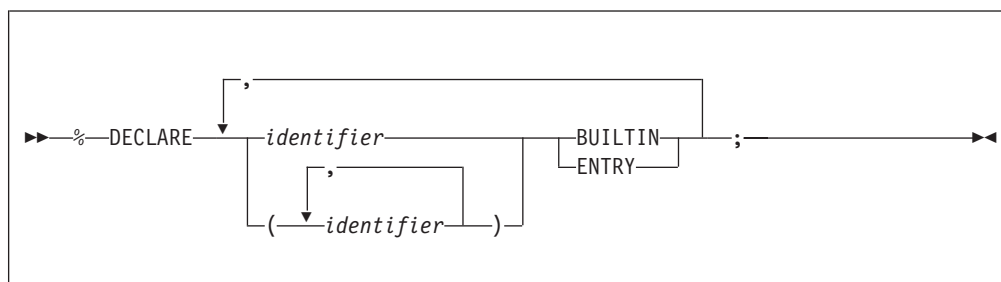
ID を非活動化すると、その ID は置換適格性を失いますが、その値は失われません。したがって、その ID を再活動化したとき、置き換え値を割り当てる必要はありません。

ID を非活動化しても、後続のプリプロセッサ・ステートメント内でその ID に別の値を割り当てることができます。

非活動化された ID の非活動化は無効です。

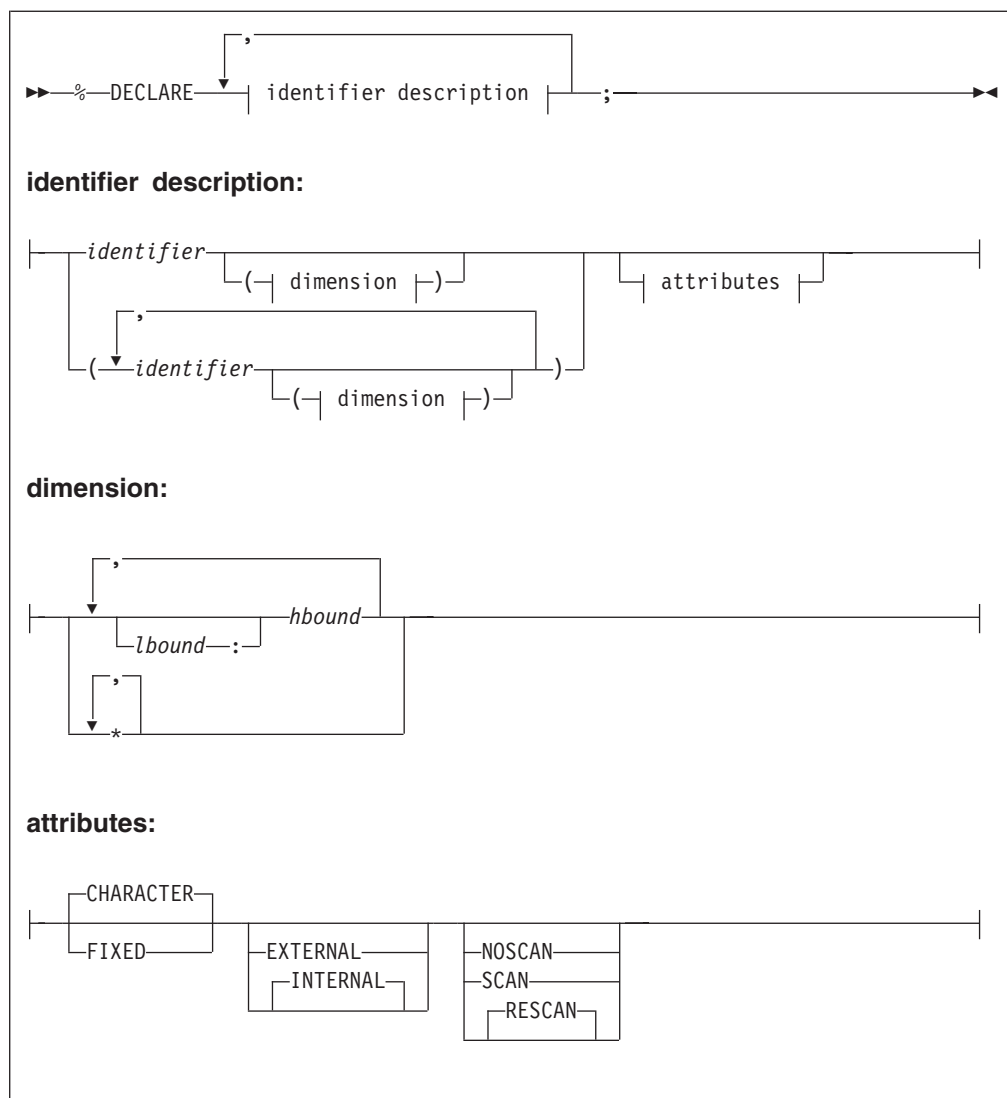
## %DECLARE ステートメント

%DECLARE ステートメントは、ID をマクロ変数、マクロ・プロシージャー、または組み込み関数として設定します。また、マクロ変数の走査状況を指定することができます。



または

## %DECLARE



省略形: %DECLARE の場合は %DCL、 CHARACTER の場合は CHAR、  
INTERNAL の場合は INT、 EXTERNAL の場合は EXT です。

### identifier description

マクロ機能 ID の名前と属性を指定します。

### BUILTIN

この ID が同じ名前を持つプリプロセッサ組み込み関数であることを指定します。

### CHARACTER

この ID が、最大の長さを持たない可変長文字ストリングを表していることを指定します。

### ENTRY

この ID がプリプロセッサ・プロシージャであることを指定します。  
宣言により、入り口名が活動化されます。

プリプロセッサ・プロシージャーの入力口名を `%PROCEDURE` ステートメントのラベルとして書けば、その入力口名を明示的に宣言することができます。ただし、このように明示宣言しただけでは、そのプリプロセッサ・プロシージャー名は活動化されません。

**FIXED**

`ID` が整数を表すことを指定します。

(デフォルトの) `FIXED(DECIMAL)` オプションを指定した場合、`ID` には属性 `DECIMAL(5,0)` も与えられます。

`FIXED(BINARY)` オプションを指定した場合、`ID` には属性 `BINARY(31,0)` も与えられます。

**RESCAN**

この `ID` がアクティブであり、必要な回数だけ出力内で置換されることを指定します。

**SCAN**

この `ID` がアクティブであり、1 回だけ出力内で置換されることを指定します。

**NOSCAN**

この `ID` が非アクティブであり、出力内で置換されないことを指定します。

**dimension**

配列変数の次元指定です。15 を超える次元は指定できません。

注: 配列をプリプロセッサ・プロシージャーの外部で宣言する (複数のプロシージャー間で共有できるように) ことはできますが、プロシージャーの外部から参照することはできません (配列照会組み込み関数への最初の引数として参照する場合を除き)。

*lbound*

この次元にとって必要な下限。デフォルトは、1 です。

*hbound*

この次元にとって必要な上限。

配列境界は、整数定数、またはより一般的な式によって指定されます。一般式は他のプリプロセッサ変数の値に依存してはいけませんが、他の変数の境界など、他の属性に依存する場合があります。例えば、次の宣言は示された順序で有効です。

```
%dcl a(2) fixed;
%dcl b(2+hbound(a)) fixed;
```

また、`sysparm` が整数定数の場合は、次の宣言も有効です。

```
%dcl c(sysparm()) fixed;
```

**INTERNAL**

この属性は、プロシージャーの内部でだけ有効です。プロシージャーの外部で指定された場合、診断メッセージが出され、変数には `EXTERNAL` 属性が与えられます。

プロシージャーの外部で宣言された変数はすべて `EXTERNAL` であり、プロシージャーの内部で宣言された変数はすべて `INTERNAL` です。



## %DECLARE

### EXTERNAL

この属性は、プロシージャの外部でだけ有効です。プロシージャの内部で指定された場合、診断メッセージが出され、変数には **INTERNAL** 属性が与えられます。

## %DO ステートメント

%DO ステートメントは、%END ステートメントと対になっており、プリプロセッサ DO グループを区切る働きをします。また DO グループの反復実行を指定することもできます。

%DO ステートメントの構文は、224 ページの『DO ステートメント』で説明しています。

注: DO ステートメントのフォーマットは、次のものを除いてすべてサポートされます。

- UPTHRU と DOWNTHRU は受け入れられません。
- タイプ 3 DO ステートメントの『specification』は、複数回指定できません。

しかし、%DO ステートメントは、DO ステートメントでサポートされない追加フォーマット、%DO SKIP; ステートメントもサポートします。このステートメントは、一致する %END ステートメントにより、すべてのコードを無視するようにします(したがって、コメントを含むコードをコメント化する方法として便利です)。

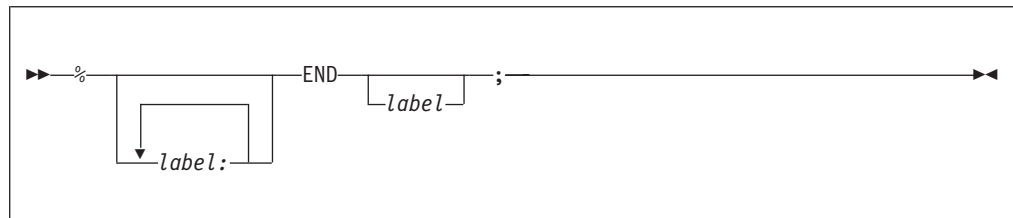
プリプロセッサ DO グループはネストさせることができます。

タイプ 3 のプリプロセッサ DO グループの中に制御権を移動することはできません。ただし、その DO グループ内から呼び出されたプリプロセッサ・プロシージャから戻ることができます。

プリプロセッサ・ステートメント、入力テキスト、およびリスト制御ステートメントを、プリプロセッサの DO グループ内に書くことができます。プリプロセッサ・ステートメントは実行され、入力テキストは走査されて、可能であれば置き換えられます。

## %END ステートメント

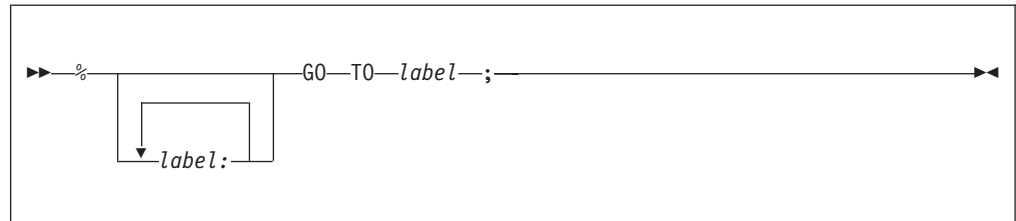
%END ステートメントは、%DO、%SELECT、または %PROCEDURE ステートメントと一緒に使用され、プリプロセッサ DO グループまたはプリプロセッサ・プロシージャを区切る働きをします。



END の後ろのラベル (label) は、%PROCEDURE、%DO、または %SELECT ステートメントのラベルでなければなりません。複数の閉止も可能です。

## %GO TO ステートメント

%GO TO ステートメントを使用すると、プリプロセッサは指定されたラベルの場所から走査を続行します。



省略形: %GOTO

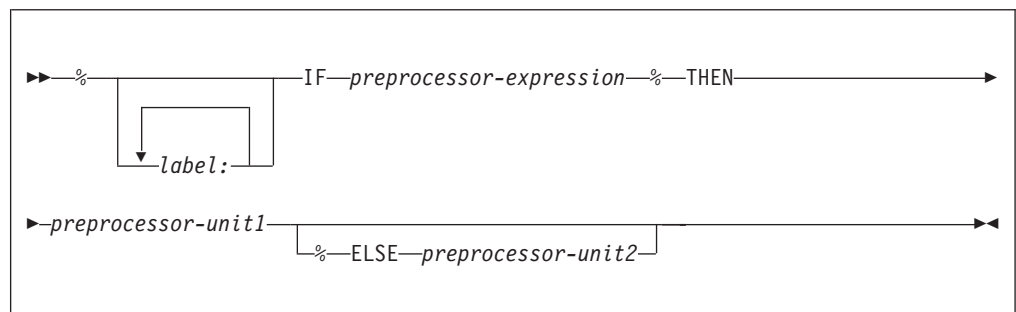
GO TO のあとに続くラベルは、走査の移動先を指定します。ここに指定するラベルは、プリプロセッサ・ステートメントのラベルでなければなりません。プリプロセッサ・プロシージャのラベルであってはなりません。

プリプロセッサ・プロシージャ内のプリプロセッサ GO TO ステートメントは、そのプロシージャの外へ制御権を移動することはできません。つまり、GO TO の後ろに指定するラベルは、そのプロシージャに含まれているラベルでなければなりません。

組み込まれたストリングと一緒に %GO TO を使用する場合は制限事項については、後述の『%INCLUDE ステートメント』の項を参照してください。

## %IF ステートメント

%IF ステートメントは、プリプロセッサ式のビット値に従って、走査の流れを制御します。



### preprocessor-expression

この式が計算されて、ビット・ストリングに変換されます (変換できないときはエラーになります)。

### preprocessor-unit

単一のプリプロセッサ・ステートメント (%DECLARE、%PROCEDURE、%END、%DO 以外のもの)、プリプロセッサ DO グループ、またはプリプロセッサ SELECT グループ。それ以外の場合、記述は、239 ページの『IF ステートメント』で指定されている記述と同じです。

ストリング内のいずれかのビットの値が '1'B であれば、unit1 が実行され、 unit2 (ある場合) は無視されます。すべてのビットが '0'B であれば、 unit1 が無視され、unit2 (ある場合) が実行されます。

unit1 または unit2 のどちらかで %GO TO ステートメントまたはプリプロセッサ RETURN ステートメントを指定したことによって、走査が別の場所から再開する場合を除けば、%IF ステートメントのすぐ後ろから走査が再開します。

%IF ステートメントは、239 ページの『IF ステートメント』の項で説明したのと同じ方法でネストさせることができます。

## %INCLUDE ステートメント

%INCLUDE が実行されると、そのステートメントで指定された外部テキストが、プリプロセッサ入力の中に、%INCLUDE ステートメントの代わりとして組み込まれます。そのようなテキストがいったん組み込まれると、それは組み込み済み テキストと呼ばれます。そのテキストは、プリプロセッサ・ステートメント、リスト制御ステートメント、および PL/I 原始ステートメントで構成することができます。

%INCLUDE ステートメントの構文は、242 ページの『%INCLUDE ディレクティブ』で説明しています。

*dataset* と *member name* の各ペアは、ソース・プログラムに組み込まれる外部テキストを識別します。

走査は、包含されるテキストの最初の文字から続行されます。包含されるテキストは、プリプロセッサ入力と同じ方法で走査されます。ですから、包含されるテキストを、形成するプリプロセッサ出力の基にすることができます。

%INCLUDE ステートメントはネストすることができます。つまり、組み込まれたテキストの中に、%INCLUDE ステートメントがあってもかまいません。

組み込み済みテキスト内の %GO TO ステートメントが制御権を移動することができるのは、同じ組み込みファイルの内部の点に限られています。%GOTO ステートメントよりも、その %GOTO ステートメントのターゲット・ラベルが先に来てはなりません。

組み込み済みテキスト内のプリプロセッサ・ステートメント、DO グループ、SELECT グループ、およびプロシージャは完結していなければなりません。例えば、%IF ステートメントの半分が組み込みテキスト内にあり、残りの半分がプリプロセッサ入力の別の部分にあるということは許されません。

プリプロセッサ入力と組み込み済みテキスト内に、%INCLUDE 以外にはプリプロセッサ・ステートメントが含まれていない場合は、プリプロセッサの実行を省略することができます。(その場合、INCLUDE コンパイル時オプションを使用する必要があります。)

例えば、データ・セット SYSLIB のメンバー PAYRL に下記のテキスト (構造体宣言) が収められているとします。

```
DECLARE 1 PAYROLL,
 2 NAME,
 3 LAST CHARACTER (30) VARYING,
```

```

3 FIRST CHARACTER (15) VARYING,
3 MIDDLE CHARACTER (3) VARYING,
2 CURR,
3 (REGLAR, OVERTIME) FIXED DECIMAL (8,2),
2 YTD LIKE CURR;

```

このとき、下記のプリプロセッサ・ステートメントが実行されると、

```

%DECLARE PAYROLL CHARACTER;
%PAYROLL='CUM_PAY';
%INCLUDE PAYRL;
%DEACTIVATE PAYROLL;
%INCLUDE PAYRL;

```

2 つの構造体宣言がプリプロセッサ出力テキスト内に生成されます。それら 2 つの構造体宣言は名前だけが異なっており、それぞれ CUM\_PAY と PAYROLL という名前です。

最初の %INCLUDE ステートメントが実行されると、PAYRL 内のテキストがプリプロセッサ入力の中に組み込まれます。この組み込み済みテキスト内の ID PAYROLL がプリプロセッサ走査で検出されると、ID PAYROLL はアクティブのプリプロセッサ変数 PAYROLL の現行値 (つまり CUM\_PAY) で置き換えられます。それ以上の包含されたテキストを走査しても、追加の置換は行われません。次に、%DEACTIVATE ステートメントがプリプロセッサ走査で検出され、プリプロセッサ変数 PAYROLL が非活動化されます。2 番目の %INCLUDE ステートメントが実行されると、PAYRL 内のストリングがもう一度プリプロセッサ入力の中に組み込まれます。しかし、今回は、この組み込み済みテキストが走査されても置き換えはまったく行われません。

## **%INSCAN ステートメント**

%INCLUDE ステートメントと同様に、%INSCAN ステートメントもファイルを組み込みます (ただし、%INSCAN ステートメント内は除きます)。組み込まれるファイルは、プリプロセッサ変数で指定します。

```

▶▶—%INSCAN—filename—;—————▶▶

```

### **filename**

組み込むファイルの名前を指定するプリプロセッサ式。

```

%ddl inname char;
%inname = 'oldform';
%inscan inname; /* includes the file "oldform" */

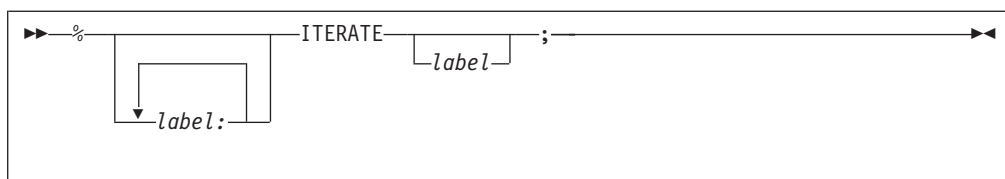
```

## **%ITERATE ステートメント**

%ITERATE ステートメントは、このステートメントを含む反復 DO グループを区切る %END ステートメントに制御を移します。現在行われている反復は完了され、次の反復が (必要であれば) 開始されます。

ITERATE ステートメントは、反復 DO グループが非反復 DO グループを含んでいる場合には、その非反復 DO グループ内で指定することができます。

## %ITERATE

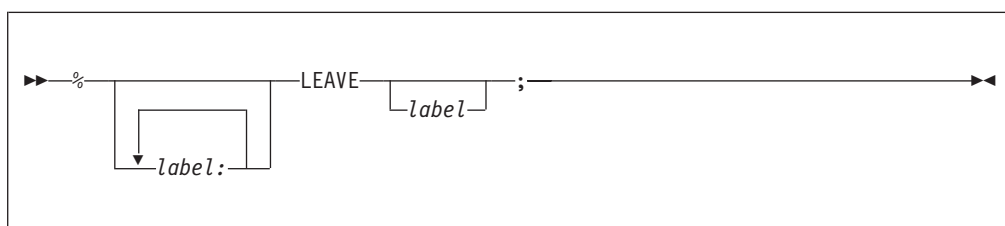


### label-constant

このステートメントを含んでいる DO グループのラベルでなければなりません。省略した場合、ITERATE ステートメントを含む最新の反復 DO グループの END ステートメントに制御が移ります。

## %LEAVE ステートメント

単純な DO グループに含まれているか、または単純な DO グループを指定してある場合に、%LEAVE ステートメントは、そのグループを終了します。反復 DO グループに含まれているか、またはそのようなグループを指定してある場合には、%LEAVE ステートメントは、現在の繰り返しも含め、そのグループのすべての繰り返しを終了します。制御の流れは、DO グループが END ステートメントに達して終了した場合に通常移動するはずの位置に移動します。

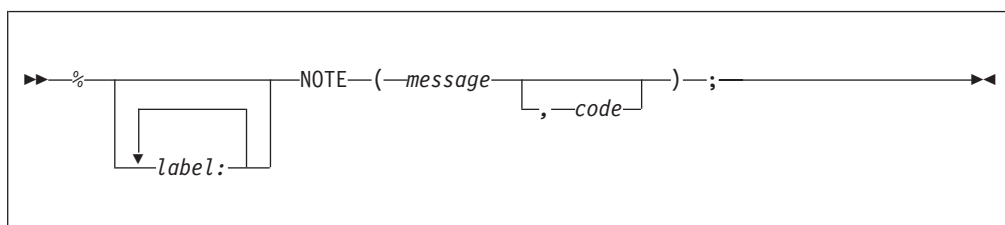


### label-constant

このステートメントを含んでいる DO グループのラベルでなければなりません。ここで指定するラベルを持つ DO グループが終了します。label-constant が省略されると、LEAVE ステートメントを含むグループが終了する DO グループです。

## %NOTE ステートメント

%NOTE ステートメントは、指定されたテキストと重大度コードを示すプリプロセッサ診断メッセージを生成します。



### message

診断メッセージを必要とする値を持つ文字式。

**code**

メッセージの重大度を表す値が入っている固定式。重大度は次のとおりです。

| コード | 重大度 |
|-----|-----|
| 0   | I   |
| 4   | W   |
| 8   | E   |
| 12  | S   |
| 16  | U   |

*code* を省略すると、デフォルトとして 0 が設定されます。

*code* の値が上記以外の値のときは、診断メッセージが生成され、デフォルトの値が使われます。デフォルトの値は、*code* の値が 0 より小さいか 16 より大きいときは重大度 U であり、その他の場合は、次に低い重大度がデフォルトとなります。

生成されたメッセージは、他のプリプロセッサ・メッセージと一緒にファイルされます。特定のメッセージを続いて印刷するかどうかは、その重大度レベルとコンパイラ FLAG オプションの設定に依存します。

重大度 U のメッセージが生成されると、プリプロセスとコンパイル処理が直ちに終了します。重大度 S、E、または W のメッセージが生成されたときにコンパイル処理が終了するかどうかは、NOSYNTAX および NOCOMPILE コンパイル時オプションがどのようにセットされているかによって異なります。

## %ヌル・ステートメント

%ヌル・ステートメントは、何も行いません。またステートメントの実行順序を変えることもしません。

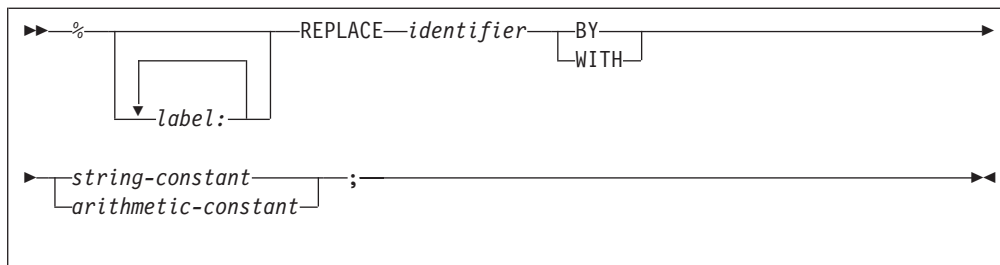
```
▶▶ % ; —————▶▶
```

注: %PROCEDURE ステートメントおよび RETURN ステートメントの説明については、本章の始めの方に記載されています。

## %REPLACE ステートメント

%REPLACE ステートメントを使用すると、名前をストリング定数か数値定数に直ちに置き換えることができます。名前に値を割り当てるために、その名前を変数として宣言する必要はありません。

**%REPLACE**

**identifier**

置き換えられる名前。

## string-constant

名前が宣言されていない場合、CHARACTER 属性が与えられます。

**arithmetic-constant**

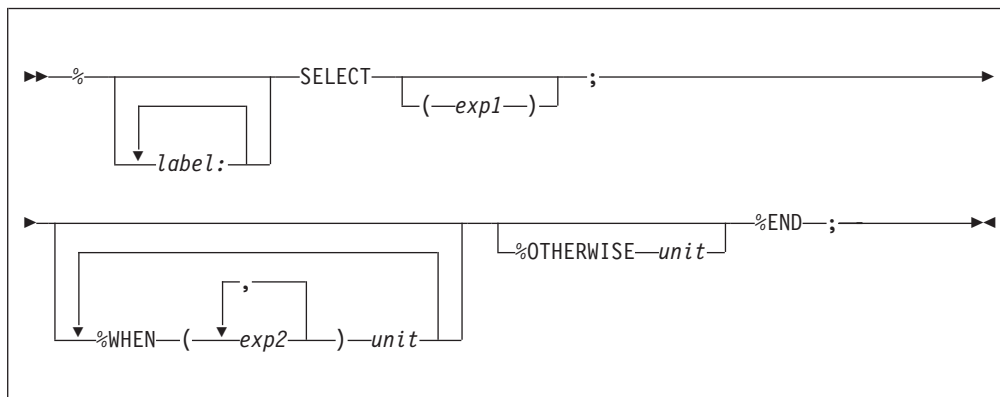
名前が宣言されていない場合、FIXED 属性が与えられます。

FIXED(DEC) オプションが指定されている場合、値は FIXED DEC(5,0) に変換されます。

FIXED(BIN) オプションが指定されている場合、値は FIXED BIN(31,0) に変換されます。

## %SELECT ステートメント

%SELECT ステートメントは、%END ステートメントと対になっており、プリプロセッサ SELECT グループを区切る働きをします。



## %XINCLUDE ステートメント

%XINCLUDE ステートメントは %INCLUDE ステートメントと同じですが、ファイルがすでに存在している場合はファイルを組み込みません。

%XINCLUDE ステートメントの構文は、252 ページの『%XINCLUDE ステートメント』で説明しています。

## %XINSCAN ステートメント

%XINSCAN ステートメントは %INSCAN ステートメントと同じですが、ファイルがすでに存在している場合はファイルを組み込みません。

▶▶—%XINSCAN—*filename*—;————▶▶

## プリプロセッサの例

### 例 1

プリプロセッサ入力に、次のストリングが含まれているとします。

```
%DECLARE A CHARACTER, B FIXED;
%A = 'B+C';
%B = 2;
X = A;
```

すると、次のステートメントがプリプロセッサ出力に挿入されます。

```
X = 2+C;
```

これらのプリプロセッサ・ステートメントは、デフォルトの値である **RESCAN** を指定して **A** と **B** を活動化し、文字ストリング **'B+C'** を **A** に割り当て、さらに定数 **2** を **B** に割り当てます。

4 行目は入力テキストです。 **A** の現行値、つまり **'B+C'** が **A** の代わりとしてプリプロセッサ出力の中に挿入されます。ただし、このストリングにはプリプロセッサ変数 **B** が含まれているので、プリプロセッサは **B** を再走査し、**B** が活動化されていることを見つけます。ですから、プリプロセッサ出力内の **B** は値 **2** に置き換わります。プリプロセッサ変数 **B** の精度は、デフォルトの精度 (5,0) なので、実際には **2** の前に **0** が **4** つ付いています。ストリング **'B+C'** 内の **B** がこの値で置き換えられるときに、この値は文字ストリングに変換されるので、**2** の前にブランクが **7** つ付きます。

さらに再走査が行われ、**2** をこれ以上置き換えられないことがわかると、**+C** から走査が再開されます。これも置き換えることはできません。

上記の例で、プリプロセッサ変数 **A** が次のステートメントによって活動化されたとします。

```
%ACTIVATE A NORESCAN;
```

すると、プリプロセッサ出力は次のようになります。

```
X = B+C;
```

### 例 2

プリプロセッサ入力に、次のストリングが含まれているとします。

```
%DECLARE I FIXED, T CHARACTER;
%DEACTIVATE I;
%I = 15;
%T = 'A(I)';
S = I*T*3;
%I = I+5;
%ACTIVATE I;
%DEACTIVATE T;
R = I*T*2
```

すると、プリプロセッサ出力は次のようになります (置き換えのブランクは示していません)。



## プリプロセッサの例

```
S = I*A(I)*3;
R = 20*T*2;
```

### 例 3

この例は、プリプロセッサの諸機能を使用して、次のような DO グループの実行速度を上げる方法を示したものです。

```
DO I=1 TO 10;
Z(I)=X(I)+Y(I);
END;
```

下記のように書けば、上記のように書くのと同じ結果になり、しかも、コンパイル済みプログラムの実行中に増分を加えてテストする必要がなくなります。

```
%DECLARE I FIXED;
%DO I = 1 TO 10;
Z(I)=X(I)+Y(I);
%END;
%DEACTIVATE I;
```

3 行目は入力テキストなので、置き換えをする必要があるかどうかを調べるために走査されます。この行が最初に走査されたときは、I の値は 1 であり、しかも I は活動化されています。ですから、次のステートメントがプリプロセッサ出力に挿入されます。

```
Z(1)=X(1)+Y(1);
```

1 の前には、それぞれブランクが 7 入ります。

I の値が増えて 10 になるまで、そのつど、入力テキストが走査され、I があれば I の現行値で置き換えられます。その結果、次のステートメントがプリプロセッサ出力に挿入されます。

```
Z(1)=X(1)+Y(1);
Z(2)=X(2)+Y(2);
.
.
.
Z(10)=X(10)+Y(10);
```

I の値が 11 に達すると、制御が %DEACTIVATE ステートメントに渡ります。

### 例 4

下記のプリプロセッサ入力内の VALUE は、'arg1(arg2)' の形をした文字ストリングを返すプリプロセッサ関数プロシージャです。ただし、arg1 と arg2 は、この関数に渡される引数を表しています。

```
DECLARE (Z(10), Q) FIXED;
%A='Z';
%ACTIVATE A, VALUE;
Q = 6 + VALUE(A,3);
%DECLARE A CHARACTER;
%VALUE: PROC(ARG1,ARG2) RETURNS(CHAR);
 DCL ARG1 CHAR, ARG2 FIXED;
 RETURN(ARG1||'('||ARG2||')');
%END VALUE;
```

4 行目が走査されるとき、A はアクティブになっているので置き換えに対して適格です。VALUE もアクティブなので、4 行目で VALUE が参照されると、その名前のプリプロセッサ関数プロシージャが起動します。

ただし、引数 A と 3 が VALUE に渡される前に、A は値 Z (前の代入ステートメントで A に割り当てられた値) で置き換えられ、3 は対応するパラメーターの属性に合わせて固定小数点フォーマットに変換されます。引数が渡されると、VALUE はこれらの引数と括弧の連結演算を行い、結果の値、つまりストリング Z (3) を呼び出し点に戻します。関数参照が戻り値で置き換えられ、その結果がプリプロセッサ出力に挿入されます。その結果、次のようなプリプロセッサ出力が生成されます。

```
DECLARE (Z(10),Q) FIXED;
Q = 6+Z(3);
```

## 例 5

下記のように定義されたプリプロセッサ関数プロシージャ GEN は、最高 99 個の入り口名 (パラメーター記述子リスト内に最高 99 個のパラメーター記述子を持つ) を指定する GENERIC 宣言を生成することができます。この例では、4 個だけが生成されます。

```
%DCL GEN ENTRY;
DCL A GEN (A,2,5,FIXED);
 %GEN: PROC(NAME,LOW,HIGH,ATTR) RETURNS (CHAR);
DCL (NAME, SUFFIX, ATTR, STRING) CHAR, (LOW, HIGH, I, J) FIXED;
STRING='GENERIC(';
DO I=LOW TO HIGH; /* ENTRY NAME LOOP*/
 IF I>9 THEN
 SUFFIX=SUBSTR(I, 7, 2);
 /* 2 DIGIT SUFFIX*/
 ELSE SUFFIX=SUBSTR(I, 8, 1);
 /* 1 DIGIT SUFFIX*/
 STRING=STRING||NAME||SUFFIX||' WHEN (';
DO J=1 TO I; /* DESCRIPTOR LIST*/
 STRING=STRING||ATTR;
 IF J<I
 THEN STRING=STRING||',';
 ELSE STRING=STRING||')';
 /* LIST SEPARATOR */
 END;
 IF I<HIGH THEN
 STRING=STRING||',';
 ELSE STRING=STRING||')';
 /* ENTRY NAME SEPARATOR*/
END;
RETURN (STRING)
% END;
```

次のようなプリプロセッサ出力が作成されます。

```
DCL A GENERIC(A2 WHEN (FIXED,FIXED),
 A3 WHEN (FIXED, FIXED, FIXED),
 A4 WHEN (FIXED, FIXED, FIXED, FIXED),
 A5 WHEN (FIXED, FIXED, FIXED, FIXED, FIXED));
```

## 例 6

この例では、下記のフォーマットのステートメントと同じ働きをするプリプロセッサ・プロシージャを示します。

```
SEARCH TABLE(array) FOR(value)
USING(variable) AND(variable);
```

このステートメントは、配列添え字として指定した (またはデフォルトの) 変数を使用して、指定した値を求めて 2 次元配列を探索するためのステートメントです。このステートメントが実行されると、指定した値がどのエレメントに入っているかが

## プリプロセッサの例

配列添え字変数によって示されます。指定した値がどのエレメントにも入っていない場合は、両方の添え字変数が -22222 にセットされます。

このステートメントと同じ働きをするプリプロセッサ・プロシージャーは、次のとおりです。

```
%SEARCH:
PROC(TABLE, FOR, USING, AND) STATEMENT RETURNS(CHARACTER);

DECLARE(TABLE, FOR, USING, AND, LABL, D01, D02) CHARACTER,
 (PARMSET, COUNTER) BUILTIN;

IF PARMSET(TABLE) & PARMSET(FOR) THEN;
ELSE SERR:D0;
NOTE ('MISSING OR INVALID ARGUMENT(S)' || FOR 'SEARCH', 4);
RETURN ('/*INVALID SEARCH STATEMENT*/');
END;

IF ¬PARMSET(USING) THEN
 USING='I';
IF ¬PARMSET(AND) THEN
 AND='J';
IF USING = AND THEN
 GO TO SERR;

LABL='SL' || COUNTER;
D01=LABL || ': DO ' || USING || '=LBOUND(' || TABLE || ',1)
 TO HBOUND(' || TABLE || ',1)';
D02='DO ' || AND || '=LBOUND(' || TABLE || ',2)
 TO HBOUND (' || TABLE || ',2)';

RETURN(D01 || D02 || 'SELECT(' || TABLE
 || '(' || USING || ', ' || AND || ')');
WHEN(' || FOR || ') LEAVE ' || LABL || ';
OTHER;
END ' || LABL || ';
IF ' || AND || ' > H BOUND(' || TABLE || ',2) THEN
 ' || USING || ', ' || AND || '. ' = -22222;');
%END SEARCH;
```

この例では、PARMSET 組み込み関数を使用して、このプロシージャーが呼び出されたときにどのパラメーターがセットされるかを判別しています。USING がセットされていない場合、配列添え字付き変数 I のデフォルトが使用されます。AND がセットされていないと、J が使用されます。TABLE または FOR がセットされていないか、または呼び出しの結果として両方の添え字が同じ変数になった場合は、プリプロセッサ診断メッセージが出され、コメントがプリプロセッサ出力に返されます。

COUNTER 組み込み関数は、このプロシージャーから返されるプリプロセッサ出力に固有のラベルを付けるために使われています。

このプロシージャーを呼び出すときには、キーワード引数、定位置引数、または両者の組み合わせのどれでも指定することができます。次のようにプロシージャーを呼び出すと、同じ結果が生成されます。

```
SEARCH TABLE(LIST.NAME) FOR('J.DOE') USING(I) AND(J);

SEARCH TABLE(LIST.NAME) FOR('J.DOE');
```

```
SEARCH(LIST.NAME) FOR('J.DOE');
```

```
SEARCH(LIST.NAME, 'J.DOE');
SEARCH(, 'J.DOE') TABLE(LIST.NAME);
```

どの方法で呼び出した場合も、返されたプリプロセッサ出力は次のようになります。

```
SL000001:
DO I=LBOUND(LIST.NAME,1) TO HBOUND(LIST.NAME,1);
 DO J=LBOUND(LIST.NAME,2) TO HBOUND(LIST.NAME,2);
 SELECT(LIST.NAME(I,J));
 WHEN('J.DOE') LEAVE SL000001;
 OTHER;
 END SL000001;
IF J > HBOUND(LIST.NAME,2) THEN
 I,J = -22222;
```

ラベル SL000001 は、最初の呼び出しの場合にだけ返されます。それ以後、このプロシージャを呼び出すたびに、新しい固有のラベルが返されます。



## 付録. 制限値

表 65 に、PL/I 言語エレメントの設定制限値を要約しています。また、795 ページの表 66 に、マクロ機能の言語エレメントの設定制限値を要約しています。

表 65. 言語エレメントの制限

| 言語エレメント | 説明         | 制限          |
|---------|------------|-------------|
| 配列      | 配列の次元の最大数  | 15          |
|         | 最小下限 (注 1) | -2147483648 |
|         | 最大上限 (注 1) | +2147483647 |

**注 1:** コンパイル時オプション CMPAT(V1) が指定されている場合、最小下限は -32768、最大上限は 32767 です。また、これらの限界は注意して使用する必要があります。例えば、A に最大上限が指定されていて、JX に属性 SIGNED FIXED BIN(31) が指定されている場合、ループ DO JX = LBOUND(A) TO HBOUND(A) は配列の最後のエレメントにヒットした後「ラップ」します。TO の代わりに UPTHRU を使用した場合、ループはラップしません。

|        |                     |           |
|--------|---------------------|-----------|
| 構造体    | 構造体内のレベルの最大数        | 15        |
|        | 構造体内の最大レベル番号        | 255       |
| 算術値の精度 | FIXED DECIMAL の最大精度 | 31 (注 2)  |
|        | FIXED BINARY の最大精度  | 63 (注 3)  |
|        | FLOAT DECIMAL の最大精度 | 33 (注 4)  |
|        | FLOAT BINARY の最大精度  | 109 (注 5) |
|        | FIXED データの最大位取り係数   | 127       |
|        | FIXED データの最小位取り係数   | -128      |

**注 2:** これはコンパイル時オプション LIMITS(FIXEDDEC(31)) を指定した場合に限り当てはまります。デフォルトは 15 です。

**注 3:** これはコンパイル時オプション LIMITS(FIXEDBIN(63)) を指定した場合に限り当てはまります。デフォルトは 31 です。

**注 4:** Intel の FLOAT DECIMAL 最大精度は 18 です。FLOAT(DFP) を指定すると、FLOAT DECIMAL 最大精度は 34 になります。

**注 5:** Intel の FLOAT BINARY 最大精度は 64 です。

|                        |                  |            |
|------------------------|------------------|------------|
| ストリング変数/定数と AREA 変数/定数 | CHARACTER の最大の長さ | 32767      |
|                        | BIT の最大の長さ       | 32767      |
|                        | GRAPHIC の最大の長さ   | 16383      |
|                        | WIDECHAR の最大の長さ  | 16383      |
|                        | AREA の最大サイズ      | 2147483647 |

表 65. 言語エレメントの制限 (続き)

| 言語エレメント   | 説明                                                                                    | 制限             |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------|
| 組み込み関数    | IAND、IOR、MAX、および MIN 関数への引数の最大個数                                                      | 64             |
|           | ADD、BINARY、DECIMAL、DIVIDE、FIXED、FLOAT、MULTIPLY、PRECISION、および SUBTRACT 関数内の精度 (p) の最大値 | 対応する算術精度の制限と同じ |
|           | ADD、BINARY、DECIMAL、DIVIDE、FIXED、MULTIPLY、PRECISION、および SUBTRACT 関数内のスケール (q) の最大値     | 対応する算術精度の制限と同じ |
|           | CEIL、FLOOR、MAX、MIN、MOD、ROUND および TRUNC 関数内の桁 (N) の最大数                                 | 対応する算術精度の制限と同じ |
| プログラム・サイズ | ID の最大の長さ                                                                             | 100            |
|           | ステートメント・タイプが変更される前の字句単位 (キーワード、ID、区切り文字など) の最大数                                       | 511            |
|           | ブロック内の DEFAULT ステートメントの最大数                                                            | 31             |
|           | %PUSH ステートメントの最大数                                                                     | 63             |
|           | %INCLUDE ステートメントの最大数                                                                  | 2047           |
|           | %INCLUDE ステートメントの最大ネスト                                                                | 2046           |
|           | ソース・ファイル内の最大行数                                                                        | 1048575        |
|           | ステートメントの最大数                                                                           | 16777215       |
|           | ブロック内の LIKE 属性の最大数                                                                    | 63             |
|           | データ・リスト内の出力式の最大数                                                                      | 60             |
|           | データ・リスト内の反復 DO 指定の最大数                                                                 | 50             |
|           | 位置合わせされていないビットを含まないデータ集合の最大サイズ                                                        | 2147483647     |
|           | 位置合わせされていないビットを含むデータ集合の最大サイズ                                                          | 268435455      |
|           | CALL または関数参照内の引数の最大数                                                                  | 255            |
|           | プロシージャの最大パラメーター数                                                                      | 4095           |
|           | 分配された属性の最大ネスト                                                                         | 15             |
|           | BEGIN および PROCEDURE ステートメントの最大ネスト                                                     | 30             |
|           | DO グループの最大ネスト                                                                         | 49             |
|           | IF ステートメントの最大ネスト                                                                      | 49             |
|           | SELECT ステートメントの最大ネスト                                                                  | 49             |
|           | 式の最大ネスト                                                                               | 383            |
|           | %NOTE メッセージの最大の長さ                                                                     | 32767          |

表 65. 言語エレメントの制限 (続き)

| 言語エレメント | 説明                                                                                                                                                                                                                                              | 制限                                                      |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| その他     | 文字ピクチャー内のピクチャー文字の最大数                                                                                                                                                                                                                            | 511                                                     |
|         | 数値ピクチャー内の最大バイト数                                                                                                                                                                                                                                 | 253                                                     |
|         | 数値ピクチャー内の数値ピクチャー文字の最大数                                                                                                                                                                                                                          | 31                                                      |
|         | CHARACTER、X、BIT、BX、GRAPHIC、GX、WX および M スtring定数の外部表示の最大バイト数<br><br>外部表示には、すべての引用符とString接尾部が含まれます。例えば、String '01010110'B にはその外部指定内に 11 バイトありますが、内部指定には 1 バイトしかありません。同様に、String 'Ain"t Misbehavin"' にはその外部指定内に 21 バイトありますが、内部表示には 17 バイトしかありません。 | 3072                                                    |
|         | KEYTO 文字Stringの最大の長さ                                                                                                                                                                                                                            | 120                                                     |
|         | KEYTO グラフィックまたはワイド文字Stringの最大長                                                                                                                                                                                                                  | 60                                                      |
|         | KEY の最大の長さ                                                                                                                                                                                                                                      | 32763                                                   |
|         | LINESIZE の最大行サイズ                                                                                                                                                                                                                                | F フォーマットあるいは U フォーマットでは 32,759、V フォーマットでは 32,751        |
|         | LINESIZE の最小行サイズ                                                                                                                                                                                                                                | 1                                                       |
|         | PAGESIZE の最大ページ・サイズ                                                                                                                                                                                                                             | 32,767                                                  |
|         | PAGESIZE コンパイラ・オプションの最小ページ・サイズ                                                                                                                                                                                                                  | 1                                                       |
|         | DISPLAY 文字Stringの最大サイズ                                                                                                                                                                                                                          | 126                                                     |
|         | 最大の DISPLAY 応答メッセージ                                                                                                                                                                                                                             | 72 バイト                                                  |
|         | IEEE 正規化浮動小数点数値の範囲                                                                                                                                                                                                                              | +3.30E-4932 から +1.21E+4932、0、-3.30E-4932 から -1.21E+4932 |
|         | 16 進浮動小数点数値の範囲                                                                                                                                                                                                                                  | +10E-78 から +10E75、0、-10E-78 から +10E+75                  |

表 66. マクロ機能の制限

| 言語エレメント | 説明     | 制限     |
|---------|--------|--------|
| 配列      | 最大次元数  | 15     |
|         | 下限の最小値 | -32768 |
|         | 上限の最大値 | +32767 |



## 制限値

表 66. マクロ機能の制限 (続き)

| 言語エレメント        | 説明                                        | 制限                         |
|----------------|-------------------------------------------|----------------------------|
| 算術値の<br>範囲     | 最大および最小の FIXED(DECIMAL) オプションによる FIXED 変数 | FIXED DECIMAL(5)<br>ID と同じ |
|                | 最大および最小の FIXED(BINARY) オプションによる FIXED 変数  | FIXED BINARY(31)<br>ID と同じ |
| マクロ・<br>プロシージャ | 最大ネスティング・レベル                              | 1                          |
| キー             | キーワード・パラメーターの最大個数                         | 4096                       |
| ストリング結果        | 最大長                                       | 512K                       |

---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502  
神奈川県大和市下鶴間1623番14号  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
法務・知的財産  
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。

国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。

本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

---

## 商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名は、IBM または各社の商標です。現時点での IBM の商標リストについては、[www.ibm.com/legal/copytrade.shtml](http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml) をご覧ください。

Intel および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、および Windows NT は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

---

## 参考文献

---

### Enterprise PL/I 資料

プログラミング・ガイド, GI88-4249  
言語解説書, SA88-4235  
メッセージおよびコード, GA88-4237  
コンパイラおよびランタイム 移行ガイド, GA88-4236

---

### PL/I for MVS & VM

「導入およびカスタマイズ (MVS)」, SC88-7221  
「言語解説書」, SC88-7219  
「コンパイル時メッセージおよびコード」, SC88-7224  
「診断の手引き」, SC88-7223  
「移行の手引き」, SC88-7220  
「プログラミングの手引き」, SC88-7218  
「参照要約」, SX88-7011

---

### z/OS 言語環境プログラム

「概念」, SA88-8555  
「デバッグのガイド」, GA88-8548  
「ランタイム・メッセージ」, SA88-8554  
「カスタマイズ」, SA88-8552  
「プログラミング・ガイド」, SA88-8549  
「プログラミング・リファレンス」, SA88-8550  
「ランタイム・アプリケーション マイグレーション・ガイド」, GA88-8553  
「ILC (言語間通信) アプリケーションの作成」, SA88-8551

---

### CICS Transaction Server

「アプリケーション・プログラミング・ガイド」, SC88-7689  
「アプリケーション・プログラミング・リファレンス」, SC88-7690  
「カスタマイズ・ガイド」, SC88-7686  
「外部インターフェース・ガイド」, SD88-7026

---

### DB2 UDB for z/OS

「管理ガイド」, SC88-9806  
「アプリケーション・プログラミングおよび SQL ガイド」, SC88-9808  
「コマンド解説書」, SC88-9809  
「メッセージ」, GC88-4061

「コード」、GC88-4062  
「SQL 解説書」、SC88-9817

---

## DFSORT™

「アプリケーション・プログラミングの手引き」、SC88-7061  
「導入およびカスタマイズ」、SC88-7163

---

## IMS/ESA®

「アプリケーション・プログラミング: データベース管理プログラム」、SC88-7552  
「Application Programming: Database Manager Summary」、SC26-8037  
「アプリケーション・プログラミング: 設計の手引き」、SC88-7542  
「アプリケーション・プログラミング: トランザクション管理プログラミング」、SC88-7553  
「Application Programming: Transaction Manager Summary」、SC26-8038  
「アプリケーション・プログラミング: EXEC DL/I コマンド (CICS および IMS™)」、SC88-7554  
「Application Programming: EXEC DL/I Commands for CICS and IMS Summary」、SC26-8036

---

## z/OS MVS

「JCL 解説書」、SA88-8569  
「JCL ユーザーズ・ガイド」、SA88-8570  
「システム・コマンド」、SA88-8593

---

## z/OS UNIX システム・サービス

「z/OS UNIX システム・サービス コマンド解説書」、SA88-8641  
「z/OS UNIX システム・サービス プログラミング: アセンブラー呼び出し可能サービス 解説書」、SA88-8642  
「z/OS UNIX システム・サービス ユーザーズ・ガイド」、SA88-8640

---

## z/OS TSO/E

「コマンド解説書」、SA88-8628  
「ユーザーズ・ガイド」、SA88-8638

---

## z/Architecture

「Principles of Operation」、SA22-7832

---

## Unicode® および文字表現

「OS/390 Unicode サポート: 変換サービスの使用法」、SD88-6163



---

## 用語集

この用語集は、PL/I のすべてのプラットフォームとリリースで使用する用語を定義したものです。このマニュアルで使用されていない用語が含まれていることがあります。該当する用語が見つからない場合は、本書の索引を調べるか、「*IBM Dictionary of Computing*」、SC20-1699 を参照してください。

### [ア行]

**あいまい参照 (ambiguous reference).** 参照時点で認識されている名前をただ 1 つだけ識別するためには修飾が不十分な参照。

**アクセス (access).** データを参照するかまたは取り出すこと。

**アクティブ (active).** 活動化から終了にいたるまでのブロックの状態。ソース・プログラム・テキスト中の対応する ID をプリプロセッサ変数やプリプロセッサ入り口名の値に置き換えることができるときの、その変数や入り口の状態。イベント変数が非同期操作に関連付けられている間に置かれている状態。タスク変数に関連するタスクが付加されるときにタスク変数が置かれている状態。タスクが終了する前に置かれている状態。

**値参照 (value reference).** データ項目の値を得るのに使用する参照。

**アテンション (attention).** タスクに割り込みが生じる原因となるような、タスクにとっては外部の事柄の発生。

**暗黙オープン (implicit opening).** OPEN ステートメント以外の入カステートメントまたは出カステートメントが原因で、ファイルがオープンされること。

**暗黙処置 (implicit action).** 使用可能な条件が生じたときに、その条件用に現在確立されている ON ユニットがない場合にとられる処置。ON ステートメント処置 (ON-statement action) と対比。

**暗黙宣言 (implicit declaration).** DECLARE ステートメント内で明示的に宣言されていないか、または内容に従って宣言されていない名前。

**暗黙の (implicit).** 明示指定のないまま取られる処置。

**位置合わせ (alignment).** 機械に依存する特定の境界 (例えば、フルワード境界またはハーフワード境界) に関連付けて、データ項目を保管すること。

**イベント (event).** 状況および完了を、関連したイベント変数から決定することのできるプログラムの活動。

**イベント変数 (event variable).** イベントと関連付けることができる EVENT 属性を持つ変数。その値は、処置が完了したかどうか、および完了の状況を示す。

**入り口値 (entry value).** 入り口定数または入り口変数によって表されるエントリー・ポイント。入り口値には、その入り口定数に関連した活動化環境が含まれる。

**入り口参照 (entry reference).** 入り口値を返す入り口定数、入り口変数参照、または関数参照。

**入り口式 (entry expression).** 評価されると入り口名を生じるような式。

**入り口データ (entry data).** プロシージャーへのエントリー・ポイントを表すデータ項目。

**入り口定数 (entry constant).** PROCEDURE ステートメントのラベル接頭部 (入り口名)。ENTRY 属性を指定し、VARIABLE 属性を指定しないで名前を宣言すること。

**入り口変数 (entry variable).** 入り口値を割り当てる対象となりうる変数。これは、ENTRY 属性と VARIABLE 属性を両方とも持っている必要がある。

**入り口名 (entry name).** ENTRY 属性を持つものとして明示的または内容に従って宣言された ID (ただし、VARIABLE 属性が与えられていない場合に限る)。または、ENTRY 属性を暗黙指定された入り口変数の値を持った ID。

**埋め込み (padding).** スtringの長さを必要な長さまで拡張するために、Stringの右側に連結される、1 つまたは複数の文字、漢字、またはビット。構造体または共用体の中に挿入される、1 つまたは複数のバイトまたはビット。その構造、または共用体内の後続エレメントが正しい規定境界に位置合わせされるようにするためのもの。



**英字 (alphabetic character).** A から Z までの任意の英字と、#, \$、@ (これらのグラフィック表記は国によって異なる場合がある) の拡張英字。

**英数字 (alphanumeric character).** 英字または数字。

**エクステント (extent).** 配列の次元の境界、ストリング長、または区域サイズによって示される範囲。この区域がターゲット区域に割り当てられる場合は、ターゲット区域のサイズ。

**エピローグ (epilogue).** ブロックまたはタスクの終了時に自動的に生じる各種処理。

**エレメント (element).** 配列などのデータ項目の集まりとは対照的な、単一のデータ項目。スカラー項目。

**エレメント名 (elementary name).** 「基本エレメント (*base element*)」を参照。

**演算子 (operator).** 実行する演算を指定する記号。

**演算式 (operational expression).** 1 つまたは複数の演算子から成る式。

**エントリー・ポイント (entry point).** そこでプロシージャを呼び出すことができるプロシージャ内の 1 地点。「1 次エントリー・ポイント (*primary entry point*)」および「2 次エントリー・ポイント (*secondary entry point*)」も参照。

**オープン (ファイルの) (opening (of a file)).** ファイルをデータ・セットに関連付けること。

**オブジェクト (object).** 単一名で参照されるデータの集まり。

**オプション (option).** ステートメントの実行や解釈に影響を及ぼすのに使われるステートメント中の指定。

**オフセット変数 (offset variable).** OFFSET 属性を持ったロケータ変数のことであり、その値は、ストレージ内のある区域の先頭からの相対位置を識別する。

**オペランド (operand).** ID、定数、または式。式には演算子が、時には他のオペランドとともに使用される。

**オン条件 (ON-condition).** PL/I プログラムにおける、プログラム割り込みの原因となりうるオカレンス。予期しないエラーが検出されたり、予期できる出来事ではあるものの、予期しない時にそれが起きたときに発生する。

## [力行]

**介在添え字 (interleaved subscripts).** 添え字付き修飾参照の最下位レベル以外のレベルに存在する添え字。

**介在配列 (interleaved array).** 非連結ストレージを参照する配列。

**開始ブロック (begin-block).** BEGIN ステートメントと END ステートメントによって区切られ、名前有効範囲を形成するステートメントの集まり。開始ブロックの活性化は、条件が生じたために行われる (開始ブロックが ON ユニットへの処置指定である場合) か、または GOTO ステートメントの結果の分岐を含め、通常の制御の流れを介して行われる。

**外部シンボル (external symbol).** それ自身が定義されている制御セクションを除く制御セクション内で参照できる名前。

**外部シンボル辞書 (External Symbol Dictionary (ESD)).** オブジェクト・モジュール内で使われるすべての外部シンボルの一覧表。

**外部プロシージャ (external procedure).** 他のいずれのプロシージャにも組み込まれないプロシージャ。パッケージ内に入っていて同様にエクスポートされるレベル 2 のプロシージャ。

**外部名 (external name).** 有効範囲が必ずしも 1 つのブロックとその収容ブロックだけに限定されない (EXTERNAL 属性を持つ) 名前。

**拡張英字 (extended alphabet).** A から Z までの大文字、小文字の英字、\$, @、および #、または NAMES コンパイラー・オプションで指定されたもの。

**確立された処置 (established action).** 条件が生じたときにとられる処置。「暗黙の処置 (*implicit action*)」および「ON ステートメント処置 (*ON-statement action*)」も参照。

**下限 (lower bound).** 配列次元の下限。

**仮想起点 (virtual origin (VO)).** すべてゼロの添え字を持った配列のエレメントを保持するための位置。このようなエレメントが配列内になれば、仮想起点は本来それが保持されるべき場所になる。

**型変換 (conversion).** ある 1 つの表現法から、一組の特定属性に合うよう別の表現法に値を変換すること。例えば、文字ストリングを FIXED BINARY (15,0) などの算術値に変換すること。

**活動化 (プリプロセッサ変数またはプリプロセッサ・エントリ・ポイントの) (activate (a preprocessor variable or preprocessor entry point)).** マクロ機能 ID を、それに後続するソース・コード内で置換可能にすること。%ACTIVATE ステートメントは、プリプロセッサ変数やプリプロセッサ・エントリ・ポイントを活動化する。

**活動化 (ブロックの) (activate (a block)).** ブロックの実行を開始すること。プロシーチャー・ブロックは、呼び出されるときに、活動化される。開始ブロックが活動化するのには、分岐を含め、通常の制御の流れ内に現れたときである。パッケージを活動化することはできない。

**仮引数 (dummy argument).** 参照によって渡すことのできない引数の値を保持するため自動的に作成される一時記憶域。

**環境 (活動化の) (environment (of an activation)).** 収容ブロック内で宣言されたデータに関して、呼び出されたブロックと関連し、そのブロック内で使用される情報。

**環境 (ラベル定数の) (environment (of a label constant)).** ステートメント・ラベル定数への参照が適用されるブロックの個々の活動化の識別情報。この情報が決定されるのは、ステートメント・ラベル定数が、引数として渡されたり、またはステートメント・ラベル変数に割り当てられ、それが定数と一緒に渡されたり割り当てられたときである。

**関数 (プロシーチャー) (function (procedure)).** PROCEDURE ステートメント内に RETURNS オプションのあるプロシーチャー。RETURNS 属性を指定して宣言された名前。これは、関数参照内にその入り口名のうちの 1 つがあると呼び出され、スカラー値を参照点に返す。サブルーチン (subroutine) と対比。

**関数参照 (function reference).** 入り口定数または入り口変数のことで、このどちらも関数を表さなければならないが、その後に空と考えられる引数リストが続く。サブルーチン呼び出し (subroutine call) と対比。

**完全修飾名 (fully-qualified name).** 名前が参照するメンバーより上の階層順序内のすべての名前と、そのメンバー自身の名前が組み込まれている名前。

**キー (key).** 直接アクセス・データ・セット内のレコードを識別するデータ。「ソース・キー (source key)」および「記録済みキー (recorded key)」を参照。

**キーワード (keyword).** PL/I において定義されたコンテキスト内で使用されると特定の意味を持つ ID。

**キーワード・ステートメント (keyword statement).** ステートメントの機能を示すキーワードで始まる単純ステートメント。

**疑似変数 (pseudovariable).** ターゲット変数を指定するのに使用できるすべての組み込み関数の名前。これは通常、代入ステートメントの左側にある。

**記述子 (descriptor).** 区域サイズ、配列境界、またはストリング長などの変数に関する情報を保持する制御ブロック。

**基数 (base).** 算術値を表現するための数体系。

**規定境界 (integral boundary).** そこでデータを位置合わせすることができる任意の 8 ビット単位のバイト・マルチアドレス。通常はハーフワード、フルワード、またはダブルワード (2、4、または 8 バイトの長さの整数倍) 境界である。

**基底付き参照 (based reference).** 基底付きストレージ・クラスを持った参照。

**基底付きストレージ割り振り (based storage allocation).** 基底付き変数用のストレージの割り振り。

**基底付き変数 (based variable).** ストレージ・アドレスがロケータによって与えられる変数。同一変数の複数の世代をアクセスすることができる。これは、ストレージ内の固定位置を識別しない。

**起動 (invocation).** プロシーチャーの活動化。

**起動する (invoke).** プロシーチャーを活動化すること。

**基本エレメント (base element).** それ自身は別の構造体や共用体ではない、構造体や共用体のメンバー。

**基本項目 (base item).** 定義変数を定義するための、自動、被制御、または静的変数、またはパラメーター。

**境界 (bounds).** 任意の配列次元の上限と下限。

**共用体 (union).** 同一のストレージを占有し、相互にオーバーレイしたデータ・エレメントの集まり。メンバーは構造体、共用体、基本変数、または配列のいずれであっても構わない。それらは、同一の属性を持っていないても構わない。

**切り捨て (truncation).** ターゲット変数のストリング長や精度が限度を超えたときに、データ項目の片方の端から 1 つまたは複数の数字、文字、グラフィックス、またはビットを除去すること。

**記録済みキー (recorded key).** 直接アクセス・データ・セット内でレコードを識別する文字ストリングのことであり、そこでは文字ストリングそのものもデータの一部として記録される。

**区切り文字 (break character).** 下線記号 ( \_ )。ID を読みやすくするために使用することができる。例えば、変数を OLDINVENTORYTOTAL とする代わりに OLD\_INVENTORY\_TOTAL と記述できる。

**区切り文字 (delimiter).** すべてのコメントと、パーセント記号、括弧、コンマ、ピリオド、セミコロン、コロン、割り当て記号、ブランク、ポインター、アスタリスク、および単一引用符。これらは ID、定数、ピクチャー指定、iSUB、およびキーワードの限界を定めるものとなる。

**区切る (delimit).** 1 つまたは複数の項目またはステートメントの前後を、文字またはキーワードで囲むこと。

**組み込み関数 (built in function).** SQRT (平方根) のような、言語が提供する定義済み関数。

**組み込み関数参照 (built-in function reference).** オプションの引数リストを持つ組み込み関数名。

**組み込みサブルーチン (built-in subroutine).** コンパイル時に定義され、CALL ステートメントによって呼び出される入り口名を持つサブルーチン。

**組み込み名 (built-in name).** 組み込みサブルーチンの入り口名。

**位取り係数 (scale factor).** 固定小数点数内の小数桁数の指定。

**位取り係数 (scaling factor).** 「位取り係数 (scale factor)」を参照。

**グループ (group).** より大きいプログラム単位に入っているステートメントの集まり。グループは、DO グループまたは選択グループのどちらかであるが、ON ユニットとしての場合を除き、単一ステートメントを使用できるところでは常に使用することができる。

**クローズ (ファイルの) (closing (of a file)).** ファイルをデータ・セットまたは装置と切り離すこと。

**継承次元 (inherited dimension).** 構造体、共用体、またはエレメントでの、収容構造から派生する次元。名前が配列ではないエレメントであれば、その次元全体が継承次元で構成される。名前が配列であるエレメントであれば、その次元は、継承次元および明示的に宣言された次

元で構成される。1 つまたは複数の継承次元を持つ構造体を、非結合集合と呼ぶ。結合集合 (connected aggregate) と対比。

**現行世代 (current generation).** 変数名を参照して、現在使用できる自動変数または被制御変数の世代。

**コード化算術データ (coded arithmetic data).** 数値を表し、基数 (10 進数または 2 進数)、スケール (固定小数点または浮動小数点)、および精度 (個々に持ちうる桁数) を特徴とするデータ項目。このデータは、変換しなくても、算術計算用に受け入れることのできる形式で保管される。

**合成演算子 (composite operator).** <=、\*\*、および /\* などの特殊文字を複数含む演算子。

**構造化 (structuring).** メンバー数、配置順、属性、および論理レベルによって表現される構造階層。

**構造型 (structure expression).** 評価されると構造体の値セットを生成する式。

**構造体 (structure).** 必ずしも同じ属性を持たなくても差し支えないデータ項目の集まり。配列 (array) と対比。

**構造体の配列 (array of structures).** 次元属性を構造体名に与えて指定される、順番に並べられた同一構造体の集まり。

**構造体メンバー (structure member).** 「メンバー (member)」を参照。

**固定小数点定数 (fixed-point constant).** 「算術定数 (arithmetic constant)」を参照。

**コメント (comment).** 文書化のために使用され、/\* および \*/ で区切られる、ゼロ以上の文字数の文字ストリング。

**コンテキスト宣言 (contextual declaration).** DECLARE ステートメントで明示的に宣言されていないが、その使用の前後関係から、特定の属性が ID に関連付けられるような ID の存在。

**コンパイラー・オプション (compiler options).** コンパイルの特定の面を制御するために指定されるキーワード。例えば、生成するオブジェクト・モジュールの特徴や、作成する印刷出力のタイプなどがある。

**コンパイル時 (間) (compile time).** 一般に、ソース・プログラムがオブジェクト・モジュールに変換されている時間。PL/I では、変更したい場合に、ソース・プログラムを変更して、オブジェクト・プログラムに変換し終わるまでに経過する時間。

## [サ行]

**再帰的プロシージャ (recursive procedure).** そのプロシージャ自身からでも、または別のアクティブ・プロシージャからでも呼び出すことのできるプロシージャ。

**再入可能プロシージャ (reentrant procedure).** 複数のタスク、スレッド、またはプロセスから同時に活動化でき、しかもこれらのタスク、スレッド、およびプロセス間で相互に干渉が生じないプロシージャ。

**サブタスク (subtask).** 特定のタスクによって生成されるタスク、または特定のタスクから最後に生成されたタスクへの直接ライン内の任意のタスク。

**サブルーチン (subroutine).** PROCEDURE ステートメント内に RETURNS オプションのないプロシージャ。関数 (function) と対比。

**サブルーチン呼び出し (subroutine call).** 後に CALL ステートメント内にあるオプションの引数リストが付く、サブルーチンを表さなければならないエントリー参照。関数参照 (function reference) と対比。

**算術演算子 (arithmetic operators).** 接頭演算子の + と -、あるいは挿入演算子 + - \* / \*\* のうちのいずれか。

**算術データ (arithmetic data).** 基数、スケール、モード、および精度の特性を持つデータ。コード化算術データとピクチャー数字データも含まれる。

**算術定数 (arithmetic constant).** 固定小数点定数または浮動小数点定数。大部分の算術定数には符号を付けることができるが、符号は定数の一部ではない。

**算術比較 (arithmetic comparison).** 数値の比較。「ビット比較 (bit comparison)」、「文字比較 (character comparison)」も参照。

**算術変換 (arithmetic conversion).** ある 1 つの算術表現から別の表現に値を変換すること。

**参照 (reference).** 明示宣言を生じることになる 1 つのコンテキスト内以外の名前の出現。

**式 (expression).** 値、値の配列、または一連の構造化値セットを表すのに、プログラム内で使われる表記。単独で使用される定数または参照、あるいは、定数または参照あるいはその両方を演算子と組み合わせたもの。

**字句単位の (lexically).** 単位を左から右への順序に扱うことに関連した用語。

**次元属性 (dimension attribute).** 配列の次元数を指定し、各次元の境界を示す属性。

**自己定義データ (self-defining data).** プログラム実行時に決定され、集合のメンバー内に保管される境界、長さ、およびサイズを持つデータ項目を含む集合。

**指数文字 (exponent characters).** 以下のピクチャー指定文字のこと。

1. K および E. 指数フィールドの先頭を示すため、浮動小数点ピクチャー指定内で使用される文字。
2. F. 10 進小数点をその想定位置から右方向へ (正定数の場合) かまたは左方向へ (負定数の場合) 移動するときに、小数部の桁数を示す整数を使って指定される位取り係数文字。

**実際の起点 (actual origin (AO)).** 配列または構造体内の最初の項目の位置。

**自動ストレージ割り振り (automatic storage allocation).** 自動変数用のストレージ割り振り。

**自動変数 (automatic variable).** ブロックの起動時に自動的にストレージを割り振られ、そのブロックの終了時に自動的にそれを解除される変数。

**シフト (shift).** ストレージ内のデータを元の位置の左または右へ変更すること。

**シフトアウト (shift-out).** 2 バイト・ストリングの先頭でコンパイラーにシグナルを送るために使用される記号。

**シフトイン (shift-in).** 2 バイト・ストリングの終わりをコンパイラーに知らせるために使用される記号。

**集合 (aggregate).** 「データ集合」を参照。

**集合式 (aggregate expression).** 配列式、構造型、または共用体式のこと。

**集合タイプ (aggregate type).** どのデータ項目の場合も、それが構造体、共用体、または配列のいずれであるかの指定。

**修飾名 (qualified name).** 構造メンバーまたは共用体メンバーの階層順序。ピリオドで結合されていて、構造体の中の名前を識別するのに使用される。どの名前にも添え字を付けることができる。

**修正 (fix-up).** コンパイル済みプログラムを実行可能にするために、コンパイル時にエラーを検出したあとでコンパイラーが実行する解決手段。

**収容ブロック (containing block).** 該当する宣言、ステートメント、プロシージャ、またはその他のソース・テキストを収容している、パッケージ、プロシージャ、または開始ブロック。



**終了 (タスクの) (termination (of a task)).** タスクへの制御の流れを停止すること。

**終了 (ブロックの) (termination (of a block)).** ブロックの実行が終了して、RETURN ステートメントまたは END ステートメントによって、制御がその起動側ブロックに戻るか、または GO TO ステートメントによって起動側ブロックまたは他のアクティブ・ブロックに制御が渡ること。

**主プロシージャ (main procedure).** OPTIONS (MAIN) 属性を持った PROCEDURE ステートメントのある外部プロシージャ。このプロシージャは、プログラム実行の最初のステップで自動的に呼び出される。

**使用可能 (enabled).** 条件により割り込みが生じて、該当する規定 ON ユニットが呼び出される条件の状態。

**条件 (condition).** エラー (オーバーフローなど) または予期される状況 (入力ファイルの終わりなど) のいずれかの例外的な状態。条件が発生する (検出される) と、その条件に対する規定のアクションが処理される。「確立された処置 (established action)」および「暗黙処置 (implicit action)」も参照。

**上限 (upper bound).** 配列次元の上限。

**条件接頭語 (condition prefix).** ステートメントの接頭部として付けられる、括弧で囲まれた 1 つまたは複数の条件名のリスト。条件接頭語は、指定した条件を使用可能にするか使用不能にするかを指定する。

**条件名 (condition name).** PL/I 定義またはプログラマー定義の条件の名前。

**小構造 (minor structure).** 別の構造体または共用体の中に組み込まれている構造体。小構造の名前は、1 よりも大きくかつ親構造体または親共用体よりも大きいレベル番号を指定して宣言される。

**使用不可の (disabled).** 割り込みが発生せず、規定の処置も取られないような事態になった状態。

**商用文字 (commercial character).**

- CR (貸方) ピクチャー指定文字。
- DB (借方) ピクチャー指定文字。

**処置指定 (action specification).** ON ステートメント内にある、ON ユニットまたは単一のキーワード SYSTEM。該当する条件が発生すれば、2 つのうちいずれかがとるべき処置を指定する。

**数字 (digit).** 0 から 9 までの文字の 1 つ。

**数字データ (numeric-character data).** 「10 進ピクチャー・データ (decimal picture data)」を参照。

**数値ピクチャー・データ (numeric picture data).** 算術値と文字値を持ったピクチャー・データ。このタイプのピクチャー・データは、'A' または 'X' という文字を含むことはできない。

**スカラー変数 (scalar variable).** 構造、共用体、配列ではない変数。

**スケール (scale).** 1 つの数値表記体系であり、その算術値は固定小数点または浮動小数点で表現される。

**ステートメント (statement).** キーワード、区切り文字、ID、演算子、および定数から構成され、セミコロン (;) で終わる PL/I ステートメント。任意で、条件接頭語リストとラベルのリストを付けることができる。「キーワード・ステートメント (keyword statement)」、「代入ステートメント (assignment statement)」、および「ヌル・ステートメント (null statement)」も参照。

**ステートメント本体 (statement body).** ステートメント本体は、単純ステートメントまたは複合ステートメントのどちらでもかまわない。

**ステートメント・ラベル (statement label).** 「ラベル定数 (label constant)」を参照。

**ストリーム指向データ伝送 (stream-oriented data transmission).** 文字形式になった個々のデータ値の連続ストリームであるものとしてデータを扱って、データを伝送すること。レコード単位データ伝送 (record-oriented data transmission) と対比。

**ストリング (string).** 単一のデータ項目として処理される、連続した文字、グラフィックス、またはビットの列。

**ストリング変数 (string variable).** BIT、CHARACTER、または GRAPHIC 属性を指定して宣言される変数。この変数の値は、ビット・ストリング、文字ストリング、または漢字ストリングのいずれでもかまわない。

**制御セクション (control sections).** オブジェクト・モジュール内のグループ化された機械命令。

**制御の流れ (flow of control).** 実行の連なり。

**制御フォーマット項目 (control format item).** ストリーム内または印刷ページの内での、あるデータ項目の位置付けを指定するために、編集ディレクティブ伝送の中で使用される指定。

**制御変数 (control variable).** DO ステートメントの反復実行を制御するのに使用する変数。

**制御文字 (control character).** 特定コンテキスト内に存在することによって制御機能が指定される、文字セット内の文字。1 つの例としてファイルの終わり (EOF) マーカーがある。

**制限付き式 (restricted expression).** コンパイル時にコンパイラによって評価されて定数を生じる式。このような式のオペランドは、定数、指定した定数、および制限付きの式になる。

**整数 (integer).** 符号を付けるか付けないかは任意の、10 進または 2 進小数点のない一連の数字、または一連のビット。通常は、FIXED BINARY (p,0) または FIXED DECIMAL (p,0) と記述される、符号を付けるか付けないかは任意の整数。

**静的ストレージ割り振り (static storage allocation).** 静的変数用のストレージの割り振り。

**静的変数 (static variable).** プログラム実行の開始前に割り振られ、その実行の継続時間中はその割り振りの変わらない変数。

**精度 (precision).** 固定小数点データ項目内にある桁数またはビット数、または、浮動小数点データ項目での最小確保有効数字 (指数は除く) の数。

**世代 (変数の) (generation (of a variable)).** 静的変数の割り振り、被制御変数または自動変数の特定の割り振り、または基底付き変数の特定のロケーター修飾で、または定義された変数がパラメーターで指示されるストレージ。

**接頭演算子 (prefix operator).** オペランドの前に置かれ、そのオペランドにだけ適用される演算子。接頭演算子には、プラス (+)、マイナス (-)、および not (¬) がある。

**接頭部 (prefix).** ステートメントの先頭に付けられるラベル、または 1 つまたは複数の条件名の括弧で囲まれたリスト。

**ゼロ抑止文字 (zero-suppression characters).** ピクチャー指定文字の Z と \*。これは、対応する桁位置のゼロを抑止し、それぞれをブランクまたはアスタリスクで置き換えるのに使用する。

**宣言 (declaration).** ID を名前として確立し、その ID 用に一連の属性を (部分的または全体的に) 指定すること。特定名の属性のソース。

**先行ゼロ (leading zeroes).** 算術値としては意味のないゼロ。ある数値内で最初の非ゼロより左側にあるすべてのゼロ。

**選択グループ (select-group).** SELECT ステートメントと END ステートメントで区切られたステートメントの連なり。

**選択文節 (selection clause).** 選択グループの WHEN 文節または OTHERWISE 文節。

**ソース (source).** 問題データに変換されるデータ項目。

**ソース変数 (source variable).** 他の演算に使用されるが、その演算で変更されることのない変数。ターゲット変数 (target variable) と対比。

**ソース・キー (source key).** 直接アクセス・データ・セット内で個々のレコードを識別するため、レコード単位伝送ステートメント内で参照されるキー。

**ソース・プログラム (source program).** ソース・プログラム・プロセッサ、およびコンパイラへの入力となるプログラム。

**総称キー (generic key).** キー・クラスを識別する文字ストリング。そのストリングで始まるキーはすべて、そのクラスのメンバーである。例えば、'ABCD'、'ABCE'、および 'ABDF'、という記録済みキーは、すべて総称キー 'A' および 'AB' で識別されるクラスのメンバーであり、最初の 2 つは、'ABC' というクラスのメンバーでもある。そして、これら 3 つの記録済みキーは、それぞれ 'ABCD'、'ABCE'、'ABDF' というクラスの固有のメンバーであると見なすことができる。

**総称記述子 (generic descriptor).** GENERIC 属性内で使用する記述子。

**総称名 (generic name).** 入り口名ファミリーの名前。総称名への参照は、呼び出し点にある引数リスト内の引数の属性に一致するパラメーター記述子を持った入り口名によって置き換えられる。

**相対仮想起点 (relative virtual origin (RVO)).** 配列の実際の原点から配列の仮想原点を引いたもの。

**挿入演算子 (infix operator).** 2 つのオペランド間にある演算子。

**挿入点文字 (insertion point character).** 関連データを文字ストリングへ割り当てるときに、指示位置に挿入されるピクチャー指定文字。入力のときに P フォーマット項目内で使用される挿入文字は、検査の目的で用いられる。

**添え字 (subscript).** 配列の次元内の位置を指定するための要素式。添え字がアスタリスクであれば、次元のすべてのエレメントを指定する。

**添え字リスト (subscript list).** 括弧に入れられた、1 つまたは複数の添え字のリスト。配列のおおのの次元に対して 1 つの添え字が対応する。これらによって配列の単一エレメントまたはクロスセクションを一意的に識別する。

**属性 (attribute).** 表明された特性を記述するのに名前と関連付けた記述特性。式の計算の結果の特性を説明するために用いられる記述特性。

**属性分配 (factoring).** 1 つまたは複数の属性を、DECLARE ステートメント内の括弧で囲まれた名前リストに対して適用して、複数の名前に共通する属性を反復する必要をなくすこと。

## [タ行]

**ターゲット (target).** データ項目 (ソース) が変換される属性。

**ターゲット参照 (target reference).** 受取側変数 (または受取側変数の一部) を指定する参照。

**ターゲット変数 (target variable).** 値が割り当てられる変数。

**大構造 (major structure).** レベル番号 1 を指定して宣言された名前を持つ構造。

**代替属性 (alternative attribute).** 属性グループから選択するファイル記述属性。何も指定しないと、デフォルトがとられる。追加属性 (*additive attribute*) と対比。

**タイプ (type).** データの世代、値、または項目に対して適用される一連のデータ属性とストレージ属性。

**多重宣言 (multiple declaration).** 同一ブロックに対して内部であり、別の修飾を持たない同一 ID の複数宣言。同一 ID の複数外部宣言。

**タスク (task).** 単一の制御の流れによる 1 つまたは複数のプロシージャーの実行。

**タスクの生成 (attachment of a task).** 呼び込まれたプロシージャー (およびこれが呼び出すプロシージャー) を、呼び出しプロシージャーの実行と一緒に、非同期で実行するために、プロシージャーを呼び出して別に制御の流れを確立すること。

**タスク変数 (task variable).** TASK 属性を持ち、その値がタスクの相対優先順位を示す変数。

**タスク名 (task name).** タスク変数を参照するのに使用される ID。

**単純ステートメント (simple statement).** IF、ON、WHEN、および OTHERWISE 以外のステートメント。

**単純パラメーター (simple parameter).** ストレージ・クラス属性が指定されていないパラメーター。単純パラメーターはどのストレージ・クラスの引数も表すことができるが、被制御引数の現行世代だけを表すことができる。

**ダンプ (dump).** エラーの原因のトレースなどの、プログラムが使用するストレージの一部または全部、または他のプログラム情報の印刷出力。

**調節可能エクステンツ (adjustable extent).** 関連変数の世代によって異なることのある境界 (配列の)、長さ (ストリングの)、またはサイズ (区域の)。調節可能エクステンツは、世代ごとに別々に評価される式またはアスタリスク (ただし、基底付き変数の場合は REFER オプション) で指定される。静的変数に使用することはできない。

**追加属性 (additive attribute).** デフォルトを持たず、必要であれば明示的に述べるか、または、明示的に述べられた別の属性で暗黙指定しなければならないファイル記述属性。代替属性 (*alternative attribute*) と対比。

**データ (data).** 処理に適合した形式の情報または値の表現。

**データ項目 (data item).** 単一の名前付きデータ単位。

**データ指定 (data specification).** 伝送モード (DATA、LIST、または EDIT) を指示し、さらにデータ・リストと、編集ディレクティブ・モードの場合はフォーマット・リストを含む、ストリーム指向伝送ステートメントの一部分。

**データ集合 (data aggregate).** 異なったデータ項目の集まりであるデータ項目。

**データ属性 (data attribute).** FIXED BINARY などの、データ項目が表すデータのタイプを指定するキーワード。

**データ伝送 (data transmission).** データ・セットからプログラムへ、およびその逆に、データを転送すること。

**データ・ストリーム (data stream).** ストリーム指向伝送でデータ・セットから、またはデータ・セットへ、文字形式のデータ・エレメントの連続ストリームとして転送されるデータ。

**データ・セット (data set).** 単一のファイル名の参照によってアクセスすることができる、プログラムの外部にあるデータの集まり。参照されることが可能な装置。

**データ・タイプ (data type).** 一連のデータ属性。

**データ・ディレクティブ伝送 (data-directed transmission).** データを送送するための、ストリーム指向伝送のタイプ。代入ステートメントに似ていて、`name = constant` の形式をとる。

**データ・リスト (data list).** ストリーム指向伝送における、GET および PUT ステートメント内で使用するデータ項目を括弧で囲んだリスト。フォーマット・リスト (*format list*) と対比。

**定義された変数 (defined variable).** 指定された基底付き変数用の一部または全部のストレージに関連付けられる変数。

**定数 (constant).** 名前が付いておらず、変更できない値を持った、算術またはストリング・データ項目。VALUE 属性を指定して宣言された ID。FILE 属性または ENTRY 属性を指定し、VARIABLE 属性を指定しないで宣言された ID。

**定数参照 (constant reference).** 対象として定数を持つ参照値。

**デバッグ (debugging).** プログラムからバグを除去する処理。

**デフォルト (default).** 指定がされていないときに、とられる値、属性、またはオプション。

**同期 (synchronous).** プログラムの順次実行での単一の制御の流れ。

**特別言語文字 (extralingual character).** 英数字にも特殊文字にも分類されない文字 (\$、@、および # など)。このグループには、NAMES コンパイラー・オプションで指定された文字も含まれる。

## [ナ行]

**内部プロシージャ (internal procedure).** ブロックの中に組み込まれている別のプロシージャ。外部プロシージャ (*external procedure*) と対比。

**内部ブロック (internal block).** ブロックの中に組み込まれている別のブロック。

**内部名 (internal name).** 名前が宣言されたブロック内のみで認識されている名前、またそのブロック内に入っているブロックの中でも認識されている可能性もある名前。

**入出力 (input/output).** 補助メディアと主記憶装置との間でデータを転送すること。

**認識された (名前に関する用語) (known (applied to a name)).** 宣言された意味で認識されること。名前は、その有効範囲内で認識される。

**ヌル・ステートメント (null statement).** セミコロン記号 (;) のみの入ったステートメント。これは、何も処置はとられないことを示す。

**ヌル・ストリング (null string).** 長さゼロの文字ストリング、漢字ストリング、またはビット・ストリング。

**ヌル・ロケータ値 (null locator value).** 内部記憶域内のどの位置も識別できない特殊ロケータ値。これは、現在ロケータ変数がデータの世代を識別できないことを示すのに役立つ。

**ネスト (nesting).** 次のものの発生。

- ブロック内にある別のブロック。
- グループ内にある別のグループ。
- THEN 文節または ELSE 文節内の IF ステートメント。
- 関数参照の引数としての関数参照。
- FORMAT ステートメントのフォーマット・リスト内のリモート・フォーマット項目。
- パラメーター記述子リスト内の別のパラメーター記述子リスト。
- 1 つまたは複数の属性が分配されている括弧で囲まれた名前リスト内の属性の指定。

## [ハ行]

**配列 (array).** 同じ属性を持ち、1 つまたは複数の次元別にグループ分けされた 1 つまたは複数のデータ・エレメントに、名前を付けて順番に並べた集合体。

**配列式 (array expression).** 評価されると値の配列が生成される式。

**配列の共用体 (union of arrays).** 次元属性を持った共用体。



**配列のクロス・セクション (cross section of an array).** 配列の少なくとも 1 つの次元のエクステントで表すことのできるエレメント。配列参照内に添え字の代わりにアスタリスクがあれば、それはその次元のエクステント全体を表す。

**配列の構造体 (structure of arrays).** 次元属性を持つ構造体。

**配列変数 (array variable).** 同じ属性を持っていない必要のないデータ項目の集合を表す変数。構造変数 (*structure variable*) と対比。

**パック 10 進 (packed decimal).** 固定小数点 10 進データ項目の内部表現。

**パッケージ定数 (package constant).** PACKAGE ステートメントのラベル接頭語。

**バッファ (buffer).** レコードが入力時に読み込まれ、レコードが出力時に書き出される、入出力操作に使用する中間記憶域。

**パラメーター (parameter).** PROCEDURE ステートメントの後に続くパラメーター・リスト中の名前。そのプロシーチャーが呼び出されれば、渡される引数を指定する。

**パラメーター記述子 (parameter descriptor).** ENTRY 属性指定内でパラメーター用に指定される一連の属性。

**パラメーター記述子リスト (parameter descriptor list).** ENTRY 属性指定内のすべてのパラメーター記述子のリスト。

**パラメーター・リスト (parameter list).** コンマで区切られ、プロシーチャー・ステートメント内のキーワード PROCEDURE の後に続くか、または ENTRY ステートメント内のキーワード ENTRY の後に続く、括弧で囲まれた 1 つまたは複数のパラメーターのリスト。このリストは、呼び出し時に渡される引数リストと対応する。

**範囲 (デフォルト指定の) (range (of a default specification)).** DEFAULT ステートメント内の属性を適用される ID またはパラメーター記述子のどちらか、またはこの両方のセット。

**反復 DO グループ (iterative do-group).** 制御変数または WHILE や UNTIL オプション、またはこの両方を指定した DO ステートメントを持つ DO グループ。

**反復因数 (iteration factor).** INITIAL 属性指定において、特定の値を使って初期化されることになっている配列の連続エレメント数を指定するための式。フォーマッ

ト・リストにおける、特定のフォーマット項目またはフォーマット項目のリストを連続して使用する回数を指定するための式。

**反復因数 (repetition factor).** 以下のものを指定する、括弧に入れられた符号なし整数。

1. 後続するストリング定数を繰り返す回数。
2. 後続するピクチャー文字を繰り返す回数。

**反復指定 (repetitive specification).** 1 つまたは複数のデータ項目伝送の被制御反復を指定するためのデータ・リストの 1 エレメントであり、通常は配列と同時に使用する。

**非アクティブ (deactivated).** ある ID の値で、ソース・プログラム・テキスト内のプリプロセッサ ID を置き換えることができない状態。アクティブ (*active*) と対比。

**比較演算子 (comparison operator).** 関係内の項目を相互に比較するよう指示するための算術、ストリング・ロケーター、または論理関係で使用される演算子。比較演算子は次のとおり。

- = (に等しい)
- > (より大)
- < (より小)
- >= (より大か等しい)
- <= (より小か等しい)
- ~= (等しくない)
- >> (より大ではない)
- << (より小ではない)

**引数 (argument).** サブルーチンまたは機能の呼び出しの一部である引数リスト内にある式。

**引数リスト (argument list).** コンマで区切られ、入出力名定数、入出力名変数、総称名、または組み込み関数名に続く、括弧で囲まれたゼロまたはそれ以上の引数のリスト。そのリストは、エントリー・ポイントのパラメーター・リストである。

**ピクチャー指定 (picture specification).** PICTURE 属性を指定した宣言内で、または P フォーマット項目内でピクチャー文字を使用して宣言されたデータ項目。

**ピクチャー指定文字 (picture specification character).** ピクチャー指定で使用するすべての文字。

**ピクチャー・データ (picture data).** 文字形式で表された、数値データ、文字データ、またはそれらの混合。

**被制御ストレージ割り振り (controlled storage allocation).** 被制御変数用のストレージの割り振り。

**被制御パラメーター (controlled parameter).**

DECLARE ステートメント内で CONTROLLED 属性を指定されるパラメーター。これは、CONTROLLED 属性を持った引数としか関連付けることはできない。

**被制御変数 (controlled variable).** 現行世代にだけアクセスすることができ、ALLOCATE と FREE ステートメントによって割り振りと解放が制御される変数。

**ビット (bit).** 0 または 1。コンピューター・ストレージの最小スペース量。

**ビット値 (bit value).** ビット・タイプを表す値。

**ビット比較 (bit comparison).** 2 進数字を、左から右へビットごとに比較すること。「算術比較 (arithmetic comparison)」、「文字比較 (character comparison)」も参照。

**ビット・ストリング (bit string).** ゼロ以上のビットで構成されたストリング。

**ビット・ストリング演算子 (bit string operators).** 論理演算子 NOT と排他 OR ( $\vee$ )、AND ( $\&$ )、および OR ( $\mid$ )。

**ビット・ストリング定数 (bit string constant).** 囲まれていて、接尾部 B が直後に付いた 2 進数字の連なり。文字定数 (character constant) と対比。単一引用符に囲まれ、後に接尾部 B4 が付いた 16 進数字の連なり。

**非同期操作 (asynchronous operation).** ステートメントの実行と、入出力操作が並行して行われること。各種タスクに複数の制御の流れを使った、プロシーチャーの並行実行。

**評価 (evaluation).** 単一の値、値の配列、または値の構造化値へ式を換算すること。

**標準システム処置 (standard system action).** 使用可能な条件のための ON ユニットがないときにその条件が発生した場合にとられる、言語で指定された処置。

**標準デフォルト (値) (standard default).** 属性またはオプションの指定がなく、適用できる DEFAULT ステートメントがない場合の、代替属性または代替オプション。

**標準ファイル (standard file).** GET ステートメントや PUT ステートメントで FILE オプションまたは STRING オプションがない場合に、PL/I が想定するファイル。SYSIN が標準入力ファイルであり、SYSPRINT が標準出力ファイルである。

**非連結ストレージ (nonconnected storage).** 非結合データ項目が占有するストレージ。例えば、継承次元を持つ介在配列や構造体は、非結合ストレージ内にある。

**ファイル (file).** プログラムにおいて、単数または複数のデータ・セットを名前付きで表現したもの。ファイルは、オープンするごとに、単数または複数のデータ・セットに関連付けられる。

**ファイル記述属性 (file description attribute).** 各ファイル定数の個々の特性を記述したキーワード。「代替属性 (alternative attribute)」と「追加属性 (additive attribute)」も参照。

**ファイル式 (file expression).** 評価されるとファイル・タイプを生じる式。

**ファイル定数 (file constant).** FILE 属性を指定し、VARIABLE 属性を指定しないで宣言された名前。

**ファイル変数 (file variable).** ファイル定数を割り当てることのできる変数。この場合、ファイルは、FILE 属性と VARIABLE 属性を持っていなければならない、ファイル記述属性を持っていることはできない。

**ファイル名 (file name).** ファイル用に宣言された名前。

**フィールド (データ・ストリーム中の) (field (in the data stream)).** 単一データまたはスペーシング・フォーマット項目によって、幅 (文字数) を定義されるデータ・ストリームの部分。

**フィールド (ピクチャー指定の) (field (of a picture specification)).** 任意の文字ストリング・ピクチャー指定、または固定小数点数を記述した数字ピクチャー指定の部分 (または全部)。

**フォーマット (format).** ストリーム内のデータ項目の表現法を記述したり (データ・フォーマット項目)、またはストリーム内のデータ項目の個々の位置決めを記述する (制御フォーマット項目) ために編集ディレクティブ・データ伝送内で使用される仕様。

**フォーマット定数 (format constant).** FORMAT ステートメントでのラベル接頭部。

**フォーマット・データ (format data).** FORMAT 属性を指定された変数。

**フォーマット・ラベル (format label).** FORMAT ステートメントでのラベル接頭部。

**フォーマット・リスト (format list).** ストリーム指向伝送における外部メディアでのデータ項目のフォーマットを指定したリスト。データ・リスト (data list) と対比。

**複合ステートメント (compound statement).** 他のステートメントが含まれているステートメント。PL/I では、IF、ON、OTHERWISE、および WHEN だけが、複合ステートメントである。「ステートメント本体 (statement body)」を参照。

**複合ネストの深さ (combined nesting depth).** プログラム内の PROCEDURE/BEGIN/ON、DO、SELECT、および IF...THEN...ELSE によるネストのレベルをカウントして決定される、最も深いネスト・レベル。

**複素数データ (complex data).** おおのこの項目が実数部と虚数部で構成された算術データ。

**含まれているブロック、宣言、またはソース・テキスト (contained block, declaration, or source text).** 開始、プロシージャ、またはパッケージのブロック内のすべてのブロック、プロシージャ、ステートメント、宣言、またはソース・テキスト。パッケージ、プロシージャ、および BEGIN ステートメントとそれに対応する END ステートメント全体は、ブロック内には含まれていない。

**符号および通貨記号 (sign and currency symbol characters).** ピクチャー指定文字。S、+、-、および \$ (または < と > で囲まれたその他の通貨記号)。

**浮動小数点定数 (floating-point constant).** 「算術定数 (arithmetic constant)」を参照。

**部分修飾名 (partially-qualified name).** 不完全な修飾名。これには名前が参照する構造メンバーまたは共用体メンバーより上の階層順序内にある名前うちの全部ではない 1 つまたは複数の名前、およびそれ自身のメンバー名が含まれる。

**プリプロセッサ (preprocessor).** コンパイルを実行する前に、ソース・プログラムを調べるためのプログラム。

**プリプロセッサ・ステートメント (preprocessor statement).** プリプロセッサがとる処置を指定するために、ソース・プログラム内に入れる特殊ステートメント。これは、プリプロセッサによって検出されると実行される。

**プログラム (program).** 1 つまたは複数の外部プロシージャまたはパッケージのセット。外部プロシージャのうちの 1 つは、PROCEDURE ステートメント内に OPTIONS(MAIN) 指定を持っていないなければならない。

**プログラム制御データ (program control data).** PL/I プログラムの処理を制御するのに使用するための区域、ロケータ、ラベル、フォーマット、項目、およびファイルのデータ。

**プロシージャ (procedure).** PROCEDURE ステートメントと END ステートメントで区切られたステートメントの集まり。プロシージャとはプログラムまたはプログラムの一部であり、名前の有効範囲を区切り、そのプロシージャまたは入り口名の 1 つへの参照によって活動化される。「外部プロシージャ (external procedure)」および「内部プロシージャ (internal procedure)」も参照。

**プロシージャ参照 (procedure reference).** 入り口定数または入り口変数。この後に引数リストを続けることができる。プロシージャ参照は、CALL ステートメントや CALL オプションに入れることも、または関数参照として使用することもできる。

**ブロック (block).** その中で宣言された名前の有効範囲と、その名前用のストレージ割り振りを指定する、1 つの単位として処理される一連のステートメント。ブロックとしては、パッケージ、プロシージャ、または開始ブロックのいずれもありえる。

**プロローグ (prologue).** ブロックの起動時に自動的に生じる処理。

**分離文字 (separator).** 「区切り文字 (delimiter)」を参照。

**編集ディレクティブ伝送 (edit-directed transmission).** データが連続した文字ストリームとして中にあり、関連データ・リストに対して行いたい編集を指定するにはフォーマット・リストを必要とするようなタイプのストリーム指向伝送。

**変数 (variable).** データを参照するのに使用され、値を割り当てる対象となりうる名前付きのエンティティ。その属性は一定のままであるが、場合に応じてそれぞれ異なる値を参照することができる。

**変数参照 (variable reference).** 変数全体またはその一部を指定する参照。

**ポインター (pointer).** ストレージ内の位置を識別するための変数のタイプ。

**ポインター値 (pointer value).** ポインター型を識別する値。

**ポインター変数 (pointer variable).** ポインター値が入った POINTER 属性を持ったロケータ変数。

## [マ行]

**マルチプログラミング (multiprogramming).** 単一の処理装置を使って、複数のプログラムを並行して処理するのに、計算機システムを使用すること。

**マルチプロセッシング (multiprocessing)**. 複数のプログラムを同時に実行するために、複数の処理装置を備えた計算機システムを使用すること。

**未定義 (undefined)**. ユーザーが行ってはならないことを示す。未定義機能が使用されると、PL/I 製品の個々のインプリメンテーションによって違った結果が出る可能性がある。このような場合、アプリケーション・プログラムはエラーとなる。

**名 (name)**. 変数や定数にユーザーが与える ID。コンテキスト中に現れる、キーワードではない ID。場合によっては、ユーザー定義名とも呼ぶ。

**明示宣言 (explicit declaration)**. ラベル接頭部として DECLARE ステートメント内、またはパラメーター・リスト内に ID (名前) を出すこと。暗黙宣言 (*implicit declaration*) と対比。

**メンバー (member)**. 構造体または共用体の中の、構造体、共用体、あるいはエレメントの名前。ライブラリー内のデータ・セット。

**モード (算術データの) (mode (of arithmetic data))**. 算術データの属性。これは、実数 または複素数 のどちらかである。

**文字ストリング定数 (character string constant)**. 単一引用符で囲まれる一連の文字。例えば、'Shakespeare's Hamlet:' など。

**文字ストリング・ピクチャー・データ (character string picture data)**. 文字値だけを持ったピクチャー・データ。このタイプのピクチャー・データは、少なくとも 1 つの A または X ピクチャー指定文字を持っていないければならない。数値ピクチャー・データ (*numeric picture data*) と対比。

**文字セット (character set)**. あらかじめ決められた文字の集まり。ASCII と EBCDIC を参照。

**文字比較 (character comparison)**. 照合順序に従って、左から右へ文字単位で行われる比較。「算術比較 (*arithmetic comparison*)」、「ビット比較 (*bit comparison*)」も参照。

**戻り値 (returned value)**. 関数プロシージャから戻される値。

**問題状態プログラム (problem-state program)**. オペレーティング・システムの問題プログラム状態内で稼働するプログラム。これには、入出力指示やその他の特権命令は入らない。

**問題データ (problem data)**. コード化された算術データ、ビット・データ、文字データ、グラフィック・データ、およびピクチャー・データ。

## [ヤ行]

**有効範囲 (条件接頭語の) (scope (of a condition prefix))**. 全体にわたって特定の条件接頭語が適用される、プログラムの部分。

**有効範囲 (宣言の) (scope (of a declaration or name))**. 全体にわたって特定名が認識されているプログラムの部分。

**優先度 (priority)**. タスクに関連する値で、他のタスクに対するそのタスクの優先順位 (指名順位) を指定する。

**要素式 (element expression)**. 評価されるとエレメント値を生じる式。

**要素変数 (element variable)**. エレメントを表す変数。スカラー変数。

**呼び出されたプロシージャ (invoked procedure)**. 活動化されているプロシージャ。

**呼び出し (call)**. CALL ステートメントまたは CALL オプションを使用してサブルーチンを呼び出すこと。

**呼び出し側ブロック (invoking block)**. プロシージャを活動化するブロック。

**呼び出し点 (point of invocation)**. 呼び込まれたプロシージャへの参照が現れる呼び込み側ブロック内の地点。

**予備ファイル (spill file)**. 一時作業ファイルとして使われる SYSUT1 という名前のデータ・セット。

## [ラ行]

**ライブラリー (library)**. メンバーと呼ばれるその他のデータ・セットを保管するのに使用できる MVS 区分データ・セット、または CMS MACLIB のこと。

**ラベル (label)**. ステートメントの接頭部として付く名前。PROCEDURE ステートメント上の名前を、入り口定数と呼び、FORMAT ステートメント上の名前を、フォーマット定数と呼ぶ。その他の種類のステートメント上の名前を、ラベル定数と呼ぶ。LABEL 属性を持つデータ項目。

**ラベル接頭部 (label prefix)**. ステートメントの接頭部として付けられたラベル。



**ラベル定数 (label constant).** ステートメント (PROCEDURE、ENTRY、FORMAT、または PACKAGE を除く) のラベル接頭語として書き込まれる名前。実行時に、そのラベル接頭語が参照されれば、そのステートメントにプログラムの制御を渡すことができる。

**ラベル変数 (label variable).** LABEL 属性を指定して宣言された変数。その値は、プログラム内でのラベル定数である。

**ラベル・データ (label data).** ラベル定数または、ラベル変数の値。

**リスト・ディレクティブ (list-directed).** ストリーム内のデータがブランクやコンマで区切られた定数になり、フォーマット設定が自動的に行われるタイプのストリーム指向伝送。

**リモート・フォーマット項目 (remote format item).** R という文字の後に FORMAT ステートメントのラベル (括弧に囲まれている) のあるもの。フォーマット指定ステートメントは、転送するデータのフォーマットを制御するために、編集ディレクティブ・データ伝送ステートメントにより使用する。

**領域 (area).** 基底付き変数を割り振ることのできる、ストレージ中の部分。

**ループ (loop).** 繰り返し実行される一連の命令。

**レコード (record).** レコード単位入力または出力の操作における、伝送の論理単位。1 つまたは複数の関連データ項目の集まり。これらの項目には通常、それぞれ異なるデータ属性があり、また通常は構造体か共用体の宣言で記述される。

**レコード単位データ伝送 (record-oriented data transmission).** 別々のレコードの形式でデータを伝送すること。ストリーム方式のデータ伝送 (*stream data transmission*) と対比。

**レベル 1 変数 (level-one variable).** 大構造体または共用体の名前。構造体または共用体の中に含まれていない、添え字なし変数。

**レベル番号 (level number).** DECLARE ステートメント中の名前の前に付く番号で、構造体名の階層内のその相対位置を指定するもの。

**連結 (concatenation).** 2 つのストリングを指定順に結合し、元の 2 つのストリングの合計長に等しい長さを持った 1 つのストリングを作成する操作。これは、演算子 `||` で指定する。

**連結参照 (connected reference).** 連結ストレージに対する参照。プログラムを実行するには、ストレージが連結されていることが明らかでなければならない。

**連結集合 (connected aggregate).** エレメントが、間にデータ項目の入らない連続したストレージを占有する配列または構造体。非連結集合 (*nonconnected aggregate*) と対比。

**連結ストレージ (connected storage).** 単一名を使って参照することができる諸項目の非中断かつ線形の連りの主記憶域。

**ロケータ (locator).** 変数のアドレスまたはその記述子を保持する制御ブロック。

**ロケータ値 (locator value).** ストレージ・アドレスを識別する値か、またはストレージ・アドレスを識別するのに使用できる値。

**ロケータ修飾 (locator qualification).** 基底付き変数への参照において、その参照が参照している基底付き変数の世代を指定するために、基底付き変数の左側に矢印で接続されているロケータ変数または関数参照。これは、暗黙参照であることもある。

**ロケータ変数 (locator variable).** 変数またはバッファの主記憶域内の位置を識別する値を持った変数。これは、POINTER 属性または OFFSET 属性を持つ。

**ロケータ/記述子 (locator/descriptor).** その後に記述子の付いたロケータ。ロケータは、記述子のアドレスではなく、変数のアドレスを保持する。

**ロック・レコード (locked record).** EXCLUSIVE DIRECT UPDATE ファイル内のレコードであって、1 つのタスクにだけしか使用することはできず、そのレコードを使用しているタスクによって解放されるまで、他のタスクからアクセスできないレコード。

**論理演算子 (logical operators).** ビット・ストリング演算子の NOT や排他 OR ( $\vee$ )、AND ( $\&$ )、および OR ( $\vee$ )。

**論理レベル (構造体または共用体メンバーの) (logical level (of a structure or union member)).** 全レベル番号が直接順序になっているとき (あるレベル番号から次のレベル番号までの増分が 1 のとき) に、レベル番号で示される深さ。

## [ワ行]

**割り当て (assignment).** 値を変数に与える処理。

**割り込み (interrupt).** 条件やアテンションの発生の結果として、プログラムの制御の流れを変更すること。

**割り振られた変数 (allocated variable).** 主記憶域に関連付けられ解放されない変数。

**割り振り (allocation).** 変数用の主記憶域の予約。割り振られた変数の世代。PL/I ファイルを、システム・データ・セット、装置、またはファイルに関連付けること。

## [数字]

**1 次エントリー・ポイント (primary entry point).** PROCEDURE ステートメントのラベル・リスト内の任意の名前によって識別されるエントリー・ポイント。

**10 進 (decimal).** 0 から 9 までの数字を使った数体系。

**10 進固定小数点値 (decimal fixed-point value).** 小数点の想定位置を持つ 10 進数の連なりで構成される有理数。2 進固定小数点値 (binary fixed-point value) と対比。

**10 進固定小数点定数 (decimal fixed-point constant).** 1 つまたは複数の 10 進数 (および任意で小数点を付けたもの) から成る定数。

**10 進ピクチャー文字 (decimal digit picture character).** ピクチャー指定文字 9 のこと。

**10 進ピクチャー・データ (decimal picture data).** 「数値ピクチャー・データ (numeric picture data)」を参照。

**10 進浮動小数点値 (decimal floating-point value).** 10 進小数部と考えることができる仮数形式の実数、および 10 を底とする整数のべき乗と考えることができる指数の近似値。2 進浮動小数点値 (binary floating-point value) と対比。

**10 進浮動小数点定数 (decimal floating-point constant).** 10 進固定小数点定数から成る仮数と、3 桁を超えないオプションの符号付き整数が後に付いた文字 E から成る指数とで構成される値。

**16 進 (hex).** 「16 進数字 (hexadecimal digit)」を参照。

**16 進数 (hexadecimal).** 16 の基数を持った数体系。有効数は 0 から 9 の数字と、A は 10 を、F は 15 を表す A から F までの文字。

**16 進数字 (hexadecimal digit).** 0 から 9 までと A から F までの数字のいずれか。A から F までは、それぞれ 10 進数値の 10 から 15 までを表す。

**2 次エントリー・ポイント (secondary entry point).** 入り口ステートメントのラベル・リスト内の任意の名前によって識別されるエントリー・ポイント。

**2 進固定小数点値 (binary fixed-point value).** 2 進数字で構成され、オプションの 2 進小数点とオプションの符号を持った整数。10 進固定小数点値 (decimal fixed-point value) と対比。

**2 進数 (binary).** 0 と 1 が唯一の数表示である数体系。

**2 進数字 (binary digit).** 「ビット (bit)」を参照。

**2 進浮動小数点値 (binary floating-point value).** 2 進小数部と見なせる仮数と、2 の基数に対する整数指数と見なせる指数の形式の実数の近似値。10 進浮動小数点値 (decimal floating-point value) と対比。

## A

**ASCII.** 情報交換用米国標準コード (American National Standard Code for Information Interchange)。

## D

**DBCS.** 文字セットにおいて、それぞれの文字は 2 つの連続するバイトで表される。

**DO グループ (do-group).** DO ステートメントで区切られ、それに対応する END ステートメントで終了する、制御目的に使用される一連のステートメント。ブロック (block) と対比。

**DO ループ (do-loop).** 「反復 DO グループ (iterative do-group)」を参照。

## E

**EBCDIC.** 拡張 2 進化 10 進コード (Extended Binary-Coded Decimal Interchange Code)。8 ビットのコード化文字からなるコード化文字セット。

**end-of-step メッセージ (end-of-step message).** ジョブ制御ステートメントとジョブ・スケジューラー・メッセージのリストに続いており、各ステップの成功または失敗を示す戻りコードを含むメッセージ。

## I

**ID (identifier).** コメントや定数内に入ることがなく、前後に区切り文字をとまなう文字のストリング。ID の先頭文字は、26 個の英字、または特別言語文字 (ある場合) でなければならない。その他の文字がある場合には、拡張英字、数字、区切り文字を追加して入れることができる。

**IEEE.** 米国電気電子学会 (Institute of Electrical and Electronics Engineers)。

## O

**ON ステートメント処置 (ON-statement action).** ある条件が生じたときに処置を取れるよう、条件に対して明示的に設定された処置法。プログラムの制御の流れ内で ON ステートメントが見つかると、とられる処置で、その条件に対する処置が設定される。この処置は、ON ユニットが設定されたままであるか、RESIGNAL ステートメントで再設定されて条件が生じたときにとられる。暗黙の処置 (*implicit action*) と対比。

**ON ユニット (ON-unit).** 該当する条件が起きたときに、とられるよう指定された処置。

## P

**PL/I プロンプター (PL/I prompter).** PL/I コマンドのコマンド・プロセッサ・プログラムで、オペランドを調べ、コンパイラーに必要なデータ・セットを割り振る。

**PL/I 文字セット (PL/I character set).** PL/I のプログラム・エレメントを表現するために定義されている文字セット。

## R

**REFER オブジェクト (REFER object).** REFER オプション中の変数。メンバーの現行境界、長さ、またはサイズを保持しているか、あるいは保持する予定のもの。REFER オブジェクトは、同一構造体または共用体のメンバーでなければならない。これは、ロケーター修飾したり添え字を付けてはならず、また REFER オプションを持ったメンバーの前になければならない。

**REFER 式 (REFER expression).** REFER というキーワードの前に付いた式。この式は、REFER オプションを含む基底付き変数が、ALLOCATE ステートメントまた

は LOCATE ステートメントのいずれかによって割り振られるときの境界、長さ、またはサイズとして使用される。

**RETURNS 記述子 (RETURNS descriptor).** RETURNS 属性内と、PROCEDURE および ENTRY ステートメントの RETURNS オプション内で使用する記述子。

# 索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## [ア行]

アスタリスク  
  算術演算での使用 67  
  説明 366  
  添え字としての使用 197  
  ID として 18  
アプリケーション 101  
暗黙  
  解放  
    基底付き変数の場合 269  
    被制御変数の場合 260  
  宣言 172  
  ファイルのオープン 306  
暗黙アクション 377  
暗黙にロケーター修飾された参照 265  
暗黙の日付  
  比較 52  
  割り当て 52  
異常終了  
  プログラム 103  
  プロシージャ 115  
位置指定モード 319  
移動モード 319  
入り口参照の呼び出し 144  
入り口参照呼び出し 144  
入り口データ  
  参照の呼び出し 144  
  説明 130  
  総称入り口宣言 141  
属性  
  分類 32, 33  
  ENTRY 132  
  GENERIC 141  
  LIMITED 140  
  LIST 136  
  OPTIONAL 135  
  直接入り口宣言 130  
  定数 131  
  変数 131  
  GENERIC 141  
入り口定数 131  
引用符 (単一または二重)、ストリング・データを囲む 28  
英字 14  
英数字 14  
エクステント (境界の) 193  
エレメント  
  式 63  
  スカラー 27  
  データ 27  
  パラメーター 127  
  プログラム 13  
  変数 27  
  割り当て 218  
  DBCS の場合 25  
  SBCS の場合 17  
演算  
  組み合わせ 78  
  クラス 66  
  算術 66  
  接頭演算子  
    説明 65  
    例 81  
  挿入演算子 65  
  比較  
    説明 75  
    例 77  
  ビット 74  
  ポインター 66  
  ポインター・サポート拡張の使用 66  
  連結 77  
  論理 74  
演算子  
  算術  
    使用法 19  
    説明 66  
  使用法 18  
  ストリング 19  
  挿入演算子  
    説明 81  
    ポインター式との併用 66  
  比較 19  
  ビット 19  
  論理 19  
演算子の優先順位 79  
演算式  
  クラス 66  
  説明 65  
  データ・タイプの制限 66  
  定義 61  
  変換規則 66  
  例 66  
エントリー・ポイント 108  
オーバーパンチ・ピクチャー文字、I 373

オーバーパンチ・ピクチャー文字、R 373  
オーバーパンチ・ピクチャー文字、T 373  
応答テキスト 762  
大文字小文字の区別 17  
オプション  
  値の指定 191  
  データ伝送ステートメントの 315, 324  
ASSEMBLER 149  
DESCRIPTORS オプション 190  
DLLINTERNAL 152  
EXPORTS 106  
FETCHABLE 152  
GRAPHIC 48  
GRAPHIC ENVIRONMENT 48  
NORESCAN 776  
OPTIONS 146  
RANGE 189  
RECURSIVE 116  
REPEAT 227  
REPLY 223  
RESCAN 776  
RESERVES 106  
RETURNS 156  
SCAN 776  
SET 119  
SNAP 380  
SYSTEM 380  
TITLE 119  
オフセット変数 263  
オフセット・データ 273  
オペランド  
  定義 61  
  変換 70

## [カ行]

介在添え字 204  
開始ブロック  
  活動化 129  
  終了 129  
  説明 129  
  例 129  
外部プロシージャ  
  説明 108  
  動的ロード 118  
各種演算の組み合わせ 78  
確立された条件 377  
確立された処置 380



貸方 (CR) ピクチャー文字 373  
下線 ( ) 文字 28  
仮想定数 36  
括弧 18  
活動化  
開始ブロック 129  
プログラム 102  
プロシージャー 114  
ブロック 103  
仮引数  
規則 127  
説明 127  
属性の導出 127  
借方 (DB) ピクチャー文字 373  
漢字ストリング定数 48  
関数  
組み込み 125  
制限 123  
説明 123  
定義 123  
プログラマー作成の 125  
戻り 145  
例 123  
キーワード  
定義 17  
キーワード・ステートメント 22  
記号、複合の 16  
疑似変数  
説明 64  
宣言 421  
要約 433  
呼び出し 421  
例 64  
ENTRYADDR 499  
IMAG 535  
ONCHAR 591  
ONGSOURCE 598  
ONSOURCE 604  
ONWCHAR 607  
ONWSOURCE 609  
REAL 659  
STRING 694  
SUBSTR 696  
TYPE 713  
UNSPEC 721  
記述子のリスト 133  
規定境界 183  
基底付きストレージ  
組み込み関数 262  
説明 254  
BASED 属性の構文 261  
基底付き変数  
組み込み関数 262  
説明 261, 266  
リストの入出力 275  
ALLOCATE ステートメント 267

基底付き変数 (続き)  
FREE ステートメント 268  
基本名 197  
境界 193  
単純パラメーター 111  
被制御パラメーター 112  
共用体  
修飾名 199  
説明 198  
宣言 198  
名前 198  
配列のクロスセクション 204  
例 199  
レベル 198  
UNION 属性、分類 33  
共用体のレベル 198  
区域  
属性 33  
データ 271  
入出力 275  
変数の伝送 312  
割り当て 274  
EMPTY 組み込み関数 496  
IN オプション付きの ALLOCATE ステートメント 267  
区切り文字 18  
句読点のついた定数 28  
組み合わせ配列、構造、および共用体 203  
組み込み関数  
基底付き変数 266  
区域変数 274  
算術、要約 423  
条件処理、要約 425  
序数 166  
序数処理データ、要約 432  
数学、要約 430  
ストリング処理、要約 435  
ストレージ制御、要約 434  
整数演算、要約 430  
精度処理、要約 432  
宣言 421  
データ変換の開始 87  
定義 125  
での数学関数の精度 423  
入出力、要約 430  
ヌル引数および 423  
のカテゴリー 423  
配列処理、要約 424  
引数の集合 422  
被制御変数 261  
データ変換 87  
日付/時刻、要約 426  
浮動小数点演算、要約 429  
浮動小数点の照会、要約 429  
プリプロセッサ 764

組み込み関数 (続き)  
プリプロセッサ用 764  
呼び出し 421  
ABS 439  
ACOS 440  
ADD 441  
ADDR 442  
ADDRDATA 443  
ALL 444  
ALLOCATE (ALLOC) 445  
ALLOCATION (ALLOCN) 446  
ALLOCsize 447  
ANY 448  
ASIN 449  
ATAN 450  
ATAND 451  
ATANH 452  
AUTOMATIC (AUTO) 453  
AVAILABLEAREA 454  
BINARY  
データ変換 87  
BINARY (BIN) 455  
BINARYVALUE  
序数での使用 166  
ポインター式との併用 66  
BINARYVALUE (BINVALUE) 456  
BIT 457  
データ変換 87  
BITLOCATION (BITLOC) 458  
BOOL 459  
BYTE 460  
CDS 461  
CEIL 462  
CENTERLEFT (CENTER) 463  
CENTERRIGHT 465  
CHAR 87  
CHARACTER (CHAR) 467  
CHARGRAPHIC (CHARG) 468  
CHARVAL 469  
CHECKSTG 470  
COLLATE 471  
COMPARE 472  
COMPLEX (CPLX) 473  
CONJG 474  
COPY 475  
COS 476  
COSD 477  
COSH 478  
COUNT 479  
CS 480  
CURRENTSIZE (CSTG) 482  
CURRENTSTORAGE 484  
DATAFIELD 485  
DATE 486  
DATETIME 487  
DAYS 488

組み込み関数 (続き)

DAYSTODATE 490  
 DAYSTOSECS 491  
 DECIMAL  
     データ変換 87  
 DECIMAL (DEC) 492  
 DIMENSION (DIM) 493  
 DIVIDE 494  
 EDIT 495  
 EMPTY 496  
 ENDFILE 497  
 ENTRYADDR 498  
 EPSILON 500  
 ERF 501  
 ERF 502  
 EXP 503  
 EXPONENT 504  
 FILEDDINT 505  
 FILEDDTEST 506  
 FILEDDWORD 507  
 FILEID 508  
 FILEOPEN 509  
 FILEREAD 510  
 FILESEEK 511  
 FILETELL 512  
 FILEWRITE 513  
 FIXED 514  
     データ変換 87  
 FIXEDBIN 515  
 FIXEDDEC 516  
 FLOAT 517  
     データ変換 87  
 FLOATBIN 518  
 FLOATDEC 519  
 FLOOR 520  
 GAMMA 521  
 GETENV 522  
 GRAPHIC 523  
     データ変換 87  
 HANDLE 525  
 HBOUND 526  
 HEX 527  
 HEXIMAGE 529  
 HIGH 530  
 HUGE 531  
 IAND 532  
 IEO 533  
 IMAG 534  
     データ変換 87  
 INDEX 536  
 INOT 537  
 IOR 538  
 ISFINITE 539  
 ISIGNED 540  
 ISINF 541  
 ISLL 542

組み込み関数 (続き)

ISMAIN 543  
 ISNAN 544  
 ISNORMAL 545  
 ISRL 546  
 ISZERO 547  
 IUNSIGNED 548  
 LBOUND 549  
 LEFT 550  
 LENGTH 551  
 LINENO 552  
 LOCATION (LOC) 553  
 LOG 554  
 LOG10 557  
 LOG2 556  
 LOGGAMMA 555  
 LOW 558  
 LOWER2 560  
 LOWERCASE 559  
 MAX 561  
 MAXEXP 562  
 MAXLENGTH 563  
 MEMCONVERT 564  
 MEMCU12 565  
 MEMCU14 566  
 MEMCU21 567  
 MEMCU24 568  
 MEMCU41 569  
 MEMCU42 570  
 MEMINDEX 571  
 MEMSEARCH 572  
 MEMSEARCHR 573  
 MEMVERIFY 574  
 MEMVERIFYR 575  
 MIN 576  
 MINEXP 577  
 MOD 578  
 MPSTR 580  
 MULTIPLY 581  
 NULL 582  
 OFFSET 583  
 OFFSETADD 584  
 OFFSETDIFF 585  
 OFFSETSUBTRACT 586  
 OFFSETVALUE 587  
 OMITTED 588  
 ONAREA 589  
 ONCHAR 590  
 ONCODE 592  
 ONCONDCOND 593  
 ONCONDID 594  
 ONCOUNT 595  
 ONFILE 596  
 ONGSOURCE 597  
 ONKEY 599  
 ONLINE 600

組み込み関数 (続き)

ONLOC 601  
 ONOFFSET 602  
 ONSOURCE 603  
 ONSUBCODE 605  
 ONWCHAR 606  
 ONWSOURCE 608  
 ORDINALNAME 610  
 ORDINALPRED 611  
 ORDINALSUCC 612  
 PACKAGENAME 613  
 PAGENO 614  
 PICSPEC 615  
 PLACES 616  
 PLIRETV 629  
 PLITRAN11 638  
 PLITRAN12 639  
 PLITRAN21 640  
 PLITRAN22 641  
 POINTER (PTR) 642  
 POINTERADD  
     ポインター演算との併用 66  
 POINTERADD (PTRADD) 643  
 POINTERDIFF (PTRDIFF) 644  
 POINTERSUBTRACT  
     (PTRSUBTRACT) 645  
 POINTVALUE  
     使用法 66  
 POINTVALUE (PTRVALUE) 646  
 POLY 647  
 PRECISION  
     結果の計算 73  
     データ変換 87  
 PRECISION (PREC) 648  
 PRED 649  
 PRESENT 650  
 PROCEDURENAME  
     (PROCNAME) 651  
 PROD 652  
 PUTENV 653  
 RADIX 654  
 RAISE2 655  
 RANDOM 656  
 RANK 657  
 REAL 658  
     データ変換 87  
 REG12 660  
 REM 661  
 REPATTERN 662  
 REPEAT 664  
 REVERSE 666  
 RIGHT 667  
 ROUND 668  
 ROUNDDEC 670  
 SAMEKEY 671  
 SCALE 672

組み込み関数 (続き)

SEARCH 673  
 SEARCHR 675  
 SECS 676  
 SECSTODATE 677  
 SECSTODAYS 678  
 SIGN 679  
 SIGNED 680  
     データ変換 87  
 SIN 681  
 SIND 682  
 SINH 683  
 SIZE 684  
 SOURCEFILE 686  
 SOURCELINE 687  
 SQRT 688  
 SQRTF 689  
 STACKADDR 690  
 STORAGE (STG) 691  
 STRING 692  
 SUBSTR 695  
 SUBTRACT 697  
 SUCC 698  
 SUM 699  
 SYSNULL 700  
 SYSTEM 701  
 TALLY 702  
 TAN 703  
 TAND 704  
 TANH 705  
 THREADID 706  
 TIME 707  
 TINY 708  
 TRANSLATE 709  
 TRIM 710  
 TRUNC 711  
 TYPE 712  
 ULENGTH 714  
 ULENGTH16 716  
 ULENGTH8 715  
 UNALLOCATED 717  
 UNSIGNED 718  
     データ変換 87  
 UNSPEC 719  
 UPOS 722  
 UPPERCASE 723  
 USUBSTR 724  
 USURROGATE 725  
 UVALID 726  
 UWIDTH 728  
 VALID 729  
 VALIDDATE 730  
 VARGLIST 731  
 VARGSIZE 732  
 VERIFY 733  
 VERIFYR 734

組み込み関数 (続き)

WCHARVAL 735  
 WEEKDAY 736  
 WHIGH 737  
 WIDECHAR  
     データ変換 87  
 WIDECHAR (WCHAR) 738  
 WLOW 739  
 XMLCHAR 740  
 Y4DATE 742  
 Y4JULIAN 743  
 Y4YEAR 744  
 組み込み関数、その他  
     要約 431  
 組み込み関数および疑似変数の呼び出し  
     421  
 組み込み関数の宣言 421  
 組み込み疑似、要約 433  
 組み込みサブルーチン  
     宣言 421  
     定義 123  
     要約 437  
     呼び出し 422  
     PLIASCII 617  
     PLICANC 618  
     PLICKPT 619  
     PLIDELETE 620  
     PLIDUMP 621  
     PLIEBCDIC 622  
     PLIFILL 623  
     PLIFREE 624  
     PLIMOVE 625  
     PLIOVER 626  
     PLIREST 627  
     PLIRETC 628  
     PLISAXA 630  
     PLISAXB 631  
     PLISAXC 632  
     PLISAXD 633  
     PLISRTA 634  
     PLISRTB 635  
     PLISRTC 636  
     PLISRTD 637  
 組み込みサブルーチンの呼び出し 422  
 組み込み名  
     組み込み関数との併用 125  
     サブルーチンとの併用 123  
 位取り係数  
     説明 35  
     文字 375  
 グラフィック定数  
     構文 47  
     ストリング 311  
     説明 47  
     比較演算 76

グラフィック・データ

定数 47  
 伝送 311  
 フォーマット項目 354  
 変換 98  
 GX (グラフィック 16 進) ストリング  
     定数 48  
 グラフィック・データ、変換  
     (GRAPHIC) 523  
 グループ、ステートメントの 23  
 クロスセクション、配列の 197  
 計算条件  
     CONVERSION 391  
     FIXEDOVERFLOW 396  
     INVALIDOP 397  
     OVERFLOW 400  
     UNDERFLOW 407  
     ZERODIVIDE 408  
 計算データ  
     ストリング・データ 29  
     説明 28  
     属性 28  
     変換 87  
 計算データ・タイプ  
     ストリングの反復因数 45  
     ストリング・データ  
         グラフィック 47  
         説明 42  
         ワイド文字 49  
         BIT 属性 42  
         CHARACTER 属性 42  
         GRAPHIC 属性 42  
         NONVARYING 属性 43  
         VARYING 属性 43  
         VARYINGZ 属性 43  
         WIDECHAR 属性 42  
     属性 33  
     BINARY 属性と DECIMAL 属性 35  
     REAL 属性と COMPLEX 属性 36  
 結果、算術演算の  
     説明 68  
     特殊な場合 74  
     FLOAT オペランド 69  
 言語間通信  
     リンケージ  
         OPTLINK 153  
         SYSTEM 153  
     LINKAGE オプション 153  
 言語に固有のデフォルト  
     説明 187  
     定義 187  
     復元 192  
 コード化算術データ  
     構文 34  
     属性  
         型 32, 33

コード化算術データ (続き)

属性 (続き)

省略語 35

変換ターゲット 90

10 進固定小数点 39

10 進浮動小数点 40

2 進固定小数点データ 37

2 進浮動小数点 40

BINARY 属性と DECIMAL 属性 35

FIXED および FLOAT 属性 35

PRECISION 属性 35

REAL 属性と COMPLEX 属性 36

工業規格 4

構造体

式 63

修飾 163

修飾名 199

宣言 197

属性 33

組織の指定 197

タイプ付き

説明 160

ハンドル 161

HANDLE 組み込み関数 161

定義 160, 197

名前

基本 197

共用体の 198

小 197

説明 197

大 197

配列のクロスセクション 204

被制御 261

変数 201

メンバー・エレメント 198

レベル

共用体の 198

共用体の最高位番号 199

共用体の最大番号 199

構造の最高位番号 198

構造の最大番号 198

説明 197

割り当て 218, 219

DEFINE STRUCTURE ステートメント  
160

LIKE 属性 201

構造体 ID 55

構造体タイプ、定義 160

構造体または共用体配列のクロスセクション 204

構造体マッピング

説明 205

対を作る順序の規則 206

例 207

1 つの対のマッピングを行うための規則 207

構造体マッピング (続き)

UNALIGNED 属性による影響 207

構文、図、読み方 1

固定小数点

フォーマット項目

説明 353

ピクチャー位取り係数の指定 375

10 進データ 39

2 進データ 37

コメント

説明 20

コロンの記号 18

混合ストリング定数 48

混合データ 48

コンテキスト宣言 173

コンパイル単位 102

コンマ 18

## [サ行]

再帰

自動変数に及ぼす影響 117

属性 109

定義 116

再帰が自動変数に及ぼす影響 117

再帰的プロシージャ

自動変数に及ぼす影響 117

説明 116

属性の指定 116

例 117

サイズ

単純パラメーター 111

被制御パラメーター 112

索引データ・セット 297

サブフィールド、数字データの 364

サブルーチン

組み込み 123

制限 121

定義 121

戻り 145

例 121

PROCEDURE ステートメントで識別する 108

サブルーチン、組み込み

呼び出し 422

リスト 437

PLIASCII 617

PLICANC 618

PLICKPT 619

PLIDELETE 620

PLIDUMP 621

PLIEBCDIC 622

PLIFILL 623

PLIFREE 624

PLIMOVE 625

PLIOVER 626

サブルーチン、組み込み (続き)

PLIREST 627

PLIRETC 628

PLISAXA 630

PLISAXB 631

PLISAXC 632

PLISAXD 633

PLISRTA 634

PLISRTB 635

PLISRTC 636

PLISRTD 637

算術演算

結果

説明 68

特殊な場合 74

FLOAT オペランド 69

RULES(ANS) のもとでの結果 70

説明 66

データ変換 67

算術演算子

使用法 19

説明 66

算術演算の結果、RULES (ANS) における  
70

算術組み込み関数

要約 423

ABS 439

CEIL 462

COMPLEX 473

CONJG 474

FLOOR 520

IMAG 534

MAX 561

MIN 576

MOD 578

RANDOM 656

REAL 658

REM 661

ROUND 668

ROUNDDEC 670

SIGN 679

TRUNC 711

算術データ

コード化 28

数値ピクチャー 28

算術ピクチャー指定

使用法 50

説明 44

算術文字データ

使用法 50

挿入編集文字 50

PICTURE データへの変換 94

参照

構文 61

説明 61

プリプロセッサ 757

|                       |  |                          |  |                      |  |
|-----------------------|--|--------------------------|--|----------------------|--|
| 参照 (続き)               |  | 出力                       |  | 条件処理 (続き)            |  |
| ロケーター 264             |  | 定義 295                   |  | 条件の割り込み可能化 377       |  |
| 式                     |  | 出力と入力                    |  | 条件の割り込み禁止化 377       |  |
| 値の割り当て 221            |  | 区域の 275                  |  | 説明 377               |  |
| エレメント 63              |  | 条件 378                   |  | 複数条件 385             |  |
| 計算の順序 64              |  | 説明 295                   |  | マルチスレッド化 415         |  |
| 構造体 63                |  | 主プロシージャ                  |  | 割り込み可能条件の確立 377      |  |
| 構文 61                 |  | 引数の引き渡し 128              |  | CONDITION 属性 385     |  |
| 式の中間結果 72             |  | 呼び出し 102                 |  | ON ステートメント           |  |
| スカラー 63               |  | 主プロシージャの呼び出し 102         |  | 確立されたアクションの有効範囲      |  |
| 制限付き                  |  | 順序、計算の                   |  | 381                  |  |
| 組み込み関数の適用 83          |  | 式と参照の 79                 |  | 構文 380               |  |
| 説明 83                 |  | 条件                       |  | 説明 380               |  |
| 例 83                  |  | クラス 378                  |  | 動的に派生した ON ユニット 382  |  |
| 説明 61                 |  | 計算の 378                  |  | ヌル ON ユニット 381       |  |
| ターゲットの 64             |  | 出力と入力 378                |  | ファイル変数のための ON ユニッ    |  |
| タイプ 63                |  | 状況 378                   |  | ト 382                |  |
| 配列 81                 |  | その他 378                  |  | RESIGNAL ステートメント 385 |  |
| プリプロセッサ 757           |  | 入出力 378                  |  | REVERT ステートメント 384   |  |
| 命令形式                  |  | プログラム・チェックアウト 378,       |  | SIGNAL ステートメント 384   |  |
| クラス 66                |  | 379                      |  | 条件処理組み込み関数           |  |
| 説明 65                 |  | ANYCONDITION 387         |  | 要約 425               |  |
| 定義 61                 |  | AREA 389                 |  | DATAFIELD 485        |  |
| 式と参照の計算順序 79          |  | ATTENTION                |  | ONAREA 589           |  |
| 式の計算順序 64             |  | 説明 389                   |  | ONCHAR 590           |  |
| 式の中間結果                |  | マルチスレッド化の 415            |  | ONCODE 592           |  |
| 説明 65                 |  | CONDITION 390            |  | ONCONDCOND 593       |  |
| 例 72                  |  | CONVERSION 391           |  | ONCONDID 594         |  |
| 自己定義データ (REFER オプション) |  | ENDFILE 393              |  | ONCOUNT 595          |  |
| 269                   |  | ENDPAGE 394              |  | ONFILE 596           |  |
| 指数指定子 374             |  | ERROR 395                |  | ONGSOURCE 597        |  |
| 実行する際の制限事項 793        |  | FINISH 396               |  | ONKEY 599            |  |
| 指定                    |  | FIXEDOVERFLOW 396        |  | ONLINE 600           |  |
| データ・リスト項目の伝送 330      |  | INVALIDOP 397            |  | ONLOC 601            |  |
| 反復 326                |  | KEY 398                  |  | ONOFFSET 602         |  |
| 編集ディレクティブ 335         |  | NAME 399                 |  | ONSOURCE 603         |  |
| リスト・ディレクティブ 340       |  | OPTIMIZATION のもとでの発生 380 |  | ONWCHAR 606          |  |
| 指定文字 361              |  | OVERFLOW 400             |  | ONWSOURCE 608        |  |
| 自動ストレージ               |  | RECORD 400               |  | 条件接頭語                |  |
| 説明 254                |  | SIZE 401                 |  | 構文 378               |  |
| AUTOMATIC 属性の構文 255   |  | STORAGE 402              |  | 使用法 377              |  |
| 自動変数、再帰の影響 117        |  | STRINGRANGE 403          |  | 説明 22                |  |
| 集合の割り当て 219           |  | STRINGSIZE 404           |  | 例 378                |  |
| 修飾                    |  | SUBCRIPTRANGE 405        |  | 小構造体名 197            |  |
| 共用体 199               |  | TRANSMIT 405             |  | 小数点と数字の指定子 364       |  |
| 構造体 199               |  | UNDEFINEDFILE 406        |  | 初期値                  |  |
| 説明 264                |  | UNDERFLOW 407            |  | 共用体の 287             |  |
| 区切り文字としての使用 18        |  | ZERODIVIDE 408           |  | STATIC 変数での 292      |  |
| 修飾された参照 200           |  | 条件コード                    |  | 初期設定                 |  |
| 終了                    |  | 説明 377                   |  | 基底付き変数と被制御変数 293     |  |
| 開始ブロック 129            |  | 条件コード、ONCODE 組み込み関数との    |  | 共用体 292              |  |
| スレッド 413              |  | 併用 592                   |  | 自動変数 293             |  |
| プログラム 103             |  | 条件処理                     |  | 静的変数 292             |  |
| プロシージャ 115            |  | 暗黙アクション 377              |  | 配列変数 291             |  |
| ブロック 104, 236         |  | 確立された処置 377              |  | 序数                   |  |
|                       |  | 条件接頭語の有効範囲 379           |  | オプション 158            |  |

## 序数 (続き)

許容属性 165  
 組み込み関数 166  
 説明 158  
 定義 158  
 配列との併用 166  
 例 159  
 DEFINE ORDINAL ステートメント  
 158  
 DO ループの例 166  
 DOWNTHRU の使用 235  
 ORDINAL 属性 163  
 PRECISION 属性 159  
 SIGNED 属性 159  
 UNSIGNED 属性 159  
 VALUE 属性 159

## 序数処理組み込み関数

要約 432  
 リスト 166  
 ORDINALNAME 610  
 ORDINALPRED 611  
 ORDINALSUCC 612

## 序数データ、属性、分類 33

### 処理モード

位置指定 319  
 移動 319  
 説明 319

## 処理リスト 275

## 数学組み込み関数

精度 423  
 要約 430  
 ACOS 440  
 ASIN 449  
 ATAN 450  
 ATAND 451  
 ATANH 452  
 COS 476  
 COSD 477  
 COSH 478  
 ERF 501  
 ERF 502  
 EXP 503  
 GAMMA 521  
 LOG 554  
 LOG10 557  
 LOG2 556  
 LOGGAMMA 555  
 SIN 681  
 SIND 682  
 SINH 683  
 SQRT 688  
 SQRTF 689  
 TAN 703  
 TAND 704  
 TANH 705

## 数学組み込み関数の精度 423

## 数字

および小数点の指定子 364  
 10 進数 15  
 16 進数 15  
 2 進数 15

## 数字データ

サブフィールド 364  
 定義 50  
 ピクチャー指定子 363  
 フィールド 364  
 変換 94

## 数字ピクチャー項目

説明 361, 364  
 スカラー ID 54  
 スケール、算術演算での 67  
 スタックに入れる 117  
 ステートメント

お勧めするコーディング 21  
 キーワード 22  
 グループ 23  
 構文 20  
 説明 215  
 代入 22, 216  
 単純 22  
 ヌル 245  
 複合 23  
 ALLOCATE 267  
 ANSWER  
 プリプロセッサ・プロシージャ  
 での使用 761  
 ATTACH 412  
 BEGIN 129  
 CALL 144  
 CLOSE 308  
 DECLARE 171  
 DEFAULT 188  
 DEFINE ALIAS 157  
 DEFINE ORDINAL 158  
 DEFINE STRUCTURE 160  
 DELAY 222  
 DELETE 315  
 DETACH 414  
 DISPLAY 223  
 DO 224  
 END 236  
 ENTRY 110  
 EXIT 115  
 FETCH 118  
 FORMAT 340  
 FREE 260, 268  
 GET

データ・ディレクティブ 333  
 編集ディレクティブ 337  
 リスト・ディレクティブ 341  
 STREAM 入力 322  
 GET STRING 322

## ステートメント (続き)

GO TO 238  
 IF 239  
 ITERATE 242  
 LEAVE 242  
 LOCATE 314  
 ON 380  
 OPEN 304  
 PACKAGE 104  
 PROCEDURE  
 主プロシージャを呼び出すための  
 使用 103  
 説明 108  
 PUT  
 データ・ディレクティブ 334  
 編集ディレクティブ 338  
 リスト・ディレクティブ 342  
 STREAM 出力 323  
 READ 313  
 RELEASE  
 制約事項 118  
 説明 120  
 動的にロードする外部 118  
 例 120  
 RESIGNAL 385  
 RETURN  
 関数からの戻り 145  
 構文 145  
 サブルーチンとの併用 145  
 使用法 115  
 説明 145  
 プリプロセッサ・プロシージャ  
 での使用 761  
 REVERT 384  
 REWRITE  
 説明 314  
 SELECT  
 説明 249  
 例 250  
 SIGNAL 384  
 STOP  
 使用法 115  
 WAIT 414  
 WRITE  
 説明 313  
 %PROCEDURE 760  
 ステートメントのオプション 760  
 ステートメント・エレメント  
 DBCS の場合 25  
 SBCS の場合 17  
 ストリーム指向データ伝送  
 定義 295  
 リスト・ディレクティブ 321  
 スtring演算子 () 19  
 String処理組み込み関数  
 要約 435



## ストリング処理組み込み関数 (続き)

BIT 457  
 BOOL 459  
 CENTERLEFT 463  
 CENTERRIGHT 465  
 CHARACTER 467  
 CHARGRAPHIC 468  
 COPY 475  
 EDIT 495  
 GRAPHIC 523  
 HIGH 530  
 INDEX 536  
 LEFT 550  
 LENGTH 551  
 LOW 558  
 LOWERCASE 559  
 MAXLENGTH 563  
 MPSTR 580  
 REPEAT 664  
 REVERSE 666  
 RIGHT 667  
 SEARCH 673  
 SEARCHR 675  
 SUBSTR 695  
 TALLY 702  
 TRANSLATE 709  
 TRIM 710  
 ULENGTH 714  
 ULENGTH16 716  
 ULENGTH8 715  
 UPOS 722  
 UPPERCASE 723  
 USUBSTR 724  
 USURROGATE 725  
 UVALID 726  
 UWIDTH 728  
 VERIFY 733  
 VERIFYR 734  
 WHIGH 737  
 WIDECHAR 738  
 WLOW 739

ストリング内の引用符 28

ストリング・オーバーレイ定義 286

## ストリング・データ

引用符 28  
 可変長の伝送 312  
 グラフィック 47  
 混合 48  
 属性  
   省略語 42  
   長さの指定 42  
   分類 32  
 定義 29  
 反復因数 45, 291  
 ビット 46  
 文字データ 45

## ストリング・データ (続き)

BIT 属性 42  
 CHARACTER 属性 42  
 GRAPHIC 属性 42  
 NONVARYING 属性 43  
 PICTURE 属性 44  
 VARYING 属性 43  
 VARYINGZ 属性 43

## ストレージ

基底付き 261  
 自動 255  
 制御 253  
 静的 255  
 接続された 281  
 被制御 257  
 非連結 197  
 分類 253  
 割り振り 253

## ストレージ制御組み込み関数

要約 434  
 ADDR 442  
 ADDRDATA 443  
 ALLOCATE 445  
 ALLOCATION 446  
 ALLOCSIZE 447  
 AUTOMATIC 453  
 AVAILABLEAREA 454  
 BINARYVALUE 456  
 BITLOCATION 458  
 CHECKSTG 470  
 CURRENTSIZE 482  
 CURRENTSTORAGE 484  
 EMPTY 496  
 ENTRYADDR 498  
 HANDLE 525  
 LOCATION 553  
 NULL 582  
 OFFSET 583  
 OFFSETADD 584  
 OFFSETDIFF 585  
 OFFSETSUBTRACT 586  
 OFFSETVALUE 587  
 POINTER 642  
 POINTERADD 643  
 POINTERDIFF 644  
 POINTERSUBTRACT 645  
 POINTVALUE 646  
 SIZE 684  
 STORAGE 691  
 SYSNULL 700  
 SYSTEM 701  
 UNALLOCATED 717

スペース・フォーマット項目 359

## スレッド

切り離し 414  
 作成 411

## スレッド (続き)

終了 413  
 使用 411  
 条件処理 415  
 待機 414  
 タスク変数 415  
 データの共用 416  
 ファイルの共用 416  
 ATTACH ステートメント 412  
 ENVIRONMENT オプション 413  
 TASK 属性 415  
 THREAD オプション 412  
 TSTACK オプション 413

スレッド間でのファイル共用 416

スレッド間のデータの共用 416

制御ストレージ 253

制限、FETCH および RELEASE の説明 118

制限事項 793

制限付き式

組み込み関数の適用 83

説明 83

例 83

## 整数

値 36

## 整数演算組み込み関数

要約 430  
 IAND 532  
 IEOR 533  
 INOT 537  
 IOR 538  
 ISIGNED 540  
 ISLL 542  
 ISRL 546  
 IUNSIGNED 548  
 LOWER2 560  
 RAISE2 655

静的ストレージ 254, 255

静的割り振り 253

## 精度処理組み込み関数

要約 432  
 ADD 441  
 BINARY 455  
 DECIMAL 492  
 DIVIDE 494  
 FIXED 514  
 FIXEDBIN 515  
 FIXEDDEC 516  
 FLOAT 517  
 FLOATBIN 518  
 FLOATDEC 519  
 MULTIPLY 581  
 PRECISION 648  
 SIGNED 680  
 SUBTRACT 697  
 UNSIGNED 718

セット、データの 295

接頭演算子

演算 65

条件

構文 378

使用法 377

例 378

セミコロン 18

ゼロ置換文字 373

ゼロ抑制文字 366

宣言

暗黙 172

コンテキスト 173

配列 192

明示 169

有効範囲

説明 173

例 175

INTERNAL 属性と EXTERNAL 属性での定義 177

DEFINE ORDINAL ステートメント 158

宣言、データの

説明 169

属性分配 172

宣言、DEFINE ALIAS、ステートメント 157

ソースからターゲットへの変換規則

グラフィック 98

コード化算術フォーマット 90

固定小数点 10 進数 92

固定小数点 2 進数 91

算術文字 94

算術文字 PICTURE 94

数字 94

ビット 97

浮動小数点 10 進数 93

浮動小数点 2 進数 93

文字 95

ワイド文字 98

走査、プリプロセッサ 753

総称入り口宣言 141

総称記述子 142

総称選択 143

総称名 141

相対データ・セット 297

相対ライン 358

挿入演算 65

挿入演算子と配列 81

挿入文字 367

添え字

介在 204

定義 196

配列の 195

添え字付きの修飾された参照 204

属性

共用体データ 33

組み合わせ 306

計算データ 28

コード化算術式 32, 33

構造体データ 33

序数データ 33

ストリング・データ 32, 33

説明 28

代替 298

タスク・データ 33

追加 298

データ

説明 28

リスト 29

データ・タイプに応じた分類 30

デフォルトのデータ属性 187

名前付きのコード化算術式 32

名前付きのストリング・データ 32

配列データ 33

パラメーター 111

非データ 30

ファイル・データ 32, 33

プログラム制御データ 29

ラベル・データ 32, 33

ロケーター・データ 33

ABNORMAL 278

ALIGNED

記憶位置合わせ要件 184

説明 183

例 186

AREA 33

ASSIGNABLE 277

AUTOMATIC 255

BASED 261

BIGENDIAN 278

BINARY 35

BIT 42

BUFFERED 302

BUILTIN

使用法 123, 421

BYADDR 150

BYVALUE 150

CHARACTER

説明 42

COMPLEX 36

CONDITION 385

CONNECTED 280

CONTROLLED 257

DATE 51

DECIMAL 35

DEFINED 281

DIMACROSS 194

DIMENSION 193

DIRECT 302

ENTRY 132

属性 (続き)

ENVIRONMENT 303

EXTERNAL

使用法 119

説明 177

FILE 297

FIXED

説明 35

FLOAT 35

FORMAT

説明 58

変数タイプによる分類 33

GENERIC 141

GRAPHIC 42

HANDLE 161

HEXADEC 279

IEEE 279

INITIAL 287

INPUT 301

INTERNAL 177

KEYED 303

LABEL 56

LIKE 201

LIMITED 140

LIST 136

LITTLEENDIAN 278

NOINIT 203

NONASSIGNABLE 277

NONCONNECTED 280

NONVARYING 43

NORMAL 278

OFFSET 273

OPTIONAL 135

OPTIONS 146

ORDINAL 163

OUTPUT 301

PARAMETER 111

PICTURE 44

POINTER 266

POSITION 281

PRECISION 35

PRINT 343

REAL 36

RECORD 301

RECURSIVE 116

RESERVED 181

RETURNS 156

SEQUENTIAL 302

SIGNED

説明 36

データ・ストレージ所要量 37

STATIC 255

STREAM 301

SUPPRESS 182

TASK 415

TYPE 162



## 属性 (続き)

UNALIGNED  
  記憶位置合わせ要件 184  
  説明 183  
  例 186  
UNBUFFERED 302  
UNION 199  
UNSIGNED  
  説明 36  
  データ・ストレージ所要量 37  
UPDATE 301  
VALUE 54  
VARIABLE 58  
VARYING 43  
VARYINGZ 43  
WIDECHAR  
  説明 42

## 属性分配 172

## その他の組み込み関数

  要約 431  
  BYTE 460  
  CHARVAL 469  
  COLLATE 471  
  GETENV 522  
  HEX 527  
  OMITTED 588  
  PACKAGENAME 613  
  PLIRETV 629  
  PRESENT 650  
  PROCEDURENAME 651  
  RANK 657  
  REG12 660  
  SOURCEFILE 686  
  SOURCELINE 687  
  STACKADDR 690  
  STRING 692  
  UNSPEC 719  
  VALID 729  
  WCHARVAL 735

## その他の条件

  ANYCONDITION 387  
  AREA 389  
  ATTENTION 389  
  CONDITION 390  
  ERROR 395  
  FINISH 396  
  STORAGE 402

# [タ行]

## ターゲット

  疑似変数  
    説明 64  
    例 64  
  構造体 218  
  説明 64

## ターゲット (続き)

  ターゲット変数の要件 218  
  中間結果 65  
  配列 218  
  変数 64  
  大構造体名 197  
  代数比較演算子 75  
  代替属性 298  
    定義 298  
  BUFFERED および  
    UNBUFFERED 302  
  INPUT、OUTPUT、および  
    UPDATE 301  
  RECORD と STREAM 301  
  SEQUENTIAL と DIRECT 302  
  代入ステートメント  
    説明 216  
    ターゲット変数の要件 218  
    定義 22  
    BY NAME オプション 216  
  タイプ  
    修飾 163  
    説明 162  
    タイプ付き関数 168  
    定義 157  
    ハンドル 161  
    変数 162  
    DEFINE STRUCTURE ステートメント  
      160  
    HANDLE 組み込み関数 161  
  タイプ付き関数 168  
    説明 745  
    引数 745  
    リスト 746  
  BIND 746  
  CAST 746  
  FIRST 747  
  LAST 747  
  NEW 748  
  RESPEC 748  
  SIZE 748  
  VALUE 749  
  タイプ付き関数の呼び出し 745  
  タイプ付きの名前 157  
  タイプ付き変数、宣言 162  
    修飾 163  
    ハンドル 161  
  タイプ定義、記述 157  
  タスク変数 415  
  タスク・データ、属性、分類 33  
  ダブルワード、データの位置合わせでの  
    182  
  単純  
    オーバーレイ定義 282, 286  
    ストリング・オーバーレイ定義 286  
    単純 111

## 単純 (続き)

  単純定義 284  
  定義 282, 284  
  パラメーター  
    境界、長さ、およびサイズ 111  
  被制御 112  
  iSUB 定義 285  
  単純ステートメント 22  
  調節可能エクステンツ 261  
  直接入り口宣言 130  
  追加属性  
    定義 298  
  ENVIRONMENT 303  
  KEYED 303  
  通貨記号  
    説明 370  
    定義 369  
  通知、条件の 384  
  データ  
    位置合わせ 182  
    入り口 130  
    エレメント 27, 756  
    オフセット 273  
    区域 271  
    グラフィック 47  
    計算の 28  
    項目 27  
    混合 48  
    算術文字 50  
    指定 324  
    数字 363  
    スレッド間での共用 416  
  属性 28  
  タイプ 28  
  伝送 295  
  ビット 46  
  ビット定数 46  
  フォーマット 58  
  フォーマット項目 347  
  プログラム制御  
    説明 29  
    タイプおよび属性 56  
  変換  
    エラー 100  
    組み込み関数を使用した 87  
    算術演算での 67  
    説明 85  
    ソースからターゲットへの変換規則  
      90  
  文字 45  
  文字定数 45  
  ラベル 56  
  ロケーター 263  
  ワイド文字 49  
  10 進固定小数点 39  
  10 進浮動小数点 40

|                          |                                  |                       |
|--------------------------|----------------------------------|-----------------------|
| データ (続き)                 | データ伝送ステートメント・オプション (続き)          | 定数                    |
| 2 進固定小数点 37              | FILE 327                         | 入り口                   |
| 2 進浮動小数点 40              | LINE 327                         | 構文 131                |
| データ項目                    | PAGE 327                         | 使用法 131               |
| 式 63                     | SKIP 328                         | 説明 131                |
| 集合 27                    | STRING 328                       | 虚数 36                 |
| スカラー 27                  | データの位置合わせ                        | グラフィック 47             |
| 定義 27                    | ストレージ・アドレス 183                   | 名前付き 54               |
| 複素数 36                   | 説明 182                           | ビット 46                |
| モード 36                   | ALIGNED 属性と UNALIGNED 属性の使用法 183 | ファイル 298              |
| データ項目のモード 36             | データの位置合わせ属性 182                  | 文字 45                 |
| データ指定オプション、ストリーム入出力の     | データ変換                            | 文字ストリング 45            |
| 説明 324                   | エラー 100                          | ラベル 57                |
| データ・ディレクティブ 331          | 規則 86                            | 10 進固定小数点 39          |
| 定義 322                   | 組み込み関数での開始 87                    | 10 進浮動小数点 41          |
| 伝送されるデータ 311             | 計算データ 87                         | 2 進固定小数点 38           |
| データ宣言                    | 算術値の精度 88                        | 2 進浮動小数点 40           |
| 暗黙 172                   | 算術演算での 67                        | B3 (16 進ビット) ストリング 47 |
| 共用体 198                  | 算術データからビット・ストリングへの変換、例 99        | B4 (16 進ビット) ストリング 47 |
| 言語に固有の属性デフォルト 187        | 算術データから文字ストリングへの変換、例 99          | BX (16 進ビット) ストリング 47 |
| 構造体 197                  | ストリングの長さ 87                      | GX (グラフィック) ストリング 48  |
| 説明 169                   | 説明 85                            | M (混合) ストリング 48       |
| 配列 192                   | ソースからターゲットへの変換規則 90              | WX (ワイド文字) ストリング 50   |
| 明示 169                   | 変換エラー 100                        | XN (2 進 16 進数) 38     |
| データ伝送                    | モード 88                           | XU (2 進 16 進数) 38     |
| 位置合わせされていないビット・ストリング 311 | データ・エレメント                        | ディレクティブ               |
| 可変長ストリング 312             | 説明 27                            | *PROCESS 247          |
| 漢字ストリング 311              | 属性 27                            | %INCLUDE 242          |
| 区域変数 312                 | データ項目 27                         | %LINE 243             |
| 出力 295                   | 定数                               | %NOPRINT 244          |
| ストリーム指向 321              | 引用符 28                           | %NOTE 244             |
| ストリーム指向ステートメント           | 句読法 28                           | %PAGE 246             |
| 説明 322                   | 名前付き 28                          | %POP 246              |
| タイプ 3 の DO グループ 326      | プリプロセッサ 756                      | %PRINT 246            |
| GET 322                  | データ・セット                          | %PROCESS 247          |
| PUT 323                  | 記憶 296                           | %PUSH 247             |
| 説明 311                   | 索引付き 297                         | %SKIP 251             |
| データ集合 311                | 相対 297                           | デフォルト、属性の             |
| データ・ディレクティブ 321          | タイプ 296                          | 言語に固有の 187            |
| データ・リスト項目 330            | データの伝送 295                       | 言語に固有のデフォルト属性の復元 192  |
| 入力 295                   | 領域 297                           | 説明 187                |
| 編集ディレクティブ 322            | 連続 297                           | データ属性 187             |
| レコード単位 311               | データ・タイプ                          | DEFAULT ステートメント 188   |
| レコード単位ステートメント            | 計算の 28                           | 伝送、データの 295           |
| 説明 312                   | 説明 28                            | 等号 18                 |
| DELETE 315               | データ・ディレクティブのデータ指定                | 動的に派生した ON ユニット 382   |
| LOCATE 314               | 説明 331                           | 動的ロード、外部プロシーチャーの      |
| READ 313                 | GET ステートメントの使用法 333              | FETCH ステートメント 118     |
| REWRITE 314              | PUT ステートメントの使用法 334              | RELEASE ステートメント 118   |
| WRITE 313                | データ・ディレクティブ・データ伝送 321            | 動的割り振り 253            |
| TRANSMIT 条件 405          |                                  | 特別言語文字 14             |
| データ伝送ステートメント・オプション       |                                  |                       |
| 説明 324                   |                                  |                       |
| COPY 324                 |                                  |                       |

## [ナ行]

内部、定義 174  
内部プロシージャー 108  
長さ  
    単純パラメーター 111  
    被制御パラメーター 112  
名前  
    ブリプロセッサー 757  
名前、タイプ 157  
名前付き定数 54  
名前付きのコード化算術式の属性 32  
名前付きのストリング・データ属性 32  
名前付きの定数、説明 28  
名前の認識 169  
入出力組み込み関数 430  
    要約 430  
    COUNT 479  
    ENDFILE 497  
    FILEDDINT 505  
    FILEDDTEST 506  
    FILEDDWORD 507  
    FILEID 508  
    FILEOPEN 509  
    FILEREAD 510  
    FILESEEK 511  
    FILETELL 512  
    FILEWRITE 513  
    LINENO 552  
    ONSUBCODE 605  
    PAGENO 614  
    SAMEKEY 671  
入力  
    区域の 275  
    条件  
        ENDFILE 393  
        ENDPAGE 394  
        KEY 398  
        NAME 399  
        RECORD 400  
        TRANSMIT 405  
        UNDEFINEDFILE 406  
    説明 295  
    定義 295  
ヌル ON ユニット 381  
ヌル引数、組み込み関数での使用 423  
ヌル・ステートメント  
    説明 245  
    定義 23

## [ハ行]

ハーフワード 182  
排他的 OR 演算子 74  
バイト、定義 182

配列  
    エクステンント 193  
    境界 193  
    クロスセクション 197  
    構造体と共用体 203  
    式  
        説明 63, 81  
        例 63  
    次元属性 193, 194  
    接頭演算子と 81  
    挿入演算子と 81  
    添え字 195  
    属性 33  
    ターゲット 218  
    代入 218  
    定義 192  
    配列同士の演算 82  
    配列とエレメントの演算 81  
    変数 192  
    例 195  
    割り当て 219  
配列式  
    説明 81  
    定義 63  
    例 63  
配列処理組み込み関数  
    要約 424  
    ALL 444  
    ANY 448  
    DIMENSION 493  
    HBOUND 526  
    LBOUND 549  
    POLY 647  
    PROD 652  
    SUM 699  
配列の上限、獲得 (HBOUND) 526  
配列の下限、獲得 (LBOUND) 549  
配列変数 192  
パッケージ 104  
バッファ管理組み込み関数  
    COMPARE 472  
    HEXIMAGE 529  
    MEMCONVERT 564  
    MEMCU12 565  
    MEMCU14 566  
    MEMCU21 567  
    MEMCU24 568  
    MEMCU41 569  
    MEMCU42 570  
    MEMINDEX 571  
    MEMSEARCH 572  
    MEMSEARCHR 573  
    MEMVERIFY 574  
    MEMVERIFYR 575  
    PICSPEC 615  
    PLITRAN11 638

バッファ管理組み込み関数 (続き)  
    PLITRAN12 639  
    PLITRAN21 640  
    PLITRAN22 641  
    XMLCHAR 740  
パラメーター  
    エレメント 127  
    属性 111  
    配列引数  
        例 112  
    引数 125  
パラメーター記述子リスト 133  
パラメーター属性 111  
パラメーターの付いた配列引数 112  
反復因数 290, 291, 335  
    ストリングの場合 45, 291  
    ピクチャー文字の場合 361  
    ビット・データの 46  
反復実行 (DO ステートメント) 224, 232  
比較演算  
    オペランドの変換 75  
    グラフィック 76  
    序数データ 76  
    説明 75  
    代数 75  
    ビット 75  
    プログラム制御データ 76  
    ポインターおよびオフセット・データ 76  
    文字 75  
    例 77  
    ワイド文字 76  
比較演算子 19  
引数  
    受け渡し  
        主プロシージャーへ 128  
        プロシージャーへの 125  
    仮の  
        規則 127  
        説明 127  
        属性の導出 127  
    指定 150, 422  
引数およびパラメーターの関連 125  
引数の受け渡し  
    主プロシージャーへ 128  
    説明 125  
    BYVALUE および BYADDR の使用 125  
    INONLY、INOUT、および OUTONLY の使用 126  
引数の集合 422  
ピクチャー指定文字  
    定義 361  
9  
    数字の場合 364  
    文字データの場合 362

ピクチャー指定文字 (続き)

A 362  
B 367  
CR 373  
DB 373  
E 374  
F 375  
I 373  
K 374  
R 373  
S 370  
T 373  
V  
    数字の場合 364  
    挿入 368  
X 362  
Y 373  
Z 366  
\$ 370  
\* 366  
+ 370  
- 370  
/ 367

ピクチャー・データ

    位取り係数 375  
    指定 44  
    数字データの指定子 363  
    反復因数 361  
    文字データの指定子 362  
    PICTURE 属性の構文 44

ピクチャー・フォーマット項目 356

被制御

    構造体と共用体メンバー 261  
    ストレージ 254, 257  
    パラメーター 112  
    変数  
        説明 257  
        複数生成 260  
        ALLOCATE ステートメントの使用  
            法 258  
        FREE ステートメントの使用法  
            260

日付/時刻組み込み関数

    パターン 428  
    要約 426  
    リリアン形式 426  
    DATE 486  
    DATETIME 487  
    DAYS 488  
    DAYSTODATE 490  
    DAYSTOSECS 491  
    REPATTERN 662  
    SECS 676  
    SECSTODATE 677  
    SECSTODAYS 678  
    TIME 707

日付/時刻組み込み関数 (続き)

    VALIDDATE 730  
    VARGLIST 731  
    VARGSIZE 732  
    WEEKDAY 736  
    Y4DATE 742  
    Y4JULIAN 743  
    Y4YEAR 744  
    ビット  
        演算子  
            説明 19  
            ビット演算子での使用 74  
        データ 46  
        定数 46  
        変換  
            規則 97  
            説明 88  
    ビット演算子  
        使用法 74  
        例 75  
    ビット・ストリングの伝送、位置合わせさ  
        れていない 311  
    ビット・データ  
        反復因数 46  
    ビット・フォーマット項目 348  
    非データ属性 30  
    標準 4  
    ピリオド 18  
    非連結ストレージ 197, 283  
    プール演算子 74  
    ファイル

        暗黙オープン (implicit opening) 306  
        オープンとクローズ 303  
        参照の指定 300  
        スレッド間での共用 416  
        宣言 297  
        属性 32  
        属性の説明 298  
        代替属性 298  
        追加属性 298  
        定義 297  
        定数 298  
        変数 300  
        FILE 属性 297  
        PRINT 343  
        SYSIN 309  
        SYSPRINT 309  
    ファイルのオープンとクローズ 303  
    ファイル・データ 33  
    フィールド 364  
    フォーマット項目  
        説明 336  
        A 347  
        B 348  
        C 349  
        COLUMN 349

フォーマット項目 (続き)

E 350  
F 353  
G 354  
L 355  
LINE 355  
P 356  
PAGE 356  
R 357  
SKIP 358  
V 358  
X 359  
フォーマット表記規則 1  
フォーマット・データ 58  
復元、言語に固有のデフォルトの 192  
複合記号 16  
複合ステートメント 23  
複合代入演算子 217  
複数条件 385  
複数世代、被制御変数の 260  
複数割り当て 220  
複素数  
    データ項目 36  
    フォーマット項目 349  
含まれている、定義 174  
符号  
    固定的使用 371  
    異なる符号を持つ CR と DB の使用  
        373  
    数字データでの指定 370  
    浮動的使用 371  
浮動小数点  
    データ変換 93  
    フォーマット項目 350  
    10 進データ 40  
    2 進データ 40  
浮動小数点演算組み込み関数  
    要約 429  
    EXPONENT 504  
    PRED 649  
    SCALE 672  
    SUCC 698  
浮動小数点の照会組み込み関数  
    要約 429  
    EPSILON 500  
    HUGE 531  
    ISFINITE 539  
    ISINF 541  
    ISNAN 544  
    ISNORMAL 545  
    ISZERO 547  
    MAXEXP 562  
    MINEXP 577  
    PLACES 616  
    RADIX 654  
    TINY 708

|                        |                     |                                  |
|------------------------|---------------------|----------------------------------|
| 浮動文字 371               | プログラム (続き)          | プロシージャ (続き)                      |
| ブランク                   | エレメント (続き)          | 動的ロード (続き)                       |
| 区切り文字としての使用 18         | 関数 123              | FETCH ステートメントの使用法 119            |
| 説明 19                  | 組み込み関数 125          | RELEASE ステートメントの使用法 120          |
| プリプロセッサ                | サブルーチン 121          | 内部 108                           |
| 機能 751                 | 説明 13               | 引数の受け渡し                          |
| 組み込み関数 764             | CALL ステートメント 144    | 仮引数の使用 127                       |
| 参照と式 757               | OPTIONS オプション 146   | 説明 125                           |
| 出力 752                 | RETURN ステートメント 145  | BYVALUE および BYADDR の使用 125       |
| 出力テキスト 752             | 活動化 102             | INONLY、INOUT、および OUTONLY の使用 126 |
| ステートメント                | 構造 101              | プリプロセッサ 758                      |
| 説明 752                 | サブルーチン 108          | ブロック 103                         |
| リスト 754                | 終了 103              | メインへの引数の引き渡し 128                 |
| ステートメント、リスト 775        | 定義 (PL/I の場合の) 101  | ブロック                             |
| 走査                     | パッケージ 104           | 開始 129                           |
| およびプリプロセッサ・ステートメント 754 | プロシージャ 108          | 活動化 103                          |
| およびリスト制御ステートメント 754    | ブロック                | 終了 104                           |
| 説明 753                 | 活動化 103             | 説明 103                           |
| 入力テキスト 754             | 説明 103              | タイプ 103                          |
| 名前の有効範囲 757            | 編成 101              | パッケージ 104                        |
| 入力 751                 | RETURN 145          | プロシージャ 108                       |
| 入力テキスト 752, 754        | プログラム制御データ          | 別名                               |
| プリプロセッサ 752            | 使用法 56              | 定義 157                           |
| プロシージャ 758             | 説明 29               | DEFINE ALIAS ステートメント 157         |
| 変数とデータ・エレメント 756       | タイプおよび属性 56         | 変換                               |
| リスト制御 752              | プログラムの正常終了 103      | エラー 100                          |
| リスト制御ステートメント 752       | プログラムの編成 101        | オペランド 70                         |
| 例 787                  | プログラム・エレメント         | 組み込み関数を使用した 87                   |
| %ACTIVATE 776          | グループ 23             | 算術値の精度 88                        |
| %DEACTIVATE 777        | ステートメント             | 算術演算での 67                        |
| %DECLARE 777           | 説明 20               | ストリングの長さ 87                      |
| %DO 780                | 単純 22               | ソースからターゲットへの変換規則 90              |
| %END 780               | 複合 23               | その他のデータ属性の 88                    |
| %GO TO 781             | 説明 13               | データ 85                           |
| %IF 781                | 1 バイト文字セット (SBCS)   | モード 88                           |
| %INCLUDE 782           | ステートメント・エレメント 17    | 連結演算 77                          |
| %INSCAN 783            | 説明 13               | ロケータ・データの 263                    |
| %ITERATE 783           | 2 バイト文字セット (DBCS)   | 変換エラー 100                        |
| %LEAVE 784             | ステートメント・エレメント 25    | 編集ディレクティブ                        |
| %NOTE 784              | 説明 24               | データ伝送 322                        |
| %REPLACE 785           | プログラム・チェックアウト条件 379 | フォーマット項目 347                     |
| %SELECT 786            | STRINGRANGE 403     | 編集ディレクティブのデータ指定 335              |
| %XINCLUDE 786          | STRINGSIZE 404      | 変数                               |
| %XINSCAN 786           | SUBSCRIPTRANGE 405  | 入り口 131                          |
| %ヌル 785                | プログラム・ブロックの定義 101   | オフセット 263                        |
| %割り当て (assignment) 776 | プロシージャ              | 基底付き                             |
| フルワード 182              | 外部 108              | 識別 261                           |
| プログラマー定義の名前 17         | 活動化 114             | 使用法 266                          |
| プログラム                  | 再帰的 116             | 構造体 197                          |
| エレメント                  | 終了 115              | 参照 27                            |
| 入り口値 144               | 制御の伝送 115           | 自動 117                           |
| 入り口データ 130             | 説明 108              |                                  |
| 入り口の呼び出し 144           | 属性の指定 111           |                                  |
| 開始ブロック 129             | 動的ロード               |                                  |
|                        | 規則 118              |                                  |
|                        | 説明 118              |                                  |

変数 (続き)

説明 258  
ターゲット 64  
定義 27  
配列 192  
被制御 257  
複素数データ項目を表す 36  
プリプロセッサ 756  
ポインター 263, 266

変数、タイプ付き 162

変数、ハンドルとしての 161

ポインター演算 66

ポインター記号 18

ポインター変数 263, 266

## [マ行]

マクロ機能組み込み関数

COLLATE 764  
COMMENT 765  
COMPILEDATE 765  
COMPILETIME 765  
COPY 766  
COUNTER 767  
DIMENSION 767  
HBOUND 767  
INDEX 768  
LBOUND 768  
LENGTH 769  
MACCOL 769  
MACLMAR 769  
MACRMAR 770  
MAX 770  
MIN 770  
PARMSET 771  
QUOTE 771  
REPEAT 772  
SUBSTR 772  
SYSPARM 773  
SYSTEM 773  
SYSVERSION 773  
TRANSLATE 774  
VERIFY 775

マルチスレッド化

オプション  
ENVIRONMENT 413  
THREAD 412  
TSTACK 413

条件処理 415

スレッド

切り離し 414  
作成 411  
終了 413  
使用 411  
待機 414

スレッド間のデータの共用 416

マルチスレッド化 (続き)

スレッド間のファイルの共用 416  
説明 411  
タスク変数 415  
リンケージ要件 413  
ATTACH ステートメント 412  
TASK 属性 415  
THREADID 組み込み関数 415

マルチスレッド化、THREADID 組み込み関数の 706

マルチスレッド化機能 411

明示宣言 169

明示的にロケーター修飾された参照 265

モード、処理の

位置指定 319  
移動 319  
説明 319

文字

英字 14  
英数字 14  
セット  
1 バイト 13  
2 バイト 24  
ゼロ消去 366  
挿入 367  
定数 45  
特殊 15  
特別言語 14  
比較演算での使用 75  
ピクチャー指定 44  
フォーマット項目 347  
文字データ  
説明 45  
ピクチャー指定子 362  
変換 88, 95

文字ストリング定数 45

文字セット

説明 13  
1 バイト  
区切り文字と演算子 18  
ステートメント・エレメント用 17  
DBCS フォーマットの ID 24  
ID 17  
2 バイト  
ステートメント・エレメント 25  
ID 24

## [ヤ行]

有効範囲

確立されたアクションの 381  
条件接頭語の 379  
プリプロセッサ名 757  
ラベル宣言の 173

抑止文字 366

呼び出されたプロシージャ 114

呼び出し、タイプ付き関数の 745

呼び出し側ブロック 114

呼び出し規則

OPTLINK 153  
SYSTEM 153

呼び出し点、プロシージャの 114

## [ラ行]

ラベル 22

ラベル、言語ステートメントの 56

ラベル定数 57

ラベル・データ

説明 56  
属性 32, 33

リスト

処理 275  
双方向 276  
単一方向 276  
チェーン 275  
パラメーター記述子 133

リスト制御ステートメント 752

リスト・ディレクティブ

出力 342  
データ指定 340  
データ伝送 321  
入力 341  
GET ステートメント 341  
PUT ステートメント 342

リモート・フォーマット項目 357

領域データ・セット 297

リリアン形式 426

累乗演算、特殊な場合 74

レコード単位データ伝送

ステートメント 312  
説明 311  
定義 296

レベル、構造体の

固有名の指定 198  
説明 197

レベル番号 (構造体エレメントの) 206

連結

演算 77  
演算子 19

連結ストレージ 281

連続データ・セット 297

ロード・モジュール

説明 101  
ファイル拡張子 101

ロケーター

参照 264  
修飾 264  
修飾子 18  
修飾のレベル 266  
データ  
オフセット変数 263



ロケーター (続き)  
データ (続き)  
修飾 264  
説明 263  
属性 33  
ポインター変数 263  
パラメーター 128  
変換 263  
論理演算子  
使用方法 19  
説明 74  
論理レベル (構造体エレメントの) 206

## [ワ行]

ワイド文字ストリング定数 50  
ワイド文字データ  
変換 98  
WX (ワイド文字 16 進) ストリング定数 50  
ワイド文字定数  
比較演算 76  
割り当て  
エレメント 218  
区域 274  
構造体 218, 219  
構造体割り当てのための BY NAME  
の使用 221  
式の値 221  
集合 219  
配列  
集合の割り当て 219  
ターゲット変数 218  
複合 217  
複数 220  
割り込み可能条件 377  
割り振り 253

## [数字]

1 バイト文字セット (SBCS)  
英字 14  
ステートメント・エレメント 17  
説明 13  
特別言語 14  
10 進数字 15  
16 進数字 15  
2 進数字 15  
10 進固定小数点データ  
説明 39  
変換 92  
10 進固定小数点定数 39  
10 進数字 15  
10 進浮動小数点データ  
説明 40

10 進浮動小数点データ (続き)  
変換 93  
10 進浮動小数点定数 41  
16 進 (X) の文字ストリング定数 45  
16 進数字 15  
2 進固定小数点データ  
説明 37  
変換 91  
2 進固定小数点定数 38  
2 進数字 15  
2 進浮動小数点データ  
説明 40  
変換 93  
2 進浮動小数点定数 40  
2 バイト文字セット (DBCS)  
グラフィック・データ内の 47  
継続規則 26  
ステートメント・エレメント 25  
説明 24  
ソース・プログラム内での使用 24  
入出力ストリーム内のデータ 345  
ID 24  
9 ピクチャー指定文字  
使用方法 364  
文字データの場合 362

## A

A ピクチャー指定文字 362  
A フォーマット項目 347  
ABNORMAL 属性 278  
ABS 組み込み関数 439  
ACOS 組み込み関数 440  
ADD 組み込み関数 441  
ADDR 組み込み関数 442  
ADDRDATA 組み込み関数 443  
ALIGNED 属性  
記憶位置合わせ要件 184  
説明 183  
例 186  
ALL 組み込み関数 444  
ALLOC (ALLOCATE) ステートメント  
258  
ALLOCATE (ALLOC)  
組み込み関数  
基底付き区域変数の場合 262  
基底付き変数 262, 266  
構文 445  
ステートメント 258  
ALLOCATION (ALLOCN) 組み込み関数  
446  
ALLOCsize 組み込み関数 447  
ANSWER ステートメント  
プリプロセッサ・プロシージャーで  
の使用 761  
ANY 組み込み関数 448

ANYCONDITION 条件 387  
AREA  
条件 389  
属性 271  
ASIN 組み込み関数 449  
ASM (ASSEMBLER) オプション 149  
ASSEMBLER (ASM) オプション 149  
ASSIGNABLE 属性 277  
ATAN 組み込み関数 450  
ATAND 組み込み関数 451  
ATANH 組み込み関数 452  
ATTACH ステートメント 412  
ATTENTION (ATTN) 条件  
説明 389  
マルチスレッド化 415  
AUTOMATIC (AUTO) 組み込み関数 453  
AUTOMATIC 組み込み関数  
基底付き区域変数の場合 262  
基底付き変数の場合 262, 266  
AUTOMATIC、(AUTOMATIC) 属性 255  
AUTOMATIC、(AUTO) 属性 255  
AVAILABLEAREA 組み込み関数  
区域変数の場合 274  
構文 454

## B

B (挿入文字) 368  
B フォーマット項目 348  
B3 (16 進ビット) ビット・ストリング定数 47  
B4 (16 進ビット) ビット・ストリング定数 47  
BASED 属性 261  
BEGIN ステートメント  
説明 129  
有効な OPTIONS オプション 146  
BIGENDIAN 属性 278  
BINARY (BIN) 組み込み関数 455  
BINARY (BIN) 属性 35  
BINARYVALUE (BINVALUE) 組み込み関数 456  
BINARYVALUE 組み込み関数  
序数の 166  
ポインター式との併用 66  
BIND タイプ付き関数 746  
BIT 組み込み関数 457  
BIT 属性 42  
BITLOCATION (BITLOC) 組み込み関数 458  
BOOL 組み込み関数 459  
BUF (BUFFERED) 属性 302  
BUFFERED (BUF) 属性 302  
BUILTIN 属性 421  
組み込み関数の名前を宣言する 123

BX (16 進ビット) ビット・ストリング定数 47  
BY NAME オプション、代入ステートメントの  
構造体割り当てで指定された場合 220  
構造体割り当てで指定されなかった場合 219  
説明 216  
BYADDR オプション 150  
BYADDR 属性 150  
BYTE 組み込み関数 460  
BYVALUE オプション 150  
BYVALUE 属性 150

## C

C フォーマット項目 349  
CALL オプション、INITIAL 属性の 290  
CALL ステートメント 144  
CAST タイプ付き関数 746  
CDS 組み込み関数 461  
CEIL 組み込み関数 462  
CELL、同義語 199  
CENTERLEFT (CENTER) 組み込み関数 463  
CENTERRIGHT 組み込み関数 465  
CHARACTER (CHAR) 組み込み関数 467  
CHARACTER (CHAR) 属性  
説明 42  
CHARGRAPHIC (CHARG) 組み込み関数 468  
CHARGRAPHIC オプション 151  
CHARVAL 組み込み関数 469  
CHECKSTG 組み込み関数 470  
CLOSE ステートメント 308  
COBOL オプション 151  
COLLATE 組み込み関数 471  
COLLATE マクロ機能組み込み関数 764  
COLUMN キーワード  
ANSWER プリプロセッサ・ステートメントの 762  
COLUMN フォーマット項目 349  
COMMENT マクロ機能組み込み関数 765  
COMPARE 組み込み関数 472  
COMPILEDATE マクロ機能組み込み関数 765  
COMPILETIME マクロ機能組み込み関数 765  
COMPLEX (CPLX) 組み込み関数 473  
COMPLEX (CPLX) 属性 36  
COND (CONDITION) 条件 390  
CONDITION (COND) 条件 390  
CONDITION 属性 385  
CONJG 組み込み関数 474  
CONNECTED (CONN) 属性 280

CONTROLLED (CTL) 属性 257  
CONV (CONVERSION) 条件 391  
CONVERSION (CONV) 条件 391  
CONVERSION 条件接頭語 378  
COPY オプション 324  
COPY 組み込み関数 475  
COPY マクロ機能組み込み関数 766  
COS 組み込み関数 476  
COSD 組み込み関数 477  
COSH 組み込み関数 478  
COUNT 組み込み関数 479  
COUNTER マクロ機能組み込み関数 767  
CS 組み込み関数 480  
CTL (CONTROLLED) 属性 257  
CURRENTSIZE 組み込み関数 482  
CURRENTSTORAGE (CSTG) 組み込み関数 484

## D

DATAFIELD 組み込み関数 485  
DATE 組み込み関数 486  
DATE 属性  
説明 51  
DATETIME 組み込み関数 487  
DAYS 組み込み関数 488  
DAYSTODATE 組み込み関数 490  
DAYSTOSECs 組み込み関数 491  
DBCS (2 バイト文字セット) 24  
DBCS の継続規則 26  
DCL (DECLARE) ステートメント 777  
説明 171  
DECIMAL (DEC) 組み込み関数 492  
DECIMAL (DEC) 属性 35  
DECLARE (DCL) ステートメント  
説明 171  
DEF (DEFINED) 属性 281  
DEFAULT (DFT) ステートメント 188  
DEFAULT ステートメントの  
DESCRIPTORS オプション 190  
DEFINE ALIAS ステートメント 157  
DEFINE ORDINAL ステートメント  
オプション 158  
説明 158  
DEFINE STRUCTURE ステートメント 160  
DEFINED (DEF) 属性 281  
DELAY ステートメント 222  
DELETE ステートメント 315  
DESCRIPTOR オプション 152  
DETACH ステートメント 414  
DFT (DEFAULT) ステートメント 188  
DIM (DIMENSION) 属性 193  
DIMACROSS 属性 194  
DIMENSION (DIM) 組み込み関数 493  
DIMENSION (DIM) 属性 193

DIMENSION マクロ機能組み込み関数 767  
DIRECT 属性 302  
DISPLAY ステートメント 223  
DIVIDE 組み込み関数 494  
DLLINTERNAL オプション 152  
DO グループ  
タイプ 3 の DO グループ 224, 228  
マクロ機能 224  
例 232  
DO ステートメント  
説明 224  
反復実行 224  
DO ステートメントの BY オプション 226  
DOWNTHRU オプション  
序数での使用 235  
説明 227  
タイプ 3 の DO 指定との併用 231  
例 234

## E

E ピクチャー文字 374  
E フォーマット項目 350  
EDIT オプション 335  
EDIT 組み込み関数 495  
EMPTY 組み込み関数 496  
区域変数の場合 274  
END ステートメント  
説明 236  
ENDFILE 組み込み関数 497  
ENDFILE 条件 393  
ENDPAGE 条件 394  
ENTRY ステートメント 110  
ENTRY ステートメント、有効な  
OPTIONS オプション 147  
ENTRY 属性  
説明 132  
有効な OPTIONS オプション 146  
ENTRYADDR 疑似変数 499  
ENTRYADDR 組み込み関数 498  
entry-constant  
FETCH ステートメントとの併用 119  
ENV (ENVIRONMENT) 属性 303  
ENVIRONMENT (ENV) 属性 303  
ENVIRONMENT オプション 413  
EPSILON 組み込み関数 500  
ERF 組み込み関数 501  
ERFC 組み込み関数 502  
ERROR 条件  
説明 395  
プロシージャの異常終了 115  
EXE (ファイル拡張子) 101  
EXIT ステートメント 115  
EXP 組み込み関数 503



EXPONENT 組み込み関数 504  
EXPORTS オプション 106  
EXT (EXTERNAL) 属性 177  
EXTERNAL (EXT) 属性  
    使用法 119  
    説明 177

## F

F ピクチャー文字 375  
F フォーマット項目 353  
FETCH ステートメント  
    外部プロシージャの動的ロード 118  
    制約事項 118  
    説明 119  
FETCHABLE オプション 152  
FILE オプション  
    ストリーム指向データ伝送の 313  
    説明 327  
    レコード単位データ伝送の 315  
FILE 指定、OPEN ステートメントでの 305  
FILE 属性 297  
FILEDDINT 組み込み関数 505  
FILEDDTEST 組み込み関数 506  
FILEDDWORD 組み込み関数 507  
FILEID 組み込み関数 508  
FILEOPEN 組み込み関数 509  
FILEREAD 組み込み関数 510  
FILESEEK 組み込み関数 511  
FILETELL 組み込み関数 512  
FILEWRITE 組み込み関数 513  
FINISH 条件 396  
FIRST タイプ付き関数 747  
FIXED 組み込み関数 514  
FIXED 属性  
    説明 35  
FIXEDBIN 組み込み関数 515  
FIXEDDEC 組み込み関数 516  
FIXEDOVERFLOW (FOFL) 条件 396  
FIXEDOVERFLOW 条件接頭語 378  
FLOAT 組み込み関数 517  
FLOAT 属性 35  
FLOATBIN 組み込み関数 518  
FLOATDEC 組み込み関数 519  
FLOOR 組み込み関数 520  
FOFL (FIXEDOVERFLOW) 条件 396  
FORMAT ステートメント 340  
FORMAT 属性  
    説明 58  
    変数タイプによる分類 33  
FORTRAN オプション 152  
FREE ステートメント  
    基底付き変数 268  
    被制御変数 260  
    IN オプション 268

FROM オプション、データ伝送ステートメントの 315  
FROMALIEN オプション 152

## G

G フォーマット項目 354  
GAMMA 組み込み関数 521  
GENERIC 宣言の WHEN オプション 142  
GENERIC 属性  
    説明 141  
    OTHERWISE オプションの使用法 142  
GENERIC 属性の OTHERWISE オプション 142  
GET STRING ステートメント 322  
GET ステートメント  
    ストリング 338  
    データ・ディレクティブ 333  
    編集ディレクティブ 337  
    リスト・ディレクティブ 341  
GETENV 組み込み関数 522  
GO TO (GOTO) ステートメント  
    説明 238  
GRAPHIC ENVIRONMENT オプション 48  
GRAPHIC オプション 48  
GRAPHIC 組み込み関数 523  
GRAPHIC 属性 (G) 42  
GRAPHIC の文字への変換 (CHARGRAPHIC) 468  
GX (グラフィック 16 進) ストリング定数 48

## H

HANDLE 組み込み関数 525  
HANDLE 組み込み関数のタイプ付き構造体 525  
HANDLE 属性 161  
HBOUND 組み込み関数 526  
HBOUND マクロ機能組み込み関数 767  
HEX 組み込み関数 527  
HEXADEC 属性 279  
HEXIMAGE 組み込み関数 529  
HIGH 組み込み関数 530  
HUGE 組み込み関数 531

## I

I (オーバーパンチ) ピクチャー文字 373  
IAND 組み込み関数 532  
ID  
    アスタリスク 18

ID (続き)  
    キーワードの使用法 17  
    構造体 55  
    スカラー 54  
    定義 17  
    プログラマー定義の名前 17  
    2 バイト文字の DBCS 24  
    DBCS 24  
    DBCS フォーマットの SBCS 24  
IEEE 属性 279  
IEOR 組み込み関数 533  
IF ステートメント 781  
    構文 239  
    説明 239  
IF ステートメントの ELSE 文節 239  
IF ステートメントの THEN 文節 239  
IGNORE オプション、データ伝送ステートメントの 316  
IMAG 疑似変数 535  
IMAG 組み込み関数 534  
IN オプション  
    ALLOCATE ステートメント 267  
    FREE ステートメント 269  
IN オプション、基底付き変数の FREE ステートメントに指定する 268  
INCLUDE ディレクティブ 242  
INDEX 組み込み関数 536  
INDEX マクロ機能組み込み関数 768  
INITIAL CALL 290  
INITIAL (INIT) 属性 287  
INITIAL TO 291  
INLINE オプション 153  
INOT 組み込み関数 537  
INPUT 属性 301  
INT (INTERNAL) 属性 177  
INTERNAL (INT) 属性 177  
INTO オプション、データ伝送ステートメントの 316  
INVALIDOP 条件 397  
INVALIDOP 条件接頭語 378  
IOR 組み込み関数 538  
IRREDUCIBLE (IRRED) オプション 155  
ISFINITE 組み込み関数 539  
ISIGNED 組み込み関数 540  
ISINF 組み込み関数 541  
ISLL 組み込み関数 542  
ISMAIN 組み込み関数 543  
ISNAN 組み込み関数 544  
ISNORMAL 組み込み関数 545  
ISRL 組み込み関数 546  
iSUB  
    定義 282, 285  
    非連結 283  
ISZERO 組み込み関数 547  
ITERATE ステートメント 242  
IUNSIGNED 組み込み関数 548

## K

K ピクチャー文字 374  
KEY オプション、データ伝送ステートメントの 317  
KEY 条件 398  
KEYED 属性 303  
KEYFROM オプション、データ伝送ステートメントの 317  
KEYTO オプション、データ伝送ステートメントの 318

## L

L フォーマット項目 355  
LABEL 属性  
説明 56  
有効な OPTIONS オプション 56  
LAST タイプ付き関数 747  
LBOUND 組み込み関数 549  
LBOUND マクロ機能組み込み関数 768  
LEAVE ステートメント 242  
LEFT 組み込み関数 550  
LENGTH 組み込み関数 551  
LENGTH マクロ機能組み込み関数 769  
LIKE 属性 201  
LIMITED 属性  
説明 140  
例 141  
LINE オプション 327  
LINE ディレクティブ 243  
LINE フォーマット項目 355  
LINENO 組み込み関数 552  
LINESIZE 指定、OPEN ステートメントでの 305  
LINKAGE オプション 153  
LIST 属性  
説明 136  
LITTLEENDIAN 属性 278  
LOCATE ステートメント 314  
LOCATION (LOC) 組み込み関数 553  
LOG 組み込み関数 554  
LOG10 組み込み関数 557  
LOG2 組み込み関数 556  
LOGGAMMA 組み込み関数 555  
LOW 組み込み関数 558  
LOWER2 組み込み関数 560  
LOWERCASE 組み込み関数 559

## M

M (混合) スtring定数 48  
MACCOL マクロ機能組み込み関数 769  
MACLMAR マクロ機能組み込み関数 769

MACRMAR マクロ機能組み込み関数 770  
MAIN オプション 154  
MARGINS キーワード  
ANSWER プリプロセッサ・ステートメントの 762  
MAX 組み込み関数 561  
MAXEXP 組み込み関数 562  
MAXLENGTH 組み込み関数 563  
MEMCONVERT 組み込み関数 564  
MEMCU12 組み込み関数 565  
MEMCU14 組み込み関数 566  
MEMCU21 組み込み関数 567  
MEMCU24 組み込み関数 568  
MEMCU41 組み込み関数 569  
MEMCU42 組み込み関数 570  
MEMINDEX 組み込み関数 571  
MEMSEARCH 組み込み関数 572  
MEMSEARCHR 組み込み関数 573  
MEMVERIFY 組み込み関数 574  
MEMVERIFYR 組み込み関数 575  
MIN 組み込み関数 576  
MINEXP 組み込み関数 577  
MOD 組み込み関数 578  
MPSTR 組み込み関数 580  
MULTIPLY 組み込み関数 581

## N

NAME 条件 399  
NEW タイプ付き関数 748  
NOCHARGGRAPHIC オプション 151  
NODESCRIPTOR オプション 152  
NOEXECOPS オプション 154  
NOINIT 属性 203  
NOINLINE オプション 153  
NOMAP オプション 154  
NONASSIGNABLE 属性 277  
NONCONNECTED (NONCONN) 属性 280  
NONVARYING (NONVAR) 属性 43  
NOPRINT ディレクティブ 244  
NORESCAN オプション 776  
NORMAL 属性 278  
NOT 演算子 74  
NOTE ディレクティブ 244  
NULL 組み込み関数 582

## O

OFFSET 組み込み関数 583  
OFFSET 属性 273  
OFFSETADD 組み込み関数 584  
OFFSETDIFF 組み込み関数 585  
OFFSETSUBTRACT 組み込み関数 586

OFFSETVALUE 組み込み関数 587  
OFL (OVERFLOW) 条件 400  
OMITTED 組み込み関数 588  
ON ステートメント 380  
ON ユニット  
動的に派生した 382  
スル 381  
ファイル変数の 382  
有効範囲 381  
ONAREA 組み込み関数 589  
ONCHAR 疑似変数 591  
ONCHAR 組み込み関数 590  
ONCODE 組み込み関数 592  
使用法 377  
ONCONDDCOND 組み込み関数 593  
ONCONDID 組み込み関数 594  
ONCOUNT 組み込み関数 595  
ONFILE 組み込み関数 596  
ONGSOURCE 疑似変数 598  
ONGSOURCE 組み込み関数 597  
ONKEY 組み込み関数 599  
ONLINE 組み込み関数 600  
ONLOC 組み込み関数 601  
ONOFFSET 組み込み関数 602  
ONSOURCE 疑似変数 604  
ONSOURCE 組み込み関数 603  
ONSUBCODE 組み込み関数 605  
ONWCHAR 疑似変数 607  
ONWCHAR 組み込み関数 606  
ONWSOURCE 疑似変数 609  
ONWSOURCE 組み込み関数 608  
OPEN ステートメント 304  
OPTIMIZATION、条件の発生 380  
OPTIONAL 属性 135  
OPTIONS オプション  
構文 146  
説明 146  
特性リスト 146  
ASSEMBLER 149  
BEGIN ステートメント 146  
BYADDR 150  
BYVALUE 150  
CHARGGRAPHIC 151  
COBOL 151  
DESCRIPTOR 152  
ENTRY 宣言 146  
FORTRAN 152  
FROMALIEN 152  
INLINE 153  
IRREDUCIBLE 155  
LINKAGE 153  
MAIN 154  
NOCHARGGRAPHIC 151  
NODESCRIPTOR 152  
NOEXECOPS 154  
NOINLINE 153

OPTIONS オプション (続き)  
     NOMAP 154  
     ORDER 154  
     PROCEDURE ステートメント 149  
     RECURSIVE 116  
     REDUCIBLE 155  
     REENTRANT 155  
     REORDER 154  
     RETCODE 155  
     WINMAIN 155  
 OPTIONS オプション、ENTRY ステートメント 147  
 OPTIONS 属性 146  
 ORDER オプション 154  
 ORDINAL 属性 163  
 ORDINALNAME 組み込み関数 610  
 ORDINALPRED 組み込み関数 611  
 ORDINALSUCC 組み込み関数 612  
 OTHERWISE ステートメント  
     SELECT ステートメント内の 249  
 OUTPUT 属性 301  
 OVERFLOW (OFL) 条件 400  
 OVERFLOW 条件接頭語 378

## P

P フォーマット項目 356  
 PACKAGE ステートメント  
     説明 104  
     有効な OPTIONS オプション 148  
     例 107  
 PACKAGENAME 組み込み関数 613  
 PAGE オプション 327  
 PAGE キーワード、ANSWER ステートメントの 762  
 PAGE ディレクティブ 246  
 PAGE フォーマット項目 356  
 PAGENO 組み込み関数 614  
 PAGESIZE 指定、OPEN ステートメントでの 305  
 PARMSET マクロ機能組み込み関数 771  
 PICSPEC 組み込み関数 615  
 PICTURE (PIC) 属性 44  
 PLACES 組み込み関数 616  
 PLIASCII 組み込みサブルーチン 617  
 PLICANC 組み込みサブルーチン 618  
 PLICKPT 組み込みサブルーチン 619  
 PLIDDELETE 組み込みサブルーチン 620  
 PLIDUMP 組み込みサブルーチン 621  
 PLIEBCDIC 組み込みサブルーチン 622  
 PLIFILL 組み込みサブルーチン 623  
 PLIFREE 組み込みサブルーチン 624  
     基底付き変数の場合 266  
 PLIMOVE 組み込みサブルーチン 625  
 PLIOVER 組み込みサブルーチン 626  
 PLIREST 組み込みサブルーチン 627  
 PLIRETC 組み込みサブルーチン 628  
 PLIRETV 組み込み関数 629  
 PLISAXA 組み込みサブルーチン 630  
 PLISAXB 組み込みサブルーチン 631  
 PLISAXC 組み込みサブルーチン 632  
 PLISAXD 組み込みサブルーチン 633  
 PLISRTA 組み込みサブルーチン 634  
 PLISRTB 組み込みサブルーチン 635  
 PLISRTC 組み込みサブルーチン 636  
 PLISRTD 組み込みサブルーチン 637  
 PLITRAN11 組み込み関数 638  
 PLITRAN12 組み込み関数 639  
 PLITRAN21 組み込み関数 640  
 PLITRAN22 組み込み関数 641  
 PL/I アプリケーション  
     構造の図解 102  
     説明 102  
 POINTER (PTR) 組み込み関数 642  
 POINTER (PTR) 属性 266  
 POINTERADD (PTRADD) 組み込み関数 643  
     ポインター演算との併用 66  
 POINTERDIFF (PTRDIFF) 組み込み関数 644  
 POINTERSUBTRACT (PTRSUBTRACT) 組み込み関数 645  
 POINTERVALUE (PTRVALUE) 組み込み関数 646  
     使用法 66  
 POLY 組み込み関数 647  
 POP ディレクティブ 246  
 POS (POSITION) 属性 281  
 POSITION (POS) 属性 281  
 PRECISION (PREC) 組み込み関数 648  
 PRECISION 組み込み関数  
     使用法 73  
 PRECISION 属性  
     序数 159  
     説明 35  
 PRED 組み込み関数 649  
 PRESENT 組み込み関数 650  
 PRINT 属性 343  
 PRINT ディレクティブ 246  
 PROC (PROCEDURE) ステートメント 108  
 PROCEDURE (PROC) ステートメント  
     使用法 103  
     説明 108  
     有効な OPTIONS 148  
 PROCEDURE ステートメント 149  
 PROCEDURENAME (PROCNAME) 組み込み関数 651  
 PROCESS ディレクティブ 247  
 PROD 組み込み関数 652  
 PTR (POINTER) 属性 266

PTRADD (POINTERADD) 組み込み関数  
     ポインター演算との併用 66  
 PTRVALUE (POINTERVALUE) 組み込み関数  
     使用法 66  
 PUSH ディレクティブ 247  
 PUT ステートメント  
     ストリング 338  
     データ・ディレクティブ 334  
     編集ディレクティブ 338  
     リスト・ディレクティブ 342  
     STREAM 出力 323  
 PUTENV 組み込み関数 653

## Q

QUOTE マクロ機能組み込み関数 771

## R

R (オーバーパンチ) ピクチャー文字 373  
 R フォーマット項目 357  
 RADIX 組み込み関数 654  
 RAISE2 組み込み関数 655  
 RANDOM 組み込み関数 656  
 RANGE オプション 189  
 RANK 組み込み関数 657  
 READ ステートメント 313  
 REAL 疑似変数 659  
 REAL 組み込み関数 658  
 REAL 属性 36  
 RECORD 条件 400  
 RECORD 属性 301  
 RECURSIVE オプション 116  
 RECURSIVE 属性 116  
 REDUCIBLE (RED) オプション 155  
 REENTRANT オプション 155  
 REFER オプション  
     説明 269  
     AREA 属性での 272  
 REG12 組み込み関数 660  
 RELEASE ステートメント  
     外部プロシーチャーの動的ロード 118  
     制約事項 118  
     説明 120  
     例 120  
 REM 組み込み関数 661  
 REORDER オプション 154  
 REPATTERN 組み込み関数 662  
 REPEAT オプション 227  
 REPEAT 組み込み関数 664  
 REPEAT マクロ機能組み込み関数 772  
 REPLY オプション 223  
 RESCAN オプション 776  
 RESERVED 属性 181

RESERVES オプション 106  
RESIGNAL ステートメント 385  
RESPEC タイプ付き関数 748  
RETCODE オプション 155  
RETURN ステートメント  
関数からの戻り 145  
サブルーチンとの併用 145  
使用法 115  
説明 145  
プリプロセッサ・プロシージャーでの使用 761  
RETURNS オプション  
説明 156  
RETURNS 属性 156  
REVERSE 組み込み関数 666  
REVERT ステートメント 384  
REWRITE ステートメント  
説明 314  
RIGHT 組み込み関数 667  
ROUND 組み込み関数 668  
ROUNDDEC 組み込み関数 670

## S

S ピクチャー文字 370  
SAMEKEY 組み込み関数 671  
SCALARVARYING オプション 311  
SCALE 組み込み関数 672  
SCAN オプション 776  
SEARCH 組み込み関数 673  
SEARCHR 組み込み関数 675  
SECS 組み込み関数 676  
SECSTODATE 組み込み関数 677  
SECSTODAYS 組み込み関数 678  
SELECT グループ 249  
SELECT ステートメント  
説明 249  
例 250  
SQL (SEQUENTIAL) 属性 302  
SEQUENTIAL (SQL) 属性 302  
SET オプション  
説明 267  
ポインター参照の指定 119  
ALLOCATE ステートメントの使用法 267  
LOCATE ステートメントの使用法 314  
READ ステートメントの使用法 313  
SIGN 組み込み関数 679  
SIGNAL ステートメント 384  
SIGNED 組み込み関数 680  
SIGNED 属性  
序数 159  
説明 36  
データ・ストレージ所要量 37  
SIN 組み込み関数 681  
SIND 組み込み関数 682  
SINH 組み込み関数 683  
SIZE 組み込み関数 684  
SIZE 条件 401  
SIZE 条件接頭語 378  
SIZE タイプ付き関数 748  
SKIP オプション 328  
SKIP キーワード、ANSWER ステートメントの 762  
SKIP ディレクティブ 251  
SKIP フォーマット項目 358  
SNAP オプション、ON ステートメントの 380  
SOURCEFILE 組み込み関数 686  
SOURCELINE 組み込み関数 687  
SQRT 組み込み関数 688  
SQRTF 組み込み関数 689  
STACKADDR 組み込み関数 690  
STATIC 属性  
説明 255  
INITIAL 属性との併用 292  
STOP ステートメント  
使用法 115  
STORAGE (STG) 組み込み関数 691  
STORAGE 条件 402  
STREAM 属性 301  
STRG (STRINGRANGE) 条件 403  
STRING オプション  
説明 328  
GET ステートメントでの使用 322  
PUT ステートメントでの使用 323  
STRING 疑似変数 694  
STRING 組み込み関数 692  
STRINGRANGE (STRG) 条件 283, 403  
STRINGRANGE 条件接頭語 378  
STRINGSIZE (STRZ) 条件 283, 404  
STRINGSIZE 条件接頭語 378  
STRZ (STRINGSIZE) 条件 404  
SUBRG (SUBSCRIPTRANGE) 条件 283, 405  
SUBSCRIPTRANGE (SUBRG) 条件 283, 405  
SUBSCRIPTRANGE 条件接頭語 378  
SUBSTR 疑似変数 696  
SUBSTR 組み込み関数 695  
SUBSTR マクロ機能組み込み関数 772  
SUBTRACT 組み込み関数 697  
SUCC 組み込み関数 698  
SUM 組み込み関数 699  
SUPPRESS 属性 182  
SYSIN 309  
SYSNUL 組み込み関数 700  
SYSPARM マクロ機能組み込み関数 773  
SYSPRINT 309  
SYSTEM オプション、ON ステートメントの 380

SYSTEM 組み込み関数 701  
SYSTEM マクロ機能組み込み関数 773  
SYSVERSION マクロ機能組み込み関数 773

## T

T (オーバーパンチ) ピクチャー文字 373  
TALLY 組み込み関数 702  
TAN 組み込み関数 703  
TAND 組み込み関数 704  
TANH 組み込み関数 705  
TASK 属性 415  
THREAD オプション 412  
THREADID 組み込み関数 706  
TIME 組み込み関数 707  
TINY 組み込み関数 708  
TITLE オプション 119  
TITLE 指定、OPEN ステートメントでの 305  
TO オプション 226  
TO オプション、INITIAL 属性の 291  
TRANSLATE 組み込み関数 709  
TRANSLATE マクロ機能組み込み関数 774  
TRANSMIT 条件 405  
TRIM 組み込み関数 710  
TRUNC 組み込み関数 711  
TSTACK オプション 413  
TYPE 疑似変数 713  
TYPE 組み込み関数 712  
TYPE 属性 162

## U

UFL (UNDERFLOW) 条件 407  
ULENGTH 組み込み関数 714  
ULENGTH16 組み込み関数 716  
ULENGTH8 組み込み関数 715  
UNALIGNED 属性  
記憶位置合わせ要件 184  
構造体マッピングへの影響 207  
説明および構文 183  
例 186  
UNALLOCATED 組み込み関数 717  
UNBUF (UNBUFFERED) 属性 302  
UNBUFFERED (UNBUF) 属性 302  
UNDEFINEDFILE (UNDF) 条件 406  
UNDERFLOW (UFL) 条件 407  
UNDERFLOW 条件接頭語 378  
UNDF (UNDEFINEDFILE) 条件 406  
UNION 属性 199  
UNION、同義語 199  
UNSIGNED 組み込み関数 718



UNSIGNED 属性  
  序数 159  
  説明 36  
  データ・ストレージ所要量 37  
UNSPEC 疑似変数 721  
UNSPEC 組み込み関数 719  
UNTIL オプション  
  説明 225  
  タイプ 2 の DO 指定との併用 227  
UPDATE 属性 301  
UPOS 組み込み関数 722  
UPPERCASE 組み込み関数 723  
UPTHRU オプション  
  説明 226  
  タイプ 3 の DO 指定との併用 230  
  例 234  
UPTHRU、序数との併用 235  
USUBSTR 組み込み関数 724  
USURROGATE 組み込み関数 725  
UTF 処理組み込み関数  
  ULENGTH 714  
  ULENGTH16 716  
  ULENGTH8 715  
  UPOS 722  
  USUBSTR 724  
  USURROGATE 725  
  UVALID 726  
  UWIDTH 728  
UVALID 組み込み関数 726  
UWIDTH 組み込み関数 728

## V

V ピクチャー指定文字 364  
V フォーマット項目 358  
VALID 組み込み関数 729  
VALIDDATE 組み込み関数 730  
VALUE オプション 189, 191  
VALUE 型付き関数 749  
VALUE 属性  
  序数 159  
  説明 54  
VARGLIST 組み込み関数 731  
VARGSIZE 組み込み関数 732  
VARIABLE 属性 58  
VARYING (VAR) 属性 43  
VARYINGZ (VARZ) 属性 43  
VERIFY 組み込み関数 733  
VERIFY マクロ機能組み込み関数 775  
VERIFYR 組み込み関数 734

## W

WAIT ステートメント 414  
WCHARVAL 組み込み関数 735

WEEKDAY 組み込み関数 736  
WHEN ステートメント  
  説明 249  
WHIGH 組み込み関数 737  
WHILE オプション  
  説明 225  
  タイプ 2 の DO 指定との併用 227  
WIDECHAR (WCHAR) 組み込み関数  
  738  
WIDECHAR (WCHAR) 属性  
  説明 42  
WINMAIN オプション 155  
WLOW 組み込み関数 739  
WRITE ステートメント  
  説明 313  
WX (ワイド文字 16 進) スtring定数  
  50

## X

X (16 進) の文字String定数 45  
X ピクチャー指定文字 362  
X フォーマット項目 359  
XMLCHAR 組み込み関数 740  
XN (2 進 16 進数) 定数 38  
XU (2 進 16 進数) 定数 38

## Y

Y ゼロ置換ピクチャー文字 373  
Y4DATE 組み込み関数 742  
Y4JULIAN 組み込み関数 743  
Y4YEAR 組み込み関数 744

## Z

Z ゼロ消去ピクチャー文字 366  
ZDIV (ZERODIVIDE) 条件 408  
ZERODIVIDE (ZDIV) 条件 408  
ZERODIVIDE 条件接頭語 378

## [特殊文字]

\$ (ピクチャー文字) 370  
& (AND 記号)  
  演算子としての使用 19  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
& (ビット演算子: AND) 74  
&= (AND と代入)、複合記号の作成 16  
( ) (囲み記号)  
  区切り文字としての使用 18  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
\* (乗算)  
  演算子としての使用 19  
  算術演算での使用 67

\* (乗算) (続き)  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
\* ゼロ消去ピクチャー文字 366  
\*PROCESS ディレクティブ 247  
\*\* (累乗演算)  
  演算子としての使用 19  
  算術演算での使用 67  
  複合記号の作成 16  
\*\*= (指数化と代入)、複合記号の作成 16  
\*/ (コメントの終了)、複合記号の作成 16  
\*= (乗算と代入)、複合記号の作成 16  
+ (加算)  
  演算子としての使用 19  
  算術演算での使用 67  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
+ (ピクチャー文字) 370  
+= (加算と代入)、複合記号の作成 16  
, (分離文字)  
  区切り文字としての使用 18  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
- (減算)  
  演算子としての使用 19  
  算術演算での使用 67  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
-= (減算と代入)、複合記号の作成 16  
-> (ロケータ)  
  区切り文字としての使用 18  
  ロケーター修飾 264  
-> (ロケーター)、複合記号の作成 16  
. (名前修飾子、小数点)  
  区切り文字としての使用 18  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
/ (除算)  
  演算子としての使用 19  
  算術演算での使用 67  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
/ (挿入文字) 367  
/\* (コメントの開始)、複合記号の作成 16  
/\* \*/ (コメント)  
  区切り文字としての使用 18  
  構文 20  
/= (除算と代入)、複合記号の作成 16  
: (接頭部、次元、および範囲区切り記号)  
  使用法 18  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
: (ステートメント終了文字)  
  区切り文字としての使用 18  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
= (等号)  
  演算子としての使用 19  
  区切り文字としての使用 18  
  比較演算での使用 75  
  ASCII および EBCDIC 値 15  
? (マクロ・トリガー文字)  
  ASCII および EBCDIC 値 15

> (より大記号)  
 演算子としての使用 19  
 ASCII および EBCDIC 値 15

>= (より大か等しい記号) 16

< (より小記号)  
 演算子としての使用 19  
 比較演算での使用 75  
 ASCII および EBCDIC 値 15

<= (より小か等しい記号) 16  
 演算子としての使用 19  
 比較演算での使用 75

| (ビット演算子: OR) 74

| (論理 OR 記号)  
 演算子としての使用 19  
 ASCII および EBCDIC 値 15

= (OR と代入)、複合記号の作成 16

|| (連結)  
 演算子としての使用 19  
 複合記号の作成 16  
 連結演算子での使用 77

||= (連結と代入)、複合記号の作成 16

% ディレクティブ  
 %INCLUDE 242  
 %LINE 243  
 %NOPRINT 244  
 %NOTE 244  
 %PAGE 246  
 %POP 246  
 %PRINT 246  
 %PROCESS 247  
 %PUSH 247  
 %SKIP 251

% (% ステートメント用)  
 区切り文字としての使用 18  
 ASCII および EBCDIC 値 15

%ACTIVATE ステートメント 776  
 %ASSIGNMENT ステートメント 776  
 %DEACTIVATE ステートメント 777  
 %DECLARE ステートメント 777  
 %DO ステートメント 780  
 %END ステートメント 780  
 %GO TO ステートメント 781  
 %IF ステートメント 781  
 %IF ステートメントの ELSE 節 781  
 %IF ステートメントの THEN 節 781  
 %INCLUDE ステートメント 782  
 %INCLUDE ディレクティブ 242  
 %INSCAN ステートメント 783  
 %ITERATE ステートメント 783  
 %LEAVE ステートメント 784  
 %LINE ディレクティブ 243  
 %NOPRINT ディレクティブ 244  
 %NOTE ステートメント 784  
 %NOTE ディレクティブ 244  
 %PAGE ディレクティブ 246  
 %POP ディレクティブ 246  
 %PRINT ディレクティブ 246  
 %PROCEDURE ステートメント 760  
 %PROCESS ディレクティブ 247  
 %PUSH ディレクティブ 247  
 %REPLACE ステートメント 785  
 %SELECT ステートメント 786  
 %SKIP ディレクティブ 251  
 %XINCLUDE ステートメント 786  
 %XINSCAN ステートメント 786  
 %ヌル・ステートメント 785

' ' (囲み定数)  
 ASCII および EBCDIC 値 15

\_ (下線、区切り)、ASCII および EBCDIC 値 15

¬ (NOT 記号)  
 ASCII および EBCDIC 値 15

¬ (ビット演算子: NOT、XOR) 74

¬ (論理 NOT EOR 記号)  
 演算子としての使用 19  
 ASCII および EBCDIC 値 15

¬= (等しくない記号)  
 演算子としての使用 19  
 説明 16  
 比較演算での使用 75

¬> (より大ではない記号)  
 演算子としての使用 19  
 説明 16  
 比較演算での使用 75

¬< (より小ではない記号)  
 演算子としての使用 19  
 説明 16  
 比較演算での使用 75

' (引用符)  
 二重 15

" (二重引用符)  
 ASCII および EBCDIC 値 15









プログラム番号: 5655-W67

Printed in Japan

**Enterprise PL/I for z/OS**

GC14-7283

Licensed Program Specifications

GI88-4249

プログラミング・ガイド

GA88-4236

コンパイラおよびランタイム 移行ガイド

SA88-4235

言語解説書

GA88-4237

メッセージおよびコード

SA88-4235-00



**日本アイ・ビー・エム株式会社**

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21